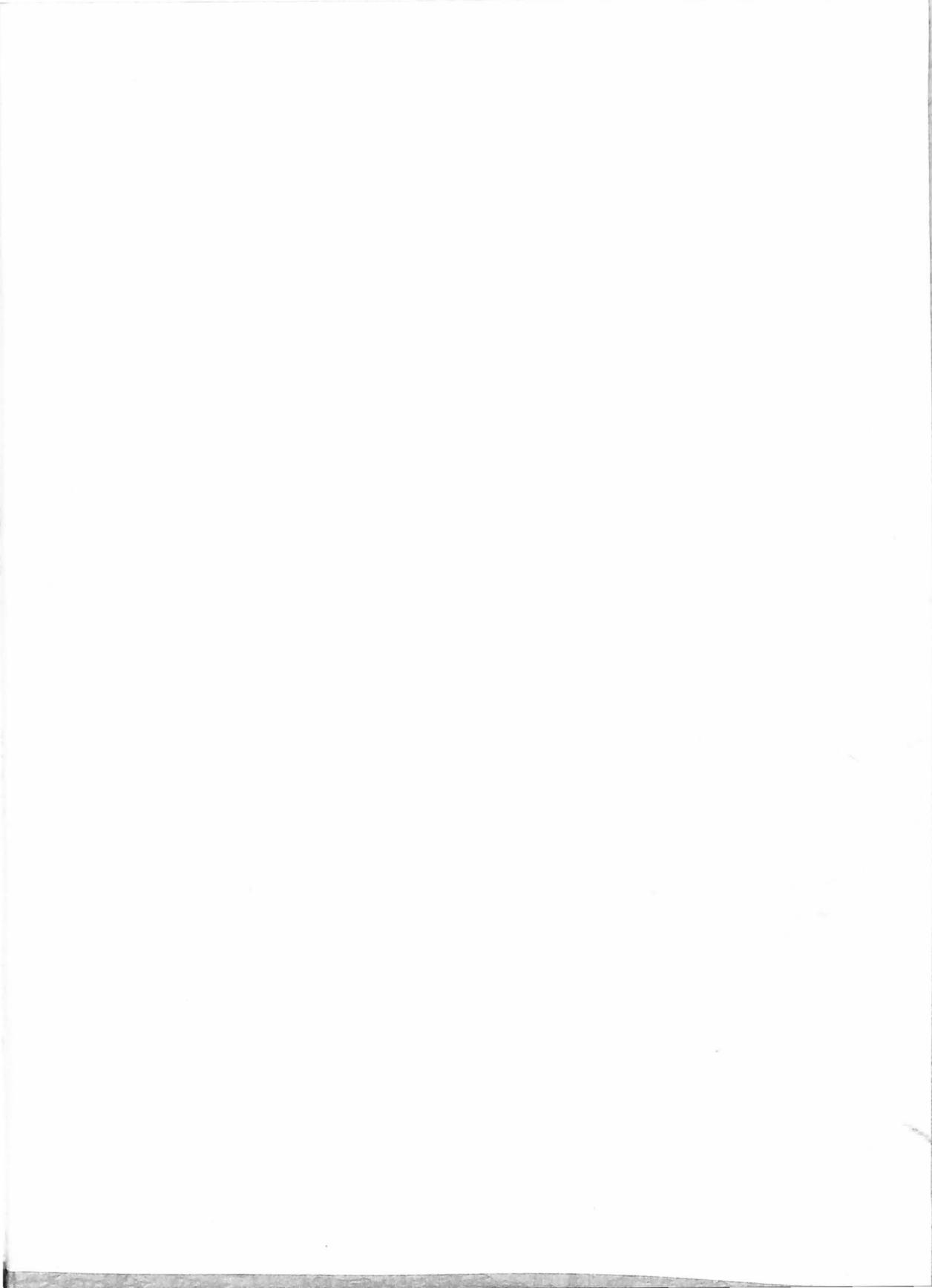


湯之澤聖ナルナバ教會史



汝等丘にあらば我丘に登り行き  
汝等谷に在らば我亦谷に下り行かん  
我は常に汝等と偕に行く也

リー女史最後の書簡より

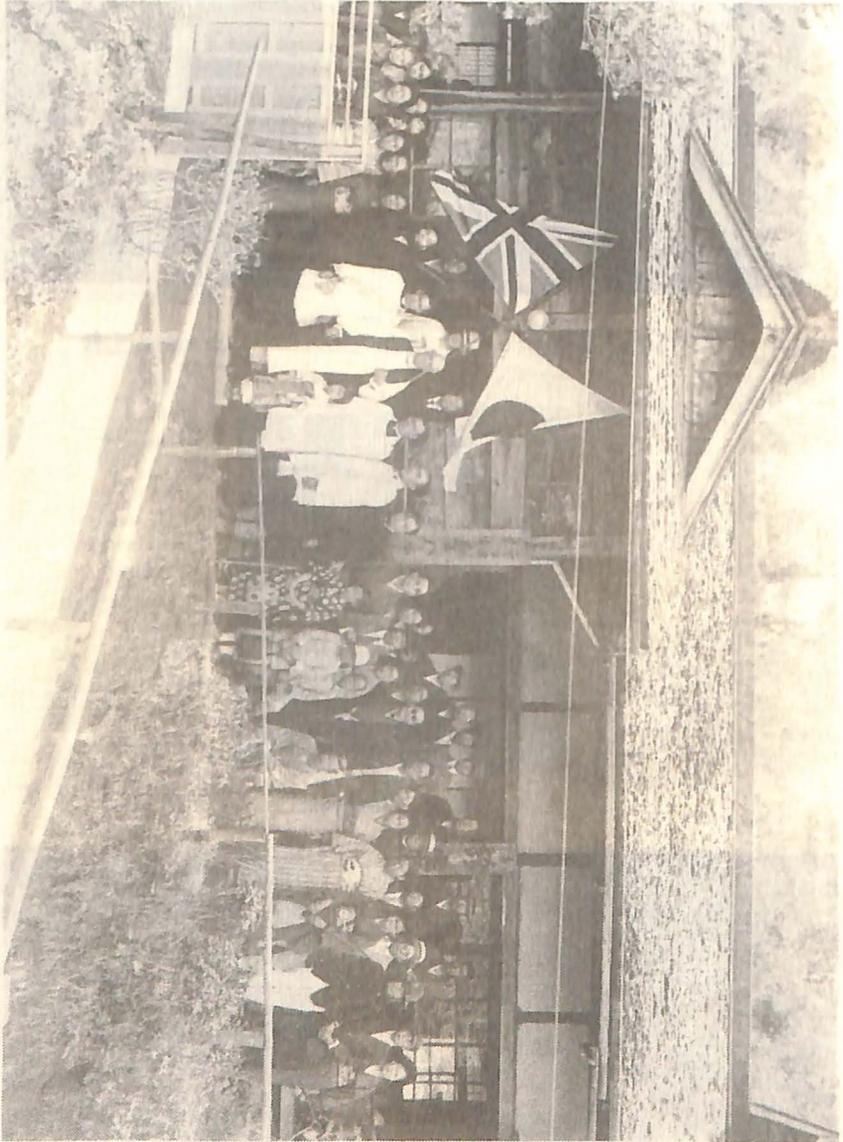


湯之澤 聖バルナバ教會史





聖バルナバ・ミッション創立者  
写真ニミス・メリー・ヘレナ・コンウォリ・リー女史  
(1857年5月20日生～1941年12月18日逝去)



写真ニ湯之澤聖バルナバ教會の聖別式（大正15年6月11日撮ス）

聖バルナバ・ミッションの働き人



アンデルス長老



J マキム主教



貫民之介神父



鶴田 一郎医師



山中政三 司祭

聖バルナバ・ミッションの動き人



ネテルトン女史



マギル女史



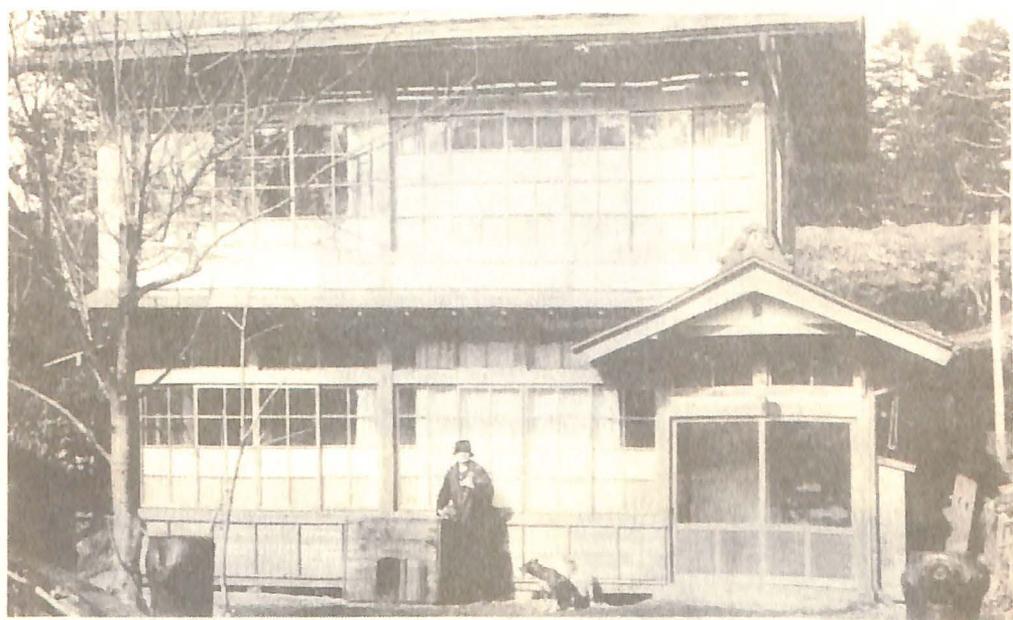
服部ケサ女医



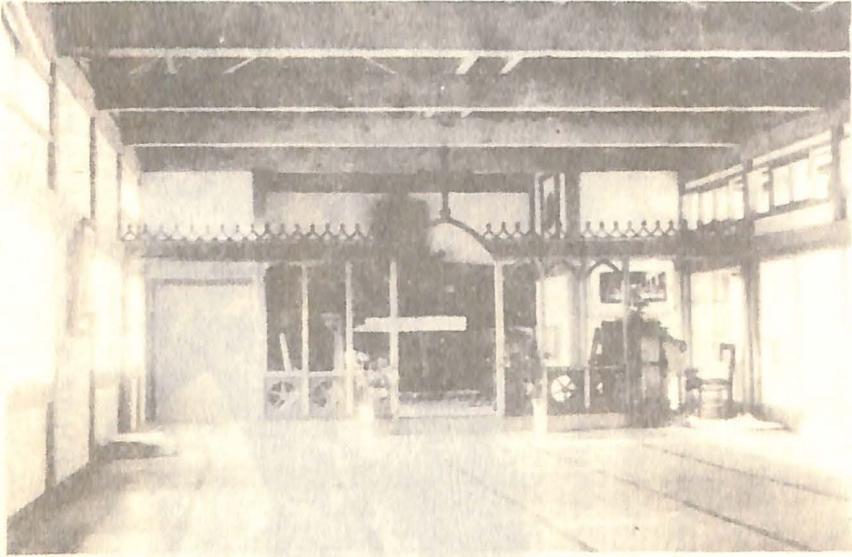
シェパート女史



エドリン女史



光の家＝リ－教母の住居 中央にリ－教母

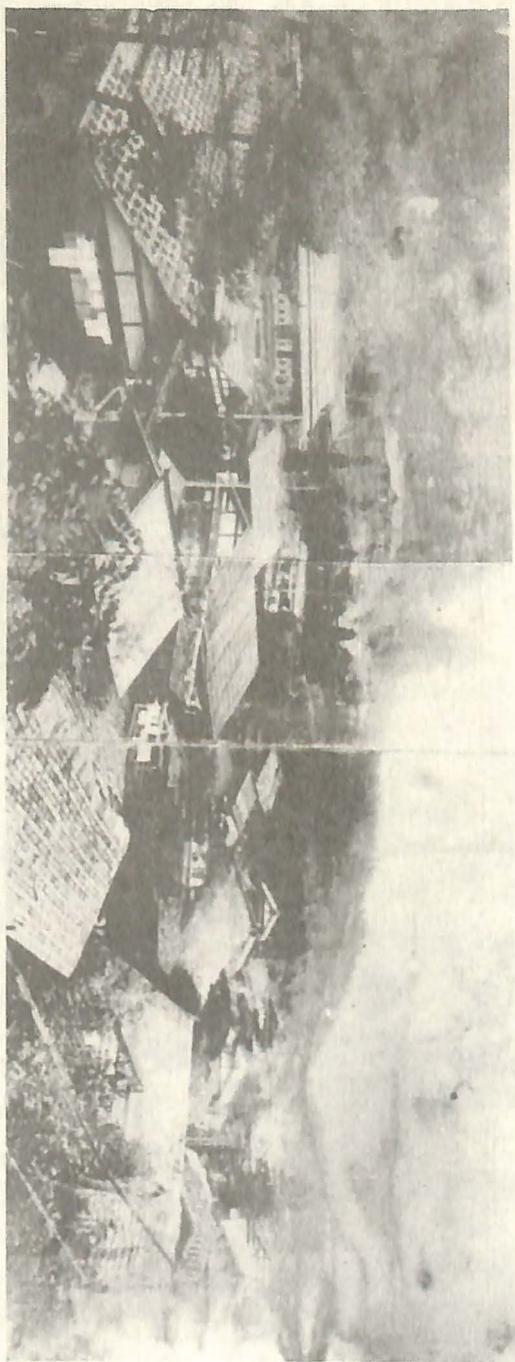


聖バルナバ教會礼拝堂内部



礼拝風景

草津町湯之澤部落の全景



## 序 文

元日本聖公会首座主教  
前日本聖公会北関東教区主教

主教 大 久 保 直 彦

このたび草津聖慰主教会の有志のかたがたの手により、同教会の史料として——いや、ただ単に同教会のみでなく、北関東教区及び日本聖公会の史料としてもまた——極めて貴重なものと思われる一書の刊行が、近く実現しようとしていることを聞き、まことに欣快の情にたえないものがあります。

それは現在の聖慰主教会の前身——当時、湯之沢部落に所在した聖バルナバ教会の歴史を綴ったものであります。昭和の初期、この聖バルナバ教会の教会委員会から選任されて、当時、同地で病氣療養中であった徳満唯吉氏が編纂執筆し、之を更に当時の同教会管理司祭であった貫民之介神父が校閲されたものと聞いています。

草津に療養していたハンセン氏病者にとつて、その母であり、最大の恩人であったコンウオール・リー女史が初めて草津に来訪され、数週間の病者部落との接触の後、この湯之沢部落に永住を決意されたのは、大正四年（一九一五年）、諸般の準備の後、いよいよ之を実行に移されたのは翌大正五年（一九一六年）のことでありましたが、このリー女史の草津来住の直接のきっかけとなつたのは、当時すでに草津に成立していた基督教研究団体「光塩会」所屬の一メンバーの同女史への熱心な働きかけであつたと言います。

徳満氏の筆は、この「光塩会」の誕生に始まり、リー女史の草津に於ける、教会を中心とした、病者への事業のその後の一大発展のあとを辿っており、年代的には大正二年から昭和六年までのおよそ二十年間の歴史であります。

栗生楽泉園の開始とともに、このリー女史の開設された事業も、その中心であった聖バルナバ教会も、湯之沢での働きは一応解散され、すべて楽泉園の方に移りました。昭和十六年のことでもあります。昭和六年以降、この十六年までの、その後の十年間の歴史を、滝田氏が補足されましたが、今般、この滝田氏の補足分をも加えて、刊行が企画されているとのことでもあります。

私は未だ若年の学生の頃、数度、コンウォール・リー女史に拝顔の榮を得たのでありますが、あのあたたかい誰をも包みこんでしまうような聖女のおもかげを、今日もなお忘れることができません。この経験は、草津に於ける同女史を知るすべての病者の経験でもあります。「母さま」「母さま」とリー女史をいつまでも懐<sup>なつか</sup>しんでいた病者の声を、私は草津の教会を訪れる度に、必らず耳にしたものであります。

今般、刊行される一書「聖バルナバ教会史」の中に、読者は必ずや、実はこの一聖女を通して私たちに語りかけていたもう神の御声を見つけることができるのではないでしょうか。神はいかなる一人をも決して切りすてたもうことはなく、いついかなる時にも、いかなる一人をも、これをあたたかく包みこんで、じいっと、とことんまで私たちひとりひとりを待つていたもう——それが主イエスの生涯が私たちに語り告げている神の御姿なのであります。

今や私たちのこの時代において、この神の私たちへの顧りみの御姿を、私たちの信仰姿勢の基本として確保し私たちの神と人に対する責務を再確認したいものであります。

願わくは全能の父なる神、その大いなるいつくしみをもつて我らひとりひとりを祝し導き、我らのわざをしていよいよみ旨にかない、教会の徳を建つることを得させたまわんことを。

救主降生一九八一年十二月十日

## 序 文

日本聖公会北関東教区

主教 齊 藤 茂 樹

このたび徳満唯吉氏の草津におけるハンセン氏病患者についての歴史記録が発刊されますことは、誠に当を得た、よろこばしいことに存じます。

同氏は大学の法文学部に学んだ有識の士であるのみならず、頭脳明晰で、その記述するところは正確かつ緻密でありました。従つて、その記録はこれまで草津の病者の歴史にふれる時、必ず参考として用いられてきておりました。

彼はキリスト教信徒の病者として草津に移り住んで以来、昭和七年から八年にわたつてこの記録を書きつづつたもので、その内容は大正二年頃以後の草津における病者の様子を克明に記録したものであります。従来、他の記述の参考資料として用いられていたもので、かげの存在でしかなかつたのですが、このたびその原稿を一字も変えることなく、仮名ずかひもそのままに出版されるということは、その資料が独自に陽の目を見るわけで、まことによろこばしい次第に存じます。それと同時に、この出版を企画された人々のやさしい心づかひに深く感謝いたします。

今後、これを読まれる人々が、当時の病者の状況を正しく把握されて、後世に伝えられますことを心から念願するものであります。

一九八一年九月五日

## 序 文

郷土史研究家  
草津町議會議員 中 沢 晃 三

ここに生きた歴史があつた。生々しい人間の苦悩に満ちた歴史があつた。

私は「教会史原稿」と記された部厚い古びた原稿を目のあたりにして、心がふるえるような感動を覚えた。

ハンセン氏病はもう日本から姿を消そうとしている。全国の療養所の入所者八千余人のうち九十数パーセントの人々はハンセン氏病の治癒した人々であるという。百パーセントの完治も時間の問題であろう。

人類のつくり出した科学は、人類の苦悩を最大限に狭めつつある。戦後療養所を溢れさせた結核患者は抗生物質の出現によつて姿を消しつつある。ハンセン氏病もプロミンという抗生物質の出現によつて世紀の苦悩を消そうとしている。

科学の発達は人類に驚異的な福音をもたらせた。だが病苦の苦悩に生涯を終えた人々の生き痕、そして病者の肉身たちの懊悩オウノウの生き痕を誰がどのように残してゆくか。

又この苦悩を救う為に生涯を捧げた崇高な人々の生き痕をどのように叙述するかは、現代に生きる人々の責務であらう。併しこのような責務をもうすでに先人たちが書き記して残されたということを知つて驚いたのである。

「草津湯之沢聖バルナバ教会史」は昭和八年、徳満唯吉氏らによつて丸二年の歳月を経て編集されたものである。そして十三年の長きに亘つて草津聖バルナバ教会管理の司祭であられた貫民之介神父の校閲を経たものである。この教会史が編まれた頃は迫害と苦悩に満ちたたたかいの日々であつた。

原稿は当時の関係者たちによつて大切に保存され、昭和二十五年以降は、この編集に協力した滝田氏によつて保管されてきた。

昭和五十六年五月五日教会役員会に於いて発刊の決議が為され、この度の刊行の運びになつたという。実に五

十年振りの快挙である。

この間、昭和二十九年に貫民之介神父の著作による「コンウォール・リー女史の生涯と偉業」が刊行され、昭和四十七年、加藤三郎、山本与志朗の両氏によつて「御座の湯口碑」が刊行された。

ハンセン氏病という苦悩の中に生涯を生きた人々によつて著わされたこれらの著作や、救癩事業に生涯を捧げた人々の著作は単なる地方史ではなく、人類が語り残すべき人類史であろう。

冒頭、私が心ふるえる感動を覚えたというのはこの為である。

私には栗生楽泉園に秩父明水氏や松崎水星氏、臣木至氏らの歌友がいた。すぐれたアララギ派の歌人たちであった。

私は昭和三十年頃にこれらの人々と楽泉園の歌会で知り合つた。歌会はいまの石黒会館の以前の建物であつた広い講堂を二つに仕切つて柵があり、この柵を隔てて会つた。

私は長らく結核を病んでいたが、ハンセン氏病の療友らと柵を隔てて会つたことが心に沁み込んだ。やがて二十数年の歳月が過ぎた。

秩父明水氏も松崎水星氏も臣木至氏も亡くなられてしまつたが、園には数多くの友人たちがいる。私は時々友人たちと一諸に酒を酌みかわし、料理を御馳走になつて文学を論じ、政治を語り合つて帰つて来る。

私も抗生物質によつて生き長らえることが出来た。そして私の友人たちも人類最後のハンセン氏病者であつた苦悩を消しつゝある。

私は秩父明水氏が残されたこの歌が心に沁みてならない。

○癩院はいま解散す併れども信仰は失せずと声つまらせ給ふ

○湯の川のたぎちも心沁みて思ふここに滅びし癩人部落

## 感謝の言葉

日本聖公会北関東教区

聖慰主教会管理司祭

司祭 シモン 北村 礼二

故徳満唯吉兄の苦心の編纂になる「湯の沢聖バルナバ教会史」は、当教会と草津聖バルナバ教会の前身、湯の沢聖バルナバ教会の発端より十数年に亘る教会内外の状況を、克明に記録した貴重な資料であるが、各種の草津関係の著作の中に引用される以外は、原稿のまま、久しく保管されていたが、最近に至り、その散佚を恐れ、これを公刊せんと議が起り、当教会委員会の決議によつて、準備は著々進められ、ここに上梓の運びとなりましたことは、公会の信仰の証の一部としても、救贖史としても大いに意義のあることと存じます。

この教会史の中に盛られた事柄は、リー教母をめぐる多くの人々の活躍であると共に、全能の神、主イエス・キリスト、聖霊なる神の大いなる佑助の賜であることを信じて、深甚なる感謝を献げるものであります。

この書に序文を寄せられました、草津町議会議員で、郷土史研究家として、本書に多大の関心を持たれている中沢晁三氏、日本聖公会北関東教区前主教で、三十年に亘つて草津の働きを見守つてこられた大久保直彦師父、北関東教区主教として、常に励ましと指導を惜まれない斉藤茂樹主教に心より感謝申し上げます。

当教会に於ては、本書発行のため、多大な支出を承認された教会委員会、原稿の清書と校正に奮闘された太田国男執事、自ら携わられた記憶等によつて多大の助力をされた、信徒代表滝田兄、写真撮影によつて協力された中条英一執事、その他陰に陽にお助け下された多数の方々の御努力に深く感謝致します。

また本書出版に際して、特段の御協力を頂きました、沢田印刷所、沢田二郎氏に対し、深甚なる謝意を表するものであります。

き> 読者の皆様へ

書

<前 お読み下さる前に一言

此の度「湯之澤聖バルナバ教會史」を出版し、皆さんにお読み頂けることになりましたことを、何よりも先ず感謝致します。

当教会史は執筆者である徳満唯吉兄の「序言」にも記されていますように、昭和六年二月二日の教会委員会において、当教会史編纂に着手することが決議され、同時に編纂・執筆の大任に徳満兄が推挙されて以来、約三年間心血を注いでその任を忠実に遂行され、ついに、約二十年間に亘る教会史を四百字詰原稿用紙にして六百枚に纏め上げられたものであります。けれども実は、それに、その後の約十年間即ち聖バルナバ・ミッシェンの解散時（昭和十六年四月末日）までを、滝田兄が執筆していた約三十枚の原稿を、この度「追補」（第三十八章）として加えることが出来ました。従つて、「湯之澤聖バルナバ教会史」は此処に完結したも

のとして出版することが出来て、誠に光栄であります。その内容に就いて触れる必要はないとも思いましたけれども、敢て、本書から受けたわたしの感動の一端を記させて頂きますと

当教会史は、主の栄光に浴したひとつの教会が後世へ遺す目的を以て記録し、資料として提供するに止らず、これは「アコルの谷を望みの門」（ホセア二・一五）に変えられた群の軌跡であり、「主イエスから賜わった、神のめぐみの福音」（使徒行伝二〇・二四）のあかしであります。そして今日のわたしたちに遺された貴い遺産であり、限りない信仰の慰めと励ましを与えて止まない、正に「アコルの谷からの福音」が語られているのを覚えずにはおられなかつたのであります。

これ程の内容を有している教会史（稿）が半世紀も長い間出版されずにありますけれども、その真価は埋れることなく、此れ迄にも時々必要に応じて来りました。然も年を重ねるに従つて一層高く評価され、貴重な存在となつていきます。こうした時代の要請に込める意味もあつて、この出版を促す要因になつていたことも事実であります。

湯之澤の聖バルナバ教会はわたしたち聖恵主教会の前身であり、また親子関係にあり、その前身教会の信仰の遺産を受け継いでいるわたしたちであります。従って、前身の教会が果し得なかつた出版の労を、当聖恵主教会においてとり得ることは当然であると思いません。けれども、そこにも主の奇しきお計いのあることを覚えて感謝せずにはおられません。

ところで、本書をお読み下さる皆さんに、前以つてお断わりして置かなければならない事柄を幾つか記します。

第一に、本書は丁度五十年前に執筆されていたものである事を、念頭に置いて頂きたいのであります。従つて、本書中の「今日の」、「今の」、「現在の」と言う表現は執筆当時（昭和六年／＼八年）のことです。また「監督」とあるのは現在の「主教」、「長老」とあるのは現在の「司祭」のことであります。

第二に、本書中に登場する人名についてであります。本病者の場合その性質上大方偽名を使用していますけれども、中には本名をその尽使用している者もあります。従つて、本病者の人名については、本名、偽

名を問わず一様に伏せ字に致しました。例えば湯澤栄太郎兄を湯○栄○郎兄としました。勿論、健常者の場合はその尽に致しました。

第三に、漢字体についてであります。徳満兄の原稿には主に旧漢字体が用いられており、現在の常用漢字体も一部使用されておりました。しかし、この度の出版に際して、執筆当時の慣用であつた旧漢字体に統一いたしました。但し、その活字が印刷所に無い場合は現在の常用漢字体を用いました。

尚、振り仮名は徳満兄の原稿には殆んど付いていませんでしたけれども、当事者の意向で一部必要に応じて付けましたので、ご了承下さい。

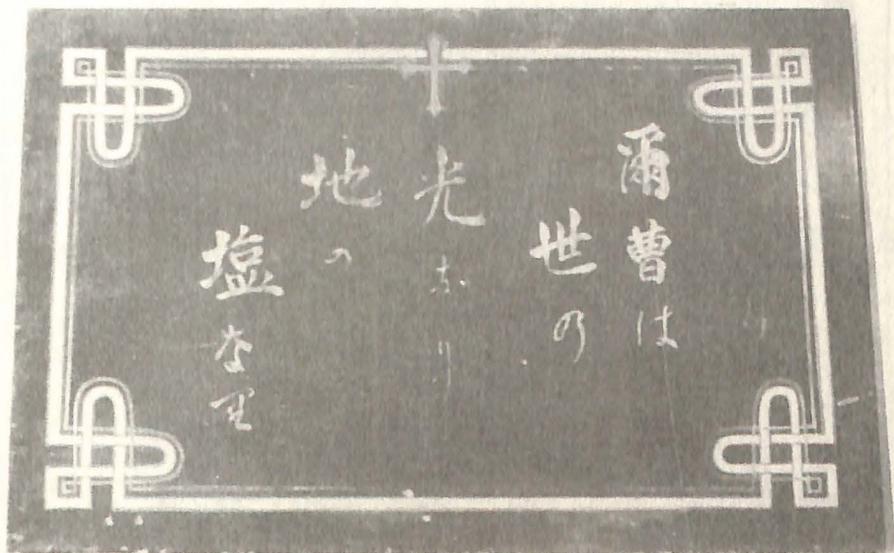
（聖恵主教会執事・太田国男記）

前立教大學教授  
草津聖ハル公ハル教會管理長長

貫民之介師校閱

草津聖ハル公ハル教會史(稿)

編纂委員



写真説明＝この黒縁の扁額は湯之澤の聖バルナバ教會の基礎となった、基督教・「光塩会」の名称の典拠 マタイ伝5：13・14の聖句を光塩会のメンバーの一人が金粉で揮毫したもので（大正4年）に作られた。最初はヨルダン・ホームの礼拝室に掲げられていたもので、後に聖バルナバ醫院の薬局に長く掲げられていたものです。現在は資料展示室に保存されています。

## 序言

「聖ナル神ノ生ケル家、天地ヲ貫ク眞理ノ柱、萬古揺ガザル普公ノ磐、黄泉ノ門ハ決シテ之ニ勝ツベクモアラヌ神ノ教會」ノ聖ク貴キ教旨キョウジハ如何ニシテ此ノ草深キ山奥ノレブラ村落ニ傳ヘラレ、如何ニシテ培ハレ、如何ニシテ迫害ヨリ護ラレ、如何ニシテ各時代ヲ經過シ、如何ニ祝セラレテ今日ニ至リシヤ？愛スル我教會ノ誕生ト生育チノ物語リ、ソハ教會ニ連リテ世ニアル甲斐ナキ身ニ餘リアル御恩寵ヲ辱ケナウスル我等ノ等シク探ラント欲シ尋ネント願フ處ナリ。即チ教會史編纂ノ聲ヲ聞クコト既ニ久シキニ、諸種ノ妨ケニ遇ヒテ之ガ實現ヲ見ル能ハズ。山中政三師深ク之ヲ憂ヘ一日モ速カニ此ノ良キ企ノ遂ゲラレンコトヲ希ヒテ昭和六年二月二日ノ教會委員會ニ諮リシニ全員一致ノ賛成ヲ得タレバ有志多年ノ宿望茲ニ初メテ具體ノ緒ニ就クコト、ナリタリ。今當日ノ委員會議録ヲ見ルニ

一、教會史編纂着手ニ關スル件（山中執事提案）

本教會創立ノ由來並ニ其ノ發展経路ヲ尋ヌベキ纏リタル記録一モナク且ツ當時ヲ知ル古キ信者極メテ少數トナリタル今日斷然之等ノ人々ノ記憶ヲ整理シテ記録トナシ置クニ非ザレバ遂ニハ其ノ真相ヲ後人ニ傳フル能ハザルニ至ラン。依テコノ際委員會書記ヲシテ材料ヲ蒐集シ教會史ヲ編マシメテハ如何。

右提案通り可決。尙山中師及管野委員ハ之ガ顧問トナリ各委員皆必要ニ應ジテ便宜ト援助ヲ與フルコトトアリ。

本委員素ヨリ淺學菲才到底其任ニアラザルモ決議トアラバ致シ方ナク唯々神ノ御祐助ヲ頼ミ敢ヘテ之レガ任ヲ拝

受セリ。此ノ日以來廣ク教會先輩ノ意見ヲ聴キ、聖望學園教師トシテノ多忙ナル働キノ傍ラ各問題毎ニ當時ヲ語リ得ル兄弟ヲ歴訪シテ其ノ談話ヲ筆録シ再三之ヲ整理シテ茲ニ第一ノ史稿ヲ得タルヲ以テ關係各位ノ内覧ニ供セントス。

乞フ、願ハクハ何分ノ教示アラムコトヲ。

昭和八年十二月一日

德滿唯吉 謹識

尙我等ノ恩人、前立教大學教授ニシテ又十三ケ年ノ久シキニ亘リ我草津聖バルナバ教會管理長老タリシ貴民之介神父ガ親シク本稿ノ校閲ヲ賜ハリシコトヲ附記シテ茲ニ深甚ノ謝意ヲ表ス。

## 例 言

一、本書ハ聖バルナバ教會史編纂ノタメ蒐集シタル史料ヲ稍系統的ニ排列シ之ニ順序ト區分ヲ與ヘテ考究ニ便セントシタルモノナリ。

二、本書ハ殆ンド當時ヲ語ル人々ノ談話ヲ唯一ノ基礎トシタルヲ以テ、誤聽、誤記、誤聞ヲ免レズ、且ツ人ニ依リテ見方ヲ異ニシ、記憶ヲ異ニスル點アル故、讀者ニシテ事實相違セリト思料セラル、處アラバ、遠慮ナク御教示ヲ乞フ、精査ノ上訂正スヘシ。

三、リー教母ニ關スル事項ハ他日「コンウオール・リー女史傳」編纂ノ意向アル由ニ就キ、本書ニハ極メテ簡單ニ

記載センコトヲツトメタリ。

一、男子ホームノ記述稍詳細ニ亘ルハ數年前、男子ホーム史ヲ作ラント欲セラレシ同ホーム各位ノ爲、之ヲ以テ男子ホーム史ニ代ヘントスル意アレバナリ。

二、本書編纂ノ大ナル助ケトナリタルモノハ山中師ノノート、管野兄ノ助力、高須兄ノ各種統計貸與等ナリ、編者ノタメ親切ニ當時ヲ語ラレシ各位ハ左ノ如シ。

コンウオール・リー先生、貫民之介師、山中政三師、伊藤梅吉先生、三上千代先生、高○利○兄、上○寛○兄、相○鎰○兄、池○み○姉、稻○温○姉、福○せ○姉、阿○え○姉、井○珠○姉、鈴○繩○兄、柴○盛○兄、栗○松○兄、青○昇○兄、佐○亮○兄、長○幸○兄、伊○導○兄、望○健○兄、飯○力○兄、酒○筆○兄、江○そ○姉、中○柳○兄、遠○啓○兄、飯○久○兄、吉○浩○兄、板倉○兄(回春病院)、高○千○兄、山○彌○兄、福○三○士○兄、横○武○兄、安○千○郎○先生、高○與○兄、元區長・淺○勝○郎○氏等。

尙原種ヲ送附セラレタル諸賢ハ

米原馨兒長老、森俊治長老、一色榴吉長老、山本三次郎長老、貫民之介長老、大藤鑄三郎長老、松○ヨ○姉(熊本)、片○百○子○姉(熊本)、因○多○兄(熊本)、木○嘉○兄(熊本)、武○久○兄(全生)、復生病院長・岩下壯一神父、幾澤マリヤ姉(熊本)

一、本書ノ編纂ニ當リ同室ノ親友瀧○早○兄屢々筆記ノ勞ヲ助ケラレシコトヲ附記シテ謝意ヲ表ス。

昭和六年十二月

編纂者識

# 湯之澤聖バルナバ教會史——目次——

	頁		頁
序文	一	第四 邪宗門禁制時代	二四
序文	三	第五 下町分離問題	二六
序文	四	第六 御座ノ湯ノ移轉	二九
謝辭	六	第七 ベルトラン神父ノ來草ト其ノ計畫	三一
まえがき (本書をお読み下さる前に一言)	七	第八 本書ニ於ケル時代區分法	三三
序言	九	第一期 光鹽會時代	三七
例言	一〇	第三章 光鹽會	三七
聖バルナバ教會史目次	一二	第九 米原馨兒長老ノ來草	三七
		第十 光鹽會ノ成立	四〇
總論	二一	第十一 村岡・小池兩兄ノ來草	四五
第一章 教會ノ特質	二一	第十二 光鹽婦人會	五〇
第一 光榮アル歴史	二一	第十三 宿〇薰兄ノ傳道	五三
第二 顯者村落教會	二三	第十四 光鹽會ノ上町進出	五六
第三 附屬事業トノ關係	二四	第十五 大阪家族教會ノ傳道	六〇
第二章 時代區分	二四		

第四章 ヨルダンホーム 六三

第十六 菅野・宿澤兩兄ヨルダンホー

ムヲ創ム 六三

第十七 コンウォール・リー女史ノ來

草 七一

第十八 小池・岸名兩兄ノ來草 七三

第十九 聖愛園 七三

第五章 草津の初穂 七五

第二十 第一回幼児聖洗式 七五

第二十一 マキム監督ノ來草 七六

第二十二 所屬問題 八〇

第二十三 第一回壯年聖洗式 八一

第二十四 ヨルダンホームノ解散ト木曜

會 八一

第二十五 教會設立前ノ一般情勢 八二

第二期 創立時代 八四

第六章 聖バルナバ教會ノ創立 八四

第二十六 コンウォール・リー女史

ノ來任 八五

第二十七 満足ノ家(満足館) 八六

第二十八 慈愛ノ家 八七

第二十九 平和ノ家 八七

第三十 聖バルナバ教會ノ創立 八九

第三十一 草津教友ノ發行 九三

第三十二 光鹽會ト新教會 九四

第七章 婦人ホーム及婦人會 九三

第三十三 愛ノ家庭 九五

第三十四 聖バルナバ婦人會 九八

第三十五 代禱會 一〇一

第三十六 婦人傳道補助會 一〇一

第八章 幼稚園及日曜學校

第三十七 聖愛幼稚園

一〇三

第三十八 聖バルナバ(下町)日曜

一〇五

學校

第三十九 光鹽會上町支部

一〇七

第四十 愛隣幼稚園

一〇八

第四十一 聖バルナバ(上町)日曜

一〇九

學校

第四十二 草津俱樂部

一一〇

第四十三 傳道文庫

一一〇

第四十四 宿澤兄ノ退草

一一二

第四十五 仔羊會

一一三

第九章 聖バルナバ醫院ノ開院

一一三

第四十六 聖バルナバ醫院ノ創立事

情

第四十七 光田健輔氏ノ來草

一一五

第四十八 三上千代女史

一一六

第四十九 服部ケサ女史

一一八

第三期 リバイバル時代

第十章 霜間愛友會

一一〇

第五十 們原兄ノ霜間派遣

一一一

第五十一 霜間愛友會成ル

一一一

第五十二 宿澤兄ノ栗生歸還

一一二

第五十三 第一回諏訪神社祭禮傳道

一一三

第五十四 愛友會ノ運動會

一一四

第五十五 第二回諏訪神社祭禮傳道

一一五

第五十六 教會樂隊

一一五

第五十七 第三回諏訪神社祭禮傳道

一一六

第五十八 第四回諏訪神社祭禮傳道

一一七

第十一章 男子ホーム

一一八

第五十九 同情ノ家庭

一二八

第六十 睦ノ家庭

一二九

第六十一 霜間聖ステパノ館

一三〇

第六十二 聖ステパノ館新館

一三一

第六十三 男子ホーム草津分館

一三二

第六十四 三委員制

一三三

第六十五 聖ビリボ館 一三五

第十二章 リバイバル 一三七

第六十六 教會ニ於ケルリバイバル 一三七

第六十七 婦人ホームニ於ケルリバ  
イバル 一四〇

第六十八 男子ホームニ於ケルリバ  
イバル 一四一

第六十九 ヒクソン師ノ神慮祈禱會 一四二

第十三章 聖バルナバ・ギルド 一四四

第七十 (イ)ウオツチャーズ・エント・ワーカーズ一四四

第七十 (ロ)聖バルナバギルドノ創立 一四六

第七十一 惠會 一四八

第七十二 一色榴吉長老ノ來草 一四九

第七十三 教會ノ鐘 一五一

第十四章 青年會 一五二

第七十四 光盟會ノ解散 一五二

第七十五 聖バルナバ青年會ノ創立 一五三

第七十六 役員及会ノ活動―運動會―

音樂會―バザー 一五五

第十五章 教役者及働人(其ノ一) 一六〇

第七十七 コンウォール・リー女史 一六〇

第七十八 井上照子女史 一六二

第七十九 第一代長老アンデルス師 一六三

第八十 ヒューレット師 一六四

第八十一 第二代長老大藤鑄三郎師 一六七

第八十二 第三代長老山本三次郎師 一六九

第八十三 山中政三師 一七〇

第八十四 第四代長老貫民之介師 一七二

第十六章 教會委員(其ノ一) 一七九

第八十五 創立時教會委員 一七九

第八十六 大正六年度教會委員 一八〇

第八十七 大正七年度教會委員 一八一

第八十八 大正八年度教會委員 一八一

第八十九 大正九年度教會委員 一八二

第九十 大正十年度教會委員 一八三

第四期 發達時代

第十七章 夫婦ホーム

一八四

第九十一 聖ルセ館

一八四

第九十二 福○紫○兄

一八五

第九十三 聖リベカ館

一八七

第九十四 夫婦ホームノ解散

一八八

第十八章 上町下町路傍傳道

一八九

第九十五 上町路傍傳道

一八九

第九十六 下町路傍傳道

一九〇

第九十七 在方面ノ傳道

一九二

第十九章 家庭集會

一九二

第九十八 明星團トノ關係

一九二

第九十九 愛友會ノ解散

一九六

第一百 聖バルナバ祈禱團

一九七

第一百一 傳道隊

一九七

第一百二 家庭集會

一九八

第二十章 聖バルナバ醫院(其ノ二)

一九八

第三百 佐藤貞雄師

一九九

第四百 中村時太郎師

二〇〇

第二十一章 準ホーム

二〇一

第五百 聖オーガスチンノ家

二〇二

第六百 聖ポーロノ家

二〇二

第七百 聖アンノ家

二〇三

第八百 聖モニカノ家

二〇四

第九百 聖ルカノ家

二〇五

第二十二章 未感染兒童ホーム

二〇六

第一百 聖マーガレット館

二〇六

第一百一 聖テモテ館

二〇九

第一百二 先崎ケサ女史

二一〇

第二十三章 信徒修養會

二一一

第一百三 第一回信徒修養會

二一一

第一百四 第二回信徒修養會

二一三

第一百五 第三回信徒修養會

二一三

第一百六 第四回信徒修養會

二一四

第百十七	第五回信徒修養會	二一五
第百十八	第六回信徒修養會	二一六
第百十九	第七回信徒修養會	二一六
第百二十	第八回信徒修養會	二一七
第百二十一	第九回信徒修養會	二一七
第百二十二	佛教講演會	二二〇
第百二十三	第十回信徒修養會	二二〇
第百二十四	第十一回信徒修養會	二二一
第二十四章	聖望小學校	二二二
第百二十五	望會	二二二
第百二十六	望學校	二二三
第百二十七	聖バルナバ望小學校	二三一
第百二十八	新校舍建設	二三三
第百二十九	聖望小學校	二四一
第二十五章	聖堂建築	二四五
第百三十	リ一女史ノ第一回歸英	二四五
第百三十一	傳道囑託員	二四六
第百三十二	聖堂建築	二四六

第百三十三	聖書講義會	二四九
第百三十四	聖書販賣部	二五〇
第五期	充實時代	二五〇
第二十六章	教會墓地及納骨堂	二五〇
第百三十五	教會墓地ノ設定	二五〇
第百三十六	納骨堂	二五一
第百三十七	香川松	二五二
第百三十八	電車問題	二五三
第二十七章	女子愛友會及ピ小兵士會	二五七
第百三十九	花束會	二五七
第百四十	女子愛友會	二五八
第百四十一	小兵士團	二五九
第百四十二	小兵士會	二六〇
第二十八章	婦人ホームノ擴張	二六〇
第百四十三	聖マリヤ館	二六〇
第百四十四	聖ヘレナ館	二六二
第百四十五	聖エリザベツ館	二六三

第二十九章 男子ホームノ擴張 二六〇

第四百十六 聖バルナバホームト館

則ノ制定 二六五

第四百十七 聖エドモンド館 二六八

第四百十八 愛馬ピース 二六九

第四百十九 南瓜汁粉會 二六九

第四百五十 風紀問題 二六九

第四百五十一 霜間御殿 二七〇

第四百五十二 聖ジャイルス館 二七一

第四百五十三 聖ヒューベルト館 二七三

第四百五十四 三館鼎立 二七四

第四百五十五 宿〇薰兄 二七六

第四百五十六 草津聖ステパノ館 二七六

第四百五十七 聖フランシス館 二八〇

第四百五十八 假修道院 二八二

第四百五十九 聖ニコラス館 二八三

第四百六十 參議員會 二八四

第三十章 特種集會 二八六

第六百六十一 暗誦會 二八六

第六百六十二 按摩會 二八七

第六百六十三 ハーモニカバンド 二八八

第六百六十四 ブラスバンド 二八九

第六百六十五 白樺社 二九〇

第六百六十六 英語會 二九〇

第三十一章 リー教母ノ光榮 二九二

第六百六十七 草津聖エドモンド館 二九二

第六百六十八 聖ジュリア館 二九二

第六百六十九 リー母上ノ藍綬褒章拝受 二九四

第七百七十 訪問隊 二九四

第七百七十一 リー教母ノ第二回歸英 二九五

第七百七十二 貫長老ノ事業管理 二九六

第三十二章 聖バルナバ醫院ノ移轉及ビ新築 二九七

第七百七十三 松本留吉氏ノ寄附 二九七

第七百七十四 遠山郁三博士 二九八

第七百七十五 工事經過 三〇〇

第七百七十六 新醫院ノ開院 三〇一

第七十七 鶴田一郎醫師 三〇五

第三十三章 教役者及ビ働人(其ノ二) 三〇七

第七十八 マギル女史 三〇七

第七十九 ネットン女史 三〇八

第八十 秋山基一師 三〇九

第三十四章 教會委員(其ノ二) 三〇九

第八十一 大正十一年度教會委員 三一〇

第八十二 大正十二年度教會委員 三一〇

第八十三 大正十三年度教會委員 三一〇

第八十四 大正十四年度教會委員 三一〇

第八十五 大正十五年度教會委員 三一〇

第八十六 昭和二年度教會委員 三一〇

第八十七 昭和三年度教會委員 三一〇

第八十八 昭和四年度教會委員 三一〇

第八十九 昭和五年度教會委員 三一〇

第九十 昭和六年度教會委員 三一〇

第三十五章 新會館 三二三

第九十一 教會増築ト新會館ノ建築 三二三

第三十六章 皇太后陛下ノ御仁慈 三二四

第九十二 白根男爵御差遣 三二四

第九十三 堀田知事ノ來訪 三二五

第九十四 安達内相ノ來訪 三二六

第九十五 關屋宮内次官ノ來訪 三二六

第九十六 皇太后陛下ノ特別御下賜金 三二七

第九十七 働人ノ御下賜品拜受 三二七

第九十八 吾妻郡教育會ノ謝恩會 三三〇

第三十七章 國立療養所問題 三三一

第九十九 自由療養地敷地決定 三三一

第一百 療養所第一期計畫 三三二

第一百一 聖ジャイルス館ノ引上 三三二

第一百二 聖光館 三三四

第三十八章 追補 三三四

第一百三 栗生樂泉園開園 三三四

第二百四	「高原」發行	三三五
第二百五	リイ教母喜壽祝賀會	三三五
第二百六	リイ教母ノ一時歸省	三三五
第二百七	管理司祭貫民之介師辭任	三三六
第二百八	勅使御差遣	三三六
第二百九	昭和九年末教會教勢報告	三三六
第二百十	エドリン先生ノ來任	三三八
第二百十一	皇太后陛下聖バルナバ醫院 病者慰問ノ御使ヲ賜フ	三三八
第二百十二	聖マーガレット館ノ全燒 ト再建築	三三九
第二百十三	リイ教母明石へ避寒サル	三三九
第二百十四	山中政三師ノ司祭任職	三四〇
第二百十五	加藤滋師來任	三四〇
第二百十六	秋山基一司祭事業管理	三四〇
第二百十七	マキム主教逝去	三四一
第二百十八	楓苗ノ御下賜	三四一
第二百十九	受洗者千人突破記念感謝會	三四一
第二百二十	ミス・マギル先生ノ退草	三四二

第二百二十一	シエバード先生ノ來任	三四二
第二百二十二	聖バルナバ・ミッシヨン 解散問題	三四三
第二百二十三	高原歌集發行	三四四
第二百二十四	リイ女史授勲ノ光榮	三四四
第二百二十五	栗生樂泉園・聖慰主教會 會堂建設	三四四
第二百二十六	聖バルナバ・ミッシヨン ノ解散	三四五
第二百二十七	聖バルナバ教會建物撤去	三四七
第二百二十八	「高原」誌廢刊	三四八
第二百二十九	リイ教母ノ御永眠	三四八
第二百三十	頌徳公園	三四九
第二百三十一	湯之澤部落ノ解散	三五〇
第二百三十二	故リイ教母ノ納骨式	三五一
	編纂者・徳滿唯吉兄のこと	ステパノ滝田 三五三
	あとがき	ステパノ滝田 三五五

## 總論

### 第一章 教會ノ特質

#### 第一 光榮アル歴史

惟フニ主ハ唯一、救拯<sup>キリスト</sup>ハ唯一、平等觀ヨリスレバ、凡ソキリストヲ證詞スル地上ノ總テノ教會ハ皆同一ナルベク、而モ歴史觀ヨリスレバ、地上ノ總テノ教會ハ皆特種ノ性質ヲ具有ス。我ガ聖バルナバ教會又然リトス。今本書中ニ蒐集セラレタル歴史的事實ヲ檢討スルニ終始、必ズシモ悉ク正シク、善キ事ノミニアラズ、之教會ハ何時ニテモ聖靈ニ滿サレ、常ニ堅固ナル能ハズ。時ニ信仰弛緩<sup>チカシ</sup>シテ惡魔ノ誘惑ニ心思ヲ奪ハレ、過失ニ陥リ、罪惡ヲ犯ス事ナキニ非ザレバナリ。

サレド總括シテ之ヲ見ル時ハ、何人ト雖モ教會ヲ通シテ顯ハレタル神ノ御業ニ驚嘆スベク、嘗テ地上ニ在セシ時本病者ニ對シ神ト人トノ愛ヲ以テ「汝潔クナレ」ト宣ヒツ、深キ憐憫ヲ垂レサセ給ヘル主ハ今モ尚生キ給フテ癒ヘ難キ病ヲ持ツ我ラニ深キ愛ヲ現ハシ、御手ヲサシノベ給フ事ヲ明ラカニ知ルナリ。

抑々當部落タルヤ、元ヨリ不治ノ病ニ冒サレテ世ニ希望ヲ斷タレ、社會ノ嫌忌ト侮蔑ノ下ヲ潜リテ辿リ着キタル病者集寓ノ地ナレバ、輕症ナル者モ重症ナル者モ、多クハ自暴自棄ニ陥リ、好ンデ酒色ニ耽溺<sup>クソブキ</sup>シ、之ニ依リテ僅カニ悶々ノ情心ヲ紛サントシ、白晝公然賭博ハ開帳セラレ、往々無賴漢横行シテ彈<sup>ハバカ</sup>ラズ、殺傷、争論、自殺日ニ行ハレ、而モ病者ナルガ故ニ取締リノ警官ト雖モ之カ處置ニ窮シ、拱手傍觀殆ンド其ノ爲ス處ヲ知ラザリキト之レ寧ロ當然ノ成行ニシテ深ク同情ニ値スル事實タリシナリ。當時ヲ語ル一老人ガ「苦惱叫喚、地獄ニ通フノ心

狀」ト告白セル又宜ナラズヤ。

然ルニ一度此ノ敗類<sup>ハイタイ</sup>セル村落ニ神ノ教旨ノ傳ヘラル、ヤ、異常ノ衝戟ヲ惹起シ、殊ニコンウオール・リー教母ノ高德ニ依ル、驚クベキ感化力ト、愛憐ノ熱情ハ、教會ノ斷ヘサル活動ト相俟ッテ、遂ニ部落ノ面目ヲ一新シ、風俗日ニ改リ月ニ醇ク、往年ノ博徒ハ遂ニ賽ヲ投ゲテ、罪障ヲ懺悔シ頑迷ナル迫害者スラ心碎カレテ救ヒニ入り喧嘩口論モ、賭博モ泥酔モ、將自殺モ漸ク其影ヲ潜メ、讚美ノ歌、感謝ノ祈リ、温泉ノ町ニ充チ滿ツルニ至レリ。若シ夫レ附屬事業ノ急速ナル進展ヲ一瞥センカ、大正六年十二月大平館二階ノ陋室ヲ借用シテ、病者ナル若キ一婦人ヲ收容シ、其ノ名モ「愛ノ家庭」ト命名シテ、リー師自ラ其ノ母トナリ、創瘍ヲ包ミ衣食ヲ給シ、愛ノ救護ヲ加ヘタルニ端ヲ發シ、必要ニ祈リ、祈リテ與ヘラレ、婦人ホームノ創立トナリ、男子ホームノ創立トナリ、夫婦ホームノ創立トナリ、獨身婦人ノタメニ聖マリア館、聖ヘレナ館、聖エリザベツ館アリ。獨身男子ノタメニ聖ステパノ館、聖ニコラス館、聖エドモンド館、聖ジュリア館アリ。夫婦者ノタメニ聖ルセ館、聖リベカ館アリ。健康兒童ニシテ救護ヲ要スルモノノ爲ニ聖マーガレット館、聖テモテ館アリ。別ニ準ホームアリテ特種ノ事情ニアル家庭ヲ支ヘ、更ニ病者診療機關トシテ聖バルナバ醫院アリ。病兒童教育機關トシテ聖望小學校アリ。昭和五年度末ニ於ケル被救護者總數二百三十二名、主要建物數二十三、經費年額十一萬餘圓ヲ要スル大事業トハナレリ。此ノ間、敢ヘテ自ラヲ世ニ顯スコトナク、唯信ジ、唯祈リテ、此ノ大ヲ致セルナリ。

更ニ關係諸團體ニ眼ヲ轉ズレバ、青年會アリ、婦人會アリ、小兵士會アリ、愛友會アリ、日曜學校、幼稚園アリ。

而シテ附屬事業ノ經營者タルリー師ハ畏クモ今上陛下御即位ノ大典ニ際シテ、藍綬褒賞ヲ下賜セラレ、越ヘテ昭和五年十二月、皇太后陛下ノ御仁德普ク、更ニリー師ハ銀製花瓶ヲ、貫民之介師・山中政三師ハ卷繪硯箱ヲ拜

受シテ一代ノ面目ヲ施シ、館員亦多額ノ慰安金ヲ惠與セラレテ皇恩ノ厚キニ感泣セリ。嗚呼榮光ハ主ニ在レ。

## 第二 蠟者村落教會

我教會第二ノ特質ハ世ノ多クノ教會ト異リテ、蠟病者ノ居住スル特種部落ニ在リテ、専ラ病者ノ救濟ニ其ノ主力ヲ傾注スルコト之ナリ。サレバ傳染ノ危險ハ血統ニ對スル世人ノ過敏性と相俟ッテ、勸人ノ特別ナル決心ト、覺悟ト忍耐トヲ要スベク、世ノ志士仁人ヲ以テ自負スル人々スラ敢ヘテ近寄ラザル所以實ニ此處ニアリ。或人曰ク「萬金ヲ積ミ名譽ヲ以テ誘フモ、誰カ癩患者ト食卓ヲ共ニシ、住居ヲ同ジクスル者アランヤ」ト、然ルニ我教會ノ戴ク勸人ノ獻身的ナル働キハ、信徒ノ大イナル感謝ノ源泉ニシテ、屢々有效ニ病者ノ心ヲ碎キ、其ノ善業ヲ通シテ、救ニ入ル者決シテ少シトセズ。抑々本病タルヤ古來不治ノ難患トシテ、東西醫家ノ匙ヲ投ゲシ處。現代醫學ノ進歩ヲ以テスルモ、一進一退在<sup>レ</sup>舊治セサル惡性疾病ナリ。サレバ世ニ捨テラレタル病者ノ心思ニ、希望ノ曙光一度點セラル、ヤ、頼リ無キ身ニ眞實ノ頼リヲ見出シタル喜悅ハ、熱烈ナル信仰トナリ、且屢々襲ハル、苦痛ト、不自由ヲ通シテ、其ノ信仰ハ愈々鍛練セラレ、遂ニ死ヲ見ルコト歸スルガ如ク、感謝ト讚美ノ中ニ勝利ノ永眠ヲナス其ノ單純ナル信仰ト良キ證詞ノ豊富ナル事ハ、我教會ノ一異彩ナリ。

病者タル教會員ハ多ク生活ノ餘裕少ク、且ツ獨立ノ生計ヲ營ム能ハサル者甚ダ少カラザレバ、自給教會タル事遽ニ實現シ難シト雖モ、投ゼラルルレブタハ、決シテ鮮少ト言フ可カラズ、且ツ病ノ床ニ、奉仕ノ仕事場ニ、聖キ言葉ハ交換セラレ、隠レタル禱リノ勇者頗ル多ク、時ニ及ビ會堂ノ鐘ノ響餘音嫋々、此ノ溫泉町ノ谷ノ空氣ヲ振動セシムルヤ、彼方ノ小屋、此方ノ家ヨリ三々伍々嬉々トシテ、主ニ在ル兄姉ノ教會ニ向フヲ見ル、四肢ヲ縋帶ニテ纏包シタル者、顔面ノ傷瘍ニ軟膏ヲ點張シタル者、弱者ハ補ケラレ、跛者ハ杖ニ槌リ、盲者ハ手ヲ引カ

レテ、静カニ神ノ家ニ入りテ、御前ヒザラフニ跪ク美シキ光景ハ、亦我教會ノ一特質タルヲ失ハサルヘシ。

### 第三 附屬事業トノ關係

純理的ニ之ヲ論ズレバ、元ヨリ教會ト其ノ附屬事業トハ、其ノ主體ヲ異ニシ、目的ニ異同アリ。サレド實際的立場ヨリ之ヲ見レバ我教會ト附屬事業トノ關係ハ、恰モ蔭影ノ形體ニ於ケルガ如ク、其ノ附屬事業ヲ理解セザレバ、教會ノ活動ヲ理解スル事能ハズ、教會ヲ知ラント欲スル者ハ、先ヅ其ノ附屬事業ヲ知ルヲ要ス、然ラザレバ未ダ全キト言フ能ハズ、且ツ教會ノ中堅ハホーム館員タリ、教會ノ活動ヲ補佐スル諸機關殊ニ、直接教會ニ連ル青年會、婦人會、小兵士會、愛友會、日曜學校、聖望小學校等ノ主要ナル働人ハ、何レモホームノ主要ナル地位ヲ兼任セル者多キ點ヨリ、之ヲ分離シテ記述スルコトハ、統一ト連絡ヲ破リ、屢々重複ノ嫌ヲ生ズ、依テ本書ニ於テハ、附屬事業ニ關スル事項ヲモ併セ、之ヲ略、同一體トシテ一系統ノ下ニ、集載セムトスル所以ナリ。

## 第二章 時代區分

### 第四 切支丹宗門禁制

今時代區分ヲ述ベントスルニ先ツ考フヘキハ、本書ニ於テ取扱フヘキ歴史的事實ヲ、何時ノ時代ニマデソキユツ遡及スベキカノ問題ナリ。即チ本教會ノ創立ト、直接或ハ間接ニ因果關係ノアリシ、第一回傳道ノ行ハレタル時期ノ確定之ナリ。

## 第一章 教會ノ特質

世人或ハ大正二年春、熊本降臨教會牧師米原馨兒長老ノ松村館別館ニ於ケル、傳道說教會ヲ以テ草津傳道コウノ嚆

矢トナス。サレド米原長老ノ來草以前ニ果シテ何人モ當地ニ於テ、福音ノ傳道ニ從事シタルモノナカリシヤ否ヤ？今讀者ト共ニ我が國史ヲ按ズルニ、人皇第百五代後奈良天皇ノ天文十八年八月十五日、イスパニヤ人宣教師、フランスス・ザビエル鹿兒島ニ來リ、初メテ我國ニ基督教ヲ傳フ。其ノ教タルヤ、イタク我國人ニ悦バレ、短日月ニシテ九州一帯ヲ教化シ、就中大友、有馬、大村、黒田ノ諸侯ノ如キハ信仰ノアマリ、遠ク使者ヲヨーロッパニ遣シ、親シク法王グレゴリウス十三世ニ親書寶物ヲ贈リ、以テ忠誠ノ意ヲ表ス等ノ事アリキ（高等小學國史）今大正六年上町光泉寺ニ於テ、行基菩薩開創一千二百年記念法要ヲ營ミシヨリ見テモ、當地ガ極メテ古キ時代ヨリ、住民ヲ有シタル事ヲ知ルモ、佛教ノ傳道ニ關スルモノニシテ、上述ノ如キキリスト教ノ事實ハ、草津ヲ距ル事山河數百里ノ處ニ行ハレシコトナレバ、恐ラクハ、相知ラサリシナルヘク、當時草津ガ如何ナル状態ニアリシカラモ確知スルニ由ナシ。

永錄十一年九月宣教師ウルカン、京都ニ來リ信長ニ謁シ、其ノ教ヲ弘メン事ヲ乞フ、信長即チ其ノ請ヲ許シ、京都ニ教會堂ヲ創建セシメ、之ニ近江甲賀郡五百貫ノ地ヲ寄附ス、後宣教師三名ヲ迎ヘ、近江伊吹山ニテ方五十町歩ノ地ヲ給シ、本國ノ奇草・珍木ヲ植ヘ、藥園ヲ設ケシムル等、歡待ヲ極ム。

如斯ナリシカバ、基督教ハ傳播頗ル速ニシテ、天正ノ中頃ニ至ル迄三十餘年ノ間ニ、信徒漸ク多ク、九州各地ハ勿論、山口、廣島、和歌山ヨリ關東、奥羽地方迄傳播シ、宣教師三百餘名、教會數二百五十餘、信徒三十萬ヲ算スルノ盛況ヲ呈シ、天下傾動ノ壯觀アリキ。然レドモ傳道ハ主トシテ、海陸ノ主要交通路ニ添ヒテ行ハレシヲ以テ、地理的ニ隔絶セラレアリシ草津ニ、傳道ノアリシヲ思フコトハ困難ナリトス。稍下リテ二千二百九十八年、明正天皇寛永十四年ニハ、カノ島原ノ亂ノ事モアリ旁々徳川幕府ハ、キリスト教絶対禁壓主義ヲ愈々確フシ信徒ヲ嚴探シ、踏繪ト極刑ヲ以テ之ガ斷滅ヲ圖リ、信徒ノ刑セラレシ者前後二十八萬人、信仰ヲ捨テシ者二十餘

萬、未曾有ノ迫害時代タリ、而モコノ迫害ヲ逃レテ山ニ入り、秘密裡ニ眞ノ禮拜ヲ續ケタルモノ無キニ非ザルモ  
 兎ニ角明治五年ニ至ル迄、キリスト教ハ切支丹邪宗門禁制ノ名ノ下ニ、嚴重ナル國禁ノ状態ニアリキ、サレバ此  
 ノ期間ニ於テ、直接傳道ノ不可能ナリシハ勿論、國法ハ國內ニ信者ノ存在ヲ許サス。然ルニ明治六年三月切支丹  
 宗門禁制ノ高札撤去セラレ、又信徒ノ自由認めラル、ノ快報一度海外ニ傳ハルヤ、我聖公會ノ母體タル、英國教  
 會ノ傳道會社ヲ初メ、各派傳道協會、争ッテ本邦ニ宣教師ヲ派遣シテ、猛烈ナル傳道ヲ開始シ、亦一方各地ニ教  
 會ヲ建テ、學校・病院ヲ設ケ、社會事業ヲ起シ、文化施設ヲナシ、我同胞ニ永遠ノ主ヲ知ラシムベク、茲ニ聖戰  
 ノ火蓋ハ切ラレタリ。サレド交通極メテ不便、冬季ノ如キハ交通殆ンド途絶ノ状態ニアリシ我草津ガ、他ノ良キ  
 條件アル沃野ニアリテ、刈入レニ日モ尚足ラサリシ、之ヲ宣教師ノ視野ニ入ラザリシ事亦疑ヲ容レサルカ如シ、  
 サモアラバアレ溫泉湧ク我ガ草津ノ地ニ來リテ、福音傳道ノ第一聲ヲ舉ケタル聖徒ハソモ何人ナリシカ。コレヲ  
 説カントスル前ニ一言言及セサル可ラサル事件アリ、即チ下町分離問題之ナリ。

## 第五 下町分離問題

明治大帝ノ下、國民ノ大自覺ニ依リ、西歐文明ノ移入ト、社會ノ進運ニ伴ヒ、鐵道交通ノ便愈々備ハリ、殊ニ  
 信越線ノ開通ニヨリテ、山色水聲ヲ喜ブ都人士ハ俗塵ヲ離レテ、或ハ妙義ノ奇岩懸崖ノ勝ヲ探リ、或ハ碓氷ノ紅  
 葉、輕井澤ノ清麗<sup>セイレイゾウキ</sup>鬱氣ヲ慕ヒテ、來遊スル者年ト共ニ多ク、從ッテ是ヨリ程速カラス、而モ海拔四千五百尺、北  
 ニ澁峠崎チ、白根山西ニ聳ヘ、吾妻・萬座・淺間ノ諸山、蜿蜒<sup>エンエンカクニョウ</sup>環繞スル處、七月老鶯ヲ聞キ、八月草花ヲ見ル我  
 草津、高原秀麗ノ大氣自ラ人體ニ適スルニ、古來關西有馬溫泉ト併稱セラレシ名湯アリ、其ノ<sup>フシヨウ</sup>釜涌ノ壯觀ハ、海  
 内第一ト歌ハレシ處ナレバ、夏ニヨク冬ニヨク沓掛以北九里ノ山徑ヲ遠シトセス、來草ノ客漸ク繁カラントスル

ニ至レリ。

時ニ此ノ町ヲカノ明治二年ノ大火以前ノ殷盛<sup>イシキ</sup>ヲ極メシ、草津千軒町ノ舊態ニ反サント、町政ノ任ニ當レル角田戸長ハ、極度ニ疲弊セル町民甦生ノ途ヲ講スヘク、明治十九年草津改良會ヲ設ケ、新財源トシテ湯稅ヲ創始シ、一般健康者一日一錢、本病者一日五厘ノ湯錢ヲ徵シ、町政運用ノ便宜上、六合村ヨリ分立シテ草津村ヲ始メ、新役場ヲ設置スル等、恪勵盡瘁甚ダカメタル結果、其ノ面目ヲ一新セシムルヲ得タリ。然ルニ茲ニ一ツノ重大ナル懸案アリ。ソハ當町ニ雜居シ、且ツ浴客ノ最モ嫌惡スル本病者ヲ、如何ニスヘキヤノ問題ナリキ。此ノ頃我醫學界ニ於テ、漸ク本病ノ傳染說強調セラルルアリ、遂ニ明治十九年十二月、町民ノ自衛ト、町發展ノタメ、本病者ヲ適當ナル地ニ、移轉セシムヘキ案ヲ立テタリシガ、翌二十年六月ヲ期シ、現在ノ湯ノ澤一帶ヲ移轉地ト定メ、斷然移轉ヲ實行セシム。コレヨリ以前ハ本病者ト雖、一般浴客ト何等區別ヲ設ケス。サレド輕症ニシテ、一見マギラワシ得ル者ヲ除キ、一般ニハ自ラ人ヲ憚リ、多クハ旅館ノ裏坪ニ宿リ、晝間ハ點灸シ夜間私<sup>ヒ</sup>カニ入湯スル者モアリ、總シテ「裏坪御客」ト稱セラレ、好ンデ御座ノ湯ニ來浴セシカバ、何時トハナシニ此湯ヲ以テ、病者ノ專用ト定メラル、ニ至レリ。

## 第二章 時代區分

抑々此ノ御座ノ湯ハ、吾妻鏡及ビ曾我物語ニヨレバ、建久四年ノ秋、征夷大將軍源賴朝公ガ淺間山麓ニテ卷狩ヲナシ、分營ヲ上毛三原ニ置キ、狩ヲ了シテ後、土豪細野御殿之助幸久ナル者ヲ導者トシテ近傍ノ山野ヲ跋涉シ、偶々此ノ地ニ溫泉ヲ見出シ、カバ大イニ喜ビ幸久ニ姓ヲ湯本ト改メシメ吾妻郡ヲ與ヘ自ラモ屢々入湯セリト言ヒ又一說ニハ、其ノ卷狩ニ傷ヲ負ヒ、<sup>チヨウレン</sup>懐心高キニアリテ四方ヲ願望シタルニ、白煙立上ルヲ見テ溫泉アルヲ思ヒ、之ヲ醫センカタメニ尋ネ來リテ、片葉ノ葦ノ中ニ湧キ出ル溫泉ヲ見出シ、イト喜ビテ突出岩角ニ奠座ヲ敷キ、之ニ腰打掛ケテ足ヲ浸シ、遂ニ全癒ノ喜ビヲ得タリト云ヒ上野志名跡考ニハ「右大將源賴朝公ニハ建久四年八月三

日信州三原御狩獵ノ時白根大明神ノ前迄狩入ラセ給フニ硫黄ノ息氣シテ煙立テリ依テ土地ノ住人御殿之助ニ仰セテ叢ヲ刈リ其地ヲ堀ラセ見給フニ自然ト良キ溫泉湧キ出ツ、是必ズ病ヲ治スベシト足利駒王丸ガ痛ヲ試シ給フニ七日ニシテ平癒ス。右大將感ジ給ヘ御身モ浴シ給フニ心地快然タリ、之無双ノ溫泉ナリト宣ツテ其地ヲ御殿之助ニ給フ云々トアリ之等ノ傳説ヨリ其ノ湯名ヲ御座ノ湯、又頼朝公ガ座シタリシ石ヲ御座ノ石ト稱セラルナリ、扨テ移轉ヲ命セラレタル病者ハ大イナル不滿ナキニアラザリシモ湯ノ澤ノ地タル尚上町ト隣接シ既ニ松村屋隠居ノ家モアリ、同家前ニハ白須ノ湯ト通稱スル溫泉モ湧出スルコトトテ、強ヒテ自ラヲ慰撫シ、家庭ノ都合上當地ニ永住ヲ餘儀ナクセラルル者、先ヅ移轉ノ決意ヲナシ、ソノ先驅トナレリ。

ナレド當時ノ湯ノ澤一帯、地蔵、瀧下以東全ク荒蕪不毛ノ地ニシテ、谷ヲ流ル、湯川ノ極メテ狭小ナル流域ニハ、凹凸セル礫地ニ、大小無數ノ岩石散亂スルノミ、且ツ谷ノ兩崖ニハ熊笹イタク生茂リテ物凄ク、且ツ下流ニハ南ニ地獄谷アリ、此ニ投ゲ棄テノ崖アリ。明治初年ニ至ル迄單ニ死骸ヲ投棄スルノミナラズ、屢々重症者ニシテ郷里ヨリ送金ノ望ナキモノヲ、此ノ崖上ヨリ投棄シタル場所ニシテ、豪雨崖崩等ノ際ハ白骨露見セラルル有様ニテ、寂寞住居ニ堪ユベクモアラス。サレバ第一回ノ移轉ハ主トシテ、上町東端ヨリ松村屋ノ間ニ行ハレ、コレヨリ下流地方ハ唯其ノ荒涼ニマカセタリ。

明治二十年移轉令ノ下リシ年ノ夏、竹○文○郎兄ハ自宅ヲ松村屋東隣ニ移シ、山○矢○兄、齋○貞○助兄、山○矢○兄等又夫々特ニ上町ヨリ賣家ヲ求メ、之ヲ買入レ、移シテ來リ住ミ、翌二十一年ニハ、明治十年ノ創業ニテ病者専門ノ旅館タリシ、濱名館成沢屋地蔵下ニ引越シ、更ニ宇○美○吉兄、荒○谷○兄、齋○綱○兄ノ三名モ此ノ年ニ降り住ムニ至レリ。

## 第六 御座ノ湯ノ移轉

扱テ此處ニ今一ツノ未解決ノ問題アリ、ソハ多年病者ト因縁淺カラス、離レントシテ離ル能ハサル執着ヲ感ズル、御座ノ湯ノ問題ナリ。愛惜禁スル能ハスト雖、自然ノ湧出ヲ如何トモナシ難ク、セメテ其ノ湯名ナリトモ受繼ギテ心慰メバヤト、竹○文○郎兄、齋○綱○兄主トナリ、再三上町當局ト交渉シ、遂ニ其ノ湯名ノ讓渡ヲ得、之ヲ松村屋下手ニ作りタル浴場ニ冠シタリ、之今日ノ御座ノ湯ナリトス。

之ト同時ニ御座ノ湯ノ傍ニアリシ、通稱頼朝様ト稱フル小祠ヲモ併セ移轉スヘク、明治二十一年四月一日、齋○綱○兄發起人トナリ、趣意書ヲ認メテ之ヲ上下ノ有志ニ致ス。即チ「頼朝宮影宮新築志願連名」ト表書シ、其ノ文ニ曰ク「源右大將頼朝公、建久四年淺間ノ卷狩ノ時、御浴湯ヲ試ミ給フ祖湯御座ノ湯是ナリ、依テ茲ニ一字ヲ建立シ頼朝ノ宮ト稱ス。——明治二十年溫泉改良ニ付キ御座ノ湯ヲモ移轉スルニ至ル。爲ニ影宮ヲ造營セン事ヲ希望スルモ、唯我ガ自力ニテハ及ビ難ク、諸君ノ志ヲ得テ、一字速ニ成就センコトヲ」ト。コノ趣旨ヲ賛シ、金圓又ハ物品ヲ寄進シタルモノ實ニ百七十三名、湯ノ澤ニオルモノニシテ參加セザル者ナク、上町有志又之ニ加ハリ、總額金額ハ十五圓十四錢六厘ニ達ス、當時物價低廉ノ時代ナレバ、之ヲ以テ優ニ一字ヲ建立スルヲ得タルナリ。

サテ其ノ奉加者ノ中ニハ、山○彌○、竹○文○郎、松村屋隠居、全セイ、齋○貞○助、綿○幸○郎、成○常○宮○五○平、山○彌○郎、新○谷○、中澤市郎次、湯本彦三郎、黒岩定太郎、山本與平次、市川藏、湯本半平等ノ名モ見ユ、前半ハ下町、後半ハ上町ノ巨頭連ナリ、以テ當時ノ情勢ヲ窺ヒ知ルベシ。

サテ齋藤氏ノ作りタル此ノ堂宇ハ、御座ノ湯西ノ口右側ニ鎮座シ、白旗神社ト稱シテ湯之澤ノ氏神ノ如ク、年

々七月十六日例祭ヲ施行ス、此ノ地ニアルコト三十六年、大正十四年有力ナル氏子ハ、其ノ位置甚ダ相應ハシカラス、殊ニ夜間等ハ其由來ヲ知ラサル浴客等或ハ唾シ、或ハ汚物ヲ投棄シ、或ハ之ニ向ッテ放尿スル等ノ事ヲ歎キ、現在ノ高臺ニ移轉スルニ至レリ。

更ニ之ト關連シテ記憶ヲ喚起スル一事實アリ。ソハ發起人タリシ齋○綱○兄ノ事トモナリ、全兄ハ○○縣○○ノ産、幼ニシテ上京シ、呉服店ノ行商員トナリ、具ニ辛酸ヲ嘗ム、發病シテ來草シ爾來屢々病者ノタメニ仁俠ノ行ヲナス。前述ノ如ク分離問題等病者ノ多端ノ際モ、又其ノ後モヨク病者ノ利益ノタメニ最善ノ計ヲナセリ。然ルニ大正四年宿○薰兄ニ導カレテ求道心ヲ起シ、更ニ一夜森長老ノ「前車ノ覆ルヲ見テ後車ノ戒メトナス」ト題スル傳道説教ニ依リ、流石ノ因業モ忽チ碎カレ、驟然悔改メテ我カ教ニ歸シ、洗禮ヲ受ケテ神ノ子トセラレ、昭和二年七月二日聖ビリボ館ニ入館シ、全三年三月三日、七十二才ノ高齡ヲ以テ、美クシキ勝利ノ永眠ヲナセリ、聖歌二百四番ヲ殊ニ愛好シ、毎朝目覺ムレハ直チニ主禱トコレヲ歌ヒテ、主ニ交ルヲ最大ノ樂ミトセリトハ、同室ナリシ岩谷兄ノ證詞スル處ナリ。

サテ明治二十五、六年時代ノ事ニ就キ今少シク瞥見センニ、戸數十餘、人口三十二滿タサル有様ナレバ、初ノ程ハ全ク小家族ノ如ク、同病相憐ノ友情發スル處、互ニ相助ケ、相慰メ、茲ニ我カ湯ノ澤ノ基礎ハ築カレ、旅館商舖次第ニ開ケ、年ト共ニ其ノ戸數ヲ増加シ、區長ヲ選ビ温情團ヲ作りテ、部落自治ノ方針ヲ立テ、和氣霽々タリキ。

然ルニ旅館ノ開業者次第ニ多ク、從ッテ本病者ノ浴客モ漸次其ノ數ヲ加ヘ、何レモ點灸療法ヲナシ、滯草平均如何ニ短カキモ半歳、長キハ數ケ年ニ亘ルモノアリ。茲ニ於テ漸ク天下ノ自由療養郷、本病唯一ノ治療所トシテ面目ヲ呈シ、上町旅館ノガラ空ノ時モ、滿員ノ盛況ヲ呈スルニ至レリ。サレド人心腐敗ノ因ハ盛時ニ播カレルノ

## 第二章 時代區分

醫ノ如ク、浴客ノ多クハ此ノ長キ治療期間全ク無聊ニ苦シミ、各種ノ遊藝賭事等ヲ覺ヘ、欺キテ過額ノ送金ヲ求メ、太ク短カクトテ、遂ニサタンノ快樂ニ耽溺スルニ至レリ、明治三十年ヨリ四十年ノ間ハ殊ニ甚シク、賭博全部落ニ流行シ、婦女子兒童ト雖之ヲ知ラサル者ナク、若シ花遊ビニ加ハラサル者アラハ「低能」ト呼ビテ、其ノ交際ヲ斷ツカ如キ状態ナリシト云フ。サレバ勝敗ヲ爭フ喧嘩口論ノ斷ヘ間ナク、金策ニ窮シテ夜逃ケ自殺ヲナス者モ相當アリ、眼中人ナク權威ナキ剛腹ニシテ命知ラスノ無賴漢ハカカル爭論喧嘩ノ仲裁ニ入りテ、酒代ヲ得ルヲ唯一ノ仕事トセリ、カカル者ハ又屢々上町浴客等ガ物珍ラシゲニ、下町見物等ニ來ル者アランカ、其ノ態度言行ヲ私カニ監視シ、少シニテモ病者ヲ侮辱スル言行等アラバ、直チニ喧嘩ヲ挑ミテ、謝罪金ヲ取り遊興ノ費トナス有様ナリキ、サレバ若干ノ好奇心ニ驅ラレテ、下町ニ散策ノ杖ヲ曳キ、誤ッテ難ヲ蒙リタル紳士淑女決シテ少シトセズ。嘗ツテ銅山王ナル古河市兵衛氏ノ如キハ、本部落民救済ノタメ、數万円ヲ投ジテ社會事業ヲ起ス目的ニテ、從者二名ヲ連行シテ私カニ來草シ、偶々御座ノ湯ノ入口ニ立チ、内部ヲ窺見シタルニ、浴槽中ノ客邊カニ立チ「病者ヲ見物ニセントスル不心得者奴」ト叫ビ、手ニ持テル拘子ニテ浴湯ヲ浴セカケ、更ニ痰ヲ吐キカケテ顧ミザリキ、ズブ濡レトナリシ古河氏、其ノ暴行ニアキレテ、病者憐憫ノ情ハ變リテ憤怒ノ情トナリ、而モ如何トモセン術モナク、唯徒ラニ從者ニソノ憤ヲ洩ラシタリシトカ、以テ他ヲ知ルヘシ。然リ而シテカカル暴君ノ群ニモ尚深キ愛ヲ表ハシ、如何ニシテカ其ノ亡ビ行ク魂ヲ救ハント志ザセル、一人ノ稀ナル仁人アリ。之後章ニ説カントスルベルトラン師其人ナリ。

### 第七 ベルトラン師ノ來草ト其ノ計畫

我が草津ニ於ケル、迫害時代ノ最後ヲ飾ルベキ神父ベルトラン師ハ、西曆一八六七年、佛國タルン縣スウング

## 第二章 時代區分

ル村ノ生レナリ。郷里ノ小學校及中學校ヲ卒へ、召命ヲ感ジテ神學校ニ入り、神學士ノ稱號ヲ得、布教學校ニ入り、實際傳道ニ關スル研究ヲナシ、卒業ト共ニ我カ明治二十五年五月、憧憬ノ日本ニ渡來シ、白扇逆様ニカカル東海ノ名峯富嶽ノ麓山村ニ來リ、全地復生病院ノ院主トシテ、七十餘名ノ不幸ナル本病者ヲ收容シ、専心病者ノ救護ト愛撫ニ、從事セラレアリシ先輩、ヴィクルス師ノ許ニ寄寓ス(復生病院史ニヨル)。

翌二十六年ヴィクルス神父不幸病ヲ得テ、歸國セラレタルヲ以テ、其ノ後ヲ襲ヒテ第三代ノ院長トナリタリ。爾來苦心經營事業ノ擴張ヲ圖リ、熱誠患者ノ看護ト慰安ニカメラレ、偶々全院ニテ生レタル少年ニ飛○鹿○助ナル者アリ、其ノ實父ハ濱名館ニ特別縁故客トシテ、寄寓シ居タル關係ヨリ遂ニ本病者ノ來集スル草津ヲ知り、又屢々草津ヲ訪レラレタル、東京帝大醫學部教授ベルツ博士ト相識ルニ及ビ、其ノ來浴ノ結果、獨逸ノパーデンバトデン、塊地利オーストリアノガスタイ等ノ名泉ニ比較シテ、聊カモ遜色ナキ溫泉ナル事ヲ聞キ、又其處ニアル癩病者ノ頼リ無キ生活ノ狀況等ヲモ知ルニ至リタレバ、此處ニ草津行キヲ思ヒ立チ、明治三十年夏單身來草、濱名館ヲ訪レテ草々ノ物語リヲナシ、在館ノ病者ヲ慰メ、鹿之助ノタメニトテ數葉ノ寫眞ヲ撮リ、又下町ヲ限ナク視察シテ、夜ハ上町ノ山本館ニ投宿セリ。師思ヘラク、群山峻嶺連リ聳ユル處、古今ノ名湯アリテ病者ヲ慰メ、自然ノ美眺望ノ雄大、崇高ノ氣宇自ラ宏ク、神ノ愛此ノ里ヲ包メルヲ覺ユ、主ヨシト見給フ時、此地ニ傳道ノ事業ヲ創メバヤトテ、上町運動茶屋ノ阪一帶ノ原野約三町歩、下町字瀧ノ下一帶ノ河原、並ニ兩側ノ原野約五町歩ヲ購入シテ歸院セリ、然シテ上町ノタメニ或ハ教會堂ヲ設ケントノ意アリシモ、暫ク之ヲ保留シ、先ツ下町病者ノタメニ一大病院ヲ建設シ、全ク營利ヲ離レテ實費又ハ無料ニテ病者ヲ收容シ、基督教主義ノ溫キ家庭トナシ、健康アルモノハ農耕ニ從事セシメ、病メル同胞ニ主ノ恩恵ト愛ヲ傳ヘント決心シ、明治三十三年解雪ヲ待ツテ二人ノ邦人宣教師ヲ同伴來草ス。カクテ直チニ材木ノ切出シニ着手シ立木數百本ヲ五ヶ所ニ買入レ、今ヤ巨材ヲ山ト積ミ集メタ

## 第二章 時代區分

リ。師ハ又工事ヲ督スルノ傍、旅館大川屋ノ二階ヲ、主人ナル齋藤貞之助氏ヨリ借受ケ、病者ノタメニトテ傳道說教會ヲ開ク、來集スルモノ三十餘名、或ハ好奇心ノタメ、或ハ反對センガタメ集マレル者ノミナリ。師ハ懇ロニ救ノ道ヲ説キ、悔改メテ神ニ歸ルベキヲ醇々ト諭シタルモ、數名ノ無賴漢ハ「生意氣ナリ」「邪宗ノ異人ヲ追放セヨ」等ト、口口ニ叫ビテ喧騒ヲ極メ、折角借受ケタル會場モ空シク、連續說教會ヲ開クコト能ハサリキ。サレド師ハ尚隱忍自重シ、僅カニ求道心ヲ起シタル者ノ宅ヲ訪問シテトラクトヲ與ヘ、病メル者ヲ見舞ヒテ慰メ、魔除ケ罪除ケノ寶器ト稱シテ十字架ヲ與ヘタリ、受ケタル者ノ一人ナル酒〇マ〇師（區長吉〇浩〇氏ノ妻）ノ如キハ、今モ之ヲ所持セリト云フ。又一方病院設立ノ具體案一度町内ニ傳ハルヤ、カカル實費又ハ無料宿泊所ノ實現ハ、旅館ノ營業ヲ脅威シ、且ツ浴客ヲ對象トスル商舖ヲ萎縮セシメ、延イテハ、草津町ノ發展ヲ阻害スルモノトナシ、下町有志發起トナリ、上町又之ヲ極力後援シ、猛烈ニ反對運動ヲ起シタリ。サレド師ハ飽ク迄溫容ト柔和ヲ以テ之ニ接シ、同國人ノ先輩ニシテ復生病院ノ創立者トナル、テストウイド師ガ明治二十年東海道布教ニ際シ、御殿場所在ニテ一癩病婦人ノ、片隅ナル藥屋ノ中ニ呻吟シ居ルヲ見テ、甚ク同情ノ涙ヲ濺ギ、附近ノ民屋ヲ借りテ救護ヲ加ヘシ時起リタル、近隣ノ人々ノ嫌惡ト、迫害ノ様等ヲ記憶シ、今ハ創業ノ際ナレバ迫害困難アリ共、神ノ前ニ美シク業ヲ成就セシメント、勇ヲ鼓シテ敷地ノ地均ニ着手セリ。然ルニ、反對運動ハ愈々白熱化シ散步中ノ師ニ投石スル者アリ、町當局ハ權威ヲ以テ、溫泉引込權ヲ與フル能ハスト云ヒ、區ハ飲料水ヲ供給セサルベシト宣言シ、アク迄師ノ退却ヲ迫セリ。茲ニ於テ流石忍耐強キ師モ進退谷マリ、今強ヒテ此處ニ屋舎ヲ建テ設備ヲ整フルトモ、溫泉ナク飲料水ナクバ如何トモナシ能ハス。サレバ寧ロ、時ノ來ル迄待ツニ如カズトテ、土地ノ管理ヲ預名館ニ委ネテ、空シク神山サシテ歸院セラレタリ。而シテ師ハ、コレヨリ草津ノタメニ祈リツ、意ヲ復生病院ノ經營ニ致シ、寢食ヲ忘レテ其ノ患者ヲ護ケ、盡瘁スル事前後十八ヶ年、患者ヲ收容スル事三百四

十四名、私財ヲ費ス事八萬餘圓、其ノ慈善公益事業ノ成績洵ニ顯著ナルヲ以テ、明治四十一年六月、勅定藍綬褒賞ヲ授與セラル、ノ光榮ニ浴シタリ。

サテ管理ヲ托セラレタル濱名館ハ、忠實ニ其ノ責任ヲ果シツツ時折ノ通信ヲ斷タサリシガ、明治四十年夏全師ハ全ク草津ヲ斷念シ、多年濱名館ノ好意ニ報ユル為メ、他ノ申込ヲ拒絶シテ無償同様ニテ其ノ所有權ヲ全部濱名館ニ移讓セリ。コレヨリ先、師ガ山ヨリ切り出シタル用材ハ、腐蝕ノ處アリシヲ以テ、需要者ニ賣却スル事トナリ、下町ノ數軒及上ノ白旗ノ湯、瀧ノ湯等ノ用材トナレリ。ベルトラン師ガ傳道説教ヲナシタル家ハ、明治三十四年八月十二日、所謂湯之澤大火ニ依リテ焼失シタルヲ以テ、其ノ跡ニ建テラレタル長屋ハ、廻リ／＼リテ昭和五年十二月我教會ニ屬シ、傳道文庫及聖書販賣部ヲ置カルルニ至ルモ、又奇シキ御攝理ナラズヤ、更ニ又嘗テ師ガ病者救濟ノタメ大病院ヲ建設セントセラレシ敷地モ、廻リ／＼リテ昭和四年十一月我教會ニ屬スル大病院建設セラレ、病メル者ニ大イナル慰藉ト喜ビテ、與ヘツツアルコトヲ思フ時、當時迫害ヲ加ヘタル人々ノ中、誰ガ之ヲ予想シ得タランヤト。最後ノ勝利者ナル主ヲ讚メ稱ヘサルヲ得サルナリ。思フニ世ハ未ダ長キ切支丹宗門禁制ノ墮力ニ支配セラレ、理由ナクシテ之ヲ嫌惡シ、迫害ヲ加ヘタルナリ。主ニ在ル同胞愛ニ燃ユル師ノ計畫ガ、町民ノ反對ニ依リテ全ク水泡ニ歸シタルナリ。洵ニ遺憾ノ極ミナリ。サレド之亦來ラントスル者ヘノ、準備ノ過程トシテ見ル時、其ノ勞ノ決シテ空シカラサルヲ知ルナリ（主トシテ濱名館主坂田氏、吉田區長、酒〇マ〇姉、復生病院ノ古キ信者等ノ談ニヨル）。

#### 第八 本書ニ於ケル時代區分法

ベルトラン師ノ來草以來拾數年、人々ノ心ハ尚固ク封鎖セラレ、石地ノ種、路傍ノ種ノ如ク、到底發芽覺束ナ

## 第二章 時代區分

ク思ハレシガ、神ノ攝理、遂ニ御意ノ成ル時來レリ。即チ大正二年八月二十九日、熊本降臨教會ヨリ遣ハサレタル長老・米原馨兒師ノ傳道コソハ正シク之ナリ、之即チ草津ニ於ケル發芽ノ始メナリ、恐ラクハ天地開闢以來コノ山ノ人々ノ中ニ、眞ノ光ヲ仰グ機縁ヲ得タル者ハコノ時迄テ無カリシナルベシ。殊ニ下町ニ於テハ明治二十年迄ハ、其ノ地形ト四圍ノ情況ヨリ見レバ、前人未住ノ處女地ナリシナルベク、サレバ湯之澤起源ヨリ算スルモ、二十有年ノ間神ノ眞理ニ隱レテ、世ニ昭ラカナル能ハサリキ。我ガ教會ニトリテハコノ長キ時代ハ、實ニ大イナル準備ノ時代ナリシト云フヘシ。米原長老ノ來草、光鹽會ノ結成ハ實ニ我教會創立ノ原因ヲナス。故ニ本書ニテハ師來草ノ年、即チ大正二年ヲスタートトナシ、之ヨリ昭和六年迄二十ケ年ノ間ニ、教會ノ經驗シタル多クノ事實ニ就イテ、期別章別ヲ設ケテ觀察研究ニ便セントス。時代區分ハ人ニ依リ、又目的及標準ノ如何ニ依リテ異同アルヲ免レズ。本書ニ於テハ主トシテ年代區分法ニ依リ、一事實ノ發生ヨリ終末ニ到ル因果關係ヲ説カン事ヲ努メタリ。蓋シ年代區分ニノミ重點ヲ置ク時ハ各事件ニ終期ナク、斷片の年表トナリテ纏リタル概念ヲ得ル事難ク。件的區分ノミニ從フ時ハ發生事實相互間ノ、空間的關係ヲ逸セントスル處アリ。又一方一事實ノ發生スルヤ、年ト共ニ分岐複雑ヲ加ヘ、成長進展スルモノニ至リテハ、期別セル同一期內ニテ其ノ全部ヲ記述スル事能ハサレバ之ヲ數個ノ期中ニ含メタリ。例之婦人ホーム、男子ホームニ關スル記述ノ如シ。之ニ反シ一事實ニシテ發生ト結果ノ比較の短少ナルモノ、或ハ同一事實ニシテ發生後特種ノ變化ナク、單純ナル發達ヲナシタルモノ等ハ、數年及至拾數年ヲ數行ノ間ニ要約セルアリ、例之草津教友ニ關スル事、幼稚園ニ關スル記述等之ナリ。讀者幸ニ諒セラレン事ヲ乞フ。

以下本書ニテ分テ各期ニ就キ尙少シク述ベンニ、第一期、光鹽會時代、米原長老ノ來草ヨリ、我教會ノ創立迄、即チ大正二年ヨリ大正五年ニ至ル四ケ年間ナリ。全長老ノ來草ニ依ッテ結成セラレタル、光鹽會ナル基督教

## 第二章 時代區分

團體ノ活動ヲ、主要ナル特質トスルヲ以テ、光鹽會時代ノ名ヲ以テ呼バントス。又之ヲ降臨教會ノ傳道時代ト云フモ可ナルベシ、蓋シ熊本降臨教會ハ同病者ノコトトテ、草津ノタメニハ熱心ニ祈リ、且ツ常ニ草津ニアル會衆ヲ覺エテ、聖書、祈禱書ノ他傳道書類等ヲ送付シ、又屢々篤信ノ兄弟ヲ送リテ其ノ信仰ヲ勵マセリ、草津ヲ思フコト今モ尚娘教會ノ名ヲ以テ呼ブヲ以テモ知ルベシ。

更ニ又教會創立ノ基礎ヲ築キ上ゲタル時代ヲ以テ定礎時代ト云フモ相應シカラシ。キリスト教ニ對スル嫌惡ノ情全ク除去セラレタルニアラサルモ、文明ノ進歩ト共ニ人々ノ頭カ著シク世界的トナリ、識者ノ中ニハ進歩主義ヲ唱フル者アリ、一般宗教ニ對スル寛容ノ情生ジ、且ツ宿澤兄ノ如キ少壯氣銳ノ士、身ヲ挺シテ傳道ノ大任ヲ負ハントスル者輩出シタル時代ナリ。

第二期ハ教會創立ノ大業ヲ成就シタル時代ナルヲ以テ、創立時代ト命名セントス。大正五年ヨリ六年ニ至ルニ二ケ年間ナリ。一見微粒ノ如ク海ノモノトモ、山ノモノトモ判別セザルガ如キ事實ハ、將來發展ノ因ヲ藏シ、之等ハ悉ク此ノ短カキ間ニ、發芽ノ基地ヲ作りタル感ナクンバアラズ。

第三期ハ大正七年ヨリ十年ニ至ル四ケ年間ナリ、此ノ間ハ創立ノ後ヲ受ケ熱心ニ基礎ノ培養ニ力メタルモ、不幸ニシテ教會ノ指導者タル宿澤兄退草ノ事アリ、反對者ナル保守主義ノ人々ニ絶好ノ攻撃材料ヲ與ヘ、中心人物ヲ失ヒテ打擊ヲ蒙ルト共ニ傳道ノ一頓座ヲ來セリ。サレド偶々大正九年五月二十日ノ夜卷キ起サレタル大リバイバルハ、偉大ナル刺戟ヲ與ヘ、之ニ列席シタル四十有餘ノモノ一人トシテ感涙ニ咽バザル者ナク、ペンテコステノ往時ヲ追想シテ一年ヲ出デズシテ、全湯之澤ヲ基督教化スヘシトノ希望ヲ以テ教會シタルモノナリト云フ。依テ其ノ波及スル處頗ル大ニシテ、悔改メテ教會ニ來ルモノ甚ダ多カリキ。コノ特質ノ故ニリバイバル時代ト云ハントスルナリ。

第四期ハ大正十一年ヨリ十四年迄ノ四ケ年ニシテ、リバイバルニテ得タル信徒モ加ハリ、順調ナル發達ヲ遂ケタル時代ナリ。

次ハ大正十五年ヨリ昭和四年ニ至ル四ケ年ニシテ、教會ノ發展ト共ニ、附屬事業ノ大擴張時代ナリ。男子ホームアリ、婦人ホームアリ、夫婦ホームアリ、準ホームアリ、養兒院アリ、更ニ病院アリ、學校アリ。其ノ外觀ニ比シテ内容ノ充實整頓セルコト驚クベク、教會モ事業モ廣ク天下ニ其ノ名ヲ知ラル、ニ至レリ。

而シテ最後ノ第六期ヲ近代ト名附ケ、昭和五年以降現在ニ至ル迄ノ事實ヲ排列セントス。

蓋シ舊キハ去リ見ヨ常ニ新シク、時代ハ刻一刻ト前進シテ止マズ。昨日ノ出來事ハ今朝既ニ吾人ニトリテノ歴史ノ一頁トナリ、先月ノ一事實ハ吾人ニ新シキ經驗ト知識ヲ與フ。

サレバ更ニ命ヲ待チ時ニ及ンデ増補訂正ヲ行ヒ、愈々本書ヲ通シテ、先輩諸兄弟ノ努力奮闘ノ跡ヲ辿ルコトニヨリテ、主ノ榮光ヲ拝セント欲スルナリ。

サレバコレヨリ叙上ノ區分ニ從ヒ、章ヲ追フテ更ニ述ブル處アラントス。

## 第一期 光鹽會時代

### 第三章 光鹽會

#### 第九 長老米原馨兒師ノ來草

時ハ大正二年盛夏八月、神眞ニ善シト見給フ時ノ満チタルヤ、例之一粒ノ芥種ノ如ク、ヤガテ我湯之澤ノ歴史

ニ劃期的變化ヲ齎スベキ愛ノ教ヲ携ヘテ、勇敢ニ足ヲ當地ニ入レタル神父アリ、之熊本市黒髮町回春病院内降臨  
教會牧師、米原馨見長老其人ナリキ。

全院々主ハンナ・リデル師ハ嘗テ一病者ノ口ヲ通シテ、草津ニ多數ノ本病者蟬集スル部落アルヲ知り、明治二  
十四年早クモ當地ヲ視察シ、爾來常ニ草津ナル病者ノ群ヲ心ニ憶ヘ、其ノ亡ビ行ク靈魂ヲ如何ニモシテ、暗黒ト  
死ノ蔭ヨリ救ヒ、喜悅ノ音信ヲ傳ヘンモノヲト熱心ニ祈リツ、アリシガ、大正二年六月上旬偶々奇篤ナル英國婦  
人ハ、金百餘圓ヲリデル師ニ贈リ、病者間傳道ノ費用ニ當テラレン事ヲ乞ヘルヲ以テ、早速米原長老ト相談ノ上  
コレヲ用ヒテ草津傳道ニ着手スルノ決意ヲナシ、草津ナル病者慰問旁々、傳道ノ認可狀ヲマキム監督ヨリ受ケ、  
米原長老ハ大命ヲ拜受セル宰相ノ如キ心持ニテ出發ノ用意ヲナシ、旅裝ヲ整ヘ、主ニ在ル諸兄弟ニ送ラレテ熊本  
駅ヲ發シ、山河六百里、沓掛ヨリ汽車ヲ棄テ、馬背ニ跨リ、八月二十七日ノ夕刻未知ノ里、目指ス温泉ノ町ニ到  
着シ、先ツ上町山本旅館ニ投宿セリ。昭和六年五月六日附米原師書信ノ一節ニ曰ク「……貴地出張ニツキテハ  
タマスコ行ノパウロノ其ノ如ク、熊本縣内務部長ヨリ群馬縣内務部長ヘノ紹介狀ヲ携ヘタリ、サレド小生ハ一日  
モ速カニ貴地ニ乗り入り度ク存ジ、縣廳所在地ナル前橋ニモ立寄ラズ一路貴地ニ急ギタリ、到着シテ直チニ駐在  
巡查ニ紹介狀ヲ示シテ、來草ノ目的ヲ告ゲシニ巡查曰ク「ソレハオ止シナサイ、彼處ニ居ル者ハ博奕ハ打ツシ、  
喧嘩ハスルシ、著ニモ棒ニモカカラヌ奴等デ、私共ガ正服デ行ッテモ戸籍モ正直ニ明シマセンカラ……」、日頃  
ノ鬱憤ヲ初對面ノ小生ニ洩セシ次第ニ……トアリ、以ッテ當時ノ一端ヲ知ルベク、又遙カニ訪レ來リテ、愈  
々單身虎狼ノ群ニ入ラントスル師ノ胸中ヲ思フヘシ。

### 第三章 光鹽會

時ニ下町松村屋主先代加○小○治兄ハ、平素山本旅館ト懇意ノ出入ナレバ、此ノ日モ亦全館ニアリテ四方山ノ  
話等シケル程ニ、熊本ヨリ來草セル一牧師ガ下町病者ノタメニ演說會ヲ開催シタキ由ヲ聞キ、招カル、マ、ニ師

ト面會シ其ノ旨ヲ含ミテ、當時下町ノ一等旅館タリシ松村館ニ紹介シタルヲ以テ、松村館ハ一時間五十錢ノ席料ニテ、會場ノ提供ヲ諾セリ。

扱テ此ノ傳道會ノ模様ヲ少シ述ベンニ、未ダ全ク基督教ヲ知ラザル部落ノ事トテ、多クハ好奇心ニ驅ラレ「ヤソ」ノ坊主ノ説教ヨナトテ來會スルモノ百餘名、別館ノ三室ハ溢ルル程ノ盛況ナリキ。

米原師ハ靜カニ祈リテ徐<sup>また</sup>ロニ立チ、病者ニ對シテイト柔シク、先ツ「人間ノ價值」ト題シ、今人體ヲ化學的ニ分析スレバ、酸素・水素・窒素等ノ七十餘ノ元素ニ還元セラル、之ヲ時價ニ換算スレバ僅カ二十四圓九十五錢ニ過ギズ、サレバ人ハ決シテ肉體ヲ以テ尊シトナスニ非ズ、内奥ニ宿ル靈魂ノ高等作用ニ依リテ始メテ尊シ、サレバ肉ノ希望ヨリモ靈ノ甦生ヲ先ニセヨ……（高石兄）。更ニ亦數々ノ野次ヲ願ミズシテ放蕩息子ノ比喩ヲ引キ、病者ニナリタレバトテ、太ク短クナドト肉的ノ快樂ニ耽リ、淫蕩ノ生活ヲ送り野心ヲ滿ストモ、ソハ何レモ唯瞬間的ニシテ、靈魂ハ反ッテ欠乏ヲ感ジ、何物カソレ以上ノモノヲ求テ飢エ渴クモノナリ。サレバ滅亡ト墮落ニ落ち行ク我が靈魂ヲ顧ミ、全心全生ヲ盡シテ神ヘノ奉仕、神ヘノ服從ノミガ唯一最大ノ満足ヲ與フルモノナルコトヲ悟ルヘシト説カレタリ（ルカ五〇十一）（横溝兄）。

サレド當時一般ニ何等ノ基督教の予備智識ナカリシヲ以テ、師ノ説教ニ就キノ要領ヲ得タル者ハ少カリシガ如シト雖、唯此ノ時歌<sup>ときうた</sup>ハレタル福音聖歌「心ニ憂ヒアル者ハエスニ告ゲヨ云々」ニハ聽衆イタク心打タレテ涙グミシト云フ。

カクテ傳道説教會ノ第一日ハ予想ニ反シテ比較的平穩裡ニ、終リタレバ、師ハ成功ヲ確信シ感謝シ眠ニ入ラレタリ。

然ルニ其ノ翌日ニナリテ宿屋組合ニテハ至急相談致シタキ儀アリトテ組合員ノ集合ヲ求メ、此ノ演説會ノ是非

ヲ論評シ、殊ニ米原師ガ病者ヲ收容スル、熊本回春病院ヨリ派遣セラレタルト聞クヤ、師ヲ目シテ回春病院ノ客引ナラント疑ヒ、斯クテハ營業上ノ一大事ナリ、演説會ヲ繼續シテ浴客ニ熊本回春病院ノ存在ヲ知ラシムルハ不利ナリ、速カニ之ヲ止メヨ。ト、茲ニ相談一決シ、即チ松村館ヲシテ會場ノ提供ヲ拒絶セシム。愛ニ燃ユル米原師モ、館主ノ婉曲ナル拒絶ニ遭ヒテハ如何トモシ難ク、上町山本館ノ一室ニ空シク一日ヲ過シ、サテ明日ハ如何ニスヘキ「主ヨ我ヲ助ケ給ヘ」ト祈リ居タリ。

### 第十 光鹽會成立

サテ茲ニ柵○清○ト呼ブ人アリ、下町一三一一番地（今ノ宮○建○店ノ二階）ニ住ミ、賭博ヲ好ミ、幹部四名ヲ置キ、其ノ性狷介ニシテ時ニ人ヲ容レズト雖モ、仁俠ノ志アリ、且ツ湯之澤溫情團長美○咲○次○氏ニ愛セラレテ、其ノ下ニ演藝部長タリ、ソモ／＼當時ノ湯之澤ニハ老幼婦女ニ至ルマデ賭博ニ狂奔シ、花牌ヲ弄シ、且ツ義太夫、浪花節、盆踊等盛ニ流行シ、之等ノ興行物ハ皆大小トナク溫情團ノ許可ヲ要シタルコトナレバ、團長ノ參謀格ニシテ且ツ其ノ許否權ヲ握ル演藝部長ノ職ハ、頗ル重ク威勢四隣ニ振ヘリ。

### 第三章 光鹽會

八月二十八日ノ夜柵原兄モ二三ノ友人ト共ニ、松村館別館ニ於ケル傳道說教會ニ出席シ、熱心ニ之ヲ聽聞シ居タルモノナリシガ、突如宿屋組合ノタメニ、其ノ會場ヲ拒絶セラレタリト聞キ、持前ノ俠氣ヲ出シ、米原師ガ山河數百里ヲ遠シトセズ、我々ノタメニ來草セラレタル所以ノモノハ、決シテ他意アルナシ、唯我等ガ信仰ノ道ニ入ラン事ヲ勸メラレシノミ、然ルヲ何トテ之ヲ急ニ止ムルヤ、唯一回ノ聽聞ニテハ師ノ所謂キリスト教ノ良否ダニ判別シ難シ、我等ヲシテ今少シク師ノ教ヲ聽聞セシメヨ、然ル上良ケレバ之ヲ採リ、害アレバ之ヲ捨ツルヲ以テ物ノ道理トナサン、我此ノ事ヲ高石君ニ諮ラント、直チニ梯子段ヲ降りテ、其ノ下隣リニ住メル高○千○兄

ノ宅ヲ訪レタリ。高石兄ハ北國ノ某多額納稅者ノ令息ニシテ、當時金ノアルニ任カセテ夫婦乍ラ誘ハル、マ、ニ賭博ヲナシ、梶原兄トハ昵近ノ間柄ナリシナリ。

サテ兩人相談スルコト寸時、コレ宿屋組合ノ職業的偏見ニ依ル横暴ナリ「我等ハ之ヲ更ニ聽聞セン、然シテ明カニ其良否ヲ定メン」ト相談一決、梶原兄ハ早速歸リテ其家ナル若者ヲ上町山本館ニ遣シ、コノ由ヲ米原長老ニ告グ、來宅ヲ求メタリ。米原長老ハ大イニ打喜ビ、即座ニ其申込ヲ快諾シ、梶原兄ノ宅ヲ訪ネラル、集ル會衆十三名。長老ハ一昨日ノ傳道會ト異リ、純白ノサーブリスヲ着用シ、鮮緑ノストールヲ袈裟ニカケ、イト嚴カニ讚美歌ヲ歌ヒ、禮拜ヲ獻ゲ、説教ヲナセリ。即チ當日ハ日曜日ナリシナリ。サレド梶原兄ヲ初メ未ダ全クキリスト教ノ如何ヲ知ラズ、況ヤ日曜日ノ如何ナルモノカヲ辨ジ得ベケンヤ、一同ハタダ嚴カナル禮拜ニ謹ミテ連ナリタリ。サテ説教ヲ終リテ後、會衆ニ質問ヲ許サル、會衆中ヨリ種々ノ質問アリ、全ク座談的ノ打解ケタル會合ナリキ。長老ハ懇切ニ解答ヲ與フ、「先生ハ如何ニシテキリスト教ヲ信ズルニ至リシヤ」、「御身ハ眞實ニ神ヲ信ズルヤ」等ノ質問ニ對シテハ、自己ノ入信ノ動機ヨリ今ニ至ル迄ノ信仰生活ノ恩恵ニ就キ證詞セラレ、更ニ亦、「如何ニシテ神ノ存在ヲ知ルヤ」等ノ問ニ對シテハ、例之此處ニテ「ブルアリ、我ソノ造リ主アルヲ信ズ。此處ニ家アリ、我コノ造リ主アルヲ信ズ。ココニ宇宙アリ、我ソノ造リ主アルヲ信ズ。宇宙ノ造リ主、即チ我ガ信ズル父ナル神ナリト、答ヘラレタリキ。斯クテ米原長老ハ、コノ小サキ會衆ガ熱心ニキリスト教ヲ求メツ、アルヲ看取シ、一同ニ向ヒ、キリスト教研究ノ團體ヲ組織シテハ如何ト提案セラレタリ。當時湯之澤ハ風俗紊亂シ、賭博甚ダ流行シタルハ既述ノ如ク、梶原兄ノ如キモ實ハ其ノ當時ノ小サキ一方ノ親分ナリキ。而シテ佛教派ニ於テハ見〇信〇氏等コレヲ牛耳リ、全部落ヲ佛教化セント意氣込ミ居タリシガ、宗教的立場ヨリ賭博ニ反對シ、之ガ根絶ヲ企畫シ居タル際ナレバ、自然佛教派ト賭博團ト相反目シ、互ニ事ヲ構ヘタリ、サレバコノ感情モ手傳ヒ、佛教ニ對抗ス

ルニハ、コノ基督教ヲ以テスルニ若カズトナシ、又一方、殊ニ遊惰ニ厭怠ヲ生ジタル心ニ、聖書並ニ讚美歌ヲ歌ヒ、心ノ慰メヲ得ル事ヲ欲シ、一同長老ノ提案ニ賛成ノ意ヲ表ハセリト云フ。

サテ長老ハ筆硯ヲ命ジ、會名ニ相應ハシキ二三ノ名稱ヲ墨書シテコレヲ提示シタリ。素ヨリ記サレタル文字ノ適否ヲ知ラザリシカド、最後ニ「光鹽會」ノ字ヲ見テ、光ト云ヒ、鹽ト云ヒ、望マシキ名稱ナルヲ告ゲタレバ、更ニ長老ハ聖書ヲトリ「コハ世ノ光、地ノ鹽ノ意ナリ」ト、ソノ説明ヲセラレ、茲ニ一同喜ビテ其ノ會名ヲ、光鹽會ト名ヅクル事ニ一決セリ。

茲ニ們○晴○兄ハ愈々持前ノ俠氣ヲ出シ、ヨシ佛教徒ニ迫害セラル、共、宿屋組合ニ反對セラル、共、我方腕ニカケテコレヲヤリ通スベシト巨腕ヲタ、イテソノ意氣ヲ示シ、早速會ノ看板ヲ掲ゲ、所在ヲ明カニスベシトテ高○千○兄ニハカル全兄ハ書家モ及バヌ達筆ヲ振ツテ「光鹽會」ノ三字ヲ書キシルシ、吉○浩○兄ハソノ上部ニ聖歌ノ裏ニ標シアリシ十字架ノ記號ヲ手本ニシテ之ヲ美シク描キ出シ、居室ニ階ノ通路ニ面シタル處ニ、イト麗々シク掲ゲタリ。

光鹽會ノ會員タル會衆ハ、們○晴○兄、高○千○兄、吉○浩○兄、松○掬○兄夫妻、杉○淨兄等計九名ナリキ。カクテ長老ハ予定ノ日モ盡キタレバ、不安ノ中ニモ後事ヲ們原兄ニ托シテ、ココニ歸熊ノ途ニ就ケリ。們原、高石兩兄ハ肩ニ重荷ヲカケラレタル心地シテ、歸リ行ク長老ノ姿ヲ見ユル限り見送レリ。

サテ長老ノ草津出發ニ關聯シテ一言述ブベキ事アリ。ソハ師ガ愈々熊本ニ向ツテ歸途ニ就カントスルニ當リ、輕井澤迄ノ駄馬賃二圓四十錢ヲ節シテ、之ヲ寄附シタル事ナリ。師ハ區長タリシ淺○勝○郎氏ヲ訪ネテ曰ク「此金ハ些少ナレド、我ガ輕井澤迄ノ馬賃ナリ、余ハ未ダ幸ニシテ脚ガ違者ナレバ徒歩ニテ行クヘシ、願クハ此金ヲ何ナリ共、區ノため、有意義ニ使用セラレタシ」ト。

區長喜ビテ之ヲ受ケ、後最モ貧シキ病者八名ヲ選ビテ、金三十錢宛ヲ贈レリ、當時ノ三十錢ハ一日ノ勞働賃金以上ニシテ、之ヲ受ケタルモノハ、何レモ其ノ厚情ニ感泣セリ、蓋シ如斯自己犠牲ノ行爲ハ、下町人ノ一般ニ理解シ得ザリシモノノ如ク、或者ハ乘リ得ヘキ馬ニモ乘ラデ險路ヲ徒歩ニテ行クノ愚ヲ嗤ヒ、或ハ其ノ美譽ニ深く感ジ「ヤソハ實ニ偉イモノジャ」ト懇<sup>オシ</sup>ロニ語り合ヘリトイフ（コハ今上町ニ住ム當時ノ湯之澤區長淺○勝○郎氏ノ談ナリ）。

サテ熊本ニ於テハ長老ノ出發以來、リデル女史ヲ初メ主ニ在ル兄姉心ヲ合セ、傳道ノタメニ祈リ居タル事ナレバ、歸熊セル長老ヲ圍ミ、遠征ノ勞空シカラザリシヲイタク喜ビ、ヒタスラニ主ノ憐ミト恩惠ニ感謝セリ。今熊本回春病院ノ最モ古キ信者ノ談ニヨレバ、抑々長老ガリデル師ノ意ヲ受ケテ、遙カ隔タル草津ノ傳道ニ關スル具體案ヲ立テ、之ヲ決行スルノ意ヲ明カニセシハ、大正二年六月初旬ノ事ニシテ、其ノ相談相手トシテ白羽ノ矢ヲ立テタルハ、回春病院内通稱常藏兄ト呼バル、熱心ナル信者ナリキ。

全兄ハコノ相談ヲ受クルヤ、人ヲ滿サント欲セバ先ヅ自ラ滿サレザルベカラズ、我先ヅ聖靈ニ依ル被潔ヲ受ケント、連日單身山ニ登リテ斷食シ、熱禱ヲ捧ゲタリ。然ルヲ幾日モ經ザルニ急激ナル胃腸病ニ胃サレ、同年六月十六日卅七歳ヲ最後トシテ勝利ノ永眠ヲナセリ。病者ナル全兄ノ心ノ平安ト喜悅溢ル、永眠ハイタク米原師ヲ感動セシメ、愈々病者傳道ノ重キ使命ヲ感ゼラレシ由、師ガ後當地ニ配付セラレタル「苦痛ノ福音」ト題スルトラクトノ中ニ此ノ事記載シアリ。

コノトラクトハ長老ガ特ニ病者傳道ノタメ編セラレシモノニシテ全十六頁、「苦痛ヲ苦痛トスル勿レ、精神的肉體的苦痛モ亦神ヨリ來ル、救ハレテ神ヲ信ズル時、初メテ世ノ人ニマサリテ苦痛ノ彌益セルハ、祝福モ亦彌益スノ妙諦ヲ悟リ、喜ビニ溢ル、ベシ云々」トアリ。

師ハ島根縣益田町ノ生レ、明治十八年洗禮ヲ受ケテ神ノ子トナリ、大阪三一神學校卒業後傳道牧會ニ從事セラ  
ル、事三十餘年、退職後ハ鹿兒島ニ中學校教師トシテ、専ラ青年子弟ノ教養ト薰陶ニ盡瘁セラル、而シテ回春  
病院其ノ他ニ於テ、病者ノタメニ慰問傳道ニ從事セラル、事前後二十年、師ニ依リテ慰メラレ、平安ノ眠ニ就ケ  
ル者其ノ數ヲ知ラズ。昭和六年ヨリ鹿兒島市ノ探眞館トテ文書傳道ト、基督教圖書館トヲ兼ヌル處ニ、老イテ益  
々盛ンニ主ノ御用ヲ果サレツ、アリ。

勇敢ナル我米原師ハ昭和六年五月六日附ノ書信中ニ當時ヲ追懷シ、語リテ曰ク「貴地傳道ノ事汗顔ノ至リニ存  
候、不徳薄信ノ身ヲ以テ主ノ祭壇ニ捧ゲタルヲ主用ヒ給ヒシノミニテ、考フレバ考フル程、吹聴致スヘキモノハ  
消エ失セ申候、小生ハ唯主ノ御憐ミト、如何ナル器モ主ニ獻ゲナバ主ハ奇シキカモテ、昔モ今モ必ズ用ヒ給フ事  
ヲ證詞致スノミニテ十分ニ御座候、其後幾度カ御慰問致シ度ク思ヒシモ、主ノ御許シヲ得ズ、何卒御加禱願上候  
……」トアリ。

扱テ米原長老五晝夜ノ健闘ニ依ツテ、呱呱ノ聲ヲ舉ゲタル光鹽會ニ於テハ、長老ノ歸熊後宅廻リ集會ヲナシタ  
ルモ、寧<sup>レ</sup>口頗ル不振ナリキ。又集會専用ノ一室ヲ與ヘラレン事ヲ欲シ、書記高石兄ノ手ヲ經テ、小サキ一室ヲ借  
リ、家賃ト冬季煖爐用新炭代ノ補助ヲリデル師宛願ヒ出デタルモ、返信ヲ得ズ、萬事意ノ如クナラザレバ輕キ失  
望ヲサエ覺ヘ始メタリ。數年前ニコノ事ヲ梶原兄或人ニ語リテ曰ク「借用ノ室ハ我部屋ナリ、使用ノ薪炭ハ我薪  
炭ナリ、サレバ若シリデル女史ヨリ送金アラバ、我々悉ク之ヲ受ケ、我生活ノ助ケニセント考ヘ居タリ、ゲニ愚  
ナリキ。神ハ不純ノ願ヒヲ聞キ給ハザリシナリ」ト。

彼等ハ未ダクリスマスノ如何ナルモノナルヤヲ知ラザル事ナレバ、全年十二月贈ラレタル贈物ト、添付セル書  
簡ニ依リテ、始メテソノ祝フベキイワレヲ知レリ。即チ聖書、聖歌、祈禱書類各十數部送付シ來リ、殊ニ薄眼ノ

タメトテ、厚サ三寸巾一尺三寸位ノ大聖書二冊送付シ來レリ、此ノ大聖書ハ當時ノ湯之澤ノ噂トナリ、世ニモ稀ナル大書籍ナリトテ、ワザ／＼見ニ來ル者モアリシトイフ。サレド是等聖書・祈禱書等ノ意味ガ、求道者タル彼等ニ解ル筈ナク、預言者・エホバ・處女懐胎・三位一體等、疑問百出シ、其ノ都度書面ヲ以テ、之ガ解答ヲ熊本ヨリ待ツ有様ナリキ。而シテイサ、カ興味ヲ覺ヘタル彼等ハ尚不徹底ヲ感ズルノ餘リ、手紙ニテハモトカシク思ヒテヤ解雪交通ノ便ヲ得バ、聖書ニ精通セル兄弟ヲ草津ノタメニ遣ハサレン事ヲ求メ、茲ニ明ケテ大正三年八月、村岡・小池兩兄選バレテ上草ノ事トハナリタルナリ。(此ノ項ハ主トシテ柵○晴○兄、高○千○兄、杉○淨兄、熊本因○多○兄、横○武○兄、米原神父等ノ談話又ハ書簡ニヨル)。

第十一 村岡・小池兩兄ノ來草

草津ナル傳道地會衆ノ實地指導ハ、篤信ナル同病者ノ當ルコソ宜シケレト、米原師ハリデル師ト合議ノ上、回春病院内降臨教會委員村岡○○兄、小池○○兄ノ兩人ヲ選ビ、大正三年八月、草津ノタメニトテ派遣セラレタリ。而シテ全年八月二十一日熊本出發、全二十三日草津着ノ兩兄ハ先ヅ光鹽會ヲ訪レ、兩師ノ心カラナル傳言ヲ傳ヘ津久井館ニ投宿シテ傳道ヲナスコトナレリ。而シテ其ノ第一回集會ヲ柵○晴○兄宅ニ開ク、來會者十數名、今ヤ何レモ熱心ナル求道者ナリ。而シテ毎週、日・水・金ヲ定時集會日ト定メ、多ク其ノ宿屋タル津久井館ニ開ク此等ノ集會ニ於テハ、聖歌・主禱・自由祈禱・證詞・感謝・祝禱等、總ベテ母教會即チ降臨教會ニテ行ハルル形式ヲ以テ行ヒタリ。會衆中ニギリシヤ派正教會ノ信徒タル大○鹿○郎兄アリ。大阪組合教會ノ信徒タリシ、杉○淨兄アリ。大阪家族教會信徒タリシ神○卯○郎兄アリ、更ニ二葉館ノ客ニシテ布哇ホノル、聖公會ノ信者タル宿○薰ト云フ青年ノ參加アリ、之等主ニ在ル先輩ノ證詞、感想及ビ熱烈ナル祈禱ニ依リテ、未信者ナル會衆ハ背後ニ

動クイト大イナルモノノカト、異ナル彼方ノ世界ヲ想見セシメラレテ、何レモ心ヲキリスト教ニ向ケ初メタリ。  
 小池・村岡兩兄共定時集會日以外ハ、光鹽會員ノ案内ニテ個人的訪問ヲナシ、交情ヲ溫メ、徐々ニ福音ヲ語ルヲ常トセリ、ソコハ同病者ノ事トテ一見初對面又百年ノ知己ノ如ク、而モ賭博ニ血眼トナリタル草津人士ト異リ唯何處トハナク高尚ニシテ、而モ溫容親シミ易キ人格ノ人ト相接シ、相語りテ、我カ心ノ醜キヲ悟リ、ゲニ彼モ病者、我モ病者タリ、然ルニ何トテカク隔リアルヤト思ヘリ、彼等ハ此處ニモ主ノ榮光ヲ見タリ。

小池・村岡兩兄ノ來草ニ就キテ更ニ特筆スベキ事アリ、ソハ過去約一ケ年、他ノ助ケナクシテハ容易ニ成人スベクモ思ハレザリシ、我ガ光鹽會ニ強キ力ヲ注ギ、ソノ基礎ヲ固メ、先ヅ會員一致團結以テ外部ニ積極的活動ヲ開始セシメタル事ナリ。コレヨリ先、津久井館ニアリシ神○卯○郎兄ハ此地ニ主ノ教會一ツモ存在セザルヲ嘆キ其ノ所屬ナル大阪家族教會ニ指導者ノ派遣方ヲ願ヒ出タルガ故ニ、全教會ノ傳道師福田荒太郎氏ハ、全年九月上旬ヲ以テ着草セリ。神山兄ハ既ニ光鹽會員トシテ、共ニ集會ヲ持チ居ル事ナレバ、村岡・小池ノ兩兄ヲ初メ會員一同大イニ喜ビテ、遠來ノ師ヲ迎へ、之ヲ篤<sup>ホウ</sup>ヒ、種々協議ノ上、光鹽會主催ニテ篠田旅館ヲ借受ケテ、基督教講演會ヲ開催シタル事實アリ。

カタガタ部落ハ大イニ基督教ノ精神ニ燃ヘ來リタレバ我光鹽會ニ於テハ、會ノ擴張ヲ計ルハ此ノ時ニアリトシ九月三日ヲ期シ新入會員ヲ募集シ、且ツ光鹽會結成一周年記念ヲ兼ネ、會員總會ヲ兼ネテ大親睦會ヲ、兩兄ノ宿ナル津久井館ニ於テ催スコト、ナレリ。俄然會員數一躍三十六名ニ達ス。今其ノ總會ノ模様ヲ少シク述ベンニ、會場ニ充テタル津久井館階下二間ヲ取拂ヒ、紅白ノ幔幕ヲ張り廻シテ西側正面ニテーブルヲ置キ、右側ヲ役員席左側ヲ來賓席、中央ヲ會員席ト定メ一糸亂レヌ準備振リナリ、ソノプログラムヲ見ンニ、初メニ讚美歌、次ニ祈禱、聖書朗讀、開會之辭、祝辭、随意感謝祈禱、讚美歌、閉會祈禱、茶菓饗應、餘興トアリ。(當日ノ寫真ハ相

馬兄、高梨兄ガ所持ス。

而シテ之ヲノプログラムヲ作り、會場萬端ノ世話ヲヤキタルハ、主トシテ宿○薰兄ニシテ、前記熊本ヨリ遣ハサレタル村岡○兄、殊ニ司會者ニ選バレタル小池○兄ヲ先頭トシ、名古屋ニテ受洗セルギリシヤ正教會信者大○鹿○郎兄（板○兄本名）、大阪ニテ受洗セル元島ノ内教會信者杉○淨兄、前記布哇聖公會ニテ受洗シ、教會委員タリシ宿○薰兄、大阪ニテ受洗シ日基家族教會信者神○卯○郎兄、内村鑑三師ニ私淑シ最モ熱心ナル求道者タリシ相○鎰○兄、同ジク熱心党ノ高○千○兄等皆一致協力シテ事ニ當リシカバ和氣靄々裡ニ一同ニ對シテ深キ感銘ヲ與ヘタリ、此時代ノ風潮トシテ、今日ノ如ク教派所屬ノ如何ノ如キハ少シモ顧慮スル處ニアラズ、唯主キリストニ結バレタル事ヲ以テ唯一ノ條件トシ、全ク一ツ心トナリ、目的ノタメニハ己ヲ空ウシテカカリタルモノナリ。

### 第三章 光鹽會

サテ一言申遅レタリシガ、親睦會ニ入ルニ先ダチ役員選舉ノコトアリ、初メテノ選舉ノ事ナレバ多クノ興味ト期待ヲ以テ開票ヲ待テリ、而シテソノ結果、會長ニ高○千○兄、副會長ニ宿○薰兄當選セリ。蓋シ宿澤兄ハ既ニ布哇ニ於テ洗禮及ビ接手ヲ受ケ、且ツ教會委員ヲシタル程ナレバ、キリスト教的教養會員中頭角ヲ抜き、且ツ聖書、教義等ニモ精通シタリシガ、如何ニセン未ダ來草後僅々四ヶ月ニシテ、交遊淺ク、知己友人多カラズ、之ニ反シ高石兄ハ既ニ土着スル事數年、金アリ、學問アリ、人望アリ、會ヲ統率スルニ最モ相應シキ人物ト思ハレタル人ナレバ、兩者ノ當選ハ一般ニ好評ヲ得タリトイフ。幹事ニハ大○鹿○郎兄、相○鎰○兄選任セラル。次ニ會則ノ制定ニ移リ、會員ハキリスト教ヲ嚴守スルコト、互ニ一致協同會ノ發展ヲ圖リ、神ノタメニ善キ業ヲナスコト等ヲ決シ、又會員ハ一ヶ月金三錢也ヲ會費トシテ醜金スル事トナリ、會計係ニ杉○淨兄、松○菊○兄選任セラレタリ。此ノ會ハ實ニ將來草津ノキリスト教ヲ支フベキ運命ヲ有スル人々ノ名ヲソノ會員名簿ニ收ムルノ光榮

ヲ擔ヒタリ、即チ會員中ニハ前記ノ如ク高石兄、宿澤兄、横溝兄、松本兄、相馬兄、管○丈○兄、板○松○郎兄勝○男兄、吉○浩○兄、梶○晴○兄、淺○賢○兄等、當時湯之澤思想界ノ先端ニ立ツ少壯氣鋭ノ人士ヲ網羅セリ。蓋シ世ハ明治ノ四十有餘年ヲ經テ大正ノ御代ナリ。切支丹宗門禁制ノ事ハ既ニ夢ノ如ク過ギ、今ヤ西歐文明滔々トシテ入り來リ、學問、宗教、美術、工藝皆之ニ師事ス、カクテキリスト教ハ次第ニ有識者間ニ理解セラレ、又信ゼラレ、新渡戸稻造、海老名彈正、島田三郎、内村鑑三等ノ諸先生ノ如キ、信者ナル思想家、及至學者政治家等ヨリ受クル印象ニ依リ、世人ハ一種ノ憧憬ヲ以テキリスト教ニ臨ミタリケレバ、我草津ノ人士モ亦、舊キハ過ギ行キ新シクナラザルヲ得ザリシナリ。

扱テ我光鹽會ノ陣容ハ整ヒタリ、新タニ衆望ヲ負ヒテ立テル新幹部ガ、如何ナル秘策ヲ廻ラシテ會員ノ結束ヲ愈々鞏固ニシ、自ラソノ主義主張ヲ貫キ、更ニ新シク同志ヲ加ヘントスルカハ、實ニ湯之澤人士ノ注目スル所ナリキ。ゲニ彼等ハ時勢ヲ見ルニ明敏ナリ、演說會ヲ開キ、之ヲ通シテ大イニ部落民ニ訴フル所アラントセリ。

蓋シ衆人ノ前ニ立チテ演說ヲ爲ス事ハ、自由民權ノ思想ト共ニ我ガ國ニ渡來シタル、最モ新シキ事ニシテ、國會開設以來殊ニ其ノ風ノ我ガ國ノ津々浦々ニ至ル迄及ベリ、我ガ湯之澤ニ於テモ時折演說會開カレ、何レノ宿屋ニモ同客ヲ相手ニ一世ノ政治家ヲ氣取りテ、雄辯ヲ眞似、得意滿面タル自稱代議士ヲ有スルコトナレバ、此ノ計畫ハ果シテ大イナル成功ヲ收ムル事ヲ得タリ。

張出サレタル「ピラ」ヲ見ルニ「光鹽會主催ノ大演說會」「飛入勝手」「來聽大歡迎」トアリ、第一回ノ會場ハ角屋ナリキ。

羅列セラレタル演題ノ斬新ナルモノヲ擧グレバ「キリスト教ヲ論ズ」「婦人問題」「我輩ハ叢虫デアル」「コノ病ヲ如何ニセン」等ニテ、來集者定刻既ニ堂ニ溢ル、ノ盛況ナリキ。

辯士ハ何レモ光鹽會ノ新進ナリ、加フルニ涼風館主高田儔氏、及ビ其ノ館ノ御客等二三ノ飛入りモアリ、少シク反對ノ口吻ヲ洩ラス者モアリ、サレドコハ聽衆ノ同情ヲヒカザリキ。然シテ多クノ辯士ノ結論ハ期セズシテ速カニキリスト教ヲ信ゼヨトナリ。而モ説教ノ如クセズ、ワザトラシクセズ、實ニ良ク出來タリトハ當時ノ幹事タリシ相馬兄ノ述懐スル處ナリ。博徒中ノ暴君トシテ知ラレタル勝兄ガ感極ツテ「サウダ!!!人間ハ一寸先ハ闇ダ!!此ノ世バカリデハイケネエ」ト絶叫シタルハ此ノ時ナリキ。辯士ノ交代毎ニ歌ハル、讚美歌ノ妙ナルリズムト見エザル力ニ又心ヲ揺リ動カサレタリト、池○ミ○姉妹ハ語レリ。就中最モ聽衆ニ深キ印象ヲ興ヘタルモノハ「聖書ノ權威」ト題スル村岡兄ノ長廣舌ト「我方入信ノ動機」ト題スル小池兄ノ涙多キ演説ナリキ。數度ニ亘ル此ノ演説會ノ催ニ依リテ、高石會長ヲ初メ勝兄ノ如キ有數ノ博徒ガ、カク其心ヲ不思議ナル光ヲ以テ照サレ、全ク別人ノ如クナリシヲ見テ、イタク驚キ求道心ヲ起セルモノ數名アリキ。

カカル有様ニテ、村岡、小池ノ兩兄モ遙々來草ノ甲斐アリシト喜ビ合ヒシ折柄、カノ歐州大戦勃發シ、内外多事トナリ、兩人ハ熊本ヨリ「スグカヘレ」ノ招電ニ接シタルヲ以テ、萬事ヲ主ノ御手ニ托シテ、別レヲ惜シミツ、歸熊ノ途ニ就ケリ。

村○三○兄ハ大阪ノ人、中學校ヲ出デ主ノ召命ヲ感ジ、メソジスト派ノ神學校ニ入學シタルニ不幸在學中發病シ、同派ニテ有名ナル川辺眞吉師ノ紹介ニテ回春病院ニ入院シタル人ナリ。性質溫順ニシテ眞面目ナレバ、衆望ヲ負ヒテ教會委員ニ當選シ、日曜學校ノ教師ヲ兼ネ、教會信徒中ノ有力者タリ。證詞、感想、演説ニ秀デタル事ハ村○三○ト云ハズシテ、「村岡シヤベ郎サン」ト綽名サレシニテモ知ルヘシ。大正十三年頃美ハシキ勝利ノ永眠ヲナセリ。

小○金○兄ハ宇都宮ノ生レ、日本中ヲ無錢旅行シタル程ノ剛ノ者ナリ。發病シテヨリ一時悲觀シ、前橋縣廳前

辺ニテ利根川ニ投身シタル事モアリシガ、救ハレテ神ノ子トナルニ及ビ、熱心ナル信者トナリ教會委員トシテモ頗ルヨキ働キヲナセリ、大正四年岸名兄ト共ニ再ビ來草シタル事ハ、後ニ項ヲ改メテ説クベシ。全兄ハ、其ノ後幾年ナラズシテ失明シタルモ、今尚健在ナリ（昭和六年三月ノ來信ニヨル）。

扱テ此ノ前ノ年、自ラ米原長老ヲ自宅ニ招キテ集會ヲ開キ、光鹽會ノ創立ヲ可能ナラシメタル人ノ其後ハ如何。蓋シ們○清○兄ガ會員總會ニ當リテ、役員ノ一人タルベキコトハ、本人ハ勿論、他ニモ期待スル者ナキニ非ザリシモ、舊來ノ情習惡癖一朝一夕ニシテ改ムル能ハザルハ吾人ノ常ニ經驗スル所、全兄モ亦、光鹽會員タルニ不拘尚喫煙、飲酒酩酊屢々ニシテ、カノ大聖書ノ上ニ花牌ヲ陳ベテ賭博ヲナシ、或ハ無鑑札ニテ狩獵ヲナシ警察ニ喚出サレ處罰セラル、等ノ事アリシタメ、信仰團體ノ指導者トシテ相應シカラズトノ論ヲナス者アリテ、遂ニ役員タルノ得票ヲ集ムル能ハザリシモノナリ。サレド兄ニトリテハ自分ガ努力シテ創メタ會ト云フ意識強ク自己ノ行爲ニ就テノ省察ヲ欠キタレバ役員ニモレタルコトヲ頗ル心外ノ事トナシ爲メニ悶々ノ情ヤル瀬ナク遂ニ「感ズル處アリ」トテ光鹽會ノ脱會ヲ申出タリ。サレドコノ申出ハ友人ノ慰留ニ依リテ思止リタルモ、コノ事アリテヨリ數年ノ間、光鹽會ヨリモ溫情團ヲ愛シ其ノ方ニ主力ヲ注ギタリ、サレド幾年ナラズシテ又其ノ信仰ヲ復興シ有數ノ篤信者トナリ、殊ニ聖書ニ精通スル事教會隨一ト稱セラル、ニ至リシ事ハ、衆人ノ良ク知ル處ナリ。

（本項ハ主トシテ高○千○兄、杉○淨兄、相○鎔○兄、池○ミ○姉、小○金○兄等ノ談話ニヨル）

## 第十二 光鹽婦人會

次ニ説カントスルハ村岡、小池兩兄ノ來草ニ依リテ、前述ノ如キ積極的活動ヲ開始セルキリスト教運動ガ、湯之澤ノ女性ニ對シテ、如何ナル影響ヲ與ヘタルカノ問題ナリ。

### 第三章 光鹽會

蓋シ湯之澤ト雖モ其ノ人口ノ約半數ハ女性ナリ、サレバ女性ノ向背ノ如何ニ依ツテハ、不知不識ノ中ニ大イナル傳道ノ助トナル事、疑ヲ容レザルナリ。我下町ガ明治三十年代ヨリ、四十年代ニカケテ一般風紀紊亂シ、賭博流行シ、收拾スベカラザル狀態ニアリシコトハ、屢々述ベタルガ如シ。而シテ一度病患ヲ負ツテ此ノ里ニ入ル女性ヲ見ルニ、初メノ程ハ心淋シク、故郷ノ空ノ懐カシクシラレ居レド、此處ニ多數ノ同類ヲ發見シ、近キヨリ速キニ交遊スル間ニ、何時トハナシニ同宿ノモノ、近隣ノモノニ誘ハレ惡シキ遊ビヲ覺エ、一步一步墮落ノ淵ニ落チ行キ、見モツカヌ莫逆ノ女トナリ終ル者、甚ダ少カラザリキ。其處ニハ一ノ保護機關ナク、一人ノ指導者ナク父母ノ手ヲ離レタル子弟ガ、人トシテノ進路ヲ過マルモ亦當然ノ事ナリシト云フベシ。

茲ニ當時ノ一端ヲ窺フベキ一挿話アリ。或ル雪ノ日ノ眞晝、某旅館ノ帳場ニ於テ五、六名ノ女達相集リテ、盛ンニ賭博ニ夢中ニナリ、高々ニ勝負ヲ争ヒ居タリ、折柄巡邏中ノ警官覩見スレバ女ダテラニ此ノ仕末ナレバ急ギ戸ヲ押開キ「コノアマッチョ、又、何ヲシテヨルツ」ト睨ミツケタリ、然ルニ何ノ懼ル、色モ無ク「マア旦那、ソシナ六ケ敷イ顔ヲセズト中へオハイナサレ」ト答ヘタリトゾ。勿論查公トテモ、コノ女達ヲ如何トモナシ能ハザリシナリ。又友ナル病者死亡シ、最後ノ通夜セントテ數名ノモノ集リシニ、其ノ座直チニ賭博場トナリテ、死體ナドハノケモノニテ丁ヨ、半ヨト、夜ノ明ルマデ遊ビ明シタリトカ。此ノ家ニハ爐辺ニ胡坐ヲカキ、長煙草ヲクワヘタル女アルカト見レバ隣リニハシタカ酒ニ酔ヒテ啖呵ヲ切ル女房アリ。當時結婚ハ極メテ簡單ニシテ、一夜ダケノ夫婦モ亦少カラザリキトイフ。利那主義、自由恋愛等ト云ヘバ、或ハ美ハシク考フルモノモアルベシサレド實ハ動物ニ近キ生活ナリキ。

結婚ノ簡單ナル如ク、離婚モ又簡單ニシテ、嫌ニナレバ何時ニテモ放棄シテ顧ミズ、片方病症増進セル場合ハ片方ハ之ヲ棄テ、他人ノ如キ無情ナル事、屢々ナリキ。

全ク御都合主義、便利主義ニシテ、互ニ更ニ相手ヲ得テ恬然タリ、或ル女ノ如キハ六人ノ夫ヲモチタリト、之ヲ自慢ニセリトイフ。サレバ風俗紊亂ヨリ女ヲ中心トセル刃傷沙汰乃至喧嘩口論モ決シテ少シトセズ、女子ノ貞操觀念等ハ藥ニシタクモ無カリシ時代ナリ。

光鹽會ハ實ニカカル時代ニ生レ、其ノ教ヘハ、カカル雰圍氣ノ中ニ説カレタリ。而シテソノ結果ハ如何。

愛ノ宗教ノ教フル嚴格ナル一夫一婦主義ト云ヒ、離婚ノ絶對不認ト云ヒ、從來ノ全ク放肆ナル生活ノ反動トシテ、大賛成ヲ得タリ。即チ如斯鐵則ニ依ツテ、現在ノ如ク夫アルモ安心ナク、夫ナキモ安心ナキ状態ヲ脱レント欲シタル亦極メテ當然ノ事ナルベシ。

村岡。小池兩兄等或家ニテ此ノ問題ヲ説イテ曰ク「ソレ欲スルモノハ神ニ依リテ結バレ、一度結バレタルモノハ借老同穴タルベシ、生活ニ困難ヲ生ジナバ愈々慰メテ共ニ苦シミ、病症重リテ起居不自由トナラバ、愈々愛スベキナリ、相愛スル者ノ上ニ神ノ加護ハ加ハリ、未來ノ榮光限り無カルベシ」ト。一々聖書ヲヒキテ説キ明サレタレバ、其ノ家人前ノ行ヒヲ恥ヂ、神ヲ畏レタリト云フ。

光鹽會主催ノキリスト教講演會ニ於テモ「處女マリヤ」等ノ演題ノ下ニ於テ、女子トキリスト教ノ關係ヲ説カレタレバ、今マデ「曰ク女子ト小人ハ養ヒ難シ」ト蔑メラレ或ハ「女人禁制」ノ札ヲ以テ婦人ヲ拒ミシ宗教ニカエテ、此ノ宗教ノ如何ニ婦人ヲ愛スルヤ、又神ノ子ヲ宿シ給ヘル、マリヤ様トハ女ノ御方ナラズヤ、神我等ヲ愛シ給フ。我等モ亦、光鹽會ニ投ジテ其ノ働キヲ助ケザルベカラズト、我湯之澤婦人ノ自覺ハ茲ニ光鹽婦人會創立ノ運動トナリテ墮落セル同性ニ一大警醒ヲ與ヘタリ。

### 第三章 光鹽會

九月上旬津久井館ニ於ケル、婦人會創立ノタメノ會合ニ馳參ジタルモノ、池○ミ○姉アリ、柳○コ○姉アリ、高○テ○姉アリ、勝○キ姉、丸○オ○メ姉、幾○イ○姉、松○ヨ○姉、桑○エ○姉アリ。何レモ十八才ヨリ三十

才代ノ年若キ婦人ナリシ事ニ注目スベシ。

古人曰ク「柔ヨク剛ヲ制ス」ト。表面ニ立ツ光鹽會ノ裏ニ動ク力、即チキリストノ柔和ト從順ヲ學ブ婦人達ノ祈リト、働キガ、如何ニ當時ノ砂漠ノ如キ人々ノ心ニ潤ヒト、良キ感化ヲ與ヘタルカヲ想像スヘシ。

此ノ婦人會ハ毎月二回定時集會ヲナシ、祈禱ヲナシ、信仰ヲ勵マシ、又及ブ限リノ働キヲナサント心懸ケ、其ノ年ノクリスマスノ如キ、會場ノ裝飾一切ヲ婦人會ニテ引受ケ、殊ニ高石會長ノ書シタル「降誕」ノ二字ニ鮮綠ノ刺繡ヲ施シ、正面ニ掲ゲテ祝賀氣分ヲ一層高メタリ、此文字ハ遂<sup>ダ</sup>近年迄、長ク用ヒラレ今當教會ニ保存セラル。

(本項ハ主トシテ池〇ミ〇姉、相〇コ〇姉、幾〇イ〇姉等ノ談話ニヨル)

### 第十三 宿〇薰兄ノ傳道

大正三年八・九・十ノ三ヶ月ハ、光鹽會ニ依ルキリスト教運動ノ高潮ニ達シタル時ナリキ。百鬼夜行ノ里ニ法悦讚美ノ歌ヲ聞キ、暗黒ト死ノ影ニ坐スル病者ノ群ニ、喜ビノ音信廣ク齋ラサレシ時ナリキ。サレド全年十一月宿〇薰兄ノ上京引續キ十二月ニ入ルヤ、高〇千〇兄、杉〇淨兄等ノ上京ニ依リ、光鹽會ハ會長、副會長ヲ初メ、其ノ指導者ヲ失ヒ、舵ヲ取ラレシ舟ノ如ク、翼ヲ切ラレシ鳥ノ如ク、如何ニ爲スベキカヲ知ラズ、急轉直下不振ニ陥リ、全年ノ暮ニハ僅カニ型バカリノクリスマスヲ守レリ。集會ノ度數モ極メテ少ナク來會者モ淋シゲニ會ノ前途ヲ憂ヘタリ。カカル時ニ主ノ召ヲ蒙リテ自ラソノ目的ヲ變更シ、加フルニ白熱的の信仰ヲ携ヘテ東京ヨリ歸草シ獨力傳道ヲ開始シ、倒レントスルヲ良ク支へ、再ビサタンノ手中ニ陥ラントセシ會員ヲ、危ク神ノ群ニ引戻シタルハ宿〇薰兄ナリトス。

### 第三章 光鹽會

宿澤兄ハ山梨縣ノ出身、故郷ノ小學校ヲ卒フルヤ志ヲ立テテ布<sup>ツ</sup>哇<sup>イ</sup>ニ渡リ、拮据勉勵大正二年東京淺草ノ大藤長

老ガ全地ヲ訪問セン頃ハホノルル銀座トモ稱スベキ繁華ナル表通りニ、ホノルル物産商會ナル青物乾物ノ店舗ヲ經營シ、別ニ農園ヲモ有シ、ホノルル聖公會ノ最モ熱心ナル信者ニシテ、且ツ日曜學校ノ教師タリ、齡未ダ而立ニ達セザルモ濶達ニシテ明敏、選バレテ教會委員タリ。

教會ノ良キ信徒ハ又社會ノ良キ一員ニシテ、身ヲ以テ青少年ノ指導ニ任ジ、效績少カラザリケレバ、嘗テ同地ホノルル新聞ハ「模範ノ青年」ト題シテ表彰シタリトイフ。サレド幸事魔多ク、大正三年春本病ノ胃ス處トナリ静養ノタメ日本ニ歸ル。五月東京帝大病院ニテ本病ノ確定診斷ヲ受ク、嘗テ大藤長老ガ基督教週報紙上ニ物セラレシ如ク「茲ニ理想ノ青年成功<sup>トキ</sup>半ナル實業家ハ、一朝ニシテ社會ノ廢人トナル。サレド神ハ一人ノ死ニ依リテ多クノ人ヲ義トシ給ヒシ如ク、今其ノ妙ナル攝理ニヨリテ、一人ノ不幸ヲ用ヒテ、數多ノ薄命者ヲ祝福ナス具トナシ給フナリ」。サテ兄ガ本郷ノサル病人宿ニ病軀ヲ横タヘテ嘆聲ヲ洩シタル時、コノ宿屋ノ主人ニヨリテ教ヘラレタルハ、本病治療地トシテノ草津ノ存在ナリキ。茲ニ於テ再ビ旅裝ヲ整ヘ、微カナル希望ヲ抱キテ來草、<sup>フツバ</sup>二葉館ニ投宿セリ。

病ヲ養フトモ尚主ヲ離レズ、一度光鹽會ノアルヲ知ルヤ求メテ會員トナリ、其ノ傳道ヲ助ケ、推サレテ副會長トナリ、大イニ奮闘シタルハ前述ノ如シ。

然ルニ約半歳ノ滯草治療ニヨリテ病症甚ダ輕快ヲ覺ヘ、ソレト共ニ友人ニ托シ置キタル商會ノ事ヲ思ヒ出デテ歸心矢ノ如ク、遂ニ今年十一月今一度布哇ニ渡リ、セメテ事業ノ整理ヲナシテ母國ニ歸ラバヤト、東京ヲサシテ出發シタルナリ。サレド全能ノ神ハ信ズルモノニ危キ途ヲ備ヘ給ハザリキ。

當時、田端、日暮里附近ニハ病者ナル信者ノ一團アリ、何レモ病故ニ教會ニ出入スル事能ハザルヲ以テ、信者間ノ宅廻リ集會ヲモチ居タリシガ、宿澤兄ガ宿リシ家ノ主人後○俊○兄(後ノ草津明星團ホーリネス教會ノ有力

者)モ全年十月二十三日救ニ入り、喜ビノ生涯ノスタートヲ切りシバカリナリシヲ以テ、自ラ信者ナルヲ告白シ宿澤兄ト共ニ主ヲ讚美シ且ツ祈リ居タリ、偶々此ノ一團ノタメニ大島ニ傳道中ノ安〇千〇郎師招カレテ來リ、大イニ其ノ信仰ヲ勵マスマヤ、全年十一月三日後藤兄宅ニ於ケル全師ノ説教ヲ通シテリバイバル起リ、内ト外ニ向ッテ劇シキ聖戰起レリ。一座ニ連ル宿澤兄亦深ク心ヲ探ラレ、可見的、外面的、薄信偽善ノ頭ヲ碎カレ、今ヤ主ノ恩惠滿チ溢レタルヲ自覺スル別人ノ如キ我ヲ見出セリ。世ノ望ミ我ニ何物ゾ、一日モ速カニ此ノ恩惠ヲ深山ニ殘シ置キシ多クノ姉、肉ノ生涯ニ望ミ無キ同病ノ友ニ告ゲバヤトテ、明ケテ四年一月十八日、予定ノコースヲ勇敢ニ斷念シ、白雪深ク降り積ル淺間ノ麓六里ガ原ヲ踏破シ、燃ユル火ノ如キ信仰ヲ携ヘテ草津ニ辿リ着ケリ。而シテ草鞋ノ紐ヲ解クヤ否ヤ當時ノ東雲館別館前ナル佐〇桑〇元ノ六疊一室ヲ借り受ケテ、茲ニ猛烈ナル傳道ヲ開始シタリ。

其ノ熱禱ト力ニ感動セラレ、忽チニシテ三十餘名ノ求道者ヲ與ヘラレ、六疊ノ間ハ宛ラ齋話ノ狹隘ヲ告ゲ身動キモナラズ、兄ハ止ムナク一段高キ床ノ間ニ座シテ、恰モ見臺上ノ僧侶ノ如キ格好ニテ、熱辯ヲ振ッテ救ノ道ヲ説ケリ。其ノ説ク處極メテ明快、而モ事理ヲ盡シ、情感ニ訴ヘ、捕ヘズンバ止マザル魅力ヲ藏シタリキ。毎夕禮拜傳道ヲナスノミナラズ、日曜毎ニ密柑箱ヲ積ミ重ネテ机トナシ、附近ノ兒童ヲ集メテ急造日曜學校ヲ開キ、聖歌ヲ教ヘ、得意ノ辯ヲ以テ子供向ノ御話ヲナシタレバ、子供達喜ンデ其ノ許ニ集ヒ教ヘヲ受ケタリ。後ノ教會牧師山中政三師ガ板倉兄ニ伴ハレテ、光鹽會ニ加ハリシモ此時ナリキトイフ。「救ノ光」之ヲ思フ時、唯奇シキ御攝理ヲ讚ヘザルヲ得ザルナリ。

カクシテ人々ノ一時消エナントセシ信仰ノ火ハ、再ビ掻キ立テラレテ、シオンノ山指シテ前進スルヲ得タルナリ。

宿澤兄ニ就キテハ更ニ語ルベキ多クノ事アリ、項ヲ更メテ述ベントス。

(本項ハ主トシテ相○鎔○兄、山中政三師、高○與○兄、菅○丈○兄ノ談話。週報記事等ニヨル)。

#### 第十四 光鹽會ノ上町進出

上町ハ地理的ニ下町ト相隣接シ、且ツ下町ハ上町ニ湧出スル溫泉ヲ引キテ入湯シ、歴史的ニハ岐レタル一ツノ肢タリ。其處ニハ役場アリ、學校アリ、巡查部長派出所アリ、營林署アリテ住民ノ生活ニ深キ關係ヲ有シ、且ツ亦個人的ニモ彼我ノ交通淺カラザルモノ多シ。サレバ過去幾十歳、消防組ノ如キハ常ニ相互救助ノ美ハシキ關係ヲ持續シ來レリ、今光鹽會ノ活動盛ントナリ、傳道精神ニ燃ユル時ニ當リ、嗚呼コノ上町ノ中ニ一人ニテモキリスト教ニ理解ヲ有シ、或ハ信者トナル者アラバ、如何ニ氣強キ事ナラント、光鹽會幹部ノ人々ガ嗟歎ノ聲ヲ發シタル又宜ナリ、サレド如何ニセン健康地帶ノ事故、病者ハソノ出入ヲ遠慮スベキ立場ニアリ、積極的傳道ナド思ヒモヨラザリキ。然ルヲ主ノ奇シキ御導キニテ、上町ニ住シ獨リキリスト教ニ心ヲ傾ケ、主ノ前ニハ健康ト病者ノ區別ナシト、遂ニ下町ナル信者ノ群ニ投ジ、集會アル毎ニ殆ンド欠ク事ナク來リ加ハリテ、主ニ忠誠ノ證詞ヲ立テシ青年アリ、ソハ後ノ我教會牧師山中政三師ソノ人ナリキ。乞フ此處ニテ少シク師ニ就キテ語ラシメヨ。

#### 第三章 光鹽會

師ハ明治十三年草津ノ生レ、夙ニ志ヲ立テテ上京シ、日露戰役ノ頃ハ東京市内電車ノ優秀ナ運轉手タリ、而モ氣骨隆々タル快男子ナリキ。此間ニアリテ千葉郵便局ニ勤務シ居タル親戚ノ中澤房太郎兄ハ、信者タリシ局長ノ良キ感化ヲ受ケ、遂ニ救ハレテ、主ノ僕トナリ、更ニ特別ナル召命ヲ感ジテ聖公會傳道師トナリ、東京新橋教館ニテ傳道ニ從事シ居タリシガ、山中兄ハ同郷ニシテ且ツ最モ親シキ親族同志ノ事ナレバ、雨ニツケ風ニツケ訪レテハ共ニ語ルヲ樂シミトセリ、サレバ談笑ノ間ニモソノヨキ影響ヲ受ケテ、自ラキリスト教ニ耳ヲ藉スニ至レリ。即

チ茲ニ第一ノ福音ノ種ハ播カレタルナリ、サレド師ハマダボツクタル青春ノ夢覺メズシテ、コノ播カレシ種ノ芽生ユベキ機縁ノ來ルベクモアラザリキ、然ルニ三ヶ年ノ義務年限ヲ終リテ郷里ニ歸リ、一大旅館ヲ築造シテ將ニ大イニナス處アラントセシニ、明治四十二年五月ノ或ル一夜、急ニ火災起リテ父祖多年ノ勞苦悉ク烏有ニ歸セリ、兄失望落膽思フベシ、而シテ此ノ前後ヨリ思想轉向ヲ見タリ。物質決シテ頼ムニ足ラズ、先ニ美ハシク見ヘシ世ハ暗黒ニ覆ハレ、惡ニ滿チ、奸策ヲ弄シテ互ニ攻メアヘクヲ見タリ、高位顯官ノ收賄スルヲ見タリ、僧侶ノ墮落ヲ見タリ、惡人徒ラニ榮ヘ、善人反ツテ苦シム。世ノ矛盾ヲ見タリ、大道將シテ是カ非カ、世ノ道德ニモ宗教ニモ懷疑無キヲ得ザリキ。シカハアレ先ヅ自ラノ途ヲ立テザルベカラズ、兄ノ姉ノ家ガ菓子舗ヲ經營シ居タレバ、取敢ヘズ饅頭ヲ作ル事ヲ習ヒ覺ヘテ、江戸屋ナル菓子舗ヲ開店スルコトトナレリ。次第二商賣繁昌シ、家計日ニ回復ニ趣キシト雖、一度何モノカヲ求メ初メシ其ノ魂ハ愈々求メテ喘グヲ見タリ。

或夏ノ日ノ夕方ナリキ、差出人不明ノ郵便物アリ、開封シタルニ「世ノ光」ト題スル宗教トラクトナリキ。サレバ送リシ主ノ一層床シク思ハレテ之ヲ繕クニ、キリスト教ノ信仰ヲ簡明ニ記述シ、而モ要理ヲ盡セリ、是ナル哉、正ニ是ナル哉、絶對的ナル神ノ存在ニ依リテ、現世ニ於ケル惡ク勝利者ハ、未來ニ於ケル神ノ前ノ敗慘者ナリ……ト更ニ讀ミ耽リテ夜ノ明クルヲ知ラザリキト云フ。カクテキリスト教ヘノ興味ハソソラレ、全書ノ廣告欄ニ依リ、各種キリスト教書類ヲ手當リ次第ニ購入シ、日夜之ヲ繕キ、書類ヲ愈々深ク益々廣ク眞實ノ道ニ導カレタリ。而シテ一度偶像禮拜ノ非ヲ悟ルヤ、祖母妻女ノ反對ヲ物トモセズ其ノ留守中、斷然佛壇位牌類ヲ放棄シテ主ノ前ニ確キ信仰ヲ表明セリ。

大正四年正月突然下町ヨリ宿○薰、大○鹿○郎兩兄ノ來訪ヲ受ケタリ、大内、宿澤兩兄ハ如何ニシテ山中師ヲ知ルニ至リシヤトイフニ、茲ニモ亦奇シキ主ノ御導キアルヲ思フナリ。

即チ當時、光鹽會ノ幹事タリシ板倉兄（大内兄ノ別名）ハ寫眞ノ術ニ長ジ、且ツ義太夫ヲ愛好シテ上町下町ヲ通シテ遊ビ仲間モ多ク、偶々上町地藏坂上、山田屋主人ガ之亦大ノ義太夫好キナレバ遊ビニ行き、四方山ノ話ヲナス中ニ、板倉ノ目ニ止レル一冊ノ書籍アリ。何心ナク取上ゲテ見タルニ「平民ノ福音」トイフ、山室軍平師ノ著書ナレバ、事ノ意外ニ驚キテ「コハキリスト教ノ書ナリ、君ハキリスト教ヲ信ズルヤ」ト問ヒシニ「否我ニアラズ、我友ニ山中ト云ヘル熱心家アリ、日頃耶穌ニ凝リ固リ我ニモコレヲ讀メトテ持チ來リシモノナリ」ト。茲ニ於テ板倉兄ハ山中師ノ人トナリヲ聞キ、イト慕シク思ヒ、ココニモ同信ノ友アルカト喜ビ下町ニ歸リテ、直チニ教友宿澤兄ニ物語レリ。

宿澤兄モイタク打喜ビ、コレ主ノ御導キナリ、病者ノ身故烏<sup>カ</sup>游<sup>カ</sup>ガマシケレ共、聞キシヲ如何デコノママニ置クベキカハトテ、二人相携ヘテ訪問シタルナリ。

主ニ依リテ結バレシ小サキ群ハ、共ニ祈リ救ハレシ身ノ喜ビヲ共ニ語り、此ノ時ヨリ山中兄ハ屢々下町ニ足ヲ運ビ、主ニ在ル友コソ是眞實ノ友ナリトテ、集會ノ都度嘗テ一回モ欠席シタル事ナキ程ノ精勵振ナリケレバ、怠慢ナル會員ハ自ラ恥ジテ改ムルニ至リシト云フ。

幾何モ無ク宿澤兄ハ予メ山中兄ト同談ノ上、光鹽會役員ニモ諮リテ山中兄宅ニ光鹽會ノ上町支部ヲ設ケ、上町傳道ノ根據トセリ。即チ山中兄ノ入信ナカリセバ上町ヘノ進出ハ到底望ミ得ラレザリシモノ、次項ヨリ其ノ活動ニツキ語ルベシ。其ノ前ニ一言スベキハ笛木師ノ來草ト其ノ傳道會ノ事ナリ。

大正四年四月十一日、聖公會巡回傳道師笛木角太郎師ハ、長野地方傳道應援ノ歸リ途ニ草津ノ一般狀況ヲ視察シ、一浴シテ疲レヲ醫シ、更ニ元氣ヲ回復シテ御奉仕ニ當ラント來草シ、姪ノ夫ノ經營スル大東館ニ投宿セリ、山中兄ハ好機逸スベカラズトナシ、早速同師ノ許ニ趣キ、傳道會開催ノコトヲ願ヒテ快諾ヲ得タリ、カカル催ノ

未ダ嘗ツテナカリシ土地柄トテ、兄モ亦少シク危ミツ、モ勇ヲ鼓シ主ノ導キヲ信ジテ早速決行スル事トナレリ。會場トシテ他ニ借ルベキ心當リノ所モナケレバ、姉ノ嫁キ居ル柏香亭ニ行キ、事ノ一部始終ヲ打明ケテ、會場ヲ提供セラレン事ヲ乞ヘリ、耶蘇ノ會場カト、喜ビノ色モナカリシカド、唯ソノ熱誠ニ動カサレテ遂ニ之ヲ諾シタリ。

山中兄ハ自ラ近所ノ人々及ビ友人等ヲ手當リ次第ニ説キ廻リテ、集會ニ來ルベク誘ヒ歩キタレバ、約五十名ト云フ予期以上ノ聽衆ヲ得タリ。司會者ハ勿論山中兄ナリ、カカル集會ノ司會ヲナス事モ又初メテノコトトテ、流石ノ山中兄モ微カニ戰キ背ニ冷汗ヲ流シタリト云フ。

自ラ讚美歌ヲ歌ヒ、祈禱ヲナシ、證詞ヲナシ、一人ニテ仲々忙シカリキト、次デ七十二才ノ老齡トモ思ヘ又笛木師ハ立ちテ、唯一ノ主、十字架ノ愛ニ就キ、懇切ニ熱心ニ説キ明サレタレバ、一同深キ感銘ヲ受ケテ散會シタリ。コノ事アリテヨリ私カニ心ヲキリスト教ニ傾クル者モ生ジ、キリスト教ガ天皇ヨリ上ニ天帝ヲ仰グヲ以テ、我國體ニ相應シカラズ等ト論ジ居タル人々モ、次第ニキリスト教ニ理解ヲ持チ、如斯シテ上町ニ於ケル今後ノ働キヲ容易ナラシムルニ預リテ力アリキ。

サテ此頃幻燈機械ノ發明アリテ大イニ流行シ興行方面ハ云フニ及バズ教育ノ助ケトシテモ盛ニ用ヒラルルニ至レリコノ新機械ヲ利用シテ傳道ノ具ニ供シタルハ時勢ニ相應シキ思ヒ付ナリキ。即チ大正四年八月十五日笛木角太郎師ノ斡旋ニテ、草津小學校ヲ拝借シキリスト教幻燈會ヲ開催セリ。

幻燈トハ硝子ノ種板ニ畫カレタル人物、風景其ノ他ヲ擴大シテ映寫スルモノナリ。草津トシテハ未ダ頗ル珍ラシキコトナレバ、觀衆約三百名ヲ得ルノ盛況ナリキ。何人モ入場無料。土地ノ青年會萬端ノ世話ヲナセリ。

聖ナルコノ映画ヲ通シテ深キ印象ト各自反省ノ時ヲ與ヘタルハ論ヲ俟タザルナリ。

(此項ハ主トシテ高石兄、相馬兄、山中師等ノ談話ニヨル)

### 第十五 大阪家族教會ノ傳道

大正三年八月光鹽會ノ集會ニ馳參ジテヨキ證詞ヲナシ、未信者ヲ勵マシタル神○卯○郎兄ノ事ニ就キテハ、村岡・小池兩兄來草ノ處ニテ少シク之ヲ述ベタリ。仝人ハ日本基督派ノ信者タリシ武○久○兄(二〇)ニ導カレテ信者トナリタルモノナリ。

武市兄ハ明治三十年岐阜縣ノ生レ、郷里ノ高等小學校卒業後發病シ、十六才ノ時大阪保養院ニ入院、仝院在院中西○友○郎氏其ノ他十五・六名ノ同志ト共ニキリスト教ヲ研究シ居タリシガ偶々福田荒太郎先生ノ説教ヲ聞クニ及ビテココニ入信ノ決意ヲナシ、尙全先生ノ盡力ニ依リテ仝院内ニ家族教會ヲ設ケラレ、約二十名ノ信者ト共ニ信仰生活ヲ始メタリ。

大正二年草津溫泉ガ本病ニ特效アルヲ聞キ來草セルモノノ其ノ燃ユル信仰心ハ默スル能ハズ、隣ノ足袋屋神○卯○郎兄ト知合トナルヤ熱心ニソノ教ヘヲ説キ、遂ニ竹馬ノ友トナリ、二人相協力シテ常ニ母教會トノ連絡ヲ斷タズ、光鹽會ノ成立ニ依リ部落ニキリスト教運動ノ起ルヤ、病者間傳道ノ有望ナルヲ予見シ、病者救濟ヲモ加味スル特種教會ノ設立ヲ思ヒ立チ、之ヲ母教會ニ願ヒ出タリ、サレバ村岡・小池兩兄ノ來草ニ先立ツコト數日、仝教會宣教師タリシヒール博士ノ後援ヲ得、取敢ヘズ家族教會ノ草津支部ヲ設クル段取トナリ。草津町字瀧下(今ノ聖マリヤ館ノ處ニアリシ)大川ノ家ニ階ヲ借りテ、ソノ窓側ニ「大阪家族教會草津支部」ノ看板ヲ掲ゲ、一時約二〇名ノ同志ヲ得タリ。

### 第三章 光鹽會

然ル間ニ光鹽會ノ活動盛トナリタルヲ以テ、更ニ當地ノ事情ヲ事細カニ書キ送り、一人ノ指導者ヲモ有セザル

草津ノタメニ速カニ傳道師ヲ送り、信仰生活ヲ導カシメラレン事ヲ乞ヘリ。

依テ家族教會ハ大正三年八月下旬、ソノ乞ヲ容レテ當時大阪外島保養院ノ傳道ヲ分擔シ、病者間ノ傳道ニ馴レタル傳道師、福田荒太郎先生ヲ當地ニ派遣スル返信ヲ與ヘタリ。

福田先生ガ着草シタル時ハ、恰モ熊本ヨリ派遣セラレタル村岡・小池兩兄津久井館ニ投宿シ、光鹽會ト共ニ熱心ニ傳道シ居タル際ニシテ、殊ニ神山兄モ武市兄モ光鹽會員トシテ主ノ御用ニ當リ居タレバ、兩兄ハ篤ト福田先生ニ光鹽會ト協議ノ上、全師來草ヲ記念シテ光鹽會ノ主催ニテ、篠○鉄○氏經營ノ篠田旅館（今ノ聖エリザベツ館）ヲ借り受ケ、四日間ニ亘リテキリスト教講演會ヲ開催スルコトトナリタリ。此會ハ頗ル盛會ニシテ、人々ハ唯奇シキ聖言ノ中ニ潛ム眞理ヲキ、大イナル慰藉ヲ得テ喜ビ合ヘリ。

兩人ハ福田先生ノ來草ニ依リ大イニ力ヲ得、更ニ大イニ何事カナス處アラントセシモ、神山兄ハ其ノ小サキ家庭ヲ營ミ居タル五百八十二番地（今ノ聖ステバノ館浴場ノアタリ）ガ高田氏ノ買入ル、處トナリ、家屋増築ノタメニ立退キヲ乞ハレ、一方最愛ノ妻ハ既ニ失ヒシ事ナレバ、二兒ヲ抱キテ途方ニ暮レ、一先ヅ<sup>ヒト</sup>郷里埼玉ニ歸リテ其ノ養育ヲ托セント二兒ヲ伴ヒテ上京シ、同一教會經營スル慰廢園ニ宿レリ。神山兄ガ、コンウォール・リー女史ニ接シ、慰メノ言葉ヲ受ケ若干ノ金サヘ惠マレシハ、實ニ此ノ時ナリシト言フ。

カクテ郷里ニ歸リシモ萬事意ノ如クナラズ、再ビ二兒ヲ伴ヒテ來草シ、今ノ大平館ノアル處ノ小屋ニ住ヒ、大阪ナル母教會ニ事情ヲ訴ヘ、且ツ全兄ノ上京ト武市兄ノ歸國ニ依ッテ中斷セラレタル家族教會支部ヲ復活シ、再ビ病者間ニ傳道ヲナサント志シ、支部建築費トシテ全教會ヨリ金二百圓餘ヲ贈ラレタレバ、其ノ集會ニ充ツル目<sup>的</sup>ニテ現在ノ櫻ノ湯西隣ノ地ニ、六、六ノ二室ノ木造平屋ヲ建テ、コレニ大阪家族教會草津支部ノ看板ヲ掲ゲタリ。其落成式ニハ同信ノ故ヲ以テ、光鹽會幹部、ヨルダン・ホーム員等モ招カレ、汁粉ノ馳走ニ與レリ。

サレド宿屋組合ハ之ヲ目スルニ、ベルトラン師ノ時ト同様、無料宿泊所ヲ開クハ營業妨害ナリトシテ之ヲ迫害シ、涼風館主高田氏ノ如キハ其ノ看板ヲ取外シテ持去リ、再ビ之ヲ返サザリキト云フ。

然ル中ニ神山兄ハ急病ニ冒サレ、大正四年八月下旬二兄ヲ殘シテ永眠セリ、而シテ其キリストニ依ル勝利ノ永眠ハ、未ダ嘗テ湯之澤ノ人ノ見タル事ナキ程ノモノニシテ、苦痛ノ中ニモ御國ヲ望ンデ莞爾トシテ主ヲ讚ヘツ、天ニ昇リシ其美シキ臨終ハ確キ信仰ノ證詞トナレリ。

而シテ其ノ葬式ハヨルダン・ホーム員ノ手ニテ行ハレ、之亦湯之澤ニ於ケル最初ノキリスト教式ニ依ル葬式ニシテ、人々大イニ主ノ榮光ヲ拜スルニ至レリ。

全兄ハ其死ニ先立チ、愛兒ノ救ハレテ神ノ子トセラレン事ヲ熱望シ、全月十五日、熊本ヨリ長老ヒューレット師及長老米原師來草スト聞クヤ、兩師ニ乞ヒテ、ヨルダン・ホームニ於テ幼兒聖洗ヲ受ケシム。即チサムエル神○徳○、マリヤ神○ト○ノ名ハ同時ニ受洗セル、ハンナ石○房○、ダニエル横○清ノ名ト共ニ、我草津ニ於ケル第一回ノ被洗者トシテ、永遠ニ記憶セララルベシ。

全兄ノ證詞ニ依リテ信仰ニ入りシ者少カラズ、江○ソ○姉ノ如キハ全兄ヲ看護シ、其ノ檻樓ノ中ヨリ聖書ヲ發見シ、何心ナク之ヲ讀ミテ、遂ニ信仰ニ導カル、動機トナレリト云フ。

サテ其家ハ全兄ノ召天ト共ニ、日下氏ノ手ニ入り、更ニ横溝兄ニ移リ、後チ水石兄ヲ經テ、現在伊○郎兄ノ住居スル所ナリ。

茲ニ附言スベキ事アリ、梶原兄ハ家族教會ノ行動ニアキタラザルモノアリシガ、其ノ所屬ガ日本基督教派ニアルヲ確メ、カクテハ此ノ狭キ土地ニ二教派對立シ、將來紛争ノ因トナルヘキヲ憂ヒ、事ノ詳細ヲ熊本ナル米原長老ノ許エ書キ送リシヲ以テ、米原長老ハ大阪家族教會ト協定シ、聖公會ノ既傳道區域タル事ノ承認ヲ得タリ。サ

レバ茲ニ家族教會ハ草津傳道ヨリ全ク手ヲ引クコトナリ、之ヨリ公會ハ獨自ノ立場ニ歸リテ、其ノ傳道ヲ繼續スルヲ得タリ。 們○清○兄ノ隠レタル功績ナリトス。

サテ母ノ病氣ノタメ親戚ニ呼バレテ大正四年五月退草シタル武市兄ハ、病勢全ク其ノ影ヲ潜メ、英語學校、工科學校等ニ學ビ、大正七年徵兵検査ニ於テ甲種騎兵ニ合格、翌年十二月一日旭川騎兵七聯隊ニ入隊、滿州駐劄軍トシテ滿州公主嶺ニ駐屯、翌年十月、過激派鎮壓ノタメシベリヤ地方ニ出動シ、大正十年十月ニ勲八等旭日章從軍徽章、萬國圓形從軍徽章等ヲ下附セラレタリ。サレド八年八月再發ノタメ草津ニ來リ治療後上京、十四年第四回日來草ノ頃ヨリ病勢著進シ、社會ニ止ル能ハズ、昭和二年六月全生病院ニ入院、尚多年我ガ聖バルナバギルドノ會員タリシガ昭和六年九月永眠セリ。

(此項、横溝兄、高田兄、相馬兄、江○ソ○姉、池○ミ○姉、高○与○兄等ノ談話、又武市兄ノ來信ニヨル)

## 第四章 ヨルダン・ホーム

### 第十六 管野・宿澤兩兄ヨルダン・ホームヲ興ス

大正四年即チ草津傳道ノ第三年目ニ當リ、光鹽會ノ中心トナリテ教會設立運動ノ前驅ヲナシ、更ニ病者ホーム創設ニ就イテノ暗示ヲ與ヘタルハ、ヨルダン・ホームナリ。

今之ヲ説カントスル前ニ此ノホームヲ創設セシメタル當時ノ情勢、即チ光鹽會時代前後ニ於ケル、湯之澤ノ經濟組織ノ一般ヲ窺ハント欲ス。

病者療養ノ温泉地ナレバ、部落ニ絶對權ヲ有シタルハ元ヨリ旅館營業者ナリキ。部落民ノ部落費ヲ大部分負擔

スル彼等ガ結束スル時、部落ノ名ニ於テ更ニ強大ナル力ノ政策ヲ行ヒタル又當然ノ成行ナリ。サレド其ノ陰ニハ憐ムベキ群小弱者ノ犠牲アル事モ疑フベカラズ。明治四十年前後ニ至ルマデ宿屋ノ營業ハ頗ル收利的ニシテ、特種ノ病者ヲ對象トスル故ニ上町旅館ト競争ノ要モナク、常ニ獨自ノ立場ニ於テ其ノ業ヲ營ミ、特ニ營業上ノ支障ヲ見ザリキ。

傳手ニ依リ、新聞雜誌ノ報告ニヨリ、或ハ運動員ヲ使用シテ客ヲ誘引スト雖、コレ自館ヲ繁榮セシムルヲ目的トスルニヨリ、療養ノ資力ナキ者ニハ何ノ要モナキ事ナリ。サレバ自炊生活ノ經濟ト便益ヲ思ヒテ、單獨ニ此村ニ生計ヲ營マントスルヲ好マズ、幾月カ、幾年カノ間、滞留治療シタルモノモ、特別ナル事情アリテ出身宿屋ノ保障アル少數者ノ外湯之澤ニ定住スル事困難ナリキ。

客種ハ一般ニ中流以上ノ家庭ヨリ來ル者多ク、金ニマカセテ旅藝人等ノ來ルアレバ幾日ニテモ引留メテ樂シミ又各種ノ遊藝事、素人芝居、浪花節等ノ催物四時絶ユルコトナカリキ。金錢ヲ中心トシタル遊ビ事、就中博奕ノ大流行ニ就キテハ既ニ述ベタルガ如シ。更ニ冬ノ遊ビニ骨董會ナルモノアリ、不要品セリ賣ノ名目ナレド、安クシテ落札シタルモノヲ再ビセリニ出シテ、高ク賣ラント欲スル人情ヲ巧ミニ利用シテ、若シ出品者ガ落札價格ニテ現品ヲ落札者ニ渡ス事ヲ欲セザル時ハ、鐵砲ト稱シテ謝リ金ヲ出ス面白キ仕組ナレバ、出品者ト落札者ノ間ニ投機行ハレ、何回ニテモ繰返スヲ得ベシ。上町下町合同ニテモ屢々此ノ遊ビハ行ハレタリ。更ニ驚クベキ流行ハ義太夫ニシテ、社會ノ一、二流ノモノニモ匹敵スベキ聲量ト技巧ヲ有スルモノ少カラズ。地藏坂上ノ山田屋源次氏ノ如キ界限ニ其名ヲ知ラレ、一回ノ指導ヲ受クルタメニ先ヲ競ヒテ、順番札ヲ買ヒテ稽古シタルモノナリト云フ。

サレバカ、ル遊藝事ニ對シ取締權ヲ有スル、地元青年團體タル濇情團ニトリテモ黄金時代ニシテ、團長三〇崎

○次○氏、其ノ參謀們○晴○氏何レモ仁俠上州ノ長脇差國定忠治ヲ氣取りテ、其赴ク處草木ノ風ニ靡ク如クナリキト云フ。

眞暗キ闇ノ静寂ヲ破リテ們○晴○氏ガ、温情團演藝部長ト印サレタル高張提燈ヲ掲ゲ、郎黨ヲ引具シテ威風堂々部落ヲ巡廻スル様ハ如何ニモ雄々シク、亦頼モシクモ思ハレタリトハ當時ヲ語ル一老人ノ述懐ナリ。時未ダ日露役戦勝ノ喚聲耳底ニ残り、社會ノ好景氣ハ又病者ノ好景氣ニテ、物質ノ慰メヲ受クル事比較的多カリキ。

然ル處明治四十二年癩豫防法ノ發布アリ、此ノ法律ハ種々ノ意味ヨリシテ、病者ニ大打撃ヲ與ヘタルモノニシテ、官憲ハ全國的ニ患者ノ調査及び取締リヲ開始シ、法定傳染病トシテ之ヲ各警察署、癩患者名簿ニ集録シ、或縣ノ如キハ毎月二三回警官ヲシテ巡視セシメ、法規ニヨル消毒法ヲ強行セシム。ソレト同時ニ各府縣ハ所謂浮浪患者ヲ行ヒ、家ヲ追ハレテ乞食ヲナシ、或ハ神社佛閣ノ傍ラニアッテ參拜者ニ憐ミヲ乞フ多クノ癩患者ヲ捕ヘ、行政處分ヲ以テ療養所ニ收容セリ。

カク一般社會並ニ官憲ノ取締リヤ、嚴重トナリシヲ以テ、病者ハソノ家庭ニ止ル時ハ、家族親戚ニ大イナル困難ト、苦痛ト、迷惑ヲ及ボスニ依リ、私カニ世ヲ忍ブ隠家ヲ求メ、爲ニ我草津ヲ初メ、紀州ノ湯ノ峯、熊本ノ花園町、甲州ノ身延山、四国ノ八十八ヶ所等ニ避難スル患者年ト共ニ多キヲ加フルニ至レリ。

草津ニ於テハ此頃ヨリ旅館營業者ノ數モ十餘名トナリ、又商業ヲ營ムモノ四五名出現スルニ至リ、更ニ點灸治療ヲ終ヘタル者ニシテ唯無爲ニ旅館ニ止ランヨリハ、部落ニ定住シテ残りノ健康ヲ以テ一定ノ仕事ヲナシ、國元ノ負擔ヲ輕減セシメント、當地ニ定住ヲ希望スルモノ續出シ、部落ヲ支配スル宿屋組合ハ之等ノ願ヒヲ如何ニ處置スベキカニ就キ、慾ト情トノ二途ニ迷ヒタリ。

宿屋ヨリ之ヲ見レバ相當ノ運動費ヲ要シテ得タル客ヲ失フヲ好マズ。其ノ宏壯ニ作レル客室ノ常ニ満員ナラン

事ハ元ヨリ之ヲ欲スル處ナレバ、依然旅館ヲ出テ、世帯ヲ持ツ者ヲ嫌貶シ、極力之ヲ妨害シ、或ハ延期セシメル等ノ方策ニ出デタルハ勿論ナリ。サレド當時一ヶ月ノ宿貸十五圓位ナルニ比シ、世帯ヲ持ツテ自炊スルトキハ、夫婦ニテモ十圓カカラヌ程ニテ、約三分ノ二ノ經濟トナリタレバ、金ニ不自由ナキ二三ノモノヲ除キテハ、其要求モ切ナルモノアリ、サレバトテ之ヲソノ赴クガママニ放任センカ折角諸種ノ方法ニテ浴客ヲ自館ニ導クトモ、續々安價生活ニ趨リ、自レノ利スル處無キニ至ラン事ヲ知り、今ヤ斷乎タル處置ヲ採ルベキ時ナリトテ協議ノ結果、以後宿屋ヲ出テ世帯ヲ持タント欲スルモノニ對シテハ、加盟金二圓ヲ五圓ニ値上シテ課スベシ、又一度世帯ヲ持ツトモ、速ク國元ヲ離レテ生活スル以上、長患ヒ、急病、死亡等ノ際臨機應急ノ處置ヲナスハ、當出身宿屋ナレバ、將來ノ身元保證ノタメ保證金トシテ金二十圓ヲ宿屋組合ニ前納スヘシ、又家貸ノ滞納並ニ踏倒シヲ豫防スルタメ、スベテ家ヲ借ルモノハ、一ケ年ノ家貸ヲ前納スベシ等ノ諸項ヲ決議シ、即時實行スルコトトナレリ。

將シテ此ノ決議ハ中流以下ノモノニシテ、世帯ヲ持タントスルモノノ一大脅威タリ。部落加盟ノ困難ト更ニ之ニ附隨スル諸負擔ノ重キニオビエ、旅館ヲ出ル事ヲ躊躇スルニ至レリ。又永ク止マル能ハザルモノハ一人亦一人ト或ハ流浪ノ旅ニ、或ハ收容所ニ、住ミ馴レシ村ヲ後ニ出テ行カザルヲ得ザリキ。遂ニコノ暴壓ニ堪ヘ兼ネタル無産大衆ノ憤激ハホトバシリテ一ツノ運動トナリ、コノ不當ナル束縛ヲ撤センメテ、住ミ心地ヨキ病者ノ村ニ復サントス。ソノ先陣ヲ承リタルモノ即チ共同自炊會ナリ、今高〇與〇兄ノ處ニ藏スル共同自炊會趣意書ナルモノヲ見ルニ即チ高〇與〇兄、萩〇健〇郎兄（丸山館主人ノ妻ノ兄ニシテ管野兄ノ義兄）、岡〇金〇郎兄等八名ノ有志發起人トナリ、二十圓保證金絶對反對ヲ標榜シ「比較的貧困ナルモノ相寄り、質素經濟ヲ旨トシ、相互協力一致治療ノ生活ヲナス」（共同自炊會々則第五條）コトヲ標榜シ大イナル覺悟ヲ以テ運動ヲ起セリ、二十圓保證金ヲ收メテ世帯ヲ持タント欲スル者ハ、村ニ合計二十五圓ヲ納付セザルベカラザルヲ以テ、少クトモ總計五十圓ト

イフ當時ノ大金ヲ、單ニ世帯ヲ持ツ準備ノタメ必要トシタル程ニテ、其ノ負擔ノ過重ナリシハ言ヲ俟タズ、サレバ發表後忽チニシテ予定會員數ニ達シ、申込者二十名ノ署名捺印ヲ了シタリ。依テ直チニ共同生活ヲナスベキ家屋ヲ探シ求メタルニ、宿屋組合ハ其ノ行動ヲ妨害シ、其ノ兼業トモ見ルベキ貸家組合ノ共同拒絶ニ遇ヒタレバ、止ムナク下ノ原ニ約一町歩ノ土地ヲ求メ、其ノ所有者三風呂、宮崎新之助氏ト、十五ケ年間借地契約ヲ締結シ、高梨兄ハ金鵝勲章年金ヲ犠牲ニシテ家屋ヲ新築シ、自炊會ノ團體ヲ組織スル計畫ヲ樹テタリ。

然ルニ此ノ運動ニ依ッテ宿屋組合員中具眼ノ士ハ、漸ク値上案ノ不利ナルヲ悟リ、二十圓保證金問題緩和運動起リ、遂ニ組合ハ之ヲ全ク斷念シ、且ツ部落ニ居住スルモノノタメニ若干ノ便宜ヲ圖ルニ至リタレバ、温泉ヲ離レ人里ヲ離レテ下ノ原ニ行カンヨリハ、寧ロ幾何ノ苦痛ヲ忍ビテ草津ニ止マラントテ、各自其好ム處ニ從ヒテ赴キケレバ、共同自炊所設置モ一時見合ス事トナリ、遂ニ其ノ計畫ノ實現ヲ見ズシテアリヌ。

(此頃主トシテ高○與○兄、管○丈○兄、淺○勝○郎兄等ノ談話ニヨル)

多事ナリシ大正三年モ暮レテ、今ハ總テノ憎惡怨恨ヲ歳ノ彼方ニ忘レ、輝カシキ新春ヲ迎ヘタリ。此ノ新春降雪霏々タル一月十八日白熱的信仰ヲ抱イテ東京ヨリ歸草セル宿○蕪兄ガ、加○灸○兄宅ニテ猛烈ナル傳道ニ從事シ、多クノ求道者ヲ得タル事前述ノ如シ、而シテコノ求道者連ト互ニ胸襟ヲ開イテ恩惠ヲ語ル中ニ幾度トナク話ハ生活問題ニ關聯シ、中ニハ前ニ述ベシ如ク長ク宿屋ニ止ル能ハザル者アリテ、モ少シ安價ナル生活ヲ欲スル聲ヲ屢々聞キ、宿○兄自身モ亦之ヲ願ヒ、サキノ共同自炊會ノ目論ミヲ聞キタルヤ、茲ニキリスト教主義ヲ奉ズル青年ノタメ、一ノ共同生活團體ヲ作ラント決意セリ。

サレド如何ニセン同兄ハ其資力ニ乏シキヲ以テ、同僚ノ管○丈○兄ニ此ノ企テヲ告ゲ、願ワクハ其助力ヲ得テ之ヲ全ウセント欲セリ。

管野兄ハ當時松村館ノ客ニシテ、其館主丸〇憲〇氏借金ニ苦シムヤ、乞ハルルママニ數百圓ヲ貸與シ、且ツ縁アリ、其ノ妻ノ妹オ〇メ姉ヲ妻ニ娶リ、松村館ト特別ナル關係ヲ生ジテ、其ノ別館ノ支配權ヲ委ネラレシ際ナリシカバ、早速之ニ賛成シ、即チ此ノ目的ノタメニ年額七十圓ニテ丸山氏ヨリ別館全部（六疊三室、八疊一室）ノ一棟貸與ヲ受ケ「キリスト教ニ賛成シ、質素清廉ナル生活ヲ送ラント欲スル獨身男子」ノタメニ之ヲ解放スベク其ノ名モ「ヨルダン・ホーム」ト命名シテ同志ヲ募レリ。

蓋シ、ヨルダン・ホームノ名ハ宿澤兄ノ命名シタルモノ、當地ニ初メテ見シカナ文字ノ看板ヲ見テ、ヨルダント言ヒ、ホームト言ヒ多クノ人々其ノ意味ヲ解スル能ハザリキ。

思フニ、ロトガヨルダンノ低地ヲ望ミ見シニ、ゾアルニ至ル迄皆潤ヒテエホバノ園ノ如クナリシト云ヘルカノ創世記ノ記事ニ依リテ（創世記十三章十節）、コノ小サキホームヲエホバノ園ノ如ク美シクシ、豊カナル收穫ヲ神ノ前ニ捧ゲバヤト望ミタルベク、又其ノ昔イスラエル人ガ主ニ導カレテ、ヨルダンノ河ヲ渡リテ約束ノ地ニ入レルガ如ク、此ノホームヲ通シテ多クノ愛兒姉ヲ約束ノ地ニ導カント決意シ、其ノ名ニ因ミテヨルダン・ホームトハ名付ケシモノナルベシ。

扱テ、第一ニ此ノホーム員タル名譽ヲ擔ヒシハ前記宿〇薫兄ヲ初メ、板〇松〇郎兄、石〇八〇兄、飛〇正〇助兄等ニシテ、今ヤカク數名ノ教友ヲ得タレバ、管〇丈〇兄夫妻専ラ炊事ヲ分擔シ、此處ニ同信愛ノ家庭ハ成立シ其ノ名ヲ聞キテ速ク東京ヨリ横〇武〇兄、上〇良〇兄等モ來リ加ハルアリ、館員互ニ相勵マシ、信仰第一ノ美ハシキ家庭生活ハ綴ラレタリ。

管野兄ノ經營又宜シキヲ得、生活實費ハ旅館生活者ノ三分ノ一ニモ滿タザル有様ナリシカバ、一同深く之ヲ徳トシ、愈々主ニヨル交リヲ堅フセリ。然レ共之モ亦宿屋組合ノ壓迫攻撃ヲ蒙ルコト甚ダシク、解散セヨト迫ラレ

シ事アリ、或者ハ其看板ヲ外シシコトアリ。諸種ノ難題ヲ持チカケシコトアリ。サレド、ホームハ主ノ護リノ確  
信ト祈リノ中ニ微動ダニスルコトナク、相倚リ相助ケ、恰モカノ初代教會ニ於ケル使徒達ノ生活ヲ思ハシムルモ  
ノアリトイフ。

ヨルダン・ホームノ成立ト共ニ宿〇薰兄ハ、幹事ノ板倉兄、相馬兄等ト相談ノ上光鹽會ノ事務所ヲ柵原兄宅ヨ  
リヨルダン・ホーム内ニ移シタリ、經營者タル菅野兄亦有力ナル會員タリ、菅野姉ハ光鹽婦人會ノ中堅タリシ關  
係上、光鹽會集會ノタメニトテ一室ヲ開放シ、兼ネテホーム員ノ禮拜室トナス、又其ノ看板ヲ更新スルニ當リ、  
從來單ニ光鹽會ノミニテハ未信者ニキリスト教團體タル事ヲ明解セシムルコト能ハズシテ、或時ノ如キハ良キ鹽  
ヲ賣ル會ナラムト誤解セラレシ事等思ヒ合セ、此際一層旗幟ヲ鮮明ニセザルベカラズトテ、光鹽會ノ頭ニ「基督  
教」ノ三字ヲ冠シ「基督教光鹽會」ト墨書シテ之ヲ玄關入口ニ掲ゲタリ。又禮拜室ニハ「汝等ハ地ノ鹽、世ノ光  
ナリ」ノ聖句ヲ書シタル黒縁ノ扁額ヲ掲ゲ、此ノ扁額ハ今ハ聖バルナバ醫院藥局ニ掲ゲラル。

蓋シ聖マタイ傳第五章中ヨリ宿澤兄ノ選ビシモノニシテ、世ヲ潔メ、罪ノ汚レヲ潔メ、腐敗ヲ止ル鹽ノ如ク有  
效ニ、暗キハ闇ヲ照ス光ノ如ク世ニ輝キ、其ノ生活ヲ通シテ湯ニ善キ感化ヲ與ヘント願ヒシモノ「コレ人ノ  
汝等ガ行ヒヲ見テ天ニ在ス汝等ノ父ヲ崇メン爲ナリ」トノ聖言ノマニマニ進マントノ大目的ヲ掲ゲシモノニシテ  
信者之ヲ仰ギ見ル時、奮起セザルヲ得ザリシナリ。

而シテ、館員ハ朝夕禮拜ヲ捧ゲ、宿澤兄ノ靈的指導ヨリ館員ハ信仰ヲ勵マサレ、又屢々傳道集會ヲ開キ熱心ニ  
未信者ヲ教導セリ。

兄ガ黒サージノ冬服一着ニテ夏冬押通シ、日夜主ノタメ勞シタルハ隠レタル逸話ナリ。其ノ人トナルヤ多藝多  
能、多趣味、而モ聖書ニ通曉シ座談ノ妙ヲ得、難解ノ教理モ錯綜セル舊約ノ物語モ宛ラ快力亂麻ノ如ク、聽ク者

ヲシテ魅了セズンバ止マザル概アリキ。

サテ、夙ニ宿澤兄ノ力量手腕ヲ知レル大藤長老ハ、指導者ナキ草津會衆ノタメニ、宿澤兄ノ擧用ヲマキム監督ニ上申セリ、而シテ大正四年六月上旬宿澤兄ハ上京シ、東京池袋三一神學校ニテ數日ニ亘リ試験ヲ受ケテ之ニ合格シ全月二十日マキム監督ヨリ傳道師補ノ認可狀ヲ受ケテ歸草セリ。カカル靈的指導ノ資格ヲ得タル者未ダ嘗ツテ無カリシカバ、會員ノ喜ビ一方ナラズ、宿澤兄モ亦傳道師補就任ニヨリテ、更ニ一段ノ光彩ト威嚴ヲ添へ、監督事務所ヨリ職服サーブリスノ到着ト共ニ日曜毎ニ之ヲ着用シ、公會所定祈禱書ニヨツテ禮拜並ニ説教ヲナシ、我ヨルダン・ホームハ隠然イシセン小教會ノ觀アリキ。

此項ノ最後ニ一言スベキハ、コノホーム員ガ勞働ヲ尊ビ自ラ土ニ親シミ好ンデ農耕ニ從事シタル事實ナリトス即チ健康ノタメニモ生活ノタメニモ將又慰安ノタメニモ、彼等ニ一ノ農園ヲ必要トシタリキ。サレバ前述共同自炊所ノ爲ニ高梨兄ガ三風呂ミツフクロノ宮崎新之助氏ヨリ借受ケタル、下ノ原ノ土地ヲ全兄失明ノ故ニ管野兄ニ其ノ管理權ヲ讓リ、コレヲヨルダン・ホーム農園トナシ蔬菜ソウジ、花卉等ヲ栽培ス。而シテ「ヨルダン・ホーム農園」ト筆太ニ記サレタル大標柱ハ、行人ノ眼ヲ驚カシムルニ十分ナリキ。如斯シテ宿澤兄ノ傳道トヨルダン・ホームノ生活ハ未信者環視ノ中ニ著著キキツキツ主ノ祝福ヲ受ケ、朝夕窓ヲ洩ル、美ハシキ讚美歌、食前、食後ノ感謝、日曜日ノ嚴守。農園ニ於ケル睦マジキ勞働。一日ノ勞苦ヲ神ニ捧ゲ、夕日ト共ニ植ヘシモノノタメニ神ノ祝福ヲ祈ル姿。總テヲ神ノ御手ニ任セテ喜喜トシテ歸ル平和ナル笑顔等。何レモ未信者ノ心ニ深キ印象ヲ與へ、「耶穌々々」ト云ヒテ唯譯モ無ク蔑視シ、唾棄ツグシ居タル輩モ自ラ前非ヲ悔ヒ、次第ニ敬意ト信頼ヲ表明スルニ至レリ。

(此項ハ主トシテ管○丈○兄、高○與○兄、高○利○兄、上○寬○兄等ノ談話ニヨル)

第十七 コンウォール・リー女史ノ來草

大正四年七月、コンウォール・リー女史ノ來草コソハ我ガ草津傳道史上特筆セラルベキ事實ナリトス。後年、東京日日、大阪朝日其ノ他ノ新聞紙上ニ「草津ノ女神」「人類愛ノ使徒」「隠レタル聖者」等ノ見出シヲ附シテ其ノ救難事業並ニ高深ナル人格ノ薰化ニ就キ、屢々嘆賞ノ記事ヲ掲ゲラレシ女史ガ、此年此月初メテ草津ニ其ノ足跡ヲ印シタルガ故ナリ。

今其ノ來草ノ動機ニツキ少シク記サンニ、當時致務院傳道局長タリシ大藤鑄三郎長老ハ、東京牛込聖バルナバ教會ニ勤務セシリー女史ガ、度々市外目黒村ナル慰療園ヲ訪レ、病者間傳道ニ興味ヲ有スルノ事實ヲ知り、同時に慰療園ヨリモ更ニ多數ノ病者ト、傳道ニ有望ナル前途ヲ有スル草津ト、傳道團體タル光鹽會ヲ主宰スル教友宿澤兄ヨリノ來簡ヲ想起シ同兄ニ紹介ノ手紙ヲ送レリ。宿澤兄ハ實ニ跳立ツバカリニ打喜ビ「コレ豫テ神〇卯〇郎兄ヨリ聞キタル、コンコンリー様其ノ人ナルベシ、如斯高貴ノ身ヲ以テ、我等ガ如キ病者ノ間ニ好ンデ働カントノ御志勿體ナヤ、シカアレド今ハ草津傳道ノ大事ノタメ、如何ニモシテ招キ迎ヘザルベカラズ、好機逸スベカラズ、最早手紙ノ交渉ニテハ間意<sup>ダレ</sup>コシ、我自ラ直チニ上京セン」ト、旅裝ヲ整ヘ、單身急遽上京、大藤長老ニ伴ハレ、牛込區矢來町ナルリー女史ノ自宅ヲ訪ル。大藤長老ノ手記ニヨレバ其ノ時、女史ハ欣然トシテ二人ヲ迎ヘ、美シキ庭園ノ藤棚ノ下ニ涼風ヲ浴ビ乍ラ、三人圓卓ヲ圍ミ、茶菓ヲ喫シツ、會談實ニ四時間、宿澤兄ハ具ニ草津ノ事情ヲ述べ、主許シ給ハバ一日モ速カニ來草セラレン事ヲ切ニ乞ヘリ。同兄ハ長ク布哇<sup>ハライ</sup>ニ在リシ關係上、英語ニ堪能ナリケレバ、未ダ日本語ニ不馴ナリシ女史ニ對シ、英語ヲ以テ遺憾ナク説明スルヲ得タリ、サレバ病者ニ深キ同情ト理解ヲ有セシ女史ハ、頗ル興味ヲソ、ラレ、且ツ宿澤兄ノ熱心ナル態度ニ魅了セラレ、全年七月ノ夏季休暇ヲ利用シテ、實地視察ヲ兼ネ病者慰問ノタメ上草スルコトヲ約シ、且ツ即座ニ金百圓ヲ草津傳道ノタメ、

金五十圓ヲ宿澤兄自身ノタメニ與ヘラレタリ。

宿澤兄ハ大イナル喜ビヲ以テ歸草シ、事ノ次第ヲ全部落民ニ告ゲタレバ、一同歡喜シテ、リー女史來草ノ日ヲ鶴首シテ待テリ。

宿澤兄更ニ告ゲテ曰ク「此人ハ英國ノ貴キ家柄ノ人ナレバ、尊敬ト謙讓ヲ以テ心ヨリ迎フベシ、我等ノタメニ眞ノ愛ヲ以テ眞ニ善キ働キヲナサルベキハ此方ナリ。此ノ人ノ足ヲ永ク此ノ地ニ止メンタメニ、良カラヌ印象ヲ與フルコト勿レ」ト。

扱テ時ハ來リヌ全年七月リー女史ハ、同働者ニシテ女史ノ日本語教師タル井上照子婦人傳道師ヲ同伴來草セラ。リー女史ノ氣高キ溫容ニ接シタル人々ハ、歡呼ノ聲ヲ發タンヨリハ、寧ロ幼兒ノ慈母ニ於ケル如ク、愛撫ノ笑顔ニ無限ノ慰メヲ得タリト語レリ。

宿澤兄初メ光鹽會員ノ案内ニテ下町一帶隈ナク視察シ、次デ北側高臺今ノ聖ニコラス館上道ノ處ニテ下町ヲ展望シ、對向ノ山色ヲ愛デ思フ處ヤアリケン、コレヲ賣ルヤ否ヤヲ問ハレタリ。此ノ山ハ地藏二八九ノ一上町一井善三郎氏ノ所有ナリシガ交渉ノ結果翌年三月賣買契約成立シ遂ニ、リー女史ノ下町ニ於ケル働キノ最初ノ本據トナリシモノ、今日「母様ノ山」ト稱スル處ナリ。

サテ、女史ハ可憐ナル病者ノ群ノタメニトテ約二週間滞在シテ、宿所ナル白根ホテルヨリ毎日朝マダキ下町ニ來リ、病者ノ家庭ヲ訪問シテ之ヲ慰メ、又ヨルダン・ホームニテ靈的集會ヲ開キ、二十一名ノ洗禮志願者ノタメニハ特別ニ其ノ準備教育ヲ援クル等、時ヲ忘レテ愛ノ勞ヲトラレタリ。サレド許サレタル日數モ盡キタレバ、再會ヲ契リ別レヲ惜シミツ、歸京ノ途ニ就カレタリ。

(此項ハ主トシテ高梨兄、相馬兄、池田兄、管野兄、淺野兄ノ談話ト大藤長老ノ本件ニ關スル原稿ニヨル)

第十八 小池・岸名兩兄ノ來草

リー女史御來草ノ翌月即チ大正四年八月、降臨教會ハ熱キ祈リト熱誠ヲ以テ、小池・岸名兩兄ヲ我ガ草津ニ送レリ。

八月九日熊本出發十一日草津到着、時既ニ宿澤兄ノ熱心ナル傳道ト、リー女史ノ來草ニヨリ光鹽會ハ多數會員ヲ有シ、宿澤・菅野兩兄ヲ中心トスルヨルダン・ホームハ、豫メ兩兄ノ宿所ニ充テラレシヲ以テ、着草ト共ニ全ホームニ入り、館員ト共ニソノ安着ヲ主ニ感謝シ、共ニ主ニ在ルモノノ幸福ヲ語り、傳道上ノ打合せヲナセリ。滞在六週間ノ長キ間、日水金定時集會ヲ公會所定ノ形式ニヨツテ禮拜ヲササゲ、其ノ他特別集會ヲ催フシテ求道者ヲ導キ、又個別訪問ニヨリ熱心ニ福音ノ傳道ニ當レリ。篤信ナル小池兄ノ事ハ既ニ少シク説キタリ、全兄ト共ニ初メテ草津ニ來レル岸名兄ハ山口縣ノ出身、小學校卒業頃發病シテ入院シタルモ、精力旺盛且ツ勉強家ナレバ獨學練磨日モ尚足ラザルガ如ク、年齒二十六ニシテ教會委員タリ、小光子ト稱シ殊ニ文ヲ良クシ、全教會病者傳道機關紙タル「救ノ光」ニ前後十餘年主筆タリ（昭和四年大阪ニ移ル）。サテ兩兄ノ來草ト共ニ、記念スベキ一ツノ事アリ、之聖愛園ノ設立ナリトス。次項ニ之ヲ記スベシ。

（本項ハ主トシテ小○金○兄、岸○小○子兄ヨリノ原稿ニヨル）

第十九 聖愛園

大正四年八月或ル夏ノ日ノ午後、板倉兄四五名ノ子供ヲ集メテ、御伽話ヤ遊戲等ヲ教ヘ居タリシニ、吉田兄之ヲ見テ曰ク「コハ善キ事ナリ、奮發シテ幼稚園ヲ開イテハ如何」ト。茲ニ於テ板倉兄ハ早速宿澤兄ノ門ヲ叩キ此ノ事ヲ諮リシニ、全兄ハ日曜學校教師ノ經驗モアリ、又先ニ加○灸○兄貸家住居中モ、附近ノ子供ヲ集メテ教ヘ

居タリシ事トテ、直チニ之ニ賛成シ、柔草中ノ小池・岸名兩兄ニモ相諮リテ、光鹽會役員會ヲ開ケリ。

即チ會長高石兄初メ、宿澤、相馬、板倉ノ諸兄等具體的方法ヲ協議シ、差當リ教室トシテ、濱名館倉庫裏側六疊ノ間ヲ拝借致シタキモノヲト、館主坂○松○郎兄ニ交渉シタルニ、無月謝ニテ子供ヲ教ヘントスル其ノ愛ノ働キノ趣旨ニ感ジ、然ラバ我モ無料ニテ教室ヲ提供セントテ、即座ニ其ノ申込ミヲ快諾セラレタリ。役員一同大イニ喜ビ其ノ義舉ニ感激シ、又一方課目ヲ定メ、板○鹿○郎兄主任トシテ毎日午後兒童ヲ集メテ聖歌ヲ教ヘ、キリスト教的教訓ヲ平易ニ説キ聞カセ、又イロハ四十七文字、簡單ナル算術ヲモ授ケタリ。或ル時ハ裏山ニ遊び、或ル時ハ昔學ビシ遊戲ヲ思ヒ出シテハコレヲ教ヘタリ。

兒童等ハ喜ビ一人又一人其ノ群ニ加ハリ、父兄ハ惡戯者ノ善キニ導カル、ヲ見テ深く感謝セリ。之實ニ後ノ聖愛幼稚園ノ濫觴ナリトス。

尚此ノ時高崎ノ盲學校ヲ出デタル眞島ト云ヌル人アリ。兒童ノ教育ニ興味ヲ有シ、且ツキリスト教ニ心ヲ傾ケ、來リテ大イニ其ノ働キヲ助ケタリ。又光鹽會婦人會ノ人々モ心ヲ合セテ善キ手傳ヲナセリ。

園兒ノ中ニハ加○菊○、宮○八○吉、管○幾○郎、坂○作○郎、高○義○ノ諸氏モアリキ。

扱テ、ヨルダン・ホームノ内容整フト共ニ、聖愛園モ亦教場ヲ此處ニ移シ、稍規則的ニ保育スルヲ得タリ、而シテ冬期積雪ノ候ヲ除キ、兎ニ角コレヲ繼續シテ聖愛幼稚園ノ成立ニマデ及ベリ。

泣キ出シタ子供ヲ慰メルタメニ苦心セシコト、大小便ノ世話ニ自ラノ無器用ヲ嘆キシコト等、當時男ノ保姆ノ役ヲ勤メタル人達ノ熱心ト共ニ今尙部落ノ語り草トナレリ。

(此項ハ相馬兄、吉田兄、小池兄、岸名兄等ニヨル)

## 第五章 草津ノ初穂

### 第二十 第一回幼兒聖洗式

大正四年夏ハ草津傳道ノ最高潮ニ達シタル時ニシテ、内外ノ男女宣教師・牧師ウツノ陸續トシテ來草シ、靈的集會ハ幾度トナク光鹽會ヲ中心トシテ開催セラレ、茲ニ多クノ兄弟ハ求道心ヲ起シ、讚美歌ノ如キハ好ンデ若キ人々ノ口ニ歌ハレ、宗教ト言ベバ先ヅキリスト教ニ第一指ヲ屈スルノ状態ニ迄至レリ。

リー女史退草後間モ無ク、大正四年八月十四日、米原長老ハ、ステパノ・ヒューレット長老同伴來草アリ、年毎ニ蒙ル主ノ御祝福ヲ心ヨリ喜バレタリ。長老ガ壯健ノ身ヲ以テ如何ナル重病者ヲモ少シモ嫌惡ノ色ナク、訪問シテ之ヲ慰メラレタル美シキ行爲ニ對シテハ信者未信者ノ別チナク深キ感謝ヲ表ハシ、生キ長ラヘテ斯クモヤサシキ師ニ巡リ合ヒテ幸福ナル哉ト喜ビ合ヘリ。相馬兄宅ニテハ病者ノ作りシモノナレバト辭退セシニモ不拘オカワラス、軒ノツルシ柿ヲ喜ンデ食シ、「澁柿ヤ烏モ食ハヌモノ乍ラ」ノ一句ヲ物シ、全夜光鹽會ニ於ケル説教ニテハ之ヲ演題トナシ、烏モ食ハヌ澁柿ノ今ハ變リテカク甘味トナレリ、柿ノ如ク我等罪ノ澁柿モ神ニ祝セラレ、潔メラレテ初メテ甘味ナル甘柿トナリ、神ノ美ハシキ供物トハナルベシト言フ意味ヲ説カレ、聽衆ニ深キ印象ヲ與ヘタリ。サテ、幼兒ヲ持ツ數名ノ熱心ナル求道者ハ先ヅ其ノ愛兒ノ罪ヨリ洗ハレテ主ノ群ニ加ヘラレン事ヲ欲シタルバ、翌八月十五日米原長老ハ四名ノ幼兒ニ洗禮ヲ施ス。之實ニ草津ニ於ケル開闢キキク以來ノ出來事ナリ、此レ實ニ最初ノ初穂ナリ、其ノ氏名左ノ如シ。

ハンナ 石○房○。ダニエル 横○ 清。マリヤ 神○ト○。サムエル 神○德○。

米原師ハ日光及ビ東京ヲ經テ全四年八月二十八日歸熊シタルモ、ヒューレット長老ハ尚白根ホテルニ滞在シ、

此ノ夏中毎日來リテ禮拜ヲ司リ、未信者ヲ指導セリ。又在水戸ノ宣教師ライト嬢ハオルガン一ケヲ寄贈セラレ、禮拜ニ一段ノ莊嚴味ヲ加ヘタルモ此ノ時ナリ。

如斯シテ下町ノ有力者ニシテ求道者トナレルモノアリ、各方面ニキリストノ光ガ勝利ヲ得ツ、アルヲ見テ、人々唯神ヲ崇メタリ。カノ施洗者ヨハネガ初メテ洗禮ヲ施シタル河ノ名ニ因ミテ立テル、ヨルダン・ホームニ於テ如斯我草津ニ於ケル初メテノ洗禮式ノ行ハレタルモ、亦奇シキ攝理ナラズヤ。

(此項主トシテ山中師ノ記錄、米原長老ノ來信、相馬兄、池田姉、稻垣姉等ノ談ニヨル)

マキム監督及ピアンドルス長老來訪ノ前ニ、當時前橋ナリシカ高崎ナリシカニ定住ノ執事大野要藏氏、アンドルス長老ノ命ニヨリ視察ニ來リタリトカ大野長老ノ談アリ、此ノ教會史ニ何モ見エズ調査ノ要アリ。

## 第二十一 マキム監督ノ來訪

當時日本聖公會古參ノ監督トシテ、公會ノ信望ヲ一身ニ集メタル、北東京地方部監督ジョン・マキム師ハ、牛込聖バルナバ教會所屬宣教師ミス・コンウォール・リー女史ノ來訪ニ依リテ、草津ニ在ル病者ノ群ト其ノ熱心ヲ具ニ聞キ、爾來此ノ會衆ヲ憶エテ祈リツ、アリシガ、遂ニ種々ナル懸案ノ解決ト、組織的傳道開始ノ必要上、大正四年九月十四日教務院傳道局長大藤鏗三郎師ヲ随ヘ、自ラ草津巡錫<sup>ビソツレキョク</sup>ノ御事ト決定シタリ。サレド監督ノ巨軀ヲ如何ナル乗物ニテ、最モ容易ニ此ノ山里マデ運ビ得ルカバ尚一ノ問題ナリキ。

當時ノ草津タルヤ交通不便ナル温泉ノ一ニシテ、之ニ達スルニ二途アリ。一途ハ沓掛停車場ニ信越線ヲ捨テ、馬背九里ト云フ封建時代其ノ儘ノ悠長ナル方法ニシテ、他ノ一途ハ前橋ヲ經テ道程凡ソ十九里ヲ行クニ電車四里、鐵道馬車五里ガタ馬車十里ト云フ方法ニシテ、最後ノ十里ハ中々ノ難嶮ナレバ、初メテノ者ハ多ク其ノ劇<sup>ドラマ</sup>シキ搖

方ニ心膽ヲ寒カラシメシト云フ。草津ニ赴カントセバ此ノ二路ノ中何レカヲ選バザルベカラザリシナリ。

然ルニ大正四年ノ春ヨリ澁川草津間ノ自動車道開通シ、前橋ヨリ僅カニ六時間ニテ草津ニ達スベシト宣傳シ、世人ハ之ヲハイカラ式草津行ト稱ヘタルモ、自動車ノ發明後幾何モ無ク、修理運轉ノ技術モ至ツテ未熟ノ時代ナレバ、予定ノ時間内ニ草津ニ到着スルハ極メテ困難ナリシト言フ。之ヲ知りテカ或ハ知ラズシテカ、監督一行ハ此ノ文明式方法ヲ採用スルコトニ決シ、先ヅ前橋ニ立寄り、十三日此處ニ一泊シ、翌十四日前橋聖公會牧師アンデルス長老ヲモ伴ヒ、午前八時前橋ヲ出發ス。

而シテ澁川九時發ノ自動車ニ乗車セント予想シタルニ、九時發トハ御客ノ數ト自分方ノ都合次第ニテアテニナラザル事ヲ知り、更ニ不正直ナル自動車ハ機械修理ノタメ、最早晝頃トナルモ出發ノ模様無ク、再三ノ督促ニテ午後二時漸ク動キ出シタリ、而モ途中ニ於テ故障百出依テ原町ニテ乗換自動車ヲ待ツ事一時間半、生來血ノ氣ノ多キアンデルス長老ハ、警察署長ヲ介シテ運轉手ニ強談スル等ノ珍景モ生ジ、此ノ日ニ草津ニ到着スルヤ否ヤヲ危ミタリシガ、辛クモ午後九時半、暗夜ノ山路ヲ辿リ、テ覺束ナクモ草津ヘ到着セリ。

話代ツテ我草津ニ於テハ大藤長老ヨリ來信アリテ監督巡錫ノ事ヲ聞キ、之實ニ我等病者ノ光榮且一代ノ面目ナリトテ、心ヨリ師ヲ迎フベク光鹽會員ノ緊張其ノ極ニ達シ、聖公會デ一番エライ人、日本デ唯一ノ神學博士様、現代ノ使徒、或ハ生神様ノ御來等ト稱ヘ、又世ノ如何ナル宗派ノ管長モ、善知識モ、住職モ敢ヘテ近ズカザル此ノ里ニサテモ有難キ事ヨト感激ニ咽ビ、今ヤ宗派の偏狭心、個人的反抗等ノ一切ヲ超越シ、宿屋組合モ共救會モ夫婦者モ獨身者モ全部落一致シテ、監督歡迎ノ準備ヲ整ヘタリ。

サレド予メ通知セラレタル到着時刻午後二時ニ至ルモ一行ノ影ヲ認メズ、三時ニ至ルモ四時ニ至ルモ更ニ其ノ模様ナケレバ、出迎ヘニ來集セル人々ノ喜ビハ何時カ不安ト、憂ヘトニテ滿サレ、數名ノ有志ハ最早堪ヘ兼ネテ

コハタダゴトナラジ、我等ノタメニ來ルモノナラバ我等又責任アリ、一行ノ乗レル自動車ニ出合フ處マデ、何處マデモ迎ヘニ行カント原町ヲ指シテ雄々シク出發セリ。

サテ一行ハ谷所<sup>ヤト</sup>ニテバンクシテ修理中ナル一臺ノ自動車ヲ見付ケ、コレナルヤト疑ヒツツ近寄レバ將シテ一行ナリケレバ、師父ヲ仰ギテ喜ビト感謝ニ眼潤ヒツツ挨拶ヲナシ、自動車修繕ノ手傳ヲナシ、又阪路ニ至レバ後押シヲナシツ、上町ニ到着シタルハ實ニ九時半、料亭ヲ除キテハ早人々眠リニ就キシカ窓ヲ洩ル、燈火稀ナリキ。上町ヲ通り下町ニ近ヅク程ニ人々ノドヨメキ萬歳ノ聲、基督教光鹽會ト銘打テル高張り高ク掲ゲラレ五十名内外ノ會員ハ云フニモ及バズ姉ハ手ニ手ニ丸提灯ヲ翳シテ、熱狂シテ師ヲ出迎ヘタリ。其ノ光景ハ壯觀ト云ハシヨリハ、隨喜ノ涙ノ流ル、情景ト譯スベク、運轉手スライタク驚キ、カカル盛大ナル歡迎ハ此地ニシテハ、實ニ未曾有ノ事ナリト語レリ。然リ監督一行ノ入草ハ確カニ草津歴史ニ新意義ヲ加フル點ニ於テ未曾有ノ重大事實ナリシナリ。草津聖公會ハ此ノ日誕生ノ一步ヲ踏ミ出セリト云フモ過言ナラジト或人語レリ。

明クル九月十五日午前ハ一行ノ宿泊所ナル白根ホテルニ於テ、宿○薰兄ヲ招キ、其ノ勞ヲ犒<sup>カウ</sup>ヒ、共ニ傳道上ノ協議ヲナシ、宿澤兄及ビ光鹽會員有志ニ案内セラレテ、下町一般ノ視察ヲ行ハレタリ。

世ニ捨テラレ僅カニ一樓<sup>イチム</sup>ノ望ミヲ抱キテ來集セル病者ノ群ノ慘<sup>イ</sup>マシキ治療法、ソハ生キ乍ラニシテ、我ト我身ヲ焼キ盡ス點灸療法、墓場ナラヌニ煙々立昇ル線香ノ煙、異様ノ臭氣、異様ノ形相見ルモノ聞クモノ悉ク一行ノ胸ヲ扶<sup>ヲ</sup>ルガ如キモノアリシ由。

午前十一時半頃一行ハ光鹽會事務所タルヨルダン・ホームニ至ル。其處ニハ既ニ三十名バカリノ善男善女靜カニ列座シ、聖書ヲ開キ居ルヲ見タリ。

監督ハ宿澤兄ヲ顧ミテ、何ゾ講義ニテモアルニヤト、兄答ヘテ曰ク、彼等ハ教ヲ受ケントテ集リ居ルナリト、

一行ハ其ノ熱心ニ動かサレテ、何事カヲ語ラザルヲ得ズ、即チ監督ト大藤長老トハ交々立チテ一場ノ挨拶ト短話ヲ試ミ、午後ノ再會ヲ約シテ別レタリ。ホテルニ歸リテ晝食ヲ取り、直チニ下町ニ向ヒテ光鹽會ニ至リ、午後二時ヨリアンデルス長老ハ聖書講義ヲナシ、全三時ヨリ監督司式ニテ十九名ノ幼兒ニ洗禮ノ儀ハ嚴カニ行ハレタリ。之實ニ草津ニ於ケル幼兒第二回目ノ受洗ナリ。主ノ御名ハ讃ムベキ哉。

彼等ノ多數ハ十歳前後ノ美ハシキ少年少女ニシテ、其ノ中ニハ數名ノ嬰兒ヲモ含マレタリ。何レモ病者ナル求道者ノ子女ナリ、其ノ子、其ノ娘ヲ熱愛スルガ故ニ、自ラヨリ先ニシテ貴キ洗ヒノ聖典ヲ受ケシメ、限り無キ恩惠ノ中ニ入レントスルナリ。此ノ會ノ來集者約百名ト見受ケラレタリ。

壯年洗禮志願者二十名亦切ニ監督ヨリノ受洗ヲ願ヒタレド、諸種ノ都合上、次回聖職來訪ノ節ニ延期サル、コト、ナリタリ。

カクテ夜ハ公開基督講演會ヲ開キ、大藤長老ハ「人ノ兩性」ト題シテ前座ヲ勤メ、マキム監督ハ「神ノ子ノ顯現」ト題シテ、熱心ニ救靈ノ道ヲ説カレタリ。聽衆約百二・三十名、イト静カニ且ツ熱心ニ聽聞セリ。

一行ハ翌十六日早朝一同ニ見送ラレテ歸途ニ着ケリ。唯大藤長老ノミハ、二年程前、米國ヨリ歸航シ布哇<sup>ハワイ</sup>ニ立寄りシ時ヨリ、我宿澤兄ト懇意トナリシ間柄ナリケレバ、草々ノ話盡キズ、宿澤兄ノ懇望ニ依リテ更ニ一日止ル事トナリ、十六日午前ハ宿澤兄トノ懇談ニ時ヲ過シ、午後ハ聖書講義並ニ光鹽會ノ送別懇親會ニ列シ、夜ハ「人格ノ向上」ト題シテ最後ノ説教ヲ試ミ、十七日午前八時多數ノ病者ニ別レテ惜ミツ、自動車ニテ草津ヲ發シタリ。下町ニテハ一行ノ來訪ヲ大イナル徳トシ、草津ノ寫眞一組ヲ三名ニ贈リテ感謝ノ意ヲ表シタリ。

幾何モナク、草津ノ群ニ心打タレシ監督ハ、靈筆ヲ呵<sup>カ</sup>シテ米國一流ノ宗教雜誌「生ケル教會」紙上ニ草津訪問記ヲ書カレタレバ、此ノ時ヨリ草津ノ名世ニ知ラレ、全聖公會ノ祈禱ノ題トハナレリ。

(本項ハ主トシテ、週報三十二卷第八号、大藤師草津訪問記、管野兄、相馬兄、高梨兄等ノ談ニ依ル)

## 第二十二 所屬問題

此處ニテ、マキム監督ノ來草事情ト所屬問題ニ就キ今少シク述ベンニ、大正四年八月上旬新ラシキ希望ニ滿サレテ、草津訪問ノ旅ヨリ歸京セル、コンウォール・リー女史ハ早速マキム監督ヲ訪レ、草津ニアル會衆ノ事情ヲ具ニ報告シ、且ツ一日モ早く規則的傳道ヲ開始セラレン事ヲ願ヒ、主許シ給ハバ牛込聖バルナバ教會ノ働キヲ辭シテ、草津傳道ノタメ獻身センコトヲ乞ヘリ、實ハ此ノ時マデマキム監督モ草津會衆ノ存在ニ介意スルモノナカリシト言フ。蓋シ日々ノ激シキ聖戰ニ於テ、既設教會ノ維持ト擴張ニ專念スルアマリ、公會ノ教會ナキ地方ノ事情ニ暗キ又止ムヲ得ザルコトナリ況ンヤ特種部落ナルヲヤ。

熊本降臨教會ノ信者達コソ、詳ラカニ草津傳道地ノ事情ヲ知リタラメ、何方ヨリ訪レンモ交通不便ノ山ノ中ノコトナレバ、東京ノ地マデ知ラレンニ由ナカリシナリ。然レドコンウォール・リー女史ノ歸京報告ニヨリテ、癩患者間ノ傳道極メテ有望ナルコト初メテ判明シ、中央ニテモ多大ノ興味ヲ喚起スルニ至リタルモ、如何ニセン熊本教會ノ開拓セル傳道地ナレバ、先ヅ所屬問題ヲ解決セザルベカラズ、マキム監督ハ草津ノ地理的ニ自己ノ管轄スル北東京地方部ニ屬スルコトヲ發見シテ以來、牧者ナキ群ノ今ニモ野ノ狼ニ犯サレン事ヲ思ヒテ、先ヅ自ラ實地踏査シ事情ヲ調査シ、徐ロ主ノ御爲ニ最善ノ方法ヲ講ゼント、多忙ノ時ヲ割キテ、前述ノ如ク大正四年九月十四日ノ草津訪問トハナリタルナリ。

## 第五章 草津ノ初穂

マキム監督ノ來草シタル時ハ、既ニ熊本降臨教會米原長老等ニ依ッテ第一回ノ幼兒洗禮モ施サレ、其ノ傳道開始ヨリ二年以上ヲ經過シ居ル次第ナルモ、山河幾百里ヲ隔ツル母教會トノ連絡意ノ如クナラザルコトナレバ、監

督ハ草津傳道ノ將來ノタメニ、此ノ際斷然地理的區劃ニ從ヒ、自己ノ責任下ニオク事ヲ先決問題ナリト思考シ、草津巡錫ヨリ歸京後、九州地方部監督ヲ通シテ、降臨教會ト種々交渉スル處アリ。コレニヨリテ所屬問題解決シ此ノ時ヨリ我方草津會衆ハ北東京地方部ニ屬シ、熊本ヨリ一切ノ手ヲ斷ツ事トナリ、來草中ノ小池・岸名兩兄モ別レヲ惜ミテ、歸熊ノ途ニ就キ、右交渉ノタメ未解決ノママ殘サレタル第一回壯年聖洗式ハ、マキム監督ノ命ニヨリ最寄教會牧師タル前橋ノアンデルス長老ニヨツテ施行サル、運ビトナレリ。

第二十三 第一回壯年聖洗式

師所持ノ記錄ニヨレバ、大正四年十月三十日アンデルス長老御天妻ハ宣教師メレデス長老ト共ニ來草シ、十一月四日午前七時聖餐式、十時禮拜式、午後一時聖書講義、二時洗禮式、午後七時洗禮志願式及ビ說教會ヲ行フ。實ニ當地ニ於ケル第一回ノ壯年聖洗式ナリ。此ノ記念スベキ式ニ於テ受洗者男十二名、女九名、計二十一名ニシテ、其ノ氏名左ノ如シ。

ステパノ 横○武○。アンデレ 飛○機○助。ルカ 管○丈○。ペテロ 石○唯○。サムエル 勝○雄。ダニエル 郡○恒○郎。ピリポ 淺○賢○。ヤコブ 中○喜○。マタイ 石○八○。パウロ 山中政三。ヨハネ 相○鎔○。マリア 相○コ○。トマス 武○太○。タビタ 横○キ○子。ハンナ 宮○カ○子。エリザベツ 稀○温○。マリア 萩○ト○。ハンナ 土○ユ○。マルタ 吉○ヨ○。アンナ 竹○タ○。マルタ 丸○ハ○。尚洗禮志願式受領者ハ男二名、女二名、計四名ナリシ。

第二十四 ヨルダンホームノ解散ト木曜會

既記ノ如クヨルダンホームノ使命ト草津傳道トノ地位ハ極メテ重要ナリシニ不<sup>オカワラフ</sup>拘、不幸ニモ大正五年四月經營者タル管○丈○兄ノ家庭ノ事情上、止ムヲ得ズ解散スルコトナリ、館員ハ名殘ヲ惜ミツ、夫々他ニ引越スコトトナレリ。何故ニカ、ル結果ヲ將來セシカ、此ノ事ニツキテハ複雜ナル事情アレバ、第四十四宿澤兄退草ノ項ニテ語ラントス。扱テホームノ解散ト共ニ教友ノ家族的親睦ト信仰ノ共勵ヲ目的トシ、ヨルダンホーム同人タリシ宿澤薰兄主宰者トナリテ、木曜會ナル信者ノ團體ヲ組織セラレタリシガ此ノ會ハ二人一組トナリ主トシテ宅廻リニテ集會ヲ持テリ。宿澤兄、飛田兄（一組）、相○鎔○兄夫妻（一組）、高○與○兄夫妻（一組）ヲ主タル會員トス。毎週一回木曜日ノ晚ニ定時集會ヲ開クヲ以テ、木曜會ト名付ケシモノ。會員一週間分十錢ヲ持寄り、集會後親睦的茶話會ニ移ルヲ例トセリ。此ノ集會ハ信仰共勵上頗ル有意義ナル會ナリシモ、大正六年五月彼ノ宿澤兄退草ノコトアリテヨリ自然消滅トナレリ。

（此項ハ主トシテ相馬兄、管野兄、高梨兄ノ談話ニヨル）

### 第二十五 教會設立前ノ一般情勢

大正四年九月末ノ調査ニヨレバ、湯之澤ノ定住者二百五十二名、戸數一〇一戸。之ニ浴客百二十名ヲ加算シ三百七十二名。其ノ職別ヲ擧グレバ旅館十六軒、商店十四軒、飲食店二軒、理髮店二軒、農業二十軒等ニシテ、其ノ他大工アリ、左官アリ、建具店アリ、然レド病者ガ朽チ行ク身ヲ養ヒツツナスコトナレバ、世ノソレノ如ク商賣繁昌ト言フ程ニハアラザルモ、健康アル者ハ自活ノ道立タズトイフコトナカリキ。

由來本病者ノ集合地ハ熊本ノ本妙寺ノ如ク、甲斐身延山ノ如ク、又四國八十八ヶ所ノ如ク、信仰ヲ中心トシタル場所タルモ、此ノ地ハ全ク然ラズ、湧出スル温泉ニ全運命ヲ托シテ來集スル人々ニテ極<sup>ゴツ</sup>二三ノ者ヲ除キ、其

ノ心情ハ寧<sup>ム</sup>ク無宗教ニ近キ状態ナリキ。唯溫泉ヲ中心トシテ資力アル浴客ト、之ニ因ッテ衣食スル人々ノ群ナリキ。

扱テ最後ノ望ミヲ囑シテ來集スル多クノ病者ノ第一ノ驚キハ、無數ノ同類アリテ、世ニ在リシ時ノ如キ壓迫モ氣兼モ感ゼズ、自由ニ起居シ得ルコトナリ、然レドコノ靈泉ト雖モ決シテ全治ニ導クモノニアラザレバ、遂ニ悶悶ノ情慰スルニ道無ク、酒ニ走り、賭博ニ加ハリ、人倫ノ道ヲ破リ、肉ノ敗北者ナル病者ハ此地ニ來ッテ、更ニ靈ノ敗北者トナリ終ルコトガ常ナリキ。

然レト光鹽會成立以來其ノ行動ハ狭キ土地ノ人々ニ大覺醒ヲ與へ、僅カ二年有餘ニシテ全村盡クキリスト教ノ同情者、或ハ敬仰者トナリ、風紀一變シ、至ル處讚美ノ聲ヲ聞クニ至レリ。記録ニ依レバキリスト教光鹽會ハ此ノ年ノ九月三十日ニ於テ、會員數七十二名ヲ擁スル下町ニ於ケル一大勢力タリ、約十名ノ信者ヨリ成ルヨルダンホーム、十二名ノ生徒ヲ有スル聖愛園ヲ加ヘテ、光鹽會、ヨルダンホーム、聖愛園ヲ當地基督教活動ノ三機關トナス。

此ノ年ノ夏熊本ノヒューレット長老、米原長老、東京ヨリリリー女史、水戸ヨリライト女史、東京ノマキム監督大藤長老、アンデルス長老等ノ訪問ニ依リ、ソノ信仰ハ勵マサレ、整ヘラレテ中四十五名ノ多數受洗ノ惠ヲ受ケ教會設立ノ機運ハ今ヤ月日ト共ニ熟シツツアリシ事前述セリ。

大正四年九月マキム師ノ巡錫<sup>コンビク</sup>ニ從ヒテ來草セル大藤長老ハ歸京後週報紙上ニ興味アル意見ヲ述ベタリ。曰ク「草津湯之澤ノ傳道ハ前途有望ナリ。英國人コンウォール・リー嬢ハ身ヲ獻ゲテ同地ニ永住センガタメニ土地ヲ買入レ、目下住宅新築ニツキ考察中ナリ。將來婦人患者救護所設置ノ計畫アリトカ。同地ニハ部落専用ノ小學校及幼稚園ヲ缺ク。若シ我方ニテ之ヲ實行スルノ意アラバ、草津町當局ハ喜ビテ補助ヲ與フルナラン、又若シ同地

ニ威嚴アル一教會堂ノ新築サレテ清キチャイムノ音、朝夕ノ霧ヲ破ッテ遠近ニ響キ渡ル時來ラバ、恐ラクハ我國空前ノ模範的村落教會ヲ現出スルニ至ラン。コレ蓋シ予輩一人ノ夢想ノミニアラザルベシト。將シクコノ豫言ハ適中セリ、師ノ先見ノ明驚クベシ。

扱テ前記諸師ノ來草ニ相次ギ其ノ殿<sup>レンガ</sup>トシテ來草ヨキ指導ヲ與ヘタルハ安〇千〇郎師ナリ。師ハヨルダンホーム宿澤兄ノ招キニ依リ、大正四年十月三十日アンデルス長老一行ト同車ニテ來草、直チニヨルダンホームニ入り約三週間滞在、其ノ間毎日靈的集會ヲ指導シ聖書講義ヲナシ、殊ニ受洗者・求道者ヲ教ヘタリ、黎明ノ頃山ニ登リテヨルダンホーム員ト共ニ祈禱ヲナス、今日ノ早天祈禱會ハ此ノ時ニ端ヲ發スルモノナリ。

記錄ニ依レバ前橋聖公會牧師アンデルス長老ハ、此ノ年ノ十二月二十日ヲ以テ正式ニ草津傳道地會衆ノ管理長老ヲ兼ヌベキ命ヲ拜セリ。

如斯シテ多事多恵ノ大正四年ハ暮レ、一同希望ニ滿チタル大正五年ノ新春ヲ迎フルコトナレリ。勿論積雪期ノコトナレバ宅廻リ集會ヲ開キ、或ハ大親睦會ヲ催ホス等、今ヤ主ニ在ル者ノ喜ビト力ハ何者モ奪フ能ハズ、日ニ日ニ其ノ基礎ヲ固メテ其ノ上ニ建テラル、モノヲ待チツツアルモノノ如クナリキ。

(此項週報記事、山中師記錄、前區長淺〇勝〇郎氏ノ談等ニヨル)

## 第二期 創立時代

### 第六章 聖バルナバ教會ノ創立

## 第二十六 コンウォール・リー女史ノ來任

明ケテ大正五年四月二十日主ノ御苦難ヲ紀念スル大齋ノ嚴カナル奉仕ヲ終ヘシコンウォール・リー女史ハ、輝カシキ復活ト共ニ、草津傳道地會衆ノタメノ一婦人傳道師ノ資格ヲ以テ來任セラレタリ。野山ニハ所々未ダ鹿ノ子斑ノ雪モ残り居タリ。此ノ日恰モ春季消防組點檢ノ日ナリケレバ、宿澤兄、菅野兄、高梨兄等皆消防組ノ正服正帽ノママ出迎ヘタリ。

リー女史ハ來草ニ先ダツコト二ヶ月前、予メ草津ノ働キノ本據トナスベキ若干ノ土地ヲ入手スルノ必要ヲ認メ前年來草ノ節見定メ置キシ山林ヲ購入スベク、東京ヨリ手紙ヲ以テ之ヲ宿澤兄ニ依頼セリ、依ツテ宿澤兄ハ上町ノ事情ニ通ズル山中政三師ニ相談シ、山中師ハ更ニ親戚ナル中澤力藏兄ニ話シタルニ、一井善三郎氏ノ所有ナル事判明セシカバ、宿澤兄ト山中師ハ相携ヘテ一井氏ヲ訪問シ交渉ノ結果、山林二筆一町六反歩（四千八十坪）一千百圓ト二千七百圓ノ二口合計三千八百圓ニテ賣買契約成立シタリ。之今日「母様ノ山」ト稱スル處ノモノニシテ、下町ニ於ケル働キノ本據トナリ、又公會ノ所有ニ歸シタル最初ノ不動産ナリトス。

女史ノ略歴ニツキ洩レ承ル處ヲ摘記スレバ、女史ハ一八五七年五月二十日英國カンタベリー市ニ生ル、英國名門ノ出ニシテ、父ハ曾ツテ印度駐劄軍司令トシテ勇名ヲ馳セタル高位ノ將軍タリ。女史ハ實ニ其ノ一人娘ナリトス。ハイ・リーノ宏壯ナル邸宅ハ輪奐ノ美ヲ蒐メ、邸内ニハ鬱蒼タル森ノ間ニ家族及ビ使用人約二百名ヲ容ル、壯麗ナル家族教會ヲモ有セリ。保守的ナル英國貴族ノ令嬢トシテ、何不足無ク育テラレ、高尚ナル教育ヲ受ケ更ニフランスニ留學シテ、繪畫・音樂ヲ修ム。文學・繪畫・音樂ニハ最モ長ジ、一世ノ才媛ト謳ハレタリ。父母ヲ失ヒ相當ノ財産ヲ相續スルニ及ンデ、此ノ財産ト自己ノ餘生ヲ人類ノタメ最有意義ニ使用センコトヲ祈願シ居タリシガ、此ノ時髣髴トシテ其ノ心頭ニ浮ビタルハ、嘗ツテ母ニ連レラレテ世界漫遊ノ途ニ上リシ時、身ト心ニ親

シミタル日本ノ風物ナリシ。サレバ明治四十一年單身日本ニ渡來シ、其ノ教派ヲ同ジウスル日本聖公會ニ屬シテ東京、横濱、沼津等ニ於テ、一宣教師トシテ主ノ御爲ニ働カルルコトナレリ。

其ノ間熊本ニ回春病院ヲ經營シテ、本病者ヲ救護シツツアリシ同國人、ハンナ・リデル女史ノ事業及ビ東京下目黒ニアル慰癘園ノ事業等ヲ訪問シツツアル間ニ、自然其ノ温キ胸中ニ湧キ起リシハ、癩病者ニ對スル愛憐ノ情ナリキ。

時ハ、大正四年六月、東京牛込ナル聖バルナバ教會ニ程近キ、女史ノ寓居ヲ訪レタル病者ナル一青年宿〇薰兄ヲ通シテ、女史ハ初メテ草津ヲ知り、其ノ乞ニヨリテ同年八月井上婦人傳道師同伴、來草シタル事情ハ前章ニ述ベタルガ如シ、而シテ其ノ實地視察ト二週間ノ滞在ニ依リ、草津ニ在ル病者間傳道ノ一日モ<sup>ユガ</sup>忽セニスベカラザルヲ看取シ、茲ニ一大決心ヲ以テ其ノ高貴ナル餘生ヲ病者ニ獻ゲ、屍ヲ草津ノ山ニ埋ムベク、永住ノ目的ヲ以テ來任シタルモノナリ。

### 第二十七 満足ノ家（満足館）

來草ト共ニ先ツ上町白根神社下、小林道三氏所有木造家屋一棟ヲ二百五十圓ニテ買受ケ、之ヲ「満足ノ家」ト命名シ、既ニ買入レタル山ノ間ニ自己住宅ノ出來上ル迄之ニ住居シ、毎日下町ノ病者ヲ訪問シ、求道者ヲ教ヘ、集會ヲ導ク等、救靈ノ雄々シキ働キノスタートハ切ラレタリ。

扱テ上町ノ或人曰ク「英國ノ一貴族其ノ宿ル陋屋ヲ満足ノ家ト呼ブ、サレド満足何處ニアルベキ、宏壯ナル邸宅今ハ猫額程ノ借地ノミ、華麗ナル樓殿今ハ僅カ膝ヲ谷ルル三室ノミ、幾十ノ侍女使用人今ハ炊婦一人ノミ、名流ヲ誇ル紳士淑女ノ交遊宴樂今ハ腐敗ト膿汁ニ覆ハルル病者アルノミ、草深キ山家ニ不便不自由ノ生活、如何デ

満足有り得ベキヤト。

満足ノ家（満足館・大正十四年十月撮ス）



第二十八 慈愛ノ家

幾何モ無ク大正五年六月、山ノ東端景勝ノ地ニ、二階建三十坪ノ木造家屋、病者ナル大工飯〇久〇兄ノ手ニ依ッテ落成シタリ。總工費一千七百圓、依ッテ之ヲ「慈愛ノ家」ト名付ケ、早速之ニ移リ住ヒタリ。

此ノ地一帯モト恐シキマデ生ヒ茂レル能笹ノ藪ナリシガ、之ヲ切り開キ、險シキヲ平ゲ、新シク道路ヲ開ク等、其ノ事業ノ如キ多クノ困難ヲ伴ヒタルモ、遂ニ工成リテ來リ住ムニ林間ノ静寂ハ讀書ニ宜ク、静思ニ良ク、祈禱ニ良ク、殊ニ美シキ眺望ハ眼ヲ樂シマシメ溪流ノセセラギ耳ヲ樂シマシム。此ノ時ヨリ今日ニ至ルマデ、教母ノ夏期中ノ住宅タリ。又來訪者ノ宿所ニ當テラルル所以ナリトス。

第二十九 平和ノ家（平和館）

慈愛ノ家タルヤ元ヨリ山ノ中ノ一軒家ナレバ、冬期積雪ノ候ハ通路杜絶シ、生活困難ナルヲ以テ、更ニ地藏坂上ニ面セル町續キノ地ニ、木造一棟三室ヲ建テ（工

第六章 聖バルナバ教會ノ創立

費一千五百圓)之ニ「平和ノ家」ト命名シ、主トシテ上町傳道及幼稚園、日曜學校ノ教室ニ充テ、一部ヲ冬季住宅ニ用ヒタリ。扱テ白根神社下ニ在リシ満足ノ家ハ、其ノ後數年ノ間冬季積雪期ノ住宅トナリオリシモ、醫師布施氏土地ヲ買收スルニ及ビ、立退キヲ乞ハレタルヲ以テ大正十年頃平和ノ家前隣(現在ノ位置)ニ移シ、或ル時ハ働人ノ住宅トナリ、或ル時ハ聖公會内同勞者ニ夏期避暑用ニ提供セラレ、聖マーガレット館ノ創設後、舎監ミス・マギルノ住宅トナリ、或ハ日曜學校、幼稚園ノ教室トナリテ今日ニ至ル。

平和ノ家(平和館)ハ専ラ上町傳道ノタメ使用セラレ上町幼稚園並ニ日曜學校ノ教室タリ。後工費一千六百五十圓ヲ以テ、別館二階建上二下二室ヲ建設シ、兼ネテ牧師館トシテ、山中執事ノ住ム處トナレリ。

慈愛ノ家モ二階ヲ建増シ、更ニ其ノ東北側傾斜ノ地ニ四阿屋ヲ建テ、小集會並ニ祈禱ノ處トナシ、前述ノ如ク夏期間女史ノ住居トナル外、來草ノ同勞者又ハ信者ノ宿泊所トシテ開放セラレ、以テ今日ニ至ルモノナリ。

(高梨兄、相馬兄、池田姉、飯○久○兄ノ談話及ビ山中師ノ記錄等ニヨル)

平和ノ家(平和館)・上町傳道館



## 第三十 聖バルナバ教會ノ創立

リー女史ノ來任ニヨリテ、優レタル靈的指導者ヲ與ヘラレタリ。サレド未ダ定時禮拜ヲ執行スベキ、特定ナル場所ヲ有セズ、又教會ト稱スベキ公定ノ組織體モ有セズ、サレバリー女史ノ最モ切實ナル願ヒノ一ツハ、此ノ地ニ一日モ速カニ公會ノ肢、眞理ト恩惠ノ源泉タル、教會ノ設立セラレ、且ツ會衆ノタメニ一ノ禮拜堂ヲ與ヘラレンコトナリシナリ。

蓋シ肉ノ生活ニ敗レ、不治ノ醜骸シユウカイヲ抱イテ、此ノ世ニ何等ノ希望無キ病者達ニ接スルコト多ケレバ多キ程、彼等ニ眞ノ慰安ヲ與ヘ、甦生ノ希望ヲ齎ラスモノハ、宗教ノ外ニ全ク何等ノ法途無キ事ヲ、愈々深く痛感シタルヲ以テナリ。

宿澤兄初メ光鹽會員一同モ亦全ク同ジ思ヒニテ、殊ニ大正四年三月ヨリ信者團結ノ中心トナリ、集會所トナリ來リシヨルダンホームガ大正五年四月解散トナリテヨリ、恰好ノ禮拜室ヲ得ル事難ク、且ツ會員ノ集會ヲ催スニモ種々ノ支障ヲ感ジタル所ナレバ、リー女史ノ來任定住決定ト共ニ、此ノ問題モ亦一日モ速カニ解決セラレンコトヲ切願シ、熱心ニ祈リ居タリ。

思フニ去ル大正二年八月米原長老ノ來草以來年毎ニ信者ノ數ヲ増シ、光鹽會員ハ此ノ時八十名ノ多數ニ達シ、其ノ基礎漸ク定マリ、殊ニ前二回ノ聖洗式ニ於テ新生ノ恩惠ニ預リ、主ノ方舟フナボネニ正シク受ケ容レラレシ四十五名ノ兄弟アリ。更ニ十數名ノ求道者アリ。小ナリトイヘドモ獨立教會ヲ組織スルニ十分ナルヲ思ハシム。

サレバ設立ノ機運ハ漸ク熟シ來リ、遂ニ大正五年六月先ヅ會堂トナルニ最モ適當ナル建物ヲ得ント欲シ、數ケノ候補建物中ヨリ選考ノ結果、光鹽會事務所タリ又ヨルダンホームタリシ松村館ノ別館ヲ臨時借用シ、新教會ニ當ツルノ案ヲ得タリ。

此ノ家タルヤ大正二年八月、米原長老ガ草津傳道ノ第一聲ヲ擧ゲタル記念ノ處ニシテ、亦最モ屢々靈的集會開催セラレ、名士ノ講演アリ、嚴カナル聖洗式アリ、信者ニトリテハ既ニ一種ノ愛着ト憧憬ヲ有スル處ノモノナリキ。且ツ又教母ノ山ニ近く、從ツテ教母ノ住宅ニ近接シ、部落ノ略々中央ニ位スルヲ以テ、會衆ノ集會ニ至便ナリ又坂ヲ昇リテ一段高ケレバ神ヲ拜スルニ應ハシク、而モ病者ノ集會ニ差程ノ重キ負擔トナル程ノ坂路ナラズ、浴客ノ喧噪時ニ耳朶ヲ打ツトモ、他ノ場所ニ比較スレバ靜カナルコト同日ノ談ニアラズ、サレバ教會敷地トシテハ依然第一候補地タリシナリ。

此ノ家ハ亦光鹽會中ノ熱心黨ナリシ管○丈○兄ノ所有ナリシカバ、リー女史ノ内意ヲ受ケテ、宿澤兄、山中政三兄ノ交渉ニ赴クヤ欣然之ヲ迎へ、利害關係ヲ離レテ教會ノタメ提供スルコトノ約ヲ得タリ。

サレド財産困難ノ時代ナリシヲ以テ、當分借家住宅ノコトニ決シタリシガ、其ノ後幾何モ無ク購入資金一千三百圓ヲマキム監督ヲ通シテ、米國聖公會ヨリ與ヘラレタルヲ以テ、日本エビスコバル宣教師社團ノ名儀ニテ贈記ヲ了シタリ。

サテ設立スベキ新教會ニ如何ナル名稱ヲ附スベキヤニ就キ、有志ノ間ニ諸種ノ意見アリ、或ハ光鹽會ノ名稱ヲ其ノママ光鹽教會トスベシト言ヒ、或ハ單ニ草津教會ガ可ナラント言ヒ、或ハ聖徒ノ名ヲ冠シテハ如何ト、唱ヘタル者アリシガ、最後ニ之ヲリー女史ニ一任スルコトトナリタリ。リー女史ハ偶々所要ノタメ上京中ナリシヲ以テ、急ギコノ旨ヲ通知シタルニ、聖ルカ教會、聖バルナバ教會、其ノ他二三ノ會名ヲ書キ連ネテ、其ノ中ヨリ選定スル様トノ回答アリ。依テ再ビ幹部會ヲ開キタルニ、慰メノ子聖徒バルナバノ名ヲ冠スルコソ最モ應ハシケレト、茲ニ意見一致シコレヲリー母上ニ回答スルト共ニ諸般ノ準備ヲ整へ、大正五年六月十一日聖バルナバ日ヲ以テ信徒及ビ光鹽會ノ總會ヲ開キ、茲ニ其ノ協議ヲ經テ、新教會草津聖バルナバ教會ハ勇シキ嗚々ノ聲ヲ擧ゲタリ。

蓋シ「慰メノ子」ノ教會ヲ通シテ日毎ニ慰メラレ、新シキ生命ヲ受ケツツ、彼ニ倣ヒテ良キ信仰ニ進ミ、彼ノ如キ、病メル姉ニ勸メト慰メトヲ與へ、彼ノ如ク傳道ニ熱心ナランコトハ、創立當時ノ人々ノ胸中ニ溢レシ願望ナリキ。

此ノ日新教會ノ管理長老タルベキ、アール・ダブリュー・アンデルス師ハ、前橋ニアリシ神學博士小島茂雄師同伴來草シテ式ヲ司リ公會法規ノ命ズル處ニ從ヒ、教會委員ノ選舉ヲ行フ。傳道師補タル宿○薰兄ハ之ヲ別格トシ、全信徒中ヨリ二名ヲ選舉ス。教會最初ノ委員トシテ當選ノ榮譽ヲ擔ヒタルハ、相○鎰○兄ト板○松○郎兄ナリ。又此時第二回壯年聖洗式モ行ハレタリ。

アンデルス長老ハ前橋聖公會ヲ牧スルヲ以テ、毎週來草スルコト能ハザリシモ、宿澤傳道師、リー教母ヲ補ケ毎日曜日ノ早晚禱ハ勿論、嘆願、傳道說教マデ悉ク此ノ時ヨリ新教會ニ於テ行ハレ、恩惠ト眞理ノ泉ハ此處ヨリ溢レ出デテ、主ニ在ル民ヲ潤セリ。而シテ新教會ノ事業ハリー女史ヲ中心ニ宿澤兄、井上婦人傳道師等ノ獻身的働キニ依リテ、日ニ日ニ成長ノ一步々々ヲ運ビタリ。

大正六年七月二十七日マキム監督來草、前二回ニ受洗セル姉中按手準備全ク成リシ者ニ按手ノ禮ヲ行ヒ、續イテ主ノ貴キ血ト肉ニアズカル草津最初ノ嚴カナル聖餐式ヲ執行セラレタリ。

最初ノ教會委員ニ擧ゲラレタル二兄ノ中相○鎰○兄ハ失明シタルニモ不拘、現在ニ至ルマデ毎年衆望ヲ負ヒテ引續キ委員タリ、當選實二十四回（昭和六年迄ノ分）教會最古參者トシテ又婦人ホーム・準ホームノ舍監トシテ愈々主ノタメニ奉仕セラレツツアリ。

板○松○郎兄ハ、其ノ後家庭ノ都合上夫婦共熊本回春病院ニ轉ジ、同院降臨教會委員トシテ善キ働キヲ續ケラレタルモ、昭和三年六月病ヲ得、勝利ヲ以テ永眠セラル。教會ハ同兄ガ創立當時並ニ光鹽會時代ノ功勞ヲ多トシ

第六章 聖バルナバ教會ノ創立

同月教會委員會滿場一致ヲ以テ、追悼文並ニ記念品ヲ贈呈セリ。

尚草津教友ニヨッテ大正六年一月第四週ニ於ケル、活氣横溢<sup>あつぎ</sup>セル新教會ノ集會ノ模様ヲ記セバ左ノ如シ。

聖バルナバ教會集會案内

日曜日 午前六時半 早天祈禱會

全 午前十時半 早禱禮拜及説教

全 午後二時 日曜學校

全 午後七時 晚禱禮拜及傳道説教

第一第三水曜日 午後七時 家庭祈禱會

第二水曜日 午後七時 祈禱會

第四水曜日 午後七時 親睦會

金曜日 午後七時 嘆願

第二第四火曜日 午後二時 婦人會

※上町ノ部

第一第三火曜日 午後七時 婦人會

日曜日 午前九時 日曜學校

月曜日 午後七時 傳道説教會

木曜日 午後七時 聖書研究會

※霜間ノ部

第一第三火曜日 午後七時 傳道説教會

第三十一 草津教友ノ發行

本病者ノ多クハ世ヲ忍ビ、人ヲ避ケテ生活セザルベカラズ、且ツ其ノ醜貌レユツボウヲ他ニ見ラルルヲ厭ヒテ、多クハ終日屋内ニ止リ、止ムヲ得ザルコト以外ハ外出ヲ好マズ。サレバ是等本病者ニ對シテ主ノ道ヲ説キ、悲メル心ニ慰メヲ與ヘント欲セバ、唯文書傳道アルノミ。大正五年七月我教會ノ創立ヲ記念シテ、耳ニヨル傳道ニ加フルニ更ニ目ニヨル文書傳道ヲ以テ、福音ノ宣傳ヲナサントシ、宗教小冊子發行ノ議成立シ、宿澤兄其ノ主筆トナリ、全月一日其ノ名モ「草津教友」ト名付ケ、其ノ第一號ヲ發行ス。毎月一回一日發行全四頁ナリ。發行部數毎月約四百部、社説ハ宿澤兄之ヲ擔當シ、宗教小説及ビ信仰談・漢詩・和歌・俳句・新體詩等紙上妍ヲ競ヘリ。在草ノ信者ハ勿論各療養所、回春病院等ニ在ル同病ノ友ニモ之ヲ送り、一ハ傳道ノタメ、一ハ草津ヲ離レタル教友トノ斷ヘザル交リノ縁トナス。毎號草津ヲ訪問セラレタル諸先生ノ説教ヲ掲グルノ外、安倍捕天、竹内赫耶子、相馬天羊、高石雲山、三上千代、福場紫雲、山中政三、田中ヨハネ（在函館）、清狂子等ノ麗筆ニナル大文章ヲ掲ゲタリ。今其ノ中ヨリ一二ヲ紹介スレバ、

主ハ如何ニシテ人々ヲ導キ給ヒシヤ（リー師） 野ノ誘惑（宿澤） 雲ノ教訓（捕天） 見シトコロ聞  
 キントコロ（雲山） 祈禱（リー師） キリスト教徒ト聖書（天羊） 使徒信經講解（捕天） 婦人  
 會（三上千代） 永遠ニ生キヨ・悔改（田中） 弘法大師トキリスト教（赫耶子） 小説母ノ意志（賤子）  
 信者ノ生長（紫雲） 等ノ如キモノ見ユ。

大正六年七月二十三日宿澤兄退草ニ伴フ編輯主任選定ノタメ、教會委員會ヲ開キ、其ノ結果竹○兵○兄其ノ後

任トナル。同兄ハ神職ノ免狀ヲ有シ、而モ方面違ヒノ佛教新聞ヲ編輯シタル前歴アリ、其ノ知識ハ神佛耶ノ三教ニ亘リ、其ノ比較研究記事ヲ紙上ニ掲載シ一異彩ヲ放テリ。

扱テ教友ノ發行ニヨリテ信者ノ信仰ヲ勵マシ、未信者ヲ導ク等、益スル所少ナカラザリシモ、不幸ニシテ大正七年秋頃ヨリ、竹○兵○兄家庭ノ都合上編輯ノ任ヲ辭シ、其ノ後適當ナル後任無ク、又一方信仰ハ筆舌ニアラズ要ハ之ガ善キ行爲ニ表現セラレ、隠レタル愛ノ實踐ニヨリテ未信者ニ範ヲ示シ、榮光ヲ主ニ歸スルヲ以テ理想トス。行爲無クバ能辯、美文又何カセン。寧<sup>レ</sup>ロ之ヲ止ムルニ若<sup>ク</sup>カズトノ議起リ、從<sup>テ</sup>テ教友モ主任ヲ失ヒタルヲ動機トシテ之ヲ廢刊スルコトナレリ。初号發行後一年四ヶ月ニシテ廢刊トナル。

### 第三十二 光鹽會ト新教會

新教會創立ノタメニ百万盡力ノ勞ヲトリシ光鹽會ガ、教會設立ノ曠、如何ナル態度ヲトルヤハ興味アル問題ナリキ。今新教會ガ純然タル聖公會意識ノ上ニ立チ之ヲ實行センニ、光鹽會ハ古キ歴史ト、或ル點ニテ異ナル傳統ヲ有シ、即チ禮拜・祈禱ニ於テモ、聖公會ノ様式ニ加フルニ、ホーリネス様式、日基督教式、其ノ他ノ様式ノ混入シテ一トナリシモノナレバ、變化ナクシテハ一ニ歸スルコト能ハザルヲ思ハシメタリ。サレド光鹽會ノ幹部ト兼ネテ新教會ノ委員又ハ幹部ナレバ、萬事ニ亘リテ急激ナル變化ヲ避ケ、カカル問題ヲ越ヘテ互ニ相謀リ、禮拜・聖奠事項、未信者教導等ハ主トシテ新教會則ニ委ネ、光鹽會ハ専ラ教會ノ後見役タリ、擁護者タル立場ニ於テ、キリスト教思想ノ徹底、信者ノ信仰共勵、傳道補助並ニ社會奉仕ノ方面ヲ分擔シ、相倚リ相助ケテ前進セリ。光鹽會トシテハ毎月一回乃至二回定時集會ヲ開キ、前項ノ目的ヲ達成スルタメ各方面ニ亘リ善キ働キヲナシ、新教會ノ活動ヲシテ愈々效果アラシメタリ、如斯シテ新教會ハ年ト共ニ成長スルヲ得タリ。

(高石兄、相馬兄、管野兄、池田姉等ノ談話ト山中師ノ記録等ニヨル)

## 第七章 婦人ホーム及婦人會

### 第三十三 愛ノ家庭

大正四年七月下旬、リー女史ガ初メテ草津ヲ訪問シタル際、特ニ強ク其ノ心ヲ打テルーノ事實ハ、病者ナル若キ娘達ノ問題ナリキ。花ニシアレバ尚舊ナルコノ娘達ヲ如何ニスベキヤ、惻隱ノ涙多キ女史ハ、頼リナク異國ノ里ニアリテ淋シク病ヲ養フ娘達ノ心ヲ思フテハ、最早拱手傍觀スル能ハズ、淫逸ト遊惰ノ周圍ニ誘ハレテ、初メノ純眞ト無邪氣ハ一タマリモ無ク失ハレ、アマツサヘ身モ魂モ共ニ滅ビニ行クト聞ケル彼女等ヲ、永遠ノ計ハサテオキ、急ヲ要スル當面ノ問題解決ノタメニハ、萬難ヲ排シ一ノ救護所ヲ設ケテ温キホームトナシ、豺狼ノ群ヨリ擁護シキリストノ愛ヲ通シテ、彼等ノ歎キヲカヘテ喜ビノ歌トナスヲ得バ、コレニ勝ル我喜ビハナシト思ヒツツ歸京セリ。而シテ大正四年九月四日發行週報ノ個人消息欄ニテ、ミス・コンウオール・リート題シ「草津特種部落ノタメ婦人ホーム様ノモノヲ設ケラルト云フ」トアルヲ見テモ此ノ間ノ消息ヲ知り得ベシ。

翌大正五年五月草津ノ働人トシテ女史ノ着任ト共ニ、新教會ノ創立、家屋ノ建築、新求道者ノ教導ノタメ、日夜多忙ヲ極メタルモ、女史ハ常ニ祈禱ノ中ニコレヲ覺ヘ、其ノ第一歩トシテ同年十二月二十日、地藏坂下ニ近キ大平館階下裏手六疊一間ヲ借り受ケテ、救助ヲ要スル一人ノ娘ヲ此處ニ受ケ容レタリ、コレ池○ミ○姉ナリ。

明ケテ大正六年一月十七日ニハ矢○ヤ○姉(故淺○賢○氏ノ妻)、全月三十日ニハ海○ク○姉、全年四月六日ニハ稻○温○姉ヲ迎ヘ、計四名トナリタレバ一室ニテハ狹隘ヲ感ジ、全館ノ二階全部ヲ借り受ケテ此處ニ引越シ

其ノ名モ「愛ノ家庭」ト名附ケ、六年四月相○鎔○兄夫妻招カレテ來リ加ハリ、茲ニ和氣靄々タル信仰ノホームハ形作ラレタリ。コノホームハ昭和五年度末ニハ總人員二百三十二名ニ達シ、總經費十萬圓ヲ越ユル病者救護ノ大業ノ發端ナリトス。而シテ女史ハ其ノ頃冬季積雪ノ頃ハ上町満足ノ家ニ、夏ハ主トシテ慈愛ノ家ニ在リシガ此ノホーム開設ト共ニ毎日出張シ、家長トシテ萬端ノ世話ヲナシ殊ニ高貴ノ身ヲ以テ、自ラ白衣白帽ヲ扮裝甲斐々々シク、一人々々姉妹達ノ癒エ難キ創傷ヲ丁寧ニ手當ヲ施シ、病ム者アラバ枕頭ニ座シテ之ヲ看護シ、館員ト膝ヲ交ヘテ談笑スルヲ樂シミトセリ。カ、ル行爲ハ病者ノ間ニ嘗テ無ク未ダ聞キタルコトナキコトナレバ、之ヲ傳ヘ聞クモノ館員ノ幸福ヲ羨望セザルハ無カリキト云フ。

ココニ記セル創立時代ノ館員中、矢澤、海河ノ兩姉ハ比較的早ク逝去シタルモ、他ハ何レモ健康ヲ祝セラレ、年毎ニ發展セル婦人ホームノ中堅トナリ、殊ニ盲目トナリシ池田姉ハ祈リノ勇者トシテ、又相○コ○姉、稻○温○姉ハ幼稚園ノ最初ノ保姆トシテ、長キ年月幼児達ノタメニ愛ノ奉仕ヲ獻ゲ、又婦人ホームニ在リテ善キ働キヲナセリ。

サテリー女史ハ草津ミッションノ責任者トシテ、他ニ多クノナスベキ任務ト責任ヲ有シ、館員ト共ニ起居シテ専ラ此ホームノ主婦タル能ハズ、依ッテ此ノホームノ一切ヲ處理シ、館員ヲ指導統轄スベキ才幹アル女性ノ與ヘラレンコトヲ祈リ、再三リー女史ハ宿澤兄ト相談シ其ノ結果同年五月八日東洋宣教會ノ婦人傳道師ニシテ、全生病院ニテ看護婦ヲナシ、病者ニ深キ理解ヲ有スル三上千代女史ヲ迎ヘテ、此ノホームノ舎監トナスコトトナレリ。

女史ノ來着ト共ニ同旅館ノ三階ヲモ借り受ケ、之ヲ専ラ三上女史ノ専用ノ室トセリ。此ノ處梁極メテ低ク、直立スレバ天井ニ頭ヲ打ツ故ニ、室ヲ歩クニモ前屈ミシテ歩カザルベカラズ。故ニリー女史此ノ部屋ヲ名付ケテ曰

ク「謙遜ノ間」ト。又妙ナラズヤ。

此ノホームハ大正九年九月迄繼續シタリシガ、逐年館員ノ増加ト、他ニ日當リ良キ地ヲ求メツツアリシガ、九月二十七日飯○久○兄所有ノ大平館本館ヲ買受ケ、聖マリア館ト命名シ、館員十二名此處ニ引越シタリ。

此ノ時ニ至ル迄即チ愛ノ家庭時代ノ收容人員、延人員左ノ如シ。

年度別 毎月平均 延人員

大正五年 一 十一名

大正六年 八 二、九二〇名

大正七年 十 三、六五〇名

大正八年 十二 四、三八〇名

(此項ハ相馬兄、池田姉、稻垣姉、三上女史等ノ談話ニヨル)

### 第三十四 聖バルナバ婦人會

我教會創立ノ大業成就セラレタルハ、理智ニヨル男子ノ働キノ蔭ニ、絶ヘズ情操ニヨル婦人ノ美ハシキ共働アリテ、其ノ内容ヲ豊富ニシ、其ノ傳道ヲ效果アラシメタルコトヲモ忘ルベカラズ。

第七 婦人ホーム及婦人會  
曩ニ大正三年九月光鹽會婦人會ノ傘下ニ馳參シタルモノ、高○テ○姉、松○ヨ○姉、柳○コ○姉、池○ミ○姉、勝○キ○姉、生○イ○姉、桑○エ○姉ノ七名ノ婦人ハ小ナリト雖、信者ナル婦人團體トシテノ面目ヲ保チ、此ノ里ニ清香ヲ放チシコト前述ノ如シ、其ノ集會ハ定期的ニハ非ザリシモ、會員相互ノ結束ハ常ニ保チ、互ニ相勵マシテ主ノ教ヘノマニマニ善キ働キヲナセリ。然ル中大正五年五月リ一女史來草ニ依リ、其ノ婦人ナルガ故ニ婦人ニ

トリテハ百萬ノ味方ヲ得タル心地シテ、其ノ指導スル靈的集會ニ集ル婦人達ハ、既ニ無言ノ間ニ心ノ中ニ一ノ婦人會ヲ形作レリ。

前記光鹽會婦人會員タリシ人々ニ加フルニ、山中ヤス、竹○タ○、山○ト○、中○タ○、淺○リ○、海○ク○横○キ○、丸○ハ○、荻○ト○、福○チ○等ノ諸姉ガリー女史並ニ井上照子女子ヲ中心トシテ、聖バルナバ婦人會ヲ結成シタルハ此ノ前後トナス。半數ハ上町ノ壯健ナル婦人ノ會員アルニ注目スベシ。

而シテ本會ガ婦人會トシテノ旗幟ヲ鮮明ニシ、病者ナル婦人ヲ主幹トシテ活動期ニ入レルハ、翌六年ノ初メヨリトス。草津教友第十号ノ記事ニ依レバ、大正六年正月二十二日病者ナル姉妹ノタメニ新タニ創設セラレタル「愛ノ家庭」ニ於テ開催セラレシ婦人會ハ、此ノ意味ニ於テ、意義アルモノニシテ、來會者十六名、リー女史ハヨハネ十五ノ九ヨリ愛ノ家庭ニ對スル希望ト、會員ノ常ニ主ノ愛ニ居ランコトヲ述ベラレ、宿澤傳道師補ハ「定メ無キ財」ト題シ、「移リ行ク世ニモ變ラデ立テル主ニ依リ頼メ」ト説キ、池田、矢澤ノ兩姉ノ良キ證詞アリ。コレヨリ愛ノ家庭ハ常ニ婦人會集會ノ場所トナレリ。

大正六年以後ノ新入會者ヲ一瞥センニ、

大正六年 稻○溫○、梶○ミ○、谷○ヤ○、三上千代、神谷コンノ諸姉。

大正七年 石○田○ゴ、丹○テ○、關○キ○、上瀧ツル、刈下リキ、桐山フジエ、江○ソ○、飯○ア○、小○キ

○シ、本○ツ○、窪○ミ○ノ諸姉。

大正八年 安○エ○、永○ゲ○、多○セ○、石○ゲ○、寺○フ○、板○ミ○、小○ノ○、町○マ○ノ諸姉。

大正九年 福○セ○、長○イ○、高○キ○、片○美○江、金○ト○、山○ノ○、野○キ○、鷹○オ○、星○キ、

佐○ツ○、本○ソ○ノ諸姉ニシテ、如何ニ順調ナル發展ヲ遂ゲ、年毎ニ膨大シ來タリシヤハ之ヲ見テ

モ知り得ベシ。

ドルカス會

婦人會ハ信仰ノ向上、相互ノ親睦ヲ圖ルタメ、毎月二回例會ヲ開キ、一回ハ専ラ靈的集會ニシテ、リー會長ノ靈的勸告、會員ノ證詞・感想・祈禱等アリ。他ノ一回ハドルカス會ト名付ケ、裁縫・編物等ノ奉仕作業ニ從事シ純益ヲ公益慈善事業ニ寄附ス。ソノ昔ヨッパニ住ミシ、タピタナル女ノ弟子、ヒタスラニ美ハシキ業ト施濟トヲナセル、カノドルカスノ名ニ因ムモノナリ（使徒行傳九章）。

創立以來十數年、婦人會ハ年ト共ニ順調ナル發展ヲ遂ゲ、其ノ間リー女史・井上・服部・三上ノ女史中心トナリ、他ニ見ラレザル圓滿振リヲ發揮シタルモ、會員數著シク増加シタルヲ以テ、會長ヲ除ク役員ノ公選ヲ昭和四年度以降行フ事トナレリ。第一回選舉ニテ當選セル者ハ、先崎ケサ、齋藤シン、井〇タ〇、福〇セ〇、村〇ハ〇エノ諸姉ナリ。殆ンド毎年單獨或ハ青年會ト協同ニテバザーヲ主催ス。聖堂ノ掃除一切ヲ擔當シ、常ニ之ガ清淨ヲ保持ス。クリスマス其ノ他祝祭等ニハ會場ノ裝飾等ヲナシ、殊ニ裁縫部ヲ通ジテ屢々公用ノ仕立裁縫物ヲナシテ愛ノ奉仕ヲ捧グ、又會員中ヨリ幼稚園保姆、日曜學校教師、愛友會贊助員等ヲ出ダシ、第二ノ教會員ノタメニ善キ働キヲナシツツアリ。

昭和六年末

會長 コンウォール・リー女史

第三十五 代禱會

第七 章 婦人ホーム及婦人會

大正六年一月リー女史・宿澤兄ハ隠レタルニ祈ル代禱會ノ奉仕ヲ一層徹底セシムルタメ代禱會ヲ設ケ、毎週水曜日ノ午後（時間ノ餘裕アル者ハ毎日正午）代禱ノ題ニ就キ祈禱ヲ捧グルコトトセリ。大正六年二月第一回ノ代

禱會ヲ愛ノ家庭ニテリイ教母、矢○ヤ○、海○ク○、池○ミ○ノ四名毎日十時ニ行ヘリ。其ノ題ハ第一北米印度人及ビエスキモ一人ノタメニシテ、北邊極寒ノ地ニ住ムエスキモ一人、アメリカ印度人ノタメニ多年困苦ヲ忍ビ自己ヲ主ニ捧ゲテ、良キ模範ヲ示サレシ諸兄姉ノタメ、又神ガ彼等ノ淋シキ時モ、危險ノ時モ、艱難ノ時モ、慰メト力ヲ與ヘ、其ノ働キニ大イナル報ヒト、善キ結果ヲ與ヘ給ヒシコトノタメニ感謝シ、未開ノ氷原ニ氷ノ家ヲ訪ネテ、福音傳道ノタメニ働カルル人々ノタメニ祈リ、第二ハ歐州戰爭ノタメト題シ、戰爭ヲ通シテ遊樂ノ夢覺メテ人々ガ眞面目ニナリ、艱苦ノ中ヨリ主ノ恩寵ヲ思ヒ返スニ至リシコトヲ感謝シ、戰爭ノ慘禍ヲ蒙ル人々、殊ニ直接戰闘ニ關係無キ婦女子兒童ノ平安ヲ祈リ、且交戰各國ガ罪ヲ悔改メ、眞心ヨリ神ヲ畏レ敬フニ至ランタメニ祈願シ、第三代禱ハ愛ノ家庭ノタメト題シ、主ノ恩恵ニテ病者ナル姉妹ノタメニ、小サナ愛ノ家庭ノ生レタルヲ感謝シ、此ノ家庭ニ入ル姉妹ガ互ニ愛ノ心ヲ以テ、睦シク生活シ、此ノ家庭ヲ通シテ草津ノ地方愈々祝福セラレ、主ヨリ恵マルル源トナルタメニ祈レリ。第一回ノ代禱題ナレバ特記ス。

コレヨリ後毎月代禱ノ題ヲ改メ、地方在住ノ兄姉モミス・コンウオール・リー宛ニ題ヲ送りテ、互ニ祈ランコトヲ求メタリ。此ノ代禱會ハヤガテ正午ノ祈禱會ニ進展シタルモノナリトス。

第三十六 婦人傳道補助會

大正七年春北東京地方部婦人傳道補助會成ルヤ、尚草津ニモ其ノ支部ヲ置クノ議調ヒ、即チリー女史支部長トナリ、婦人會員中ノ受聖餐者悉ク入會ス。冗費ヲ節シ毎月一人四錢以上ノ特別獻金ヲ會ノタメニ獻ク、地方部ニ於テハ之ヲ會費及ビ感謝獻金、被獻日獻金等ヲ合計シテ、中央部ニ送ルノ外、自地方部内ノ然ルベキ傳道事業ノタメ寄附シ、或ハ内外ノ傳道會社・聖書會社・傳道局・牧會資金局・災害見舞・獎學資金等公益ノタメ任意支出ス。殊ニ中央本部ニ於テハ、二教區八地方部ノ送金ニヨリテ、聖公會所屬ノ各傳道地ノ事業ヲ助クルタメ、牧師

俸給ノ補助・聖堂建築等ヘノ獻金ヲナシ、近年臺灣ニ二名ノ婦人傳道師ヲ送り、其ノ俸給一切ヲ負擔ス。

全聖公會婦人傳道補助會ノ昭和五年末ニ於ケル

會員數 三、三〇四名

收入高 四、一〇〇圓八七錢

支出高 三、二一四圓七五錢

北東京地方部ノ分

收入高 一、六八七圓八六錢

支出高 九六六圓五二錢

草津支部ニ於ケル獻金高ハ昭和六年前期分一一四圓五三錢ニシテ支部中首位ニアリ。

茲ニ全聖公會内共通婦人傳道補助會ノ特禱ヲ掲グ、之ニ依リテ同會ニ連ル總テノ補助會ノ目的ト方針ヲ知り得ベシ。

全能ノ神慈悲ノ父ヨ、主ハ御子イエス・キリストヲ以テ使徒達ニ徧ク世界ヲ巡リテ、凡テノ人々ニ福音ヲ傳ヘヨト命ジ給ヘリ。願クハ主ガ收穫場ニ多クノ働キ人ヲ送り、以テ國人ニ主ノ救ヒヲ傳ヘシメ、又既ニ召サレテ主ノ道ヲ傳フル人々ニ豊カナル恩惠ヲ垂レ、聖書ノ指導ニヨリ益々熱心ニ主ノ公會ノタメニ盡スコトヲ得サセ給ヘ。願クハ昔主ニ仕ヘシ婦人達ノ如クニ我等ニモ敬虔ノ靈ヲ滿シ、貞節柔和謙遜親切其ノ他美ハシキ徳ノ衣ヲ纏ハセ、愛ノ帶ヲ以テ結び、我等ヲシテ皆心ヲ一ニシ、常ニ主ノ公會ニ於テ忠實ニ主ニ仕ヘシメ給ヘ。主イエス・キリストノ御名ニ依リテ冀ヒ奉ル。アマメン

(此項ハ池田姉、稻垣姉、江口姉、福場姉等ノ談話ニヨル)

## 第八章 幼稚園及ビ日曜學校

### 第三十七 聖愛幼稚園

曩ニ宿<sup>ヲ</sup>○薰兄大○讓○郎兄等主トナリテ濱名館土藏裏ニテ開始セル聖愛幼稚園ハ、兒童父兄ノ信賴ト一般ノ好評ヲ博シタルモ、ヨルダン・ホームノ解散ニ遇ヒ開設以來約半歳ニシテ或ハ廢園ノ運命ニ陥ルニ非ザルヤヲ思ハシメタリ。サレバ兒童達ノタメニモ親達ノタメニモ將亦神ノ榮光ノタメニモ、萬難ヲ排シテコノ善キ事業ヲ繼續シ行カン事ハ、リー女史着任當初ヨリノ念願ナリキ。サレバ教會創立問題、住宅ノ建築問題等ノ一段落ヲ告グルヤ新幼稚園ノタメニ何處ヲ教室トシ、如何ナル人ヲ教師ニ選ビテ如何ニ之ヲ經營スベキカニツキ、祈禱ノ間ニ考慮ヲ巡ラセリ。其ノ結果、大正五年九月ヲ期シ、新教會堂ニ接續スル獨立小家庭ヲ園舎ニ充テ、其ノ名モ聖愛幼稚園ト名付ケテ、園兒ヲ募集スルコトナレリ。舊聖愛園ノ繼續事業トシテ、前ニ全園ニテ保育ヲ受ケタルモノノ他更ニ二三名ヲ増加シタリ。



聖愛幼稚園（昭和三年五月撮ス）

新幼稚園ノ主任保母トシテ選任セラレタルハ、相〇コ〇姉ナリ。同姉ハ東京日本橋ノ豪商ノ娘ニテ、良キ教養アリ。光鹽婦人會時代ニハ榊原姓ニテ會ノタメ盡ストコロ大ナリキ、後相〇鎰〇兄ノ夫人トナリ婦人ホームニ入ル。柔順ト謙遜ノ徳ヲ有シ、且音楽ニ長ジ、子供達ヲ愛セシヲ以テ開園ト共ニ頗ル好評ヲ博シタリ。次ノ保育年度即チ大正六年五月ヨリ園兒ノ増加ニ伴ヒ、更ニ稻〇温〇姉ヲ保母トシテ迎へ、二人相倚リ相助ケテ保育ニ任ズ。

此ノ園ニテ二ケ年乃至三ケ年ノ保育ヲ受ケタル者、其性質化シテ次第第二順良トナリ、小學校ニ進入シテ愈々其成績良好ナル事ノ證セラル、ニ及ビ、父兄ハ競ツテ其子第ヲ幼稚園ニ送ルノ風ヲ生ジ、遂ニ下町ニ欠クベカラザル初級教育機關ノ一ツトナレリ。

サテ開園以來昭和六年度ニ至ル間ノ保母ノ新任退任ノ狀況ヲ見ンニ

大正十一年クリスマス稻〇温〇姉辭任ニ伴ヒ、其後任トシテ神〇八〇姉、白〇シ〇エ姉、北〇野姉、梶〇五〇姉等相次デ保母トシテ相馬姉ヲ助ケタリシガ、相〇コ〇姉ガ大正十五年クリスマスヲ限リテ、視力減退ノ故ヲ以テ引退シタルヲ以テ、其後任トシテ、聖公會保母養成所ヲ卒業シタル上瀧君代姉新任セラレ、其ノ上町幼稚園ニ轉ジタル後ハ、本橋民代姉主任タリ。之ヲ助ケタルモノニ古〇フ〇姉、大〇ア〇姉アリ。昭和六年末ニ於ケル園兒二十名、保母二名、本橋民代姉、大〇ア〇姉之ナリ。

大小二組ニ分チ遊戯等ノ場合ハ合同トシ、保母ノ一人ハ示範、一人ハ伴奏ヲ分擔ス。入園ノ年齢ハ滿四才以上トシ、月額五十錢ノ月謝ヲ徵ス。大正十四年九月金百圓ヲ投ジテ、元會館隣ヨリ現在ノ位置ニ移轉ヲ行ヘリ。勤續年限ノ最モ長キハ相〇コ〇姉ノ大正五年九月ヨリ大正十五年十二月ニ至ル十年四月ヲ最トシ、其間全姉ニヨリテ保育ヲ受ケタル兒童ハ殆ンド良キ信者トナリ、又兒童ヲ通シテ其父兄ニ入信ノ動機ヲ與ヘタルモノモ少カラズ

其引退ハ頗ル内外ニ惜マレタリキ。次ハ稻○温○姉ノ大正六年五月ヨリ大正十一年十二月ニ至ル五年八ヶ月間及ビ桐○五○姉ノ大正十五年ヨリ昭和五年十月ニ至ル五ヶ年間等トス。

(此項ハ、稻垣姉、桐原姉、池田姉等ノ談ニヨル)

### 第三十八 聖バルナバ(下町) 日曜學校

新統制ノ下ニ教會日曜學校ノ開始セラルタルハ大正五年九月ノ頃ナリ。思フニ幼少時代ノ環境ト教育ハ、其品性ヲ左右シ、幼兒ノ記憶ハ死ニ至ル迄消ユル事ナキハ、人ノ知ル處ナリ。サレバ學齡前後ヨリ學齡期ニアル兒童ニ對シ、一人モ多ク基督教的教育ヲ授ケ、神ヲ懼レ、隠レタルニ惡ヲ行ハズ、神ト人トヲ愛スベキ道ヲ知ラシムル事ハ、我教會員ノ願ニシテ、又リー女史ノ願ナリキ。

日曜學校ノ制度タルヤ、歐米諸國ニテハ既ニ數世紀前ヨリ規則的教授ヲナシ居リシモノナルモ、日曜休業ノ制度ナカリシ我國ニテハ尙珍ラシキ制度ナリキ。

明治五年學制發布ト共ニ、學校ニ於ケル宗教教育ハ禁止セラレタルモ、各學校ハ日曜休日制ヲ採用シタルヲ以テ、年ト共ニ創立セラル、教會ハ何レモ日曜日ニ兒童ヲ集メテ童話聖書物語讚美歌等ヲ通シテ基督教的教育ヲ開始シタルモノナリ。

リー女史ハ英國ニ於テ日曜學校教師トシテ又教育家トシテ、兒童ノ取扱ニ深キ經驗アリ、日曜學校ヲ開設スルヤ、自ラ其ノ校長トナリ、萬端ノ世話ヲナシ、相○コ○姉、稻○温○姉、最初ノ教師トシテ専ラ女史ヲ助ク。夏季ハ午前早天祈禱ト十時禮拜ノ間ニ、冬ハ屢々午後之ヲ行フ。日曜學校禮拜式文ニ準ジテ禮拜ヲ行ヒ、其ノ後平易ナル訓話ヲ行フ。幼稚科、初等科ノ二ツニ分ツ。幼稚科ハ幼稚園兒及尋一位迄トシ、ソレ以上ヲ初等科トナス。

開設ヨリ昭和六年ニ至ル教師名左ノ如シ。

相○コ○姉、稻○温○姉、神○八○姉、白○シ○エ姉、北○野姉、柵○五○姉、三上千代姉、上瀧君代姉、古○フ○姉、信○ミ○姉、阿○エ○姉、福○セ○姉、○イ姉、大○綾○姉、本橋民代姉。

昭和三年五月ミス・マギルノ來任ニヨリテ日曜學校ハ劃期的進歩ヲ見タリ。即チ從來ノ合同教授ヲ廢シ、組分教授ヲ採用シ、教師ヲ増加シ、且毎週教師會ヲ開キテ教案及教授法ニツキ必要ナル指導ヲ與ヘタリ。

#### 男子教師ノ設置

昭和五年四月二十日、勉學ノ目的ヲ捨テ來草シ聖バルナバ醫院會計兼受付係ニ就任セル伊藤梅吉兄ハ兼テ日曜學校ニ於テ教鞭ヲトリ居リシガ、去ル昭和二年退草ノ際、日曜學校ニ男教師ノ必要ヲ認メ、之ヲ山中執事、リ一教母ニ内申セシ事アリシモ遂ニ實現ノ機運ニ到ラザリキ。サレバ再度來草ヲ機トシ、兒童數増加ト共ニ、男兒童ハ男子教師ニヨツテ訓育スルノ便益ナルヲ再ビリ一教母ニ、貫長老、山中執事ニ進言セルニ、同先生等モ之ニ賛シ、教會委員會ノ決議ヲ經テ、昭和五年五月十四日、リ一教母ヨリ鈴○繩・滝○早○ノ兩兄ヲ教師ニ任ズ。依ツテ伊藤兄案通り、男兒童ハ、男教師受持ツ事トシ、更ニ從來毎金曜日午後三時ヨリ開キ居タル日曜學校教師會ノ講師タルマギル先生ハ、種々ノ都合上辭シ、コノ時ヨリ伊藤梅吉兄更ツテ講師トナル。越エテ昭和五年八月下旬、鈴○繩兄聖ジャイルス館舎監ニ轉ジ、暫クソノ椅子ヲ欠キタルモ、同年十月上旬吉○又○門兄教師トナリ。又同年十月上旬伊藤兄都合上、上町日曜學校ニ轉任セルヲ以テ、後任ニ佐藤亮兄就任セリ。

昭和五年十二月病ニ依リ吉村兄辭ス。同昭和六年五月ミス・マギル長キ病床生活ヨリ癒サレテ歸草ニツキ、再ビ教師會ヲ指導シ（ザロングライフオブザチャーチ 教會ノ長キ生活）ト題スル新教材ヲ採用シ、毎月曜伊藤梅吉兄ト共ニ之ヲ釋シ、謄寫刷教案ヲ配布シ、専ラ之ニ依リテ教授ス。兒童ノタメニハ別ニ聖書日課アリ。又十數

項ノ設問アリ。頗ル教育的構成ヲ有ス。昭和六年八月二十七日、マギル師ガ米國聖公會總會ニ列席ノ爲メ草津出發後、伊藤梅吉兄代リテ教師會ヲ司ル。昭和六年度末ニ於ケル教師ハ伊佐亮兄、滝○早○兄、阿○エ○姉、福○セ○姉、繩○姉、河○靜姉、本橋民代姉、大○ア○姉ニシテ生徒數六十五名ナリ。

(此ノ項ハ、滝田兄、阿部姉、福場姉、繩姉、鈴木繩兄等ノ談ニヨル)

## 第三十九 光鹽會上町支部

大正四年正月、山中政三兄ガ我光鹽會ニ來投シ自宅ヲ解放シテ上町支部トナシ其ノ活躍ニヨル講演會、幻燈會等ヲ通ジテ基督教ノ存在ガ愈々上町ニ明カトナリシコトハ既ニ述ベタリ。其後、武○太○兄、財布屋主人等地方ニテ受洗シタル人々モ支部ヲ尋ネ來リテ其ノ信仰ヲ告白シ、山中兄ニ力ヲ添ヘ又同兄ノ親戚タル中澤房太郎兄ハ聖公會傳道師トシテ、靜岡地方ニテ熱心ニ傳道シツツアリ。中澤一家中、中澤キシ姉、中澤元三兄、又山口タメ姉等數名ノ求道者相次デ來リ加ハルアリ、殊ニ大正六年九月中澤房太郎兄ノ歸郷シテ盛ンニ、罪ト世ト惡魔ニ打克ツ道ヲ鄉黨ノ間ニ鼓吹セシカバ、上町支部ノ集會ハ頗ル活氣ヲ呈スルニ至レリ。大正六年一月山中政三兄ニテ上町支部總會ヲ開ク(草津教友ニ其ノ記事アリ)、即チ來會者十數名、役員選舉ノ結果支部長ニ山中政三兄、副支部長ニ竹○兵○兄、會計ニ中澤元三兄、書記ニ武○太○兄、夫々當選シ、茲ニ新陣容ヲ整ヘテ力強ク上町人士ニ救ノ道ヲ明カニ示スベク努力セリ。而シテ前途頗ル有望ナルヲ思ハシメタリ。以下項ヲ逐フテ今少シク上町關係ノ働キニ就イテ述ベン。

## 第四十 愛隣幼稚園

上町ニ幼稚園並ニ日曜學校ヲ設ケタルハ、大正六年三月ナリキ。即チ汝ノ隣ヲ愛セヨトノ聖言ニヨリ、之ヲ愛隣幼稚園ト名付ケ、新築シタル平和ノ家ヲ教場トシテ園兒ノ募集ヲ行ヒタリ。園主コンウォール・リー女史、會計竹○兵○兄、保母トシテ選任セラレタルハ草津館ノ娘山口タメ、タミヤノ娘中澤キシノ兩姉ナリトス。應募園兒約三十名、上町始マツテ以來ノ事トテ一同深キ期待ヲ以テ其ノ成功ヲ祈レリ。

兩姉ハ妙齡ニシテヨク我聖公會ノ教ニ歸シ、身ヲ持スル事固ク、其熱心ト努力ニ依リ、兒童父兄ノ信賴ヲ得タリ。サレド二年後ニ至リテ、園兒保育ニ専心ノ餘リ、兩姉共取扱上諸種ノ疑問ヲ生ジ、托セラレタル大切ナ兒童ヲ保育スル貴キ働キヲ全フスル爲ニ、是非正式ニ保母養成所ニ入所シテ、一定ノ年限修業ヲナスカ或ハ聖公會中最モ良ク管理セラレ定評アル幼稚園ヲ深ク見學シ、先ヅ自ラノ自信ト修養ヲナサザルヲ得ズトテ一旦其職ヲ辭シ相次デ上京シ、一人ハ野瀬長老ノ三光幼稚園ニ、他ハ後藤長老ノ神愛幼稚園ニ入レリ。

之元ヨリ良キ志ニシテ喜ブベキ事實ナルモ幼稚園ニトリテハ、兩姉ノ後任トシテ、他ニ適當ナル保母ノ候補者ヲ得ル事難ク、諸種ノ事情上止ムヲ得ズ、一時之ヲ閉鎖スル事トナレリ。幼兒ノ教育ニ熱心ナル人々ハ、中澤・山口ノ兩姉ガ東京ニ於テ良キ教育ヲウケ、一日モ速カニ歸草シテ、再ビ幼稚園ノ開園セラレン事ヲ期待セル向モ少カラザリシガ、兩姉共既ニ年頃トナリ居ル事トテ、各方面ヨリ縁談持上リ、父兄亦保母タランヨリハ妻タラン事ヲ要請シ、爲ニ相次デ兩姉共家庭ノ人トナリシヲ以テ、愛隣幼稚園ハ更ニ其ノ開園ヲ延期セザルヲ得ザル次第トナレリ。

#### 双葉幼稚園

然ルニ昭和二年春、聖公會幼稚園保母タル川鍋マツ姉、導カレテ當地ニ來ル事トナリタルヲ以テ、茲ニ上町幼稚園再開園ノ議起リ、其ノ名モ双葉幼稚園ト改メテ、花々シク園兒ノ募集ヲ行ヘリ。川鍋姉ハ熱心ト親切ヲ以テ、

復活後ノ幼稚園ノ爲メニ、二ヶ年間盡力セリ、而シテ全姉ガ家庭ノ事情上退草後ハ、保姆學校ヲ卒ヘタル上瀧君代姉、柳川キク姉等、相次デ主任者トナリ、幼ナキ子供ノ畑ニ主ノ喜ビヲ給フ種子ヲ蒔ク良キ働キヲ續ケタリ。昭和三年五月ニハ重田旅館ト土地交換ノ上、聖マーガレット館前方ノ良好ノ位置ニ新幼稚園舎ノ建築ヲナスベク、佐○木○助兄ト契約成立、建坪二十坪工費一、八〇〇圓、同七月二十七日全ク竣工、依テ聖バルナバ幼稚園ト改名ス。昭和五年末ニ於ケル園兒數約二十名、教師ハ柳川キク姉一名ナリ。

## 第四十一 聖バルナバ(上町)日曜學校

上町日曜學校ノ歴史ハ幼稚園ノソレニ比シテ更ニ古ク、大正四年六月、山中政三兄ノ宅ニテ全兄ト宿○薰兄ガ附近ノ兒童ヲ集メテ教授ヲ開始シタルニ始マル。山中兄ハ間口四間、奥行二十三間ノ地所ノ表通りニ面スル分ヲ菓子舗トナシ、中ヲ日曜學校教室ニ、奥ヲ客室ニ充テタリ。其ノ位置、小學校ニ近接シ、且ツ宿澤兄、山中兄ノ指導宜シキヲ得、一時頗ル盛ニシテ、五・六十名ノ生徒ヲ有シタリキ。大正六年平和ノ家成ルヤ幼稚園ト共ニ此處ヲ教室トシテ授業ヲ繼續シ來リシガ、宿澤兄ノ退草、山中兄ノ神學校入學等ノタメ、其ノ後任ニ適當ナル教師ヲ得ル事難ク、之亦遺憾乍ラ大正七年ヨリ大正九年迄、休校ノ状態ナリキ。然ルニ、大正九年七月、山中兄神學校ヲ卒業シ歸草シタルヲ以テ、再ビ開校ノ喜ビヲ得、リー女史ハ勿論、井上照子女史、三上千代女史モ來リ、教師トシテ共ニ盡力シタルヲ以テ、之ヨリ年ト共ニ其ノ生徒數ヲ増加スルニ至レリ。昭和三年五月二十四日、ミス・マギル聖マーガレット館舎監トシテ來任スルヤ、兼ネテ上町日曜學校ノ主任トナリ、學年別教授法ヲ採用シ教師トシテハ、鶴田醫師夫人赤羽・原田・菊地・上滝・柳川ノ諸姉ヲ得、茲ニ一大飛躍ヲナシ、生徒數モ約七十名ニ達シ、教場ニ充テラレタル幼稚園舎ノミニテハ、之ヲ收容シ能ハズ。内二組ハ満足ノ家ニテ教授スルノ盛況

ヲ呈シタリキ。

其ノ後多少ノ増減アリト雖モ、斯クノ如ク、兒童ガ日曜學校、或ハ幼稚園ヲ通シテキリストノ福音ヲ聞クコトニ依リ、頑迷ナル父兄ニ迄、ヨキ影響ヲ與ヘタリ、素ヨリ因襲ノ力ニヨリテ、急ニ全ク基督教ニ歸順スルニハ至ラズトモ、キリスト教ノ主義ニ賛成シ或ハ私カニ心ヲ傾クルモノモ續出スルニ至レリ。

(此ノ項ハ、マギル先生、柳川姉、山中師等ノ談ニヨル)

#### 第四十二 草津俱樂部

大正六年八月、リー女史ハ當地ガ單ナル溫泉地タルノミナラズ、四千五百尺ノ高原地ニシテ、逐年避暑客激增シ、其ノ中ニハ基督教信者モ亦少カラザルヲ見テ、同信ノ友ニ高尚ナル慰安ヲ與ヘ、誘惑ト怠慢ニヨリテ起ル罪ヨリ速カラシメントテ、聖公會草津俱樂部ヲ設ケ、即チ男子ノタメニハ白根神社下満足ノ家ヲ毎日午前八時ヨリ午後五時迄開放シ、女子ノタメニハ平和ノ家ヲ午後一時ヨリ全五時迄開放シタリ。(教友ノ記事ニヨル)

#### 第四十三 傳道文庫

本項ヨリ再ビ眼ヲ下町ニ轉ゼン。

大正六年一月、教會創立記念ノ一ツトシテ、文書傳道ノ目的ヲ以テ、教會ニ傳道文庫ヲ設ク。當部落タルヤ、素ヨリ病者ノ事故、一定ノ職業ナク、所謂無爲有閑ニ暮ス者少カラズ、殊ニ冬季積雪ノ候ハ、毎日炬燵ヲ圍ミテ圍碁或ハ猿談ニ耽ル有様ニテ、極ク少數ノ外ハ讀書ニ趣味ヲ有スル者ナカリキ。趣味ヲ有ストモ低級ナル講談本ノ外之無カリシナリ、カ、ル時機ニ傳道文庫ノ開設ハ極メテ意義アル事ナリシナリ。

初メ資金トシテ、リー女史ヨリ若干金ヲ支出シテ數十冊ノ書籍ヲ購入シ、又教會員ニシテ不要ノ書籍ヲ所持スルモノハ、皆喜ンデ文庫ニ寄附シタリ。一人二週間ヲ限り、無料ニテ貸出ス。此文庫八年ト共ニ其藏書數ヲ増加シ、部落ニ基督教の知識ヲ普及スルニ與ッテ力アリタリ。昭和二年十二月、涼風館ガ聖バルナバ・ホーム男子部トナルヤ、圖書管理上、文庫ヲ全館ニ移シ、鈴○繩兄専ラ主トナリテ藏書ヲ整理シ、大イニ面目ヲ一新セリ。昭和六年一月、元三河屋（大丸屋長屋）ガ買取ラレテ聖リベカ館トナリシガ、全館ハ教會ニ近く、部落ノ何處ヨリモ交通便ナレバ、文庫ヲ此處ニ移シ、酒○筆○兄選バレテ之ガ主任トナリ、三又路ニ面シ、聖書販賣部ヲ兼ネタリ。全年通行人ノ立寄り易キ様種々ノ模様替ヲナシ、藏書ノ數モ増加シタレバ、下町讀書子ハ何レモ文庫ノ設備ニ感謝セリ。

昭和六年八月四日、青年會婦人會主催ノバザーハ其純益金ノ二分ノ一ナル金百二十圓ヲ傳道文庫ノタメ捧ゲタレバ、新書籍購入其他ノ問題ニツキ昭和六年八月八日、教會委員會ハ必要ナル協議ヲナシ、又伊藤梅吉、徳○唯○ノ兩委員ヲ文庫委員ニ選任シ、適當ナル書籍多數ヲ購入シ、大イニ内容ヲ充實シタレバ、名實共ニ下町ノ小圖書館タル體裁ヲナスニ至リ、信者モ未信者モコノ藏書ヲ通シテ頗ル大イナル利益ト慰メヲ得ルニ至レリ。

昭和六年八月現在ノ藏書數ハ約三百部ナリ。尚之ト相聯關シ、同一ノ目的ヲ有スルモノニ男子ホーム文庫、婦人ホーム文庫、日曜學校文庫アリ。内男子ホーム文庫ハ最モ豊富ナル内容ヲ有シ、各部門ニ亘リ藏書四百部アリ。婦人ホーム文庫藏書百五十部、日曜學校文庫藏書八十九部ニ達シ、何レモヨク利用セラル。

#### 第四十四 宿澤兄ノ退草事情

(一) ヨルダン・ホーム解散

教會創立ノ偉勲者中ノ一人ナル宿○薰兄ノ退草ハ教會ニトリテ莫大ナル損失タリシノミナラズ、亦其ノ動機ハ遺憾ノ極ミナリ。サレドカ、ル事ハ世ニ稀ナル事實ニモアラズ。高位顯官ノ人、宗教家、教育家ト雖モ決シテカ、ル罪ヲ犯サズト言フ事ナシ。巧妙ナル惡魔ニ魅セラル、所、賢人君子モ屢々之ヲ避クル能ハザラシム。タダ主ヲ信ズル信仰ノ勇者、目ヲ覺シ、祈ヲ恒ニシ、日夜警戒怠ラザルモノニシテ、初メテ虚ヲツカル、事ナカランカ。

時ハ大正五年二月ノ頃ナリキ。信者ノ共同生活體タルヨルダン・ホームニ於テ、宿○薰兄ト管○オ○メ姉トノ間ニ、風紀上面白カラザル風聞アリ。彼ハ今ヤ光鹽會ノ主腦者タリ。又、大藤長老ヲ通シテマキム監督ノ支持ヲウクル聖公會傳道師補タリ。相手ハヨルダン・ホーム經營者タル管○丈○兄ノ愛妻タルヲモツテ、一度カ、ル事實ノ湯之澤ニ傳ヘラル、事アラバ、其影響スル處、計リ知ルベカラズトナシ。友人タル大○鹿○郎兄、高○千○兄、高○與○兄等、兩兄姉ニ對シテ、度々善意ノ忠告ヲナシタリ。サレバ、宿澤兄モ深ク自ラノ立場ヲ顧ミ、今後他人ノ疑惑ヲウクル等ノ行動ヲナサザルベントテ、事ハ一段落ヲ告ゲタル形ナリシモ、將來起ルヤモ知レザル危險ヲ未然ニ防グ爲ニ、一時兩者別々ニ起居シテ朝夕ノ交渉ヲ遮斷スルコソ良ケレトテ、茲ニ光榮アル、ヨルダン・ホームヲ犠牲ニ供シテ、大正六年四月ヲモツテ解散スル事トナレリ。之ヨルダン・ホーム解散ノ隠レタル理由ナリ。

(一) 宿澤兄ノ退草

依ッテ管野兄夫妻ハ親戚ナル高○與○兄宅(今ノ聖ニコラス館)ノ一室ニ移リテ生活シ、宿澤兄ハ飛田兄ト共ニ吉田藥店ノ二階一室ヲ借りテ自炊生活ニ入り、他ノホーム員モ各々其ノ好ム處ニ從ヒテ、自ラノ途ヲトレリ。然ル間ニ翌五月リー女史ハ愈々永住ノ目的ヲモツテ來草シ、爲ニ宿澤兄ハ其働キ極メテ多端トナリ、リー女史ヲ助ケテ新教會ヲ創立シ、文書傳道ノタメ、草津教友ヲ發行シテ自ラソノ主筆トナリ、大正五年十一月アンデルス

長老ガ管理長老ヲ辭セラル、ヤ、舊知ノ間柄ナル大藤鑄三郎長老ヲ東京ヨリ迎ヘテ管理長老トナシ、日曜學校ノ教師トシテ兒童ヲ教ヘ、全生病院ヨリ三上千代女史ヲ迎ヘテ醫院開設ノ計ヲ建ツル等、奔走努力頗ルカメタリキ。然モ此ノ間ニアリテ再ビ〇メ姉トノ間ニ好マシカラヌ風評アリ。遂ニ二人ハ相共ニ東京ニ出奔セリ。幾何モナク〇メ姉急死シ、宿澤兄ハ大島ナル阿〇千〇郎師ノ許ニ送ラレ、此ニ於テ深刻ナル懺悔ノ生活ニ入レルナリ。

此事實ニヨリテ教會ノ蒙レル損害ハ甚大ナリ。教會ノ正シキ發展ヲ阻害セラレシ事、幾何ナリシヤヲ知ラズ。屢々反對派ノ基督教攻撃材料ニ利用セラレ、頗ル教會ノ名譽ヲ傷ケタリ。

(此項ハ、高梨兄、高石兄、管野兄等ノ談話ニヨル)

#### 第四十五 仔羊會

宿澤兄ノ事アリテヨリ、教會信徒ノ道德的觀念ノ健全性ヲ疑フモノアリ。反對派ハ其活力ノ著ク鈍リタルヲ見テ機ニ乘ズベキハ此秋トバカリ基督教抹殺論等ヲ唱ヘ信者ヲ見ル毎ニ惡口ヲ放ツ者續出セリ。善且忠ナル信者ハ教會ノ前途ヲ憂ヘ唯一向ニ祈ヲナシ忍耐ヲ以テ事ヲ處シ、一日モ速カニ失ハレタルヲ補ヒ教勢ヲ挽回セント相努力セリ。仔羊會ハ其先端ヲ切レルモノトス。

本會ハ大正六年六月、高〇千〇兄、相〇銓〇兄、梶〇晴〇兄、松〇掬〇兄、山〇武〇兄、諸〇了〇兄、飛〇〇兄等主トナリテ組織シタル祈禱團ナリ。主トシテ教會ノ爲ニ祈ルベキ重大使命ヲ自覺セル主ノ伏兵ナリ。或時ノ如キハ唯一ノ問題ノタメニ一夜ヲ祈リ明カシ、事アリ。好ンデ野外祈禱會ヲ催ホス。

本會ハ大正八年暮迄存續シ教會ノ隠レタル大イナル力トナレリ。本會ノ野外祈禱會ノ寫眞ガ大藤鑄三郎長老ヲ

通シテ一米國基督教新聞ニ掲載セラレ、全紙ハ草津新傳道地ノ人々ノ熱心ヲ大イニ賞揚シタルヲ以テ、米國ノ同信者ノ間ニ本事業ニ關スル興味ヲ喚起シ新シキ同情者ヲ興スニ與リテ力アリキ。

(此ノ項ハ主トシテ高石兄、相馬兄ノ談話ニ依ル)

## 第九章 聖バルナバ醫院開院

### 第四十六 聖バルナバ醫院創立事情

リー先生ガ大正五年十二月「愛ノ家庭」ヲ設ケ可憐ナル姉妹達ヲ世話シテ居ル間ニ痛切ニ感シタルハ此ノ部落ニ一人ノ醫者モナケレバ一ツノ醫院モナキ一事ナリキ。部落全部ガ病者ノ集リナレバソレダケ醫者ノ必要ナル事ハ想像以上ナリキ。元ヨリ病者ノ代診生アル上町醫院ノ出張所ナキニアラザリシモ、營業上暴利ニ趨リ、嵩ム藥價ハ苦惱ノ種トナリヌ。ヨシ人ニヨリテ少額ノ割引ヲ受ク共、朝ナタナ死ニ至ル迄醫療ヲ要スル病者ハ到底其ノ負擔ニ堪フル能ハザリキ。癩ハ不治ナリ天命ナリ。寧口全ク治療ヲ施サ、ルニ如カズト言フモ尚溺ルル者ハ藁ヲモ摺ムノ例ヘ、殊ニ神經痛、急性内臟疾患等ノ如キハ如何ニモシテ醫ヲ迎ヘ、其ノ劇シキ疼痛ヲ除カン事ハ、病者ノ何人モ懐ク切ナル願望ナリキ。サレド實費又ハ無料處置ノ特典アル病醫院、社會施設等ハ全ク夢想ダニ能ハザリシ草津ノ事ナレバ、二三ノモノヲ除キ、創傷等ハ殆ンド無處置ノマ、放置セラレタリ。サレバ其ノ創傷ニ生キ乍ラ蛆ノ涌ケルアリ、腐敗臭強烈ニ鼻ヲツクアリ、ポロヲ丸メテ綿花ニ代ヘ、古布ヲ裂キテ裏疵ヲ包メルアリ。腐蝕骨膜ニ達スルモ尚平然ヲヨソフ者アリ。強烈ナル神經痛ニ終日終夜泣キ明スアリ。モヒ中毒ニカ、リテ青ザメタルアリ、唯頼ミトスルハ、一モ點灸ニモ點灸、點灸療法アルノミ。

サレバリー先生ハ一日モ速カニ此ノ病者ナル里ニ一醫院ヲ建設セン事ヲ念願シタルモ、未ダ來任早々ノ事トテ  
 ミッションノ會計モ豊カナラズ、且ツ之ガ從業員タルベキ醫師並ニ職員ノ問題ニ想到スル時、唯熱心ニ祈リテ時期  
 ノ到來ヲ待ツヨリ外ニ途ハナカリキ。然ルニ大正六年三月「愛ノ家庭」ノタメニ專任舎監ノ必要起リ、宿澤兄ハ  
 舊知ノ間柄ナル三上千代女史ヲリイ先生ニ紹介シ、更ニ同兄ハ命ヲウケテ上京シ、東村山ナル全生病院ニ三上  
 女史ヲ訪レ、極力來草セン事ヲ囑望セリ。依ッテ大正六年五月八日三上女史ハ諸般ノ準備ヲ整ヘテ多クノ希望ヲ  
 携ヘテ來任シタルナリ。來リテ見レバ前述ノ如ク湯之澤ノ病者ノ大部分ガ全ク無治療ノマ、ニ死期ヲ早メツ、ア  
 ル有様ナレバ、職業柄深ク之ニ同情シ、「愛ノ家庭」ノ舎監トシテノ本務モサル事乍ラ、如何ニモシテ此地ニ醫  
 院ヲ設ケタラバト思ヒ立チ、水魚ノ交アル女醫服部ケサ女史ノ助力ヲ求ムルト共ニ屢タリイ女史ニ此問題ノ解  
 決ヲ願ヘリ。リイ女史モ亦久シキ前ヨリ其ノ必要ヲ痛感シ居リシ事ナレバ、遂ニ意ヲ決シテ逼迫セルミッシヨ  
 ン會計中ヨリ一千三百五拾圓ヲ支出シテ醫院トナルベキ二階建一棟ヲ教會入口右手ニ新築スベク全年九月十日工事  
 ニ着手シ、又金六百圓ヲ以テ諸醫療器械ヲ購入シ、大正六年十一月〇〇日工事竣工シタルヲ以テ之ニ「聖慰安ノ  
 家」(聖慰メ館)ト命名ス。全十一月十日女醫服部ケサ女史來草。十一月十四日午后ヨリ會堂ニ於テ、教會、  
 光鹽會聯合ノ大歡迎會開催シタリ。記録ニヨリテ少シク其ノ模様ヲ記サンニ、開會祈禱們〇晴〇兄、聖書朗讀横  
 〇武〇兄、開會ノ辭管〇丈〇兄、歡迎ノ辭高〇儔兄、吉〇浩〇兄、相〇鎰〇兄、高〇千〇兄、リイ女史、(答辭  
 服部先生)、有志三名ノ祈禱、松〇掬〇兄ノ閉會祈禱ニテ會ヲ閉ツ。茶菓ノ饗應アリ。來會者男子三十三、女子  
 十九、子供三、計五十五名、稀ナル盛會ナリキ。リイ女史ノ發案ニヨル餘興ハ又抱腹絶倒ノ興ヲ添ヘタリ。殊ニ「商  
 賣御授ケ」ノ一面ニ於ケル「猿廻シ」ハ其ノ技神ニ入り大喝采ヲ博シタリ。リイ女史ハ三上女史ト協力一致新醫  
 院ノ爲準備ヲ整ヘ、愈々新醫院ハ聖バルナバ醫院ノ名稱ヲ以テ大正六年十一月三十日當局ヘノ届出ヲ了シ、十二

月三日ヲ以テ實費診療ヲ標榜シ開院サレタルナリ。

此ノ時ヨリ「愛ノ家庭」舎監三上千代女史ハ、舎監トシテハ大綱ヲ握ルノミニテ細部ノ諸項ハ副舎監タル相馬兄姉ニ委ネ、専ラ一看護婦トシテ服部女醫ヲ助ケ、相倚リ相支ヘテ日夜救療ノ業ニ従事セリ。管○丈○兄選バレテ部落ヨリ入りテ診療助手トシ、兼ネテ雜務ニ従事ス。三人心ヲ一ニシテ拮据經營茲ニ聖バルナバ醫院ノ基礎ハ日ニ固メラル、ニ至レリ。

第四十七 光田健輔氏ノ來草

當時、東京第一區府縣立全生病院長タリシ光田健輔氏ハ、稀ニ見ル篤學者ニシテ、既ニ二、三回草津ニ來リタル事モアリ、今其ノ教導シタル三上女史、並ニ服部女醫ノ來草ト醫院開業ニヨリ、本病者ノ蠅集ウツクスル草津ニ著シク興味ヲ喚起シ、屢々來草シテ指導ト激勵ヲ與ヘタリ。一夕所用ニテ内務省ヲ訪レ、談偶々草津ノ事ニ及ブヤ、我ミツシヨンノ小サキ事業ヲ當局ニ紹介シタリ。依テ當局ハ一外國人ニシテ各種社會事業中最モ閑視セラレタル救癩事業ニ従事スルノ篤志ヲ愛デ、視察ノタメニ内務屬ヲ派遣スルコトナリタリ。サレバ光田醫師之ガ案内者トシテ大正六年十月來草シ、三上・服部二女史ト共ニ細密ナル視察ヲナシ、内務省ニ提出スベキ諸種ノ調査報告作成ニ必要ナル助力ト便宜ヲ與ヘタリ。

而シテ特ニ記憶スベキハ此ノ時ノ調査報告ガ内務省ニ提出セラレ、初メテ此ミツシヨンノ事業ガ聖バルナバ醫院ノ名稱ノ下ニ世ニ公表セラレ、社會事業年鑑ニ集載セラレタル事ナリ。而シテ事業名稱ヲ何ト命名スベキヤニ就キ異論アリテ容易ニ決セズ。リー先生ハ「愛ノ家庭」モ乃至此ノ醫院モ自己ノ所屬スルミツシヨンノ事業トシテ「草津聖バルナバ・ミツシヨン」ノ名稱ニテ届出ベキ事ヲ主張セラレタルモ内務省側ニテハ若干ノ補助金ヲ交付

スベキ下心アリシ事ナレバ、カクテハミッシヨンノ語ヨリ基督教ノ傳道團體ニ補助ヲナスモノト誤解セラル、眞レアリト稱シテ之ヲ喜バズ、依テ光田氏ハ強ヒテ「聖バルナバ醫院」トシ「愛ノ家庭」ヲ其ノ病室トシテ報告書ヲ作成セシメタリ。コレヨリ後、此ノ事業ハ聖バルナバ醫院ノ名ノ下ニ年々内務省ヨリ補助ヲ受ケ、又畏クモ思召ニヨリ年々宮内省ノ御下賜金ヲモ拜受スル事トナレリ。即チ大正八年二月十一日紀元節ノ佳辰カシヲトシテ第一回宮内省御下賜金五〇〇圓ヲ交附セラレ、翌年ヨリ群馬縣ヨリモ夫々獎勵金ヲ下附セラル、事トナレリ。經營者タल्लीー先生ヲ初メ、職員一同聖恩ノ厚キニ感激シ、不幸ナル病者ノタメ愈々力ヲ盡シ、社會ノ期待ニ添ヒ、主ノ榮光ヲ顯揚セン事ニ努力セラレタリ。

#### 第四十八 三上千代女史

東北山形市ノ生レ、十七歳ノ時受洗、明治四十年二十一歳ノ時、特別ナル召命ヲ受ケ、傳道者タラント志シ淀橋聖書學院ニ入學、卒業後二ケ年間東京附近ニテ傳道ニ従事ス。其ノ間癩患者特殊傳道ヲ志シ、直接患者ニ接近スル方便トシテ看護婦トナルベク三井慈善病院看護婦養成所ニ入所、卒業後全生病院ノ看護婦トナル。在勤一年半。時ニ舊知宿〇薫兄ノ紹介ニテ草津下町大平館二階ニ設ケラレタル「愛ノ家庭」舎監トシテ大正五年五月八日來任ス。芳紀正ニ二十七歳ナリキ。約半年間ノ經驗ニ基キ、下町ニ病院ノ必要ヲ認メ、リー教母ニ説キ、又友人ナル服部ケサ女史ヲ招キテ病院ヲ開設ニ至ラシム。大正十三年十一月服部女醫ト共ニ辭職。勤續スルコト八ケ年、慈母ノ如ク慕ハル。幾何モナク女醫鈴蘭村ニテ死亡シタルニ就キ、再ビ光田院長ヲ頼リ全生病院看護婦トナル。在任一年半ニシテ大正十五年再ビ草津ニ來リ、鈴蘭村ニ患者收容所ヲ設ケ、又昭和三年自宅ヲ開放シテ草津郵便局分室ノ開營ノ爲ニ便宜ヲ計ル。昭和五年十一月表彰セラレ皇太后陛下ヨリ卷繪硯箱及金一封ヲ賜ル。其ノ

開設セル鈴蘭園ハ国立療養所等ニ入所ヲ欲セザル病者ニシテ自由療養ノ資力ト健康アル者ノ爲ニ基督教主義ニ基ク愛ノ家庭ヲ提供スルモノナリ。入園者平均十名内外ナリキ。日本救癩運動ノ爲、屢々東京及關西方面ニ講演行脚ヲ試ム。昭和六年四月草津ニ近接スル栗生ヲ中心トシテ国立癩療養所建設ノタメ土地一切ヲ買収セラレタルヲ以テ東北仙台市外ニ移轉未感染兒童ホームヲ經營セルモ昭和八年暮都合ニヨリ之ヲ閉鎖シ全生病院看護婦長トシテ就任セリ。

### 三上女史・服部女史・宿澤兄ノ關係

大正三年十二月嚴冬ノ候、東京市外田端ニテ病人宿ヲ經營シ居タル後藤俊雄兄ノ宅ニテ田端日暮里附近ニ在住スル病者ナル信者ノクリスマス祝賀會アリ。此ノ時宿○薫兄ハ約半歳ノ點灸治療ヲ了ヘテ、再ビハワイニ歸ル爲後藤兄宅ニ滞在シ居タレバ、此ノ催ヲ喜ビ、欣然之ニ參加シタリシガ、此ノ中ニ年若キ二婦人アリ。壯健ノ身ヲ以テ病者ノ間ニ交リ、甲斐々々シク萬端ノ世話ヲ爲スヲ見テイタク感動セリ。即チ二婦人中ノ一人ハ三上千代女史、一人ハ服部ケサ女史ナリシナリ。三上女史ハ明治四十三年聖書學院ヲ卒業シ、東京附近ノ傳道ニ從事中田端日暮里方面ニ多數ノ病者アルヲ知り。病者間傳道ノ召命ヲ感ジテ病者ニ接近シ、又肉體的ニモ之ヲ慰メ得ル方法トシテ看護婦タラント欲シ、三井慈善病院看護婦養成所ニ入レル事前述ノ如シ。而シテ其ノ第二年目（大正二年暮）ニ東京女子醫專ヲ卒業シタル服部ケサ女史ハレントゲン科小兒科研究ノ爲、三井慈善病院ニ勤務スル事トナリシガ、未ダ女醫ノ地位ヲ重視セザリシ時代ナレバ、研究中ハ看護婦待遇トシテ、三上女史ト同一寄宿舎ニ起居スル事トナレリ。然ルニ服部女史ノ無口無愛想無表情ハ交友ノ妨グトナリ屢々誤解セラレテ傲慢不遜腹黒奴等ノ惡口サヘ蒙リ、愈々沈鬱ニ陥リシ時、未知ノ二人ハ主ノ導キニヨツテ眞ニ理解スル機會ヲ得、直チニ願ヒテ同室ニ寢食ヲ共ニスルニ至ル。爾後、二人ハ影ノ形ニ添フ如ク、日曜毎ニ相連立チテ田端方面ニ世ヲ徼ブ病者ノ

宅ヲ私カニ訪レテ慰メ、乞ハル、時ハ必要ナル手當ヲモ加ヘ歸院スルヲ樂シミトセリ。如斯シテ病者ナル宿澤兄ハ滯京中少カラズ其ノ隠レタル善行ニ感ジ居タル事ナレバ、「愛ノ家庭」ノ舎監ヲ必要トスル旨リ一女史ヨリ話サレシ時、全責任ヲ以テ三上女史ヲ推薦シタルモノニシテ、三上女史ハ又服部女史ニ別レテ草津ニ來ルモ互ヒニ忘ル、事ナク、醫院設立ノ議ナルヤ極力女醫ヲ招カン事ヲ願ヒタルナリ。三者ハ如斯緊密ナル關係ニアリシヲ以テ、互ニ一心トナリテ協力シ、事業ノ遂行ニ少カラズ便宜ヲ得、其ノ發展ヲ圖リ得タルナリ。

## 第四十九 女醫・服部ケサ女史

女史ハ福島縣生レ、大正二年春、吉田彌生女史ノ經營スル東京女子醫專ヲ卒業ス。卒業後更ニレントゲン科小兒科研究ノ爲、三井慈善病院ニ研究生トシテ在勤スル事五年間、小川劍三郎博士ノ高弟ニテ眼科ヲ得意トス。友人三上千代女史ノ全生病院ニ居タル關係上全生病院ニ轉勤シ、光田健輔院長ノ指導ヲ受ク。大正六年十一月聖バルナバ醫院開院ノ爲、招カレテ草津ニ來ル。歳三十四歳。駒込基督教會ニテ受洗セル熱心ナル信者ナリ。生來蒲柳ノ質、而モ寡黙實行ノ人、眞ニ病者ヲ愛シ、自己ノ健康ヲ顧ミズ危險ヲ思ハズ専心温情ヲ以テ診療ニ従事スル事八年、遂ニ晝夜別ナキ激務ノタメ健康ヲ害シ、大正十三年九月病ニ就キ十一月職ヲ辭シ三上女史宅ノ鈴蘭園ニ移リ、専ラ療養ニ力メタルモ藥石效ヲ奏セズ（辭職後二十三日目ニ）四十一歳ヲ最期トシテ其ノ美ハシキ靈ハ主ノ御手ニ委ネラレタリ。勤續八年決シテ短キニアラズ。而モ醫師トナリシ全生涯ヲ草津ナル病者ニ獻ゲテ職ニ禮レタルナリ。貴キ女史ノ死骸ハ、共ニ死ナント許リ狂泣スル三上女史初メ、母ノ如ク慕フ病者達ノ手ニテイト懇ロニ葬ラル。永眠一周年ヲ記念シテ美シキ石碑ハ我教會墓地内ニ建立セラレ永ク其ノ徳ヲ後世ニ傳フ。

女史ハ幼ニシテ學者ノ家庭ニ育チ、性明敏學術共ニ群ヲ抜ク。女學校時代ヨリ短歌俳句小説何レモ之ヲ良クス

レド、草津ニ來テヨリハ病者ノタメニ専心ノ餘リ、全ク之ヲ忘レタルモノ、如カリキ。

兄ハ國學者ニシテ國學院大學教授タリ。妹ハペンネーム水野仙子ト稱シ、小説家田山花袋氏ノ愛弟子トシテ、其ノ作風前途ヲ嚮望セラレタルモ、不幸ニシテ胸ヲ病ミ、姉ノ居ル當地ニテ療養中永眠セリ。明治四十三年頃女子醫專在學中心臟ヲ冒サレ、診察ノ結果心臟辨膜閉鎖不全症ニテ終生癒ヘ難キヲ知り、深く基督教ニ歸依シ居タル女史ハ愛妹ノ死ニヨリテ愈々人生ノ果敢ナキヲ悟リ、爾後決シテ明日ヲ願ハズ今宵タマ殮ル、共神ノ前ニ義トセラレンコトヲ願ヒ過去ヲ忘レ目アテニ向ヒテ唯現在ニ最善ヲ盡サントノ信念ノ上ニ立チ戰場ニ赴ク決死ノ勇者ノ如ク、朝毎ニ新シキ使命ヲ感ジテ診察室ニ入ルヲ常トセリ。

大正九年頃ヨリハ持病稍ヤ募リテ、小サキ勞務ニモ呼吸促進シ心悸レキヤ充進ス。サレド片時モ診療中ノ病者ヲ忘レズ。毎夜寢ル毎ニ自ラ提灯チヨウテント燐寸ホウセント聽診器ヲ枕邊ニ備ヘ、嚴冬刺膚ノ夜半ト雖モ喜ンデ求メニ應ジ往診ニ行ク。其ノ起居スル「聖慰メノ家」ニハ未ダ内湯ノ設ケモナカリシ事ナレバ、氷ノ如ク凍ヘタル體ヲ温メンニ術ナク、深夜靜カニ「聖マリヤ館」迄來リテ、病者ノ浴槽ニ身ヲ浸シ暖ヲトリテ僅カニ眠リ、更ニ朝ハ夙フツニ起キ出テ診療ニ當ル有様ナリキ。道路惡ク土地ノ高低甚シキ當地ノ事ナレバ心臟ヲ患フ女史ニ取リテ往診ハ最モ苦痛トスル處ニシテ、爲ニ心臟ノ急變測ルベカラズ。サレバ往診ニ出立タントスルヤ、三上女史ヲ呼ビテ注射器ハ此處ニ、カンプルハ此處ニト告グルヲ常トセリ。蓋シ我若シ途中ニテ倒レナバ直チニ之ヲ携ヘテ來リ、注射ヲナシ呉レヨトノ意味ナリ。

大正十年夏、飛○重○兄ヲ夜半往診サレシ時ノ如キハ、顔面蒼白心悸ソウク躍動スルヲ強ヒテ赴キ、途中ニテ倒ル、事三度ニ及ブ。而モ床中ニ呻吟レキヤ輾轉スル病者ヲ思フテハ、自ラ願ミルノ暇ヒキナク遂ニ其ノ宅ニ至リ何事モアラザリシ如ク裝ヒテ患者ヲ慰メ良キ手當ヲ施シテ、亦喘ギツ、院ニ歸レリトゾ。大正七、八年ノ頃ハ上町ニ一人モ醫ナ

ク、爲ニ町醫校警察醫ノ囑託ヲ受ケ、藝妓酌婦ノ檢徵ヨリ變死人ノ檢視小學兒童ノ身體検査等マデ多忙ヲ極メタリ。經營ノ規模極メテ小ナリト雖モ尚毎月二百有餘圓ノ純收入ヲ得テミッシヨン會計ニ納メ其ノ經營ヲ助ケタリ。極メテ薄給（最初四〇圓―後七〇圓）ニ甘ンジ、世ノ名聲ヲ思ハズ、日頃醫院ハ我家庭ナリト云ヒ寸刻ヲ惜シミテ家事ノ爲ニ用ヒ心慥充進シテ眠ラレザル夜半、獨リ布團ノ上ニ座シテ雜巾ヲ刺ス。永眠後程經テ下柵ノ一隅ヨリ刺シアル雜巾ヲ收メタル箱ニツツ見出し、其ノ在リシ日ヲ偲ビテ人々泣ケリトカヤ。診察時間ノ間ニ些少ノ時アラバ編物ヲナス。冬期ニ至ルモ防寒用ノ編物類ヲ購入シタル事ナカリキ。一擱ミノ塵芥モ徒ラニ湯川ニ棄テズ、一團リノオガクツ（藥品箱ニアリシ）モ盪リニ没ゲズ、之ヲ庭ノ一隅ニ集メテ其ノ腐敗ヲ待チ、花畑ノ肥料トナス。以テ其ノ全部ヲ窺フベシ。極メテ寡言實行、必要以外ハ決シテ口ヲ開カズ、人呼ンデ無口先生ト言フ。一見冷魂不親切高慢ノ如シト雖モ、實ハ濇情胸ニ溢レ勃々タル愛ヲ包藏ス。嘗テ、三上女史服部女史ニ向ヒ、「貴女ガ餘リ無表情ダカラ人ハ冷酷ナ人ダト言フ」ト云ヒシニ、「我如何デカ冷酷ナルヲ得ン。此ノ胸ノ此ノ濇情何故ニ見レザルヤ」ト聲ヲ上ゲテ泣ケリトゾ。墓碑ハ大正十四年六月初夏ノ候、先生ト共ニ働キタル管野兄及入道兄教會委員ヲ代表シテ前口ノ石山ニ行キ、逸材ヲ見出しテ之ヲ運搬シタルモノ、碑文ハ委員會ニテ豫選シ、安倍千太郎先生若干ノ修正ヲナシ高〇千〇兄ノ揮毫ニナルモノナリ。

（前數項主トシテ三上千代女史、管野兄、相馬兄等ノ談ニヨル）

## 第二期 リバイバル

## 第五十 梶原兄ノ霜間派遣

草津ヲ距ル事二十餘町ナル霜間及栗生ノ谷間ニ若干名ノ同病者アリ。全ク世ト人ヲ避ケテ病ノ身ヲ隠遁ノ生活ニ委ネタリ。之等ノ人々草津ナル光盟會ニテ催セン基督教講演會等ニテ主ノ教ニ接シ、自ラノ生活ハ修道院的ニシテ主ノ最モ喜ビ給フ事ヲ知ルヤ、我意ヲ得タルハ此ノ教ナリトテ基督教ニ心ヲ傾クル者少カラズ。リー女史ハ之等ノ同病者ニ如何ニモシテ眞ノ福音ヲ傳ヘ更生ノ喜ビヲ得シメント大正六年十二月梶原清○夫妻ニ旨ヲ含メテ同地ニ派遣セリ。依テ同兄ハ光盟會員タリシ勝○男兄ノ宅ニ宿リテ専ラ高○千○兄ト協力シ、冬季積雪ノ候ヲ利用シテ戸別訪問ニヨリ、炬燵ヲ圍ミツ、傳道ニ從事セリ。當時霜間ニ板○昌○兄アリ。栗生ニ高○利○兄、佐○木○太○兄等アリ。就中板○兄ノ如キハ基督教徒ヲ見ル事蛇蝎ノ如ク、上草ノ都度ヨルダン・ホーム員等ヲ、「ヤソ」「ヤソ」ト呼ビ捨テ、惡口雜言至ラザルナク新聞書籍ヲ涉獵シテハ攻撃材料ヲ調ヘ、殊ニ基督教抹殺論ナル著書ヲ手ニスルヤ愈々皮肉雜リノ論鋒頗ル鋭ク、傳道者ハ屢々困シメラレタリト言フ。サレド兩兄ノ謙遜ト熱心ニヨリ次第ニ其ノ頑冥ナル思想ハ碎カレ、同兄ノ如キモ遂ニハ全ク基督教ニ歸シ、而モ熱心ナル信者トシテ他ノ模範タル人トナルニイタレリ。

## 第五十一 霜間愛友會成ル

翌大正七年春麗カナル陽光ニ谷間乍ラ早くモ雪ノ消ヘ初ムル頃、梶原・高石兩兄ノ傳道ハ主ノ助ケニヨリテ徐々に成功シ、求道心ヲ起セル兄弟姉ノタメ、一ツノ基督教團體ヲ作りテハ如何トノ議起リ、即チ相諮リテ一ツノ會ヲ組織シ、其ノ名ヲ「愛友會」ト名付ケタリ。蓋シキリストノ愛ノ故ニ結バレタル會員ナレバ、主ニアル友ノ爲ニハ互イニ命ヲモ捨ツベキナリト、梶原兄ガ言ヒシ言葉ヨリ思ヒ付キテ此ノ名ヲ選ビシナリ。草津ヨリ水ノ窪ニ

移り來レル高〇千〇兄ヲ會長ニ推シ、勝〇男兄副會長タリ。會員約十五名程ナリキ。會員中ニハ元〇仁〇郎兄、高〇利〇兄、小〇雄〇兄、板〇昌〇兄夫妻、小池兄夫妻等アリ。毎週一回宅廻り集會ヲ開キ、祈禱、讚美、證詞ヲナシテ信仰ヲ共勵ス。會費月額三錢ヲ醜金シ會ノ經費ヲ支辨ス。

地理的ニ他ノ村落ト獨立セル同地ノ事ナレバ、世ト人ノ之ヲ妨グルモノ一ツモナク、其ノ信仰ハ唯教ヘラル、ガ儘ニスクスクト伸ビ、油注ガル、儘ニ燃ヘタリ。サレバ幾何モナク此ノ小サキ團體ハ主ニ依リテ愈々固ク結バレ、草津ノ人達ノ信仰ハ生温シナヤメル彼等ヲ勵マサルベカラズト、逆ニ草津傳道ノタメ堂々ト上草セシコト屢々ナリキ。或時ノ如キ降りシキル雨ノ中ニ、愛友會ノ一隊雨傘ヲサシ連ネテ町内ヲ巡リ、或ハ路傍ニ叫ビ、殊ニ涼風館ニ於テハ熱心ノ餘リ門内ニ迄立入り、館主高田氏ヨリ抗議ヲ受ケ、數日後會長高〇千〇兄託ノ爲ニ上草セシ等ノエピソードアリキ。

#### 第五十二 宿澤兄ノ栗生歸還

大正六年五月溧然草津ヲ去リタル宿澤兄ハ、主ノ前ニ犯セル罪ノ發覺ト共ニ、大島ナル安〇千〇郎先生ノ許ニ送ラレ、深キ懺悔ノ生活ヲ送リツ、アリシガ、尚内外ノ心勞ト生活ノ急變ニヨリテ病症ヤ、ニ進ミ、家庭ノ事情上長ク社會ニ滯ル事能ハズ、屢々書簡ヲリテ教母ニ送り、今一度草津ニ歸ル事ヲ懇願セリ。教會有志ノ間ニハ猛烈ニ之ガ反對ヲ唱フル者無キニ非ザリシモ、事情全ク止ムヲ得ズトナシテ、遂ニ當地ニ歸ル事ノ許可ヲ得タリ。サレド犯セル行爲ノ償トシテ教會ノ所在地又名譽ヲ毀損ヤセラレタル管野兄居住地タル草津町ニハ足ヲ入レザル事トノ約束アリケレバ、宿澤兄ハ大正七年七月遙カ草津ヲ望ミツ、六合村方面ノ山路ヲ取り、疲レタル體ヲ栗生ナル勝〇男兄ノ宅ニ横タヘタリ。即チ此ノ地ヲ永眠ノ場所ト定メ、殘ル幾何ノ日ヲ謹慎ト祈リニ暮サント

決心セルナリ。試誘ニ遇ヒシ同兄ノ靈ハ之ニヨリテ愈々緞練セラレシガ如ク、愈々信仰ヨリ信仰ノ道ヲ辿リタリ。サレド一度全ク地ニ墜チシ其ノ信用ハ容易ニ回復スベクモ見ヘザリキ。故ニ粟生ニ落着クト共ニ愛友會ニ入り、甦生ノ勇氣ト熱心ヲ以テ之ガ挽回ニ努ムルト共ニ前ノ過チヲ償ヒテ尚餘リアルベキ生活ノスタートヲ切レリ。

### 第五十三 第一回諏訪神社祭禮傳道

霜間ヨリ程遠カラヌ處ニ一祠アリ、六合村總鎮守諏訪神社之ナリ、毎年八月二十七、八ノ兩日ハ其ノ祭禮日ニシテ、遠近ノ善男善女雲ノ如ク來集ス。霜間ニ愛友會創立セラレテヨリ日ニ月ニ傳道的精神ニ燃エ來レル會員諸君ガ一日ノ業ヲ休ミテ村々ヨリ蠅集ムカスル此ノ人々ニ對シテ、基督教ノ傳道ヲナサン、トノ思ヒ付キハ頗ル冒險奇抜ト言フベシ、此ノ計畫成ルヤ會員ハ數旬前ヨリ熱心ニ祈リ、又草津ヨリノ來援ヲ求メテ愈々大正七年八月二十七日二十八日ノ兩日、第一回ノ傳道ヲ決行セリ。即チ來リ加ハル者、リー先生ヲ初メ、井上照子女史、櫻○清○兄、高○千○兄、勝○男兄、相○鎔○兄、管○丈○兄等ニシテ一行ハ午前九時頃同神社ニ赴キ、其レヨリ前マキム監督ガ布哇フワヨリ歸航中或篤志家ヨリ寄附セラレタリトテソノ儘我教會ニ寄贈セラレタル蓄音器ヲ持參シ、レコードヲカケ群集ヲ引キ寄せ、携へ來タレル聖畫ヲ示シツツ巧妙ナル傳道說教ヲ行ヒ、信者ハ各々立チテ熱烈ナル證詞ヲナセリ。當時蓄音器ハ最モ新シキ發明品ニシテ、村ノ人々ニ喜バレ、入レ代リ立チ代リ約三百名ノ群集ニ對シテ斷片的ナリトハ言ヘ、尚基督教ノ如何ナルモノナルヤニツキ説明スルヲ得タリ。之ニヨリテ深キ感動ヲ受ケ、明日ノ備ヘノ大事ヲ悟リシ者モ少カラザリキ。何等ノ迫害モナク、農村傳道ノ序幕トシテハ豫想外ノ好成績ナレバ其ノ經驗ヲ基ニシテ更ニ次年度ノ祭禮ニモ之ヲ行フコトヲ申合セテ散會セリ。第二回目以後ノコトハ項ヲ新ニシテ記スベシ。

#### 第五十四 愛友會ノ運動會

明治ノ末頃ヨリ大正ニカケテ國際運動競技ノ屢々行ハル、ニツレテ世ノ一般ニスポートヲ歡迎シ、上ハ大學ヨリ下ハ各地小學校ニ至ル迄春秋ノ運動會ヲ催シ大イニ運動精神ヲ鼓吹セリ。我等病者ノ間ニモ發病前スポートマシタリシ者來リ加ハルアリ、サレドカ、ル催シガ一種ノ餘興トシテ、或ハ幾分ノ健康回復ノ助ケトシテ我等ノ闘病生活ニモ價値アリヤ否ヤハ全ク未解決ノ問題ナリキ。此ノ問題ニ解決ヲ與ヘタルハ、大正八年十一月三日霜間今ノ京田兄ノ宅地ノ處ニテ愛友會主催ノ下ニ開カレタル天長節祝賀運動會ナリトス。同日午後一時開會、宿澤兄主トシテ會ヲ指導セリ。一人一脚、二人三脚、盲啞競争、短距離徒歩等外各種競技アリ。優勝者ニハ夫々賞品ヲ授與セリ。來會者約二十五名、頗ル盛會ナリキ。此事アリテヨリ、從來病者ノ身體ハ脆弱且神經鈍麻セルヲ以テソノ運動競技ハ危險ナリト言ヒ、有害ナリト言ヒ、或ハ手或ハ足或ハ眼其他身體ノ何レカニ既ニ欠陥アリ、病症ノ程度ニ依テ體力ノ差著シケレバソノ競技ハ不公平或ハ不可能ナリ等唱ヘタル人々ノ疑雲此ノ愛友會主催運動會ノ實績ニ照シテ全ク一掃セラレ、病者ハ病者ナリニ不自由ナル肉體ニヨル競技ハ反ツテ色トリドリニ面白ク、慰安ノ爲頗ル妙ヲ得タルモノナリトノ大體ノ結論ヲ得タリ。

此ノ愛友會ノ運動會ガ今日ノ聖バルナバ青年會主催ノ大運動會ノ發端ナリトス。我等ハ宿○薰兄ノ英斷ニ感謝セザルヲ得ズ。サテ其ノ次ノ年即チ大正九年ニハ草津ニ於テ教會青年會組織セラレタルヲ以テ、愛友會、青年會聯合主催ノ下ニ、一般ヨリ寄附ヲ募リ、場所モ兩地ノ中間ナル鈴蘭村ニテ稍々大々的ニ舉行セリ。入口ニハ大ア一チヲ作り、味噌釜ヲ持チ出シテ湯ヲ煮タル事等ハ今尙當時ヲ語ル人々ノ忘レ難キ想出ナリトス。病者ニ相應シキ特有ノ各種競技ハ頗ル面白ク、特ニ輕症ヲ誇ル若人ノ血ヲ燃ヘシメタリ。大正十年以後ノ運動會ニ就キテハ、青年會ノ章ニテ之ヲ述ブルコト、シ、次項以下諏訪神社祭禮傳道ノ續キヲ語ルベシ。

## 第五十五 第二回諏訪神社祭禮傳道

大正八年八月二十七、八兩日我霜間愛友會ハ第一回傳道ノ好成績ニ鑑ミ茲ニ第二回諏訪神社祭禮傳道ヲ決行セリ。時既ニ霜間ニ聖ステバノ館ガ建テラレ、同館ヲ中心トシテ愛友會ノ陣容愈々整ヒ、傳道ニ集會ニ、便宜ト力ヲ得タリ。サテ今回ハ豫メ神社ノ管理者ヨリ神社境内ノ一部ヲ正式ニ借受ケ、笹ヲ刈リテ莫蔭ヲ敷キ周圍ニハ幕ヲ張り前年ト趣キヲ異ニスル聖晝ヲ携行シ、又蓄音器ニテ群集ヲ集メ、更ニ詳シク話ヲ聞カントスル者ノ爲ニ、幕ノ外ニテ個別的ニ勸告ヲナシ、又「神ヲ知ルノ道」「罪ヨリノ救ヒ」「天地ヲ造リシ神」等ノトラクトヲ頒布ス。今回傳道ニ參加セル面々ハ、リイ教母、井上先生、高〇千〇兄、福〇紫〇兄、高〇利〇兄、管〇丈〇兄外聖ステバノ館員全部ニシテ、昨年ノ經驗ニヨリテ一定ノ場所ヲ占メ豫メ用意シ置キシ事ニヨリテ、豫想以上ノ效果ヲ得テ一同主ニ感謝シ次年度ニ於テモ更ニ續行スルコトヲ申合セタリ。

## 第五十六 教會樂隊

愛友會ノ傳道精神ハ年ト共ニ高揚セラレ、大正七・八年度ノ諏訪神社祭禮傳道ニ鑑ミ、大正九年度ニ於テハ更ニ效果アル傳道ヲ爲サンガ爲、一同祈ノ中ニ主ノ導キヲ待望シツ、アリシガ偶々全九年春ノ一集會散會後本問題ニ就テ、會員一同隔意ナキ意見ヲ求メタルニ席上宿澤兄其他ヨリ蓄音器ノ如キハ室内ニ用フルニハ適スルモ大原野ノ中ニテハ效果大ナラズ寧ロ太鼓ラッパ等ノ如キ屋外樂器ヲ用ヒタラバ宜シカラントノ案アリ。一同之ニ賛シ此ノ事ヲリイ教母ニ願出デ費用ノ支出ヲ乞フベク其ノ交渉一切ヲ宿澤兄ニ一任スル事トセリ。然ルニリイ教母ハ「新教諸派ノ後塵ヲ拝シ、傳道說教ヲ興行化スルハ我ニ好マシカラズ」トテ容易ニ許可ヲ與ヘズ。其ノ間一教會有志ハ之全ク新シキ試ミナレバ、先ヅ管理長老タル大藤鑄三郎師ノ意見ヲ聞クニ如ズト、東京ナル同師ノ許ニ書

面ヲ以テ伺ヲ立テタリ。然ルニ數日後同師ヨリノ回答ハ「教會トシテハ差支ナシ。但シ具體的方法ハリ一教母ノ許可ト差圖ヲ乞ベシ」トアリ。依テ此ノ事ヲモ併セ再ビ教母ニ願出タルニ遂ニ其ノ許シヲ得、經費ハ主トシテ一般有志ノ寄附ニ俟ツ事トナリ、リー教母金五圓ヲ筆頭ニ、信者舉リテ應分ノ寄附ヲナシ、金四〇圓ヲ得タレバ、大太鼓（二十五圓）小太鼓其ノ他ヲ購入シ、素人乍ラ聞覺ヘ歌ヒ覺ヘノ聖歌等ノ猛練習ヲ開始セリ、斯クテ之ヨリ諏訪神社祭禮傳道ニ持出スハ勿論、近郷ノ村落ニ向ッテ勇敢ナル傳道行軍ヲ行ヒタリ。之今日青年會管理ニテ行ハル、日曜ノ晚ノ行軍並聖バルナバブラスバンドノ發端ナリトス。

### 第五十七 第三回諏訪神社祭禮傳道

大正九年八月二十七、八ノ兩日、第三回諏訪神社境内ノ傳道ヲ開催ス。前回ノ如ク境内ノ一部ヲ約二間四方借り受ケ、此處ニ天幕ヲ張り準備ヲ整ヘタリ。而シテ此ノ度ハ前述ノ如ク宿澤兄、高石兄ノ奔走ニヨリ大太鼓及小太鼓等ヲ傳道用トシテ備フルヲ得タルニヨリ、之ヲ以テ盛ンニ群衆ヲ集メテ頗ル效果アル傳道ヲ爲スヲ得タリ。然ルニ傳道ノ叫ビ酣ナル時、祭典執行ノ爲上リ來レル衣冠束帶ノ神主ノ一隊イト嚴カニ天幕ノ前ニサシカ、ルヤ、夥シキ群集ヲ見、又其ノ中ニ叫ブ人々ヲ見、神主ノ顔色險シクナリ傍ナル地元宮掛ヲ呼ビ「我が神聖ナル神社ノ境内ニテ基督教ノ傳道ハ甚ダ不可ナリ。何トテ之ヲ止メザルヤ」ト群集ノ面前ニテ叱責セリ。宮掛ハイタク狼狽シ、天幕内ニ駈ケ入りテ立退キテ哀願ス。愛友會ニ於テハ之ノ宮掛ヨリ正式ニ場所ヲ借り且ツ豫メ傳道ノ諒解ヲ受ケアリシヲ以テ、神主ノ抗議ニ屈服スル事ナク大イニヤルベシトノ強硬論ヲ主唱スル者アリシカドモ、此ノ際爭フハ却ッテ信者トシテ相應ハシカラズト爲シ、傳道ヲ中止シテ降りシキル雨ノ中ヲ、高〇千〇兄宅ニ集リ傳道祈禱會ヲ開キ、今日ノ問題ノ爲、將亦教ヲ聞キ、シ人々ノ救ハレン爲、熱心ニ祈レリ。時ニ品木村ノ藤作兄外一

人高石兄宅ヲ尋ネ、今少シク教ヲ聽問致シ度シト申出タレバ、在ニ於ケル初穂トモナレヨトテ懇ロニ説キ聽カセタリ。二人ハ涙ヲ流シテ喜ビ、神ニ罪ヲ懺悔シ、喜ンデ讚美ヲナセリ。夕方ニ至リテ雨急ニ止ミ、涼風冷ヲ拂フ。會員一同尚群集ノ熱心ヲ忘ル、能ハズ、一人亦一人ト再ビ諏訪神社ニ赴キ、トラクトヲ配布シ、個人的ニ獎メヲナセリ。尚特筆スベキハ祭禮ノ前日タル二十六日ノ晚神社ニ齋ニ來ル人々ニ傳道セシ事ナリ、即チ同日夕方ヨリ出掛ケ、初メハ門外ニテ聖歌ヲ唱ヒ、證詞ヲナシツ、アリシニ、齋ノ人々皆聽キニ來リ、遂ニ招カル、儘ニ社内ニ入り、神前蠟燭ノ光リニトラクトヲ讀ミ聞カセ、橋川兄、熊○勇○兄等最モ銳キ證詞ヲナシ、著シキ效果ヲ舉ゲタル事ナリ。彼等ハ喜ンデトラクトヲ受ケ家ニ歸リテ靜カニ讀マン等ト言ヒ合ヘリ。愛友會ニ於テハ起リタル障害ニ毫モ屈スルコトナク更ニ次年度ニ於テモ之ヲ續行スベキ決意ヲナセリ。

#### 第五十八 第四回諏訪神社祭禮傳道

大正十年八月二十七・八ノ兩日第四回同社祭禮ノ傳道ヲ行フ。境内ノ使用ニ就イテハ昨年ノ例アルヲ以テ見合セ、神社ノ直南ノ原野ヲ借用シ館用毛布ニテ急造テントヲ張り樂隊ヲ以テ群集ヲ引キ寄せ前回ヨリモ更ニ組織的ナル傳道會ヲ開ク。リー教母、山中師、三上先生外教會委員全部出席、一行約四十名ノ兄弟姉妹ハ辨當携行ニテ出掛ケ頗ル賑ハシク又力アル傳道ヲナス事ヲ得タリ。除隊後間モ無キ一青年ノ如キ臺灣守備中ニ亂暴ナシタル素行治マラザル事等ヲ涙乍ラニ悔改メ赦シ主ナル主ヲ讚ヘタリ、證詞ヲ聞キ己ガ靈ノ行方ヲ思フテ戰キ倒レタル老嫗モアリキ。今回ハ大人數ニテ出カケタル甲斐アリ今迄ヨリモ更ニ多クノ靈ニ覺醒ト感動ヲ與ヘタルハ事實ナリ。サレド教會ノ傳道方針變更其他諸種ノ事情ニヨリ、祭禮傳道ハ本回ヲ以テ打切ルコト、ナレリ。

#### 第十章 霜間愛友會

今前後四回ニ亘ル諏訪神社祭禮傳道ノ跡ヲ顧リミ之ニヨリテ知り得ル一ツハ在方面ニ於テモ基督教ニ對シテ一

般ニ好感ヲ有シ積極的反對運動起ラザリシ事之ナリ。第二ニ基督ノ教ハ素朴ナル在ノ人々ノ耳裡ニ入り易ク深キ感動ヲ與ヘタルハ事實ナルモ如何ニセン因襲ノ力強大ニシテ急ニ祖先傳來ノ宗教ヲ全ク棄テ、基督ニ來ル事ヲ頗ル困難トシタル事ナリ。加フルニ一度基督教ニ耳ヲ傾ケ求道ノ心ヲ起セシ者モ、餘リニモ地理的ニ草津ヨリ遠ザカリテ散在スルヲ以テ其ノ後ノ適當ノ指導方法ヲ講ズル能ハズ。之等ノ事情ニヨリ洗禮ヲ受ケテ正シキ主ノ群ニ加ヘラレシ者ハ一人モ非ザリキ。サレド此ノ傳道ニヨリテ一般ノ傳道精神ヲ刺戟シ又信徒ノ團結力ヲ増強セシメテ主ノ教會ノ基礎ヲ愈々固ムルニ與ツテ力アリキ。愛友會諸君ノ熱心ト忍耐ハ以テ後人ノ範タルベシ。

(以上數項ハ高○利○兄、高○千○兄、管○丈○兄等ノ談話ニヨル)

## 第十一章 男子ホーム

### 第五十九 同情ノ家庭

リー先生ハ來草ノ當初ニ於テハ男子病者ノホーム設立ニ多クノ興味ヲ有セザリキ。之男子病者ニ對シテ愛情ト同情ノ念薄キニ非ズ。或男子病者ニ至ツテハ反ツテ女子病者ヨリモ個人的救助ヲ與フルニ吝ナラザリキ。サレド男子ハ一般ニ女子ヨリモ性剛毅ニシテ困難ヲ排除シテ進ム力アリ、誘惑ニ陥ルトモ之ニヨリテ心身ニ打擊ヲ蒙ル事女子ノ如ク悲惨ナラズ。且ツ東京市外東村山村ニ全生病院アリテ適當ナル手續ヲトル時ハ入院スルヲ得、入院後モ女子ヨリモ優越ナル立場ニアリ等ノ理由ニ基キ、先ツ女子ノ救濟ヲ先トシタルモノナリト傳ヘ聞ケリ。サレド瘴エ難キ病ノ故ニ住ミナレシ故郷ト溫キ家庭ニ止ル能ハズ如漸クニシテ辿リツキタル平和安全ノ當地ナルガ故ニ、好ンデ全生病院其ノ他ノ療養所ニ足ヲ運ブ者ナク、殊ニ當時ノ療養所ハ規模未ダ小ニシテ、専ラ浮浪患者ヲ

收容シ一般ノ入所ハ殆ント困難ナル有様ニテ、桐○佐○兄ノ談ニヨレバ草津ヨリ遙々ト擔架ニノセテ擔ギ行キタル同病者ヲ入所拒絶ノ故ニ如何トモスル能ハズ門前ノ桑島ノ中ニ棄テ、逃ゲ歸リタル程ニテ、患者ノ粗暴ナル性質奇醜ナル取締リ等、病者ヲ戰慄セシムル程ナラザルハナク、從ッテ一度草津ニ落着キタル者ハ何レモ當地ニ定住ヲ欲シ健康アル者ハ勞働ニ從事シテ生計ヲ立ツルニ至レル次第ニシテ、病勢ヤ、ニ進ム共急ニ愛住ノ地ヲ去リ難ク、遂巡躊躇ノ間ニ、手指彎曲シ或ハ脱落シ足ハ下垂シ身體ノ自由ハ失ハレ結節潰瘍全膚ヲ侵シ他ノ介補ナクシテハ如何トモ爲ス能ハザルニ至ル又當然ノ勢ナリキ。況ンヤ今日ノ如ク交通ノ便ナク、險路十數里ヲ踏破セザレバ療養所ニ達スル能ハザリシヲ以テ之等ノ人々ニ對シテ、リー教母ハ愛憐ノ眼ヲ閉ヂントシテ閉ジル能ハザリシナリ。

更ニ教會ノ忠實ナル信者ニ數名ノ救助ヲ要スル男子アリ。病症重リタレバトテ男子ナルガ故ニ之ヲ顧ミザル又忍ブ能ハザル事ナリキ。加フルニ「愛ノ家庭」ニ救ハレタル婦人達ノ感謝ノ生活ヲ見テハ、我ガ勞ノ空シカラザルヲ喜ビ、遂ニ男子ノ爲ニモ萬難ヲ排シテホームヲ備ヘント決意セラル、ニ至リシモノトス。即チ、リー教母ハ大正七年四月「愛ノ家庭」ノ東隣六疊ヲ太平館ヨリ借受ケ、之ヲ「同情ノ家庭」ト命名シ、諸○了○兄、羽○義○兄、鷺○吾兄、飯○鉄○郎兄ノ四名ヲ受容シ、自ラ其ノ家庭ノ母トシテ萬端ノ世話ヲナセリ。之男子ホーム第一ノ種ナリ。

## 第六十 睦ノ家庭

越エテ大正八年二月十五日、栗生ナル高○利○兄ノ家ヲ受ケ之ヲ「睦ノ家庭」ト命名シ高須兄及ビ其ノ家ニ同居シタリシ宿○薰兄、熊○勇○兄ノ三名ヲ男子ホームノ中ニ加ヘタリ。此ノ「睦ノ家庭」ト前項ニ述ベシ「同情

ノ家庭」トハ、即チ後年ノ大男子ホームノ發端ナリトス。  
サレド此ノ時ハ婦人ホームノ如ク永久的施設ノ意ナク、  
何レモ人的條件アル一時的救助ヲ意味スルモノナリキ。

第六十一 霜間聖ステパノ館

當時、獨立セル男子ホームノ設立ニ關シテハ賛否兩論  
アリテ、就中井上婦人傳道師ノ如キハ「男子ホームノ設  
置惡シキニ非ズ。サレド餘力アラバ寧<sup>レ</sup>ロ婦人病者ノ救濟  
ニ充ツベキナリ」トテ反對ノ意見ヲ表明セリ。然リト雖  
既ニ「同情ノ家庭」アリ、「睦ノ家庭」アリ。斯ク同一  
内容ノ家庭ガ一ハ草津ニ、一ハ栗生ニ、二十餘町ヲ距テ  
、存在スルヨリハ、之ヲ合セテ一トナシ相倚リ相助ケテ  
生活セシムル事望マシク、且ツ兩者共一時凌ギノ借家住  
ナリシカバ意ノ如クナラザル事モアリテ、旁々リ一教母  
ハ遂ニ婦人ホーム同様ノ男子ホーム設置ノ決意ヲ固メ、  
先ツ三ヶ所ノ候補地ヲ豫定セリ。栗生ノ少シク手前ナル  
霜間ノ谷、百合ヶ平（今日鈴蘭村ト呼ブ處）、及ビ湯ノ  
平ノ三ヶ所之ナリ。サテ百合ヶ平ニ就キテハ草津ニ近ク

霜間聖ステパノ館



便利ノ點ハアレドモ冬季寒冷殊ニ朔風劇シク襲フコト、又湯ノ平ハ冬籠リ中食糧運搬等ニ不便多シトノ理由ニテ結局霜間ノ谷ト決定セリ。霜間ハ栗生ニ近ク栗生ニハ十數名ノ信者ナル兄弟アリ。大正七年九月マキム監督馬ニ乘リテ此ノ地ニ迄來リ、内數名ノ兄弟ハ按手ヲ領シ受聖餐者タリ。又宿澤兄ヲ初メ有力ナル男子信者モ少カラズ諸種ノ點ニ於テ便宜アレバ此ノ地ニ最後ノ決定ヲ與ヘタルモノナリ。即チ草津町字芳ヶ窪乙六九〇番地久保木六三郎氏所有木造平屋（八、六）一棟ヲ買入ル、事トナリ。大正八年三月三十日賣買價格五百圓ニテ契約成立セリ。依ッテ翌四月早々同情・睦ノ兩家庭ノ者此處ニ引越シ此ノ家ヲ「聖ステパノ家」（聖ステパノ館）ト命名シタリ。其ノ後幾何モナク一棟ノ新家屋其ノ並ビニ建築セラレシヲ以テ此ノ家ヲ一般ニ舊館ト呼ベリ、其ノ後草津ニ移サレ、聖ルセ館ノ物置トナレル家屋之ナリトス。

サテ男子ホーム聖ステパノ館ノ創立ニ當リテ吾人ノ忘ルベカラザルハ、此ノ家屋及宅地並ニ附近山林一町七反歩ノ購入費二千圓ヲ寄附セラレタル神父ステパノ（ヒューレット長老）ト米國ナルエンゲル・ビー・エリオット夫人ノ厚意ナリトス。ステパノ長老ハ夏期間我教會ノ聖餐長老トシテ、特ニ男子病者ニ深キ同情ヲ表ハシ、反對論ノ中ニ立チテ種々斡旋奔走ノ勞ヲトラレタリ。サレバ、其ノ記念ノタメニ聖ステパノノ家トハ唱フルナリ。

#### 第六十二 聖ステパノ館新館

前述ノ如ク、大正八年四月ヨリ兩家庭ノ人々ハ一ツトナリテ喜ニ溢レツ、與ヘラレタル「聖ステパノノ家」ニ新シキ生活ヲ始メタリシガ、八疊六疊ノ二室ニテハ七人ノ家庭ノ生活ニハイサ、カ狹隘ヲ感ジタルヲ以テ、リール教母ハ同館前ニ建坪十五坪、六・六・六ノ新家屋ヲ建設スベク草津ノ飯〇代〇兄（太平館主飯〇久〇兄ノ弟）ニ依頼シ、關根・島田ノ兩大工之ヲ手傳ヒ、大正八年七月二十一日ニハ早くモ之ガ落成ヲ見タリ。之ニヨリテ聖ス

テバノ館ハ二箇ノ家屋ヲ有シ、新シキヲ新館ト呼ベリ。

リー教母ハ新男子ホームヲ統轄スベキ責任者ヲ物色中ノ處、福○紫○兄ヲ最適者ト認メ同兄ニ交渉セルニ兄ハ喜びテ之ヲ受ケ、即チ新館落成ノ日第一代舎監トシテ聖ステバノ館ニ入レリ。サレド寢食ヲ共ニスルニ非ズ、太平館ヨリノ通勤ナリキ。館員ニハ高○利○兄、宿○薰兄、板○昌○兄、本○仁○郎兄、羽○義○兄、熊○勇○兄兩○了○兄アリ。何レモ男子ホームノ先達ナリ。本館ハ峰ノ茶屋ニ通ズル道路ヨリ、通稱十一曲、或ハ七曲リト稱スル急坂ノ何レカヲ降りタル谷間ニアリ。谷間ナレドモ南ヲ受ケテ日當リ良ク、他ノ高キ處ニ先ンジテ解雪ス。土地極メテ肥沃、農業園藝ニ適ス。櫻・桃其ノ他ノ花ヲ持ツ灌木多ク解雪ヨリ降雪期迄百花交々咲キテ館員ヲ樂シマセタリ。地理的ニ他ト離レ居ルヲ以テ、閑靜ニシテ、世ヲ棄テタル病者ナル信者ノ生活ニ最適絶好ノ地ナリ。即チ、出テハ鍬ヲ把リ入りテハ共ニ祈リ、館員一同ノ親密ニシテ愛ヲ以テ互ヒニ事フル様ハ在ノ人々スラ尚羨望スル處ナリキ。

### 第六十三 男子ホーム草津分館

霜間ニ美ハシキ男子ホームノ創設セラルルヤ、其ノ生活ヲ希望シ入館ヲ願出ル者次第ニ増加シ、大正九年ニハ館員十四名ノ大家族トナレリ。從ツテ食糧品、日用品ノ購入ノタメ草津ニ上ル度數モ多クナリ行キシガ病者ノコトナレバ草津迄デ上レバ相當ニ草臥ルヲ以テ一寸一服シテ疲レヲ休メル所アラバト願ヒ且時々入湯ノ爲上草セル時ノ休息所トシテモ、浴槽ニ近キ處ニ一室ノ與ヘラレン事ヲ祈リツ、アリシガ、教會下双葉館主白○忠○氏ノ好意ニヨリ、同氏所有ノ長屋（今ノ聖ポーロ館）ノ西端一間八疊ヲ月額三圓ニテ借り受クル相談ヒタリ。然ル處ノ部屋ヲアケオクハ勿體ナシト言ヒ、一方男子ホームハ超滿員ノ有様ナリケレバ、身體比較的虛弱ナ

リシ高○利○兄、長○幸○兄、飯○鐵○郎兄靜養ノタメ霜間ヨリ上リテ移リ住ムコト、ナレリ。之男子ホーム草津分館ナリトス。

第六十四 三委員制

第一代男子ホーム舎監福○紫○兄ハ大正八年七月二十一日其ノ責任ヲトリテ以來通勤ナリシト雖モ良ク館員ヲ指導統率シテ不景氣ノ折柄困難ナル館經濟ヲ切り廻シ館員ノ信望ヲ得タリ。

然ルニ翌大正九年夏頃同兄ハ一佳人ト結婚セントスルノ意アル事、差支ヘ無クバ結婚後モ引キ續キ舎監タルベキ事ヲ洩シ、ヲ以テ、館員一同當惑シ硬軟兩派ニ分レ頗ル騒然タリキ。

板○昌○兄、兩○了○兄等ハ硬派ノ急先鋒トシテ其ノ結婚ニ絶對反對ヲ唱ヘ「例之舎監タリ共、獨身ト純潔ヲ標榜スル男子ホーム館員タル以上、館員タル立場ニ於テ結婚ヲ爲スハ不可ナリ。又將來ニ惡例ヲ殘スモノナリ」。ト唱ヘ爲ニ館全體ノ意見ハ次第ニ反對論ニ傾キ、徹夜シテ祈リ又舎監ニ對シテモ館員ノ爲ニ思ヒ止ラン事ヲ數次ニ亘リテ熱心ニ懇願セリ。二者ノ何レカヲ選ブベキ岐路ニ立テル、福○兄ハ遂ニ大正九年八月決然トシテ舎監ヲ辭シ、自由ノ立場トナリ大藤鑄三郎長老司式ノ下ニ急遽教會ニテ結婚式ヲ舉ゲタリ。館父ヲ失ヒタル館員ノ失望又思フベシ。リー教母モ事情止ムヲ得ズトシ、館員中ヨリ後任舎監選衡ニ着手セラレシガ、一長一短團票ノ背比ベノ形ニテ、館員中特ニ頭角ヲ抜ク者無ク、依ッテ東京聖三一神學校ヲ卒業シ歸草早々ノ山中政三傳道師ヲ煩ハシ、第二代男子ホーム舎監ニ就任セシメラレタリ。サレド山中師ハ教會ノ指導者トシテ、禮拜司式、求道者教導等極メテ多忙ニシテ、一週一回ノ通勤ニテハ館員ノ指導上遺憾ノ點無シトセズ。依ッテ館主リー教母ハ館員中ヨリ力量手腕ノ人物三名ヲ選ビテ之ヲ山中舎監ニ隸屬セシメ、男子ホーム委員ト名付ケテ合議制ニヨリ館ニ關スル

一切ノ事項ヲ處理セシムル事トセリ。

而シテ第一回ノ委員ニ指名セラレタルハ、高○利○兄、本○仁○郎兄、羽○義○兄ノ三名ナリトス。之ヨリ大正十四年四月十五日委員制度ヲ廢止シ、三館並立ニ至ル迄、本制度ハ採用セラレ、選バレタル委員又ヨクソノ本分ヲ守リ館ヲ愛シ、館員全體ノ爲ニ圖ル處宜シキヲ得タレバ館員モ良クソノ命ニ服シ愈々ホームノ生活ヲ樂シムニ至レリ。

今其ノ委員ノ在職及更迭ノ情況ヲ見ルニ、大正十年六月五日委員羽○義○兄永眠ノ爲、宿○薰兄其ノ後任ニ指名セラレタリ。久シキ謹慎生活ノ誠意漸ク内外ニ認メラレ、茲ニ再び指導者タル位置ニ就キタルハ同氏ノ爲ニ慶スベシ。之ヨリ氏一流ノ手腕ハ良ク委員會ヲ動かシ、諸種ノ方面ニ改革ヲ加ヘタリ。其ノ智囊ハ館ノ珍寶ナリキ。大正十年十月委員本○仁○郎兄弱クナリタルヲ以テ職ニ堪エズトテ辭職セルニ就キ、又々委員ノ缺員ヲ生ジタリ。此ノ時館ノ自治ニ館員ノ總意ヲ代表セシムル爲一名ヲ館員ノ一般投票ニヨリテ決シテハ如何トノリ一教母ノ思召シニヨリ總會ヲ開キ投票ノ結果、青○昇兄最高點ヲ以テ當選ス。依ッテ館主指名ノ高須・宿澤兄ト並ビテ委員ニ就任ス。翌十一年委員ニ變更ナク、高須兄ハ主トシテ新設セラレタル聖ビリボ館ノ責任ヲ帶ビ、青山・宿澤兩兄ハ主トシテ聖ステパノ館ノ責任ヲ負フ。越エテ十二年九月委員青○昇兄ハ聖バルナバ醫院ノ働人トナリタル爲委員トシテノ働キニ支障アリトノ名目ノ下ニ辭表ヲ提出シタレバ、會員總會ヲ開キ投票ノ結果、鈴○徳○兄當選ス。大正十二年十月舍監山中政三師ハ、リ一教母ト相談ノ結果、館ノ自治的訓練ハ已ニ整ヒ委員制度ノミニテ充分ナリトテ、舍監ヲ辭職セラレタリ。館員一同其ノ徳ヲ俾ビ、記念ノ贈物ヲナシテ深キ感謝ノ意ヲ表明セリ。大正十二年十二月委員ノ更迭行ハレ、聖ビリボ館ノ責任者タリシ高○利○兄ハ聖ステパノ館ニ來リ、鈴木兄ト共ニ同館ヲ統轄シ、更リテ宿澤兄上草シテ聖ビリボ館ノ責任ヲ取ル事トナル。大正十三年七月委員鈴○徳○兄退館ノ爲、補

缺選舉ノ結果、上○寛○兄當選シ、館主指名ノ高須・宿澤兄ト共ニ大正十四年四月十五日迄委員トシテ館ノ統轄ニ當レリ。

各委員ノ在任年數ハ四年八月ノ高○利○兄ヲ筆頭ニ、三年九月ノ宿○薰兄、一年十一月ノ青○昇兄、一年一ヶ月ノ本○仁○郎兄、十ヶ月ノ鈴○徳○兄、九ヶ月ノ羽○義○兄ノ順トス。

尚大正八年度ヨリ十二年度ニ至ル、聖ステバノ館ノ人員ヲ調査スルニ左ノ如シ。

聖ステバノ館人員調

(年度) (毎月平均) (一年延人員)

大正八年度 六名 二、〇四一名

大正九年度 十八名 六、三二六名

大正十年度 二十二名 八、三九五名

大正十一年度 二十七名 九、七一五名

大正十二年度 二十八名 一〇、二五六名

第六十五 聖ピリポ館

霜間ニ聖ステバノ館(舊館・新館)草津ニ分館ヲ有セシ男子ホームハ、其ノ後尚館員ノ増加ニ伴ヒ館ノ擴張ニ迫ラレ、出來得ベクンバ温泉アル草津ニ一ノ獨立セル家屋ノ與ヘラレン事ヲ祈リ居タリ。時ニま○やノ裏、高○與○兄ハ「見○亭」ナル料理店ヲ營業シ、酌婦使用人等十名ヲ置キ、商賣繁昌シ居タリシガ、大正十年八月之ヲ賣却セントスル噂アリ。此ノ種ノ營業ガ屢々若キ男女ヲ躓キニ陥ラシムルコト、又此ノ亭ヨリ聞ユル弦歌時ニ起

ル亂痴氣サワギニヨリ教會ノ禮拜氣分ノ攪亂等モ考慮ニ入レテ、リー教母ハ急ニ之ヲ買收スル事ニ決シ、宿澤兩角兩兄命ヲ受ケテ交渉委員トナリ、土地建物一切ニテ三千百五十圓ヲ以テ賣買契約ヲ成立セシム。此ノ家ハ聖徒ピリポノ名ニ因ミテ「聖ピリポ館」ト命名セラレ、大正十年十月一日高○利○兄、長○幸○兄、上○作○郎兄等十二名ノ館員霜間ヨリ引越シ移リ住メリ。南ニ面シテ日當リ良ク、教會ニ近ク、浴場ニ近ク、館員一同更ニ一段ノ感謝ヲ以テ生活ヲ營メリ。炊事會計ハ霜間ステパノ館ト合同ニテ人事一切ハ三委員ノ合議ニ依ッテ決セラレタリ。三委員ノ下ニ炊事顧問アリ。専ラ炊事ニ關スル事項ヲ處理シ、又二名ノ監査役ハ會計ノ検査ニ當レリ。サテ同一内容ヲ有スル男子ホームガ斯ク南北ニ離レテ生活スルニ至リテヨリ統一上連絡ヲ失スル事等モアリタレバ大正十年十月兩館共通ノ問題ヲ議スル爲、初メテ男子ホーム館員總會ヲ開ケリ。此ノ總會ニテ一名ノ委員ヲ選舉セルコト前述ノ如シ、其ノ他炊事ニ關スル事項、風紀ニ關スル事項、館ノ平安ト發展ニ關スル事項等ヲ議セリ。

聖ピリポ館(後ノ聖ニコラス館)



旧聖ピリポ館(現名聖ニコラス館)

聖ニコラス館(現名聖ニコラス館)

之男子ホーム館員總會ノ初メナリトス。此ノ年以後ノ男子ホーム發展ノ狀況ニ就イテハ年代ノ都合上章ヲ改メテ説クベシ。

(以上數項ハ男子ホーム有志座談會ニヨル)

第十一章 リバイバル

第六十六 教會ニ於ケルリバイバル

大正九年ヨリ同十年ニカケテ我教會ニ起レル一ノ宗教運動アリ。信者ノ心ニ著シキ活氣注ガレ、墮落者ハ立歸リ未信者ハ信仰ヲ喚ビ醒マサレテ悔改メヲナシ、斯クノ如クシテ神ノ力ト惠著シク發現シタリ。古キ信者達ハ當時ヲ回顧シ、リバイバルノ時代ト呼ブ。之ニ二ツノ主流アリ。一ハ草津聖バルナバ教會ヨリ、一ハ霜間ノ愛友會ヨリトス。サレト後者ハ其ノ程度ニ於テ速ク前者ニ及バザリキ。教會ヨリ起レルリバイバルノ發端ハ、大正九年五月二十日ノ晚三上千安史ノナセル懺悔的説教ニアリトス。

三上女史ハ大正六年五月八日「愛ノ家庭」ノ舎監トシテ來草以來、醫院診療助手タリ、看護婦タリ幼稚園日曜學校ノ教師タリ、又婦人傳道師トシテ教會ノ説教ヲモ分擔シ、實ニ寸暇ナキ働キナリシガ、其ノ間ニ在リテモ未信者ノ教導ニハ特ニ心ヲ用ヒタリ。然ルニ元々聖書學院ノ出身ナレバ、其ノ受ケタル教育ト思想ニヨリ純聖公會ノソレト見解ノ一致セザルモノアリ。サレバ何事モ單刀直入自ラノ所信ヲ行ハントスル三上女史ト經營者タルリ一先生トノ間ニモ意見ノ疎隔ヲ來タスコト無キニアラズ。大正九年春頃ヨリハ特ニ心中惱悶ノ情絶エザリキト云フ。偶々東都ニテ開カレタルリバイバル大會ニ出席シ、會衆手ヲ拍キ涙ヲ流シテ祈禱スル様ヲ見テ大イニ感ジ、

如何デ我一人斯ク惱ムヤト恩師秋山先生ニ總テヲ打明ケ願ハクバ我ヲ導キ給ヘト乞ヘリ。秋山師ノ勸告ハ煩惱打破策トシテ、一、聖書中ヨリ教訓ヲ得ヨ、二、更ニ祈リテ答ヲ聽ケ、三、常識ニテ正當ト思フ事、四、聖靈ノ指導ヲ受ケタル人ノ聲ヲ聽ク事、等ノ數項ニ亘ルモノナリシガ、其ノ教ノ中ニ籠レル熱情ト親切ノ涙ニ頑固ナル心全ク溶カサレ、話ヲ終リタル時ハ全ク別人ノ如キ自分ヲ見出セリ。此ノ時女史ノ胸中ニ示サレタル聖書ハ、ダニエル書第三章ニシテ即チ「神僭ニ在スヲ信ズル信仰ダニアラバ主ハ見捨テ給ハジ。シャデラク、メシヤク、アベデネゴ暴君ネブカデネザルノタメニ燃エシキル火焰ノ中ニ投ゼラル、共、縲絏自ラ解ケ、火中ニ歩ミ何ノ害ヲモ受ケザリキ」トノ舊約ノ記事ナリトス。火焰ノ喜ビ、爐ノ中ノ喜ビ之ナル哉之ナル哉、主再ビ草津ニ歸レトノ命ナラバ我如何デ之ヲ拒マン。草津ノ働キガ火焰ノ中ニ在ル共、主僭ニ在ス。今ハ何ヲカ懼レント有難サニ唯嬉シク、涙ニ濡レテ無我夢中ノ中ニ東京ヲ發シ早ヤ草津ニ着キケリ。我決心何人ニモ黙シテ、唯示サル、儘ニ直進セント願ヘ共、胸ノ思ヒハ刻々積リテ黙スル程其ノ苦痛ハ募リテ遂ニ如何トモ爲シ難ク、此ノ喜ビヲ傳フルト共ニ先ヅ惡魔ノ行其ノ儘ナル過ギシ日ノ咎過テヲ愛スル湯之澤人ノ前ニ謝シテ其ノ宥シヲ得ント、筆ヲ執リ「我今迄ノ強慢不遜ト傍若無人未信者ニモ及バザル者ナリキ。我愛ノ足ラザリシヲ許シ呉レヨ云々ト書キ連ネタル謝罪狀ヲ、リー教母初メ二十有餘名ノ人々ニ差出シ、更ニ教會員一般ノ爲ニモ傳道師トシテノ不明不徳不備ヲ謝罪セントテ集會セン事ヲ願フ。五月二十日ノ晩ノ事ナリ。

「我今ハ平素ノ如ク説教ヲ爲サン事ヲ欲セズ。我罪我不明ヲ謝シ、愛スル諸兄弟ノ赦シヲ得ン。」トテ泣ク。「我光ヲ遮リ居レリ。我今神ノダイナマイトヲ以テ我魂ヲ粉碎セラル。我心ノ願ハ我方赦サレン事ナリ。若シ我言葉ニテ足ラザレバ、御身等我ヲ思フ存分撲打セヨ。尚所望ナラバ我裸トモナラン云々」ト其ノ深刻ナル懺悔激情迸リ狂氣ノ如ク、遂ニ神ヲ崇メツ、氣速クナリテ其ノ場ニ打倒レタリ。氣付キシ時ハ會衆皆聲ヲ擧ゲテ泣キ居

タリ。一座六十餘人「罪アルハ先生ニ非ズ。此ノ我ナリ。何トテ我等ニ謝セラル、ヤ。仕フルヲ知ラザル我等今如何ニセン」トテ、一人亦一人泣キツ、悔改ム。此ノ晚ノ此ノ時ヨリ宛モ激烈ナル疾風ガ森ノ木ノ葉ヲ吹キ靡カスガ如ク、信者ノ心ヲ揺リ動カシ、夜モ晝モ陸續トシテ教會ニ來リテ悔改ム。彼等ハ燃サレテ燃ユル焰ノ如ク、其ノ手ヲ取り、涙ヲ流シテ喜ブ様ハ、何物ニカ魅セラレシ者ノ如ク、或ハ又狂氣セル者ノ如シ。一新潔化ノ恩恵ノ波ハ實ニ眼ニテ明ラカニ見得ル奇蹟ヲ示セリ。管○義○兄ノ如キ先ヅ悔改メテ燃ヤサル、ヤ、兄丈○兄ガ未ダ全ク宿○薰兄ノ罪ヲ赦サザルハ衆惡大罪ヲモ赦シ給フ主ノ御前ニ申譯ナキ事ナリ。何トテ速カニ之ヲ許サザルト苛責頗ル急ナリ。「口惜シ」ト叫ビテ泣ク管野兄ヲ引捕ヘ來リテ、打腕クヲ高石兄擔イデ教會ニ入り、弟ヲ初メ多數ノ兄弟倒レタル管野兄ヲ叩キテ熱禱ヲ捧グ。弟ハ頬ヲ撲ラレ、或ハ胸元ヲ蹴ラレ、傷ケ共、主ノ御爲ニ嬉シキ十字架トテ毫モ之ヲ意ニ介セザリキ。人々ハ聖靈ガ強大ナル力ヲ以テ管○丈○兄ノ思想ヲ根本ヨリ覆シ全ク別人ノ如クナリ涯ハ懸河ノ熱禱ヲ捧ゲ友ノ罪ヲ全ク赦シタルヲ見タリ。兄ノ懺悔ヲ見テ喜ベル弟ハ、我ヲ忘レテ兄ノ膝ニ縋リ、嬉シサノ餘リヨ、ト泣クヲ見タリ。橋川兄ノ如キモ神經痛ニテ苦シ居タリシヲ、行ク、行カヌノ事ニテ濱名館前ニテ高石兄ト大格闘ヲ演ジ、教會ノ坂下ニテハ大地ニヘタバリ付キテ動カザルヲ岡本兄他數名ノ兄弟達坂ヲ引上ゲ、今ハ恩恵ノ時ナリ、何トテ眠ヨリ醒メザル、神ヨ此ノ體ニ宿ル惡魔ノ頭ヲ碎キ給ヘト打テ叩ク。忽チニシテ聖靈明カニ働キ、苦痛ハ癒サレ喜ビハ溢レ、祈リテモ祈リテモ尚盡キザル祈ヲ捧グ。一同「ハレルヤ、ハレルヤ」ト手ヲ拍チテ喜ビ合ヘリ。更ニ感極リテ抱キ付キ、手ヲ握リ合ヒテ泣クモアリ。五月二十日ヨリ一週間ノ間ハ、三上女史ハ飯ヲ炊ク暇無カリキト言フ。連續セル悔改メト熱禱ノ集會ノ爲ナリ。此ノ最モ異常ナル精神活動ハ尚三週間繼續セリ。上京中ノリー女史歸ルトテ三十名ノ信徒迎ヘニ行ク。出發ノ時ト變リテ皆嬉シゲニ「ハレルヤ」ヲ叫ビツ、アレバ、此ノ急變ニイタク驚ケリト言フ。

此ノ時ヨリ、教會ニテモホームニテモ、集リダニスレバ唯祈リタクテ堪ラズ、毎日一定ノ時間一處ニ祈リテ喜ベリ。サレド餘リニ喧噪ヲ極メ、静カナル禮拜氣分ヲ損ストテ、共同禮拜ニテ一處ニ祈ル事ハ禁セラレタレバ、山ニ野ニ草叢ニ集フ處祈リノ座ナラザルハナク、一同ハ多ク山ニ行キテ無限ニ導カル、祈ニ陶醉シ、日ノ暮ル、モ知ラザル有様ナリキ。山ニ行キテガヤ／＼祈ルヲ見テ世ノ人之ヲ「笹藪党」ト名付ケタリ。又「復活ル」ト祈ルヲ聞キ「蛙ノ會」トモ言ヘリ。

此ノ時悔改メニヨリテ教會ニ其ノ證詞トシテ持來レル物ヲ「戰利品」ト名付ケタリ。モルヒネアリ、賭博ノ札アリ、煙草入レアリ、人ヲ殺シタ刀劍アリ、酒瓶アリ、春畫アリ、艶文アリ、忽チニシテ二ツノ籠ニ滿チタレバ皆之ヲ祭壇ニ捧ゲタリ。之ヲ見テ心ノ眠リ醒マサレテ救ニ入りシ者モ少カラザリキト言フ。

(主トシテ三上女史菅野兄相馬兄池田姉石野田姉等ノ談ニヨル)

第六十七 婦人ホームニ於ケルリバイバル

三上女史ハ婦人ホームノ舎監ヲ兼任セラレシヲ以テ、五月二十日ノリバイバルノ影響ヲ最モ深刻ニ受ケタル者ハ婦人ホームナリトス。即チ副舎監タリシ相○鎔○兄夫妻ヲ初メ池○ミ○姉、稻○温○姉、石○田○ゴ姉等皆靈ニ燃ヤサレ、終ニ終夜唯嬉シクテ祈リ居タリ。又罪ヲ懺悔シ、更ニ人ニ懺悔ヲ奨メタリ。

先ヅ赦サレ、先ヅ燃ヤサレタル姉妹達ハ、勇敢ニモ男子ホームヘノ遠征ヲ企テ、即チ霜間ナル男子ホーム中ニハ、斯カル御恩寵ノ時ニ際シ乍ラ尚徹底セザル者アリト聞キ、其ノ心情ニ同情シ、殊ニ福○紫○兄、中兄、横○武○兄等ノ如キ幹部級ニシテ特ニ然リト聞ク上ハ打捨テ置カレヌ大事ナリ。我等火ヲ點ゼン。聖靈ノ焔彼等ヲ燒キ盡クスベシト。五月下旬館員一同大擧霜間ニ向ッテ進發シタリ。此ノ事ノ數日前、霜間ヨリ上リ來レル二人ノ

子供勇記<sup>ユキ</sup>チャン、金チャンハ打連レテ聖マリヤ館ヲ訪レシニ、皆嬉シクト泣クヲ見テ、我ニ嬉シト泣クヘキ何物モ與ヘラレザルハ恨メシキトテ泣キ乍ラ歸リ、事ノ次第ヲ館員一同ニ告ゲタレバ、板〇昌〇兄等初メマリヤ館遠征ノ舉ヲ豫知シ、女ノヤル事何程ノ事ヤアラン、點ゼラル、トモ燃ユルモノカ、反ッテ水ヲ投ジテ之ヲ消サンノミト意氣昂然タルモノアリキ。一方偉大ナル力ニ動かサレシ聖マリヤ館ノ一隊ハ、今ヤ御國ノ喜ビアルノミニテ其處ニハ性ノ區別モ環境ノ相違モナク、ハレルヤ、ハレルヤト叫ビツ、目指ス聖ステパノ館ニ到着スルヤ否ヤ先ヅオ菊姉妹ハ頑固ヲ以テ聞ヘタル板〇昌〇兄ノ許ニ走り寄り、其ノ膝ニ縋リテ「我汝ノ爲ニ惡シキヲ思ヒ惡シキヲ言ヘリ、願ハクハ之ヲ許セ」ト泣ク。流石ノ板〇昌〇兄モ百計盡キタル形ニテ「汝正氣ナリヤ。謝<sup>アヤマ</sup>ルトセバ惡シキハ我ニアリ」ト遂ニ胃<sup>イ</sup>ヲ脱ギ全キ謙遜ヲ以テ悔改メタリ。其他各姉妹豫メ定メタル作戰計畫ニ從ヒテ各々態度不鮮明ナル兄弟達ニ向ッテ全キ懺悔ヲ懇願シタレバ、數刻ニシテ之ヲ遮ル者一人ダニ無ク、凱歌到ル處ニ起レリ。舍監福〇紫〇兄ノ如キ三上女史ニヨリテ言々句句々急所ヲ刺サレ、遂ニ中兄ニ菓子ヲ與ヘテリバイバル反對ノ爲ニスバイトナセシ事ヲ謝罪シ主ニ懺悔シ、神ノ全キ赦シニ縋リ、共ニ聖靈ノ御業ヲ崇メタリ。

斯クテ兩館員全部入亂レテ熱禱ヲ捧ゲ、ハレルヤ、ハレルヤト座敷中ヲ亂舞スル有様ナリキト言フ。

(主トシテ三上女史、石野田姉、相馬兄、管野兄等ノ談ニヨル)

第六十八 男子ホームニ於ケルリバイバル

男子ホームニハ信仰復興記念日ナルモノアリテ、毎年五月二日館員一同嚴肅ナル懺悔ト感謝ノ一日ヲ送ルヲ例トス。事ノ發端ハ之ナリ。即チ大正九年五月二日ノ夕<sup>ユフ</sup>家拜ノ席上、館員聖靈ニ充タサレ自己ノ罪ノ爲ニ祈ル者爲スベキ事ヲ爲サ、リシヲ詫<sup>ワ</sup>ビル者、次ヨリ次ヘト現レ、家拜ノ席ガ其ノ懺悔ト祈リノ席ト化シ、東天白ミテ

ランプノ油無クナルヲモ知ラズ祈リ續ケタリ。之ヨリ後ノ二、三日間ハ、會フ人々毎ニ己ガ愛ノ足ラザル事、行ヒノ正シカラザル事、未信者ニ善キ感化ヲ與ヘ得ザル爲ニ、或ハ先輩ニ或ハ友人ニ、訴ヘ嘆キテ赦シヲ求メ、教會ニ於テハ集會ノ都度懺悔ヲ爲ス者引キモ切ラズ、許サレタルヲ自覺スル人々ハ唯嬉シゲニ道ヲ歩クモ「ハレルヤ、ハレルヤ」ト歌ヒ、未信者ニハ如何ニシテモ其ノ氣持ヲ諒解スル事能ハザリキ。斯クノ如クシテ我教會ノ内外ヲ通シテ宗教的熱情ハ日ニ燃サレタルナリ。思フニ傳ヘ聞ク、一八三七年宿澤兄ノ嘗テ居住シタル布哇<sup>ハツイ</sup>ノ地ニ起リシ大リバイバル、五ケ年間繼續シテ七千五百五十七人ノ悔改者ヲ生ジ、殊ニ發端ノ翌年七月一日ノ如キ、一時ニ一千七百五人ノ教會信者ヲ得タルニ比スレバ、尙微々タリト雖モ、過グル宿澤事件ニヨリテ未信者ノ間ニ部分的信用ヲ失墜シタル教會ハ、之ニヨリテ其ノ信用ハ恢復セラレ、其ノ内容ハ全ク充實セラレ、清新ノ氣溢レ漲<sup>トキ</sup>リ、再ビ多クノ求道者ヲ得タリ。即チ消エナントスル祭壇上ニ靈ノ火ヲ再ビ燃ヘ立タセ、之ヲシテ斷絶ナカラシメ給フ主ヲ崇ムル所以ナリ。

(主トシテ高須兄、青山兄、上滝兄等ノ談ニヨル)

### 第六十九 ヒクソン師ノ神癒祈禱會

一度病ニ冒サル、者其ノ重荷ト苦痛ヨリ脱却セン事ヲ慾求スルハ極メテ自然ノ情ナリ。自ラノ罪ニモアラズ親ノ罪ニモアラズシテ不治ノ難疾ニ悩ム者、一度癩病人ヲ深メ惡鬼ヲ追ヒ出シ給ヒシ主ヲ信ズル時、癒シ主ナル基督ヲ通シテ現代醫學ノ及バザル病ノ癒サレン事ヲ切ニ祈ル又我等ノ主ノ教ノ大イナル功德ナリトス。信徒一般ニ「癒シノ信仰」ト呼バレ、決シテ醫藥ヲ用ヒズ。板〇昌〇兄、高〇吉〇兄、高〇利〇兄、池〇ミ〇姉、杉〇淨兄上〇寛〇兄等ヲ初メ當時此ノ信仰ニ立チシ者少カラザリキ。

茲ニ大正十年夏渡來セル英國人M・ヒクソン先生ハ醫藥ニ依ラズシテ各種ノ疾病ヲ治癒セシムル靈力ヲ有シ、全國ノ新聞・雜誌ニ其ノ名ヲ喧傳セラレタリ。先生ガ我聖公會ノ信者ナルヲ以テ特ニ草津ヲ訪レラル、ノ報一度傳ルヤ、先生ノ按手ヲ受ケナバ癩病モ又立所ニ癒サレントノ風評起リ、又輕井澤ニテ一盲人ノ眼開キタリトノ事稍々誇大ニ傳ヘラレ、教會ニテモホームニテモ此ノ驚クベキ神癒ノ爲ニ熱心ニ祈リ切ニ草津ニ到着セラル、日ヲ待テリ。

時ハ大正十年八月二十九日ヒクソン先生一行七名來草シ、師ノ在ル處神癒ヲ求ムル群集ニテ埋メラル、有様ナリケレバ、特ニ病者ノ爲ニ三十・三十一ノ兩日滯草セラル、事トナリ、按手場所モ一ヶ所ニテハ狹隘ヲ感ジ、教會ト聖ビリボ館ノ二ヶ所設ケタリ。管理長老大藤鑄三郎師通譯ノ下ニ説教ヲナシ多クノ人々ノ上ニ手ヲ按ク。按手ヲ受ケタル者皆病症ノ輕快ヲ覺ヘタリ。就中品木村ノ健三ト言ヘル若者ノ如キ、瘍ハレモノ爲腰ガ立タズ籜ニ乗セテ來リシガ、按手ヲ受ケテ歸宅後薄紙ヲ剥グ如ク日ニ快癒ニ趣キ、遂ニ全ク治シ、感謝ノ餘リ我教會ノ求道者トナリ久シク遠路物トモセズ求道者會ニ通ヒタリ。江〇ソ〇姉ノ如キ數年ノ眼疾次第ニ癒サレ其ノ視力ヲ回復スルヲ得タリ。又伊〇田商店主伊〇田〇ネ姉ハ永年苦シミタル癩レヤクガ止マリシヲ以テ、其ノ感謝ヲ表ハス爲自己ノ商店ニテ酒類ノ販賣ヲ止メタリ。

人々此ノ奇蹟ニ驚キ、「病メル者ニ手ヲ付ケナバ癒ヘン」トアル聖言ノ力ハ現ハレタリ、信仰薄キ我等ハ恥ズベキナリ。「我等癒サレン爲ニ互ニ祈ラン」トテ之ヨリ毎月第三水曜日ヲ以テ神癒祈禱會ト定メ、信者中篤信ノ士會ヲ司リ、主ノ聖言ヲ學ビ、神癒ニ就テノ證詞ヲナシ、總テノ病メル者ノ爲ニ氏名ヲ點呼シ疾病ノ箇所ヲ舉ゲテ祈ル事トナレリ。之今日ノ神癒祈禱會ノ發端ナリトス。

### 第十三章 聖バルナバ・ギルド

第七十 (イ) ウォッチャース エンド ワーカーズ會本部

聖バルナバ・ギルドヲ説カントスルニ當リ、順序トシテ其ノ本部ナル The Watchers and workers' Society (略シテ S・W・W) ニツキ一言セントス。本會本部ハ英國ニアリ。社會ニ働ク能ハザル病弱者ニ基督信者トシテノ認識ヲ一層明瞭ナラシメ、更ニ主ノ爲ニ奉仕スル機會ヲ與フルヲ以テ其ノ目的トス。會員ニ二種アリ。弱者不具癡疾者等ヲ正會員トシ、健康者ヲ準會員ト名付ク。

本部ト二十ウォッチ支部ヨリ成ル。(一九三〇年五月現在調査) 本部ニハ總裁、副總裁(選バレタル長老) 會長(ウォンジンシスター)、名譽會計、會議係書記、選舉係書記、書記補、同情資金書記、同情資金會計、代禱題目主筆、機關紙ウォッチワード主筆附屬編物會長、附屬無料基督教圖書館長等ノ役員アリ。ウォッチニハ聖マリヤウォッチ以下二十三アリ。内特種ナル事情ニアルジブラルター、日本、バンクイバーノ三ツハ之ヲ支部ト稱ス。毎月一回機關紙ウォッチワード及代禱題目ヲ發行シ、會員並準會員ニ頒ツ。ウォッチワードハ特ニ病弱者癡人等ニ慰メヲ與ヘ信仰ヲ勵マスベキ記事ヲ滿載シ、代禱紙ハ名言選句ト讚美感謝祈禱ノ三部ヨリ成ル週別ノ題目ヲ集載ス。本會最高ノ統制機關ハ合議制會議ニシテ、會議員タル資格アル者ハ總裁、副總裁、會長、秘書、會計、主任牧師二名、ウォッチシスター(支部長) 二十一名又ハ其ノ代表者及ウォッチワード主筆ノミナリトス。

一九二九年七月本會創立五十年ノ記念會席上ニ於ケル會長 O・Brien 女史ノ演說ニヨレバ、一八七九年、E. J. Jacobs 夫人ガ其ノ病床ヨリ自己多年ノ病床生活ヲ基トシテ、Thoughts on Invalid Life (病床生活ノ感想) ナル一書ヲ公ニシ、本書ニ依ッテ病弱者ノ會ヲ設クルノ可ナル暗示ヲ世

人ニ與ヘタルモノトス。而シテ此ノ著書ハ識者ノ注意ヲ喚起シ、全年八月六日此ノ運動ニ興味ヲ有スル數名ノ友人ガ英京イートン街、聖ペテロ教會ニ於テ、全日午前十一時聖餐ヲ受ケタル後、カノン・ウイルキンソン師ノ好意ニヨリ、附屬幼稚園ニ集合シ、規則草案ヲ作製シ、此ノ會ニ The Guild of St. Cross (聖十字會) ト命名シタルヲ以テ、抑々本會ノ發端トナス。同年十一月三十一日、John Utterton 監督ニ於テ開カレタル役員會ニ於テ、會名變更ノ動議提出セラレ、結局本會第一代ノ總裁タリシ Harold Brown 監督ニ一任スル事トナリ、同監督ハ病者會員タリシ Margaret Lees 女史ノ提案ヲ採用シテ現在 Watchers and workers Society ト決定シ、茲ニ會名ヲ變更セラレタリ。會員ハ創立當時ヨリ神ノ教會ニ於テ病者ニヨツテ爲サルベキ特殊ナル働キアルヲ確信シ、一致協力其病者生活ニ於ケル孤獨ト悲哀ヲ征服シ、善キ働キト自他ノ爲ノ祈禱ニ専心シタルモノナリ。

第一回總會ハ一八八〇年七月二十六日英京ロンドン國際協會ニテ Watisham How 監督議長トナリテ行ハル。總會ニ於ケル報告ニヨレバ、創立當時病者會員二十二、壯健聖職會員二〇、平信徒會員四十八、計九十ナリシニ、全年(一八八〇)ニハ病者會員一二四、聖職四十二、平信徒一三四、計三〇〇ノ多數ヲ示セリ。一八八〇年一月機關紙ウォッチワード第一號發行、一八八一年各ウォッチニ主任牧師囑託、一八八四年ロンドンニ會員ノ簡易宿泊所設立、主唱者エデイスヤコブ會長ニ就任、一八九一年十二月十八日總裁 Harold Browne 監督召天ニ付キ、Wilkinson 監督後任ニ選舉セラル。一九〇七年十二月ウイルキンソン總裁召天ニ付キ監督 Hook 博士後任ニ選舉、一九一〇年英京大スミス通十四番地ニ本部ト成ルベキ建物ノ建築ヲナス。一九一五年會長病ニ依リ辭シ、Miss Anson 會長トナル。前會長多年ノ功勞ヲ俛ビ「會母」ノ號ヲ贈レリ。一九一七年盲人ノ組(聖ルカウォッチ)加入、一九一八年復活日ニ會母召天、一九二〇年三月二十五日總裁召天

シ後任トシテオックスフォード監督タルBrierley監督就任、一九一八年日本支部（頼者ナル信者）出来、一九一一年Miss Penber會長ニ選舉、一九二五年五月十三日召天、現オーブリエン女史就任シ現在ニ至ルモノトス。

此ノ間全力ヲ以テ援助シタルモノハ養老院孤兒院、レオル及ビグラハムスタウン大聖堂ニ説教臺寄附、聖アンデルス水上傳道隊、中央阿弗利加ノ大學傳道團ノ後援、チエイネ病院ニ寢臺寄附等ニシテ、其ノ範圍英國、印度日本、ニューファウンドランド等ニ亘ル。全會員ハ隠レタルニ良キ行ヲナシ、主ニ喜バル、力強キ祈ヲ捧グル爲ニ、愈々努力シツ、アリ。

（尚詳細ハ一九二九年八月ウオッチワードヲ参照スベシ）

#### 第七十 (ロ) 聖バルナバギルドノ創立

大正七年秋、リー女史ハ本國ノ友人ナルウオッチヤス・アンド・ワーカーズ會長ベンバー女史ヨリ、草津傳道地ニ同會支部ヲ作りテハ如何トノ書簡ヲ受ケタレバ、大イニ喜ビ、早速之ヲ教會委員會ニモ諮リシニ滿場一致賛成ヲ得、大正六年一月ヨリ教會ニアリシ代禱會ヲ其ノ儘「聖バルナバ・ギルド」ト命名シ、新統制ノ下ニ有力ナル祈禱團體ノ誕生ヲ見タリ。本部會長ハ其ノ快報ニ接シ、之ヲ日本支部トシ支部長ニリー教母ヲ指名シ銀ノ役員徽章ヲモ送り來レリ。本ギルドハ地理的ニモ他ノウオッチト獨立シ、且ツ特殊ノ事情アルヲ以テ本部ノ承認ヲ經テ別ニ會則ヲ制定セリ。今之ヲ一覽スルニ名稱ハ前述ノ如ク「ウオッチヤス・エンド・ワーカーズ會草津支部」又ハ獨立セル意味ニ於テハ單ニ「聖バルナバ・ギルド」ト稱ス。會長一名、幹事數名ヲ置キ、會長ハ會ヲ統轄シ幹事ハ會長ヲ補佐シ、會計及書記ヲ掌ル。之等役員ハ會員ヲ指導シ、本會ノ目的使命ヲ達成スル事ヲ努力ス。又

年三回代禱題目ヲ發行シ、之ヲ會員ニ頒ツ。本會ハ健康者會員ト病者會員及永眠者會員ニ三別セラル。會員ハ毎日一回本會又ハ會員ノ爲ニ祈禱シ、毎週一回本會ヨリ配布セシ代禱題目ニ就キ祈禱ヲナス權利ト義務ヲ有ス。入會ヲ希望スル者ハ、紹介者一名ヲ要シ、會長ノ許可ヲ經テ假入會者トナリ、三ヶ月後正會員トナル。會費年二十五錢。毎年一回（六月十日）聖バルナバ日前後ニ會員タル資格ニ於テ聖餐ヲ受ケ本會ノ爲ニ祈リ、又總會ヲ開キ會ノ發展ト向上ノ爲ニ議ス。バンクーバー支部ト共ニギルド主任牧師ヲ缺ク。幹事トシテ書記會計ノ事務ヲ司リシ者、大正七年井上照子女史、大正八年ヨリ大正十四年迄福○紫○兄、大正十五年ヨリ昭和五年迄高○利○兄（担シ、昭和三年ヨリ五年迄ハ會計高須兄、書記ハ石○秋○兄分擔）ナリトス。昭和六年六月十一日ノ總會ニ於テ、會員數増加ニ伴フ會務ノ繁忙ノ爲、幹事ヲ五名トシ、會長ノ推薦ニヨリ高○利○兄、上○寛○兄（以上會計）、伊藤梅吉兄（德○唯○兄（以上書記）、管○丈○兄（庶務）夫々指名セラレタリ。別ニ訪問係アリ。昭和四年七月偶々歸國中ノリト支部長ハ、本部ニ招カレ、其ノ創立五十周年記念會ニ於テ、草津支部並ニ草津ミッションノ一般ニ就キ演說セリ。

昭和五年六月十一日ノ總會ニ報告セラレタル會勢ハ左ノ如シ。

一、會計―前年度繰越高八十七圓〇四錢、會費收入五十圓二十八錢、支出十六圓三十五錢、差引現在高一百二十圓九十七錢

二、會員―全會員數二百三十七名、内働人會員ハ六十三名（殆ンド全國ニ散在ス）病者會員一百七十二名

（内昭和五年度新入會者三十五名、草津在住會員一百五十三名、草津外住十八名）、永眠者會員九十六名。

三、集會―回數二十二回、集會出席人數ハ、働人七十一名、病者一千一百二十六名、計一千一百九十七名、一

回平均五十四・五人ナリ。

代禱題目ハ概ネ年三回、クリスマス、復活節、聖靈降臨日ノ各前後ニ發行ス。第一代禱ヨリ數組ノ代禱ニ分レ單ニ草津ニ關連スル事項ヲ祈ル外、本部ヨリ送付スル代禱題目及チャーチ・ミッシヨン其ノ他ノ宗教團體ヨリ來ル題目中ヨリ最モ緊要ナリト思惟セラル、モノヲ抜キテ題目ヲ作製ス。殆ンド全世界ニ亘ル。例ヘバ印度<sup>インド</sup>ノ爲、アフリカ<sup>アフリカ</sup>ノ爲、猶太<sup>ユダヤ</sup>ノ爲、アルメニヤノ爲、日本聖公會ノ爲、臺灣傳道ノ爲、覺醒運動ノ爲、教會一致ノ爲、世界平和ノ爲、思想善導ノ爲、メラネシヤ教區ノ爲、ロシヤ教會ノ爲、アラスカノ爲、軍縮會議ノ爲、ウガンダノ爲、トルカナル教區ノ爲、奴隸解放ノ爲等、各地又各種ノ問題ノ爲、會員ハ毎金曜日午後一時ヨリ教會ニ於テ、又午後七時ヨリ各ホームニ於テ熱心ニ感謝ト祈禱ノ細目ニヨリ祈禱ヲナス。教會ノ集會ニハ會長ノ説教アリ。又會員名ヲ點呼シテ主ノ祝福ヲ祈ル。本部ト支部ノ役員並其ノ働キノ爲ニ祈ルハ勿論ナリ。會長ハ題目ノ發行毎ニ會員全部ニ書簡ヲ送り、題目ニ就イテノ説明ヲ兼ネ、會員ニ覺醒ト奨勵ヲ與フ。昭和六年八月ノ會員數ハ二百三十八名ナリ。毎回ノ代禱題目ニ就キテハ、書記保管ノ代禱題目綴一見セラルベシ。

### 第七十一 惠會

教會ヲ中心トスル各種運動ニ於テ、男子ホーム又ハ婦人ホームニ屬スル者ノ活動ハ常ニ顯著ナリ。サレドホームヲ除ク部落在住ノ信徒ガ主トナリテ爲サレタル運動モ決シテ少カラズ。惠會ノ如キモ亦其ノ一ツナリ。本會ハ大正十年ノ春、聖書研究ヲ主ナル目的トシテ、福○紫○兄、梶○清○兄、井○元○兄等發起トナリテ組織シタルモノ、會員約十三名、會長ニ福○紫○兄ヲ推薦シ、毎週金曜日午後各會員ノ家庭ヲ廻リテ集會ヲ開ク。毎回會員各自ハ舊約五章、新約二章ノ割合ニ精讀シテハ靜カニ其ノ意味ヲ味ハヒ、之ヲ聖書講義其ノ他參考書類等ニ照シテ

隠レタル含蓄ヲ探リ、自己ヲ空シウシテ神ノ眞理ヲ求メ、眞實ノ心ト全キ信仰ヲ以テ神ニ近ヅカントス。毎會必ズリー教母ヲ迎ヘ其ノ指導ヲ受ク。即チ開會時刻ヨリ三・四十分乃至一時間遅レ、會員ノ研究一段落ヲ告ゲタル頃臨席シ、難解若シクハ意味不明ノ箇處ニ就キテノ質問ニ對シ、懇切ニ解答セラル。本會ヲ中心ニ一般ニ聖書研究熱ヲ生ジ益スル處頗ル大ナリキ。又未信者、求道者ノ参加ヲモ歓迎シタルヲ以テ、本會ヲ通シテ熱心ナル信者トナリシ者モ少カラズ。入○清○兄、江○ソ○姉等モ其ノ一人ナリトス。

第七十二 一色榴吉長老ノ來草

ギルドノ初代主任牧師トシテ當地ト關係淺カラザル一色長老ノ來草ニ關シテハ、昭和六年二月二十五日附其ノ任地鎌倉聖公會ヨリ手ヅカラ原稿ヲ惠送セラレシヲ以テ、原文ノ儘左ニ掲グ。

「私ト草津ノ關係ハ今カラ十七年前、大正四年四月私ガ沼津聖ヨハネ教會ヨリ横濱聖アンデレ教會ヘ轉任シタ時、其處ニ婦人教役者トシテ働カレ居リシ故井上照子姉ト同勞者トナツテ、以前其處ニ働カレシリー先生ガ時々横濱ノ信徒ヲ御訪問ニナリマシテ、リー先生ト接觸シタノニ始マリマス。當時井上姉ノ話ニ、リー先生ハ此ノ度病人ノ爲ニ働カレル意向ヲ御持チトノ事デシタ。其ノ時井上姉ハ草津ト言フ事ハ申サレザリシ故多分其ノ時ハ未ダリー先生ハ草津ニハ御働キヲ御始メニナラナイカト考ヘマス。(リー先生ノ草津ニ御働キヲ始メナサレタ事ハ何時頃カラカ私ハ存ジマセン)。其後横濱ニ働カレン井上姉ハ意ヲ決シテ草津ニリー先生ト事業ヲ共ニサレ、井上姉ヲ通ジテ小生ハギルドノ會員トナリ、小生ノ祈禱ノ友ハ福○紫○氏デシタ。今カラ十年前、大正十年三月ニ管理長老大藤師ヨリ復活日ノ聖餐ノ爲草津ニ行カレタシトノ御依頼ヲ受ケ、常ニ祈リ居ル事業ノ爲ノ事トテ喜ンデ三月三十一日當時ノ任地秦野町ヲ出發シ、同夜ハ輕井澤ニ一泊、翌日輕鐵ト馬背ニテ草津ニ

参リマシタ。町ノ入口デ、山中師外一婦人ノ御出迎ヒニ會ヒ山中師ノ御宅ニ御世話ニナリマシタ。

四月二日(土)早朝山中師ト最初上町ノ信徒ノ宅デ聖餐式ヲナシ、天ヨリ積雪三尺位ノ道ヲ踏ンデ霜間聖ステ  
 パノ館ニ到リ直ニ聖餐式ヲ執行、初メテリー先生、井上姉ニ面會シ、同十時ヨリ同館ニテ聖洗式アリテ、イサ  
 ク高○喜○、ヨハネ青○昇、ヨハンナ高○乙、ダビデ小○祐○、ヤコブ片○定○ノ五氏聖洗式ヲ領ケマシタ。  
 ソレカラ下町ニ山中師ト行キ、シモン江○伊○吉氏宅ニテ私宅聖餐式ヲ爲シテ此ノ日ノ働ヲ終リ、夕食ハ山中  
 師トリー先生ノ御宅デ頂キマシタ。翌四月三日、復活日山中師ト聖バルナバ教會ニテ午前六時ノ聖餐式ヲ執行、五十餘  
 名陪餐シマシタ。終ッテ山中、リー、井上三師ト共ニ私宅聖餐式ニ五軒十一名ガ陪餐シマシタ。教會ニテリー  
 師ト朝食ヲナシ、午前十時ヨリ教會ニテ早禱、山中師司式サレ、ニコデモ海○原○雄、アブラハム石○善○郎  
 サラ本○ゼ○、ヨセフ坪○多○郎、シセリヤ田○エ○五人ノ聖洗式、今○定○、清○新○郎、知○金○、熊○  
 ハ○、星○キ、丹○徳○、丸○繁○、千○利○郎八氏洗禮志願式ヲ領ス。午後三時「愛ノ家庭」ニテギルドノ祈  
 禱會ニ参リ、後病床ニテ中○マ○エ氏ノ洗禮志願式ヲナス。夜ハ七時ヨリ教會デ晚禱ト傳道説教ヲナス。夜山  
 中師ト中○マ○エノ病床聖洗式ヲナス。四日ハ山中師ト草津ノ見物、夜、前夜聖洗式ヲナセシ中○姉ハ同夜十  
 一時永眠シ、七時ヨリ埋葬式ヲナス。五日各位ニ別レテ草津ヲ發シ、歸路ニ就ク。草津訪問デ感ゼシ事トモ左  
 ニ。

一、信徒ハ皆リー師ヲ慈母ノ如ク慕ヒ、リー師又子供ノ如ク愛シ、師弟ノ友愛ハクリスチャンノ愛ヲ現實セリ。  
 中○マ○エ姉ノ永眠ニ際シ、リー師親ラ湯灌ヲナシ居ルヲ見テ余ハ驚キタリ。

二、草津ニ働カル、同勞者ハ實ニ多忙ナリ。死ニ臨ミツ、アル人、病人相手故、油斷シ居ル事不能。

三、信徒ハ病人ニモ拘ラズ活々シタ有様、少シモ病氣ヲ苦ニシ居ラザル様子ナリ。正ニ活ケル信仰ヲ有セリ。

四、信徒ノ祈禱ハ如何ニモ活ケル神ニ語リツ、アル如ク力アリ。又聖書ヲ善ク味ハヒ居レリ」。

## 第七十三 教會ノ鐘

我教會ニ備付ケラレタル鐘ハ、訪問者ヲシテ珍奇ノ着想ニ驚カシメ、且ツ其ノ崇嚴ナル美音ニ感嘆ノ聲ヲ放タシム、此ノ鐘ノ來歴ヲ語ランニ、大正九年十二月、東京市神田基督教教會日曜學校ハ當教會ノ爲トテ金四十圓ヲ寄附セシガ當時教會ノ設備ヤ、ニ整ヒ來リシモ、未ダ鐘ヲ有セズ、僅カニ小サキ振鈴ヲ以テ集會時刻ヲ報ズル有様ナリケレバ早速教會委員會ヲ開キ、此ノ金ヲ以テ教會ニ一ツノ鐘ヲ備フルコソ最良ノ使途ナラメトテ、其ノ實際方法ニツキ議スル處アリシガ席上教母ヨリ「硫黄釜ヲ用ヒテ鐘トセバ如何」トノ提案アリ、サレド硫黄釜ガ鐘ノ代用ヲナスヤ否ヤヲ疑ヒ一同顔ヲ見合セタリシガ、提案者ハ既ニ白根登山ノ途次路傍ニ横ハル廢釜ノ發スル妙音ニツキ數次ノ試験ヲモ經タル旨承リ小事ヲモ忽セニセザル教母ノ心懸ニ感服シ満場一致直チニ賣入ニ決スル。即チ大正十年三月上町立町三關屋ヨリ硫黄釜一箇四十圓ニテ買ヒ、高〇與〇兄責任ニテ管野、橋川、岡本ノ諸兄其ノ他ノ教會有志等雪ノ中ヲ櫛ニ乗セテ掛聲勇マシク運ビ來タリ、教會ノ入口ニ備ヘ付ク。此ノ時ヨリ以前ノ貧弱ナル振鈴ニ更リテイト力アル神々シキ鐘ノ響ハ全町ノ浦々ニ迄鳴リ渡リ、泣ケル者ニハ慰メノ言葉ノ如ク、惱メル者ニハ救ノ如ク、争ヘル者ニハ審判ノ如ク、怠レル者ニハ愛ノ鞭ノ如ク、受クル者ノ心ニ應ジテ何事カヲ囁カル、ヲ感ジ、響ニヨリテ集マル信者達ハ更ニ一層主ニ在ル者ノ恩恵ト特權ヲ覺ユルニ至レリ。

## 第十四章 青年會

### 第七十四 光鹽會ノ解散

今、聖バルナバ青年會創立ニ先立チ一言スベキ事アリ。ソハ草津傳道史上光輝アル歴史ヲ有スル基督教光鹽會ノ解散ナリトス。聖バルナバ教會ノ創立ニヨリテ第一段ノ目的ヲ達シタル光鹽會ハ爾來教會ノ後援者トシテ主トシテ信者ノ信仰共勵及祈會奉仕ノ方面ニ活動シ、且ツ毎週一回水曜日ニ特別集會ヲ持チ教會ノ勢力強大トナルニ連レテ殆ンド教會附屬男子部ノ形トナリシガ、兎角統制上ノ連絡全カラズ。爲ニ光鹽會獨得ノ團體的活動次第ニ活氣ヲ失ヒ、昔日ノ面影ヲ留メザルニ至レリ。サレバ此ノ際其ノ統制ヲ全ク教會側ニ收メテ甦生ノ途ヲ開カントスル氣運アリ。即チ大正七年春頃ヨリ福○紫○兄等ハ先ツ光鹽會ガ教會ト獨立セル如キ觀アルハ面白カラズ。光鹽會モ又教會内ノ一團體ナルヲ以テ管理長老之ガ會長トナリ教會ノ一切ノ働キヲ統制指導スルヤウニシテハ如何ト唱ヘ大勢之ニ傾キ來リシヲ以テ、十月十七日午後七時ヨリ教會ニ於テ光鹽會總會開カレコノ問題ヲ議スル事トナレリ。當夜ノ出席會員二十二名、大藤長老開會祈禱、橋川兄開會ノ辭ヲ述ベテヨリ、役員改選ノ議ヲ提出シ、茲ニ會長ハ管理長老ヲ推戴スル事一決シ、副會長以下役員ハ從前通り選舉ニヨリテ定ムルコト、セリ。

當選者、副會長高○千○兄、幹事相○銚○兄、柵○清○兄、會計吉○浩○兄、同松○菊○兄。特ニ注目スベキハ大正三年九月以來四年一ヶ月ノ長キニ亘リ會長トシテ會務ヲ總括シ來リシ高○千○兄ガ率先此ノ度、提案ニ賛シ會ノ圓滿ヲ圖リタルコトナリ。サテ新會長推戴ヲ契機ニ更ニ人心ヲ新ニスル爲此ノ際光鹽會ヲ解體シ、若シ必要アラバ新團體ヲ組織スルヲ可トストノ議起リテ、翌大正八年三月總會ノ賛成可決ヲ得タレバ、副會長高○千○兄筆頭幹事相○銚○兄代表トナリテ直チニ大藤會長ヲ訪ネ、事ノ由ヲ告ゲタルニ會長亦事情止ムヲ得ザルモノト

シテ之ヲ許シ、茲ニ大正二年九月間○清○兄宅ニテ會員九名ヲ以テ米原馨兒長老ニヨリ創メラレ前後六ケ年間草津傳道ノ爲貢獻シタル基督教光盟會ハ解散スル事トナリタルナリ。

## 第七十五 聖バルナバ青年會ノ創立

大正八年三月光盟會解散後約一年間情勢靜觀ノ有様ナリシガ、婦人ノタメニ婦人會アル如ク、男子ノタメニ青年會ヲ創立スベシトナシ、大正九年一月教會委員福○紫○兄、全相○鑑○兄、全管○丈○兄等主トナリテ、教會青年會ノ名ノ下ニ集會ヲ開クコト、ナレリ。サレド未ダ整ヒタル組織ヲ有セザリキ。然ル處、全九年五月二十日ニ起リシ教會リバイバル、各ホームノ信仰復興等ノ爲、又七月ニハ前教會委員山中政三氏神學校卒業シ、新氣銳ヲ傳道ニ注ギシ爲、求道者頗ル増加シ、前年僅カ九名ノ受洗者アリシモノガ一躍四十八名ノ受洗者ヲ與ヘラル、ノ情況トナリ、求道者ニ至リテハ一時七・八十名ノ多數ニ達シ、山中傳道師リト教母ノミニテハ教導ノ手不足ヲ生ジタレバ新シキ青年會ハ專ラ之等求道者ノ指導ト其ノ靈の訓練ヲ助クルヲ以テ主ナル目的トナスニ至レリ。サレド大正十年秋頃迄ニハ之等求道者モ大抵一人前ノ信者トナリシヲ以テ以前ノ目的及集會ノ方法等ニ變革ヲ加ヘ、恒久的ナル團體トシテノ新陣容ヲ整フルノ必要生ジ、大正十年十月二十五日聖バルナバ教會ニテ總會ヲ開キ、新組織ニツキ會員一同ニ諮リ其ノ意見ヲ求メタリ。出席者三十名、教會委員相○鑑○兄司會ヲナス。聖歌、祈禱ノ後、司會者ハ青年會改革ノ必要ト其ノ新目的ニツキ説明ヲナシ、次ニ豫メ有志ニ依テ作ラレタル會則ノ原案ニツキ委員福○紫○兄説明且一同ノ意見ヲ求メタリ。サレド此ノ會則制定ニハ多樣ノ議論出テ、豫定ノ時間ヲ經過シタルモ遽ニ條文ヲ確定スルニ至ラズ、依テ會長ヲ定任教役者トスル事、會長以下ノ役員ハ選舉ニ依ル事及目的、集會方法等ノミヲ議定シ、細部ニ亘ル事ハ選舉後ノ新役員ニ一任スル事ニ決定、山中傳道師、高○千○兄

ノ祈禱後直チニ役員選舉ヲ行ヘリ。開票ノ結果ハ左ノ如シ。

副會長 福○紫○（兼任臨時書記）

幹事 相○銓○、吉○浩○、島○義○（會計）、管○丈○、井○元○（會計）、梶○清○。

會長ハ會則ニヨリ山中政三傳道師就任セリ。選舉ヲ終リテ、山中新會長ノ挨拶アリ。役員代表梶○清○兄祈禱ヲ捧ゲテ會ヲ閉ズ。此ノ總會日即チ大正十年十月二十五日コソ新シキ意味ニ於ケル我聖バルナバ青年會ノ誕生日ナリトス。而シテ會則ヲ確定シタルハ全年十一月一日夜、福○紫○兄宅ニ於テ開カレタル新役員會ナリ。此ノ會ノ出席役員ハ會長山中政三師、副會長福○紫○兄、幹事相○銓○兄、全島○義○兄、全管○丈○兄、全梶○清○兄ノ六名（他ハ事故缺席）ニシテ、決定セラレタル新會則ニツキ摘記スレバ左ノ如シ。（何レモ記錄及相馬・管野吉田兄等ノ談ニヨル）。

本會ハ草津聖バルナバ青年會ト稱シ、基督教主義ニ基キ、會員相互ノ親睦協和ト信仰ノ向上ヲ圖リ、尚其ノ主義ト信仰ニ依リテ社會奉仕ヲナスヲ以テ目的トス。

役員ニハ會長副會長各一名、幹事六名アリ。幹事ハ互選ニ依リテ更ニ書記及會計ヲ定ム。會長ハ定任教役者其ノ任ニ當リ、副會長以下役員ハ會員中ヨリ選舉ニ依リテ定ム。

會長ハ會ノ處理、會員ノ指導ニ任ジ、副會長幹事ハ會長ヲ補佐シ、會ノ發展活用ヲ圖ル。又、主任長老並コンウオール・リーヲ顧問トナス。

毎月第二第四ノ火曜日ヲ例會集會日トシ、臨時集會及臨時總會ノ招集權ハ會長之ヲ保有ス。

會費ハ月額三錢、入退會ハ役員會ニテ決ス。會員ニシテ特別事故及病氣以外三ヶ月以上引續キ缺席スル者ハ會員タル資格ヲ喪失ス。

トノ定メナリ。

第七十六 役員及會ノ活動——運動會——音樂會——バザ——

第一回役員ハ右ノ如シ。今大正十年十月ヨリ全十一年十月ニ至ル一ケ年間ノ會勢ヲ參考ノ爲一覽スルニ、總會一回、例會二十一回、出席者數六百四十四名、一回ノ出席平均二九・二人ナリ。

尚、此ノ間奉仕事業トシテ、教母引越手傳一日、教會掃除一日、湯之澤ノ各道路ニバラス數キ一日、病床訪問デー一日ヲ捧グ。復活前ト復活後ニ親睦會ヲ行フ。十一年十月ニ於ケル會員數ハ六十名ナリキ。大正十一年三月九日、役員島○義○兄ハ家事都合上辭職シタリ。

大正十一年十月二十四日總會ニ於ケル役員改選ノ結果ハ左ノ如シ。

副會長福○紫○兄(三〇票)、幹事相○鎰○兄(四五票)、管○丈○兄(四四票)、杉○淨兄(三五票)、吉○浩○兄(二四票)、梶○清○兄(二一票)、岡○金○郎兄(二一票)、尙吉○浩○兄ハ豫テ役員辭職ノ希望ヲ有セシヲ以テ、問合セタル結果、家事に依然辭意固キニ依リ、次點高○利○兄(二〇票)幹事ニ加ハル。

大正十二年十月二十三日ノ總會迄ノ一年間ニ於ケル集會成績ヲ見ルニ、役員會四回、例會二十回(外親睦會二回、月見會一回)、運動會一回、湯之澤砂敷キ一回、例會二十回ノ出席人員五百二十九名、一回平均二六・九名會員數七十九名ナリキ。

第三回役員改選ハ大正十二年十月二十三日山中會長司會ノ下ニ行ハル。出席會員四十八名、開票ノ結果ハ左ノ如シ。

副會長福○紫○兄(四〇票)、幹事高○利○兄(四三票)、相○鎰○兄(四〇票)、杉○淨兄(三八票)、宿○薰兄(

二四票)、西〇太〇兄(二三票)、桐〇清〇兄(二三票)ノ諸兄ナリトス。定例集會、總會、親睦會、月見會、道路修繕等ノ行事ハ殆ンド毎年相等シケレバ、其ノ記載ヲ省略ス。

運動會

青年會ニテ運動會ヲ主催シタルハ、大正九年度ヲ以テ初メトス。即チ其ノ前年十一月三日霜間愛友會ノ行ヘル小運動會ノ成績ニ鑑ミ、霜間愛友會トノ聯合主催ニテ九年五月躑躅<sup>ツツジ</sup>滿開ノ候ヲ期シ、距離モ兩者ノ中間ナル鈴蘭村ニテ舉行シタリシガ、頗ル好評ヲ得、益スル處多カリシヲ以テ、爾來毎年之ヲ行フ事トナレリ。初メハ其ノ規模モ小ニシテ競技參加者モ少カリシガ、逐年其ノ範圍ヲ擴大シ遂ニ下町ニ於ケル年中行事中最モ大ナルモノ、一ツトナレリ。當日ニ先立チ數回準備會ヲ開キ、且ツ會長統制ノ下、賞品係、審判係、道具係、兒童係、勸誘係、樂隊係、救護班等ノ係員ヲ設ケ、各分擔ニ從ヒテ萬遺漏ナキヲ期スルヲ常トス。全部落ノ支持後援ヲ受ケ、毎年金品ノ寄附額百圓ヲ下ラズ。之ニ加フルニリー教母ヨリ屢々各種現品ノ寄附アリ。賞品ノ豊富ナル事他ニ多ク其ノ比ヲ見ズ。最モ好シク行ハルル競技ハ短距離徒歩、提灯競争、綱帶競走、郵便局、障害物、自轉車競争、糸卷競争、消防支度競争等ニシテ、就中長距離マラソンハ鈴蘭、湯之澤間往復三十餘町難路急坂ヲ突破シテ決勝點ニ入ル。本競技ニ優勝シタル者ニハ特ニ優勝旗ヲ授與シ、最高ノ讀辭ヲ呈ス。可憐ナル幼稚園兒ノ遊戲、競争等又色トリドリニ美ハシク殊ニ小學兒童ハ尋一ヨリ高二マデ、望小學校、ホーリネス教育所、佛教夜學校ノ何レニ屬スルヲ問ハズ、其ノ所屬ヲ超エテ下町全兒童全ク統一セラレタル一團トナリ、數回ノ豫行演習ヲナシ競技ニ參加スルヲ例トナス。

今社會ノ運動會ト稍趣キヲ異ニスル特點ノ二、三ヲ摘記スレバ左ノ如シ。

一、本運動會ハ病者慰安ヲ目的トスルモノナルヲ以テ、壯健者ハプログラム中特ニ定メアルモノヲ除ク外、例ヘ下町ニ居住スル者ト雖モ競技ニ參加スル資格ナキコト。

二、盲人ノ競技。本病性失明者頗ル多ケレバ、之等ノ兄弟ノ爲ニ嚮叩キ競争、距離競争、盲人短距離徒歩。合言葉等盲人ノ爲考案セラレタル競技數番ヲ加フ。而シテ演者ハ樂シミ觀者ハ汗ヲ握ル。

三、競技者區分ニ「弱者」ナルモノアリ。一見常識ニテ判斷ニ困シムモ、之比較的體力弱キ者ノ意ニシテ盲啞提燈競争、郵便局等ノ如ク、競技ノ性質激烈ナラザルモノヲ選定シ、薄眼者、足下垂者其ノ他不自由ノ程度稍著シキ者ヲ特ニ參加セシム。

四、「等外者」ノ文字モ亦運動會トシテ解スルニ困シム。之ハ全競技ノ最後ニ數番ヲ附加シ、特ニ競技ニ參加シタルモ入賞セザリシ者ノ爲設ケタルモノナレバ、一回以上入賞シタル者ハ參加ノ資格ナシ。サレバ、競技參加者ノ殆ント全部ガ遅カレ速カレ賞品ヲ手ニシテ歸ルト言フ病者慰安ノ爲ノ特別ナル趣好ハ茲ニモ見ユルナリ。

#### 音樂會

大正十五年十一月二十三日入道兄ノ宅ニテ初メテ青年會主催ノ音樂會アリ。集會者四十名、小音樂隊ノ演奏及小山、入道、佐藤、遠藤諸兄ノ獨唱、石山、山本兄ノ謡曲、醫師佐藤貞雄先生ノ謡曲等アリテ頗ル盛會ナリキ。此ノ頃ヨリ音樂愛好者次第ニ増加シ、殊ニ柴○盛○兄、櫻○謙○兄等ヲ中心トシテ専門的研究行ハル、ニ至リ、樂譜、樂典、器樂、聲樂ノ各方面ニ特能アル會員モ生ジ、ハーモニカバンド、ブラスバンド、音樂研究會等モ組織サレタレバ、クリスマス、バザー等ニハ和曲ハ勿論、泰西フイセイノ名曲ヲモ演出セラル、ニ至レリ。

大正十三年度以下ノ役員。

大正十三年度役員選舉ハ同年十月十八日會館ニ於テ山中會長司會ノ下ニ行ハル。開票ノ結果、副會長福場兄（二十五票）、幹事相馬兄（二十九票）、高須兄（二十七票）、杉田兄（二十六票）、宿澤兄（二十票）、入道兄（十九票）、

上滝兄(十六票)當選ス。

大正十五年度役員選舉ハ同年十月二十六日會館ニ於テ山中會長司會ニテ之ヲ行フ。集會者三十八名、開票ノ結果副會長高須兄、幹事ニ相馬、入道、上滝、野村、管野、山本ノ諸兄當選ス。

昭和二年十月二十五日役員選舉ヲ行フ。會衆四十六名。當選者ハ副會長高須兄(三十七票)、幹事ニ入道兄(四〇票)、上滝兄(三十九票)、相馬兄(三十八票)、野村兄(三十五票)、管野兄(二十八票)、佐藤兄(二十五票)ナリトス。

バザー

昭和二年八月二十二日初メテノ試ミトシテ青年會主催ニテバザーヲ教母ノ山ニ行フ。午前ハ綠樹ノ影ニ急造セラレタル各種模倣店ニテ饅頭、壽司、汁粉、甘酒等ヲ即賣シ、又幼稚園舎ニ於テ小間物品ノ賣店ヲ設ケタリ。午後ハ會館ニ於テ音樂會ヲ催フシ、教會ニ連ル各團體ニヨリ歌(獨唱、合唱)、ハーモニカ、尺八、ピアノ、ヴァイオリン等ニ依ル演奏、兒童劇等演ゼラレ、稀ナル盛會ナリキ。午前午後ヲ通シテ得タル純益金百二十圓ハ之ヲ傳道文庫ニ寄贈セリ。爾來毎年之ヲ行フ事トナリ、教會關係ノ行事ノ一ツトナレリ。

昭和三年八月ノバザーハ同ジク教母ノ山ヲ中心トシテ行ハレ、其ノ純益金百六十圓中四分ヲブラスバンドニ、六分ヲ聖望小學校ニ寄贈セリ。

昭和四年度ハ教母英國へ旅行中ニ付キ開催セズ。

昭和五年度ハ聖望小學校落成祝賀ノ爲、同校庭ニテ行ヒ、純益金百四十圓ヲ全部同校新設備費中ニ寄贈セリ。

昭和六年度ハ午前中奉仕ノ市トシ會場ハ聖望小學校、例年ノ通り各種賣店ノ外不要品即賣部ヲ新設シ、尙教母ノ自作ノ繪畫及秘藏ノ骨董品計九十點ノ陳列ハ大人氣ヲ呼ベリ、純益金ハ傳道文庫、聖望小學校折半シ各百二十

圖宛贈レリ。

昭和三年度以下ノ役員

昭和三年十月二十日聖ステバノ館ニテ山中師司會、參會者五十三名、選舉ノ結果副會長高須兄(四十一票)、幹事上滝兄(四十六票)、入道兄(四十四票)、相馬兄(三十八票)、野村兄(三十七票)、管野兄(二十九票)、佐藤兄(二十四票)夫々役員ニ當選ス。

昭和四年三月二十八日、湯之澤青年團ト合同シテ區道路普請ヲ行ヒシガ、參加者八十三名ノ多數ニ達シタリキ。尚、例會、奉仕作業等ハ毎年略同ジケレバ、以下各年度役員及ビ特ニ變リタル事ノミニツキ記スベシ。

昭和四年十月二十二日會館ニ於テ山中師司會ノ下ニ役員選舉ヲ行フ。來會者五十二名。開票ノ結果副會長高須兄(三八票)、幹事上滝兄(四八票)、全入道兄(四六票)、全相馬兄(四一票)、全佐藤兄(四〇票)、全野村兄(三九票)全管野兄(二九票)當選ス。

昭和四年十一月九日、社會奉仕デイトトシテ例年ノ如ク區道路ニ砂敷キヲ行フ。初メ湯之澤青年團ト提携シテ仕事ニ當ル筈ナリシモ、其ノ後同團ニ内紛生ジ、急ニ團結力ヲ失ヒタレバ、單獨ニテ實行セントセシ時、共救會長小林氏ヨリ參加申込アリ。依ツテ同會員ヲ加ヘテ總員七十四名、砂ハ預名館土地ヨリ貰ヒ受ケ、例年ヨリモ成績ヲアゲタリ。區ヨリ特ニ金十圓ヲ寄附シ一同ノ勞ヲ擔ヘリ。

昭和五年度役員。全年十月二十日、聖ステバノ館ニ於テ役員改選ヲ行フ。開票ノ結果當選者ハ左ノ如シ。副會長高○利○兄、幹事上○寛○兄、入○清○兄、佐○亮○兄、野○熊○兄、尚昭和六年二月十日幹事野○熊○兄永眠ニツキ、次點者徳○唯○兄幹事ニ加ヘラレル。

昭和六年度役員。全年十月二十七日、會館ニ於テ山中會長司會ノ下ニ總會ヲ開キ役員選舉ヲ行ヘリ。先ヅ副會

## 第十五章 教役者及働人（其ノ一）

長ノ選舉ヲ行フ。開票ノ結果、二九票高○利○兄（當選）、十六票上○寛○兄トナリタリ。次ニ幹事ノ選舉ヲ行ヒシガ開票ノ結果ハ左ノ如シ。四五票德○唯○兄、四二票上○寛○兄、三六票佐○亮○兄、三三票相○鎰○兄、三三票入○清○兄、二七票管○丈○兄。

新役員ヲ代表シ德○唯○兄ノ祈禱、山中會長ノ祝禱ヲ以テ會ヲ閉ズ。

以上ニテ大正九年一月二十日青年會ノ誕生ヨリ昭和六年度ニ至ル一般ヲ略述セリ。昭和六年度以降ニ就キテハ更ニ章ヲ改メテ説クベシ。

### 第十五章 教役者及働人（其ノ一）

#### 第七十七 コンウォール・リー女史

一八五七年（安政四年）英國ノ名門ニ生ヲ享ク。明治四十一年（一九〇八年）日本ニ渡來（滿五十一歳）。初メテ草津ニ其ノ足跡ヲ印シタルハ大正四年七月、病者ノ爲ニ其ノ一生ヲ獻グベク草津ニ定住シタルハ翌五年五月ナリ。履歴ノ大要ハ第五章第二十四項ヲ参照セラルベシ。草津定住後著明ナル働キニ就キ二三ヲ記セバ左ノ如シ。

○大正五年六月、聖バルナバ教會創立

○全十二月、救助ヲ要スル婦人ノ爲ニ「愛ノ家庭」ヲ設ク。又婦人會ヲ組織シ、其ノ會長トナル。

○大正五年六月、下町聖愛幼稚園ヲ開ク。

○大正六年三月、上町愛隣幼稚園ヲ開ク。

○全年十二月、聖バルナバ醫院ヲ創立。

- 大正七年六月十日、祈禱團體聖バルナバギルドヲ設ク。
  - 大正八年六月、男子ホーム聖ステ、パノ館ヲ設ク。
  - 大正九年九月、婦人ホーム聖マリヤ館ヲ設ク。
  - 大正十一年、夫婦ホーム聖ルセ館ヲ設ク。
  - 全年八月、米國ヲ經テ歸英。
  - 大正十三年二月、歸草。
  - 全年十一月、未感染兒童ノ爲、聖マーガレット館ヲ設ク。
  - 昭和三年十一月、社會事業功勞者トシテ藍綬褒章下賜セラル。
  - 昭和四年四月、英國再度訪問、翌年一月歸草。
  - 昭和四年十一月、新醫院建設。
  - 昭和五年八月、聖望小學校新築。
  - 昭和五年十一月、皇太后陛下ヨリノ下賜金ヲ賜ハル。
- 尙、切言スレバ、聖バルナバ教會並其ノ附屬全事業ハ、全ク女史ノ人格ヲ中心トシテ結合サレタル一大家族ヲナスモノナレバ、本書ニ記載セル各事實ノ大部分ハ又、リー女史ノ歴史ヲ兼ネタルモノト見ルヲ得ベシ。人々ハ初メ「先生」ト呼ビシガ、何時トハ無シニ「教母様」トナリ、今ハ更ニ親シミ易キ方言ノ儘ナル「かあさま」ヲ以テ呼ブ。草津上下町ヲ通ジテ「かあさま」ト言ヘバ三尺ノ童兒モ之ヲ知ルニ至レリ。
- 或人曰ク「其ノ肩書コソ『草津聖バルナバ教會附一婦人宣教師』ナルモ、其ノ愛ト力ハ眞ニ全草津ヲ抱擁ス」ト。主日ヲ初メ教會ノ各集會ニハ殆ンド缺カサズ出席シ、自ラオルガンヲ奏シテ會ヲ導ク。大家族ノ長トシテ多

クノ雜務ヲ有スル外、求道者、洗禮志願者等ノ教導、病弱者ノ訪問等ノ爲極メテ繁忙ナル生活ナリ。  
尚、詳細ハ、編セラル、ヤニ聞ク「コンウォール・リー女史傳」ニ譲ル。

第七十八 井上照子女史

女史ハ四國讃岐ノ生レ、召命ヲ感ジテ婦人傳道師タラン事ヲ志シ、聖公會女子神學校ニ入學。卒業後ハ横濱ニテリー教母ト共ニ傳道ニ従事シ、其ノ日本語教師タリ。大正四年七月、教母ト共ニ來草、十二年五月迄當草津傳道地ノ爲ニ獻身努力ス。教母ノ爲ニハ常ニ犬馬ノ勞ヲ惜マズ教母ヲ援ケテ創業ノ大事ヲ成就セシム。病者ヲ愛シ常ニ其ノ喜ビヲ以テ喜トナシ、其ノ憂ヲ以テ憂トナス。大正十年三月節句ノ如キ、病者ナル婦人達ノ慰メニモトテ美シキ雛壇ヒナダンヲ飾リテ婦人ホーム會員ヲ招キ心ヨリ之ヲ饗ウケセラレタリ。

女史ハリニューマチスノ持病アリ。常ニ人ノ知ラザル痛苦ニ惱メリ。或人ニ語りテ曰ク「我が強慢ノ心ヲ碎カン爲ニ主ハ此ノ荆ヲ與ヘ給フ、苦患ヲ通シテ我愈々主ノ恩惠ノ深キヲ覺ユ」ト。十二年五月愈々病募リシヲ以テ、リー教母ハ溫暖ノ地ニ移リテ靜カニ養ヘン事ヲ奨メテ横濱ニ行カシメラル。偶々震災ニ遭遇シテ困窮セラル。依テ千葉縣上川新田ニ井上病院ヲ營ミ居タリシ令兄ノ許ニ行キ、昭和三年四月二十五日此處ニテ永眠セララル。

女史ハ純聖公會型ノ信者ニシテ、彼ノ大リバイバルノ起リシ時モ常軌ヲ逸スル信者ノ行動ニ反省ヲ促シタル程ナリキ。既ニ信者トナリシ時家庭ノ者ノ大反對ヲ受ケシガ、殊ニ草津ニ於テ病者間ニ働ク事ニ對シテハ特別ニ反對セラレタルモノ、如シ。サレド總ベテヲ主ノ御旨ニ委セテ、草津ヲ以テ最期ノ地トスル悲壯ナル決心ヲ以テ立チ持病リニューマチスニ大イナル苦痛ト困惑ヲ感ジツ、モ、主ノ御爲ニ、榮光ノ顯レン爲ニトテ最後迄不如意ニ抗シ所信ニ向ツテ邁進セラレタリ。

令兄（醫博）ノ經營セル病院ニ入院シタル後モ、家人交々枕頭ニ來リテ祖先傳來ノ佛教ニ歸ラン事ヲ奨メ、殊ニ其ノ病室ニ佛壇ヲ飾リ、線香ヲ燻<sup>ク</sup>ブラシテ改宗ノ讀經ヲナス事屢々ナリキ。病床ニ在リテ斯ク血ニ連ル者ノ懇願ニ遭ヘル女史ノ心中又思フベシ。カ、ル間ニ於テモ信念愈々堅ク、主ノ僕<sup>レ</sup>タル本分ヲ守リ、遂ニ美シキ勝利ノ永眠ヲナサレタリ。計報一度草津ニ傳ハルヤ教會員一同深ク悼ミ、昭和三年五月二十五日午後三時ヨリ聖堂ニ於テシメヤカニ追悼會ヲ營ム。有志ハ立チテ追慕ノ感想ヲ述べ、其ノ遺骨ヲ得テ厚ク教會墓地ニ葬レリ。

第七十九 第一代長老アンデルス師

第一代管理長老アンデルス師ハ英國ノ生レ、神學校卒業後日本ニ渡來シ前橋聖公會牧師トナル。我草津ニ初メテ來リシハ大正四年九月十四日ニシテ、北東京地方部監督マキム博士ニ從ヒテ大藤鑄三郎長老ト共ニ一行三名草津傳道地視察ノ目的ヲ以テ、來草セラレタルモノトス。翌十五日ハ宿所タリシ白根ホテルニ於テ宿澤兄ヲ招キ傳道道ノ打合せヲナシ、全午後二時基督教光鹽會ニ於テ聖書講義ヲ行ヒ、引續キマキム監督司式ノ幼児聖洗式（受洗者十九名）ノ補式者トナル。

大正四年十月三十日、命ヲ受ケテ夫人同伴メリデス長老ト共ニ來草シ、洗禮志願者ニ對シテ最後ノ準備ヲナシ十一月四日自ラノ司式ノ下ニ當地第一回ノ壯年聖洗式ヲ行フ。二十一名ノ兄弟ハ、實ニ筆舌ニ盡クシ難キ感謝ト喜悅ヲ以テ新生ノ大イナル恩恵ニ與レリ。

草津傳道地ガ熊本降臨教會ヲ離レテ、北東京地方部ニ屬スルヤ、大正四年十二月四日最寄教會主任牧師タルノ故ヲ以テ、アンデルス師初メテ當地會衆ノ管理長老ヲ命ゼラル。

大正五年六月十一日、聖バルナバ教會創立ニツキ、小島茂雄博士同伴來草、第二回聖洗式ヲ執行又第一代ノ管

理長老トナラル。

同年十一月十四日管理長老ヲ辭セラル。先生ノ御在任ハ第一回來草ノ時ヨリ勤續一年二ヶ月ニ過ギズ。サレド我教會創立<sup>ソツソツ</sup>勿々ノ際ニ當リ萬事指導宜シキヲ得タレバ、諸事順調ニ進ミ他日發展ノ基礎ヲ作セリ。全師ハ昭和三年其ノ研究ニヨリテ哲學博士ノ學位ヲ得ラレタリ。昭和四年七月二十八日、十三年振ニテマキム監督ニ從ヒテ來草シ、同日十時ノ聖餐式ヲ司リ又説教ヲナサレタリ。創立時代ノ牧師ノ故ニ信者一同師ノ來草ヲ喜ビテ大歡迎會ヲ開ケリ。師モ又昔日ノ草津會衆ヲ回想シ、今日ノ盛觀ヲ見テ豫想ダニセザリシ主ノ大イナル祝福ノ故ニ感慨極リナキモノ、如ク、殊ニ山中政三師夫妻、相○鎰○兄姉、管○丈○兄、稻○溫○姉等師ニヨリテ受洗ノ恩惠ヲ領セル人々ハ感謝會ヲ開キテ師ヲ迎ヘタリ。

#### 第八十 ヒューレット師

英國ノ出身、神學校卒業後長老ニ任ゼラレ、倫敦<sup>ロンドン</sup>ニテ聖ナル職務ニ從事シ居タリシガ、六十三歳ノ時癩患者救靈ノ召命ヲ感ジテ日本ニ渡來シ、同國人ミス・リデルノ經營スル熊本回春病院内降臨教會牧師タリ。大正四年八月米原馨兒長老ト共ニ初メテ來草セラレ、ヨルダン・ホームニテ當地第一回ノ幼兒聖洗式ヲ行ハレタリ。幾何モナク横濱ニ轉ジタルモ、六・七月ノ頃ニ至レバ毎年必ズ來草シ夏期間教會ニ於ケル長老ノ職ヲトラレタリ。百方奔走大イニ盡力シタル事ハ前述ノ如シ。今尙男子ホーム建設ノ恩人トシテ記念セラル。大正十四年九月十日老齡且ツ健康勝レズ歸國ノ途ニ就カル。信徒一同惜別ノ情禁ズル能ハズ、送別會ヲ催シ、涙乍ラニ師ヲ送レリ。昭和四年四月リー教母歸英ニ就キ、教母ニ訪問ヲ依頼シ、土産品ヲ托送セリ。

資性濃厚而モ諧謔<sup>カイヤツ</sup>ニ富ミ極メテ愉快ナル神父ナリキ。ステバノ先生ノ名ヲ以テ殘ル。逸話頗ル多シ。熊本ヨリ

轉任ノ際、ブラットホーム迄見送レル人々ニ「之カラ汽車デヒューレット、之ツキリデステパノデハ厭デスヨ」ト、巧ミニ阿喻セラレシトカ。未ダ日本語ニ長ゼズ、常ニ辭書ヲ懷中シ不解ノ語ヲ聞ケバ小首ヲ傾ゲツ、辭書ヲ引ク様ノ面白ク、又或家庭ヲ訪レテ「ヨクイラッシャイマシタ」ト挨拶シ主人公ヲ面食ハセシガ、「今日ハ」ト言フベキヲ逆ニ記憶違イナリシト分リテ大笑セシ事モアリキ。サレド一度聖壇ニ立ツヤ、全ク別人ノ如ク威嚴ヲ以テ臨ミ敬虔ナル態度自ラ外ニ表ハレタレバ、常ニ連座ノ人々ノ襟ヲ正サシメタリキ。ギルトノ會員ナリキ。昭和六年九月勝利ヲ以テ郷里ニ永眠セラル。内外ノ新聞一齊ニ之ヲ報ジ哀弔ノ意ヲ表セリ。英國ロンドン・タイムス紙上師ノ親友ナリシジェームス・アツダレイ長老ノ談トシテ載セラレタル永眠者記事ハ左ノ如シ。

永眠者記事

アルフレッド・ステパノ・ヒューレット長老

長イ一生ヲ教會ヘノ奉仕ニ獻ゲタルアルフレッド・ステパノ・ヒューレット長老ニ宿リシ、イトモ謙遜ナ聖者ノ靈ハ此世ヲ去ツタ。倫敦市ボブラノ區聖フライデスワイド教會ハ來月其ノ五十年記念ヲナス筈デアルガ、其ノ教會ノ補佐長老トシテ忠實ナリシ事氏ノ右ニ出ズル者ハ無カッタ。彼ハ亦、ホーヌリーダウン、トランミーア、アツフォードニ於テモ大イナル働キヲ爲シタ。然シ彼ノ自己犠牲ノ大キナ行爲ハ、齡六十二及ンデ彼ノ所有物ノ凡テヲ文字通りニ棄テ、日本ヘ癩病患者ノ許ヘト赴イタ時デアッタ。彼ハ美術殊ニ繪畫及陶器ニ於ケル第一流ノ鑑賞家デアッタ。其故未知ノ國ニ於テ全然新シイ生活ヲ始メル爲、己ガ愛好スル所有物ノ凡テヲ賣拂フト言フ事ハ、眞當ナ犠牲デアッタ。彼ガ十年間彼等ノ中ニ働イタ後ニ其患者達ガ彼ニ送リシ訣別ノ手紙ハ彼ノ働キヲ證明シテ居ル。彼等ハ彼ヲ愛シタ。

大地震ノ時、初メ彼ノ死ガ傳ヘラレタ。然シ憐憫深キ御攝理ニヨリ彼ハ圍ラズモ危險區域ノ外ニ居タ。サレド

其激動ト再ビ其所有物ヲ失ヒシ事ハ、生來強壯ナラザリシ彼ノ健康ニ恐ルベキ影響ヲ與ヘタ。彼ノ最モ古キ友人ノ一人デアリ、亦數年間彼ノ牧師タリシ余ハ之ガ單ニ一片ノ形式的讀辭ナラザルヲ證明スル事ガ出來ル。彼ノ美術ニ對スル知識ヲ想フ時、余ハ國民美術館ノ繪畫ニ關シテ雜誌「グッドウイル」(Good Will)ニ掲ゲシ彼ノ多クノ論文ヲ回顧スル。其レ等ハ官報ノ中ニ公表サレタ。而シテ余ハ之ヲ手ニ携ヘテ居タ人ニ向ツテ、官吏ノ一人ガ嘗ツテ「君ハ正シイ案内記ヲ御持チデスネ」ト言ヒ居リシ事ヲ憶エテ居ル。彼ハ *Robert* ト常ニ文通シタ。ソシテ彼ハラスキンカラノ賞讀ノ手紙ヲ大切ニ秘藏シテ居タ。彼ハ非常ニ忠實ナル *Anglo-Catholic* デアリ、子供ニ對スル彼ノ教ヘハ實ニ引キ附ケラレルモノデアリ、余ハ目醒メタル理智ガ彼以上ニ單純ナル信仰ト結合セル人ヲ知ラナイ。

*James Adderley* (伊藤梅吉兄譯)

聖バルナバギルドハ昭和六年度秋季總會ニ際シ、決議ヲ以テ弔文ヲ送レリ。聖ステバノ館又同ジ。聖ステバノ館ニ對スル遺族ノ返信ハ左ノ如シ。

(譯文)

聖ステバノ館ノ愛スル兄弟達ヨ。

故神父ステバノノ永眠ニ就キ懇篤ナル哀悼ノ御手紙ヲ下サイマシテ誠ニ有難ウ御座イマシタ。殊ニ後ニ殘リシ家族ノ私共ニ對スル深い御同情ニ對シテハ實ニ御禮ノ言葉モ御座イマセン。

皆サンガ何時モ神父ステバノト皆サンノ間ニ於ケル彼ノ働キヲ心ニ憶エテ居テ下サル事ハ私共ニトツテ大キナ慰メテ御座イマス。彼ハ心カラ貴方方ヲ愛シテ居リマシタ。ソシテ皆サント共ニ居テ彼ノ愛ト教ヘヲ以テ皆サンニ喜ビト助ケヲ與ヘル事ヲ、大キナ喜ビデアリ又特權デアルト感ジテ居リマシタ。私達ハ彼ハ今尙私達ノ極ク手

近ナ處ニ居テ彼方ノ世界ニ於ケル愛ト祈リノ働キヲ續ケテ居ル事ヲ信ジマス。

聖ステパノ館ガ極メテ多クノ祝福ヲ受ケマシタ事ヲ感謝シマス。ソシテ皆サンハ神父ステパノノ爲ニ祈リヲ續ケテ下サル事ト信ジマス。私共ハ聖徒ノ交リニ於テ互ニ顔ト顔ヲ相見ル事ガ出來、ソシテ私共凡テハ主キリストニ於テ一ツデアル事ヲ信ジマス。神父ステパノガ如何ニ平和ナ眠リニ就イタカト言フ事ニ就イテハ既ニコンウォール・リー先生カラ御聞キニナツタ事ト思ヒマス。彼ノ死ハ彼ニトツテ誠ニ幸福デ御座イマシタ。私共ハ彼ノ麗シイ生涯ノ爲ニ常ニ主ニ感謝シ、又彼ガ如何ニ忠實ニ主ニ事ヘ奉リシカ、又主ニ忠實ナラント欲シテ彼ノ許ニ來ツタ總テノ人々ニ對シテ如何ニ良イ助ケヲ與ヘタカヲ思フ時、悲シミノ中ニモ大キナ慰メヲ受ケル事デ御座イマス。私共モ亦皆サンノ事ヲ祈リノ中ニ覺ヘテ居リマス。皆サン一人一人ノ上ニ最上ノ祝福アラン事ヲ祈リマス。末筆乍ラ皆サンノ御親切ナル御同情ノ御手紙ニ對シテ幾重ニモ感謝致シマス。

敬具

一九三一年十二月八日

英國リーゲート・エバースフィールド通り 二番地ニテ

神父ステパノノ姉妹及ビ兄弟ナルエリノール・ヒューレット

アライス・V・ヒューレット

シドニー・S・ヒューレット

(徳〇唯〇兄譯)

第八十一 第二代長老 大藤鑄三郎師

第二代管理長老 大藤鑄三郎氏ハ明治七年八月三十一日前橋藩士大藤政雄ノ三男トシテ前橋ニ生レ、小學校及中

學三年迄郷里ナル前橋ニテ教育ヲ受ケラレタリ。

明治二十四年四月復活日、前橋聖公會ニ於テ主ノ御召ヲ蒙リテ受洗シ、神ノ役者トシテノ決心ヲ固メ、明治二十五年上京シ、築地立教學校ニ入學シ、明治三十四年卒業ス。一ケ年間京都聖ヨハネ教會ニテ假牧師ヲ勤メ、明治三十五年渡米、<sup>フィデルフィヤ</sup>費府神學校ニ入學、明治三十八年歸朝、爾來三十六年間東京淺草聖ヨハネ教會牧師タリ。執事ノ按手ヲ受ケタルハ明治三十八年十二月、長老ノ按手ヲ受ケタルハ三十九年四月ナリキ。大正二年再渡米シ、全米ニ亘リ講演旅行ヲナス。

草津トノ關係ヲ記サンニ、大正四年九月十五日マキム監督ニ從ヒテ初メテ來草（第五章第二十項ヲ參照セラレヨ）當時聖公會教務院傳道局長タリ。草津會衆ニ最モ深キ同情ヲ表シ、殊ニ歸京後草津特殊部落訪問記ヲ基督教週報ニ掲ゲ、聖公會一般ニ草津ヲ紹介セラレタリ。同記事中傳道開始ノ時期ニ關シ熊本リデル女史ヨリ異議ノ申出アリテ、基督教週報第十五號ニテ誤ヲ正スル等ノ事モアリキ。同師ガ個人的ニ當地ニ興味ヲ有スルニ至リシハ宿○薰兄トノ關係ニ基ク。即チ大正二年二月渡米ノ途次布哇<sup>ハワイ</sup>ニ立寄り、ホノル、聖三一教會ヲ訪レシ時其牧師タル深尾泰次師ト共ニ教會委員トシテ衷心歡迎シタリシ宿澤兄ヲ知リタリシガ、宿澤兄ガ來草後光鹽會ヲ主宰シ大イニ病者傳道ヲナスニ至リテヨリモ、屢々文通ヲ以テ相勵マシ靈的指導ヲ與ヘタリ。

大正五年十一月四日、我教會創立後數ヶ月ナラザルニ管理長老タリシ前橋聖公會牧師アンデルス師辭任セラレタルニ付キ、宿澤兄其他一般信徒ノ切ナル願ヲ容レテ其後任トシテ我教會ノ管理長老トナラル。

資性淡快ニシテ殊ニ我等病者ヲ愛セラレ、來草ノ都度勞ハリ慰メラレタレバ父ノ如ク敬慕セラレタリ。

東京ト草津ハ地理的ニ隔リ、今日ノ如ク電車ノ設ケモ無カリシヲ以テ、餘リ屢々來草スル事ハ困難ナル事情ニアリ。サレバ急ヲ要セザル事ハ細事ニテモ手紙ヲ以テ決裁ヲナシ、司牧ニ意ヲ用ヒラレタリ。然ルニ大正十年十

一月在任六年ヲ以テ管理長老ヲ辭セザルベカラザル事情起レリ。蓋シ其ノ牧セラル、淺草聖ヨハネ教會ハウイリアムス監督ノ創設セラレシ聖公會中最モ古キ教會ノ一ツニシテ信徒中ニモ知名ノ士少カラズ。然ルニ大藤長老ガ毎月管理長老トシテ來草スル事ニ就キ、其特殊部落ノ故ニ信者中不快ヲ感ジ居タル者少カラズ、同教會ガ自給教會トナルト共ニ内外ノ狀勢ヨリシテ止ムナク草津管理長老タル事ヲ辭セラレタルナリ。サレド其後ト雖モ尙陰ニ陽ニ草津ノ爲ニ盡力セラル。爾來我聖バルナバギルド働人會員タリ。昭和六年四月聖ヨハネ教會牧師就任後滿二十五年記念祝賀會開カレ、我教會ヨリモ山中執事夫妻出席セラレタリ。久シク教務院ノ要職ヲ兼ヌ。現在（昭和七年）ニ於テモ尙總務局理事、東京教區委員、傳道局地方委員其他ノ公職ニ在リ。

第八十二 第三代長老山本三次郎師

明治十九年十一月八日埼玉縣川越市大字寺井五番地ニ生ル。明治三十七年三月三十一日川越中學校卒業、明治四十四年六月二十五日東京三一神學校（豫科二年本科三年）卒業ト共ニ日本聖公會牧師ヲ拜命シ、秋田聖教主教會勤務ヲ命ゼラル。大正三年十二月三日會津聖トマス教會勤務、大正六年四月三日米國へ留學、紐育市<sup>ニクヨク</sup>ゼネラル神學校ニ入學、大正八年五月二十五日神學校ポストグラヂュエートヲ卒業シ神學士トナル。同年十一月二十三日歸朝ヲ命ゼラレ十二月二十三日ヨリ前橋市聖マツテヤ教會牧師、大正九年三月二十五日執事按手受領、十年九月二十九日長老按手受領。大正十年十二月一日大藤長老ノ後任トシテ草津聖バルナバ教會管理長老トナル。然ルニ翌十一年三月三十日限止ムヲ得ザル家事上ノ都合ニ依リ聖公會牧師ヲ辭任セラレタルヲ以テ、在任僅カ四ヶ月ニテ御別レスル事トナレリ。大正十一年四月ヨリ朝鮮京城都市改良調査事務囑託、京城府立圖書館兼務、京城府社會教化委員會幹事、京城公立商業學校講師等ヲ經テ大正十三年七月一日朝鮮公立商業學校教諭ニ任ゼラレ、

京城公立商業學校、日ノ出商業學校教諭ニ補セラル。昭和四年二月一日朝鮮公立實業學校教諭ニ任ジ、高等官七等ニ、同四月一日從七位ニ叙セラレタリ。現ニ開城公立商業學校教諭タリ(昭和六年七月二十日現在)。

管理長老時代ノ感想トシテ任地朝鮮ヨリ送ラレタル一文ヲ左ニ掲グ

一、信徒諸子ガ幼兒ノ如ク純眞ナル信仰ト教職者ニ對スル敬愛心ヲ以テ、教會ニ集マラル、ヲ見ル時、自分ハ此人々ノ爲ナラ死ンデモ好イト思ッタ。

二、信徒諸子ガ死ヲ見ル事歸スルガ如ク、眞ニ主イエスノ救ト天國ヘノ憧憬トヲ見ル時、我信仰ノ燃サレタル事幾度ナルヲ知ラズ。

三、リー先生ヲ初メ教會、病院ノ幹部ノ方々ガ眞ニ主イエスノ愛ト十字架ノ意義ヲ體得シテ人々ニ接セラル、獻身犠牲ノ精神ニ勵マサレシ事數限リモ無シ。

四、私ノ管理長老時代ハ雪深ク、行路困難ノ時デシタガ錦地ニ行ク事ガ非常ニ樂シミデシタ。

五、草津ハ私ニ一生忘レラレヌ良キ印象ヲ與ヘテ呉レマシタ。

### 第八十三 山中政三師

山中政三師ハ當草津町ノ出身、大正四年一月光鹽會ニ來投ト共ニ熱心ナル會員トナリ、宿〇燕兄ト相協力シテ光鹽會上町支部ヲ設立シ、同大正四年八月ヨリ自宅ヲ開放シテ上町日曜學校ヲ開ク。同年十一月四日アンデルス長老ニ依リヨルダン・ホームニテ受洗(草津ニ於ケル第一回壯年受洗者ノ一人)、大正五年六月聖バルナバ教會創立セラル、ヤ、リー女史ヲ助ケ殊ニ土地ノ買入健康地帶トノ交渉等ノ任ニ當リ、同年十二月衆望ヲ負フテ教會委員ニ當選ス。大正六年七月三十日特別ナル召命ヲ感ジ基督教傳道者タルベク斷然上京シ、築地ノ聖三一神學校

ニ入學セラル。入學前後ノ模様ヲ少シク記サンニ。

時ハ教會創立後幾許モナキ事ナレバ教會ノ基礎未ダ堅カラズ。殊ニ大正六年五月草津ノ有スル唯一ノ靈的指導者タリシ宿○薰兄退草ノ事アリテヨリ、寂寞轉々落日ノ感アリ。サレバ男病者ノ間ニテ働ク適當ナル働人ノ與ヘラレン事ノ爲ニハ代禱會ノ題ニモ出シテ信徒一同熱心ニ祈リ居タル事ナリキ。サレバ此秋ニ當リ山中氏ノ神學校入學ハリ一教母並ニ一般信徒ノ大イナル期待ト後援アリシナリ。サレド親戚中ノ有力者及友人等ハ舉ツテ反對シ「商賣ヲ廢シテ傳道者タルハ不可ナリ。且ツ齡而立ラ越エテノ勉學如何デカ其成業ヲ算スベキヤ」トテ賛成セズ。サレバ上京前後ハ内外ノ心勞重ナリ心身衰疲一見病弱者ノ如クナリシト言フ。然レドモ入學後神學ノ林ニ分入りテ愈々主ノ召命ヲ深クスルト共ニ心身ノ健康モ回復セリ。學ビノ間ニモ草津ヲ忘ル、事ナク夏季冬季ノ休暇ニハ必ズ歸省シ、殊ニ屢々學友ナル木村、元城、渡邊等ノ神學生ヲ同伴シテ信者宅ヲ訪レ其信仰ヲ勸マシ慰メヲ與ヘラレタリ。之等若キ學徒ノ胸ニ燃ユル信仰ノ焰ニ依リテ救ニ導カレタル者モ少カラザリキ。大正七年秋ヨリ立教中學校寄宿舎ノ舎監ヲ命ゼラレ學生ノ指導ニ當レリ。斯クテ大正九年七月、三ケ年ノ課程ヲ卒ヘテ目出度ク神學校ヲ卒業シ、當聖バルナバ教會所屬傳道師トシテ就任セラル。

茲ニ其ノ良キ志ハ祝セラレ、大英斷ノ效空シカラズ、教會ハ定住ノ靈的指導者ヲ與ヘラレテ甦生ノ氣運ニ向ヒ信徒ノ熱心ハ燃サレ傳道精神極メテ横溢スルニ至レリ。時ノ管理長老大藤鑄三郎師ハ東京ニ住シ自教會司牧ノ任アリ。更ニ教務院關係ノ事務多忙ニシテ毎月一二回ノ來草ナレバ、主日、聖日等ノ司式ハ勿論、各種集會、求道者ノ指導等就任勿々ヨリリ一教母ト共ニ寸暇無キ有様ナリキ。大正九年八月男子ホーム舎監福○紫○兄辭任ニ伴ヒ其後任トシテ舎監ヲ兼ネ、大正十年十月聖バルナバ青年會結成ト共ニ推サレテ其會長トナル。

大正十四年八月二日マキム監督ニヨリ執事接手ヲ領ス。信徒一同大イニ喜ビ同九月十日執事就任祝賀會ヲ開ク。

師ハ人格高潔自ラ持スル事固ク、敬虔眞面目廉直ニシテ、仁俠且ツ常ニ神ニヨル正義ノ上ニ立チ是ナリト信ズル處權威ヲモ敢テ惧レズ非ナリト見ルヤ如何ナル人ニモ忠諫シテ憚ラズ。附屬事業ノ爲ニモ絶エズ意ヲ用ヒ、リ一教母ヲ援ケ影ノ形ニ伴フガ如ク、病者ニ深キ同情ト理解ヲ有シ決シテ傳染セズトノ信念ヲ以テ救靈ノ聖業ヲ奉ゼラル。

昭和六年十一月十日畏クモ皇太后陛下ハ師ガ多年救贖事業ニ從事シ、勞績尠カラザル事ヲ賞セラレ、巻繪硯箱及金一封ヲ下賜セラレタリ。

#### 第八十四 第四代長老貫民之介師

明治十五年東京築地ニ生ル。兩親ハ山口縣ノ産ナリ。父ハ現在ノ立教大學ノ前身タル立教大學校教頭トシテ多年學生ノ薰陶ニ從事セラレ、又本邦ニ於ケル最古ノ聖公會信者ノ一人トシテ日本聖公會統一ノ大業ニ力ヲ致サレタル人ナリ。立教中學校立教專修學校ヲ終ヘ東京聖三一神學校ニ入學サレ、明治三十八年六月卒業、茨城縣ニ傳道シ、明治四十二年ヨリ東京市本郷區聖テモテ教會傳道師トシテ次デ執事ニ又長老ニ昇任シ、前後約十年間主トシテ帝國大學、第一高等學校等ノ學生其他智識階級ノ求道者ノ教導及教會事業ニ從事ス。同時ニ教務局（現在ノ教務院）書記ヲ兼任、大正三年主事トナリ、事務ヲ主管シ我聖公會事務機關ノ整備ニ力ヲ致ス事前後二十年、其間傳道局長文書局長トシテノ功績亦少カラズ、各種事務、慣例ニ精通シ教務院ノ活キ字引ト稱セラル。現行日本聖公會法憲法規中、同師ノ起草シタル箇所少カラズ。茲ニ特筆スベキハ古今聖歌集ノ編纂事業ニシテ、即チ大正六年度總會ニ於テ改訂委員ニ選舉セラル、ヤ其編輯主任トナリ、寢食ヲ忘レテ事務ニ從事シ又百方交渉ノ任ニ當リ、遂ニ大正九年其業ヲ完フセリ。

第十三總會ガ委員ノ努力ニ對シテ決議ヲ以テ深キ感謝ノ意ヲ表シタルヲ見テモ如何ニ難事業タリシカヲ知ルベシ。曲ヲ集ムル事五百三十、自ラ作詞作曲シタルモノモ數篇アリ。優秀ナル藝術的作品ノ多キ事ヨリ一般音樂家ノ間ニモ珍重セラル。

師ハ又自ラ基督教徒ノ家庭ニ生レ、佛教ニ就テ無知ナルヲ遺憾トシ、我國佛教界ノ碩學境野黃洋、島地大等、渡邊悔旭ノ諸師ニ就キ約三ヶ年ニ亘リ研究スル所アリシガ偶々立教大學宗教學科設置ニ當リ其教授ニ擧ゲラレ印度哲學及佛教哲學ノ講座ヲ擔當シ、大正八年ヨリ前後十年間學生ノ薰育ニ任ゼリ。其間地方ノ諸教會ニ於テ管理者ト委員トノ衝突アリタル場合等屢々管理ノ任ニ就キ缺ケタルヲ補ヒ、或ハ調停ニ立チ或ハ和解ニ導ク等地方教會ニシテ其恩ヲ受クルモノ二三ニ止ラズ。其著書「基督教入門」及「信教指針」ハ廣ク世ニ行ハル。

サテ師ガ初メテ來草サレタルハ大正十一年四月ニシテ、同年三月三十一日長老山本三次郎師ノ辭職ニ依リ適當ナル管理長老ノ後任ヲ得ン事難キ際ナリシヲ以テ、信徒一同歡喜シテ師ヲ迎ヘタリ。爾來我教會ノ管理長老トシテ毎月二回以上來草シ、教會管理ノ任ヲ執ル。師ハ何事モ實踐躬行殊ニ我教會ヲシテ正統純真ナル普公信仰ニ徹底セシムル事ニ斷ヘズ努力ヲ拂ハレタリ。蓋シ我教會ノ母體タル基督教光盟會ハ數名ノ各派ニテ受洗セル信者ヲ中心トシテ實質的發達ヲ遂ゲ、就中東京田端ニアリシ明星團ヨリ有力ナル信者ノ參加アリテヨリ、頗ル新教的色彩ヲ帶ビ居タルヲ以テ一般ニプロテスタントノ思想濃厚ナリシモ、大藤長老ハ斯クノ如キ問題ニ觸レズ、次ノ山本長老ハ任期短カク遂ニ貫長老ノ代ニ及ビシモノナルガ、師ハ機會アル毎ニ「使徒達ヨリノ唯一ノ聖公會」ト眞實純正ナル信仰ノ擁護ヲ宣揚セラレ、又自由祈禱ノ回数ニ制限ヲ加ヘ聖公會ニ屬セザル者ノ説教或ハ講演等ハ之ヲ許可セザル方針ヲ立ツル等、漸ヲ以テカトリシズムヘノ轉向ヲ圖レリ。病者ヲ愛シ深キ同情ト理解ヲ以テ之ニ接シ寢食ヲ共ニシテ毫モ之ヲ意ニ介セズ。病者ノ親友トナリ病者亦其ノ愛ニ狎レ東京ノ物ハ何デモ價格低廉品質精

良ナリトノ先入感ニヨリテ時計、萬年筆ノ買入修繕、書籍諸器具ノ購入、重症者ノ特別食品、甚シキハ婦人ノ衣裳ノ見立及買入迄師ニ依頼シ、恰モ病者ノ「御使ヒ」ノ如ク來草ノ都度之等ノ荷物ヲ携へ來リ、其喜ブ顔ヲ見テ樂シミトセリ。或時ノ如キハ之等ノ品物ニテ行李二個ヲ埋メテ餘サザリキ。病者トノ斯カル親密サガ一部ノ人々ノ誤解ヲ招キ、師ニ大イナル迷惑ヲ掛ケタル事モアリシカド、師ハ深ク之ヲ意ニ介セズ主ノ榮光ノ故ニ凡テヲ忍耐セラレタリ。昭和四年四月リ一教母英國訪問ノ途ニ上ルヤ、マキム監督ノ命ニ依リ其不在中ミツシヨン事業經營ノ責任者トナリ、中央ニ於ケル各種公職ヲ辭シテ下町ニ定任セラル。

其間常ニ病者ノ幸福ニ意ヲ用ヒ、規則ノ許ス限り自由ヲ與へ又諸役員會ノ決議ヲ重ンジ、極端ナル獨裁主義ヲ避ケラレシヲ以テ、新醫院ノ造築及開院、舊聖ステパノ館移轉問題、各部ニ於ケル人事ノ移動等至ッテ圓滑ニ行ハレ、以テ翌五年一月リ一教母歸草ノ時ニ及ベリ。

同年四月七日ヲ以テ再ビ管理長老ニ歸リ毎月二回以上來草教會ヲ管理セラル。同十一月十日長クモ皇太后陛下ハ師ガ癩治療事業ニ對シ多年勞績尠カラザルヲ思召サレ、巻繪硯箱及金一封ヲ下賜セラル。

昭和六年六月三十日家庭ノ事情ト勞働者矯風事業ノ爲當教會管理長老タル事ヲ辭セラル。大正十一年四月以來動續九年二ヶ月ノ長キニ亘ル。殊ニ東京眞光教會牧師杉浦義道先生御長逝ニ付キ其經營シ居ラレル社會事業勞働者矯風會ヲ司ルベキ適當ナル後繼者ナク、依テ師ハ師ガ幼少ノ時ヨリ同長老ニ特別ナル眷顧ヲ蒙リ居ル事又同勞者タル職務ヲ有スル者トナリテヨリ以來其經營等ニ就キ屢々腹藏ナキ意見ヲ聽キタル者トシテ、東京教區監督及北東京地方部監督御相談ノ上適當ナル後任者アル迄暫定的ニ眞光教會及勞働者矯風會事業ノ責任者タル事ヲ命セラレシト聞ク。

サテ師ハ管理長老ヲ辭セラレタル後モ尙毎月一回以上來草シ、主日ノ職務ヲ執ラレツ、アリシガ北東京地方部

ノ傳道上ノ都合ニヨリ昭和九年三月下旬ノ聖週ニ教務ヲ執ラレシヲ最後トシテ當教會トノ關係ヲ絶タレタリ。

昭和九年四月十四日教會委員會ニ於テ秋山管理長老ヨリ突如、貫神父辭セラルノ件ヲ聽キタル各委員ハ大イニ驚キ其ノ留任ヲ希望シタルモ事ハ出張旅費節約其他ミツシヨシン經濟建直シ上ノ方針ニ基ツクモノニシテ且ツ既ニ監督ノ發令アリタル後ナレバ如何トモナシ能ハズ依テ取敢ヘズ金三十圓ノ感謝記念品ト感謝狀ヲ贈呈スル事ヲ滿場一致可決セリ。

感謝狀ハ左ノ如シ。

感謝狀

日本聖公會長老 貫民之介 殿

大正十一年四月ヨリ昭和九年三月ニ到ル十有三ケ年ノ久シキニ亘リ僻陬ヲ厭ハス褒貶ヲ顧ミス命ヲ土芥ニ比シ以テ當草津聖バルナバ教會ノタメニ司祭ノ職ヲ奉セラレ其ノ慈愛ト忍耐殊ニ病者ニ對スル深キ同情ト理解ハ不斷ノ教導ト相俟ツテ純正ナル信仰ト愛ト熱心ヲ増シ加ヘ且ツ大イニ教勢ヲ伸張スルヲ得タリ。之素ヨリ神ノ御祐助ニ因ルト雖抑々亦師ガ平素ノ周到ナル訓育ト鞠躬盡瘁ノ致ス處茲ニ北東京地方部ミツシヨシン經濟ノ都合上當教會ヲ辭セラル、ニ當リ多年ノ勞績ヲ回想シ深ク感激ニ堪ヘス

衷心感謝ノ意ヲ表ス

昭和九年四月二十日

群馬縣草津町

草津聖バルナバ教會



雜誌「高原」五月號ニハ神父惜別記事數ヶ所ニ現ハレタリ其中、フイタイレ雷霆子ノモノシタル短文ヲ左ニ掲グ。

貫神父と我々病者

貫神父は常に「我々病者」といふ言葉を用ひて居られた程で病者に対して深い理解と同情を以て接して下さつたので、我等も又恰も慈父に対する如く心置きなく神父に親しむことが出来た。東京から毎月御來草になる度毎に色々な買物や修繕等をやつて来て下さるばかりでなく求めに應じて寫眞は撮つて下さるオルガンは修理して下さる看板を書いて下さる。夏になると淺間・白根を初め遠近各地の登山や遠足に連れていつて下さる。其他聖歌の稽古や謄寫版印刷等々實に手まめ筆まめに何くれとなく世話して下さいました。一身上の問題で神父のかゆい處に手の届くやうな御配慮に預り感泣して居るものも少くあるまい。實に尊い聖職にある神父が我等のために十數年間一日の如く便利屋の如き働きをして下さつたのである。今お別れするに當り餘りに神父の大愛に甘え過ぎた我等の振舞であつた事を省みて今更乍ら慚愧に堪へない。今年の聖週を當地で守られたのを最後として我教會を去られるに當つても神父は我等の悲嘆を慮かつてか何も仰しやらず他所乍ら病者一人々々に暇乞をして去られたので知らぬことゝは云ひ乍ら送別會すら開かず大恩ある神父に一言の御禮も申上げずにお別れしたのは悔んでも及ばない。只主の聖き器を擔ふ神父が益々健康にて主の公會のために御活動遊ばさるゝやう蔭乍ら祈るのみである。

尙ホーム側ヨリノ感謝記念品贈呈ニ対シテハ左ノ如キ鄭重ナル禮狀ヲ寄セラレタリ。

拜呈クワイ過日ハ各ホーム準ホーム準々ホーム一同ヨリ結構ナル御贈物ヲ賜リ厚ク御禮申上候諸兄姉ヨリ斯カル贈物ヲ頂戴スルコトハ誠ニ痛ミ入ル次第御芳志ニ感涙ヲ催スモノ之有候、御地ヲ最後ニ出發ノ際皆々様ニ御暇乞ノ御挨拶ヲ述べ來リタキハ山々ナリシモ小生ハ既ニ責任アル地位ニハ無カリシコトデモアリ諸兄姉ヲサワガセナイ爲メ缺禮トハ思ヒシガ黙シテ去リ申シ候段何卒御高容願上候 同ジ地方部ノ教會ニアル事故今後御訪ネスル

第十五章 教役者及働人（其ノ一）

機會モアルベク其ノ機會ナシトスルモ何レ御國ニテ俱ニ會フ日迄主ニ在リテ互ヒニ祈ルベク之ガ何ヨリノ事ニ考ヘ居候 諸兄姉ニ於テハ必ズ御身大切ニ遊バサレ度 諸兄姉ノ専心ノ祈ハ最モ力アリ此ノ世ニ於テ其任務ハ重大ナルモノト存ジ候 切ニ大能ノ主ノ祝福ヲ祈リ候 尙ホームニハ平和ト喜ト充チン事ヲ祈リ候 小生ハ健在乍憚御安心下サレ度願上候 先ハ御禮迄申上候

昭和九年五月十二日

貫 民之介

聖バルナバホーム各館  
諸兄姉皆々様  
準ホーム準々ホーム

歴代長老表

第一代 アンデルス師

大正五年六月十一日赴任

大正五年十一月四日退任

在職年數 六ヶ月

第二代 大藤鑄三郎師

大正五年十一月四日赴任

大正十年十一月二十八日退任

在職年數 四年一ヶ月

第十五章 教役者及働人(其ノ一)

第三代

山本三次郎師

大正十年十一月二十八日赴任

大正十一年三月三十日退任

在職年數 五ヶ月

第四代

貫 民之介師

大正十一年四月三十日赴任

昭和六年六月三十日退任

在職年數 九年二ヶ月

第五代

秋山基一師

昭和六年七月一日赴任

昭和十三年六月退任

在職年數 七年

執事表

第一代

山中政三師

大正十四年八月二日叙任

現在ニ及ブ

第十六章 教會委員（其ノ一）

傳道師並ニ傳道師補

（補） 宿○薫師

大正四年六月二十日就任

大正六年五月 退任

在職年數 二年

（師） 山中政三師

大正九年七月 就任

大正十四年八月一日退任

在職年數 五年

第十六章 教會委員（其ノ一）

第八十五 創立時教會委員

大正五年六月十一日新教會創立ニ就キ聖公會法規第七章ノ規定ニ基キ、受聖餐者ノ參集ヲ求メ教會委員ノ臨時選舉ヲ行フ。開票ノ結果當選ノ榮譽ヲ得タル者ハ、相○鎰○兄、大○鹿○郎（通稱・板倉兄）ノ二人ナリ。管理長老アンデルス師、傳道師補宿○薫兄、婦人傳道師コンウオール・リー女史ノ五名ヲ以テ教會委員會ヲ組織シ、毎月一回定例委員會ヲ開キ教會ノ會計、庶務其他教會ノ平安、進歩ニ關スル事項ヲ協議セリ。十二月ノ總會迄六ヶ月、此間教會創立前後多岐多端ノ時ニ際シ、全員一致協力將來ノ發展ノ基礎ヲ定メタリ。

本年中教會ニ於ケル主要ナル出來事ハ左ノ如シ。

○六月十一日（聖バルナバ日）教會創立。

○七月一日 文書傳道ノ方法トシテ「草津教友」ノ發行。

○七月二十七日 マキム監督ニ依ル第一回信徒按手式、按手ヲ受領セルモノ三十三名。

○九月一日 下町聖愛幼稚園ノ開園。

○十一月十四日 アンデルス長老辭シ、大藤鑄三郎長老管理長老トナル。

因ニ本年度ノ新受洗者ハ二十七名ナリ。

#### 第八十六 大正六年度教會委員

大正五年十二月、信徒總會ヲ開キ六年度教會委員ノ選舉ヲ行フ。開票ノ結果當選セル者ハ相○鎰○兄（當選二回）、管○丈○兄、山中政三兄、横○武○兄、竹○兵○兄ノ五名ナリトス。

本年度教役者ハ管理長老大藤鑄三郎、婦人傳道師コンウォール・リー女史、傳道師補宿○薫（但五月迄）本年度中主要ナル出來事ハ左ノ如シ。

○二月、教會堂タル建物敷地等ノ買收ト登記。

○全月、傳道文庫ノ設置。

○四月一日、上町愛隣幼稚園開園。

○五月八日、三上千代女史「愛ノ家庭」ノ舎監トシテ來任。

○全月、「聖慰メ館」建築着手シ、十一月二十六日落成。十二月三日聖バルナバ醫院開院。

○七月三十日、委員山中政三東京聖三一神學校ニ入學。

○十一月十日、女醫・服部ケサ女史來任。

本年度ノ新受洗者ハ二十四名ナリ。

第八十七 大正七年度教會委員

大正六年十二月ニ於ケル教會委員選舉ニ於テ、當選ノ榮譽ヲ得タル者ハ左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選三回）、管○丈○兄（當選二回）、竹○兵○兄（當選二回）、横○武○兄（當選二回）、勝○男兄、以上五名ナリ。

教役者へ管理長老大藤鑄三郎師、婦人傳道師コンウオール・リー女史。

本年度中教會關係ノ主要ナル出來事左ノ如シ。

○三月、霜間愛友會成ル。

○六月、聖バルナバ・ギルド創立。

○八月、愛友會主催霜間諏訪神社祭禮傳道。

尙本年度ノ新受洗者ハ十八名ナリ。

第八十八 大正八年度教會委員

大正七年十二月信徒總會ヲ開キ、次年度教會委員ヲ選舉スル事左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選四回）、管○丈○兄（當選三回）、竹○兵○兄（當選三回）、勝○男兄（當選二回）、福○

紫○兄。

本年度教役者ハ管理長老大藤鑄三郎師、婦人傳道師コンウオール・リー女史ナリ。

本年度中主要ナル出來事ハ左ノ如シ。

○三月、光鹽會ノ解散。

○四月、霜間聖ステ・パノ館創立。

○九月、六合村方面傳道。

本年度ノ新受洗者ハ九名ナリ。

第八十九 大正九年度教會委員

大正八年十二月法規ニ從ヒテ信徒總會ヲ開キ教會委員ヲ選舉ス。當選シタル者左ノ如シ。

相○鎔○兄(當選五回)、管○丈○兄(當選四回)、勝○男○兄(當選三回)、福○紫○兄(當選二回)、吉○浩○兄。

本年度中ノ教役者ハ大藤鑄三郎師、婦人宣教師コンウオール・リー女史、傳道師山中政三師。

本年度中ノ主要ナル出來事ハ左ノ如シ。

○五月、教會及各ホーム中ニリバイバル起リシ事。

○七月、山中政三師神學校ヲ卒業シ當教會傳道師トシテ來任シタル事。

○九月、聖マリヤ館創立セラレ「愛ノ家庭」此處ニ引越シタル事、下町路傍傳道開始シタル事等。

尙本年度ノ受洗者ハ四十八名ナリ。

第九十 大正十年度教會委員

大正九年十二月教會委員改選ニ當リ、當選セル新委員ノ顔觸レ左ノ如シ。

相○鎔○兄(當選六回)、管○丈○兄(當選五回)、勝○男○兄(當選四回)、福○紫○兄(當選三回)、高○利○兄。

教役者ハ管理長老大藤鑄三郎師(十二月一日ヨリ山本三次郎長老ト更迭)、傳道師山中政三師、婦人傳道師コ  
ンウォール・リー女史。

本年度中ノ主要ナル出來事ハ左ノ如シ。

○三月、小雨・太子村方面傳道開始。

○八月、信徒修養會、講師森俊次長老。

ヒクソン師來草、神癒祈禱會。

○十月、聖ピリポ館創立。

尙本年度ノ受洗者ハ三十八名ナリ。

(大正十一年度以降ノ教會委員ニ就キテハ第三十四章ヲ參照スベシ)。

## 第四期 發達時代

### 第十七章 夫婦ホーム

#### 第九十一 聖ルセ館

大正十一年三月及葉館主白○忠○氏永眠ニ依リ整理ノ爲同氏所有湯之澤五九五番地ノ土地家屋一切ヲ賣却スル事トナリ居リシガ同館ハ教會並醫院ト近接シ内湯ノ設備モアリテ信者ノホームトシテ誠ニ相應シク殊ニ救助ヲ要スル兄弟ノ數モ多キニヨリ遂ニリー教母ハ之ヲ買取ル事トナリ土地建物一切ニテ三千五百圓ニテ契約成立シ三月二十八日登記ヲ了セリ。建坪五三・二五坪、宅地四〇坪、二階五間六六六三、下六間四四四六六六ヲ有ス。醫院ニ隣接スルヲ以テ重病者ノ病室トナス事トナリ聖ルセ館ト命名シ、曩ニ聖ステパノ館舎監ヲ辭シタル福○紫○兄夫婦三月二十一日入館教母ノ命ヲウケ館内ノ整理其他諸般ノ準備ヲナシ、三月三十一日横○武○兄夫妻、四月十三日並○藤○兄松○百○子姉、翌十二年二月二日岩○富○



聖ルセ館

兄夫妻等入館ス。井上照子女史舎監ニ選任セラレ日夜病弱者ノ爲ニ愛ノ勞ヲトラレタリ。

大正十二年二月働人トシテ野○熊○兄夫婦入館シ福場兄ヲ扶ク。此ノホームハ主トシテ夫婦者ニテ二人共弱ク看護ヲ要スル者ヲ收容シタレバ、何時トハ無シニ病室ノ意味ハ無クナリ純然タル夫婦ホームノ觀ヲ呈シ遂ニ全ク夫婦ホームトナレリ。而シテ井上女史ハ兎角健康勝レズシテ館ノ實務ヲ執ル事困難トナリシカバ、開館四ヶ月後福○紫○兄舎監ニ任セラレ教母ノ命ヲ奉ジテ館員ノ指導統率ニ當レリ。

聖ルセ館人員調

大正十一年度收容人員九人

大正十二年度收容人員十五人

大正十三年度收容人員男子八人女子九人

第九十二 福○紫○兄

福○紫○兄實名ハ俊○、○○縣○○郡○○村出身、明治十八年四月一日ノ誕生ナリ。初メ東京ニ住ス。偶々大正四年一月四日彼三十七歳ノ春市外田端ニ開カレタル病者間ノ新年宴會ニ赴ク途上、傳道行軍ノ一隊ニ出合ヒ基督教ノ集會ニ行クベキ事ヲ勸メラレ激シキ論争數刻遂ニ説キ伏セラレテ後○俊○兄ノ宅ニ開カレタル集會ニ行キタリシガ、奇シキ力ニ捉ヘラレテ即夜改宗ノ決心ヲナシ、イト熱心ナル求道者トナリタリ。家ハ代々眞言宗（弘法大師）ノ有力ナル信徒ナレバ、之ヲ聞キタル郷里ノ家族ハ驚愕シ幾度トナク基督信仰ノ拋棄ヲ迫リ遂ニ殆んど勘當同様ノ破目ニ陥リシモ、信ノ前ニハ毫モ屈セズ臆セズ、大正四年二月十一日安倍、後藤、三上、服部ノ諸先生ト共ニ明星團ヲ創立シ、全年五月二十七日中田重治監督ニ依リ洗禮ヲ受ケ、愈々熱心ニ東京附近ニ世ヲ忍ブ病

者間ノ傳道ニ盡力ス。然ルニ大正七年春其ノ妻ヲ失ヒ、愛別離苦ノ悲シミハ更ニ主ノ道ヘノ精進トナリ、都會ノ樂シミヲ捨テ以テ草津ニ來リ高〇千〇兄、管〇丈〇兄ト三人ニテ共同生活ヲ始ム。幾何モナクリー教母ニ見出サレテ聖バルナバ教會ニ入り、同年十二月教會委員トナリ、大正八年七月二十一日霜間ニ聖ステパノ館ノ落成ト共ニ第一代ノ會監トナル。時ニ病ノタメ双葉館ニ療養高須兄等ノ看護ヲ受ケ居タルモ主ノ爲ニ今ハ行カザルヲ得ズト病ヲ押しテ駕籠ニ乘リ行キテ其ノ責任ニ就ケリ。

聖バルナバ・ギルドノ役員タリシコト其他都合上全ク草津ヲ離ル、事能ハザリシヲ以テ爾後大平館（今ノ聖マリア館）ヨリ通勤ニテ會監事務ヲ執レリ。

大正九年十月二十八日聖ステパノ館會監ヲ辭シ、妻ヲ娶リ、大正十年一月十五日大平館ヨリ東雲館裏ニ引越シ命ヲ受ケテ毎週木曜日求道者及按手志願者ノ爲ノ準備會ヲ開キ之ヲ指導ス。求道者十名位ニシテ其中ニハ山〇善〇兄（〇〇チャンノ父）、鹽〇安〇兄姉（通稱小池）、西〇宇〇兄姉（島田）等モアリキ。大正十年三月二十一日聖ルセ館（舊双葉館）創立ト共ニ之ニ引越シ病弱者ノ看護ニ從事ス。大正十一年三月第二代ノ同館會監トナル。一般病弱者ノ外救助ヲ要スル者ヲ收容スル方針ヲ立テ教母ニ進言ス。斯クノ如クシテ醫院附屬病室ハ夫婦ホームトシテ年ト共ニ順調ナル發達ヲ遂グルニ至レリ。同兄ハ會監トシテ、又教會委員トシテ、又醫院ノ會計責任者トシテ、ギルドノ書記トシテ、各種ノ仕事ト責任ヲ一身ニ引受ケ、教母ノ片腕トシテ日夜繁忙ヲ極メ、而モ一意専心生クルモ死ヌルモ主ノ爲トテ斷エテ倦ム事無カリキ。

偶々大正十四年三月咽喉ヲ痛メテヨリ健康ヲ損ヒ、翌十五年一月氣候溫暖ナル處ニテ病ヲ養ハン事ヲ欲シ、リー教母ノ許シヲ得テ一月九日草津ヲ出發シ上京、下谷區初音町山〇方ニ靜養ス。サレド都會雜踏ノ地塵埃濛々タル處靜養ニ適スベクモアラス、豫期ニ反シテ其衰弱ハ加ハル一方ナルヲ以テ三月十九日再ビ歸草シ五月二十七日

全ク床ニ就キ、遂ニ大正十五年六月二十五日美シキ勝利ノ永眠ヲナセリ。同氏ハ極メテ忍耐強キ人ニテ且ツ大量アリ。來草スルヤ聖バルナバ教會ノ爲ニ寢食ヲ忘レテ盡力シ、男子ホームノ創設セラレ、ヤ其第一代舎監タリ。其頃世ヲ擧ゲテ不景氣風ニ滿サレ、從ツテ館ノ會計困難ニシテ館員ト共ニ具ニ辛酸ヲ嘗ム。聖ルセ館ノ創立セラレ、ヤ又入りテ舎監トナリ、其ノ間聖マリヤ館、其ノ他ホームトナルベキ家屋ノ購入、聖マーガレット館、聖ジャイルス館、聖ヒューベルト館等ノ建築ニ携ハル。

晩年兎角健康勝レザリシガ強ヒテ立チ、聖堂建築ヲ最後ノ奉仕ト言ヒテ毎日其工事ヲ督セリ。

一度永眠ノ報傳ハルヤ主ニ在ル兄姉ノ弔問踵ヲ接シ其ノ葬式ハ頗ル盛大ナリキ。教會委員會ノ決議ニヨリ高○利○兄ハ聖ステパノ館舎監時代ニツキ、又野○熊○兄ハ聖ルセ館舎監時代及其永眠前後ニツキ、又入○清○兄ハ教會委員、青年會副會長、ギルド書記トシテノ功勞ニツキ、又最後ニリー教母ヨリ生前ノ勞績ト堅キ信仰ニツキ夫々證詞アリキ。贈ラレタル聖言ニ曰ク「弱キヲ省ミル者ハ幸福ナリ」ト、英靈安ラカニ我教會墓地ニ眠レリ。

### 第九十三 聖リベカ館

(A) 野○熊○兄

大正十五年六月前項記述ノ如ク福場舎監永眠セルヲ以テ其ノ後任トシテ、野○熊○兄選バレテ第三代舎監トナル。同兄ハ○○縣○○郡○○村ノ人、明治三十年十月三十日ノ生レ、弱冠病ヲ得テ來草双葉館ニテ番頭ヲシタル事モアリ、後其長屋ニ世帯ヲ持チ木炭製造ニ從事シ居タリシガ信仰ヲ求メテ我教會ノ一員トナリ、大正十二年二月二十八日福○紫○兄ノ導キニ依リ聖ルセ館ノ働人トシテ入館ス、ヨク舎監ヲ助ケ、又其後ヲ襲ヒテ舎監トナリタル後モ一意専心館ノ爲ヲ圖リ良ク館ヲ統轄シ前後六年舎監タリ。又教會委員トナリ青年會ノ幹事トナリ、夫

等ノ方面ニモ少カラズ貢獻ス。性質頑固ト言ハル、程意志強固ニシテ、一度決心セシ事ハ必ズ之ヲ成シ遂ゲル底力アリ。サレド常ニ館員ヲ愛シ、折ニ叶フ指導ヲ與ヘテ其前途ニ光明ヲ失ハシムル事無カリキ。

サテ、同館ニハ光明ノ湯（一名底無シノ湯）トテ双葉館以來同館ノ下ニ自然ニ湧出スル湯泉アリシガ、深クシテ穴藏ニ入ルガ如ク又不潔ニナリ易ク且ツ温度低クシテ浴槽モ朽廢セルヲ以テ、昭和三年九月改造工事ヲ施シ新浴槽三箇ヲ作レリ。

尙、大正十一年ヨリ全十三年ニ至ル聖ルセ館人員左表ノ如シ、

大正十一年度 收容人員九名

大正十二年度 收容人員十五名

大正十三年度 收容人員十七名

(B) 聖リベカ館

昭和五年十二月管○丈○兄男子ホーム入館ノ爲、同兄ノ願ニヨリ、リー教母ハ聖ルセ館ノ隣接地ナル草津甲五九五ノ三ノ平屋家屋ヲ土地共二千五百圓ニテ買收シ、之ヲ聖リベカ館ト名付ケタリ。六間（六六六六四半）、本館ハ専ラ寄邊ナキ旅人ノ一時救護所、又在方面ヨリ物ヲ賣リニ來ル者ノ休憩所ニ充テ、又教會ノ傳道文庫及ビ聖書販賣部等ヲ此處ニ移シタリ。聖ルセ館ノ管轄下ニ置ケリ。昭和五年度末ニ於ケル夫婦ホーム館員數二十二名（男子十一、女子十一）ナリキ。

第九十四 夫婦ホームノ解散

昭和五年秋頃ヨリ舎監野○熊○兄健康ヲ害シ聖バルナバ醫院ニ入院、翌六年十二月十日遂ニ勝利ヲ以テ永眠シタレバ、後任舎監トシテ望○健○兄舉ゲラレ、蓮○良○兄之ヲ助ク。然ル處館員中其統率ニ<sup>アキキ</sup>嫌ラザル者アリ。新任<sup>ゾウゾウ</sup>勿々ノ際トテ兎角意ノ如クナラズ、且ツ館内外ノ一部中夫婦收容館ノ共同生活ハ反ツテ不自然ナリ、宜シク此際一夫婦ヲ一單位トシテ別々ニ生活スル様變改スルヲ可トセン等ト唱フル者モアリテ、六年六月限り夫婦ホームヲ解消スルコト、ナリ館員ハ準ホームニ編入シ從ツテ準ホーム舎監相○鎔○兄之ヲ責任者トナレリ。然シテ聖ルセ館ハ準ホームノ病室トシテ夫婦者中二人共弱クシテ世帯<sup>レコトイ</sup>ヲ營ミ難キ者ノミヲ收容シ、中○光○兄看護長トシテノ責任ヲ命ゼラレタリ。又聖リベカ館ハ聖ヤコブ館ト改名シ、旅人ノ爲ノ一室ヲ除キ各室ヲ準ホームノ爲ニ與ヘタレバ主トシテ聖ルセ館員ニシテ聖ルセ館ニ留ル事ヲ欲セザル者移リ來リテ生活セリ。

夫婦ホームハ大正十一年四月一日開館以來九年二ヶ月ナリ。爾來此ホームノ館員ハ概ネ入館直前迄部落ニ住シテ世帯ヲ當ミ居タル關係上、體力並財力ヲ消耗シタル後入館スル者多ク、爲ニ一般ニ病弱ニシテ他ノ獨身ホームノ如ク教會又ハミッシヨ<sup>ン</sup>事業ニ働人ヲ送ル事ハ困難ナリシモ、代禱其他ノ奉仕ニ専心シ弱キ乍ラニ尙主ノ榮光ヲ顯セリ。

## 第十八章 上町下町路傍傳道

### 第九十五 上町路傍傳道

下町教會ノ隆盛ニ赴クト共ニ、上町ニ更ニ多クノ信者ヲ得ン事ハ多年ノ願望ナリキ。サレド諸種ノ妨ゲニ遇ヒテ傳道意ノ如クナラズ。曩<sup>オノ</sup>ニ大正四・五年頃ニハ光鹽會支部ヲ中心トシテ活潑ナル基督教運動行ハレ、前途頗ル

有望ナルヲ思ハシメシモ、支部長山中政三兄ノ上京等ト共ニ遽カニ衰微シ信仰ヲ離ル、者モ續出シタレド、下町ノ救靈事業年ト共ニ多忙ヲ極メ、之ニ主力ヲ注ギタル結果上町ノ群ニ多クヲ顧ル暇ナカリキ。然ルニ山中支部長業ヲ終ヘテ歸草ト共ニ勇敢ニ上町方面ノ傳道ヲモ試ムル事トナレリ。

即チ大正十一年一月十三日、日新館ノ下屋敷空地ヲ借受ケ、毎週一回山中師リ一教母共ニ到リテ路傍傳道ニ従事ス。健康地帯ナレバ病者ノ参加ハ反ツテ不快ト反感ヲ抱カシムトテ數名ノ輕症者ノミ聽衆ニ雜リテ陰ニ之ヲ援ケ氣勢ヲ添ヘン事ニ努メタリ。行人多クハ其足ヲ滯メ首ヲウナ垂レテ去ル。其魂ニ如何ナル事ヲ囁カレタルカ一見シテ明瞭ナリキ。サレド時ニ反抗者ナキニ非ズ、大正十二年八月ノ或夕湯畑廣場ニ於テ百名近クノ群衆ニ傳道說教中山中師ガ醉漢ノタメナグラレタルガ如キ其著例ナリ、サレド師良ク之ヲ忍ビ寛容ト忍耐ト同情ヲ以テ二ケ年ニ亘リ此路傍傳道ヲ繼續シ、上町人ニ對シテ基督教ノ正シキ理解ヲ與ヘ其靈性ニ良キ感化ヲ與ヘタリ。

### 第九十六 下町路傍傳道

先ヅ當時下町佛教徒ノ活躍振ヲ一瞥センニ、大正十年春橋〇初〇郎兄、宮〇米〇兄、大〇マ〇姉等發起人トナリ、林某ト言フ人ノ奉持シ居タル弘法大師ノ御本像ヲ讓リ受ケテ之ヲ中心トシテ當地ニ四國八十八箇所靈場ノ分靈地ヲ創リ病者慰安ノ地タラシメント欲シ、先ヅ大〇マ〇姉ハ之ニ要スル廣大ナル敷地ヲ買入レテ之ヲ寄進シ、又一般ニ一札所塔一基拾圓ニテ寄附ヲ募リ、同信者ハ大師講ナル講中ヲ組織シテ結束ヲ固フシ毎月二回以上定期集會ヲ開クノ外各家庭ニ集會ヲ催シ信仰ヲ激勵セリ。講中三十餘名ヲ算ス。

又一方眞宗大谷派ニ屬スル説教場ハ二十數名ノ熱心ナル門徒ヲ有シ、其平易ナル他力ノ教ヘハ大衆ノ耳裡ニ入り易ク、時ニ大饗宴ヲ設ケテ基督教徒以外ノ者ニハ振舞ヲナス等ノ事モアリ。下町宗教團體中最モ古キ傳統ヲ

有シ、侮ル可カラザル勢力アリ。大正十二年ニハ新四國八十八箇所ノ竣成スルアリ。斯クシテ佛教的信仰ハ同所建設ヲ動機トシテ大イニ振興セラレ、茲ニ基督教ノ傳道ハ著シク困難ヲ感ズルニ至レリ。此時ニ當リ我教會ニ於テモ亦新進ノ山中傳道師ヲ迎へ、且ツリバイバルノ跡ヲ享ケテ信者ノ信仰狀態ノ活氣アル事驚ク許リニテ、何レモ聖戰ノ勇士タラザルハナク盛ンニ部落傳道ヲ行ヒタリ。サレバ佛教徒トノ間ニ日ニ益々感情ノ衝突ヲ來スニ至レリ。偶々十三年秋一夜御座ノ湯前廣場ニテ大路傍傳道會ヲ催フシ、教會有志ハ交々立チテ痛烈深刻ナル形容ヲ交ヘテ證詞ヲナシタリシガ、就中關○秋○郎兄ノ證詞ノ如キハ盛ンニ新四國八十八箇所ヲ目シテ偶像ト嘲リ、且ツ入口地蔵尊ニ馬糞ヲ掛ケル等ノ事アリケレバ佛教派ノ憤怒其極ニ達シ、無禮ナルヤソ輩目ニ物見セテ吳レント大師講ノ猛者連二十餘名「ま○や」ニ階ニ集合熟議ヲコラス。「先ヅヤソ派ノ頭目ナル山中ヲ呼ブベシ。而シテ斯カル暴戾ヲ敢ヘテナス理由ヲ訊サン」ト、山中師ノ許ニ使者ヲ寄コセリ。山中師從容迫ラズ聊カモ臆スル所ナク會場ニ臨ム。裏ノ聖ビリボ館ニテハ高○利○兄初メ男子ホームノ面々、若シ事アラバ我首長ノ爲直チニ繰出スベク準備ヲ整ヘ鋭ク經過ヲ見守レリ。然ル處詰問ノ數々ニ對スル山中師ノ明快ナル解答ト終始溢ル、濫容トハ遂ニ攻撃ノ鋒ヲ挫キ、辨明ノ如何ニ依ツテハ袋叩キニセント隆々タル腕ヲ撫シ居タル連中モ聊カ拍子拔ケシタル形トナリ、豫想セラレタル雨モ嵐モ無クテ事終リヌ。

サレバ攻撃ノ先陣ヲ承リ激シキ論難ヲ加ヘタル元刑事大○一○兄ノ如キ大イニ憤慨シ「余ニノミ喋舌ラシメテ自ラハ其ノ陰ニ隠レントスル卑怯輩、初メノ申合セハ如何ニセシヤ」ト同僚ヲ難ジ、其信義頼ムニ足ラズ、寧ロ山中師ニ就キ彼ノ明快ナル教ヲ聽問セバヤト遂ニ基督教ニ投ジヤガテ熱心ナル信者トナレリ。又當時大師講中ノ主動者タリシ酒○筆○兄ノ如キモ此時ヨリ基督教ニ心ヲ傾ケ、遂ニ大正十五年九月舊主人神○コ○姉ノ主ニアル勝利ノ永眠ヲ動機トシテ教會ニ加ハリ忠實ナル信者トナレリ。斯クシテ下町ニ於ケル路傍傳道ハ先輩諸兄姉ノ力

強キ協力ニヨリ着々其效果ヲ收ムルヲ得タリ。

#### 第九十七 在方面ノ伝道

傳道精神ニ燃ユル教會ノ活動ハ單ニ草津上下兩町ノミニ局限セラル、事ナカリキ。大正七年八月ヨリ全十一年八月ニ至ル五ケ年間、六合村總鎮守ナル諏訪ノ原諏訪神社ノ祭禮ニ傳道ヲ行ヒシ事ハ既ニ述ベタル如シ。更ニ大正八年九月ニハ六合村方面ニ傳道ヲ試ミ、全九年十月十二日入山方面ニ傳道ヲナシ、全十年三月一日ニハ小雨及ビ太子村方面傳道ニ出張セリ。主トシテリー教母、山中師擔當シ或ハ泊リガケニテ出掛ク。信徒ハ熱心ニ祈リ輕症者ハ各戸毎ニ宗教トラクトヲ配布シ歩キ、又荷物運搬其他出來得ル限り其傳道ヲ助ケタリ。サレド上町傳道ノ時ノ如ク、健康地帯ノ傳道故直接傳道ニ携ハル事ヲ遠慮シタリ。各地共好感ヲ以テ迎ヘラレ且ツ相當ノ集會ヲ持チ、求道心ヲ起ス者數名アリシモ受洗ニ至ラズシテ中斷セリ。サレド其殘セル良キ感化ハ甚大ニシテ、眞ノ宗教ナル基督教ニ對スル理解大イニ深メラレタリキ。

#### 第十九章 家庭集會

##### 第九十八 明星團トノ關係

東京ニハ古クヨリ少カラザル病者アリシガ、明治ノ終リ頃癩瘰癧預防法ノ實施ト共ニ毎月行ハル、警官ノ戸口調査ニヨル發見ヲ免ル、爲、市内ノ病者ハ漸次郊外ニ向ツテ移動シ始メタリ。然シテ田端・日暮里方面ハ上野驛ニ近ク國元又ハ草津等トノ連絡及ビ旅行ニ便ナル事ト、此處ニ數軒ノ病人宿アリテ治療ヤ病者間ノ連絡ニ好都合ナリシ

カバ、期セズシテ此ノ地方ニ集リ、警視廳モ又病故ニ世ヲ忍ブ善良ナル病者ノ生活ニ同情ヲ表ハシ、取締リヲ緩ヤカニシ殆ンド黙許ノ態度ヲ取レリ。

サテ大正三年秋ヨリ冬ニカケテ田端方面ニ居住スル病者ナル信者ノ間ニリバイバル起リ、其信仰ニ熱烈ナル事驚嘆スベキモノアリシガ翌大正四年二月十一日紀元節ノ佳辰ヲトシテ、同地ニアル最モ熱心ナル信者等相謀リテ明星團ナル團體ヲ組織スル事トナリタリ。即チ發起人ハ安〇千〇郎、三上千代、服部ケサ、福〇紫〇、池〇ミ〇等ノ諸氏ニシテ、其目的ハ本病者タル故ニ母教會ニ出席スル能ハザル者相倚リ相助ケ教派・教會ノ如何ヲ問ハズ唯基督ノ御名ノ故ニ一團トナリ、以テ其信仰生活ヲ全フセントスルニアリ、「落穂」ナル機關雜誌ヲ發行セリ。サレド實際ハ指導者タル安〇千〇郎先生、三上千代女史等ガ聖書學院出身ノ傳道師ナルヲ以テ、東洋宣教會ホーリネス教會ニ屬スルモノト言フヲ得ベシ。

今本團ト草津ノ關係、就中我教會ノ前身タル光鹽會並ニ教會附屬事業ノ働人等ノ關係ヲ見ルニ、

一、大正三年十一月布哇<sup>ハワイ</sup>へ歸ル目的ヲ以テ上京セル宿〇薰兄ハ田端ニ於ケル病者ナル信者ノ熱心ナル信仰ト安倍氏ノ説教ニ感ジテ全ク心機一轉シ、旅程ヲ變更シテ遂ニ大正四年一月十八日再ビ草津ニ歸リ猛烈ニ傳道ヲ開始スルニ至レリ。

二、大正四年十一月四日安〇千〇郎師ハ光鹽會ノ招キニ應ジ來草、三週間ヨルダンホームニ滞在シ説教及聖書講義ヲナセリ。

三、團創立者ノ殆ンド全部ハ年ト共ニ來草、聖公會ニ投ジ教會並ニ附屬事業ノ爲良キ働キヲナセリ。即チ池〇ミ〇姉ハ大正五年十二月新設セラレタル婦人ホーム「愛ノ家庭」ニ入り、爾來婦人ホームノ中堅トナリ婦人會、愛友會等ノ幹部タリ。三上千代女史及ビ女醫服部ケサ女史ハリー先生ニ招カレテ大正六年十二月聖バルナバ

醫院開院ヨリ前後八年間事業ノ爲獻身セリ。福○紫○兄ハ大正七年五月來草シ、男子ホーム夫婦ホームノ創設ニ際シカヲ致シ又其初代舎監タリ。教會委員、青年會副會長等トシテ盡ス處頗ル大ナリ。

四 草津明星團。大正十年七月二日安○千○郎先生ノ來草ハ草津明星團祈禱ノ家（ホーリネス教會）ノ設立ニ關係アルヲ以テ特ニ重要ナリ。

先生ハ聖マリヤ館ニ三泊ノ後栗生勝○武○兄宅ニ移リシガ、先ニ當地ニ來リシ三上千代女史ハ服部女醫ト諳リ、先輩ナル安○師ノ爲ニ粟生ナル小堀氏所有菓葺一棟ヲ購入シテ之ヲ無料ニテ提供ス。出資者ノ名ニ因ミテ一般ニ「服部館」ト稱シタリ。

當教會有志ハ光鹽會時代ヨリ教ヲ受ケタル安倍師ノ來草ヲ喜ビ、盛大ナル歡迎會ヲ開ケリ。其席上安倍師ノ試ミタル挨拶ノ大要ハ左ノ如シ。「此度ノ來草ハ余ノ病症増進シテ健康地帯ニ滞リテ働ク事困難トナリタルヲ以テ、今後専ラ祈禱ニ餘生ヲ委ネン爲ナリ。サレバ最早ヤ別派ヲ以テ傳道スルノ意素ヨリ無シ。サレバ我命ノアラン限り此教會ニ屬シ、聖公會ノ爲ニ盡シ度シ云々」。斯クノ如クシテ自ラ祈禱團體タル聖バルナバ・ギルドニ入會シ祈禱生活ノ第一歩ニ入り、リー女史トモ互ニ往復シ、招キ招カレテ聖名ノ爲ニ盡力セリ。

然ル處全大正十年五月東京淀橋ニ開カレタルホーリネス教會年會ニ出席シタル高○千○兄、橋○貞○兄、岡本兄等ハ大イニ惠マレテ狂喜セル詩人ノ如ク歸草、其後引續キ教會ニテ起レルリバイバルノ影響ヲ受ケテ更ニ燃サレタレバ、遂ニ其熱情迸リ、嚴肅ナル儀式ヲ重ンズル聖公會ノ傳統ニ慄<sup>アキマ</sup>ラズトナシ、安倍師ヲ中心トシテ舊田端明星團ホーリネス派ノ者ノミノ集會ヲ持タン事ヲ熱望スルアリ。偶々全大正十年十二月六日東洋宣教會ノ創始者ニシテ最高指導者タル監督中田重治師塩崎婦人傳道師同伴來草シ、聖マリヤ館ニ於テ監督二回、鹽崎女史一回説教ヲナシテヨリ、ホーリネス派ノ分立運動愈々猛烈トナリ、監督ノ歸京後幾何モ無ク遂ニ運動ハ具體

化シ、之ヲ書面ニテ中田監督ニ告ゲ、大正十一年十二月七日粟生ナル安倍師宅ニ前記高石兄、橋川兄、岡本兄等參集シ鳩首協議ノ結果、茲ニ草津明星團ヲ結成スルノ議成レリ。然シテ舊明星團出身ノ者ニ對シテハ悉ク之ニ參加セン事ヲ切ニ要望シタリシガ、既ニ聖公會ニ轉ジ有力且ツ重要ナル信徒タリシ三上千代女史、服部ケサ女史、幅○紫○兄、池○ミ○姉、井○タ○姉ノ五名ハ頑トシテ之ヲ聽カズ、反ツテ先輩安倍師來草ノ目ニ反スル事、來草當時今後別派ヲ立テ傳道スルノ意無シト言ヘル公約ニモ反スル事等ヲ説イテ極力之ヲ思ヒ出サシムル爲ニ努力セリ。就中三上女史ノ如キハ一部ニテハ之ヲ援助シ其創立ヲ容易ナラシメタリトノ説アリシガ、之ハ誤解ニテ實ハ最モ頑強ニ反對シ、遂ニ持前ノ氣象ヲ出シテ痛烈ニ論難攻撃シタル一人ナリキ。女史ハ此時ヨリ此問題ニ關聯シ且ツ女史ノ意見ヲ容レズシテ之ヲ許可シタル中田監督トモ斷然其師弟關係ヲ絶ツニ至レリ。

此時ヨリ兩者ハ全ク別個ノ指導精神ニ依テ動キ、公ノ一致ハ破レタリ。サレド個人的交遊ハ急ニ斷タレ難ク依然トシテ、互ニ家庭集會或ハ祈禱會ヲ持ツ事モアリキ。全大正十二年八月中旬、中田監督ノ令息ニシテリバイバル聖歌ノ著者トシテ有名ナル中田羽後師數名ノ宣教師ト共ニ來草シタル際ノ如キモ、兩派有志合同ニテ聖マリア館ニ聖歌會ヲ開催シ、リバイバル聖歌六番、百五十番等ノ教授ヲ受ケタリ。此集會ハ會衆一百名ヲ超ヘ頗ル盛會ナリキ。

然ルニ大正十五年冬安倍師ハ粟生ヨリ上草シ、東雲館裏ニ二軒ノ家ヲ借り入レ、茲ニ草津明星團ノ本部ヲ据エテ盛ンニ傳道ヲ開始シ、或ハ救助ヲ要スル者ノ爲ニハホームヲ設クル等頗ル積極的活動ヲ開始シタレバ兩者對立ノ形トナリ或信者ノ如キ互ニ自派ヲ勝レリトシ他ヲ攻撃スルノ奇現象ヲ呈シ、他ノ地方ニモ屢々アル如ク兩者共ニ救靈上ノ困難ヲ感ズル事サヘ生ズルニ至レリ。

思フニ主ハ一ツ救靈ハ一ツナレド、或一部ノ信念ヲ異ニスル出發點ヨリ出デタルモノナレバ、普公原理ニ基ク聖公會ノ信條教理ヲ理解シ能ハザルニ於テハ甚ダ遺憾ナレ共信仰ニ立ツ以上自ラ信ズル處ニ從ツテ行動スル外道ナカリシナリ。

### 第九十九 霜間愛友會ノ解散

草津明星團ノ結成ニヨリ解散ノ憂目ヲ見タルハ霜間愛友會ナリ。愛友會ハ霜間ニ聖ステバノ館設ケラレ全館員ノ參加ニヨリ著シク積極的トナリ、高〇千〇兄、宿〇薰兄、高〇利〇兄等ヲ中心トシテ愈々力強キ信仰團體トナリ逐年會員モ増加シ、前記ノ如ク諏訪神社祭禮傳道ヤ附近ノ村落傳道ニモ出掛ケ、或ハ道路ノ修繕其他ノ奉仕方面ニモ活動シ、内ナル信仰ト外ナル愛ノ行爲ニヨリテ榮光ヲ顯シ來リシガ、大正十一年十二月七日程近キ栗生ニ於テ會長高〇千〇兄等安〇千〇郎師ヲ中心トシテ草津明星團ヲ結成シ、東洋宣教會派ノ旗幟ヲ鮮明ニシタルヲ以テ、會員頗ル驚動セリ。元來本會ハ安〇千〇郎師、山中政三師、コンウオール・リー師交互ニ集會ニ出席シテ靈的指導ヲ與ヘ居タルモ、此事ニヨリテ會ノ指導者ガ二ツニ分レ一ハ聖公會一ハホーリネス教會ト其教派ヲ明カニシ、指導方針ヲ異ニスル以上愛友會自體何レノ教派ニ屬スベキカ其去就ニ迷ヘリ。サレバトテ今ハ何レカニ其所屬ヲ決セザルベカラズ。而モ他ノ信仰ヲ束縛シ、或ハ強制スル事能ハネバ此際寧ろ愛友會ヲ解散シテ會員各自ノ自由意志ニ基キ其好ム處ニ就クヲ可トストテ大正十二年三月總會ヲ開キテ遂ニ解散ノ事ヲ可決セリ。

大正七年三月們〇清〇兄、高〇千〇兄等ノ盡力ニ依リテ栗生ヲ中心トスル諸兄弟ノ爲ニ設ケラレ、草津病者傳道ニ多クノ貢獻ヲ殘セル本會ハ、滿五歳ヲ以テ費キ存在ノ終リヲ告ゲタリ。會ノ統制ヨリ離レタル會員自身ハ深ク省ミ靜思ト祈禱ヲ通シテ示サレタル最善ノ途ヲ選バザルベカラザル重大ノ時機ニ當面シタレバ、冷エタル者ハ

熱セラレ眠レル者ハ覺醒セラル、ノ現象ヲ呈セリ。

第百 聖バルナバ祈禱團

愛友會ノ解散後幾何モ無ク、教會信徒有志ノ間ニ於テ先ノ愛友會ニ代ルベキ信者ノ團體ヲ創<sup>ツク</sup>リテハトノ議起リ大正十二年四月頃人○清○兄、相○鎰○兄、高○利○兄等主トナリ、聖バルナバ祈禱團ナルモノヲ組織セリ。此運動ニ參加シ團員トナリタル者約十四・五名、就中舊愛友會員多シ、團員ハ必ズ聖公會ノ信者タル事ヲ要シ、東洋宣教會派ノ者ハ入團セシメズ。毎月一回以上定時祈禱會ヲ各團員ノ家庭ニテ順ニ開ク。夏ハ好シク野外祈禱會ヲ催シ、團員ハ必ズ示サレタル祈禱ノ題目一ツ以上ヲ携ヘテ祈禱會ニ出席スルノ義務ヲ有ス。大正十二年ノ暮ニハ團員三十名ニ達シ恵マレタル集會ヲ繼續セリ。然ル處本團ハ元々愛友會ノ解散ニヨリ主トシテ舊愛友會員中聖公會ニ屬スル事ヲ欲セザル者幾何アリヤヲ確知スル從ナル目的モアリ、又教會ニハ類似ノ目的ヲ有スル他ノ團體例ヘバ青年會、ギルド等モアル事ナレバ、自然重複スル處モアリテ十三年ノ暮自然消滅ノ形トナリ、團員ハ夫々青年會、ギルド等ニ轉屬シ専ラ其ノ本分ヲ盡ス事トナレリ。

第百一 傳道隊

大正十一年六月リー教母ハ井○元○、杉○淨○二兄ニ命ジテ、信者中病氣ノ爲或ハ家事ノ都合上教會ニ出席シ能ハザル者、又ハ殆ンド出席セズ信者タル自覺ヲ失ヒ恩恵ヨリ墜落スルノ危險ニアル者ヲ導ク爲家庭訪問ヲナサシム。而シテ之ヲ傳道隊ト名付ケタリ。二名共ホーム外ニアル最モ忠實ナル信者ニシテ教會委員タリ。人々就中<sup>オカシク</sup>病床ニアル者ハ心ヨリ喜ビテ之ヲ迎ヘタリ。聖書ヲ讀ミ祈禱ヲナシ、共ニ主ヲ讚美スルヲ例トス。全十一年十二

月ヨリ聖ルセ館ノ高橋兄、並〇藤〇兄等モ之ニ加ハリカヲ添ヘタレバ、大イニ其效果ヲ擧ゲ得タリ。今日ノ訪問隊ト略々同一性質ノモノナリトス。

第二百二 家庭集會

教會以外ニ各家庭ヲ中心トシテ家族的ニ集會ヲナシ、同信者相親シミ、更ニ個人的關係ヲ辿リテ未信者ヲ導キ或ハ又諸種ノ行懸リ上教會ノ敷居高キヲ感ズル者ニ眞理ヘノ手引ト獎勵ヲ與フル等、之ヲ良キ傳道ノ機會トナス事ハ既ニ大正七年頃ヨリ試ミラレタル事ナリ。殊ニ冬季積雪ノ頃ノ如キ人々ハ無爲徒食唯炬燵ヲ圍ミテ雜談喫茶或ハ碁將棋等ニ耽ルヲ常トス。サレバ斯カル時季ヲ利用シテ靈的集會ヲ持ツ事ハ極メテ望マシキ事ナリキ。

家庭集會ヲ規則的ニ開催スルノ案ハ大正十一年五月四日教會委員會ニテ可決セラレタルモノニシテ、四季ヲ通シテ毎月一回ホーム以外ノ信者ノ家庭ニテ之ヲ催ス事トナレリ。サレド夏季ハ一般勞働者等出席困難ナル事情アリ。旁々大正十四年ヨリハクリスマスヨリ復活ニ至ル迄ノ期間ニ限り、毎週木曜午後六時ヨリ之ヲ行フ事トナレリ。未信者ニトリテハ教會ニ行クヨリモ更ニ行キ易ク感ジ、何レノ家庭ニ於ケル集會モ信者ノ個人的誘引ト相俟ッテ多クノ會衆ヲ得、屢々全來會者ヲ容ル、能ハズ、或ハ會衆ノ重量ニ耐エカネテ根太ノ落チタル事、建具ノ不具合ヲ來セル事等アリ。爲ニホームヨリノ參會者ニ制限ヲ加フルノ止ムナキニ至レリ。聖歌、聖書、信者ノ證詞感想、リー教母或ハ山中師ノ勸告アルヲ常トス。此ノ制度ハ今日ニ至ル迄採用セラレ、部落信者ノ爲又部落傳道ノ爲ニ重要ナル役割ヲ演ジツ、アリ。

第三百 醫師佐藤貞雄先生

大正十三年十一月服部女醫ノ後任トシテ迎ヘラレタルハ佐藤貞雄先生ナリ。先生ハ後備役陸軍一等軍醫ニシテ日清日露兩役ニ出征シテ功アリ。正六位勲四等ノ肩書ヲ有ス。舊熊本醫學校ノ出身、全校教授長田重雄氏ニ見出サレ、明治二十五年東京築地聖路加國際病院ノ前身愛惠醫院ニ招カレテ定住醫師タリ。明治二十七年日清ノ役勃發シ、軍醫トシテ出征ス。凱旋後ハ長野慈惠醫院ニ勤務シタリシガ、明治三十七年日露ノ役起ルヤ、軍醫拂底ノ爲再ビ召集セラレテ滿洲ニ出征セリ。平和克復ト共ニ富士製絲會社ノ社醫トシテ久シク勤務シ、後警視廳衛生局ニ轉ジ帝都ノ衛生行政ニ携ハル。極メテ篤信ノ士ニシテ、軍隊ニ奉職中モ診療ノ傍ラ兵士等ニ傳道ヲナスヲ喜ビ、其ノ感化ニ依リテ信者トナリシモノモ尠カラズト言フ。警視廳ヲ退職後ハ茨城縣下ノ或病院ニテ勤務シ來リシガ、偶々或ル富有ナル患者ノ瘡エ難キ皮膚病ヲ全癒セシメタル事ヨリ、此人ハ多額ノ開業資金ノ提出ヲ申出タレバ、之ヲ以テ新醫院開業ノ筈ナリシモ、大正十三年九月長老貫民之介師ニヨッテ草津ナル病者間ノ働キヲ乞ハレタレバ、我ニハ斯カル働キコソ相應ハシケレトテ早速快諾シ、サキノ計畫ヲ悉ク捨テ、大正十三年十一月家族ト共ニ來任セラレタルナリ。

氏ハ常ニ曰ヘラク「信仰第一、醫治ハ第二ナリ。我ガ與フル藥劑ト雖モ、信ジテ癒サル事ヲ疑ハズ、之ヲ服用スル時ハ必ズ驚嘆スベキ效顯ヲ現サン」ト。未ダ神ヲ知ラザル受診者來ル時ハ、懇切ナル診察ノ傍必ズ其信仰ニ入ルベキヲ勸ム。招カレテ病者ノ枕頭ニ到レバ、先ズ直チニ祈リ然ル後徐<sup>たゞ</sup>ロニ診察ニ着手ス。各種靈的集會ニハ好シク出席シ、又屢々傳道説教ヲ分擔シテ未信者ノ爲ニ教フル處親切ヲ極メタリ。

最初一ケ年間ノ契約ナリシモ病者ノ信頼ヲ得テ、大正十四年十一月及ビ昭和元年十一月ノ二回契約ヲ更新セリ。サレド既ニ老齡ニ達シ、健康上夜間及急病患者ノ往診等困難ヲ感ジ、且ツ其他ノ事情モアリテ昭和二年十一月二

十七日ヲ以テ當院ヲ辭シ、本郡中之条町白十字病院長ニ轉セラレタリ。氏ハ短歌、謡曲、劍舞等ニ趣味ヲ有シ、殊ニ短歌ニ長ジタリ。或ル有名ナル短歌會ニテ嘗テ最高賞ヲ得タル句ハ左ノ如シ。

古ノ人モ今モヤ住ムラント天津御空ノ奥ゾ床シキ

又聖ステパノ館員退職陸軍騎兵大尉戸○維○兄ト相親シク、其裏疵ヲ醫スル爲下脚切斷手術ヲ行ヒタル處、後出血ノ爲經過急轉惡化シ其靈遂ニ天ニ移サレタルヲ診ルヤ、

色褪セテ霜ハオクトモ散ラマシヲ折リテ甲斐ナキ我ガ紅葉哉

ト詠ジテ泣ケリト。

妻ノ内職ニモトテ賣藥ノ官許ヲ得タル秘法アリ。一ハ「家寶」ト稱シ清涼軟膏劑、一ハ「七生散」ト名付ケ大楓子製劑、他ノ一ハ「神經散」ト稱シアスピリンヲ主劑トス。其處方ハ秘密ナリ。サレド何レモ其效顯著ニテ病者間ニ愛用セラレ、同氏ノ去リシ後モ永ク用ヒラレタリ。

佐藤醫師ノ在任三ヶ年ノ間、醫院會計ヲ司リ、或ハ診療、注射、外科、藥局等ノ業務ニ從事シタル者ハ左ノ如シ、

福○紫○兄、高○利○兄、福○唯○兄、上○作○郎兄、大○賢○郎兄、光○正○兄、木○嘉○兄、井○タ○姉。

#### 第百四 醫師中村時太郎先生

佐藤貞雄先生ノ後任中村時太郎先生モ亦軍隊出身ナリ。日清ノ役ニハ看護卒トシテ出征シ、精勤軍務ニ勉勵シタレバ、軍醫拂底ノ折柄看護長ヨリ更ニ累進シテ三等軍醫トナル。東京ニ開業シ居タルニ大正十二年九月一日大震災ニ遇ヒ、僅カニ身ヲ以テ遁ル。時ニ上京セル涼風館主高田儔氏ニ導カレテ來草シ、同館別館ニテ相○氏ト共

同ニテ小醫院ヲ開キ、昭和二年十一月同館ガリー女史ニヨリテ買ヒ取ラル、ヤ上町地藏坂上ニ一居ヲ構ヘテ開業セリ。然ル處佐藤醫師後任トシテノ交渉ヲ快諾シ、一ケ年ノ契約ヲ以テ毎週三回（月水金）ノ午前中出勤シ、其他急患アル毎ニ往診スルノ定メナリシ。

大槻子療法ノ外金屬性ノ或靜脈注射藥ヲ發見シタリトテ之ヲ應用シ、又連鎖狀葡萄狀兩球菌ワクチン諸血精類等ヲ好ンデ用ヒラレタリ。

其ノ性或ハ軍隊のト言ハンカ、我儘ナル患者ニハ一喝ヲ以テ酬<sup>ウケ</sup>ヒ、治療上ノ命ヲ聞カザル者ニハ其治療ヲ中止スル等ノ事アリ。サレド一般ニ病者ヲ愛シ、機嫌良キ時ハ途上ニ行逢フモ立停リテ脈ヲトリ眼ヲ診シ慰藉スルヲ常トセリ。

昭和三年十一月契約ヲ更新シ、更ニ一ケ年醫療ノ責任者タリ。然ル處昭和四年一月醫院ノ移轉新築案成リ、其落成ト共ニ專任ノ優秀ナル醫師ヲ要スルノ聲高ク、諸種ノ都合上昭和四年九月三十日限り契約滿期ト共ニ辭職セラレタリ。在任一年十ヶ月ナリ。當院奉職ヲ好機トシテ全家舉<sup>ウツ</sup>ツテ求道者トナラレシモ、受洗ニ至ラズシテ他ニ引越サレタリ。

（昭和四年十月以後醫院ノ移轉新築等ハ第三十二章以下ヲ參覽セラレタシ）。

## 第二十一章 準ホーム

病者夫婦ニシテ養育スベキ子供アル者、夫ニ死別シ幼児ヲ抱キテ路頭ニ迷フ者、夫ノミ發病シ妻其看護ノ爲離ル、能ハザル者、其他特種ナル事情ニテ獨身ホーム或ハ夫婦ホームニ入館スル事困難ナル者等ニシテ救助ヲ要スル者アリ。獨立セル家屋中一定ノ部屋ト一定ノ食費ヲ給シテ、其好ム處ニ從ヒ家族的生活ヲナサシム。

之等ヲ一括シテ準ホームト稱ス。

### 第二百五 聖オーガستنノ家

準ホーム中其創立ノ最モ古キハ聖オーガستنノ家ナリ。湯ノ澤區甲六〇〇ノ七ニアリ。八疊二室ヲ有スル木造平家ナリ。大正六年所有者佐○木○兄ノ永眠ニヨリテ後ニ殘リシハ三歳ニ六歳位ノ子供ノミニテ如何トモナス能ハズ。依ッテリ一教母之ヲ引取り、敷地ハ官有地ナリシカバ之ヲモ拂ヒ下ゲ、此ノ家ニ聖オーガستنノ家ト命名セリ。

長子本○善○ハ後親戚ニ引取ラレ、長女本○民○ハ聖マーガレット館ニ入りテ先崎ケサ姉ノ手ニ育テラル、事ニナリテ、聖オーガستنノ家ハ空家トナリシカバ、準ホームトシテ光鹽會創立者ノ一人タル櫛フネカ○清○兄ニ提供シ其ノ隣室ハ武○善○兄ノ家族ヲ受容レタリ。而シテ櫛原兄ガ昭和四年永眠シ、愛娘櫛○五○姉聖愛幼稚園保母ヲ辭シ結婚セルヲ以テ、其後ハ森○清兄居住ヲ許サレ各々其家庭ヲ營ミ以テ今日ニ至ル。

### 第百六 聖ボーロノ家

此ノ家ハ大正十四年ノ春聖ピリポ館ノ擴張ノ爲、白○忠○兄ヨリ二千五百圓ニテ買入レタルモノナリ。木造平家一棟（四疊一間、六疊四間、八疊二間ノ計七間）總坪數一〇五坪、湯ノ澤甲五九五ノ二ナリ。

此ノ家屋ハ元三島屋ト稱シ、其主人關兄ハ草津下町草分ケノ一人ナリキ。大正十四年ノ十二月政府ニ對スル事業報告ノ都合上教母留守ナリシヲ以テ、高○利○兄假ニ聖ボーロ館ト命名シタルニ、教母歸來後之ヲ聞キ最モ相應ハシキ名ナリトテ館名ヲ聖ボーロ館ト確定ス。

西側ノ一室ノミヲ男子ホームノ別室トシ、霜間聖ステバノ館員ノ上草シタル折ノ休憩所トシ、久シク數名ノ聖ビリボ館員交代ニ居住シ、他ノ二室ハ準ホームトシ、餘ハ貸間トセリ。

昭和二年十二月草津聖ステバノ館成リ、男子ホーム擴張セラレテヨリ此ノ一室ヲモ準ホームノ爲ニ提供セラレタリ。

此家ノ前ニハ「白鬚ノ湯」トテ古クヨリノ温泉湧出口アリ、更ニ縁ノ下ヨリ多量ノ温泉湧出シ、導カレテ御座ノ湯ニ入ル。

本館ニ家庭ヲ營ム事ヲ得タル兄弟ハ遠○啓○兄弟（大正十五年春ヨリ昭和六年六月迄）、伊○滝○兄弟、松○ス○姉及ビ其家族、金○一○兄弟等ナリ。部落ノ略々中央ニ位シ、教會及浴場ニモ近ク生活至便ナリ。

第七百 聖アンノ家

此家ハ下町ノ東端ニ近ク、準ホーム中最モ新シキ家屋ナリ。

聖ポーロノ家（夫婦者ホーム別館）



大正十三年一月所有者野○夏○郎兄其妻ヲ失ヒ、盲目ナルヲ以テ家計ヲ立ツル能ハズ。依テ男子ホームニ入館シ専ラ靈的修養ニ身ヲ委ネントス。然シテ其家屋處分ニ際シ、若シリ―教母ガ野口兄ノ當分ノ小遣錢トシテ必要ナル金三百圓ヲ下サルナラバ、此ノ家屋ヲ教母ニ獻ゲント申出タリ。サレバ此金額ノ與ヘラレン爲ニリ―教母初メ一同熱心ニ祈リ居タリシニ、偶然確答ヲナスベキ期日ニ當リテ米國キャロライナ州フレノ市、エ・エル・ベ―カ夫人ヨリ來簡アリ。開封シケルニ二百五十弗（約三百圓）ノ爲替券現ハレ、即チ全夫人ノ好意ニヨリテ當面ノ問題ヲ解決シ得タレバ一同祈禱ノ應驗ヲ喜ビ主ニ感謝セリ。

六・八疊二室木造平家ニシテ高○要○郎兄ノ家族居住ヲ許サル。

第百八 聖モニカノ家

大正十二年十一月主人江○伊○吉兄永眠ニ付キ、六・三疊二室木造平家一棟及其敷地ヲリ―教母ニ捧ゲ、リ―教母ハ其家族ヲ支ヘタルモノトス。



聖アンノ家（準ホーム）

聖アンノ家（準ホーム）

三子中長女ハ聖マーガレット館ニ入り、目下青森市蒲町三國篤子女史ノ許ニテ實科女學校ニ通學中。長子ハ母ト共ニ家ニ在リ、次子ハ聖テモテ館ニ在リ。

第百九 聖ルカノ家

此ノ家ハ昭和二年ヨリ始マル。湯之澤五百九十八番地ノ五號地ニアリ。當時男子ホームノ擴張ト共ニ、草津ニ於テ温泉ニ近キ地點ニ重症者病室ノ與ヘラレン事ヲ切ニ祈リ居タル折柄、御座ノ湯ノ前通稱松金事三〇田〇造氏料理屋ヲ開業スル目的ヲ以テ二階ヲ築造シ、愈々開業セントスルヲ見テ、隣家ナル聖ボーロ館並ニ直グ上ナル教會ニ對スル影響等ヲモ考慮シタル結果、遂ニ之ヲ買收スルニ決シ、同氏ト再三交渉ノ結果金一千三百圓ニテ昭和二年六月賣買契約成立シタリ。上ガ六疊二室下ガ六疊ニ臺所付キ木造二階建ナリ。

醫者タリシ使徒聖ルカノ名ニ因ミ、其名モ聖ルカ館ト命名シ、階上ヲ病室トシ階下ヲ看護人ノ居室トシ、若干ノ模様替ヘヲナシ、男子ホームノ病室トシテ板〇昌〇兄

聖ルカノ家（準ホーム）



聖ルカ館（準ホーム）

小○野○七兄等四人ノ重症者ヲ收容シ、吉○又○門、高○一○ノ兩兄之ガ看護ニ任ズ。

然ル處、同年十二月男子ホームトシテ元涼風館ガ與ヘラレ、全館ハ男子ホーム全員ヲ收容スルニ十分ナル多クノ室ヲ有セシカバ皆之ニ移リ、聖ルカ館ハ空キタリ。依テ當時下ノ原ニ居住セル近○久○兄姉、中○柳○兄姉ノ四名リー教母ニ招カレ、全年十二月二十日來リ住ム。越エテ昭和三年八月十四日佐○平○郎兄姉二階ニ住ム事トナリ、三夫婦共同生活ヲナス。近○久○兄昭和三年八月永眠セルヲ以テ、室ノ都合上中山・佐藤ノ二夫婦ノミ住ミタリ。昭和六年八月佐○平○郎兄永眠ニヨリ其跡ニ南○三兄移リ、以テ現今ニ至ル。

## 第二十二章 未感染兒童ホーム

### 第一百 聖マーガレット館

病者治療事業ニ随伴スルハ病者夫婦ノ間ニ生レタル子供ノ問題ナリ。病者ノ多クハ家族及ビ親戚ノ名譽ノ爲、故郷トノ往來ヲ絶チ或ハ本籍地ヲ偽リ現住地ヲ隠シ偽名ヲ用フル等私カナル生活ヲナス爲、一旦病者ナル兩親死亡シタル場合、後ニ殘レル子供ヲ引取りテ養育スル者無シ。或ハ又肉體のニ自分一人ノ體サヘ持テ餘スニ至レル時、經濟的ニ子供ヲ養育スルノ資力無キニ至レル時、罪無キ幼兒ハ悲シキ運命ノ犠牲トナラザルヲ得ズ。リー教母亦斯クノ如キ家庭悲劇ヲ見テ、愛憐ノ情禁ズル能ハズ。如何ニモシテ之ヲ救濟セント願ヘリ。

草津教友第十號ニ依レバ、リー教母來草後間モ無キ大正六年三月分代禱會代禱題目第三代禱ニモ「幼兒ノ家庭ノ爲」ト題シ、憐レナル兒童ヲ收容シ之ヲ養育スルニ適當ナル方法ト場所ノ與ヘラレン事ノ爲ニ祈リタルヲ知ル。此時ヨリ此種ノ祈禱ト共ニ實現ヘノ努力ハ繼續セラレタリ。サレド婦人ホームノ創立、男子ホームノ創立及ビ

之ガ經營、多忙ナル救靈事業等ノ爲、獨立セルホームヲ設クルノ機運熟セズ。斯カル必要ニ當面スルヤリ―教母ハ百方奔走シテ養育者ヲ求メ、或ハ既設ホームニ其養育ヲ託スル等、幼キ靈ノ爲ニ遺憾ナカラン事ヲ期セリ。

大正十二年夏先崎ケサ姉草津ノ働キヲ欲シ來投スルヤ、兒童養育ノ責任ヲ命ジ四名ノ子供ヲ其手ニ委ネタリ。

サレド未ダ借家住ヒニテ定マリタルホーム無カリキ。斯カル間ニ一ノ聲アリ。即チ病者ノ家庭ヨリ未感染兒童ヲ分離セヨトノ聲ナリ。蓋シ近世醫學ノ進歩ニ伴ヒ「緇ハ遺傳ニ非ズシテ傳染ナリ」トノ學說確立セラレ、從ツテ病者ト同棲スルニ歳ヨリ十二歳位ノ幼兒並ニ兒童ハ其皮膚脆弱ニシテ抵抗力極メテ少キガ故ニ、遅カレ早カレ病毒ノ感染ヨリ免ル、事能ハズ。サレバ人情論ヲ捨テ、其ノ恐ルベキ結果ヲ豫防シ幸福ニ導クベキ人道主義的立場ヨリ、一日モ速カニ之等未感染兒童ヲ其家庭ヨリ分離セヨトナリ。子供ヲ思フ親ノ情愛ハ古今東西異ル事無ケレド、セメテ既ニ兩親ヲ喪ヒタル子供等ノタメ又子女ノ幸福ヲ願フトモ肉體的經濟的ニ如何トモ爲シ能ハザル人々ノ爲ニモ、斯カル幼兒達ヲ收容スベキホームノ必要ハ迫レリ。偶々大正十二年秋米國ナルリチャード・マーチ・ホー夫人 (Mrs. Richard March Hoe) 草津ノ事業ニ興味ヲ唆ラレ、之等兒童ニ深く同情シ、其愛嬢マーガレット (Miss Margaret) ノ永眠ヲ記念シ、金一萬圓ヲ寄附シ來レリ。依テリ―教母初メ一同大イニ喜び感謝ヲ捧ゲ新ホーム建設ノ設計ヲ定メタリ。大正十二年十二月「慈愛ノ家」ノ西方松林ノ間ニ敷地ヲ定メ、此處ニ木造二階建一棟ヲ建造スベク、總工費八千五百圓ニテ小山大工トノ間ニ契約成立セリ。

然ルニ工事半ニテ契約ノ金額ニテハ到底落成セシメ得ザル事明瞭トナリタルヲ以テ、契約ヲ解除シ、佐○木○助氏之ヲ繼承シ、翌大正十三年十二月十日漸ク其落成ヲ見タリ。寄附者ノ芳志ニ因ミテ「聖マーガレット館」ト命名ス。總建坪五十三坪、二階六室 (八・六・六・六・六・四半) 階下 (六、十ノ二室、臺所、玄關等)。工事監督ハ福○紫○兄、總建設費一萬七百八十九圓六十九錢ヲ要シタリ。

落成ト共ニ救助ヲ要スル男兒三名女兒六名計九名ヲ收容シ、先崎ケサ姉舎監トシテ母ノ責任ヲ執レリ。之實ニ本邦ニ於ケル最初ノ未感染兒童ホームトス。而シテ昭和二年度末ニハ收容兒童數二十三名ニ達シ、異ル素質ヲ以テ異ル境遇ヨリ來レル之等多數兒童ノ養育ニ就キ、先崎姉ノ氣苦勞ハ一通リニ非ザリキ。

一九二九年（昭和二年）館經常費ヲ見ルニ、ホー夫人其他一般寄附金合計一千四百六十七圓ニシテ、兒童食費薪炭料、保姆給料、其他支出合計二千五百五十六圓六十錢ノ多額ニ上レリ。

昭和三年五月二十日、大阪箕面學園教師タリシ、ミス・マギル當館働人トシテ來任シタルヲ以テ、二人相倚リ相助ケ保育ノ改善ニ力ヲ注ゲリ。而シテ、ミス・マギル徐々ニ草津ノ働キニ馴レタルヲ以テ、先崎姉ハ昭和四年三月下町ノ働キニ轉ジ、リー教母ト起居ヲ共ニシ其繁雜ナル事務ヲ助ケツ、アリシガ、翌五年二月小學校ヲ卒業セル當館四名ノ娘ヲ連レテ京都ニ赴キ再ビ母トシテノ責任ヲ執レリ。

聖マーガレット館



昭和四年十二月英國ヨリ、ミス・ネットルトン當館働人トシテ來任シ、其館經營ニ通ズルヲ待テ翌五年八月ヲ以テ、ミス・マギルハ下町ノ働キニ轉ジタリ。

サテ此ノホームノ爲ニ忘ル可カラザル恩人リチャード・ホー夫人ハリー教母ヨリ年毎ニ詳細ナル報告ニ接シ、幼ケナキ子供等ノ爲ニ基督ノ愛ト恩恵ガ施サレツ、アルヲ知り、我ガ寄附ノ空シカラザルヲ喜ビテ、昭和四年十二月更ニ一大決意ヲ以テ此ホームヲ支持スル事ヲ申出ラレタリ。即チ、定員二十名ニ要スル全費用ヲ金利ニテ支辨スル法ヲ講ズベク約五萬弗ヲ米國聖公會資金局ニ託シ年々其利子六千餘圓ヲ送金セラル。

昭和五年度末ニ於ケル收容兒童數二十五名、聖テモテ館京都青森等ニ勉學ノ爲居住スル兒童ノ分ヲ合算シ、總經費九千三百四圓五十八錢ノ巨額ニ達セリ。

第百十一 聖テモテ館

聖マーガレット館ニ容レラレタル美ハシキ幼兒達ハ産ミノ親ニ離レタレド、更ニ之ニ優ル愛ノ保育ニヨリ身モ魂モスク／＼ト育チ行キ、早キハ既ニ小學校ニ登リ或ハ學齡期ニ達シタリ。サレバ諸種ノ都合上男兒ノミハ之ヲ別ニ分チ、男子舎監ノ責任ノ下ニ養育スルノ便益ナルヲ認メタリシガ、ホーム新設ノ資金無カリシヲ以テ一同愈々熱心ニ祈リ求メツ、アリシガ、偶々昭和五年三月教會々館新築ノ爲從來使用シ來リシ會館ハ不要トナリタルヲ以テ、之ヲ同ホームノ爲ニ貰ヒ受ケ上町「満足館」ノ西隣ノ地ニ移轉シ、臺所、玄關其他ニ多少ノ模様替へ及ビ修繕ヲ施シ、之ヲ聖テモテノ名ニ因ミテ「聖テモテ館」ト命名シ、昭和五年七月十五日伊藤梅吉兄病院事務長ヨリ轉ジテ之ガ責任者トナリ、聖マーガレット館ヨリ市○清、塚○鶴○、西○唯○、小○雅○、江○大○、中○菊○、奥○一等七名ノ男兒童ヲ移シ、新シキ生活ヲ始メタリ。

此ノ家ハ元松村館別館ニシテ大正二年八月熊本ヨリ遣ハサレタル米原馨兒長老ガ草津傳道ノ第一聲ヲ舉ゲタル記念ノ家ナリ。幾何モ無クヨルダンホームトナリ、基督教光鹽會ノ本部トナリ、又初代聖バルナバ教會ノ聖堂トシテ用ヒラレ、大正十五年聖堂新築落成ト共ニ會館トナリシモノ。今尙古キ信者ニトリテハ盡キザル想出ノ家ナリトス。

第一百十二 先崎ケサ女史

先崎ケサ姉ハ福島縣ノ生レ、新進醫學士ノ夫ト共ニ平和ナル家庭ヲ營ミ、醫業ノ傍ラ雜貨商ヲモ兼ネ營業シ、家運日ニ隆ヘツ、アリシガ、或動機ヨリ其ノ夫不品行ニ陥リ爲ニ風波屢々ナリシカバ、遂ニ耐工兼ネテ二兒ヲ伴ヒ所屬教會牧師ノ紹介狀ヲ携ヘ大正十二年夏來草セリ。幾何モ無ク其夫自轉車ニテ往診ニ赴ク途上疾走シ來レル自動車ニ衝突頓死ヲ遂ゲタレバ、招電ニ依リ歸郷シタルモ萬事意ノ如クナラズ再ビ來草。時恰モ親ヲ失ヒテ寄邊ナキ三四名ノ幼兒アリ。或者ハ既ニリー教母ノ宅ニ引取ラレテ其養育ヲ受ケツツアリシガ、先崎姉ハ斯カル幼兒達ノ保育ノ任ヲ命セラレ、即チ本〇民〇、千〇花〇、江〇タ〇ミ等ノ小サキ女兒ヲ預リ、全年冬ハ子供達ノ爲ニ草津ヨリモ暖キ處ヲ求メ小雨ノ一民家ヲ借リテ冬籠リヲナシ解雪ヲ待チテ草津ニ上レリ。

然ルニ大正十四年十二月米國ナルリチャード・ホー夫人ノ篤志ニヨリ之等兒童ヲ收容スベキ聖マーガレット館落成シタレバ、第一代舎監トシテ九名ノ子供ノ責任者トナリ館創立時代ノ辛酸ヲ嘗メ、小サキ者ノ爲ニ日夜勞セリ。昭和三年五月ミス・マギル來任ニヨリ昭和四年夏下町ノ働キニ轉ジ、リー教母ト起居ヲ共ニシ其事務ヲ補助シ教母歸英旅行中病者訪問及下町婦人働人ノ指導者トシテ良キ働キヲナセリ。昭和五年二月聖マーガレット館女兒堂中小學校ヲ卒業シタル四名ノ者、京都アグネス女學校入學ニ就キ、再ビソノ母トシテノ責任ヲ命セラレ京都ニ在

住セリ。

## 第二十三章 信徒修養會

信徒ノ信仰ヲ向上シ、其ノ基督教の修鍊ヲ堅ウスル爲、教會ノ名ニ於テ聖公會中著名ノ牧師ヲ招キ、信徒修養會ヲ開催スルノ案ハ、大正十年春宿〇薰兄ノ提案ニ依リ、教會委員會ニテ採用シタルモノナリ。

### 第一百十三 第一回信徒修養會

而シテ其ノ第一回ノ試ミハ大正十年八月二日聖マリヤ館二階ヲ會場トシ、東京市外日暮里眞愛教會牧師森俊治長老ヲ講師ニ招キテ行ハレタリ。森長老ハヨハネ傳一〇・五ヨリヨハネノ善キ信仰、活ケル神ノ全キ光ニ就キ、熱辯ヲ振ハレ、殊ニ偶然ニモ話ハ聖潔ノ問題ニ觸レ、瞬間的聖潔ト段階的聖潔トヲ比較説明セラレタレバ、之ニ依リテ大正七年以來東洋宣教會ヨリ轉籍シ來レル有力ナル信者等ニ依テ信ゼラレ又主張セラレタル、瞬間的聖潔及再臨切迫ニ就テノ教理トノ對立ニ對シ何レニ適從スルカヲ迷ヒ居タル者モ、茲ニ初メテ大イナル確信ヲ得、聖公會ノ徳ヲ樹ツル爲其ノ效果ハ極メテ大イナルモノアリキ。

森長老ハ後藤桑吉長老ノ舍弟ニシテ、兄上洋行中ナレバ代リテ眞愛教會ヲ牧シ居ラレタリ。信仰ニ惠マレタル良キ師ナルヲ聽キ、大藤長老ヲ通シテ依頼セルモノナリ。森長老ハ兄上御歸朝後九州地方部ニ轉ジ、福岡市聖アルバ教會牧師タリ。昭和六年四月十一日英國C・M・Sノ傳道招聘ニ應ジ門司出帆、ハコザキマル管崎丸ニテ英京倫敦ニ赴キ英國ニ約一年米國ニ約半年ヲ過シテ歸朝セラレタリ。

昭和六年三月七日全師ハ當時ヲ追懷シ、左ノ一文ヲ送ラレタリ。

○思ヒ出

大正十年八月一日午前九時上野ステーションにて大藤長老ヲ御待チス。ヤガテ二人ノ旅人ヲ乗セタル汽車ハ一路輕井澤ヘト急グ、目映ユイ眞夏ノ光ヲ浴ビテ自然ノ力ト希望ヲ我等ノ前ニ示シテ居タ。二ヶ月ノ間御招キヲ受ケ乍ラ、行カウカ行クマイカト祈リノ中ニ明暮レタリシモ、今ハ信仰ト祈禱ニ燃ヘテ御用ト言フ強キ御靈ニ押出サレテ勇ミ行ク。三時過ギ輕井澤ヨリ輕鐵ニ乗り換ヘ、淺間ノ噴煙ヲ眺メツ、山又山ノ間ヲ縫ヒ行ク。嬌戀カラハ馬ノ背ニ揺ラレ、テ山路ヲ辿ル中ニ日ハトツブリ暮レテ他ノ一頭ノ馬ノ背ニ乗ッタ大藤長老ノ御顔サエ見エナイ。闇ノ中カラ聲ヲ交ヘツツヒタ進ム。

○  
偶然山ノ中ヨリ燈明リガ見ヘタ。提燈ラシイ燈方五ツ六ツ闇ニ動イテ居ル。「森サン、アレハ出迎ヘノ人々デスヨ」。樂シイ瞬間ガ來タト思フ間モ無ク、出迎ヘノ人達ト顔ヲ合ハス。嬉シイヤラ驚キヤラデ心ガ躍ル。

着草ト共ニ大藤長老ニ伴ハレ教會堂ニ入り更ニ多數ノ兄弟ニ御目ニ掛カル。電燈ノ燭光弱ク薄明リノ中ニ馴レナイ私ハ再ビギョットスル。サレド後デ知ツタ事ニハ、百幾十人ガ炊キ出シヲナシテ我等ヲ待チ構ヘ、祈リノ火ハ既ニ數ヶ月前ヨリ燃ヘニ燃ヘテ其時ニ及ンダト。即チ一切ノ準備ハ整ヘラレ卑シイ器ガ用ヒラレテ神ガ崇メラレル時ガ來テ居タ。

○

第二十三章 信徒修養會

五日間朝ハ祈禱ト約一ノ書ノ講義、午後修養講話、夜傳道説教、毎回午前午後約二百人、夜三百數十人ノ會衆アリ。全ク不思議ト思フ事ガ重ナル。思出ハ盡キナイ。初メ恐怖ニ満チテ居タ私ハ、基督ノ愛ノ故ニ總テヲ投ゲ出シテ飛ビ込ンダ草津ノ爲ニ、主ノ命ダニアラバ此處デ死ンデモ良イト思ッタ。偶像ヲ捨テテ神ニ歸ッタ家族、

料理店ヲ廢業シ女達ヲ解放シタ人、其他主ノ顯ハシ給ヘル驚クベキ多クノ出來事ニ其等ノ人々ノ信仰ノ證詞、入信ノ話等ヲ急イデ記錄シタ。其ノ特別ノ記錄ダケデモ二十人近クアッタ。私ハ今其記錄ノ見當ラナイノヲ遺憾トスル。然シ私ノ何處カラカ發見スル事ト思フ。送別會モ盛ンデアッタガ、反ツテ悲シクナッタ。身ハ別レテモ心ハ別レナイ。主ハ一ツ。大藤長老ト草津教會ノ諸先生諸兄弟ニ深ク感謝シマス。

#### 第一百十四 第二回信徒修養會

大正十一年八月東京市金杉眞愛教會牧師後藤象吉長老ヲ招キ、第二回信徒修養會ヲ開催ス。全長老ハエゼキエル書四七章一々五節ヲ解説シ、更ニ至聖所ノ下ヨリ流レ出ル水ノ譬ヘヲ引キ、基督ヨリ流レ出ズル眞理ノ水ハ永遠ニ盡クル事無ク時代ヲ重ヌルニ從ヒテ信者ノ數ノ増加スベキ事、基督ノ大海ニハ凡テノ教會ガ一ツトナリ流レ込ムト説カレタリ。短キ御講話ナリシモ一同深キ感銘ヲ受ケ、微力ヲ盡シテ主ノ榮光ヲ顯サン事ヲ誓ヘリ。

#### 第一百十五 第三回信徒修養會

大正十二年八月東京市深川教會牧師杉浦義道長老ヲ招キ、第三回信徒修養會ヲ聖マリヤ館ニ開催ス。同長老ハ約一〇・四三々四六ヲ引照シ、世ニ顧ミラレザルナザレノ寒村ニ神ハ備ヘ給ヘリ。神ハ如何ナル處ニモ人ノ思ヒニ過グル善キ事ヲ起シ給フ。草津ヨ、日本ノナザレトナレト説カレ、上町ノ傳道會ニテハ「汝等ノ目ニ隠レタリ」ノ聖句ヲ引キ、信ゼザル者ノ目ニ主ハ隠レ給フ、見エザルハ信ゼザルガ故ナリ。速カニ信ジテ美ハシキ神ノ姿ヲ見ヨ」トノ講話アリテ、深キ印象ト獎勵ヲ與ヘラレタリ。長老ハ立教大學長杉浦貞二郎博士ノ令兄ニシテ、東京本所ナル眞光教會牧師トシテ前後約四十年間福音宣傳ニ努メラレシガ、昭和五年十一月七日享年六十七歳ヲ以テ

永眠セラル。先生ニ就キ特ニ記憶スベキハ、先生ガ勞働者矯風會ヲ創立セラレ勞働者ノ精神教育ニ盡瘁セラレタル事ナリ。先生ノ教會アル江東一帶其ノ日暮シノ筋肉勞働者多ク、平生貯蓄ナキ彼等ガ病氣ニ罹リシ際甚ダ難澁スルヲ見、獨力サマリタン醫院ヲ開キ、約十五ケ年間治療ニ當ラレ、之ヲ通シテ更ニ十二分ノ貧民心理ニ關スル研究ノ結果、貧シキヲ見テ憐憫ノ情ヲ動カシ直チニ金品ヲ惠ムハ決シテ救助ノ目的ヲ達スル所以ニアラズ。天災疾病ノ爲一時的救助ハ必要ナレド、普通ノ健康ヲ有スル者日夜勤勞相應ナル生活ト正直ナル世渡リヲナスニ於テハ、他人ノ救助ヲ受クル程窮困スルノ理ナシ。故ニ勞働者ニ對シテ金品ヨリ遙ニ貴キハ獨立獨行ノ氣象ト罪惡ニ打克ツ勇氣ヲ與へ、自ラヲ救フ真正ノ活路ヲ示スニアリト、茲ニ勞働者矯風會ヲ起サレタルナリ。師ノ永眠後此事業ハ、當教會前管理長老貫民之介師ニ依ッテ繼續セラ

第三回信徒修養會



第四回修養會ハ大正十三年三月二十五日東京ヨリ山口信太郎師ヲ招聘シ教會ニテ之ヲ行フ。之ヨリ前同年二月頃教母ノ山ニ隣接スル細長キ帶狀ノ土地ヲ購入シタル時、貫長老ノ代理トシテ之ニ支拂フベキ代金ヲ携へ來草セラレタル山口長老ハ、旅ノ疲レヲモ厭ハズ來集セル熱心ナル信者ノ爲ニ一場ノ説教ヲナサレシガ、此ノ説教ニヨリテ大イニ感動シタル信者多ク、サレバ此ノ度ノ講師トシテ教會一致同師ヲ講師ニ招キタルモノナリ。

教會ニテハ一週間前ヨリ會館ニ於テ特別準備祈禱會ヲ催フシ、又寄附金ヲ募リタルニ一躍七十餘圓ニ達セリ。修養會ハ入道兄ノ司會ニテ、演題ハ「愛ノシンボル」ニシテ、雅歌書ヨリ「其ノ我上ニ翻ガヘシタルハ愛ノ旗ナリキ」。

湯之澤ノ過去及現在ヲ見ヨ、我等斯ク罪アル者救ハレテ主ノ饗宴ニ入レラレタル喜悅何ニカ譬ヘン。汝等ハ今ヤ荆棘ノ中ニ咲ク白百合、野ノ林ノ中ニアル林檎ノ如シ。主ハ我等ノ爲ニ命ヲ捨テ給ヘリ。之ニ依リテ愛ト言フ事ヲ知りタリ。如何デカ愛ノ眼ヲ閉ヅル事ヲ得ント説カレタリ。岩○理○郎兄、入○清○兄等感極リテ大聲ニテ泣イテ祈レリ。講師モ亦「貴方方ノ十字架ガ餘リニ重キニ過グルヲ見テ續クルヲ得ズ」ト、壇上ニ咽バレタリ。

第一百十七 第五回信徒修養會

第五回信徒修養會ハ大正十四年四月十四日浦和町諸聖徒教會牧師大矢敬香長老ヲ招聘シテ之ヲ行フ。長老ノ引用セラレタルサンダーシングノ思想ト生涯ヲ主トセリ。印度ノ北方ヒマラヤ山脈ノ裾野ニ突如トシテ現ハレシ一青年ノ經驗ニ基ク權威アル證詞、印度教マホメット教佛教ノ中ニ育チシ其指導者達ヤ博學ナル多クノ信者ノ中ニ交遊シ來リシ彼ノ最後ニ到着シタル驚クベキ神ノ啓示、短キ言論ノ奥ニモ尊キ體驗ノ潜ム説教ニ深キ感動ヲ受ケ、信者ノ中ニハ長老ノ退草後サンダーシングヲ研究スル者多キヲ加ヘタリ。

又一回ハ馬太傳一〇・三九ヨリ「生命ヲ得ル者ハ之ヲ失ヒ、我爲ニ命ヲ失フ者ハ之ヲ得ベシ」ヲ引キ、茲ニ雪中ヲ行ク二人ノ旅人アリ。寒サト飢ノ爲ニ今ハ道ニ倒レテ將ニ死ナントス。然ル時互ニ助け合ヒテ一人ガ他ノ弱キ一人ヲ負フテ山ヲ下リシニ、身體ヲ合ハセル事ニ依リテ體溫支ヘラレ、麓ノ村ニ迄辿リ着クヲ得タリ。主ニアル者斯クノ如シト説カレタリ。

第百十八 第六回信徒修養會

第六回信徒修養會ハ大正十五年三月四日開催セラレタリ。講師ハ東京市外澁谷町目白聖公會牧師佐々木鎮次長老ナリ。

コロサイ書第三章ノ「汝等ハ上ニアルモノ念ヒ、地ニ在ルモノヲ念フナ」ヨリ汝等若シ基督ト共ニ甦ヘラセラレシナラバ、唯上ニアルモノヲ求メヨ。サラバ我等ノ生命ナル基督ノ現ハレ給フ時、汝等モ之ト共ニ榮光ノ中ニ現ハレント教ヘラレタリ。同師ハ現在教務院總務局長タリ。

第百十九 第七回信徒修養會

第七回信徒修養會ハ昭和二年四月五日開催セラル。講師山口信太郎長老。

「石ヲ除ケヨ」(ヨハネ十一ノ三九)ニ就キ、我等モ亦不信仰ト冷淡ノ石ヲ除ケザルベカラズ、唯熱烈ニ信ゼヨ、然ル時ハ死シテ墓ニ下ル事四日、既ニ臭氣ヲ衝クラザロク甦ヘラセ給ヒシ主ハ、今モ尙生キ給フ故ニ信ズル信仰ニ依リテ死ストモ生キント教ヘラレタリ。

又傳道説教ニハ「斯クテ彼等ノ前ニテ其ノ狀變リ、其ノ顔ハ日ノ如ク輝キ其ノ衣ハ光ノ如ク白クナリヌ」(マ

タイ十七〇三)ヨリ變容貌ノ意義ト其結果ヲ説キ、此時主ノ御下山無カリセバ我等又永遠ノ闇ニ迷フベカリシナリ。サレバ今ノ世ノ惡ヨリ逃レテ互ニ愛ヲ以テ相連リ、教ヘラレシ如ク信仰ヲ堅ウシ、<sup>ヤガ</sup>驪テ彼ト共ニ携ヘ上ゲラルル者ノ幸ヲ得ン事コソ大事中ノ大事ナリト教ヘラレタリ。

第二百十 第八回信徒修養會

第八回信徒修養會ハ昭和三年四月十日ヨリ三日間東京市本郷區聖テモテ教會牧師高瀬恒徳長老ヲ聘シ教會會館ニテ行ハル。修養會ニ於テ一定ノ演題ヲ出シテ組織的ニ行フ事ハ此時ヨリ始マル。

サテ高瀬長老ノ題ハ「聖ポーロ」「使徒ヨハネ」「聖オーガニチン」「聖フランシス」等ニテ、之等使徒聖徒ノ思想及行爲等ヲ通シテ、「我等ハ斯ク多クノ證人ニ雲ノ如ク圍マレタリ。彼等皆堅ク主ヲ信ズルノ信仰ニ立チ、勇マシク罪ト世ト惡魔トニ戦ヒ、遂ニ勝利ヲ得タリ。主ノ兵士達ヨ、目ヲ覺マシテ主ノ十字架ト勝ち得シ友ヲ見ヨ。悲シミ樂シミ働キ休ミ何レノ時ニモ上ヨリノ力ヲ得テ強カレ。而シテ眠リシ證詞人先驅者ニ續ク勇士タレ」。ト大イナル勵マシヲ與ヘラレタリ。

第二百十一 第九回信徒修養會

第九回信徒修養會ハ昭和四年三月十九、二十ノ兩日ニ亘リ、教會ニテ行ハル。講師トシテ迎ヘラレタル須貝止長老ハ東京三一神學校卒業後米國ニ留學シ、特ニ新約聖書ヲ研究シ神學士ノ稱號ヲ得テ歸朝、東京小石川諸聖徒教會ノ主任牧師トシテ令名アリ。又一方立教大學ニギリシヤ語ノ講師トシテ前後二十年間學ノ研究ニ、將亦學生ノ薰陶ニ專念セラル、篤學者ナリ。總演題ハ「眞理探究ノ目標トシテノ基督<sup>キリスト</sup>」。之ヲ分説スル事左ノ如シ。

一、眞理ノ探究者 (十九日朝)

先生ハ主トシテ聖書以外ノモノヨリ題材ヲ取り、之ヲ以テ聖書ヲ説明シ、最後ニ聖書其ノモノニ歸納セラレタリ。

本題ニ於テハロシヤノ文豪トルストイノ思想ヲ通シ、彼ガ如何ニ全精神ヲ傾注シテ愛ノ眞理ヲ探求シタルカ、如何ニ基督ヲ追ヒ求メ基督ニ依ッテ顯現セラレシ神ノプログラムヲ實行セントセシカニ就キ例證シテ、彼ガ其獨得ノ見解ニ從ッテ神ノ御旨ヲ行ハントスル悲壯ナル劇的精神ヲ論評シ、彼ノ思想ノ方向轉換、「噫我惱メル人ナル哉」ト絶叫シタリシ彼ノ煩悶、彼ノ處女作「幼年時代」以下「戰爭ト平和」ニ至ル各作品ノ短評、彼ノ出征、彼ノ結婚、小作人ノ解放、基督ノ探求、聖書解釋ノ態度等ヲ説キ、彼ガ遂ニ基督教ニ徹底スルヲ得ズ、個人主義虛無主義ニ傾キシト雖モ、熱烈ナル兄弟主義ノ愛ノ精神イト高キ處ニ、聖ナル幻ヲ追ウテ眞理ノ探求ニ専心セル如ク、我等モ亦專念神ヲ求メ神ヲ慕ヒ神ニ奉仕ヲナス生活タラザルベカラズト説カレタリ。

二、心靈經驗ノ認識 (十九日午後)

二十三章 信徒修養會

主トシテ美術史ヨリ材料ヲ取り、古今ノ卓越セル美術家藝術家ヲ通シテ、如何ニ主基督ハ表現セラレタルカヲ尋ネテ、各時代並ニ著名ナル畫家彫刻家文學者等ヲ論述シ、基督教美術ノ代表的作品ヲ説明シ、殊ニ「善キ羊飼」「最後ノ晚餐」「山上ノ變貌」「最後ノ審判」「見ヨ此人ヲ」「幼兒ヲ祝スルノ圖」「世ノ光」等ノ如キ名畫ノ由來ハ、最大ナル人格者ノ高遠ノ思想ヲ如何ニシテ筆ト紙ノ上ニ表現スベキカト苦心セル作者ノ胸中ヲ察セシメ、斯ク偉大ナル藝術家詩人文學者等ガ神ヨリ與ヘラレタル特別ナル才能ト想像力ト直感ヨリシテ吾人ノ感知シ得ザルモノヲ感知シ、之ヲ彫刻繪畫詩歌文章等ノニューリストシテ吾人ニ提供シ、人生ニ光明ト慰安ト希望ヲ與フル事ヨリシテ、我等ガ基督ヲ理解スル量ト明確サハ之ヲ受容レル人ノ心靈經驗ノ量ニ此例スルモノナレバ、我等素ヨ

リ芭蕉タルヲ得ズシエクスピアタルヲ得ズダンテタルヲ得ズトモ、尙一個ノ詩人或ハ藝術家トシテ常ニ殆ンド其大部分ガ吾人ノ祝力ノ外ニアル人生ノ凡テノ事實ヲ見透シテ正シキ判斷ヲ與ヘ、肉眼ヲ超ヘテ心眼ヲ以テ人生ノ眞底ニ徹シ、以テ限り無キ幸福ノ爲ニ邁進セザルベカラズト説カレタリ。

三、贖罪ノ必要 (夕ノ部)

イタリヤノ詩聖ダンテノ思想及生活ト其著書「神曲」ニ就キ、贖罪ノ如何ニ必要ナルカヲ説カレ、神ノ量リ無キ愛ニ唯倚頼メ、罪ヨリ絶縁セラレヨ、利己本位ノ生活ノ誇リ、高慢、不親切ヲ十字架ニツケ、主ノ問ニ常ニ正シキ答ヲナセト教ヘラル。

四、基督ノ人格 (二十日朝) (マルコ傳十四〇一〜九)

基督ノ中ニ人トナレル神ノ榮光ヲ認識シ得ザル限り、完全ニ基督教ノ信仰ニ入レルト言フベカラズ。主ハ女ニ言ヒ給ヘリ「其ノ爲スニ任セヨ。何ゾ此ノ女ヲ惱マスカ。我ニ善キ事ヲナセリ。貧シキ者ハ常ニ汝等ト偕ニ居レバ、何時ニテモ心ノ儘ニ助ケ得ベシ。サレド我ハ常ニ汝等ト共ニ居ラズ」。潔キ此ノ女ノ爲セル事ヲ見ヨ。我等ハ果シテ基督ノ喜ビ給フ個人的奉仕ヲ爲シ居ルヤ故ヤ。皆サンハ此地ニ於テ世ト離レタ生活ヲ爲シ居ル故ニ、世ノ爲人ノ爲何等貢獻スル能ハズト思フ者アラバ、其ヲ解決スルハ此ノ潔キ女ノ物語リナリ。我等ノ凡テノ修養ト道徳的訓練ハ自己ノ爲ナラズ、他人ノ爲ナラズ、唯父ナル神ヘノ奉仕ヲ以テ第一義トナス。ピリボガサマリヤ傳道ニ成功シタルハ其處ハ荒野ナリトノ失望の命令ニモ拘ラズ、柔順ニ之ニ従事セルニ依ル。我等ニモ亦病氣、失敗艱難等ガ屢々荒野ノ形ニテ表ハサル。サレド此ノ荒野ヲ通シテ最モ多ク御靈ノ實ハ結バル。今ヤ聖週ヲ迎ヘントスルニ當リ、之ヲ動機トシテ我等ノ純ナル意志ヲ基督ニ向ケ、上ヨリノ助ケト力ヲ一向ニ願ヒ、我等ノ信仰ヲシテ人類ノ理想ニ到達セシメザルベカラズト説カレタリ。

## 第二百二十二 佛教講演會

昭和五年三月二十四日ヨリ一般宗教學研究ノ參考ニ資スル爲、教會有志主催ニテ二週間ニ亘リ佛教ニ關スル連續講演會ヲ開催セリ。

講師ハ今春ヨリ我教會定住長老タル貫民之介師ナリ。師ハ曩ニ我國佛教會ノ碩學島地大等先生、境野黃洋先生渡邊海旭先生等ニ就キ親シク佛教ノ研究ニ從事セラレ、其後立教大學宗教學科ニ於テ佛教史學、佛教哲學ノ講座ヲ久シク擔當セラレタル、基督教界ニ於ケル佛教研究ノ權威ナリ。而シテ初メハ極ク少數ノ篤志家ノミ聽講ノ豫定ナリシモ、斯クノ如キ得難キ講演ヲ少數者ニテ私スルハ忍ビズトナシ、即チ之ヲ全信徒ニ及ボシ、遂ニ昭和五年二月聖バルナバ教會信徒有志ノ名ヲ以テ、茲ニ佛教研究ノ講演會ヲ開催スル事トナリタリ。本講ノ講演ノ中ニテ講師モ言明セラレシ如ク本講演ニ依リテ佛教の信仰ヲ得ントスルニ非ズ。要スルニ之ヲ精神科學ノ一分科トシテ學的研究ノ對象トシテ、其ノ中ニ包含セラル、靈的指導ノ原理ヲ探求セントスルニ在リ。而シテ同講演會ハ豫想外ノ好評ヲ博シ、毎回最モ熱心ナル聽講者百名ヲ下ラズ。殊ニ師ノ該博ナル蘊蓄ハ、佛教ト基督教トノ對照ノ嚴正ナル批判ト相俟ツテ、愈々聽衆ノ好奇心ヲ加ヘ、神ノ啓示ニ基ク偉大且ツ完全ナル教ノ奧義自ラ明ラカニ内奥ニ輝ク希望ハ愈々鮮カニ立命ノ確信愈々堅ウセラレタルヲ覺エタリ。

講演要目第一講序說、(佛教概観、佛教ノ經典、佛教以前ノ哲學、宗教)、第二講釋迦牟尼、第三講小乘佛教ノ發達、第四講大乘佛教興隆、第五講初期ノ支那佛教、第六講天臺宗三輪宗、第七講唐ノ諸宗、第八講初期ノ日本佛教、第九講平安期ノ佛教、第十講鎌倉時代ノ佛教、第十一講鎌倉時代以後ノ佛教。

## 第二十三章 信徒修養會

### 第二百二十三 第十回信徒修養會

昭和五年四月八、九、十ノ三日間ニ亘リ、長野市聖救主教會牧師廣瀬與吉長老ヲ聘シテ第十回信徒修養會ヲ開ク。

八日夜ハ講師歡迎會、九日十日ノ兩日午前後ノ二回「信仰」「希望」「愛」等ノ演題ニ依リ婦女子、子供ノ耳裡ニモ容リ易ク、基督教ノ教理教訓等ヲ極メテ平易ニ説カレタルヲ以テ、頗ル信徒ノ興味ヲ喚起セリ。會衆每回三百名以上ナリキ。

第二百二十四 第十一回信徒修養會

昭和六年三月九日、貫長老ノ斡旋ニ依リ弘前昇天教會中村信藏長老ヲ迎へ、會館ニ於テ歡迎會ヲ催ス。席上師ヨリ北部保養院ニ於ケルハレルヤ會員ニ關スル御話アリテ深キ感銘ヲ與ヘタリ。翌十日ヨリ「大齋特禱ニ關スル靜想」ト題シテ御講演ニ移ラル。

第一講ハ「主ノ創<sup>ソ</sup>リ給ヒシモノ」ト題シ、創造ノ神秘、人、天使等ニ就キ、第二講ハ「悔ユル心」ト題シ罪ニ就キ、第三講ハ「全キ赦シ」ト題シ告白ト赦罪ニ就キ、第四講ハ「眞ノ慶福ヲ來ラスル者」ト題シ基督ニ就キ御講話アリ。別ニ三月十日午後六時半ヨリノ傳道説教會ニ於テ、「死ヲ克復スル者」ト題スル説教アリテ新會館ニ溢ル、許リノ聽衆來會セリ。

信徒修養會講師表

森 俊治長老 大正 十年八月二日

後藤桑吉長老 大正十一年八月

第二十四章 聖望小學校

杉浦 義道長老 大正十二年八月

山口信太郎長老 大正十三年三月二十五日

大矢 敬香長老 大正十四年四月十四日

佐々木鎮次長老 大正十五年三月四日

山口信太郎長老 昭和二年四月五日

高瀬 恒徳長老 昭和三年四月十日〜三日間

須貝 止長老 昭和四年三月十九・二十日

廣瀬 與吉長老 昭和五年四月八・九・十日

中村 信藏長老 昭和六年三月九・十日

第二十四章 聖望小學校

第二百二十五 望會

世ノ人ノ心ヲ戰慄セシムベキ<sup>キイザン</sup>悽慘ナル本病者ノ境遇ニ於テ、就中<sup>ナカニ</sup>憐憫ノ情禁ジ難キモノハ四歳五歳ノ惡戯盛リニ發病シタル幼童ニシテ、學齡ニ達ストモ通學スル能ハズ、若シ夫レ在學中ニ發病シタル者ハ義務教育サヘ満足ニ受クル能ハズシテ小サキ心ヲ悲シミニ包ミ、草津ヲ訪ネ來リテ其ノ短カキ蓄ノ一生ヲ旅館ノ一室ニ、或ハ知リ人ノ家ニ空シク散リ果ツベキ運命ニアリ。

大正十三年末ニハ、男子ホーム婦人ホーム等ニ入館セル兒童ノミニテモ、岩〇一〇、高〇一〇、高〇〇、高〇〇、高

○昇、藤○長○、武○モ○、平○誠○郎等義務教育ヲ全ウセズ或ハ全然未教育ノ者殆ンド十名ニ達セリ。之等ノ可憐ナル兒童ノ爲ニ、教母ハ常ニ一入愛ノ眼ヲ注ギ慰安ノ道ヲ講ジ、大正十三年クリスマスノ如キハ彼等ノ爲ニ特別ナル祝會ヲ開キ又贈物ヲ與ヘタリ。

然ル處大正十三年十二月ノ信徒總會ニテ選舉セラレタル教會委員ノ初委員會ヲ、大正十四年一月二日（金曜日）教會ニテ開催シタル處、年度事務分擔、獻金、委員會、家庭集會ノ各項ニ關スル提案ヲ審議シタル後、之等兒童ノ慰安並ニ指導方法ニ關シ、議長リー教母ヨリ一同ニ諮ル處アリ。協議ノ結果「のぞみ會」ナル病者兒童ノミノウ會ヲ作り、リー教母會長トナリ、毎月第二第四ノ水曜日午後六時ヨリ會館ニ於テ例會ヲ開キ、遊戲、唱歌、茶菓講話等ヲ通シテ兒童慰安ノ道ヲ講ズル事、各委員ハ勉メテ之ニ出席シ愛ノ勞ヲトル事ヲ議決セリ。

本委員會ノ出席者ハリー教母、山中政三師、相○鎰○兄、福○紫○兄、杉○淨兄、高○利○兄、宿○薰兄、管○丈○兄、入○清○兄ナリトス。

之今日尙行ハル、兒童遊會ノ發端ニシテ、又病兒童教育機關設置ノ第一段階トナレルモノナリ。

第二百二十六 望學校

「のぞみ會」ニ依リテ年齡境遇ヲ等シウスル不遇ナル子供達ハ、大イナル喜ビト望ヲ得タリシガ、リー教母ハ更ニ一步ヲ進メテ之等兒童ノ爲ニ何ラカノ設備ヲ爲サント考ヘタリ。思フニ之等學齡期ニアル兒童ノ最モ切ナル願望ハ、遊戲ニ非ズ茶菓ニ非ズ、幼時嬉戲<sup>キ</sup>シ或ハ嘗テ共ニ手ヲ携ヘテ登校シタリシ友達ノ夫レノ如ク、學校ニ行カン事ナリ。文字ヲ覺エ知識ヲ得ン事ナリ。肉體ニテハ既ニ絶望的ナル病ヲ受クトモ深ク之ニ介意セザル程尙無邪氣ナル彼等ノ願ハ、實ニ學校ナリキ、教育ナリキ。

サレバ教母ハのぞみ會員ノ爲ニ、例ヘ寺小屋式ナリトモ學校ノ體系ヲ具ヘタルモノヲ設ケ、此處ニテ普通教育ヲ授ケン事ヲ欲シタル次第ニシテ、此ノ事ハ半歳以前ヨリ一部有志ニ依テ唱ヘラレシ事アリシガ、今ヤ之ガ實現ノ機運ニ達シタルナリ。而シテ之ヲ促進スル誘因トナリタルモノ二三アリ。其ノ一ツハ當時大谷派説教場ニ於テ森○祐○氏佛敎夜學校ヲ經營シ、二十有餘名ノ生徒アリ。殊ニ其ノ珠算ノ時間ニハ速ク上町ヨリ通學スル者モ亦尠カラズ。サレバ熱心ナル信者中ニハ其ノ子弟ガ之ニ學ブコトニヨリ佛敎ノ感化ヲ受クルコトヲ好マシカラズトシ、彼等ノ爲ニ一夜學校ヲ設ケラレン事ヲ乞フ者モアリシ。然ル處大正十四年一月十七日（土曜日）リー教母ハ満足ノ自宅ニ新年度委員ヲ招キ年賀ノ會ヲ開キシガ、其ノ際此ノ問題ノ爲ニ臨時委員會ヲ續開シ、滿場一致夜學校開設ヲ決議シ、更ニ具體案ノ協議ニ入レリ。然ルニ彼等ノ逢着セシ第一ノ難關ハ、教室ト教師ヲ如何ニスベキヤノ問題ナリシ。ミッシヨン會計ノ豊カナラザル事ナレバ、新校舍ヲ建テ、専任教師ヲ備ヒ入ル、等ノ事ハ到底不可能ノ事ナレバ、諸案熟議ノ結果、教室ハ聖バルナバ教會々館ヲ臨時借用シ、教師ハ臨時ニ教會委員兼任シ、土曜日ヲ除キ毎日午後六時ヨリ開校、教授課目ヲ讀方、珠算、習字、歴史、聖書、聖歌ノ六課目トシ、且ツ其ノ教授分擔ヲ左ノ如ク定メタリ。

教育主任 宿○薰兄

讀方 横○武○兄、上○寛○兄

珠算 入○清○兄

習字 福○紫○兄

歴史 杉○淨兄

聖書聖歌 相○鑑○兄、全コウ姉

精神講話 宿○薫兄

出席勸誘係・管○丈○兄、入○清○兄

(内杉○淨兄ハ開校ニ先立チ健康ノ都合上教師タル事ヲ辭シタリ)

而シテ全年一月十八日午後二時ヨリ第一回職員會ヲ開キ、開校ニ關スル諸種ノ打合せ並ニ準備ヲ整へ、全一月二十六日會館ニ於テ華々シク開校式ヲ舉ゲタリ。此ノ式ニテ相○鎰○兄ガ教師側ヲ代表シテ兒童ニ爲セル講話ノ大要ハ左ノ如シ。

「我等主ニ感謝セン。幼兒ヲ我ニ來ラセヨトノ御聖言ノ儘ニ、主ノ大イナル恩恵ニ依リテ教會ハ汝等ノ爲ニ夜學校ヲ開ク事トナレリ。此ノ學校ノ設ケシレタルハ、第一ハ病者ナル兒童ニシテ、小學校ニ通學シ能ハザル者ノ爲、第二ハ晝間旅館商店等ニテ番頭女中小使等ヲ爲シテ、夜間勉學セントスル篤志家ノ爲、第三ハ上町小學校ニ通學スル者ノ豫習復習ノ爲ナリ。諸子ガ毎夜怠ル事ナク通學シ、教師ノ命ニ從ヒテ勉學セバ、二年後三年後ニハ必ズ學校ノ爲ニ謝シ又大イナル喜ビアルベシ。未ダ文字ヲ知ラズ算術ヲ知ラザル者モ、文字ヲ解シ計算ヲ覺へ、世ノ常ノ事理ヲ辨へ、懷シキ故郷トノ文通ヲナシ、新聞雜誌ノ一頁ヲ繕キ得ル力ヲ得ン。

我學校ハ其ノ名ノ如ク、基督ニ依ル潔キ希望ニ生キン爲ノ學校ナレバ、特ニ品行ヲ慎ミ、基督ニ喜バル、子供トナルベク常ニ心シテ勉強セヨ」ト語ル。

而シテ開校第一回ノ入學兒童ハ左ノ如シ。

岩○一○、江○渥、鷹○善○、高○ミ○、森○キ、高○昇、渡○キ○、栃○善○、日○ハ○子、水○チ○、平○重○、武○モ○、永○利○、太○榮○、藤○長○、近○憲○、木○健○、平○誠○郎、渡○ミ○、高○一○、飯○慶○、木○フ○エ、水○政○、眞○内○、稻○ヨ○、赤○福○郎、堀○ツ○。

二月四日教母ヨリ金三十圓ヲ受ケテ學校經常費トシ、教科書、筆、墨其他消耗品購入ノ資ニ充ツ。本校ノ開校ト共ニ最モ影響ヲ蒙リタルハ佛敎夜學校ニシテ、兒童ノ大部分ハ好シテ新設ノ敎會夜學校ニ來リシ爲、一時ハ佛敎夜學校生徒數四名ニ減少セリ。

扱テ未ダ机、腰掛等ノ設備モ無キ事ナレバ、毎夕敎會ノ隣ナル幼稚園ヨリ、腰掛四・五脚ヲ持テ來リ臨時借用シ、之ヲ机トナシテ勉強スル事トナリタルモ元ヨリ狭キ疊ノ部屋ノ事ナレバ寧<sup>ひ</sup>口暴レ廻ルニ相應ハシク、取敢ヘズ全生徒ヲ尋一二三、尋五六、高等科ノ三組ニ分チ敎授ヲ開始シタルモ、未ダ訓練ノ效淺ク、爲ニ敎師ノ氣苦勞ハ一通リニハ非ザリキ。

前述ノ如ク福場兄ハ事務多忙ノ爲出席時數甚ダ少ク、主任宿○薰兄ハ視力漸ク減退シ來リタレバ何事モ滯リ勝ニテ、最モ多クノ授業時間ヲ分擔シ精勵努力シタルハ上瀧兄、横溝兄ニシテ、入道兄、相馬兄姉、高須兄、中○弘兄之ニ次グ。

大正十四年三月學年末ノ頃トナリタルヲ以テ、全月二十六日ヲ以テ授業ヲ打切り、形許<sup>カタチバカ</sup>リノ終業式ヲ行ヘリ。授業日數(貳ヶ月)五十六日ニ過ギザレバ、別ニ此年ハ證書授與式等ヲ行ハズ、成績優秀者、精勤者ニ少シ許リノ賞品ヲ與ヘ、凡テハ次年度ノ發展ニ俟ツ事トセリ。

此年敎會ハ大イナル意氣込ヲ以テ聖堂ヲ建築スベク、聖職モ信徒モ心ヲ一ニシ、既ニ堂舎並ニ内部ノ設計、請負人ノ決定、契約ノ締結其他ノ爲屢々敎會委員會開カレ、就中當面ノ責任者タル各敎會委員ハ、工事ノ着手ト共ニ此ノ大責任ヲ全フスル爲愈々繁忙ナラントシ、本校敎師兼任ニ就キ頗ル無理アル事ヲ認メ、更ニ過去二ヶ月間ノ經驗ヲ通シテ兒童ノ個性ニ基ク教育ヲ徹底セシムル爲ニ專任敎師ノ必要ヲ感ジ、祈禱ノ中ニ適任者ヲ物色セリ。始メラレタル善キ業ノ上ニ主ノ祝福加ハリ、大正十四年四月新學期ト共ニ、本校ハ二名ノ良キ敎師ヲ得タリ。

## 第二十四章 聖望小學校

一ハ鈴○繩兄ニシテ、郷里○○縣N中學在學中發病シテ來草シタル者、今一人ハ弱冠教員檢定試験ニ登第シ、暫ク○○縣下ニテ教師タリシ武○國○兄ナリトス。

委員會ハ本學年間此ノ兩兄ヲシテ主トシテ教育ノ任ニ當ラシムベキ方針ヲ立テ、從ツテ創立ト共ニ臨時教師タリシ教會委員ハ新學期開始以前ニ、或ハ少ク共第一學期ノ終リ頃迄ニハ兼任タリシ教師ヲ辭シテ本來ノ立場ニ歸リシガ、未ダ生レテ間無キ「聖バルナバ教會附屬望夜學校」ノ爲ニハ注意深キ保母トシテ常ニ愛護ト援助ヲ惜マズ其ノ成長ヲ助ケタリ。然ル處全十四年五月十二日婦人鹽原イマ姉來草シ、幼稚園及本校ノ爲働ク事トナリタルヲ以テ、本校ハ更ニ新シキ力ヲ得タリ。

サレドミッシヨンハ諸種ノ都合上、兩親ヲ扶養スル立場ニアリシ姉妹ニ對シ豊カニ酬ユル餘裕無カリシヲ以テ、姉妹ハ全年八月三十日草津ヲ辭シ他ニ轉セラレタリ。(在勤四ヶ月)幾何モ無ク川越大與紡績寄宿舎々監トナリシ全姉妹ハ、後岡山託兒所保母勤務中専心勉學シ、婦人傳道師トナリ目下兵庫縣眞光教會ニテ働カレツ、アリ。

聖望小學校  
第二十四章  
扱テ新學年度ノ學級經營ニ就キ一言センニ、全生徒ヲ高學年組ト低學年組ニ分テ、主トシテ高學年級ヲ鈴○繩兄、低學年級ヲ武○國○兄分擔シタリシガ、大正十四年一月以降從來會館ヲ使用シ居リシ青年會婦人會神癒祈禱會等ハ夜學校ノ爲ニ會場ヲ讓リシヲ以テ、聖ルセ館聖ピリボ館聖マリヤ館等ニテ集會ヲ開キ來リシモ種々ノ不便ニ遭遇シタルヲ以テ、夜間授業ヲ午後ニ繰リ上ゲ會館ハ諸種ノ集會ノ爲ニ從前通り使用スル様ニシテハトノ議起リ、爲ニ夜學ヲ廢シ六月一日ヨリ毎日午後三時頃ヨリ約二時間ノ授業ヲ爲ス事トナレリ。サレバ旅館商店等ニ働ク者出席不可能トナリ、上町通學兒童ハ遊ビニ忙ガシク、生徒ハ殆ンド上町ニ通學セザル病兒童ノミトナリ、出席兒童數六月第一週ニテ六名(七月第一週ニテ十名)ニ激減シ望夜學校受難時代ヲ現出セリ。

サレド當面者諸兄聊カモ悲觀スル事無く、主ニ依リテ慰メラレカヲ得、十二月二十五日クリスマスニハ本校トシテ最初ノ兒童劇「天國銀行」其他數番ヲ演ジ好評ヲ博シタリ。

冬季休業中教師ハ各教會委員ヲ歴訪シ、「晝間授業又可ナリ。サレド之ガ爲ニ部落ヨリ通學スル多數ノ兒童ヲ失フハ、本校創立ノ目的ノ半ヲモ失フ事ナリ」ト、其苦衷ヲ述ベケレバ、大正十五年一月教會委員會ニテ協議ノ結果、再ビ諸集會場ヲ各ホームニ移シ會館ハ専ラ夜學ノ爲ニ開放セラレシヲ以テ、此月ヨリ出席兒童二十三名トナリ逐次増加ノ傾向ヲ示シ、此ノ最後ノ學期ニ於テ教フル者モ教ヘラル、者モ一ツ心トナリ學年ノプログラムヲ充實セシムルヲ得タリ。

三月二十六日學年末終業式ヲ行ヒ、學術、精勤、品行ノ三方面ヨリ成績ヲ考查シ、夫々受賞者ヲ決定シ教母ヨリ賞品ヲ授與セリ。

大正十五年度ニ於テ本校ハ更ニ良キ教師ヲ與ヘラレ、教授ニモ訓育ニモ一段ノ進歩ヲ示スヲ得タリ。當時梅澤氏方ニ寄寓シタリシ石○秋○兄ハ、○縣師範學校ノ出身ニシテ全縣下小學校ニテ教鞭ヲ執ル事僅カ二年、有爲ノ身ヲ以テ病魔ニ魅セラル、處トナリ、治療ノ爲來草シ居タリシガ、山中師及教會役員ノ懇請ニ應ジテ來投シ、新學期ヨリ本校教師トナレルナリ。

本學年ノ生徒數三十三名、内本校以外ノ學校ニ通學シ能ハザル者十六名、上町小學校ニ通學シ、主トシテ豫習復習ノ爲來校スル者十七名ナリ。出席歩合ハ夏季中稍々不良ナルモ、冬季ハ極メテ良好ナレバ、全學年ヲ通シテ補習學校其他各種夜間學校ノ夫レニ比シテ何ラ遜色ナキ狀況トナレリ。

斯クノ如クシテ本校ハ次第二神ノ祝幅シ給フ處トナリ、其内 稍々ニ充實ニ向ヒタレバ教師モ兒童モ皆喜ビテ主ニ感謝シ、更ニ御旨ナラバ、一、獨立セル校舍ノ與ヘラル、爲、二、椅子其他必要ナル教具ノ與ヘラルル爲三、湯之澤ノ全兒童ガ本校ニ通學スルニ至ル爲、四、特殊ナ使命ヲ帶ビタル小學校トシテ文部省ノ認定ヲ受クル爲ノ四項ニ就キ熱心ニ祈禱ヲ捧ゲタリ。

本學年中特記事項ハ、昭和二年三月三十日本校第一回ノ證書授與式ヲ舉行セル事ナリ、第一回初等科卒業證書ヲ交付セル者三名左ノ如シ。武○モ○、福○國○、稻○ヨ○

尙教師武○國○兄眼疾ノ爲大正十五年九月三十日職ヲ辭シ、本校出身武○喜○兄十七歳ニテ補助教師ニ選任セラレ、十月一日ヨリ低學年級ノ教授ヲ分擔セリ。武○國○兄ノ在職一年六ヶ月、本校ノ逆境時代ニ於テ山本兄ト共ニ良ク其ノ倒レントスルヲ支ヘ、日夜勤メテ倦マザリシヲ病故如何トモ爲シ難ク、兒童等モ痛ク其ノ去ルヲ惜ミ、常ニ訪ネ來リテ「眼ハ如何ガ？」ト慰メタリキ。

◇ 翌昭和二年學年度ニ於テハ教師ノ移動少カラズ、吉○又○衛○兄ハ四月十一日就任シ十一月七日辭任、横○武○兄ハ五月三日就任シ九月一日辭任、又伊藤梅吉兄ハ十一月七日就任シ翌年三月二十五日辭任、就中三年二月二十六日健康上止ムヲ得ズシテ 鈴○緹○兄ノ 辭任シタルハ學校ノ損失ナリキ。在職三年、大正十四年九月以降ハ教育主任タリ。職員兒童一同ハ金五圓及十字架一箇ヲ贈リテ、謝恩ノ意ヲ表セリ。横溝、吉村兩兄ノ後任トシテ高○一○兄迎ヘラレテ三年一月二十五日就任セリ。

本學年中特記スベキ事項ニ就キ二三ヲ述ブレバ、

一、教授課目從來ノ算術、讀方、書方、珠算ニ地理、歴史ヲ加ヘ、更ニ第二學期ヨリ圖書ヲ、第三學期ヨリ理科

聖書ヲ加ヘタル事。

ニ校舎トシテ教會裏ノ幼稚園ガ本校ノ爲午後一時ヨリ夜間ニ掛ケテ提供セラレタルヲ以テ、從來ノ夜間ノミノ教授ヲ擴張シ、上町學校ニ通學シ能ハザル義務教育未就學兒童ノミヲ集メテ、年來ノ希望タリシ晝間教授ノクラスヲ設ケタル事。

三 全年十二月十八日下町一流ノ旅館タル涼風館ガミッシヨンノ手ニ歸シ聖ステパノ館トナリ、全月十九日男子ホームハ殆ンド全部此處ニ引越シ聖、ピリボ館ガ空キタルヲ以テ、聖ニコラス館ト改名シテ兒童ホームトナリシ事及ビ此ノホームヲ本校教室トシテ開放セラレ、第三學期ヨリ此處ニテ授業ヲ開始スルヲ得、晝間部クラスヲ更ニ午前クラスト午後クラスニ分チ、午前クラスニ於テ從來ノ晝間部學級ヲ教授シ、午後クラスニ於テ尋一二ノ如キ夜學ニ通學困難ナル兒童ヲ教フルヲ得ルニ至リシ事等ナリ。

本年モ亦觀櫻會、運動會、バザー、クリスマス祝賀會ニ參加シ、競技又ハ演劇等何レモ好評ヲ得タリ。

此頃ヨリ學校ノ存在次第ニ明カトナリ、學校ヘノ訪問者及同情者モ現レ始メタリ。

十月十一月中、長野及松本ノ日曜學校生徒ヨリ、本校兒童ニトテ圖畫、綴方等數十點ヲ贈リ、主ニ在ル愛ヲ注ギタレバ、本校ニテモ大イニ其ノ情ニ感激シ、分ニ應ジ作文、圖畫等ヲ以テ返禮セリ。又名古屋市イエス教會、京都平安女學校、伊藤梅吉兄、岩井理三郎兄等ヨリモ屢々愛ノ贈物アリ。

昭和三年四月十八日午後二時半ヨリ、聖ニコラス館教場ニテ第二回證書授與式並ニ聖愛幼稚園保育證書授與式ヲ行フ。

本學年末ニ於ケル全兒童數四十一名、初等科卒業證書ヲ授與セラレタル者ハ渡○ミ○、木○健○ノ二名ナリ。

第二百二十七 聖バルナバ望小學校

大正十四年一月創立以來「望學校」ノ名ニ依リテ廣ク知ラレ、又夜學ヲ主トスルヲ以テ屢々「望夜學校」ト稱セラレ、遂ニ下町ノ主要ナル教育機關トナリシ本校ハ、主ノ祝福ニ依リテ逐年其内容ヲ充實シ、殊ニ昭和二學年度ヨリ晝間部クラスヲ設ケタル事ト第三學期ヨリ聖ニコラス館ヲ教場トスル事ヲ得タレバ、小ナリト雖モ學校ノ體裁ヲ備ヘ、教師ノ素質、教授訓練ノ内容等ニ至ル迄、僻村ノ小學校ニ勝ルトモ劣ラザル盛觀ヲ呈スルニ到レリ。サレバ昭和三學年度ヨリ校名ニ「小」ノ一字ヲ加ヘテ、「聖バルナバ望小學校」ト稱スル事トナリタリ。

本學年モ亦主ノ恩惠ニ滿テル學年ニシテ、六月十一日京都<sup>トキ</sup>面園教師タリシミス・マギルヲ教師ニ迎ヘ、愈々其陣容ヲ整ヘタリ。女史ハ米國ノ女子大學卒業後日本ニ渡來シ、教育ニ從事スル事二十餘年間、其ノ豐富ナル經驗ヲ以テ每週一時間（或ハ二時間）聖書及英語ヲ教授セラル、事トナリタリ。兒童ノ幸福又思フベシ。十月十二日教師佐○木○男兄病ニ臥シ再起ノ希望少クナリタルヲ以テ、其後任トシテ徳○唯○兄全十月二十二日就任セリ。サレド昭和三年一月以來本校ノ爲専心良キ働キヲ爲セル高○一○兄ガ、四年二月十八日病院勤務ニ轉ジタルヲ以テ、又一名ノ欠員ヲ生ズルニ至レリ。

本學年ハ午前部（梅組）午後部（櫻組）夜間部（松組）ノ三學級ヲ編成シ、各クラス毎ニ主任ヲ定ム。内梅組ハ他ノ學校ヘ通學スル能ハザル者ニシテ、午前三時間夜間一時間計四時間、一週二十四時間ノ正則的授業ヲナス。本年八月二十二日青年會主催バザール純益金中金百八圓六十一錢ヲ本校ノ爲寄贈セラレタルヲ以テ、感謝シテ之ヲ受ケ、職員會ノ決議ニ從ヒ兒童用机、全腰掛、參考書類戸棚、教授用大算盤、時計、教師用机、椅子等ヲ購入スルヲ得テ、大イニ教授能力ヲ發揮スルヲ得タリ。

昭和四年四月八日本校ニ於テ證書授與式ヲ行フ。幼稚園保育證書授與式ヲ兼ヌル事前年ノ如シ。特ニ記憶スベ

キハ本校創立以來嘗ツテ無カリシ多數ノ卒業生ヲ出シタル事之ナリ。即チ高等科（第一號）卒業證書ヲ授與シタル者、武○モ○、尋常科卒業證書ヲ授與セラレタル者、麥○サ○、三○三○、坂○鋳○郎、福○英○、木○隼○丸○義○、佐○間○治、岩○一○、渡○キ○、高○昇○十一名ナリ。外修業證書二名、學修證書二十三名。之ニ參列セル父兄二十名、日曜學校教師五名、幼稚園保姆（上下）五名、教會委員六名、前教師四名、ホーリネス教會教育主任一名、其他合計四十名頗ル盛會ナリキ。因ニ本學年末ニ於ケル教師ハ石○秋○兄、德○唯○兄、武○喜○兄ノ三名ナリキ。

昭和四年四月新學年ト共ニ、一ハ他學校へ通學シ能ハザル兒童ノ増加ト、一ハ其ノ訓育ヲ更ニ徹底セシムル爲全生徒ヲ五クラス梅組、桃組、松組、竹組、櫻組ニ分チ、教授課目モ聖書、算術、珠算、讀方、綴方、書方、圖畫、地理、國史、理科、生理、音樂ノ十三課目ニ及ビ、教フル者モ教ヘラル、者モ一層興味ト熱心ヲ増加セリ。六月二十八日武○喜○兄男子ホーム退館ニ付キ、其後任トシテ德○正○兄ヲ迎ヘタリ。全兄ハ下關中學ヲ經テ法政大學商學部豫科在學中發病ノ爲來草、特ニ音樂ニ堪能ニシテ本校ノ音樂教育ニ革新ヲ與ヘタリ。昭和五年三月一日夜學ノ爲部落ヨリ教師トシテ高○榮○兄ノ參加アリ。本學年ノ總兒童數四十六名、出席率梅桃ノ病者クラス九八%、竹松櫻ノ健康者クラスハ八〇%、逐年良好ニ向ヒツ、アリ。解剖生理掛圖、理科實驗器械十點及ビ生徒増加ニ伴ヒ兒童用机、腰掛ノ不足ヲ生シタルヲ以テ各三組購入セリ。

本學年ハ、本校ニトリテ最モ記念スベキ多クノ同情ヲ外部ヨリ受ケタリ。兵庫縣東須磨「子供ノ家」ヨリ兒童向書籍雜誌五十冊ノ寄附ヲ初メトシ、高崎商業學校教諭關口保雄氏ハ和漢洋書籍石油箱一箇寄贈シ、又東京伊藤梅吉兄、岩井理三郎兄ヨリモ屢々書籍雜誌類ヲ寄贈セラル。之等ノ書籍雜誌ハ本校兒童用及ビ教師用ノ小サキ書籍ヲ滿タセリ。

就中特筆大書スベキハ、米國御訪問中ノリ―教母ヲ通シテ、ニューヨーク市ミス・アーノルド御姉妹ガ五月二十六日ニ本校ノ新校舍ト運動場建設費トシテ金五千弗ノ大金ヲ寄附セラレタル報ニ接シタル事トス。

更ニ附記シテ記念スベキハ、二月十一日ミス・マギルヲ通シテ、神戸ノ實業家桑田權平氏ガ其令息桑田季則兄永眠記念ノ爲、オルガン購入費トシテ金二百五十圓ヲ寄贈セラレタル事實ナリ。季則兄ハ性溫和、幼時ヨリ音楽ヲ愛好シ、マギル師ハ其家庭教師トシテ前後數年英語ヲ教授ス。中學ヲ卒ヘ米國ニ留學中、前途有爲ノ身ヲ以テ彼地ニ客死セリ。依テ音楽ヲ好ム愛兒ノ記念ニトテ之ヲ寄贈セラレタルナリ。二月二十四日日本邦一流ノ樂器店ナル東京銀座十字屋樂器店ヨリ、特製二十箇年保險、ストップ十一箇附高級オルガン到着、美音當地上町小學校ニモ教會ニモ比類無シ。目下ノ處草津第一ナリト専門家ノ賞讃ヲ受ケタリ。

昭和五年四月十五日午後二時ヨリ本校ニ於テ第四回證書授與式ヲ行フ。修業證書ヲ授與セラル、者十三名、學修證書ヲ授與セラル、者三十一名、卒業生無シ。

學年末ニ於ケル在職教師ハ石〇秋〇、徳〇唯〇、徳〇正〇、高〇榮〇ノ四名トス。

#### 第二百二十八 新校舍建設

新校舍並ニ運動場ノ建設ハ本校ニ劃期的變化ヲ與ヘタルモノトス。サレバ茲ニ今少シク新設費寄附前後ノ事情ヲ述ブベシ。

基督教主義ニ其キ、病兒童ノ普通教育ニ併セ、上町通學兒童ノ補充的教育ヲ施スベキ使命ヲ以テ立テル本校ハ叙上ノ如ク生徒數ノ増加ニ伴ヒ聖ニコラス館東側ノ二室ヲ借用セル教室ハ著シク狹隘ヲ感ジ、且ツホームト學校教場ト居室ノ二重ノ負擔ニ依リ教授上ノ不便尠カラズ、サレバ教師モ兒童モ一ツ心トナリ、更ニ聖旨ノ成ル時、

小ナリト雖モ獨立セル新校舍ト運動場ノ惠與セラレン事ヲ熱心ニ祈リ來タリシガ、前節ニテ少シク述べタル如ク  
 リー教母昭和四年三月十二日午後三時横濱出帆、天洋丸ニテ英國訪問旅行ニ出發シ、其ノ途次米國ニューヨーク  
 市ニ滞在中、以前ヨリ草津ノ同情者ナルニューヨークシティ第五番通六三六番地ミス・マリア・アーノルド(Mr  
 iss Mary Helena Arnold)、ミス・アンニ・アーノルド(Miss Anni Arnold)ノ兩御姉妹  
 ヲ訪問シ、語ルニ草津救難事業ノ近況ヲ以テセリ。兩姉妹ハ親シク教母ノ口ヨリ其困難ナル事業ト草津ニ顯現セ  
 ル主ノ大イナル榮光ヲ聞キ、愈々銳キ興味ト深キ同情ヲ喚起シ、草津ノ事業中最モ必要ニ迫ラレタル設備ノ爲ニ  
 若干ノ寄附ヲ申出ラレタリ。リー教母ハ心ヨリ之ヲ喜び、望學校ノ爲、學ブニ獨立セル校舍無ク遊ブニ運動場無キ  
 下町兒童ノ爲ニ獻ゲラレン事ヲ乞ヒシニ、特ニ子供ヲ好ミ之ヲ愛セラレタル兩姉妹ハ議一決、一千九百二十九年  
 (昭和四年)五月二十六日(三位一體主日)金五千弗ヲ新校舍並ニ運動場ノ爲提供セラレタルナリ。六月十五日  
 教母ノ來翰ニヨリ此ノ大快報ニ接シタル職員兒童ノ勸喜善ク筆舌ニ盡シ難ク、手ノ舞ヒ足ノ踏ム處ヲ知ラズ。即  
 日午後七時ヨリ全員一同感謝會ヲ開キ、主ニ溢ル、感謝ヲ捧ゲ恩人ノ爲ニ祈リ、又職員會ヲ續開シ恩人ハ熱誠  
 込メタル禮狀及寫眞、兒童ノ成績品等ヲ贈リ、且ツ最モ聖旨ナルベキ校舍ト運動場ヲ如何ナル地ニ如何ナル形ニ  
 於テ具體化スベキカヲ日夜深慮シ、屢々特別職員會ヲ開キ、部落内外ノ實地踏査ヲナス。而シテ敷地ノ爲ニ第一  
 候補地ヨリ第四候補地ニ至ル四ヶ所ニ豫定地ヲ定メ、新校舍ノ設計ヲ整ヘ教母ノ歸草ヲ待テリ。而シテ尙建設ノ  
 爲ニ細部ニ亘ル具體的設計ト諸種ノ準備ヲ要シケレバ、七月一日職員會ヲ開キ職員中ヨリ二名ノ建設委員ヲ擧グ  
 ル事トナリ、石○秋○兄主トナリ徳○唯○兄之ヲ援ケ、尙必要ニ應ジテ職員會ヲ開ク事ヲ決セリ。

サレバ學校側及ビミッシヨン代理者ハ從來ノ經驗ニ依リ新校舍並ニ運動場ノ敷地ヲ一日モ速カニ入手スルノ有  
 利ナルヲ認メ、第一候補地タル草津町字草津六〇〇ノ一〇加〇小〇治兄所有畑地四百二十五坪ヲ價格三千四百五

十圓ニテ賣買契約成立シ、昭和四年十一月十二日町役場吏員、賣主加○小○治兄、買主代表山中政三先生、學校側ヨリ石○秋○兄、徳○唯○兄、徳○降兄、教會委員代表管○丈○兄、外隣接地所有者一同立會ノ上、敷地境界ヲ確定セリ。而シテ翌十三日ニハ全畑地ニ於テ地均工事起工式ヲ行ヒ、土工擔當者加○小○治兄地均工事ニ着手セリ。工事ハ順調ニ進捗シ、十二月既ニ七尺有餘ノ勾配アリシ畑地モ略々敷地トシテノ外觀ヲ備フルニ至リ、雪解ヲ待ツテ翌五月十一日長老貫民之介委員高○利○學校職員全部立會ノ上、地均工事ノ検査ヲ終了ス。

昭和五年春二月十七日リー教母恙ナク長途ノ旅行ヨリ歸草セラル。全年四月六日校舍新設問題ニ關シ最後ノ職員會ヲ開キ、リー教母、ミス・マギル、石○秋○、徳○唯○、徳○降鳩<sup>トウキョウ</sup>首協議ノ結果、

一、學校基本金トシテ金三千圓ヲ控除ス。

二、第一教室、第二教室、禮拜室、教務室、宿直室及便所ヲ含ム校舍總建坪四十五坪ヲ建設スル事。

三、コンクリートタタキ屋内運動場一棟ヲ追加ス。(ミス・マギル提案)

四、建設費坪八十圓以内ノ事

其他工事細部ニ亘リ、方法、様式等ヲ決定セリ。

依テ昭和五年四月十五日、新校舍建築ニ關シ、總工事費四千三百二十二圓六十錢也、基礎工事五十七坪、校舍五十八坪、落成期日ヲ昭和五年七月三十日限トシ、見積仕様書熟覽ノ上、請負人草津町湯之澤鈴○榮○兄、全加○小○治兄ト請渡人聖バルナバミッション代表マリア・エッチ・コンウオール・リー、全長老貫民之介、學校代表石○秋○ノ間ニ工事請負契約成立セリ。

五月八日基礎工事に着手シ、工事に順調ニ進捗シ、全月三十日ニ屋内運動場ヲ、又六月六日ニハ本校舎ノ上棟式ヲ行フ。此間教師兒童ハ材木ノ運搬、樹木ノ移植、エンヤラサノ掛聲勇シク手傳等其他下級生ニ至ル迄力ニ應

ジテ勞働奉仕ヲナス。斯クテ工事ハ更ニ順調ニ進ミ、八月十八日校舍並運動場全ク落成シタルヲ以テ工事請負人側ヨリ加科、鈴木兩兄、請渡人側ヨリリー教母、貫長老、山中牧師、教會委員高○利○兄、全鈴○繩兄、學校側石○秋○兄、徳○唯○兄、武○國○兄立會ノ上、契約書ニ照シテ工事ノ各部ヲ細密ニ檢シ、茲ニ其ノ引渡シヲ了セリ。

所要總經費八千六百三十四圓二錢、其内譯敷地四百二十五坪（地均工事費共）三千六百十圓、校舍建築費四千三百二十二圓六十錢（基礎工事費ヲ含ム）、校具及ビ諸設備費七百二圓四十二錢トナリ、殘金二千五百圓ヲ据置基本金トシテ横濱正金銀行ニ供託ス。

◎落成式

海ノ彼方ノ主ニ在ル友ノ情ニ依リテ、今ヤ新校舍ハ竣成セリ。サレバ昭和五年八月二十二日午後一時、永遠ニ記念サルベキ落成式ヲ舉行ス。此日天氣晴朗主ノ祝福先ツ顯レ、大玄關ニ立チタル日英米ノ大國旗ヲ中心ニ萬國旗ヘンポントシテ涼風ニ躍リ、松ノ綠ニ圍マレタル新裝ノ校舍美觀ヲ極ム。室内東端禮拜室ヲ一段高クシテ來賓席ト定メ諸般ノ準備ヲ備ヘタリ。正午頃ヨリ既ニ父兄來賓續々來場、主ニ在ル兄姉ヲ加ヘテ無慮三百名、全員ヲ屋内ニ容ル、能ハズシテ窓外ニ佇立スル者又算ヲ知ラズ。式ハ石○秋○兄司會ノ下ニ聖歌「主我ヲ愛ス」、開會祈禱山中牧師、聖書朗讀伊藤梅吉兄、勅語石○秋○兄、工事報告石○秋○兄、挨拶リー校主、落成ノ歌、高○利○兄相○鎔○兄ノ祈禱、貫長老ノ祝禱アリテ來賓祝辭ニ移リ、町長、區長、上町小學校長交々立ツテ祝辭ヲ述ベタリ。石○秋○兄ハ本校ノ主義精神ヨリ本校ノ上ニ與ヘラレタル神ノ祝福、米國ミス・アーノルドノ寄附ヨリ今日ニ至ル迄ノ詳細ナル報告ヲ爲シ、病兒童特殊教育機關トシテノ使命ヲ果ス爲、尙一層ノ理解ト援助ト同情ヲ乞フ旨ノ挨拶、リー教母ハ主基督ノ少年時代ニ於ケル勉學、宮ニ上リテ長老學者等ヲ驚カセタル事ヨリ神ノ攝理計リ

難ク病者救濟ノ爲ノイト小サキホームヨリ今日ノ大バルナバホームトナリ、更ニ醫療教育ノ二大機關ヲ備ヘ、今此ノ盛儀ヲ見ルノ喜悅ヲ述ベラレ、ベイン先生又主ノ名ニヨリテ建テラレタル本校ノ落成式ニ列シ、欣喜胸ニ溢ルト述ベラレタリ。

上町校長ハ教育ノ必要ト其ノ原理ヨリ説キ起シ、其名モ嬉シ望ト名付ケラレタル學ビノ園、病<sup>イラフキ</sup>ノ兒等ニ幸アレト祝ヒ、吉田區長ハ區民ヲ代表シテ教會及ビ事業ガ創立以來、區民ニ與ヘタル良キ影響、區民ノ道德的觀念ノ向上ヲ述べ、本部落ノ殆ント全兒童ノ教育機關タル本校ノ落成ヲ衷心喜ブト説ケリ。山本町長ノ朗讀セル祝辭ハ左ノ如シ、

祝辭

望小學校工ヲ終リ、此處ニ竣工ノ祝典ヲ舉行スルニ當リ、御招待ヲ辱フシ其席末ヲ汚スヲ得タルハ、不肖ノ欣幸トスル所ナリ。思フニ教育ノ事タル一日モ疎カニセザル最重要事ナリ。之ガ消長ハ直チニ人類幸福ノ増退ニ影響スル所大ナルベシ。然ルニ拘ラズ、種々ナル境遇ノ爲ニ教育ヲ受クルコト能ハザル兒童尠カラザルノ状態ニアリ。眞ニ憂慮ノ極ナリキ。此處ニコンウオール・リー先生速ク海外ニ赴キ、世界ノ篤志家ノ同情ニ訴ヘラレ、歸郷後直チニ工ヲ興サレ、此ノ美舉ヲ完ウセラル。不肖衷心ヨリ深厚ナル謝意ヲ表ス。殊ニ教育ノ任ニ當ラセラル、先生各位ニ置カセラレテハ、愛ノ御教ヘヨリ發露スル奉仕の觀念ヲ持ッテ、兒童ヲ指導セラル、アリ。必ズヤ眞善美ノ渾然融<sup>コンセン</sup>和セル教育ノ達成ヲ得ラル、事ヲ信ジテ疑ハザル處ナリ。尚終リニ臨ミ、リー先生ヲ初メトシテ各位ノ上ニ幸アラン事ヲ祈リ、祝辭トナス。

昭和五年八月二十二日

草津町長山本與平次

莊重ノ抑揚一堂ヲ壓セリ。

式後、歌、對話劇、ハーモニカ、聲樂家ベイン先生ノ獨唱、行進律動等ヲ餘興トシテ行フ。就中劇「のぞみ」ハ、本校ノ創立ヨリ落成ニ至ル迄ノ歴史ヲ劇ニ仕組ミタルモノニシテ、觀衆ヲシテ時ニ喝采時ニ戰キ時ニ泣カシメタリ。

大提燈行列

午後七時ヨリ落成祝賀大提燈行列ヲ行フ。樂隊ヲ先頭ニ、リー教母、貫民之介長老、山中政三執事、鶴田一郎醫學士、教會委員、兒童、父兄、部落有志等之ニ加ハリ、其數四百ト註セリ。蜿々長蛇ノ如キ燈列ハ、正門ヨリ右折シ聖ニコラス館上ニ出デ、途々萬歳ノ歡聲何處ヨリトモ無ク到ル處ニ起リツ、聖マリア館ニ添フテ左折シ、地藏ノ坂ヲ上リ、平和館、満足館、マーガレット館、慈ミ館ヲ廻リ、坂ヲ下リテ再ビ隊伍ヲ整ヘ下町ヲ一周ス。小サキ路次ニ至ル迄燈火ヲ以テ埋メラル。一老翁語リテ曰ク「正ニ御大典以來ノ盛況ナリ」ト。

落成式並ニ此ノ行列ニ用ヒタル「落成ノ歌」左ノ如シ、武井雷廷子ノ作詞ナリ。

聖望小學校落成ノ歌（大典奉祝歌ノ譜）

一、綠モ深キ落葉松ヤ

白樺茂ル高原ニ

建チシ我等ノ學ビノ舎

其ノ名嬉シキ望校

望、望、我が望

第二十四章 聖望小學校

二、春紅ノ鬼躑躅

谷間ニ香ル鈴蘭ノ

花ニモマシテ慎マシク

教ヘノ道ニ進マバヤ

望、望、我が望

三、温泉街ヲ包ム夕紅葉

燃ユルガ如キ眞心ヲ

神ニ捧ゲテ勇マシク

學ビノ庭ニイソシマム

望、望、我が望

四、白根下風ハスサブトモ

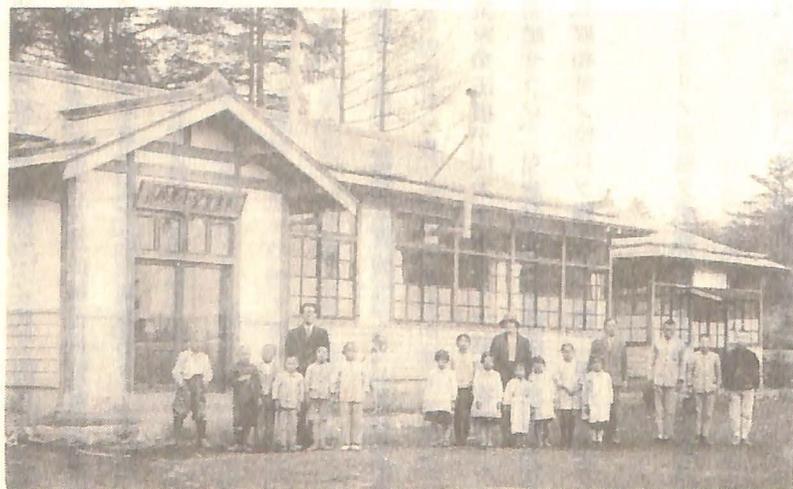
積雪谷ヲ埋ムトモ

勵ム我等ノ行手ニハ

望ノ光輝ケリ

望、望、我が望

翌二十三日、青年會婦人會主催ニテ新校舎ニ於テ落成  
祝賀バザー開催セラル。午前十時ヨリ賣品部開場、「ス  
テパノ饅飩」「落成壽司」「のぞみ羊羹」「バザー田樂」



聖望小學校々舎と學童達

「ジャイルス汁粉」「ルセ屋ノ水菓子」、何レモ千客萬來十一時頃ニハ早クモ「賣切」ノ札ヲ掲グル有様ナリキ。午後一時ヨリ音楽部開會、各種音楽、兒童ノ遊戲及ビダンス、兒童劇アリ。他方兒童成績品展覽會、祝落成短歌發表、電氣館等ノ催モアリテ頗ル盛會ナリキ。就中落成祝歌ハ遠ク熊本東京方面ノ當地關係者ヨリモ寄稿シ、應募實ニ百五十餘首、鶴田宗伯先生之ガ選ヲナス。天地人賞ヲ得タルモノニ左ノ如キモノアリ。

大氣澄ム秀麗ノ地ニ吾校ノ今日落成ヲ見ルゾ嬉シキ

新シキ學ビノ幕屋ナリヌレバ向ニゾ祈ル神ノミマモリ

大神ノミ恵ミ讀ヘ歌フナリ新ニナリシ學ビ舎ノ窓

五客十客中ニモ傑作少カラズ。電氣館ニハ發電所、無電受信塔模型、電信、電話ノ實驗等アリ。ダンス中最モ好評ヲ博シタルハ「花ノダンス」ナリキ。

又落成記念ノ為金品ヲ寄附スル者少カラズ。曩ニ神戸市ノ實業家桑田權平氏大オルガン一個ヲ寄贈セル事前述ノ如シ。之ニ引續キ高崎高商教師關口保雄氏ハ小顯微鏡一臺ヲ寄贈セラレ、兒童父兄及ビ部落有志四十九名ヨリ校具十八點、現金合計四十七圓二十錢ノ寄附金アリ。之ヲ以テ机腰掛等ノ校具ヲ購入シ、第二學期ヨリ木ノ香高キ新校舍ニテ授業ヲ開始スル事ヲ得タリ。

九月十四日、ライフスナイター監督ヨリ聖別ヲ受ケ、一同愈々上ヨリノ恩恵ヲ感謝シ聖キ望ミニ邁進スル力ヲ得タリ。

落成ヲ記念シテ選バレタル校歌ハ左ノ如シ。武井雷霆子ノ作詞、柴○盛○兄ノ作曲ナリトス。

校歌

一、峻リ立ツ白根ノ麓

大氣澄ム秀麗ノ地ニ

美シキ學ビ舎建テリ

之ゾ我方聖望學園

望、望、我方望

二、溫泉湧ク高原ノ町

穢ヘル愛ノ聖旗ヲ

仰ギツツ學ブ我等ハ

胸躍ル聖キ望ニ

望、望、我方望

三、雪ノ朝、雨ノ夕モ

イザ友ヨ努メ勳マン

輝ケル行手遙カニ

久遠ナル望ノ光

望、望、我方望

第二百二十九 聖望小學校

本校ハ從來當地一般ノ人々ヨリ「聖望小學校」ノ名稱ヲ以テ呼バレ來リシ事其他ノ事情ニヨリ、新校舍落成ヲ期トシ茲ニ「聖望小學校」ト改名セラレタリ。

昭和五學年度ニ於テハ前述ノ如ク落成式及ビ新設備等ニ伴フ準備及雜用等ノ爲、教師モ生徒モ極メテ多忙ナリキ。就中落成式前後ノ如キ、黎明ニ起キ出テ星ヲ戴キテ歸ル事極メテ屢々ナリキ。本學年ハ斯クノ如ク頗ル多事ナルニモ拘ラズ、教職員ノ出入多ク、四月二十八日新學期開始ト共ニ玉○義○兄、武○國○兄ヲ迎ヘタリシガ、玉井兄ハ在任僅カニ二週間ニシテ病院勤務ニ轉ジ、又落成式後幾何モ無キニ兒童等ノ深キ信頼ヲ得タル徳○正○兄家事ノ爲ニ歸國セザルベカラザルヲ以テ九月七日辭任。更ニ十月十三日夜學ヲ一時休止シタル都合上高○榮○兄辭シ、其後多年國鐵ニ職ヲ奉ジタル堅實ノ士瀧○早○兄入りテ教師タリ。又八月ミス・マギルハ輕井澤マンロー病院ニテ大手術ヲ受ケ、十月下旬手術後ノ療養ノ爲京都ニ轉セラレタルヲ以テ、其擔當課目ハ臨時ニリテ教母代リテ受持タル、事トナレリ。就中遺憾ナリシハ、十一月七日ヲ以テ本校ノ功勞者ナル石○秋○兄ガ視力減退ノ爲辭任シタル事トス。兄ハ大正十五年三月以來、學校ノ爲ニハ常ニ全精力ヲ傾注シ、理想ニ燃ヘテ學校發展ノ爲日夜

寢食ヲ忘レテ力ヲ致セリ。在任實ニ四年八ヶ月、本校ノ負フ處實ニ大ナリ。職員兒童一同送別會ヲ開キ、又金圓ヲ贈リテ感謝ヲ表ハセリ。

扱テ一月三十日音樂專任教師トシテ柴○盛○兄ヲ迎へ、數ヶ月休止シ居タル音樂科ノ教授ヲ每週一時間宛開始ス。斯カル變化ノ間ニ學年末近付キタレバ、殘レル教師心ヲ合セテ、昭和六年三月十二日午後一時ヨリ新校舎ニ於テ第五回證書授與式ヲ行フ。高等科第二學年卒業證書ヲ授與セラレタル者六名、其氏名左ノ如シ。

麥○サ○、坂○銀○郎、渡○キ○、福○英○、佐○間○治、早○昇

又尋常科卒業證書ヲ授與セラレタル者二名、

松○金○、山○操

ナリ。修業證書ヲ授與セラレシ者九名、學修證書ヲ授與セラレシ者一名、夜學ヲ一時休止シタル爲、上町小學校ニ兼ネ通學スル者二十二名ニハ證書賞品ノ授與ヲ行ハザリキ。

式後本校初メテノ試ミナル音謡歌劇「深山ノ團樂」ヲ演ジテ好評ヲ得タリ。

本學年末ニ於ケル教師ハ武○國○兄、徳○唯○兄、瀧○早○兄、柴○盛○兄ノ四名ナリトス。

×

越エテ昭和六學年度ハ本校創立以來稀ニ見ル平和ノ年ニシテ、職員ノ新任辭任モ一人ダニ無ク一致協力教育ニ專心スル事ヲ得タリ。ミス・マギルハ昭和五年十月靜養ノ爲京都ニ轉地シタルモ、舊倍ノ健康ヲ與ヘラレ、本年五月歸草シ缺員中ノ本校々長トシテ五月十二日新任、七月迄教授シ、八月二十七日午後一時、米國コロラド州デンバー市ニ開カル、米國聖公會總會ニ日本宣教師代表ノ一員トシテ參加ノ爲草津出發、約半歲旅行シ翌七年四月頃歸草セリ。

一時休止シタル夜學ヲ速カニ再開セン事ノ父兄ノ願ニ依リ、五月十五日ヨリ再開ス。特ニ英語、音樂、珠算ヲ每週一時間宛課スル事トナレリ。

五月十七日午後一時ヨリ校友會創立總會ヲ開ク。本校創立以來七年、其間卒業生及學修生ヲ出ス事六十名ニ達シタレバ、此際本校ヲ中心トスル一ノ團體ヲ作り、舊好ヲ濫メ親睦ヲ厚フシ、母校ノ發展ヲ圖ラントノ希望少カラズ。茲ニ多年ノ懸案タリシ校友會ハ成立ヲ見タルナリ。會則ニ依リテ會長ミス・マギル、顧問コンウオール・リ、賛助員前職員並現職員推舉セラレ、幹事ハ選舉ノ結果、青○昇、藤○長○、高○正○、武○モ○子、麥○サ○ノ五名當選セリ。

九月二十五日、縣會議員選舉ニ當リ、本校舎供用方町長ヨリ申込アリ。本年ヨリ湯之澤投票區新設セラレ、本校ハ其初回ノ用ニ供セラレタリ。

調査第四表 「望學校教師表」

第二十四章 聖望小學校

氏名	就任	辭任	在職年數	摘要	主ナル學科擔當者
宿○ 薰	一四、一、一七	一四、四、三〇	四ヶ月	第一代主任	上瀧
福○ 紫	"	"	"	"	横溝
相○ 銚	"	一四、六、三〇	六ヶ月	"	相馬コウ
入○ 清	"	一四、五、三一	五ヶ月	一四年四月ヨリ	中島
上○ 寛	"	一四、六、一五	六ヶ月	五月迄	一四
相○ コ	"	一四、六、一五	六ヶ月	臨時主任	鹽原

第二十四章 聖望小學校

氏名	就任	退任	在職年數	摘要	主 ル學科擔當者
横○武○ <sup>T</sup>	一四、一、一七	一四、五、三一 <sup>T</sup>	五ヶ月		武○國
鹽原 イマ	一四、五、三一	一四、八、三一	三ヶ月	第二代主任	鈴木
鈴○繩	一四、四、三〇	S 三、二、二〇	二年一ヶ月	第三代主任	鈴木
石○秋○	一五、三、一	五、一、七	四年八ヶ月	第一代校長	T 一五
高○利○	一五、一、一	T 五、二、四	二ヶ月		鈴木
佐○亮	一五、一〇、一〇	一五、一、三〇	一ヶ月		武井
中○弘	一四、二、一	一四、四、一〇	二ヶ月		石山
武○國○	一四、四、三〇	一五、九、二〇	一年六ヶ月		S 二 鈴木
佐○木○男	一五、三、一	一五、三、三一	一ヶ月		武○喜
武○喜○	一五、一〇、一	S 四、六、二八	二年七ヶ月		石山
吉○又○衝○ <sup>S</sup>	二、四、一	二、一、七	七ヶ月		S 三 武○喜
横○武○	二、五、二	二、九、一	四ヶ月	通計九ヶ月	石山
伊藤 梅吉	二、一、七	三、三、五	五ヶ月		武○喜
高○一○	三、一、二五	四、二、一八	一年二ヶ月		S 四 高橋
佐○木○男	三、三、二五	三、一〇、二	七ヶ月		石山
マギル	三、六、一	五、一〇、三〇	二年一ヶ月		S 五 徳田
徳○唯○	三、一〇、二二				

氏名	就任	退任	在職年數	摘要	主ナル學科擔當者
徳○正○	四、七、一	五、九、七	一年二ヶ月		石山
高○榮○	五、三、一	五、一〇、三	九ヶ月		徳滿
玉○義○	五、四、二八	五、五、三	一ヶ月		武○國
武○國○	五、四、二八				S六
瀧○早○	五、一〇、一三	七、五、一五	一年八ヶ月		徳滿
柴○盛○	六、一、二〇				武○國
マギル	六、五、二				瀧田

第二代校長

第二十五章 聖堂建築

第三百三十 リー女史ノ第一回歸英

大正十一年八月、リー教母米國及英國訪問ノ旅行ニ上ラル。蓋シ大正九年、十年、十一年ニ掛ケテハ、信者ノ信仰著シク高揚セラレ、彼ノリバイバルノ影響モアリテ頗ル活氣ヲ呈シ、從ツテ傳道精神横溢シ十一年度ノ如キ一ケ年ニ七十五名ノ新シキ信者加ヘラレ、其爲從來ノ教會ハ最早狹隘ヲ感ジ、日曜ノ傳道說教會ノ如キ、教會ハ弱キ信者ト多數ノ未信者ヲ容レテ既ニ堂ニ滿チ、若干ノ信者ハ窓外、玄關等ニ佇ミテ遙カニ禮拜ヲ捧グル有様ナリキ。サレバ信者一同ノ切ナル願ハ新シキ教會堂ノ建設ニ向ケラレ、之ガ爲ニ日夜熱禱ヲ捧ゲ應分ノ獻金ヲ惜マザリキ。リー教母モ亦一日モ速カニ此ノ問題ノ解決セラレン事ヲ切ニ祈リ、マキム監督ニモ相談シケルニ、資金募集ノタメ渡米シ、殊ニ大正十一年九月全米國聖公會總會開催セラル、ヲ以テ、之ニ出席シ草津ミッションノ事ヲ

話スハ最モ效果アル事ナラントノ事ナリケレバ、總會ニ出席旁々英國ナル故郷ニモ歸リテ、山積セル家事上ノ問題ヲモ處理セント、大正十一年八月當地出發長途ノ旅行ニ上ラル。

扱テ總會ニ於テハ五分間演説ヲ許サレ、「草津ミッシヨンニテ何ヲ欲スルヤ」ノ問ニ對シ、教會堂ノ建設最モ必要ナル事ヲ力説シ、又各地教會ニテ草津ノ事情ヲ報告セラレタレバ、多クノ新シキ同情者ヲ起セリ。

米國ヨリ大西洋ヲ横切り久シ振リニテ故國ヲ訪レ、親戚友人達ト樂シキ面會ヲナシ、佛蘭西經由歸途ニ就キ大正十二年二月恙ナク歸草セラレタリ。

### 第三百十一 傳道囑託員

大正十一年八月、ミッシヨン責任者タルリー教母賜<sup>レ</sup>暇<sup>ヲ</sup>歸省ニ先立ち、旭日昇天ノ勢ヲ以テ擴張ニ次グニ擴張ヲ餘儀ナクセラレ、愈々多事ナラントスル事業ノ遂行ニ後顧<sup>ヲ</sup>ノ憂ヲ除ク爲、リー教母ハ屢々各ホーム各團體主腦者ノ會合ヲ求メ細心ノ注意ト一層ノ努力ヲ要望シタリ。而シテ約半歳ノ留守中定住教役者ハ山中傳道師唯一人ノミニテ、信徒激増セル折柄各種靈的集會求道者會等ヲ初メ諸事多端ナルヲ以テ、之ヲ助ケシムル爲古キ信者中卓越セル人物三名ヲ選任シ、マキム監督ハ之ニ傳道囑託ノ辭令ヲ交附セリ。選任セラレタル者ハ、教會委員福○紫○兄、全相○銓○兄、全管○丈○兄ナリトス。

茲ニ三名ハ其ノ責任ノ愈々重キヲ感ジ、一致協力良ク教役者ヲ助ケ、内信徒ノ和合統制ヲ圖リ、外益々傳道ニ努力シ、教母ノ留守中良ク其任ヲ全フセリ。

大正十一年八月、リー教母ノ英米兩國訪問ニヨリ、多クノ同情者起サル、ト共ニ、信者ハ申合セテ愈々新築費  
 獻金ヲ勵ミ、且ツ感謝會、追悼會等ノ費用ヲ節シテ新築資金ニ捧ゲタレバ、次第二基金額増加シ、爲ニ大正十四  
 年一月二日、教會一般會計ヨリ新築費會計ヲ分離シ、福○紫○兄、入○清○兄等專ラ其會計ヲ司ル。新築ニ關シ  
 其ノ位置、規模、様式、經費等ニ就キテハ、屢々意見ノ交換ヲ行ヒ又熱心ナル祈リノ中ニアリシガ、三月十日ノ  
 特別教會委員會ニ於テ上町ノ棟梁芝頼太郎兄ヲ招キテ専門の意見ヲ聽キ、工事全般ニ亘リ協議ニ協議ヲ重ネタル  
 結果、從來ノ教會ノ南隣字地藏二九〇ノ二宅地四五四坪内ニ新會堂ヲ建設スル事、建坪三十六坪二合五勺、一坪  
 十六人半ノ割合ニテ五百九十九人、外四人ヲ加ヘテ六〇三人、一人賃金二圓五十錢トシ計金一千五百七圓五十錢  
 トスル事ニ契約成立シ、尙詳細ナル建築仕様書ハ飯○久○兄、杉○淨兄作製、契約書ヲ福○紫○兄起草ノ上、山  
 中政三師代表ニテ署名捺印ス。又全年四月二十四日ノ臨時委員會ニ於テ、基礎工事ニ關スル協議ヲ行ヒ、桐○佐  
 ○兄、多○忠○郎兄ノ兩人責任ノ下ニ病者ナル人夫ヲ使用スル事、直接配下ノ者以外ノ労働者ニテモ、道具持參  
 參加スル者ヨリハ所謂道具代ヲ勿<sup>レ</sup>ネザル事、労働者相互親切ヲ盡シ愛ヲ以テ連リ、協同一致教會ノ爲潔キ努力ヲ  
 捧ゲル事等ヲ條件トシテ兩兄ト契約ヲ締結ス。全五月八日全信徒ニ建築費獻金箱ヲ配布ス。五月二十八日基礎工  
 事ニ關スル臨時委員會ヲ開キ、聖堂基礎工事ハ、周圍ハ深サ三尺巾二尺五寸ニ掘リ割リ、割石、小石、砂ノ順ニ  
 入レ乍ラ、二十五貫以上ノ胴搗ニテ搗キ敷石ヲ置ク事、床下ハ二尺五寸角ニ掘リ、割石、小石ヲ入レテ搗キ込ミ  
 蠟燭石ヲ立テ、周圍ヘ砂ヲ詰メル事、土工設計者直井寅吉氏ヘ金三圓ノ謝禮ヲナス事、建築工事ヘ下町ヨリ佐○  
 木○助外一人ヲ七月一日ヨリ毎日參加セシムル事等ヲ決議セリ。

然ル處基礎工事ニセメントヲ使用スルノ良策ナルヲ知り、五月三十一日又々臨時委員會ヲ開キ、桐山、多胡兩  
 兄ハセメント工事ニハ未経験ニツキ、上町直井氏ノ指導ヲ受ケテ之ヲナス事ニ變更セリ。

基礎工事中石垣ノ修理ニハ殊ニ多額ノ費用ヲ要シタリ。近在ニ石材無キヲ以テ、霜間ノ谷ヨリ青木石工ヲ頼ミテ巨石ヲ細割シ、之ヲ荷馬車ニテ八十八ヶ所上迄運び、運送不通ノ爲之ヨリ土工ノ肩ニテ運ブ有様ナリキ。サレド工事擔當者ノ熱心ナル努力ト犠牲的精神ニ依リ工事着々進捗シ、八月十八日上棟式ヲ行ヒ全信徒聖堂ニ集ヒテ感謝ノ祈禱ヲ捧ゲ、又工事従業者ノ勞ヲ犒フ爲總計百三十八圓ノ祝儀ヲ與ヘタリ。

斯クノ如クシテ十月十一日全ク落成シタルヲ以テ、茲ニ記念スベキ落成感謝式ヲ新會堂ニ行フ。信徒ノ喜悅言ハン方ナク、此ノ式ニ列ル爲ニワザワザ紹ノ羽織マデ新調シタル篤信ノ者モアリキ。總工費實ニ一萬三千圓、聖壇ハ樺上材ニテ作レル飾小柱ニテ圍繞セラル。天井高ク採光、換氣良ク、誠ニ我等ノ神ノ家、眞理ト恩恵ノ源泉トシテ相應ハシク造營セラレタリ。本工事ニツキ直接責任ヲ以テ奔走努力シタル教役者、教會委員ハ左ノ如シ。

管理長老貴民之介、執事山中政三、宣教師コンウオー  
ル・リー、教會委員相○鑑○、全福○紫○、全杉○淨、

聖バルナバ教會上棟式



全高○利○、全入○清○、全宿○薰、全管○丈○。就中、山中執事、福○紫○兄ノ勞務多大ナリシト言フベシ。  
 大正十五年六月十日地方部監督ジョン・マキム博士ハ、總務局長山縣雄杜三長老ヲ從ヘテ來草、嚴カニ聖別式ヲ行フ。全信徒之ニ列シテ大イナル榮光ヲ拜シタリ。式終リテリ―教母ノ山ニテ感謝會ヲ催ホセリ。

之ト相前後シテ聖堂内部ノ設備モ漸ク調ヒ數葉ノ聖畫ハ飾置セラレ、ライフスナイダ補佐監督ハ信施受小皿ヲ寄附セラレ、更ニ聖地エルサレム教會ヨリモ信施受大皿ヲ寄贈シ來レリ。又リ―教母ハ母國ハイリーノ邸内家族教會ニ古クヨリ使用シ來レル高價ナル紅絨氈ヲ新祭壇ノ供用ニ捧ゲ、又ヨルダン河ニテ得タル稀ナル貝ヲモ洗禮式用トシテ寄附シ、レスターリック師ハ聖卓、日課臺、祈禱臺ヲ寄贈シ、又大理石ノ洗禮盤ハ聖壇前左側ニ設ケラレ、信徒ノ斷ヘザル心盡シニヨリテ聖壇ハ常ニ四季折々ノ美シキ花ニテ飾ラル。御堂ニ跪ク者ニシテ、敬虔自ラ襟ヲ正シ、辱ケナサニ涙零ルヲ覺ヘシム。

第三百三十三 聖書講義會

大正十四年十月一日ヨリ教會ニテ聖書講義ヲ開始ス。之ヨリ少シ前、明星團ニ於テハ安○千○郎師自ラ講師トナリ聖書學院ヲ開キ、三ヶ年繼續事業トシテ聖書ノ組織的講義ヲ開始シタリ。此ノ事ガ動機トナリ部落一般ニ聖書研究熱起リ、當教會ノ者スラ之ガ聽講ヲ願フ者アリシト言フ。サレバ當教會亦獨自ノ立場ヨリ聖書講義會ヲ開催シ、長キ以前ヨリノ信徒ノ願望ニ答フル事トナリタリ。全信徒ノ最モ出席ニ都合良キ時間ヲトテ、毎週一回午後七時ヨリ開キ、頗ル多數ノ聽講者アリ。

然ル間ニ冬モ明ケテ春立チ初ムル頃ヨリ、ホーム外ヨリメ出席者ハ比較的少クナリタレバ、都合上毎水曜日ノ午後ナス事トナリ、昭和五年ノ暮迄繼續セリ。

第三百三十四 聖書販賣部

大正十一年春、井上照子女史ノ發案ニテ、信者ノ爲ニ聖書ヲ購入シ置キ、必要ニ應ジテ原價ニテ之ヲ販賣スル事トナレリ。聖ルセ館ニテ福○紫○兄専ラ之ヲ擔當セリ。之聖書販賣部ノ初メナリ。大正十二年四月、杉○淨兄リー教母ヨリ若干ノ元金ヲ托サレ、獨立セル聖書販賣所ヲ經營スル事ヲ命ゼラレタレバ、杉田聖書房ノ看板ヲ掲ゲ、涼風館前(宮○建○店西隣ノ處)ニテ、聖書、祈禱書、聖歌、一般基督教書類ノ販賣ヲナス。全兄ガ聖ビリボ館ニ入館シテヨリ、全館ニ之ヲ移シ、更ニ昭和二年十二月聖ステバノ館ニ引越ト共ニ全館ニ移リ、鈴○繩兄代リテ主任タリ。然ル處舊大丸屋長屋ガ聖リベカ館トナルニ及ビ、全館ガ下町中最モ人通りノ多キ三叉路ニ面シ、且ツ教會ノ入口ニアレバ、聖書販賣部トシテ甚ダ相應ハシカラントテ此處ニ移シ、酒○筆○兄主任トナル。發行所又ハ賣捌店トハ原價ノ五分引或ハ一割引ニテ取引シ得ルヲ以テ、年々若干ノ利益金ヲ得、之ヲ傳道文庫ノ爲或ハ自販賣部ノ充實ノ爲等ニ使用ス。

第五期 充實時代

第二十六章 教會墓地及納骨堂

第三百三十五 教會墓地ノ設定

明治二十二年湯之澤ハ本病者住居區域ト定メラレ、其後自治團體トシテノ治績モ年ト共ニ見ルベキモノアリ。サレド未ダ獨立セル墓地、火葬場等ヲ有セズ、死體ハ多ク上町光泉寺扱ヒニテ同寺墓地ニ埋葬スルヲ例トシタリ。

偶々遺骨ノ格納、運搬等ノ都合上火葬ヲ欲スル者ハ、之ヲ同ジク上町ノ「舟ノ尻」ト名付クル處ニ運ビテ名バカリノ火葬ニ附ス。其様露天ニ舟ノ底形ノ小穴ヲ掘リ、之ニ二本ノ棒ヲ渡シテ棺ヲ乗セ、下ニ積マレタル薪ニ點火スルモノナリ。サレバ雨天或ハ冬季積雪ノ候ハ、死體ノ燃燒極メテ不完全ナレバ、半焼ノ儘其大部分ヲ谷底ニ放棄シ、僅カニ其責ヲ塞グ様ナリキ。何レニセヨ下町ニ死亡者生ジタル時ハ、死體ノ運搬、葬送等ニ當リテ必ず上町ヲ通過セザルベカラズ。爲ニ不便甚ク、下町ノミノ共同墓地ヲ得ン事ハ多年ノ願望ナリキ。大正七年ニ至リテ漸ク其目的ヲ達成シ、即チ下ノ原通稱吾妻公園下南方ニ亘ル原野五反歩ヲ拂下ゲ、之ヲ當時役場ノ信用アリシ大谷派説教場主任ノ管理ニ屬シテ下町ノ一般共同墓地トナセリ。

元ヨリ病者ノ事ナレバ、遠ク祖先代々ノ墓ヲ此地ニ有スル者殆ンド無カリシモ、一代、稀ニ二代ノ父祖ヲ有スル者ハ、自ラモ尙其墓側ニ眠ラン事ヲ欲シ、下町專用墓地ノ設定ニ反對スル者無キニ非ザリシモ、一般ノ者ハ寧ロ之ニ賛成シ、之ニ依リテ大イナル便益ヲ受ケタリ。我教會ニ於テハ、諸種ノ都合上佛教信者ヨリ獨立シタル一定區域ヲ教會墓地トシテ分與セラレン事ヲ欲シ、管理者ニ對シテ再三交渉ヲナセル結果、其境界トナルベキ土堤築造費ノ名目ヲ以テ金三百圓ニテ最南端二畝歩ノ讓渡ヲ受ケ、此地ヲ以テ教會墓地ト定メタルモノナリ。

### 第百三十六 納骨堂

大正九年ニハ下町共同ニテ獨立セル火葬場ヲ築造シ死體ノ處置ヲ容易ナラシメ、金二圓ノ使用料ニテ何人ニモ之ヲ提供シタリ。然ル内教會ハ日ニ主ノ大イナル祝福ヲ受ケ信徒數急激ニ増加シ、其レニ比例シテ死亡者モ亦其數ヲ加ヘタレバ、一人毎ニ土葬ヲナシ墓標墓石等ヲ建立スル時ハ、遂ニ限ラレタル土地ハ幾年ナラズシテ全ク今後永眠スル者ノ埋葬區域ヲ失フニ至ラントスルニ至レリ。依テ此處ニ、熊本回春病院ニ於ケル設備ヲ知レル

兄弟等ヨリ、我教會ニ於テモ一大納骨堂ヲ設ケテハ如何ト言フ議起ルニ至リ、即チ大正十五年九月十五日四阿ニテ開カレタル教會委員會ニ於テ、其提案ヲ採用シ新納骨堂建設案ヲ議決セリ。而シテ全日午後三時ヨリ貫民之介長老、山中政三執事、リー教母、委員相〇鎔〇、全野〇熊〇、全上〇寛〇、全入〇清〇、全管〇丈〇ノ諸兄ハ、下ノ原共同墓地ニ赴キテ實地視察ヲ行ヘリ。新納骨堂ノ位置ハ福〇紫〇兄墓碑ノ北側ニ決定シ、築造ニツキテハ尙専門家ノ意見ヲ聽取シタル上確定スル事トセリ。

九月十六日、會館ニ臨時教會委員會ヲ召集シ、納骨堂ニ關シテ協議ヲナス。其結果基礎工事コンクリート全石造、見積經費八百六十五圓、竣工期日大正十五年十月三十日、請負者上町石工井出京作ノ事ニ決定セリ。

越エテ九月二十九日金曜日ノ教會委員會ニ於テ、屋根ヲ羽目トスル爲金二十圓ヲ増加スル事、十字架並ニ内部ニ設置スベキ三段ノ骨棚ヲ田〇子〇吉兄ニ注文スル事等ヲ決ス。

斯クシテ工事順調ニ進捗シ、十月三十日全ク竣成ス。方九尺、全石材、堅牢無比、入口ニハ貫民之介長老ノ筆ニ依リテ「聖バルナバ教會納骨堂」及ビ「我ハ復活ナリ生命ナリ我ヲ信ズル者ハ死ストモ生キン」トノ聖語記サレタリ。

毎年、昇天日ト諸聖徒日ニハ全信徒此ノ前ニテ禮拜ヲナシ、聖餐式行ハル、ヲ例トス。此時ヨリ教會委員中ヨリ墓地係一名又ハ二名選定セラレ、墓地ニ關スル事務及雜務ヲ處理ス。多數ノ英靈此處ニ眠ルヲ以テ、四時訪ル、者ノ跡ヲ斷タズ。在リシ日ノ面影ヲ偲ビ、主ニヨリテ眠レル者ノ幸福ヲ想出ルニ相應ハシキ處トナレリ。

第三百三十七 香川松

草津ヨリ鈴蘭村ヲ經テ霜間ヘノ途中、品木道ト沼尾道トノ分岐點ニ當リ一本ノ松樹アリ。亭々トシテ聳立シ、

翠葉繁<sup>ミヤコバ</sup>り、夏ハ涼シキ木蔭ヲ作り、冬ハ吹雪ニ惱ム行人ノ避所トモナレバ、頗ル人々ニ愛セラレタリ。サレド草津町ニ一製材所設ケラレテヨリ斯クノ如ク路傍ニアリテ運搬ノ便良キ立木ノ切ラレテ板ニセラル、例少カラズ。草津ト霜間ノ間ヲ四時往來スル男子ホーム館員、在ノ人々ハ元ヨリ、此道ヲ利用スル總ベテノ者ハ斯カル事ナク此ノ樹ノ何時迄モ此處ニアル事ヲ願ヘリ。

時ニ香川縣ノ出身ニテ一等機關士トシテ多年海運業ニ従事セル香○庸○兄本病ヲ得テ來草男子ホームニ在リ。大正十五年六月其病重リテ臨終迫ルヤ、神ノ榮光ト公益ノ爲ニ少許乍ラトテ金百圓ヲリー教母ニ託セリ。依テ全兄ノ永眠後、リー教母ハ役員トモ協議ノ上、此ノ松樹ト其ノ立テル土地ヲ購入シ、長ク行人ノ爲ニ圖ル所アラントセリ。即チ大正十五年七月所有者六合村字沼尾福島伊八兄ニ交渉ノ結果、松立木一本、山林二畝三步（字沼尾ケ原六八四ノ二）ヲ金百十圓ニテ賣買契約成立シ、故人ノ記念ニ於テ之ニ「香川松」ト命名シ、愈々愛護スル事トナレリ。此ノ處眺望絶佳、紅葉ノ頃殊ニ然リ。樹下ニ小亭ヲ設ケ、ベンチヲ備ヘテ、行人慰安ノ用ニ供ス。

X

昭和六年七月、國立療養所設置ニ伴ヒ、該地モ亦其區域ニ編入セラレタルヲ以テ、愛惜禁ズル能ハザリシト雖モ如何トモナシ難ク、「現状維持」ノ條件附ニテ所有權ヲ國立栗生樂泉園ニ讓渡セリ。

### 第三百十八 電車問題

#### (1) 第一回住民大會

電車乘車問題ハ湯之澤開始以來ノ出來事ナリ。病者ノ團結力ヲ最モ發揮シタル時ナリ。信者ニシテ此ノ運動ニ携リシ者モ少カラザレバ、茲ニ其ノ概要ヲ摘記セントス。

草津輕井澤間ヲ連絡セシメントスル草津電氣會社々線草津電鐵ハ、大正十年秋婦戀迄開通シ、旅客浴客ノ來草ニ大イナル便宜ト時間ノ經濟ヲ與ヘタリ。サレド本病者ノ乘車ニ就イテハ、營業規則ヲ楯ニ絶對ニ之ヲ拒絶シ、殊ニ輕井澤驛ノ客引タル峰公ニ旨ヲ含メテ驛ニ出張セシメ、全氏ガ馬ヲ有シ、斷ラレタル病者ヲ馬ニテ運ビテ利スル事ト、全氏ガ病者ノ鑑別ニ鋭キ眼識ヲ有スル事トヲ利用シタレバ、一見健康者ノ如キ輕症者ヌラ何等ノ同情モ酌量モナク乘車拒絶ノ厄ニ遇ヘル者少カラズ。況ンヤ中症以上ノ者ニ於テヤ。サレド視力ヲ失ヒシ者、歩行ニ困難スル者、乾性ニテ紛ラハシ得ル者等電車ノ開通ヲ聴キ、之ヲ利用セント豫定シ來レル者ノ遽カニ乘車拒絶ニ遇フ時ハ、其困惑一方ナラズ。爲ニ難澁スル病者日ニ多クナリタレバ、町内有志協議ノ上會社當局ニ向ッテ病者ノ乘車ニ就キ寛大ノ處置アラン事ヲ懇願セルモ、頑トシテ聽入レザル爲、萬策窮シ、大正十一年三月十日佛教場ニ於テ湯之澤住民大會ヲ開催シ、縣當局及ビ内務省ニ對シテ事情ヲ詳記セル嘆願書ヲ提出スル事ヲ決議セリ。

實行委員トシテ高○籌、吉○浩○ノ二名ヲ舉ゲ、當時涼風館浴客タリシ法學士水○慶○氏起草委員トナリ、半紙十枚ニ亘ル長文ノ原稿脱稿セルヲ以テ再ビ役員會ニ諮リ、實行委員高田、吉田ノ兩氏ハ之ヲ携ヘ、縣當局及ビ内務省當局ヲ歴訪シ百方奔走事情ヲ訴ヘタル結果、會社ハ非公式ニ輕症者ノ乘車ニ就イテハ寛大ノ處置ヲ執ルベシトノ答ヲ與ヘタリ。

(四) 第二回住民大會

然ルニ大正十五年九月十五日同電鐵ハ遂ニ終點タル當草津迄開通シ、花々シク開通祝賀會ヲ開キ、草津ヨリ居乍ラニシテ本線ト連絡シ交通ノ便茲ニ備ハリ、町民ノ益スル所頗ル大トナリキ。サレド上町宿屋組合ハ上町旅館ノ發展上乘客ノ不快ヲ招ク本病者ノ乘車ハ依然之ヲ拒絶スベシト主張シテ息マズ、社長川村銀治氏又原則トシテ病者ノ乘車ハ拒絶スルノ主義ナリケレバ、非公式ノ約束モ今ハ空シク、峰公ヲ通シテ拒絶セラル、病者日ニ加ハ

ル状態ナリシカバ問題再燃シ、我等病者ノ故ニ隱忍自重之ヲ久シウセリ。然ルヲ斯クノ如ク先約モ無視セラレ、嘆願ハ一蹴セラレ、無辜ノ同病者難澁スルニ於テハ、今ヤ一命ヲ賭シテ斷然解決セザルベカラズト強硬論者甚ダ多クナリタレバ、昭和二年五月住民大會ヲ開キ、何事モ一步ヲ譲リテ先ヅ病者ノ爲ニ病者専用ノ一車ヲ附屬シテ運轉セラレタキ旨ヲ嘆願スル事ニ決シ、高田、吉田、吉川、久保田（柔道四段）等實行委員ニ擧ゲラレ、委員ハ直チニ上京シ、川村社長ト會見シ、又一方上町々會議員中依然下町ニ不利ナル反對運動ヲナセル者アリシヲ以テ之ヲ牽制スル爲特ニ病氣ノ重キ有志ヲ選ンデ之ヲ歴訪セシメ、今回ノ下町ノ嘆願ニ反對スルヤ否ヤ、下町ノ者ニ同情ヲ有スルヤ否ヤヲ質シ、町會ニテモ委員ヲ擧ゲテ下町ノ爲ニ努力セラレン事ヲ懇願セシメタリ。依テ町長市川善三郎氏、議員山本與平次等實行委員トナリ、共ニ上京ス。然ルニ川村社長ハ社ノ經營上採算立タズトテ頑トシテ聽カズ。又上町町會議員中ヨリ選出セル實行委員中ニモ裏切者アリテ、「交渉ノ結果宜シカラズ」ト飛電來リタレバ、住民甚ダ激昂シ、數度大會ヲ開キ、且ツ下町實行委員等空シキ結果ヲ携ヘテ歸草ノ日迫ルヤ、其ノ勞ヲ稿フ爲トテ下町全住民停車場迄出迎フベシトナシ、即チ半鐘ヲ亂打シテ濱名館前ニテ勢揃ヘヲナシ、且ツ交々立チテ會社ノ不誠意ヲ難詰シ、悲憤激越ノ演說ヲナス。時ニ取締リノ任ニアリシ巡査部長ハ下町ノ者ニイタク同情シ居タレバ、今回ノ目的ヲ達成スルタメニハ團結セル群集ノ力ヲ必要ノ旨ヲ暗示シ、毫末モ干渉壓迫ノ擧ニ出ザリシヲ以テ、之迄ノ幾度ノ大會モ極メテ平穩裡ニ散會シ得タリキ。

サレド代表委員歸草ノ際ハ必ズ一騷動アルベキヲ豫想シ、數時間前「事態容易ナラズ」ト長野原本署ニ打電セラルヲ以テ、署長大イニ驚キ本署ヨリハ署長以下全員、更ニ附近ノ各署ニ急援ヲ求メ、之ヲ合シテ公私服巡査刑事合計四十餘名急派、縣ヨリ桂保安課長、稻田社會課長等モ急ギ來草ス。而シテ桂課長先ヅ宿屋組合事務所ニ有志ヲ集メ、「我等來リシハ諸君ヲ彈壓シ又ハ禁迫センガ爲ニアラズシテ、全ク病者ニ對シテノ深キ同情ノ發露

ナリ。暫ク我ガ言フヲ聽カレヨ」ト、説キ始めシモ、激セル群集ハ容易ニ鎮靜スベクモ見エズ。斯カル間ニ時ハ進ミテ豫定ノ三時近ヅケバ、再ビ半鐘ヲ亂打シテ「行ケ！行ケ！驛ニ行ケ！」ノ聲ト共ニ「川村ヲ倒セ」「人道ノ大敵」「暴利會社ヲ葬レ」等ノ激越ナル文句ヲ連ネタル數本ノ旗ヲ押立テ、將ニ下町ヲ出發セントス。署長今ハ止ムヲ得ジト拔劍シテ之ヲ喰ヒ止メヨト命令ス。一方稻田課長モ濱名館前ノ石ノ上ニ立チ、聲ヲ囂ラシテ自重論ヲ説ケド、大廈ノ倒レントスルヲ一木ニテ支ヘ難キ如ク意ノ如クナラズ。是ニ於テ最後ノ策トシテ集團分割法ヲ採リ、四・五名宛分離シテ一定ノ時間ヲ置キ出發セシム。群集心理ニヨル破壊的行動豫防ノ爲ナリ。サレド裏道ヨリ一人行キ二人走り、遂ニ停車場迄ニ二百名位ノ者ガ警戒網ヲ潛リテ參着セリ。停車場内外モ亦洩レナク巡查ヲ配置シ警戒嚴重ヲ極ム。問題當面ノ責任者タル驛長ハ早クモ危害ヲ避クル爲ト稱シ嬌戀ニ逃ゲ、僅カニ一二ノ驛員ヲ留ムルノミ。「犬猫スラ乗スルニ人ヲ乗セザル電車アラバ、速カニ之ヲ爆破セヨ」等ト演説ヲ始メタル者モアリ。愈々實行委員ノ乗レル列車ホームニ到着スルヤ、萬歳ノ聲山ヲ動カシ、委員ヲ先頭ニ二列縦隊ヲ作り上町ヲ練リ歩キ、殊ニ下町ノ願出ニ反對セリト傳ヘラレタル大阪屋ノ前ニテハ、「今夜ハ火付ケニ來ルカラ宜シク頼ム」、「手前ノ家ハ二日間ト其ノ儘ニ置カヌ」等ト脅迫的言辭ヲ弄スル者モアリ。濱名館前ニ到着スルヤ直チニ報告演説會ニ移リ、大イニメートルヲ擧グ。而シテ實行委員ノ歸草後ノ一般情勢ヲ聽取セル齊藤警察部長ハ今後ノ事態尙重大ナリト見テ自ラ來草シ、兩者ノ間ヲ調停シ、一、夏季病者運搬ノ爲自動車一臺（約一千八百圓）ヲ本縣ヨリ貸與スル事、二、冬季降雪ノ爲自動車運轉不可能ノ期間ハ、一ト六ノ日ニ特別列車ヲ運轉シ、鶴溜、谷所間ヲ運轉ス。但シ運賃ハ鶴溜、谷所間五人分、谷所、鶴溜間ハ十人分ヲ支拂フベキ事等ノ協定ヲ得、茲ニ足掛六年間ニ亘ル乘車問題ハ目出度ク解決スルヲ得タリ。昭和二年七月、〇〇縣二本松ニテ運轉手ヲナシ居タリシ澁〇秋〇郎氏ヲ招キテ下町專屬運轉手トナシ、五月ヨリ十月迄輕井澤草津間ノ運轉ヲ開始セリ。

最後ニ本問題ニ對スル教會側ノ態度ヲ一言センニ、昭和二年五月二十四日教會々館ニ於テ開カレタル青年會例會ニ於テハ、乘車問題ニ對スル態度ヲ決定スベク會員四十名參集、相談スベキ事項トシテ司會者入道兄ハ草津電鐵ノ病者拒絶問題ニ就キ、交渉開始ヨリ今日ニ至ル迄ノ詳細ナル經過ヲ報告シタリシガ、次イデ山中師ハ「個人的參加必ズシモ止ムベキニ非ズ。サレド教會トシテ又クリスチャントシテノ立場上、直接行動ニ出ヅル事好マシカラズ。何事モ平和的解決方法ヲ選ブベキナリ。就中頑迷ナル非人道的行爲ニ對シテハ、何處迄モ父ナル神ニ祈リ、彼等ノ反省ヲ促シ、目的貫徹ノ爲ニ盡力スベシ」ト述べラレタリ。次イデ六月十四日會館ニ於ケル例會ニ於テ、山中會長ハ路加傳ノ一句ヲ引用シ「我等ノ熱心ナル祈リニ應ヘラレ、部落民ノ努力ト警察部長ノ同情ニテ乘車問題ノ圓滿ニ解決セルハ、聖書ノ聖句ニ適ヘリト言フベシ」トテ一同共ニ主ニ感謝セリ。

## 第二十七章 女子愛友會及ビ小兵士會

### 第三百三十九 花束會

我教會ガ小學校卒業後ヨリ結婚前後ノ娘達ノ教養ト指導ニ特別ナル關心ヲ持ツニ至リタルハ大正十年九月ノ頃ヨリトス。三上千代女史ノ主唱ニヨリ、其名モ花束會ト稱シ、毎月一回及至二回特別集會ヲ催フス。三上女史曰ク「娘ハ人生ノ花ナリ。其ノ集ル處實ニ美ハシキ花束ノ如シ。サレバ花束會ト名付ケタルナリ」ト。蓋シ此ノ時代ノ教養ト性格ハ多ク一生ノ運命ヲ決定ス。而モ情勢ノ赴ク處往々常規ヲ逸シ、屢々誘惑ノ陷阱ニ陥ル。サレバリー教母モ亦本會ノ指導ニ力ヲ用ヒ、毎月一回靈的集會ヲ開キテ自ラ主ト偕ナル生活ノ道標トナリ會員ノ靈性發達ヲ助ケタリ。又三上女史ハ裁縫編物等ヲモ教授セリ。會員中ニハ白○シ○エ、今○シ○、桐○五○、山○タ

○等ノ名モ見ユ。會長三上千代女史、賛助員ハ相○コ○、福○セ○ノ兩姉妹ナリシ。之今日ノ女子愛友會ノ前身ナリトス。

第四百十 女子愛友會

昭和三年五月二十四日京都<sup>みやこ</sup>裏面學園教師ヨリ當草津ミッシヨンノ働キニ轉ジタル教育家ミス・マギルハ、聖マ  
 ーガレット館ノ舍監タル傍聖望小學校、日曜學校ニモ教鞭ヲ執リ、大イニ兒童教育ニ力ヲ注ギタリシガ、更ニ若  
 キ娘達ノ爲ニ世界的ナル女子愛友會ニ加盟スル草津支部ヲ創設セン事ヲ欲シ、リー教母トモ相談ノ上全昭和三年六  
 月諸般ノ準備ヲナシ、略十三歳ヨリ二十歳位迄ノ娘達ニ對シ會則ヲ説明シ入會希望者ヲ募<sup>つ</sup>レリ。本會ノ趣旨ニ賛シ  
 早速入會シタル者、武○元○、本橋民代、上瀧君代、河○靜○、櫛○五○、武○糸○、麥○サ○子、武○奈○江、  
 高○美○、萩○貞○等十餘名ニ達シケレバ、ミス・マギル、リー教母臨席ノ上創立總會ヲ開キ、會則ヲ決定シ、役  
 員選舉ノ結果、會長(書記兼任)ニ上瀧君代當選。尙會則ニ依リ名譽會長ミス・マギル、名譽賛助員ミス・コンウ  
 オール・リー就任シ、又賛助員ニ池○ミ○、先崎ケサノ兩姉選任セラレタリ。

抑々女子愛友會ハ西曆一八七五年(約五十年前)英京ロンドンノランバラタレスニ於テ、篤志婦人ミス・エス  
 ・タウンゼンガ小サキ少女會ヲ組織シタルニ端ヲ發ス。當時英國ニテハ婦女子ノ職業戰線進出著ルシク、殊ニ小  
 學卒業ヨリ結婚期前後ノ娘達ノ就職者増加ニ伴ヒ、此ノ娘達ノミノ團體ヲ必要トシタレバ、聖公會ノ熱心ナル信  
 者ニシテ特ニ若キ娘達ヲ愛シ之等ノ問題ニ鋭キ興味ヲ有セシタウンゼン女史ハ、先ヅロンドンヲ中心トスル聖公  
 會信者ナル娘達ノ少女會ヲ創リタルモノトス。然ルニ此ノ運動ハ最モ時勢ニ適合シ、多クノ後援者ヲ得、就中聖  
 公會ノ推薦ト指導監督ヲ得ルニ至リ、茲ニ愈々大イナル便宜ヲ得、英國聖公會ハ言フ迄モナク、米國聖公會内ニ

モ多數ノ支部設ケラレ、遂ニ我草津ニモ之ヲ設クルニ至レリ。本會ニ四個ノスローガンヲ有ス。愛、細心、純潔、信仰即チ之ナリ。會員タラント欲スル者ハ會則ニ遵ビ一定期間準會員トシテ會員ニ適スルヤ否ヤヲ試ミラル。會長及ビ贊助員ハ會ノ指導者トシテ會員ノ靈的、肉體的、練磨、集會方法、個人的指導等ノ具體案ヲ斷ヘズ考究スル責務ヲ有ス。會員ハ役員ヲ信賴シ、先輩トシテ指導者トシテ時ニ友人トシテ何事モ隱ス事ナク凡テヲ話シ、特ニ會員中好キナ人ヲ選ビ或ハ或人ノミヲ嫌惡スル事ヲ禁ゼラレ、愛ノ理想ヲ以テ愛ノ娘トシテ言葉ト行ヒノ兩面ヨリ隣人ニ對シテ親切丁寧ナルベキ事ヲ勸告セラレ、斷ヘズ自ラ四個ノスローガンニ向ッテ精進スベキモノトス。

昭和四年七月二十八日午後七時會則ニ依ル第一回入會式ヲ教會ニ於テ行フ。マキム監督司式、アンデルス長老補式ノ下ニ、會員各自蠟燭ヲ捧ゲ、特選聖歌一七八番「心清キ」ヲ合唱シツ、二列ニテ聖堂ヲ一巡シ、監督ノ捧持スル大蠟燭ヨリ火ヲ點ジ再ビ一巡ス。實ニ莊嚴幽美ノ式典ナリ。終リテ聖別セル徽章ヲ受ケテ胸間ニ掛ク。

昭和四年度役員ハ會長本橋民代、書記武〇元〇、會計河〇靜〇夫々當選ス。又贊助員先崎ケサ姉京都ニ轉ジタル爲、後任トシテ以前久シク花束會贊助員トシテ若キ娘達ノ指導ニ任ジタル福〇セ〇姉選任セラレ、會員ノ増加ニ伴フ贊助員増員ニヨリ、野〇ツ〇、村〇晴〇ノ兩姉モ贊助員ニ就任セリ。本會ハ毎月二回定時集會ヲ開ク。ソノウチ一回ハ靈的集會、一回ハ裁縫刺繡等ノ技藝ヲ習修ス。

昭和六年末ニ於ケル會員數ハ十四名ナリ。

#### 第四百一 小兵士團

昭和三年三月、小學校卒業ヨリ丁年迄ノ青少年ニ對シテ適當ナル指導獎勵ヲ與フル目的ヲ以テ小兵士團組織セラル。毎月第二・第四水曜ニ例會ヲ開キ、中一回ハリ―教母ノ御話、一回ハ遊ビ會ナリ。時ニ遠足登山等ヲナシ

心氣ヲ養ヒ、屢々奉仕の作業ヲナス。會員ニ藤○長○、青○昇、中○與○、渡○涉、木○健○、高○昇、武○喜○、福○國○、高○正○、平○清○、淺○健○等アリ。團長トシテ鈴○繩兄選任セラレ、又リ一教母歸英不在中ハミス・マギル團員ヲ指導セリ。

第四百十二 小兵士會

昭和五年八月、團長鈴○繩兄聖ジャイルス館舎監ニ轉シタルヲ以テ伊藤梅吉兄後任團長ニ指名セラル、ヤ、從來ノ小兵士團ヲ聖フランシス會ト改メシモ幾何モナク同年十一月總會ニ於テ成文會則ヲ制定シ會名ヲ「小兵士會」ニ定ム。新會則ニヨレバ、會員ハ善良ナル信仰生活ヲ送り、有益ナル奉仕ヲナス爲ニ努力シ、相互相愛ヲ目的トス。尙リ一教母、山中政三師ヲ顧問ニ推シ、會員中ヨリ書記一名會計一名ヲ選任シ、又愛友會ニ倣ヒオウ賛助員ヲ設ケ、會長ト共ニ會ノ指導機關タリ。又入會セントスル者ハ會員ノ紹介ヲ要シ、三ヶ月ヲ志願者トナシ、後役員會ニ於テ正式ニ許否ヲ決ス。

書記青○昇、會計山○保、高○正○當選シ、賛助員ニ佐○亮兄、柴○盛○兄、伊○田○兄推薦セラレタリ。三位一體後第十五主日特禱ヲ小兵士會ノ特選特禱トシ、聖歌六十五番ヲ特選聖歌トス。昭和六年末ニ於ケル會員數二十二名ナリ。

第二十八章 婦人ホームノ擴張

第四百十三 聖マリヤ館

大正五年十二月大平館ノ一室ヲ借受ケテ開始セラレタル「愛ノ家庭」ハ草津ニ於ケル本病者救護ノ爲ニ設ケラレタル最初ノホームトシテ記憶セラルベシ。而シテ此ノホームニ受容セラレタル數名ノ婦人ノ信仰ト希望ト愛ノ美ハシキ生活ハ、之ヲ見聞スル人々ニ依ツテ宣傳セラレ入館ヲ願フ者年ト共ニ増加スル有様ナリキ。之等希望者ノ爲ニモ館擴張ノ必要アリ、且ツ借家住ヒノ事ナレバ隣室隣家ニ對スル氣兼モアリ、御旨ノナル時獨立セル一軒ノ家ヲホームノ爲與ヘラレン事ヲ祈リツツアリシガ、大正九年八月下旬大平館主飯○久○兄家事ノ都合上瀧下三一八ノ一ナル大平館本館賣却ノ話アリケレバ、福○紫○兄リー教母ノ命ヲ受ケテ交渉ノ任ニ當リ、遂ニ之ヲ購入スル事ニナレリ。

建坪三十六坪九合、木造二階建、未ダ新築ノ木ノ香鼻ヲウツ。大正九年九月一日契約成立、聖母マリアトリー教母ノ聖名ニ因ミテ聖マリア館ト名付ク。全九月二十七日「愛ノ家庭」ノ全員十二名引越ヲ了ス。大平館借室ガ南ニ山ヲ負ヒ採光甚ダ不充分ニシテ四時陰潤ノ氣アリシニ

聖マリア館



引換へ、日當り申分ナク借家住ヒヨリ内湯アル自分違許リノ家ニ移レル多クノ姉妹達ハ日々感謝ト喜悅ノ生活ヲ送ルヲ得タリ。大正九年ヨリ全十三年ニ至ル收容人員左ノ如シ。

(年度) (毎月平均人員) (年間延人員)

大正 九年	十三人	四、七四五人
大正 十年	十五人	五、四七五人
大正十一年	十八人	六、五七〇人
大正十二年	二十一人	七、四二四人
大正十三年	二十四人	八、七六〇人

大正十三年十一月、舎監三上千代 女史辭職ニツキ、副舎監相○鎰○兄舎監トナル。三上女史ノ在職七年六ケ月ノ長キニ亘ル。サレド「愛ノ家庭」時代ノ最初ノ七ケ月ヲ除キ、三上舎監ハ醫院勤務ノ爲日夜多忙ナリシヲ以テ統轄ノ大綱ノミヲ握リ、館ノ實務ヲ處理シタルハ相馬副舎監ナリキ。

#### 第四百四十四 聖ヘレナ館

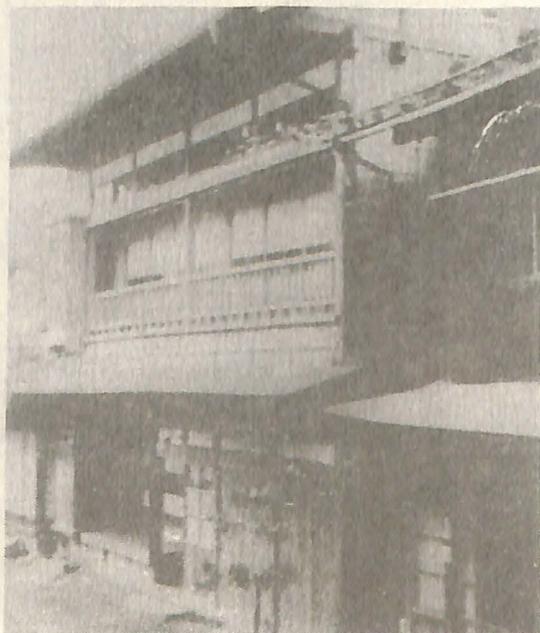
大正ノ終期ヨリ昭和ノ初期ニカケテハ、教會モ附屬事業モ急速ナル發展ヲ遂ゲ、就中男子ホームノ如キモ數次ノ大擴張ヲ行ヘリ。婦人ホームモ亦館員ノ増加ト救助切迫セル申込者ノ爲、其ノ擴張ヲ迫ラル、ニ至レリ。サレバ、昭和二年六月望マリア館北隣(滝下甲三二一ノ五)蓮○良○兄ノ家屋ヲ四百圓ニテ買ヒ、之ヲ取壊チ其ノ跡ニ見積經費六千圓ヲ以テ新館ヲ建築スル事トナレリ。即チ棟梁佐○木○助兄トノ間ニ全年六月十日工事契約成立直チニ着手ス。工事順調ニ進捗シ、全年九月三十日全ク落成セリ。二階二室(十六疊二室)階下十六疊及物置、

建坪五十坪總工費六千三百一十一圓、土地其他ヲ加ヘテ七千七圓八十錢。聖徒ヘレナト教母ノ聖名ニ因ミテ聖ヘレナ館ト命名サル。十一月一日ヨリ數名ノ姉妹之ニ移リ婦人ホーム中ノ最古參者タル池○ミ○姉此ノ家ノ責任者トナル。幾何モナク全姉ノ健康上福○セ○姉代リテ後ヲ襲フ。二階十六疊ノ二室ハ頗ル日當リ良キ美室ナレバ婦人ホーム病室トナシ、常ニ看護ヲ要スル者ト看護者ノホームトナレリ。

第四百四十五 聖エリザベツ館

昭和五年六月聖マリア館ノ前隣（滝下五八三）旅館富士館ハ家事ヲ整理ノ爲之ヲ賣却スル事トナリ、隣地タル關係上當ミツシヨシモ賣買ノ交渉ヲ受ケタリ。時ニ聖マリア館ハ館員ノ増加ノ爲既ニ狹隘ヲ感ジ居タルヲ以テ、ホームニ隣接スル良好ノ位置ナレバ是非入手セン事ヲ欲シ、所有者森○紋○助兄ト交渉ノ結果、二階建家屋二棟五千圓、土地二千八百八十圓、計七千八百八十圓ニテ賣買契約成立セリ。依ッテ之ヲ聖エリザベツ館（聖ベツ館）

聖ヘレナ館

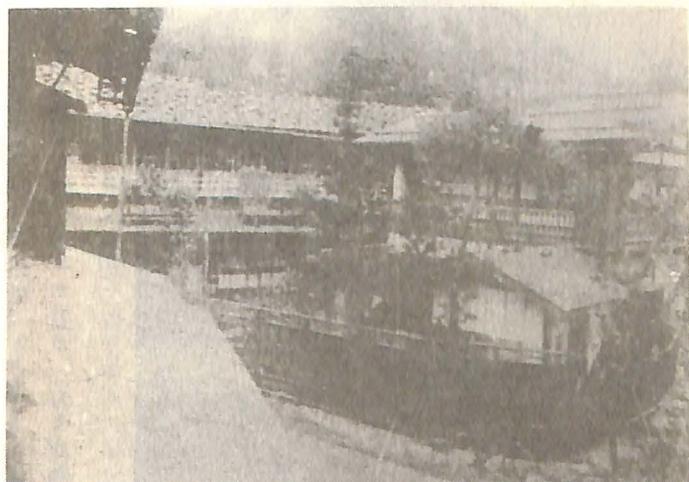


ト命名シ、特ニ婦人ホーム内ノ學齡女兒童ホームタル事ヲ主トシ、大〇キ〇子姉養育主任トナリ五名ノ女兒童ヲ連レテ昭和五年七月之ニ移レリ。而シテ尙部屋ノ餘力アルヲ以テ數名ノ姉妹モ之ト共ニ引越シ、此館ノ責任者トシテ阿〇エ〇姉選任セラレタリ。内湯ト小サキ中庭ヲ有ス。本館ハ元篠田旅館ト稱シ、大正三年九月光鹽會主催ニテ屢々基督教講演會催サレ、草津傳道ニ貢獻セル處ナリ。

今ヤ聖マリア館ヲ中心トシテ其ノ前後ニ聖ヘレナ館、聖ベツ館ノ兩姉妹館ヲ得、昭和六年度末全館員六八名和氣藹々主ニアル希望ノ生活ヲ樂シミツ、アリ。

×

昭和六年一月、館母相〇コ〇姉ノ永眠ハ全館員ニ最モ大イナル衝動ヲ與ヘタリ。蓋シ「謙遜柔和隠レタル董ノ如ク芳香ヲ放チ」常ニ獨身者ノ心ヲ心トシテ館員ヲ慈ミシ全姉妹ニ別ル、涙イト繁キニ、館創立以來ノ指導者タル相馬舍監ヲモ失ハントスル危險ニ當面シタレバナリ。ホームノ慣例ニ遵ヘバ、配偶ヲ失ヒタル者ハ其性ニ從ヒ



聖エリザベツ館

テ獨身ホームニ轉入セザルベカラズ。サレド今婦人ホームヨリ相馬舎監ヲ失ヒテハ、舵ナキ船ノ如ク翼ナキ鳥ノ如ク、館ノ前途ニ多クノ困難ヲ豫想セシメタレバ、館員一同切ニ其ノ婦人ホーム舎監トシテ留ラン事ヲリ教母ニ乞ヘリ。且ツコ○姉妹ノ臨終ノ願ヒモアリ、リ教母ハ茲ニ原則ノ特例ヲ認メ、幾分ノ折衷説ヲ加味シテ其住宅ニ連ル聖ジュリア館ヲ開放シテ婦人ホーム舎監室トナシ、婦人ホームノ先輩タル池○ミ○姉、石○田○ゴ姉ヲ伴ヒテ之ニ移ラシメ舎監トシテノ職務ヲ繼續セシムル事トシタリ。其レト同時ニ聖マリヤ館ヲ渡○キ○姉、聖ヘレナ館ヲ福○セ○姉、聖ベツ館ヲ阿○エ○姉夫々責任者ト定メ、別ニ書記會計稻○温○姉、兒童養育主任大○キ○姉アリテ舎監ニ直屬セシム。此處ニ颱風一過ノ形ニテ館員一同胸ヲ撫デ下セリ。

昭和六年七月、國立頼自由療養所設置ノ爲、男子ホーム聖ジャイルス館ハ引上ヲ餘儀ナクセラレタレバ、協議ノ結果現狀維持方針ノ下ニ新家屋ノ購入又ハ建築等取止メトナリ、爲ニ聖ジュリア館及リ教母居宅ナル聖エドモンド館ヲモ男子ホームノ爲ニ明渡ス事トナリタレバ、舎監ハ又々引越ヲ迫ラレタリ。依テ聖ベツ館本館二階全部ヲ舎監室トシ、聖ジュリアノ組三名此處ニ移リ以テ今日ニ至レリ。

## 第二十九章 男子ホームノ擴張

### 第四百十六 聖バルナバホームト館則ノ制定

病者救療ホーム創立以來館員ニヨリテ永ク遵據セラレタル行爲ノ標準アリ。未ダ文書ニ記載セラレズ。サレド之ヲ行フ事ハ館員ノ權利タリ又義務タルヲ確信ス。サレバ大正十一年三月聖ルセ館ノ創立ニヨリテ、ホームハ男子獨身者ホーム、女子獨身者ホーム、夫婦ホームニ三大別セラレ、館員ノ増加ニ伴ヒ一ハ館員ニ其生活ノ規準ヲ

示シ、一ハ入館希望者ノ決心ニ資センガ爲、宿○薰兄等ノ提議ニヨリ成文館則ヲ制定スル事トナレリ。全二十六ヶ條、名稱、入館、入館者ノ心得、退館、館則改正ノ各項ニ分レタリ。之ヨリ館ノ新設廢合等ニ依リ年毎ニ若干ノ修正ヲ加ヘタレド、其基本條文ハ、變ルコトナシ。サレバ昭和六年末施行ノ館則ニ就キ一言セン。

一、名稱。本病者救護ヲ直接ノ目的トセル各館ヲ總稱シテ「聖バルナホーム」ト稱ス。

(イ)男子ホーム。獨身男子及男兒童ノ收容舍ニシテ聖ステパノ館、聖ニコラス館、聖ジュリア館、聖エドモンド館等之ニ屬ス。

(ロ)婦人ホーム。婦人獨身者及女兒童ノ收容舍ニシテ聖マリア館、聖ヘレナ館、聖ベツ館等之ニ屬ス。

(ハ)夫婦ホームハ昭和六年七月廢止セラレ、準ホームニ轉屬セリ。準ホームハ各別ニ家族的生活ヲナスモ尙此ノ館則ヲ準用セラル。

二、目的。本病者ヲ收容シ、館主經營ノ聖バルナバ醫院ニテ醫療ヲ施シ、且ツキリスト教ノ信仰ニ基ク温カキ家庭ヲ作り、聖キ生活ヲ爲サシムルヲ以テ目的トス。

本病者ノ收容ヲ目的トスルモノナレバ、本病者以外ノ疾病其他例ヘバ貧困不具老衰等ノ理由ヲ以テハ館員タル事ヲ得ズ。

又キリスト教信仰ノ上ニ立ツホームナルヲ以テ、キリスト教ニ絶對反對スル者ハ館員タル事困難ナルモノトス。三、館員タル身分ノ取得。入館セント希望スル者ハ、館則熟覽ノ上成規ノ入館願ニ署名捺印シ二名ノ保證人ヲ立

テ戸籍謄本並ニ本病以外ニ慢性傳染病ナキ事ヲ證スル醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ出願スルモノトス。本病者タリ共他ニ慢性傳染病アル者ハ入館ヲ許サズ。就中結核性疾患ニハ特ニ注意セラル。

右出願者ニ對シテハ役員會ニ於テ人物、境遇、其他ニツキ協議ノ上館主許可ヲ決定ス。入館ノ許可ヲ得タル者ハ一ヶ月以上適當ト認ムル時期迄假入館者タリ。右期間満了ニ際シ、將來館員タル事ニ就キ自他ノ障礙<sup>ガイ</sup>ナキ時ハ、館員タル身分ヲ取得ス。尙入館者ハ經濟的負擔ノ中、治療費住宅費ヲ除キ規定ノ食費(月額十圓)ヲ支拂フモノトス。サレド之ヲ支拂フ能ハザル者ハ館主ノ認許ヲ經テ其一部又ハ全部ヲ免除セラル、事ヲ得。

四、館員ノ愛惠及義務。館員ノ享クル恩惠一二ニ止ラズト雖モ其ノ主ナルモノハ(イ)信仰ニ基ク温キ家庭ノ人トナリ、病ヲ忘レ世ノ種々ノ心勞憂苦ヨリ離レテ聖キ生活ヲ樂シミ得ル事(ロ)館主經營ノ醫院又ハ其ノホーム出張所ニテ本病者ニ缺クベカラザル大楓子劑ノ注射、外科處置、其他各症ニ對スル投藥及ビ手當ヲ受ケラル、事。病症進行シ全ク不自由トナリ、或ハ重症者トナルモ主ニ在ル兄弟姉妹ノ手厚キ看護ヲ受ケラル、事。召サレタル後モ葬儀萬端ニ付キ何ラ心殘リナキ事等ナリ。

館員ノ義務トシテ學グベキハ服從ト忠實ノ二大義務ニシテ、各館員ハ全ホームノ一分子ナルガ故ニ之ト附屬的關係ニ立ツヲ以テ、主長タル館主及舍監ノ命ニ絶對服從シ、ホームノ精神ニ從ヒ他ニ惡感化ヲ及ボス如キ言行ヲ慎ミ、互助ト奉仕ノ精神ヲ以テ強壯者ハ病弱者ノ爲ニ喜ンデ勞役ニ從事シ、館則及臨機ノ規則ヲ遵守シ、役員ノ命ニ依ル一切ノ働キニ忠實ヲ盡サザルベカラズ。又禁酒禁煙ヲ守リ、館ノ内外ヲ問ハズ借金ヲナスベカラズ。教會及家庭ノ集會ニハ勉メテ出席スル心掛ヲ要ス。

五、館員タル身分ノ喪失。退館ニ自發的退館ト強制的退館ノ二ツアリ。即チ退館ヲ希望スル者ハ一ヶ月以前ニ其理由ヲ具シテ舍監ニ申出ル時ハ役員會ノ協議ヲ經テ館主之ヲ許可ス。之ニ反シ館則ヲ遵守セザル者或ハ館員トシテ不適當ト認メラレタル者ハ、役員會ニテ協議ノ上退館ヲ命ゼラレルベシ。

六、ホームノ機關。三種ノ機關ヲ有ス。館主、舍監、役員會ノ三ツ之ナリ。館主(コンウォール・リー女史)本

事業經營ノ全責任ヲ帶ビ從ツテバルナバホーム一切ノ事ヲ統轄ス。館員ニ對シ絶對權ヲ有スルハ論ヲ俟タズ。次ニ舍監ハ館主ノ任命ニヨリテ舍監タル身分ヲ取得シ、獨立セル一館又ハ數館ノ父トシテ又主人トシテ館員ノ指導監督ニ任ジ、又館ヲ代表シ館會計其他館ノ責任ヲ擔當ス。館主ト同様其治ムル館員ニ對シ絶對權ヲ有ス。役員會ハ一名舍監會議トモ稱シ、館主及舍監ヲ以テ組織シ、館主ノ召集又ハ二名以上ノ舍監ノ發意ニ依ツテ開キ左ノ權限ヲ行フ。(イ)館主ノ諮問ニ答フル事。(ロ)入退館者ニ關スル事項。(ハ)各館ノ平安ト改善ヲ圖リ其他ホームニ關スル重要事項。

七、館則ノ改正。館則改正ノ手續ハ簡單ニシテ、必要ノ都度役員會ニテ協議ノ上館主之ヲ行フ。

以上ハ附屬事業中ノ根幹ヲナスホームノ經營ノ方針トホームノ精神ヲ成文化セルモノナレバ、之ニ聯關スル諸機關ハ何レモ此ノ規則ヲ準用セラルベシ。就中華ホームハ十六條、十七條ノ規定ヲ除キ、悉ク適用セラレ、未感染兒童ホームハ類似ノ内容ヲ有スルヲ以テ、又之ヲ準用セラルベシ。

而シテ斯クノ如キ館則ノ制定ハ、之ニ依リテ館員ノ行動ヲ束縛セントニハアラズシテ、全ク館員ノ幸福増進ト團體生活體ノ平安ノ爲ナリ。即チ法治主義ニアラズシテキリスト愛ニ基ク德治主義イデオロギカハ毫モ變更セラル、事ナシ。

#### 第四百七十七 聖エドマンド館

霜間聖ステバノ館ノ地續キナル芳ガ窪乙六九〇番地ニハ早クヨリ板〇昌〇兄夫妻居住シ居タリシガ、大正九年ノ春同兄ガ妻ト別居シテ男子ホームニ入館シタル事ニ依リ、此家屋不要トナリシヲ以テ、報恩ノ爲之ヨリ一教母ノ事業ニ獻ゲタレバ、聖エドマンドト名付ケ男子ホームトシテ加ヘラル。六、四ノ二間、土間臺所附キ平家ナリ。

#### 第四百十八 愛馬ピース

大正十二年十月草津ト霜間間ノ食糧ノ運搬ノ爲及ビ病弱者運搬ノ爲牝馬一頭ヲ買入レタリシガ、リー教母之ニピース(平和)ト命名シ特別ニ寵愛シ、ステバノ長老、マキム監督等モ來草ノ節ハ好ンデ愛乘シタリ。飼養手入一切館員ノ手ニテ行ヒ、良ク愛シタルヲ以テ馬モ又良ク馴レテ飼主ノ命ニ從ヒ、館員ノ忠實ナル友トシテ數年ヲ奉仕セリ。神父ステバノハピースノ爲ニ毎月金四圓ヲ贈リ其飼養ヲ助ケタリシガ、不景氣ト館員ノ健康上飼養ヲ繼續スル事困難トナリタルヲ以テ、大正十五年春金二百九十餘圓ニテ賣渡セリ。

#### 第四百十九 南瓜汁粉會

大正十三年夏、霜間ニテハ南瓜ノ大豊作ナリシカバ、之ヲ主ニアル兄弟ニ馳走シテ一ハ主ニ感謝ヲ表ハシ一ハ信者間ノ親睦ヲ愈々厚クセントテ、宿〇薰兄等主唱トナリ愛友會主催ニテ味噌釜ヲ持出シテ大々的ニ南瓜汁粉ヲ作り、聖エドマンド館ノ前ニT字形ニ莖ヲ敷キ急造會場ヲ作り、男子ホーム婦人ホーム夫婦ホーム愛友會員全部ヲ招キ大親睦會ヲ催ス。來會者六十名ヲ超エ頗ル盛會ナリキ。

#### 第五百十 風紀問題

本病者ノ獨身生活ハ社會的ニ道德的ニ寧ろ貴シトセラル。サレバホーム創立以來婦人ホームモ男子ホームモ其生活ハ特殊ナル條件ニヨル主ノ召命ナルヲ信ジ、此世ノ物質ノ纏レト異性ヘノ複雑ナル心遣ヒヲ離レ、結婚生活者ヨリモ更ニ高ク更ニ主ノ御側近ク奉仕シ得ル特權ヲ喜ビツ、生活ヲ續ケタリ。サレド兩ホーム年ト共ニ擴張セラレ、新入館者増加セラル、ニ及ビ、之等ノ中ニハ獨身生活ヲ以テ寧ろ不安定ナルモノトシ稍々其信念ヲ異ニセ

ルモノアリ。大正十三年七月ホーム三委員ノ一人ナル鈴○徳○兄ヲ初メ久○節○兄、丸○十○兄等相次デ退館シテ婦人ホームノ姉妹ト結婚スル等ノ事アリケレバ、ホームノ風紀維持上斷乎タル對策ヲ必要トスルニ至レリ。之元ヨリ病者結婚否認ヲ意味スルニアラズ。唯ホーム自體ハ同信同病同性ノ故ニ館員確ク連リホームト死生ヲ共ニスルノ信念ヲ以テ互ニ相愛スルニヨリ其目的ヲ達成シ得べく、若シ館員ガ皆一時の腰掛的ニ浮雲ノ如キ心ヲ持ツ時ハ兄弟愛ノ温キ家庭ヲ作ル事困難トナル故、禍根ヲ將來ニ斷ツべく茲ニ斷然男女隔別主義ヲ以テホームノ原則ニ採用セリ。ホーム創立以來八星霜男女各ホームハ主ニ在リテ結バレタル潔キ兄弟姉妹トシテ日常ノ勞務ニ家庭ノ雜役ニ諸集會ニ野外祈禱ニ互ニ相倚リ相助ケ、就中女子ハ男子ノ爲ニ裁縫洗濯ノ勞ヲ執リ、男子ハ女子ノ爲ニ農耕ニ從事シ、長短相補ヒ有無相通ジ、精神的ニモ物質的ニモ相益スル事少カラザリシガ、悲シイ哉其半面ニ於テ例之燃ユル火ノ用ヒテ煮爇ノ便ヲ供スレド一度觸ルレバ身ヲ燒キ肉ヲ滅スガ如ク、若キ人々ニ耐エ難キ誘惑トモナレバトテ大正十四年以降ハ新原則ニ從ヒ各ホームハ全ク獨立シ、精神的ニハ互イニ祈リニ以テ相助クト雖仕事ノ上ニテハ互ニ相知ラザル者ノ如ク各自備ヘラレタル道ヲヒタムキニ進ム事トナレリ。

### 第五百十一 霜間御殿

御殿ト言ハバ何人モ王者ノ住ム金殿玉樓ヲ聯想ス。サレド此處ニ病者間ニテ霜間御殿ト稱スルハ、霜間ノ谷間ニ建テラレタル僅カニ坪半ノ藥葺小屋ノ事ナリ。大正八年ノ秋リ一教母ノ爲ニ館員並○藤○兄ノ造リシ粗末ナル三疊土間約一疊半ノ陋屋ニシテ、専ラリ一教母ノ祈リノ場所タリ。リ一教母霜間ニ來ルヤ先ヅ入りテ時ヲ分タズ祈リノ人トナル。聖ステパノ館ニ於テ聖餐式ノ行ハル、ヤ、其都度必ず其前日ニ來リテ此ノ小屋ニ一夜ヲ過シ、人ト世ヲ離レテ主ト語り交リ、朝ハ夙ニ起キテ又祈リ式ヲ濟マセテ歸草セラレ。即チ榮華宴樂ヲ友トスベキ貴族

ノ身ヲ以テ斯クノ如ク荒屋ニ起キ臥ス尊キ神ノ僕<sup>レモ</sup>ノ姿ヲ見テ、唯勿體ナシトテ誰言フトモ無ク之ヲ霜間御殿ト呼ブニ至レリ。設立以來前後六ヶ年間リ一教母ニ愛用セラレシ此ノ家モ、大正十三年四月味噌搗キノ時候一夜大風起リ脆クモ倒壞シタルヲ以テ、再建ノ議モアリシカド、諸種ノ都合上遂ニ其儘トナレリ。

此ノ御殿ノ事ニ就キテハ東都某新聞記者ノ來訪ニ依リ新聞ニ掲載セラレ世人ニ一大警醒ヲ與ヘタリ。

### 第五百五十二 聖ジャイルス館

大正十年頃ヨリ一般ニ本病患者中ニ肺結核患者ノ多キ事唱ヘラレ、殊ニ結核菌ト類菌ハ細菌學のニ酷似シ若干ノ通有性アリ不治ノ難症タリ。本病患者ハ結核菌ノ侵襲ニ對シテ身體ノ防禦力無ク、且ツ本病患者ノ死亡ハ多ク本病ガ直接原因ニ非ズシテ他ノ併發症ニヨル。就中半數以上ハ結核菌ニ依ッテ斃ルトノ學說行ハレ、醫院佐藤醫師又男子ホーム全員診斷ノ結果數名ノ結核性患者アル事ヲ發見シタレバ大イニ驚キ、若シ之ヲ現狀ノ儘ニ放置シ

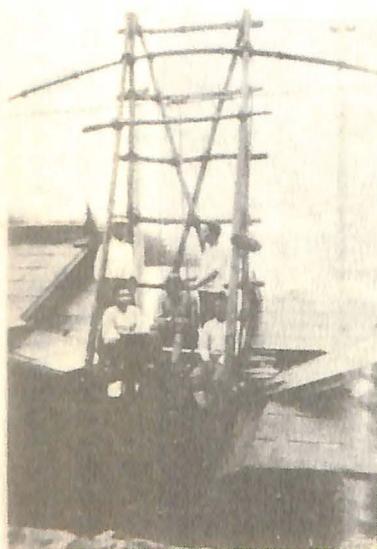
聖ジャイルス館



置ク時ハ結核立子所ニ全員ニ傳染シ、甚ダ重大ナル結果ヲ惹起セザルトモ計リ難シ。斯カル患者ハ速カニ隔離スルコソ良ケレト進言セルヲ以テリー教母ハ茲ニ隔離病室トシテ一ホームヲ建設スベク決意シ、大正十三年十一月水ノ窪六九一番地景勝ノ地ヲ敷地候補地ニ選定シ家屋設計ヲ作り豫算ヲ立テタルモ、資金無カリシヲ以テ其儘トナリシモ、偶々米國ウアージニア州リッチモンド市ノ基督教日曜學校ハ神ノ榮光トミス・アリス、マンニングノ記念ノ爲ニ金三千圓ヲ寄附セラレシヲ以テ一同雀躍<sup>ジャヤク</sup>シテ喜ビ主ニ感謝ヲ捧ゲ恩人ノ爲ニ祈ルト共ニ、大正十四年四月十日大工佐○木○介兄トノ間ニ總工費三千圓ニテ請負契約ヲ成立セシメ直チニ工事着手、同五月二十五日上棟式ヲ行ヒ、同六月三十日全ク落成ス。總建坪三十坪、六間（八疊一室、六疊五室）、依ッテ十四年七月一日大イナル感謝ヲ以テ開館シ、靱○健○、柴○一、熊○勇○、久○田○三○、關○秋○郎ノ諸兄、患者トシテ入館シ、之ガ看護者トシテ全キ獻身ト犠牲的精神ヲ以テ愛ノ勞ヲ執ルベキ職員選考中ノ處、宿○薰兄先ツ之ガ舎監タラン事ヲ申出デ、次デ横○武○兄書記トシテ之ヲ助クル事ヲ

又伊○導○兄、武○喜○兄、大○榮○助兄ノ三名ハ専ラ看護ノ任ヲ快諾シ、何レモ喜ンデ新シキホームニ入レリ。斯クテ同年八月二十日マキム監督夫妻來訪セラレ、嚴カナル聖別式行ハレタリ。此地ハ土地高燥ニシテ空氣清澄日當リ申分ナク、斯カル患者ノ療養所トシテハ最適地ナリト一般ニ評セラレタリ。然ルニ同年九月病院ニ優秀ナル顯微鏡到着シタレバ、佐藤醫師各患者ニ就キ嚴密ナル細菌學の検査ヲ行ヒタルモ、之ガ陽性タル結果ヲ發見ス

聖ジャイルス館井戸堀

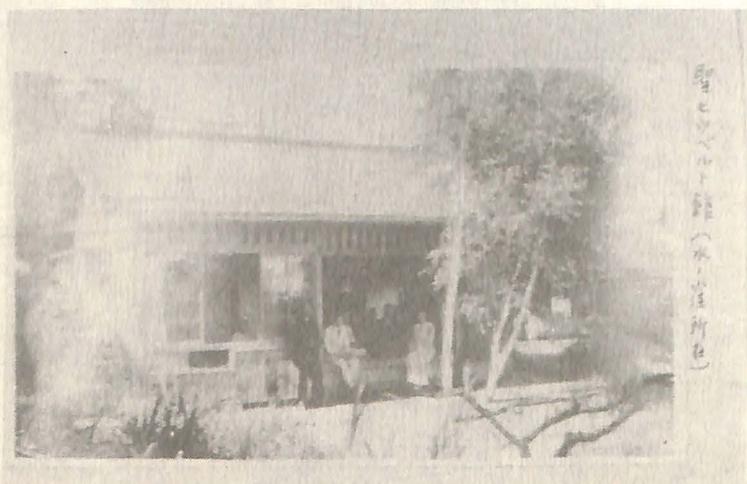


ル能ハズ。依テ此ノ時ヨリ結核患者隔離病室ノ名稱ヲ廢シ、館員増加ノ折柄之ヲ聖ヒューベルト館、聖ステパノ館ト同ジク一般病者ノ收容館トナセリ。

第五百十三 聖ヒューベルト館

本病者間ニコレラ腸チブス赤痢等ノ如キ急性傳染病患者發生セバ如何ニスベキヤ。勿論自衛上速カニ隔離法ヲ行ヒ消毒ヲ嚴重ニセザルベカラズ。而シテ腸チブスノ如キハ年々流行スレド之ヲ隔離スベキ適當ナル場所無キニ苦シミ居タリシニ、偶々米國ペンシルヴァニア州アッシエウイレ市聖公會婦人信徒ヨリ草津ノ事業ニ獻金アリシヲ以テ大イニ喜ビ、之ヲ以テ大正十五年四月五日建築費一千二百圓ニテ大工佐○木○助兄トノ間ニ工事契約ヲ締結、全五月三十日全ク落成ス。依テ之ニ聖ヒューベルト館ト名付ク。建坪十坪、六疊四疊半ノ二室ナリ。全年六月早速信者神○○姉赤痢ニ罹リ此處ニ收容セラレ手厚キ看護ヲ受ケタルモ藥石效ナク永眠セリ。然ル間ニ町營ノ避病院設ケラレ、急性傳染病患者ノ發生モ久シク斷ヘ

聖ヒューベルト館



タレバ、本館モ又聖ジャイルス館ニ附屬スル本病者收容ノ一般館トナレリ。

第五百五十四 三館鼎立

聖ジャイルス館ノ創立ト共ニ記憶スベキハ、之迄館主ヲ助ケ館員ヲ指導シ館ノ責任ヲ負擔シ來リシ合議制三委員制度ヲ廢シ、各委員ハ舍監トナリテ聖ステパノ館、聖ビリポ館、聖ジャイルス館中各々一館ノ長トナリ、各々其ノ館ニ限り統轄指導ノ責任ヲ負フ事トナリシ事ナリ、即チ大正十四年四月十五日ヲ期シ、聖ビリポ館ニ居タリシ宿○薰兄ハ新築ノ傳染病患者隔離病室ナル聖ジャイルス館第一代ノ舍監ニ内定シ、聖ステパノ館ニ居タル高○利○兄ハ上草シ聖ビリポ館ノ第一代舍監トナリ、上○了○兄ハ霜間聖ステパノ館ニ留リテ福場兄山中兄ニ次グ第三代ノ舍監ニ任命セラレタリ。

當時諸物價騰貴ノ爲ニ館ノ經濟的方面ニ少カラズ苦心シ、一人月額九圓ヲ以テシテハ到底生活ヲ支フル能ハズ借金ヲ重ネテ辛ウジテ生活ヲ續ケタル時モアリ、會計ノ責任ヲ有スル舍監ノ苦心モ一方ナラザリキ。

大正十四年九月十三日聖ジャイルス館舍監宿○薰兄永眠ノ爲、後任者詮<sup>セツ</sup>衡ノ結果板○昌○兄第二代舍監ニ選任セラル。サレド全兄ハ盲目ナリシヲ以テ横○武○兄専ラ書記トシテ之ヲ助クル事トナレリ。

×

副舍監設置。大正十五年十月秋季男子ホーム館員總會ニ於テ、舍監ガ公私用ノ爲留守等ノ場合館員ノ取締及ビ緊急事務處理ノ爲各館ニ副舍監ヲ設置スルノ案ヲ議決シ、聖ジャイルス館書記横○武○兄、聖ビリポ館佐○亮兄聖ステパノ館大○賢○郎兄夫々選任セラレタリ。

昭和二年十二月草津新聖ステパノ館開館ト共ニ三館ニハ極少數ノ留守居者ヲ殘シテ殆ント全部之ニ移ルコト、

ナリ館員ノ大移動行ハレ萬事新タニナリタルヲ以テ先キノ副舎監モ解任セラレ、其ノ時迄聖ジャイルス館舎監タリシ上〇了〇兄選バレテ新シキ大ステパノ館ノ副舎監ニ命セラレタルモ、幾何モナク全兄ヲ購買部主任トシ吉〇又〇衛〇兄ヲ副舎監ニ選任セントスル案現ハル、ヤ館員ノ間ニ於テ副舎監ノ權限問題等ニ關シ紛議ヲ生ジ、寧ロ舊ノ如ク純然タル舎監一元制ニ復スルニ如カズトナシ館主ノ決裁ヲ經テ昭和三年十二月十五日ヲ以テ此ノ制度ハ一時廢止セラル、コト、ナレリ。

尙此處ニテ大正十四年十二月以降ノ聖ジャイルス館ノ事情ニツキテ今少シク記スベシ。聖ジャイルス館舎監更迭。前述ノ如ク聖ジャイルス館ニ於ケル宿澤舎監ノ後任板谷兄ト横溝兄ハ互イニ相助ケテ館務ニ盡瘁シ來リシガ性格上意見ノ一致ヲ缺クコトモアリ、偶々昭和二年一月横溝兄ガ試ミタル教會及聖マリア館ニ於ケル證詞ニツキ舌禍ヲ蒙リ全年三月三十日其ノ責任ヲ辭シタルヲ以テ、全年四月一日ヨリ佐〇亮兄書記ヲ命セラレタリシガ、同年十月十八日舎監板〇昌〇兄病ヲ得、聖ルセ館ニ入館セルヲ以テ同兄ハ選バレテ第三代ノ舎監トナレリ。然ルニ在任ニケ月事情ニヨリ辭シテ上草シ、草津新聖ステパノ館ニ入ル事トナリシヲ以テ霜間聖ステパノ館ノ舎監タリシ上〇了〇兄代リテ第四代ノ聖ジャイルス館舎監トナル。

農園。翌昭和三年十月、館主リ一教母ハ上瀧兄初メ館員一同ノ乞ヲ容レ、隣接島三段三畝十八歩ヲ一千八百圓ニテ山口久太氏ヨリ購入シ同館ノ爲ニ與ヘタリ。一同大イニ喜ビ此時ヨリ館員ニ供スル野菜副食物類ヲ自作ニヨリ自ラノ島ヨリ得テ經濟上大イナル便益ヲ得タリ。

花園。聖ジャイルス館ニハ美シキ花園アリ。宿〇薫兄ノ原案ニ基キ、大正十四年夏、安倍先生ノ許ニ來レル大

阪ノ資産家鴻池家ノ庭師ナル杉本ト言ヘル人ノ設計造庭ニナリ之ニ伊○導○、武○喜○兩兄ノ愛ノ勞ト、福○唯○  
 ○、上○了○兩兄ノ附加の考案ヲ加ヘテ大成シタルモノナリ。扇形アリ弓形アリ矩形アリ。而モ諸形合シテ調和  
 ノ妙ヲ得タリ。天下一度春暖ノ候トナレバ、ダリヤ、百合、コスモス、マーガレット等ヲ初メ和洋ノ百花妍<sup>ケツ</sup>ヲ競ヒ  
 來訪者ノ眼ヲ喜バシム。聖ジャイルス館ノ名ハ眺望比類ナキ自然ノ美トコノ花園ニヨリテ愈々近隣ニ喧傳セラル  
 、ニ至レリ。

第一百五十五 宿○薰兄

大正十四年九月十三日勝利ヲ以テ永眠セル聖ジャイルス館舎監宿○薰兄ハ、○○縣○○村ノ産ナリ。小學校ヲ  
 終ヘ、十三歳ノ時、布哇<sup>ムワ</sup>ニ渡リ、初メ農業ニ従事シタルモ、後友人ト共同ニテホノル、市目抜キノ場所ニホノル  
 、物産商會ナル商舖ヲ經營セリ。資性穎敏<sup>チビシ</sup>ニシテ聰明、其ノ才幹ハ夙ニ在留邦人ノ間ニ認メラレ、殊ニ其思想ト  
 行動、嗚人愛ト奉仕の精神ハ遂ニ「模範青年」トシテ土地ノ新聞ヨリ表彰セラル、ニ至レリ。ホノル、日本人教  
 會ニテ深尾長老ヨリ洗禮ヲ受ケ信者トナリ。弱冠衆望ヲ負ツテ教會委員ニ當選ス。然ルニ二十六歳ノ春不幸ニシ  
 テ本病ニ冒サレ、歸國ノ止ムナキニ至レリ。依テ店舖ヲ友人ニ託シテ一度國元ニ立歸リ相談ノ結果未ダ初期ノコ  
 トナレバ或ハ癒サル、コトモヤアラントテ、東京ニ來リ大學病院ニ通ヒヒタスラ治療ニ勉ム。本郷區龍岡町森田  
 千之助方ニ下宿シ居タリシガ、偶々主人森田氏ヨリ草津双葉館ヲ紹介セラレ、大正三年五月來草、同館ニ投宿ス。  
 一見壯健者ト變リナク、容姿端麗殊ニ新歸朝者トシテ泰西ノ事情ニ通ジ、ピンポン、カルタノ選手、素人芝居ノ  
 花形役者トシテ湯之澤病者間ニ人氣ヲ博ス。

全大正三年ノ夏ヨリ下町基督教運動ニ参加シ、全年九月津久井館ニ於ケル光鹽會ノ總會ニ於イテ副會長ニ當選

ス。約半歳點灸療法ヲナス。再ビ布哇ニ渡リ友人ト經營セル商舖ヲ整理シテ今後ノ方針ヲ定メントテ大正三年十一月草津ヲ出發東京ニ赴キ田端ニテ病人宿ヲナシ居タル後○俊○兄宅ニ投宿ス。全大正三年十二月三日全兄宅ニ於ケル安○千○郎先生ノ説教ヲ聽キ、全ク心機一轉シ布哇行キヲモ勇敢ニ斷念シ、白熱的信仰ニ燃エテ病者傳道ノ大使命ヲ感ジ、大正四年一月十八日降りシキル雪中ヲ單獨ニテ草津ニ向ケ出發、六里ケ原ヲ踏破シ雪中難澁ヲ重ネツ、遂ニ草津ニ辿リ着ク。草鞋ノ紐ヲ解クヤ否ヤ直チニ津久井館ナル加○桑○氏宅一室（今若松屋）ヲ借り自炊ヲナシツ、猛烈ナル傳道ヲ開始ス。後日教會ノ主要ナル人物ニシテ全兄ノ指導ヲ蒙レル者少カラズ。大正四年三月管○丈○兄ト共ニヨルダン・ホームヲ組織シ、光鹽會事務所ヲ們原兄宅ヨリ此處ニ移シ再ビ同會副會長トシテ靈的方面ノ指導ニ任ズ。全大正四年六月二十日マキム監督ヨリ聖公會傳道師補ニ任ゼラレ、名實共ニ草津傳道ノ總師タリ。大正四年七月大藤長老ノ紹介ヲ通シテ、コンウオール・リー女史ヲ草津ニ導キ、翌年女史ガ草津ニ定住シテ癩患者ノ救濟事業ヲ開始セラル、ヤ、腹心ノ秘書タリ。忠實ナル相談相手タリ。大正五年六月光鹽會ヲ基礎トシテ聖バルバ教會ノ創立トナルヤ、百方奔走シ聖堂タルベキ家屋ノ買収交渉委員トナリ、又アンデルス長老ヲ迎へ、教會創立ノ大任ヲ果シ、毎日教會ノ定時ノ禮拜ヲ司リ、又一方竹○薰○兄ト共ニ「草津教友」ヲ發行シ文書傳道ヲ行ヒ、「愛ノ家庭」ノタメニ三上千代女史ヲ招キ、又ハ傳道文庫ヲ設クル等功績數フベカラズ。然ルニ大正六年五月惡魔ノ誘惑ニカ、リ某女ト共ニ草津ヲ出テ、行方ヲ昏マセシガ、幾何モナク發見セラレ、大島ナル安○千○郎師ノ許ニ痛哭ナル懺悔生活ニ入ル。然ル程ニ病勢募リ、社會ニ生活スル事困難ナリシヲ以テ、リー教母ノ許可ヲ得テ大正七年七月草津ニ歸リ霜間ノ勝○男兄宅ニ落着ク。大正八年一月栗生ナル「睦ノ家庭」ニ入り、同年四月霜間ニ聖ステ・パノ館成ルヤ轉ジテ之ニ入り、大正十年五月羽○義○兄永眠ノ爲其後任トシテ男子ホームノ自治權ヲ握レル三委員ノ一人ニ指命セラル。委員トナリ館ノ經營及ビ統一ニ關シ盡ス所又頗ル多シ。

大正十四年四月十五日委員制度廢止ノ時迄引續キ委員タリ。大正十三年十二月教會委員ニ當選。大正十四年七月結核患者收容室トシテ聖ジャイルス館開館セラル、ヤ自ラ求メテ全館舎監トナル。全年秋病ヲ得次第ニ重リテ遂ニ大正十四年九月十三日聖ジャイルス館ニ於テ勝利ノ永眠ヲナス。神癒ノ信仰ニ立チ、晩年病氣ハ次第ニ重ク、キズノ多キ事ホームト言ハル、ニ至リシモ、最後迄良ク忍耐シ、其ノ信仰ハ愈々鍊磨セラレ、良キ模範ト證詞ヲ殘セリ。

同兄ガ光鹽會時代又教會創立時代殊ニ晩年再ビ教會ノ爲盡シタル功績ヲ覺エ、教會ハ之ヲ遇スルニ教會葬ヲ以テシ、教會ノ名ニ於テ盛大ナル葬式ヲ營メリ。翌大正十五年七月永眠一周年ヲ記念シ、同兄ノ德ヲ慕フ教會有志男子ホーム有志主トナリ教會墓地ニ石碑ヲ建立ス。贈ラレタル聖言ハ左ノ如シ。

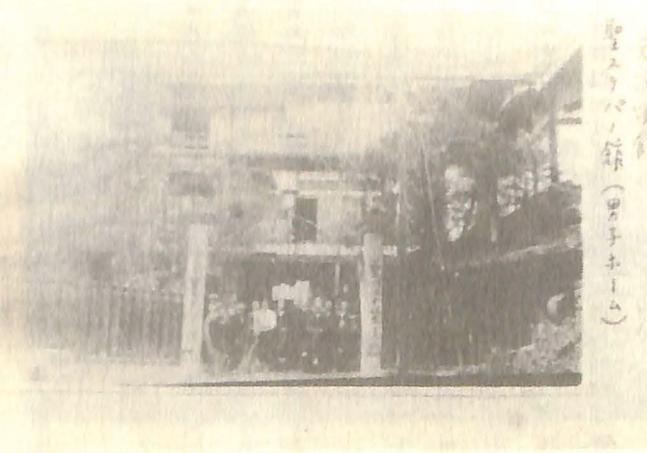
「神ハ憐憫ヲ喜ビ給フガ故ニ其ノ震怒ヲ永ク保チ給ハズ。再ビ願ミテ我ラヲ憐ミ我ラノ愆ヲ踏ツケ我ラノ諸々ノ罪ヲ海ノ底ニ投ゲ沈メ給ハン」(ミカ書七〇一八―一九)ト以テ瞑スベシ。

#### 第五百五十六 草津聖ステパノ館

昭和ノ初メ頃ヨリ男子ホームハ又々各館共狹隘ヲ感ジ、殊ニ聖ビリゴ館ノ如キハ定員十名ニ對シ一時二十三名ニモ達シ、館員ハ辛ウジテ寢床ヲ延ブル程ノ様ナリケレバ、館ノ擴張ニ迫ラレ、主許シ給ハバ全男子ホームヲ合シテ一トナシ得ベキ稍々大ナル家屋ノ得ラレン事ヲ欲シ、聖パウロ館前附近ニ二階建木造一棟經費二萬圓ニテ新築ノ案ヲ立テタル程ナリシガ、偶々昭和元年暮涼風館主高〇僑兄其ノ所有家屋ヲ賣却セントノ意アルヲ聞キ、リ一教母ハ山中政三師高〇利〇兄ヲ交渉委員トシ折衝セシメタルモ、價格五萬圓ヲ確ク持シ一致點ヲ見出スヲ得ズ然ルニ越エテ昭和二年九月再ビ交渉ノ結果、高田兄ハ大イナル讓歩ヲ示シ金三萬圓ニテ遂ニ賣買契約成立セリ、

男子ホーム一同ノ喜ビ筆舌ノヨク盡ストコロニアラズ。サテリー教母ハ之ニ霜間ナルホーム初代以來ノ聖ステパノ館ノ名ヲ襲ヒテ聖ステパノ館ト命名シ、昭和二年十二月十九日霜間聖ステパノ館、草津聖ビリボ館、霜間聖ジヤイルス館員ノ殆ント全部此處ニ引越ヲ行ヘリ。總員五十四名尙餘裕綽々タリ。湯之澤ニ於ケル第一流ノ旅館ニシテ高○壽氏ガ區長トシテ將又消防組頭宿屋組合長トシテノ全盛時代ニ改築増築ヲ加ヘタルモノ、三層ノ構ヘ嚴メシク下町ニ於ケル一偉觀タリ。且ツ本道ヨリ少シク引込ミタル處ニアルヲ以テ閑靜ニシテ日當リ良ク、本館及ビ別館ニ分タレ、本館三階六疊四間、二階六疊五間、七疊半一間、五疊半、一階六疊五間、七疊半二間、別館二階八疊二間、六疊三間、四疊半四間、一階八疊二間、六疊三間、三疊二間、四疊半一間、計三拾五ノ美室ヲ有ス。之ニ約十坪ノ浴場ト四坪位ノ物置、土藏一棟ヲ屬ス。旅館ヲ經營セル後ナレバ各室ニ押入アリ。又炬燵爐ノ設ケアリテ病者ノ寄宿舎トシテ利便此上ナク、又元館内ニ醫院アリシヲ以テ其處ヲ其儘ホーム治療所トナセリ。教會ニ近キ事、リ

草津聖ステパノ館（元涼風館）

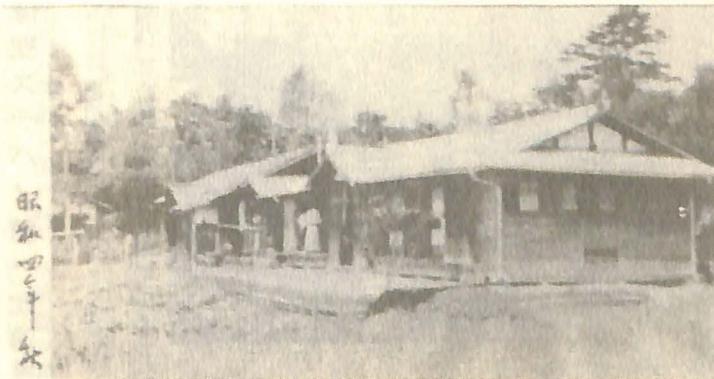


聖ステパノ館（男子ホーム）

一教母ノ宅ニ近キ事、病院（教會下）ニ近キ事、更ニ霜間聖ステパノ館ハ勿論ノ事聖ピリポ館ニテ求メテ得ラレザリシ内湯ノ設ケアリ、居乍ラニシテ自由ニ名湯ニ浸リ得ル事等ハ館員ノ盡キザル感謝ト喜樂ノ源泉トナレリ。聖ピリポ館舎監タリシ高○利○兄此ノ合同サレタル全男子ホーム舎監タル責任ヲ帶ビ、副舎監トシテ前霜間聖ステパノ館舎監タリシ上○了○兄任命セラレ、更ニ福○唯○兄舎監補佐トシテ舎監ヲ助ク。

修理。昭和四年三月ヨリ大工佐○木○助兄ノ手ニテ内湯ノ大修理ヲ行ヒ、五月十日落成、浴槽四ツ（内眞水ノ湯槽一ツ）洗面所ヲ新設ス。又全年十二月外科室及注射室ノ採光ヲ圖リ出入ヲ便ニスル爲修理ヲ行ヘリ。此ノ新シキ大聖ステパノ館ノ名ト共ニ忘ルベカラザルハ之ガ購入ニ要セシ金三萬圓ノ大金ガ一英國婦人ノ名ニヨリテ捧ゲラレタルコトナリ。一英國婦人トハ誰ゾヤ我等ハ知ル愛スルリ教母其人ナルコトヲ。

聖フランシス館（元霜間聖ステパノ館）



扱、草津ナル新聖ステバノ館ノ開館ト共ニ霜間ノ舊聖ステバノ館ノ館員ハ悉ク上草シタレバ、其屋舎ハ爲ニ空屋トナリ居タリ。然ル處幾何モナク又々館員増加ノ爲流石ノ大ホームモ満員トナル狀況ニテ、之ガ緩和策トシテ其屋舎ヲ谷間ニ置キテ徒ラニ腐朽セシメンヨリハ、其儘使用スルカ、又ハ聖ジャイルス館ノ隣リニ上ゲテホームトシテ使用シテハ如何トノ議起リ、又一方移轉ストセバ寧ロ草津ニ移轉スル方可ナリトノ案モアリシガ、結局聖ジャイルス館ノ東隣ニ引上ル事トナリ、此ノ移轉工事ヲ金七百圓ニテ宮○榮○郎兄請負ヒ全昭和三年六月二十一日移轉全ク成レリ。全八月英國旅行中ノ館主ハ此ヲ聖徒フランシスノ名ニ因ミテ聖フランシス館ト命名スル旨來信アリタリ。同館ハ六疊四室ヲ有シ、聖ジャイルス館ト一直線ニ並ベラレ、聖ジャイルス館舎監兼ネテ本館ヲ管理シ、聖ヒューベルトヲ加ヘテ此處ニモ又大ホームハ形作ラレ、全員三十名ヲ收容シ得ル設備整ヘリ。之ヨリ昭和六年八月迄男子ホームハ聖ステバノ館、聖ジャイルス館ト鼎立ノ時代ヲナセリ。

全館ハ極メテ閑靜ニシテ空氣清鮮居ラニシテ淺間ノ遠景ヲ賞スベシ。電燈ノ無キ事、溫泉ニ遠キ事ハ稍々不便ナルモ、ランブノ下ニテ靜カニ讀書スルモ又面白ク殊ニ附屬農園ヨリハ季節ニ應ジテ新鮮ナル野菜ヲ得ラレ、時ニ祈リ時ニ耕シツ、靜カナル生活ヲスルコトハ信心ノ道ヲ進ム病者ニトリテ最モ相應シク思ハレシコト又宜ナリ。

× 井戸開鑿。聖フランシス館開館セラレ、館員増加ト共ニ井戸一箇ニテハ用水ノ不足ヲ來シ、且ツ冬季結水ノ間ハ水量極メテ少量ナルヲ以テ、昭和五年七月金百圓ヲ投ジ新井戸ヲ開鑿セリ。

× 浴室ノ改造。昭和五年六月永年使用シ來リシ浴室頗ル朽廢シタルヲ以テ二百圓ニテ巴風呂ヲ購入シ、館員管○

三〇兄主トナリ浴場ノ改造ヲ行ヘリ。

×

道路開鑿。昭和五年十月運送ノ便、殊ニ病弱者運搬ノ際、車ガ玄關ニ横着ケニナル様西側間道ノ入口ノ地點ヨリ

幅一間半長サ四十五間ノ新道ヲ開鑿セリ。

### 第百五十八 假修道院

昭和四年四月リー教母英國訪問ノ旅行ニ上リテ、世界各國就中各地ニ於ケル修道院ヲ歴訪セラレシガ、豫ネテ修道院生活ヲ希望シ居タリシ有志ノ爲ニトテ視察セラレシ各修道院ノ組織目的生活等ヲ詳細ニ書キ送り參考ニ資セラレタレバ之ガタメ全年夏頃ヨリ一般ニ修道院ノ組織ニ大イナル興味ヲ喚起シ、一身ヲ全ク神ニ獻ゲテ清貧ニ甘ンジテ服従ト純潔ヲ以テ主ニ奉仕スル修道士ノ生活ヲ羨望スル者數名現ハレタリ。就中聖ジャイルス館舎監上〇了兄、高〇一〇兄最モ熱心ニ其ノ生活ヲ欲シ、リー教母ガ長途ノ旅行ヨリ歸リ、聖ジャイルス館ニ來リシ際尙詳細ニ具體的方法ヲ聽キ茲ニ假修道院ノ生活ニ入ルノ決意ヲナシ、ヒューベルト館ヲ假修道院トシ其生活ヲ開始セントセリ。然ル處上瀧兄ハ舎監トシテ全館員統轄ノ責任アリ。今二人ノミ全ク他ヨリ分離シテ生活ヲナス事ハ館員ノ統率、炊事、會計其他ノ都合上困難ナル事情モアリテ寧ロ此際館員全部假リニ試ミテハ如何トノ案ニ基キ館員ヲ集メ相談會ヲ開キ採決ノ結果、滿場一致賛成ヲ見タリ。依テ修道院規ニ準ジテ昭和五年三月五日大齊始日ヲ期シテ新生活ノ試ミニ入ルベク聖公會規定ノ小祈禱書六冊ヲ買入レ、一日七回ノ祈禱中ブライム朝家拝ノ代リニナシ、治療ノ濟ミタル後ターヌノ祈リ、正午ニセクスト、午後三時ノーンズノ祈リ、且ツベスパスヲ晚禱ノ代リニナシ、館員一同一致シテ緊張裡ニ一修道士トシテノ毎日ノプログラムヲ行ヘリ。

然ルニ此ノ試ミニ入りテヨリ幾何モ無ク三月十九日舎監上瀧兄病ヲ得テ聖バルナバ醫院ニ入院スルノ止ムナキニ至リタルヲ以テ、前〇久〇兄高〇一〇兄交替ニ集會ノ司會ヲナシ、後高橋兄ハ専ラ靈的集會ノ司會者トナリ、前川兄ハ館會計ノミヲ司理事ニ分擔ヲ定メ辛フジテ館員ノ一致ヲ保ツヲ得タリ。

當時ノ生活ニツキ一言センニ、館員ハ言行ヲ慎ミ祈禱ノ時間來ラバ館員悉ク聖壇前ニ集リテ定規ノ禮拜ヲ捧ゲ農園ニ居ル者黙々トシテ祈リツ、働ケリ。此試ミノ期間リー教母ハ毎週一回水曜日ノ午前來教シ正午ト一時ト三時ノ三回ノ集會ハ自ラ司會ヲナシ、斷ヘズ指導ト奨勵ヲ與ヘタリ。扱試験的ニ行ヒタル大齊ヲ經過シ復活トナリシカバ、當然之ヨリ本式ノ修道院トシテ聖ジャイルス館ヲ聖ジャイルス修道院ニ改メ、半永久のナル一院ヲ創シ其生活ヲ始ムルヤ否ヤヲ確定スル事トナリ、四月二十五日リー教母ハ館員ノ一人々々ヲヒューベルト館ニ呼ビテ其眞意ヲ質ス處アリ。時ニ上瀧舎監ハ未ダ退院ノ運ビニ至ラズ。爲ニ館ノ統制ノ點ニツキテモ遺憾ノ點ナキニ非ズ。旁々假修道院生活ニ於テ別段苦痛ヲ感ジタルニハ非ザルモ心モ身モ弱キ病者トシテ一生修道院生活ヲナス事ニハ尙躊躇セザルヲ得ズト答フル者一般ニシテ、或ル篤信ノ兄弟二名ハ他ニ同志アラバ我神ノ助ケニヨリテ之ヲナサント答ヘシモ結局修道院創立ニ必要ナル定員ニ至ラザリシヲ以テ此ノ計畫ハ一時中止ノ事トナレリ。サレドコノ試ミニヨリテ聖ジャイルス館員ハ勿論教會信徒全般ニ亘リ清貧服從貞潔ヲモットトスル修道院ノ精神高揚セラレ信仰生活ノ向上ニ益スル處頗ル大ナルモノアリキ。

第百五十九 聖ニコラス館

昭和二年十二月十九日聖ビリポ館員ハ全部新聖ステパノ館ニ引越セシヲ以テ聖ビリポ館ハ長ラク祈リノ中ニアリシ兒童ホームトナス事トナリ。聖ニコラス館ト改名シ、岩〇一〇、福〇英〇、福〇國〇、三〇三〇、高〇昇等

學齡期ニアル兒童ハ居残り、兼ネテ其二室ヲ開放シテ望學校ノ教室トナシ、午前午後夜間ノ各組ニ分チテ病者兒童並ニ下町兒童ノ教育ヲ行フ場所トセリ。舎監トシテ石○秋○兄選任セラル。其後ノ兒童ホームヘノ入館者佐○間○治、坂○銀○郎、早○昇、栗○安○、武○義○等、館員十名内外ナリキ。

×

昭和五年度ニハ男子ホーム内ニ種々ノ變化アリ。全年十一月一日獨立セル兒童ホームノ存續ニツキ役員會ニテ協議ノ結果、主トシテ兒童ニ對シ一層ノ勤勞精神ヲ學バシムル爲（報告書ニヨル）本家タル聖ステパノ館ニ合併スル事トナリ、全館三階ヲ兒童ホームトナシ十一月一日全部引越ヲ終了セリ。兒童ノ引越ト共ニ、聖ニコラス館ハ醫療の立場ヨリ常ニ看護ヲ要スル男子重病者ヲ收容スル事トナリ、板○昌○兄、須○九○兄、村○重○兄、吉○留○兄、太○小○郎兄、伊○竹○兄等收容、吉○又○衛○兄、竹○巳○助兄、永○富○兄等炊事又ハ看護ノ勞ヲ執ル事トナリ、初メ吉○又○衛○兄看護長トシテ就任シタルモ、翌年一月一日病氣ノ爲辭シ、佐○亮兄之ニ代リタリ。

### 第一百六十 參議員會

男子ホームニ於テ一般投票ニヨリテ選出セラレタル議員ノ會議ヲ參議員會ト名付ク。昭和三年一月ヲ以テ創始セラル。之ヨリ先昭和二年十二月十九日新聖ステパノ館開館ト共ニ大男子ホーム成ルヤ、毎月一回館ノ平和ト幸福増進ノ爲館員總會ヲ開キシガ、今ヤ六十有餘ノ多數トナリテ一問出ル毎ニ甲論乙駁ウツロンオツクバク歸スル所一ナラズ。徒ラニ時間ノミ經過シ、得ル事少カリシヲ以テ、之ニ代ルベキ選出サレタル代議員會ヲ以テセントシ、所謂職業別選舉制ヲ採用シ、館内外ノ各勤務區別毎ニ一名ノ代表ヲ選出スル事トナリ、代禱部片○定○兄、治療部上○作○郎兄、

炊事部高○豊○兄、病人係吉○又衛○兄、屋外勞動佐○亮兄夫々選任セラレ、之ニ男子ホーム舎監高○利○兄副舎監上○了○兄ヲ加へ、毎月一回館ニ關スル一切ノ事項ニツキ提出セラレタル問題ヲ審議セリ。昭和四年ノ參議員ノ改選ニ於テ、職務別代表制ハ人材ヲ逸スル虞<sup>オシ</sup>レアレバ館員全體ノ中ヨリ一般投票ヲ以テ選出スルヲ可トストノ案全館員ノ支持ヲ得、右投票ノ開票ヲ行ヒタルニ、佐○亮、小○保○吉、太○小○郎、高○一○ノ諸兄衆望ヲ負ツテ之ニ當選シタリ。然ルニ昭和四年四月舊聖ステパノ館移轉問題起ルヤ議員ノ意見一致ヲ見ザル上種々ノ内紛ヲ生ジ、旁々一時參議員會議ノ制度ヲ休止スルノ止ムナキニ至レリ。此時上瀧兄ハ例ノ副舎監權限問題ヨリ草津ヲ去リテ聖ジャイルス館舎監タリシガ、今又參議員會休會事件アリテ南北ニ並立<sup>ヘイリツ</sup>スル兩館ノ間ニ不快ノ空氣流レ此處ニ一大轉換<sup>アレンカシ</sup>ヲ要スルモノアルヲ思ハシメタリ。

舎監更迭。昭和五年八月二十二日聖望小學校落成式アリ。當日集合シタルミッシヨン役員ハ貫長老ノ斡旋ニヨリ全校職員室ニ於テ臨時役員會ヲ開キ、リー教母ノ諮詢ニ應ジテ重大ナル決議ヲナセリ。即チ舎監ノ大更迭ヲ決定發表セリ。聖ステパノ館舎監タリシ高○利○兄ハ新病院ノ事務長トシテ病院ノ勤務ニ轉ジ、聖ステパノ館舎監トシテハ聖ジャイルス館舎監上○了○兄上草就任、上瀧兄ノ後任ニハ病院事務長鈴○緋兄ガ選任セラレタルナリ。蓋シ新病院ハ男女働人ノ増加ニヨリ之ガ指導統轄ト多端ナル事務ノ處理ト著ク膨大セル會計ヲ司ルタメニハ優秀ナル人材ヲ要シ、鈴木事務長ノ健康兎<sup>トカク</sup>角勝レザルタメ、遂ニ高須兄ノ選任ヲ見、又聖ステパノ館ノタメニハ久シク左遷ノ感アル上瀧兄ヲ用ヒテ自由ニ其ノ手腕ヲ發揮セシムルト共ニ鈴木事務長ハ多年ノ忠實ヲ認メテ舎監ヲ命ジ閑地ニアリテカヲ養ハシメントノ旨ナリキ。斯クテ悲喜交々<sup>ツモツモ</sup>ノ間ニ八月二十七日ヲ以テ各其任ニツキ事務ノ引繼ヲ了シタリシガ、之又主ノ御導キカ、コノ變化ニヨリテ、先キノ暗雲一掃セラレ責任者モ館員モ新シキ感謝ト活氣ヲ以テ信仰ノ旅路ヲ辿ルニ至レリ。

參議員會ノ復活。聖ステバノ館ニ於テハ上瀧舎監ノ就任ト共ニ改革ヲ加ヘタルモノ少カラズ。昭和六年一月ヨリ參議員會ヲ復活センコトヲ欲シ館員總會ヲ開キ、一般投票ニヨリ參議員ノ選舉ヲ行ヘリ。開票ノ結果青○昇兄栗○松○兄、德○唯○兄、柴○唯○兄、齋○佐○兄ノ諸當選。之ニ聖ニコラス館看護長佐○亮兄及上瀧舎監ヲ加ヘ、毎月一回第一火曜ニ例会ヲ開ケリ。館員ノ總意ヲ反映セシムベク豫メ提案ノ申込ヲ受ケ、各提案ハ慎重ニ審議セラル。毎回十餘項ノ議題ヲ可決、發表シ館員ニヨキ指導ヲ與フルヲ常トセリ。春季館員更迭ニ於テ青○昇兄聖ジャイルス館ニ轉ジタルヲ以テ、次點者武○國○兄議員トナル。昭和六年八月國立療養所設置ニツキ聖ジャイルス館引上ノ爲合併シタルヲ以テ參議員ノ増員行ハレ、選舉ノ結果鈴○繩兄、大○賢○郎兄ノ二名加ヘラル。

昭和七年一月八日總員改選ヲ行フ。開票ノ結果、德○唯○兄、栗○松○兄、佐○亮兄、佐○佐○兄、前○久○兄、大○賢○郎兄、鈴○繩兄、高○一○兄等當選セリ。

### 第三十章 特種集會

#### 第六百六十一 暗誦會

以下男子ホーム内ニアル各種團體ニ就キ一言セントス。

大正十年冬霜間愛友會ヲ中心トシ、宿○薰兄、高○千○兄等主トナリテ聖句暗誦會ナルモノヲ作レリ。豫メ特定ノ章ヲ決定シ、一定ノ期間内ニ其ノ暗誦ヲ練習ス。而シテ期日滿了ノ日會員ハ或ハ水ノ窪<sup>ノボ</sup>ヨリ或ハ栗生ヨリ續々霜間ノ聖ステバノ館ニ集合シ、定刻ニ至レバ新館ノ方ニ一人宛呼出シテ審査員ハ之ヲ試験ス。言ヒ直シテモ駄

目、<sup>ア</sup>聞ヘテモ駄目ニシテ之ヲ通過シタル者ニ賞品ヲ與ヘタリ。

昭和二年十二月草津新聖ステバノ館ニ移轉シタル會員ハ昭和三年夏ヨリ再ビ暗誦會ヲ始ム。片○定○兄、伊○太○兄、武○國○兄、栗○松○兄、須○九○兄等有力ナル會員タリ。就中片倉兄ハマタイ傳五、六、七章ノ暗誦ヲ終ヘ、栗原兄、須田兄ハロマ書全部ノ暗誦ヲ終リ、訓練セラレタル記憶ノ力ニ館員ヲ驚カシメタリ。

昭和五年服○勝○兄、木○文○助兄、長○幸○兄等加ハリ、ロマ書ノ暗誦ヲナセリ。會費月五錢位ニテ集會毎ニ相互ノ批評及共勵ヲナシ茶菓ヲ用ユルヲ例トセリ。此ノ暗誦會ハ一般館員ノ聖書研究熱ヲ高メ會員各自ハ聖句ヲ暗誦シ之ヲ憶ユル事ニヨリテ隨時隨所自他ノタメ最モ折ニ叶フ聖句ヲ得テ大イナル力ト慰藉ノ與ヘラル、コトヲ實證セリ。

### 第六十二 按摩會

按摩會ノ設立ハ大正十五年三月マッサージ師金○定○郎兄ガ霜間聖ステバノ館ニ入館シタル事ニ其端ヲ發ス。全兄ハ壯年ノ頃失明シタルヲ以テ、按摩術ヲ福島一州師ニ鍼治術ヲ大久保適齋師ニ學ビテ免許皆傳ヲウケ、高崎ニ開業シ技術優秀ト人望重キニヨリ久シク全高崎市按摩灸同業組合ノ長タリ。又同志ト語ラヒ高崎盲學校創立ノ爲ニ寢食ヲ忘レテ奔走盡力シタルヲ以テ今尙全校ノ恩人トシテ敬慕セララル。

扱テ全兄ハ入館後暫ク健康勝レザリシガ次第ニ回復スルト共ニ其持テル鍼按<sup>レンジン</sup>ノ技術ヲ通シテ奉仕センコトヲ志シ即チ疲レタルヲ醫シ疼痛ヲ鎮メ館員ニ大イナル慰メヲ與ヘ居タリ。然ル處昭和二年八月青○昇兄ハ草津聖ヒリボ館ヨリ一ヶ月間傳習ノ爲來リテ師事シ、全年十二月ニハ伊○導○兄、翌三年三月ヨリ高○千○志兄入門スルニ及ビ、茲ニ組織的學習ノ必要ヲ認め、昭和三年四月按摩會ヲ創設シ、毎週一回ヲ研究日ト名付ケテ、午前中學校、

午後術科ノ修習ヲナス事トナレリ。學科ハ按摩解剖學、按摩生理學、按摩物理學、按摩治療學、按摩手術學ノ五部ニ分タレ、術科ハ擦過法、揉捏法、摩擦法、叩打法、自力他力運動法及臨床診斷治療等ニ分タル。研究日以外ハ一般ノ申込ニ依リテ治療ニ従事ス。總テ無料ヲ以テ愛ノ奉仕ニ當リシガ、幾何モナク無料ニテハ反ツテ頼ミ惡シトノ依頼者側ノ希望ヲ容レテ、一回ノ按摩料男子ホームヲ除ク他ホーム十錢、ホーム以外二十錢、浴客三十錢ヲ内規トシ、其生活狀態ニ應ジテ伸縮ノ自由ヲ認メ、收入ハ舉ゲテ之ヲ館會計ニ納メタリ。前記三名全科修業ノ後モ尙研究日ニハ一同會シテ學術ノ進歩ヲ圖ル爲専門書ニヨリテ研究ヲ繼續セリ。

昭和六年迄ノ傳習者六名、皆良キ奉仕ヲナシツ、アリ。

X

點字會。按摩會ノ成立ト同時ニ點字ヲ以テ學科ヲ教授スル必要上點字會ヲ開キ、按摩修習者以外ノ一般盲人ノ希望者ニモ併セ教授セリ。昭和六年度ニ於ケル點字書籍數、新舊約聖書二十七冊、聖歌・祈禱書各一冊、普通按摩術四冊、解剖學三冊、其他個人所有ニ屬スルモノ數十冊アリ。本病者ハ手指ヲ侵サル、事甚ダシク、多クハ其知覺脱失シテ觸知ノ用ヲナサザルモ、幸ニシテ未ダ觸神ノ保存セラル、視力障害アル者ハ皆本會ニ入り點字ヲ習ヒ、之ヲ通シテ知識ト大イナル慰メヲ享ケツツアリ。

第百六十三 ハーモニカバンド

(一) ハーモニカ研究會

昭和三年一月六日ハーモニカ同好者ノ爲櫻○謙○兄、柴○盛○兄、上○作○郎兄等主唱者トナリ、聖バルナバ・ハーモニカ研究會ヲ組織シ、高○利○兄ヲ會長ニ推舉シ、樂譜ヲ購入シ各種奏法ノ練習ヲ開始セリ。會員十五

名、會費月額二十錢、將來大イニナス處アラントセシモ諸種ノ都合上會ノ統制意ノ如クナラズ、約三ヶ月ヲ經テ自然消滅ノ形トナレリ。

(二) ハーモニカバンド

越エテ昭和四年六月上旬一般音樂普及ヲ目的ニテ聖ニコラス館兒童木○隼○君外六人ヲ中心トシ、清○八○兄青○昇兄、佐○誠兄等約十名ニテ、ハーモニカバンドヲ組織シ、柴○盛○兄之ガ指導者タリ。會費月額十錢ヲ徵シ毎週二回水金ノ晚、正則的練習ヲ行ヒ、又簡單ナル樂典ヲモ教授セリ。全年クリスマス及ビ音樂會ニ公演ヲナシ好評ヲ博シタリ。年ト共ニ會員ノ移動アリシモ尙増員ノ傾向ヲ示シ、現在會員十五名（昭和六年三月十四日現在）ニ達ス。全會ニハ各スケールノハーモニカハ勿論、バス、バルトン、オクターブハーモニカ等ノ如キ専門用ノハーモニカヲモ備フ。

第六十四 ブラスバンド

ブラスバンドハ速ク大正十年頃霜間愛友會ガ諏訪神社祭禮傳道ノ爲組織シタル教會樂隊ニ端ヲ發ス。而シテ昭和三年四月野○熊○兄ノ後ヲ襲ッテ柴○盛○兄バンドニ加ハリシ前後ヨリバンドノ面目一新シ、時節ニ應ジテ新曲ノ練習ヲナシ、殊ニ櫻○謙○兄、小○保○吉兄、上○作○郎兄等樂員一致ヨク心ヲ合セテ毎日曜傳道行軍ニ從事セリ。其時迄主要樂器ハバルトン、コルネット、ベース、ドラム、スネアドラムノ四種ナリシヲ、昭和四年八月青年會婦人會主催バザー純益金ノ半ヲバンドノ爲ニ獻ゲラレシヲ以テ、金八十五圓ヲ投ジテトロンボヲ購入シベースドラムノ古キモノ以外ニ時<sup>イシチ</sup>ノ更ニ大イナルモノヲ一箇三十五圓ニテ購入シ、トロンボハ上原兄、柴田兄責任ヲ持チ茲ニ大イニ其陣容ヲ整ヘタリ。

毎週土曜ノ午後合同練習ヲナシ、毎日曜日ノ傳道行軍、バザー、運動會、諸祝賀會ニ必ず出場シ、大イナル貢  
獻ヲナシツツアリ。

×

音樂研究會。昭和六年一月十八日一般音樂常識普及及ビ聖歌ニ關スル知識ヲ涵養スル目的ヲ以テ聖バルナバ音  
樂研究會組織セラレ、會員坂○銀○郎、早○昇、荒○七○、篠○正○、小○菊○等十七名ヲ擁シ、毎週一回土曜  
日ノ午後聖望小學校第二教室ニ於テ柴○盛○兄樂典ヲ中心トシテ一般音樂ノ講義ヲ開始シ、善キ結果ヲ收メタリ。  
當地ニ於ケル音樂ノ普及發達ニ就イテノ柴○盛○兄ノ貢獻ハ特筆大書ニ値ヒス。

第百六十五 白樺社

俳句、短歌同人ノ會ナリ。昭和三年七月武○惠○、野○夏○、太○迎○、小○原○笑等相寄り勤行ノ餘暇自ラ  
成リシ句ヲ持寄りテ互ニ評シ合ヒシニ始マル。當地ハ元々松○菊○、吉○葦○等ノ主宰セル吟友會ノ如キ有力ナ  
ル俳句會モアリ、斯道研究ノ盛ナル土地柄ナレバ、直チニ同人二十餘名ニ達シ、往々集句五百句ヲ超ヘタルコト  
モアリ。病者ノ立場ヨリ又信仰ノ眼ヲ通シテ見タル春夏秋冬般ノ事象自ラ句トナリ歌トナリ、既ニ卷ヲ重ヌル  
事十餘、純情胸ニ迫ル名吟少カラズ。鶴田素伯宗匠、松鶴庵暁郊宗匠主トシテ之ガ撰ヲナス。

迎雨、惠泉、清雨、太好、刀川、夏洋、松風、春洋、一笑、光雪、ひろむ、玄洋、草幹等皆同人ナリ。

第百六十六 英語會

英語會ハ昭和三年十月高○一○兄、鈴○義○兄、徳○唯○兄ノ三名相謀リ、マギル師ノ指導ヲ受ケテ英文聖書

並祈禱書等ヲ研究セン事ヲ協議シタルニ端ヲ發シ、更ニ青年會員中英語ヲ學バント欲スル有志ノ意向ニ基キ一ノ組織的ナル研究機關ヲ設ケテハ如何トノ議起リ、茲ニ會員前記三名ノ外高○利○兄、鈴○繩○兄、佐○亮○兄、前○久○兄、伊○田○吉○兄、武○喜○兄、大○賢○郎○兄等計二十一名ヲ得タルヲ以テ、全年十一月聖バルナバ英語會ヲ組織シ、リー教母ヲ顧問ニ、マギル師ヲ會長ニ、山中師ヲ副會長ニ推戴セリ。高須兄ノ好意ニヨリ聖ステパノ館舎監室ヲ教室ニ充テ毎週一回英文解釋、會話、文法、英語聖歌等ノ學習ヲナシ、中一回ハリー先生又ハマギル先生ノ教授ヲ受ク。高橋兄、鈴木兄、德滿兄交互ニ幹事トシテ會務一般ヲ處理セリ。幾何モナクシテ、高橋・鈴木兩兄病院勤務ニ轉ジ、多忙ノ爲毎回出席困難トナリタルヲ以テ、便宜上德滿兄常任幹事トシテ會務ヲ擔當スル事トナリタリ。

昭和四年春ヨリ謄寫セル教材ヲ使用スルノ外、リー先生及マギル先生ヨリ寄附セラレタル英文トラクト、英文雜誌ニテ學ビ、又會費ニテ購入セル英文雜誌ヲ回覽シテ勉學上大イニ得ル處アリ。更ニ翌五年春マギル先生ヲ通ジテ一米人ヨリ、パーマ博士書「標準英語讀本」<sup>ヨラシイトイフツラフレニユイ</sup>及ビ之ニ關スル新教科書ノ寄贈五十冊ヲ得テ、系統的ナル教授ヲ開始スルコトヲ得タリ。全年秋マギル先生ヲ通シテ輕井澤宣教師有志ヨリ米國聖公會使用ノ英文祈禱書及ビ共通聖歌集二十冊ヲ受ケ會員ニ配布シタリ。更ニ全年五月ニハ藤田親考兄、高橋美貞兄等上町ヨリ來學スル者、青木進一兄等旅館客ニテ参加スル者、休暇ヲ利用シテ來草セル長野兄、高田兄等大學生ノ加ハルアリ。單ニ學修ノミニアラズシテ、會員親睦ニヨリテ更ニ知見ヲ弘メ益スル處少カラザリキ。全年夏會長マギル先生ノ入院ト京都轉地療養ノ爲會員ハ甚ダ寂寥ノ中ニ學ビ居タリシモ、六年四月會長歸草ト共ニ舊倍ノ興味ヲ以テ學習ヲ續行セリ。

×

ローマ字會。鶴田院長ノ御希望ニヨリ、昭和五年九月病院在勤ノ館員及ビS館治療部員中ノ四名ニ對シ、勤務

上ノ必要ヨリローマ字一般ヲ學修セシムル事トナリ、病院別室ニテローマ字講習會ヲ開ク。毎週三回徳滿兄擔任ニテ主トシテヘボン式ニ基キローマ字綴ノ構成、書方、讀方、文法、ローマ字書簡文、ローマ字作文等ヲ教授ス。之ニ刺戟セラレ、之ト相前後シテ、聖ステパノ館ヲ中心トシテ二十歳前後ノ若キ青年會員ニシテローマ字ヲ學修セント欲スル者二十餘名ニ達シタルヲ以テ、九月十八日ローマ字會ノ第二クラスヲ設ケ、樋○寅○郎兄、齊○佐○○兄幹事トナリ、聖望小學校教室ニテ毎週二回ローマ字ノ正則教授ヲ開始シ、二クラス共全年十二月其講習ヲ了ヘタリ。

X

英語會第二クラス。明ケテ昭和六年一月ローマ字會ヲ卒業シタル兄弟達ノ爲ニ英語會第二クラスヲ新設シ、標準英語讀本ヲ用ヒテ講讀、文法、和文英譯等ノ教授ヲナス。内一回ハマギル先生ノ教授ナリ。

### 第三十一章 リー教母ノ光榮

#### 第百六十七 草津聖エドモンド館

昭和三年九月聖ステパノ館後方ニアリシ十五坪許ノ木造平屋ニ二階ヲ増築シ、聖エドモンド館ト命名シ、尋ラリー教母ノ住宅トナセリ。階上六疊八疊ノ二室ハ應接室ヲ兼ネタル事務室ト寢室、階下六疊八疊ノ二室ハ食堂ト召使室ニ充テタリ。南面シテ日當リ良クホーム各館ハ相隣接或ハ招呼ノ間ニアリテ萬事利便ノ地點ニアリ。

#### 第三十一章

#### 第百六十八 聖ジュリア館

昭和三年十月ホーム以外ノ患者ニシテ他ニ救護者無キ者ヲ一時收容シテ看護スル目的ニテ、聖ステパノ館ノ後方ニ木造二階建一棟ヲ改造シ、十一月通稱三千兩娘事野姉妹ヲ收容シテ赤羽看護婦ガ看護ノ任ニ當リ、引續キ高橋姉ト言フ梅毒患者ヲ收容セリ。何レモ頼辺ナキ身ニキリストノ愛ニヨル救護ヲ受ケ深キ感謝ト喜悦ノ中ニ眠レリ。其後上町一労働者ニシテ難症ノ潰瘍アル患者ヲ收容セリ。二階ノ一室ハ收容セル患者ノ家族等ノ來草ノ際ノ宿泊所ニ用ヒ他一室ハ看護婦幼稚園保姆ノ寄宿室ニ充テタリ。昭和六年二月婦人ホームノ移動ニヨリ、其ノ舎監室ニ充當スル事トナリ、舎監相○鎔○兄及ビ池○ミ○姉、石○田○ゴ姉ノ三名移リ住ム事トナレリ。

X

昭和六年八月、國立療養所設置ニ伴ヒ霜間男子ホーム聖ジャイルス館一帶ノ土地收用セラレ此ニアリシ館ノ上草止ムナキニ至リ爲ニ聖ジュリア館、聖エドモンド館ノ二館ハ男子ホームニ轉屬シ、重症者病室トナレリ。

草津聖エドモンド館及び聖ジュリア館



聖エドモンド館(リセウ位屋)及び聖ジュリア館

昭和四年十一月

第百六十九 リー母上ノ藍綬褒章拝受

昭和三年十一月十日、今上天皇陛下ニハ京都紫宸殿ニ於テ即位ノ御大典ヲ舉ゲサセラル。人皇第百二十四代ナリ。陛下夙ニ天下經綸ノ道ニ於テ日夕御思學アリ。茲ニ大運ヲ承ケ宸極ヲ踐ミ給フニ於テ、特ニ食フニ食ナク、着ルニ衣ナク、病ミテ醫療ノ道ナキ衆生ヲ憐ミ、之等社會事業ニ從事スル者ノ中其功績顯著ナルヲ選ビテ、明治十四年一月御勅定ノ藍綬褒章ヲ御下賜ノ御沙汰アリ。圖ラザリキ我リー教母ハ其選ニ會ヒ、大恩ヲ辱フセントス。即チ御即位御大典ノ當日宮内省ノ發表ニヨリテ之ヲ知ルヤ、内外各地ヨリノ祝辭讚言雨ノ如ク來リ、東西ノ新聞紙皆筆ヲ揃ヘテ齊シク教母ノ寫眞ヲ掲ゲ、其事業ト功績ヲ天下ニ發表セリ。此日午前十時ヨリ教會ニ於テ貫長老司式ノ下ニ御大典祝賀式ヲ、又午後三時ヨリ湯之澤區主催ノ大提燈行列アリ。教會ノ樂隊ヲ先頭ニ奉祝歌高ラカニ歌ヒツ、全區ヲ一周シ、大イニ奉祝氣分ヲ表セリ。全十四日大嘗祭ニ付キ再ビ提燈行列ヲ行フ。參加者約五百名、實ニ盛大ナリキ。十一月二十七日（火曜）本縣廳ヲ通シテ褒章到着ニ付キ教會有志發起トナリ會館ニ於テ教母ノ爲ニ大祝賀會ヲ開ク。會スル者約三百、信徒有志ノ五分間感想アリ。又リー教母ヨリ挨拶アリ、終リテ一同感謝シ、陛下ト皇室ノ爲ニ祈レリ。此事アリテヨリ我事業ハ愈々廣ク世ニ知ラレ、來訪スル者多キヲ加ヘ新シキ同情者ヲ起セリ。

第百七十 訪問隊

第三十一章

リ一教母ノ光榮

昭和四年一月三十一日聖ステパノ館ニ於ケル臨時委員會ニ於テ、求道者並ニ信徒ノ融和ト主ニ在ル信仰の交際ヲ通シテ信仰生活ヲ助ケル爲ニ、訪問隊ヲ設置スルノ案成リ、人物選考ノ結果相○鎰○兄、阿○エ○姉、池○ミ○姉、栗○松○兄、片○定○兄等選任セラレタリ。主トシテ求道者宅ヲ訪問シ、聖歌聖書ヲ通シテ信仰生活ノ指

導ヲナシ、勉メテ求道者會ニ出席シ教師ヲ助ク。又信者ニシテ教會ヨリ遠ザカリ居ル者、病床ニアリテ教會ニ出席シ能ハザル者ヲ訪問シ、聖歌ヲ歌ヒ聖書ヲ讀ミ説教ヲ取次ギナドシテ、助ケト慰メヲ與フ。此制度ハ頗ル有用ナル事ヲ證セラレ、今日ニ至ルモ存續シ、教役者ノ近衛兵トシテ善キ働キヲ續ケツ、アリ。

前記ノ外隊員タリシ者鈴○繼兄、武○國○兄、佐○亮兄、吉○又○衛○兄、酒○筆○兄、大○賢○郎兄、管○丈○兄等アリ。

### 第七十一 リー教母ノ第二回歸英

リー教母ハ昭和二年ノ頃ヨリ老後ノ思出ニ今一度故國ヲ訪レ殘務ヲ整理シ且ツ其往還ノ途ニ世界各地ノ恩人達ニ謝意ヲ表セン事ヲ願ヒ殊ニリー教母ノ從兄弟、姪甥等極力歸英ヲ勸メ、其旅費サヘ送リテセキ立テ、若シ教母ダニ良シトセバ最早多年神ノ御用ニ其身ヲ獻ゲタルヲ以テ、靜カニ世ヲ離レテ風月ヲ友トシ餘生ヲ樂マシメントテ孝養ノ備ヘ整ヘテ待テ設ケタリ。サレド事業ノ發展急速ニシテ内外多事其志ヲ果ス事能ハザリキ。然ル中ニ昭和三年十一月十日勅定藍綬褒章御下賜ノ恩惠ニモ浴シテ一代ノ面目ヲ施シ、且ツ新醫院建築ヲ除ク諸種ノ懸案モ一段落ヲ告ゲタルヲ以テ、マキム監督トモ御相談申上ゲ休暇ヲ得テ歸英ノ事ニ決セリ。

昭和四年三月十日當草津出發、當日午前九時信徒一同教會ニ集合シ、別レヲ惜ミ且ツ一同ニテ老教母御旅行ノ平安ヲ祈リ、總テハ主ノ御導ト御加護ニ委ネ相共ニ記念撮影ヲナシ、停車場迄見送ヲナス。爲ニ驛員下町ノ人々ニテ黒山ヲ築ケリ。三月十二日午後三時横濱出帆春洋丸ニテ先ヅ米國ニ渡リ、草津ノ事業ニ興味ヲ有スル各團體又ハ個人ヲ歴訪シ、至ル處テ厚遇歡待セラレ、多クノ新同情者、病者ノ個人的支持者ヲ得タリ。就中大ナルハニ  
ハーモーク市 Miss Mary and Miss Annie Arnold 兩姊妹ガ望學校ノ新校舍並運動場ノ爲ニ金五千弗ヲ提

供シタルヲ最トナス。尙若干ノ婦人會及ビ母ノ會ニテ講話ヲ乞ハレ、多忙ナル教母ハ極メテ短カキ話ヲナシタルニモ拘ラズ會員ニ頗ル感銘ヲ與ヘタリ。英國ニテハ隅々ロンドンニテ開カレタルギルド本部ウオッチャーズ・アンド・ワーカーズ會ノ五十年記念祭ニ日本支部代表トシテ出席スルノ光榮ヲ得、會長ノ請ニヨリ一場ノ講演ヲナシ、其筆記ハ機關雜誌ニ掲載セラレテ全世界ニ亘ル支部ノ會員ニ草津ヲ紹介シ、感謝ト祈禱ノ題目トナレリ。<sup>Hilsh</sup>  
 リーナル故郷ニ於テ多クノ親戚知己ト樂シキ團樂<sup>ザンク</sup>ノ中ニ日ヲ過シタリ。親戚一同既ニ老齡ノ事ナレバ母國ニ留リテ草津ニ歸ル事ヲ賛成セザリシガ、草津ニアル幾百ノ子供ト其ホーム並ニミッシン事業等ヲ覺エ、初メテ草津ヲ訪レシ時神ニ契ヒシ如ク草津ノ土ニ歸セン爲ニ其ノ止ムルヲ振り切りテ歸草ノ途ニ就キタリ。

尙其ノ前英國知名ノ各修道院ヲ訪レ、聖ジャイルスシュタフトニテミス・ネツルトンヲ草津ノ働キニ得、歸路伊太利ニ立寄リローマ・アツシジノ聖フランシスノ遺蹟ヲ尋ネ、聖地ヲ遙カニ望ミツ、印度ニテハオックスフオードミッシン<sup>ツツガ</sup>ニ屬スル憐ミノ姉妹ヲ訪ネテ數日ヲ過シ、昭和五年一月十七日午後八時、九ヶ月ニ亘ル長途ノ旅行ヲ恙ナク終ヘテ歸草セリ。當日朝日新聞ニハリー教母ノ寫眞ヲ掲ゲ其事業ト崇高ナル人格及ビ病者ニ對スル深キ愛ヲ讚ヘタリ。草津驛ニハリー教母ヲ迎ヘント蠟集<sup>ナレヤ</sup>セル大群集ニサシモ廣キ停車場廣場モ全ク人ヲ以テ埋メラレタリ。定刻ヲ過グル事三十分、教母ヲ乗セタル列車ホームニ突入スルヤ、萬歳歡呼ノ聲天地モ爲ニ揺グガ如ク、潮ノ如キ大群集ハ改札口ノ方向ニ殺到シ身動キモ能ハザリキ。途々尙歡呼<sup>ミチム</sup>ノ聲ヲ擧ゲツ、教會ニ於テ直チニ安着感謝祈禱會ヲ開ク。會堂會館ヲ通ジテ尙全會衆ヲ容ル、能ハズ。教母ノ挨拶又感極リテ聲淚共ニ下ルモノアリキ。

昭和四年三月リ一教母歸英ニ付キ、年毎ニ加ハル主ノ祝福ニヨリテ頗ル膨大セル草津聖バルナバミッションノ各事業臨時管理者トシテ、貫民之介長老命ゼラレ、長老ハ之ヲ機會ニ教會ノ定住長老トナリテ慰安ノ家ニ住シ、リ一教母ニ代リテ全事業ヲ管理シ、又病院新築工事ヲ督シタリ。事業ノ事ニハ經驗淺ケレバトテ謙遜シテ多クノ件案ハ舍監會議ニカケ、其ノ決議ヲ重ンジテ之ヲ行ヒ、一般ニ對シテハ極度ノ寛容ト慈愛ヲ示シタリシカバ、病者等ハ平信徒ト司祭、病者ト壯健者ノ區別モ忘レ、慈父ノ如ク慕ヒ近ヅケリ。リ一教母歸草ト共ニ其任ヲ解カレタリ。

第三十二章 聖バルナバ醫院ノ移轉及ビ新築

第七十三 松本留吉氏ノ寄附

昭和四年正月新春ノ慶壽更ニ喜悅ト感謝ヲ加ヘタルモノアリ。ソハ東京藤倉電線會社社長ニシテ外國貿易ヲ業トスル東京ノ著名ノ實業家松本留吉氏ガ草津ノ爲巨額ノ寄附ヲ申出ラレタルノ報道ニ接シタレバナリ。之ヨリマエ松本氏ハ還曆ノ祝賀ヲ記念シ、最モ有意義ナル社會事業ノ爲ニ若干金ヲ寄附セントノ良キ志ヲ起シ、之ヲ友人ナル宮内次官關屋貞三郎氏ニ洩ラサレタリ。關屋次官ハ親任官待遇ノ宮内大官ニシテ既ニ十數年側近ニ奉侍シ、陛下ノ御恩寵ヲ蒙リ且ツ宮中方面ヲ代表シテ公私ノ各種社會事業團體ニ關係シ、又其事業ニ關スル造詣淺カラザレバ、其ノ意見ヲ聞カントテナリ。扱テ次官ハ熟慮ノ結果、目下我國ニ於テ最モ等閑視セラレアル癩治療事業ノ爲ニ捧グルコソ最善ナレト答ヘラレタリ。然ラバ我國ニ於テ癩治療事業ヲナス公私十餘ノ團體中何レノ團體ニ之ヲ與フルヤノ問題生ジ、暫シノ期間大枚八萬圓ハ其歸屬スル處未定ノ状態ニアリキ。サレバ湯之澤區當局モ亦此ノ

金ヲ受ケテ自ラ一大病院ヲ經營セント大イニ策謀セリト言フ。他ノ私設療養所又然リ。然シテ此時ニ際シテ忘ルベカラザルハ次官夫人ノ功績ナリトス。夫人ハ我聖公會ニ屬スル最モ熱心ナル信者ノ一人ニシテ、宮内省ヲ中心トシテ側近ニ奉仕スル高官夫人連ニ福音ヲ傳フベク自宅ヲ解放シテ集會ヲ催シ自ラ之ヲ指導シツツアリ。又病者ニ深キ同情ヲ表ハシ、屢々當草津ヲ訪レ病者ヲ慰メリ一教母ノ宅ニ宿リテ教母ト一夜ヲ語り明シシコトモアリ。サレバ良人ヨリ其ノ噂ヲ聞クヤ極力草津救癩事業ヲ援助セラレン事ヲ乞ヘリ。蓋シ夫人ハ隠レタル草津ノ事業ガ纖弱ナル婦人ノ手ニヨリテ行ハレ、過去數年驚クベキ主ノ榮光ヲ顯ハシ居ル事、又一定ノ基本財産ヲ有セズ逼迫セル經濟狀態ニアル事ヲ熟知シ居タレバナリ。事實其通りニシテ就中診療機關タル醫院ノ如キハ、大正六年匆忙ノ際建設シタル一棟ノ陋家ニシテ、診療所ト職員住宅ヲ兼ネ、狹隘ニシテ入院セシムベキ病室ヲモ有セズ。況ンヤ醫療器械ノ如キハ十年一日ノ如ク舊式ノモノヲ其用ニ充ツルノ止ムナキ狀態ニアリ。而モ事業ノ發展ニ伴ヒ診療患者數頓ニ増加セル時、最モ切實ニ之ガ擴張乃至改善ノ要ニ迫ラレ居ル際ナレバ、リ一教母、貫長老、山中執事ヲ初メ信者一同如何ニモシテ此ノ寄附金ガ草津ノ爲ニ與ヘラレン事ヲ願ヒ、且ツ熱心ニ祈レリ。然シテリ一教母ハ次官夫人ヨリノ求メニヨリ急遽上京、次官、並ニ夫人ニ遠山博士ヲ加ヘテ鳩首熟議、新醫院建設ニツキ具體的方針ヲ立テ、次官ヨリ再度松本氏ニ面會シ之ガ説明ヲ試ミ、草津ノ現狀ヲ訴ヘ新醫院建設ニヨツテ齋ラサル、社會的及ビ個人的慶福ノ如何ニ大ナルカヲ説カレタル結果遂ニ松本氏ハ喜ンデ草津事業ノ爲、特ニ新醫院建設費全額ト醫師ノ一ケ年分ノ俸給ヲ寄附セラル、旨確答セラレタリ。吉報一度傳ハルヤ一同雀躍シテ喜ビ、新醫院建設ノ爲將又篤志ナル寄附者ノ爲ニハギルドノ代禱ニモ出シ、各自モ密室ニテ祈リ且ツ感謝シ稍々ニ準備ヲ整ヘタリ。

昭和四年一月二十四日、遠山博士ハ關屋夫人ノ懇囑コンゴウカクニヨリ其ノ専門的立場ヨリ新醫院ノ敷地及ビ設計方針等決定ノ爲來草セラル。博士ハ皮膚科ノ世界的權威タル土肥慶藏博士ノ高弟ニシテ、近年其ノ後ヲ襲ヒテ東北帝大ヨリ東京帝大醫學部教授ニ轉ジタル篤學者ニシテ、附屬病院ノ皮膚科長ヲ兼ネラル。時恰モ醫科大學ニ於テハ學生ノ卒業試験ヲ施行中ニテ極メテ多忙ナルニ拘ラズ、病者ノ爲ナラバトテ嚴寒ノ候ヲモ厭ハズ來草セラレタルナリ。二十五日午前中リ一教母、山中師、實師ノ案内ニテ各ホームヲ綿密ニ視察シ、時ニ自ラ診察ヲナシ必要ナル療病上ノ注意ヲ與へ、又部落全體ヨリ見テ新醫院ノ位置ノ選定ニハ最モ慎重ニ實地ヲ檢分セラレタリ。聞キシニ勝ッテ事業ノ廣汎ナルト比較的重症者多キ事ニ驚キ、病者及ビ働人ニ對シ同情ト慰藉ノ言葉ヲ續ケラレタリ。リー教母宅ニテ午餐ヲ共ニシ、午後一時ヨリ慰安ノ家ニ階ニテ教會委員合同ノ相談會ニ臨ミ、新醫院建設ニ關シ病者側ノ意見又ハ希望條件等ヲ詳サニ聽取シタリ。委員側ヨリハ主トシテ、高須、入道、相馬ノ三兄交々立チテ意見ヲ開陳シ、尙博士ト各委員トノ間ニ四五ノ質問應答アリ。更ニ敷地選考ニ移ル。第一候補地濱名館下屋敷ハ部落ヨリ見レバ稍東偏スルモ、通路ヨリ少シク奧マリテ南面シ、後ニ山ヲ負ヒ日當リ申分ナク、他ニ後レテ積雪シ他ニ先ンジテ解雪ス。且ツ將來部落ノ發展ハ東方湯川ノ線又ハ下ノ原ニアルヲ以テ、其位置ノミヲ考フルモ百年ノ計ヲ誤ル事ナカルベシトテ最モ有力ナリキ。次ニ第二候補地ハ聖ポロ館ノ一帶ニシテ此地ハ既ニミッシヨンノ所有地ナレバ土地購入費ヲ節シテ之ヲ完全ナル設備ニ振り向ケ得ベク、且ツ醫院ノ主ナル目的ノ一ハホームニアル二百有餘ノ館員ノ醫療ニアル事ヨリシテ、男子ホーム婦人ホーム夫婦ホームニ近接シ醫職員ノ往診通勤藥品材料運搬等ニ便宜アルベク、且ツリー教母ノ山ヲ少シク崩シテ其土ヲ以テ地均シヲナス時ハ優ニ大病院ヲモ設立スルノ餘裕アリ。現在ノ部落全般ヨリ見テ略々中央ニ位シ且ツ交通至便ノ處ニアレバ病弱者重症者盲人ノ爲申分ナシ。サレバ兩者ノ得失急ニ決シ難キ狀勢ニアリシモ、第一候補地說稍々優勢ニシテ結局所有者濱名館トノ土地賣買價

格等ヲ參考ニ遠山博士ト松本氏ト會見シ其相談ノ結果ヲ待ツ事トナレリ。更ニ院長タルベキ醫師ノ選考、建築設計ニ關スル意見ノ交換ヲ行ヒ、午後六時ヨリ信徒全體ノ歡迎會ニ臨ム。病者ト席ヲ同ジクシ謙遜リテ敬虔其ノモノ、如キ態度ニテ共ニ祈ラル、貴キ姿ヲ見テ頑固ナル心自ラ解ケ主ノ榮光ヲ拝シタリ。貫長老ノ紹介アリ。次デ博士ハ當方ヨリノ願ヲ容レテ本病ノ歴史、徵候、治療法等ニ亘リ、其専門ノ立場ヨリ詢々講演セラル。博士ノ名ヲ聞キテ來集スル者會館ニ溢レ立錫ノ餘地ナキ有様ナリキ。講演終ルヤ聽衆ノ自由質問ヲ許サレ、原因療法、ワクチン療法、大楓子油ノ效力、遺傳力傳染力、空氣エムボリー、禿頭、失明、脱毛、食餌等ノ問題ニ就キ慘マシキ體驗ヨリ出デタル深刻ナル質問アリ。博士ハ之等ノ質問ノ一ツ一ツニイト懇ロニ明快ナル解答ヲ與ヘラレ、最後ニ我聖公會ノ一信者トシテ博士御自身ノ體驗ヲ語り、神ノ愛ヲ信ジ主ト偕ニ歩メヨト諭サレタレバ、會衆一同満足ト深キ感謝ヲ以テ散ジタリ。

### 第七十五 工事經過

而シテ博士ハ歸京後直チニ松本氏ト會見セラレ、慘マシキ病者生活ノ實情ヲ語り、且ツ新醫院建設案ニツキ種々相談ノ結果、第一候補地ノ買收ノ爲金額カサムモ差支ナキ旨重ネテ快諾セラレタルヲ以テ、其通知ニヨリ第一候補地タル落合六〇三番地ノ一敷地四百餘坪ヲ購入スベク濱名館坂〇昇〇氏ト交渉ノ結果、一萬四千餘圓ニテ賣買契約締結ス。程ナク博士ノ許ヨリ工學士タル令弟ノ作りシ美麗ナル青寫真ノ設計圖モ到着シタルヲ以テ、役員會ヲ開キ相談ノ結果、ホーム役員即チ各舎監工事監督ノ責任ヲ持チ、木造家屋ハ佐〇木〇助氏、古〇和〇氏請負ニテ二千八百圓、基礎工事、土壁、建具等ハ各作業別ニ下町労働者ニ請負ハシムル事トナレリ。之小數者ヲシテ利益ヲ壟斷セシメザラン爲ナレバ、各請負者ニ對シテモ病者ニシテ勤勞ヲ以テ業トスル者ニ成ルベク平等ニ仕事ヲ

與へ其生活ヲ潤ホサシムル様、カクシテ相互ノ助ケ又共存共榮ノ心ヲ以テ從事センコトヲ希望セリ。總坪數百二十坪、二階五室（六疊三、四・五疊、十疊）・階下ハ二四、二四、六、六、八、七半、七半、七半、四半、六、二、八、六、六二分タル。昭和四年五月二十日工ヲ起シ、全十月三十一日全ク落成セリ。總工費三萬四千六十九圓七十六錢ナリ。實ニ草津隨一ノ診療機關タル構ヘヲ有ス。醫院ノ新築移轉ニツキ直接工事ニ關係シ、日夜督勵盡力シタル者ハ事業管理者貴民之介師、山中政三執事ヲ初メ舍監高○利○兄、全相○益○兄、全上○寛○兄、全野○熊○兄ノ諸兄ナリトス。

第七百七十六 新醫院ノ開院

昭和四年九月三日新醫院長タルベキ愛知醫學士鶴田一郎氏ハ早クモ夫人令嬢同伴着任セリ。同九月六日上京シ約二週間東大遠山博士ノ下ニ於テ治療法上ノ専門的指導ヲ受ケ、亦新醫院ニ備付クベキ醫療器具ノ打合せヲナシ歸草後毎日舊醫院ニ出勤セラレ熱心且ツ親切ニ診療ニ當ラレシ爲、患者急増シ、爲ニ病者助手ノ外聖マーガレット館ヨリ民原ケサ姉ヲ轉ゼシメテ助手トナセリ。斯カル間ニ前述ノ如ク新醫院落成セルニヨリ、昭和四年十一月一日ヲ期シテ移轉ヲ行フ。當日ハ診療ヲ休止シ、朝七時頃ヨリ醫療器具藥品ノ運搬ヲ開始セリ。聖望小學校兒童ヲ初メ男女ホーム員並ニ準ホーム員教會關係ノ有志等多數奉仕ノ手傳アリシ爲、午後二時頃既ニ其ノ運搬ヲ了セリ。一同感謝ノ茶菓ヲ喫シ、後ハ従業員ノミニテソレゾレ器械器具ヲ整備シ、藥品ヲ裝置或ハ格納スル等大イニ努メテ午後九時頃漸ク片付ケヲ終ヘリ。翌二日ヨリ愈々記念スベキ新醫院ニテ診療ヲ開始ス。希望ト喜ビニ輝ク新醫院ノ従業員タル名譽ヲ擔ヒシ者ハ前記鶴田一郎院長ヲ初メ見習ヒ看護婦民原ケサ姉、事務長鈴○纒兄、外科係上○作○郎兄、藥局係鈴○義○兄、注射係瀧○早○兄等ニシテ、此日ヨリ齊○清兄ハ聖ステパノ館ヲ退館シ病院ニ屬

シテ内外ノ掃除及雜務ノ爲ノ働人トナリ、又同兄ノ妻齊○ミ○姉ハ聖マリーガレット館ヨリ來リテ同棲シ、主トシテ炊事勤務ヲ分擔セリ。

新醫院ハ、診察、注射、外科、消毒、婦人、細菌、理學的治療、貯藏、藥局、待合、宿直ノ各室ニ分タレ、尙病室モ階上看護人室ヲ初メ豫備室二ツ病室二ツ（以上疊敷）アリ。階下ハ洋式板ノ間トシテ二重硝子窓、換氣保溫又申分ナク中ニ八臺ノ新式寢臺ヲ備ヘタリ。内外全ク病院ノ觀ヲ呈ス。茲ニ病床ヲ十個ニ制限シ、敢ヘテ病院ト稱セザルハ全ク取締法規中病院ニ適用セラルベキ繁鎖ナル規則ヨリ遁レ、而モ之ニ勝リテ效果ヲ擧ゲン爲ナリ。九月中旬鶴田師上京中遠山博士ト打合セ注文シタル醫療器具モ十一月下旬ヨリ徐々ニ入荷、十二月上旬全ク到着セリ。第一回購入分總價格四千二百三圓八錢。其ノ中ニハ太陽燈、高級顯微鏡、孵卵器ヲ初メ細菌學研究上ノ器具、診察、注射、外科ノ各室ニ備フル最新式ノ醫療器具アリ。茲ニ全ク内容外觀整備シ、着々治療上ニ良成績ヲ擧ゲタリ。働人其他ノ都合上暫クノ間病室ヲ開クニ至ラザリシモ、五年三月十九日當時聖ジャイルス館舎監上○寛○兄病ヲ得入院ノ必要生ジ、初メテ二階ノ六疊ニ入室ス。即チ上瀧兄ヲ以テ入院ノ嚆矢トス。越エテ四月八日民原ケサ姉ハ家事ノ都合ニヨリ辭任歸郷シ、四月九日ヨリ大阪聖バルナバ病院看護婦タリシ赤羽美佐子姉再ビ來草、本院專任看護婦トシテ就身の働キヲナス。此時ヨリ婦人科ヲ正式ニ開設スル事トナリ、赤羽姉ハ主トシテ午前中ハ診療助手ニ、午後ハ婦人科ノ働キニ従事スル事トナリシヲ以テ、入院患者ノ看護ニ當ル事能ハザリシニヨリ、新醫院ニ移リテヨリ懸案中ナリシ婦人ホームヨリ働人派出ノ件ヲ役員會ニテ可決シ、聖マリヤ館松○キ○、駒○セ○ノ兩姉補助看護婦トシテ迎ヘラレ看護其他ノ雜務ニ奉仕セシメタリ。

尙又東京立教大學ニテ勉學中ノ伊藤梅吉氏眼疾ヲ病ミテ久シク聖ルカ病院ニテ醫療中ナリシモハカバカシカラズ依テ一旦學業ヲ中止シ同年四月二十日來草、暫ク靜養ノ傍導カレテ新シク當院事務長トシテ新任勤務セラル、事

トナレリ。然ルニ昭和五年七月上旬上町聖テモテ館成リ、同館ニ舎監トシテ赴任セルニヨリ、注射係擔任ノ瀧○早○兄會計事務ヲ擔當。間モナク八月十一日瀧田兄都合ニヨリ辭任、聖ステバノ館ニ歸館セルニヨリ鈴○義○兄之ニ代リタリシガ、新醫院ノ素嗜ラシキ評判ハ急速ナル經營ノ擴大ヲ來シ、爲ニ卓越セル事務及經營手腕家ヲ要シ、九月上旬高○利○兄聖ステバノ館舎監ヨリ當院事務長ニ轉任ヲ命ゼラレ、醫院勤務者ホームノ第一代舎監ヲ兼ネタリ。全兄良ク院長ヲ助ケ働キ人ノ監督指導ニ意ヲ用ヒタレバ、當院ハ日々殷盛ニ赴キ多クノ病者ノ慰メト喜ビノ源泉トシテ其ノ眞價ヲ高メタリ。

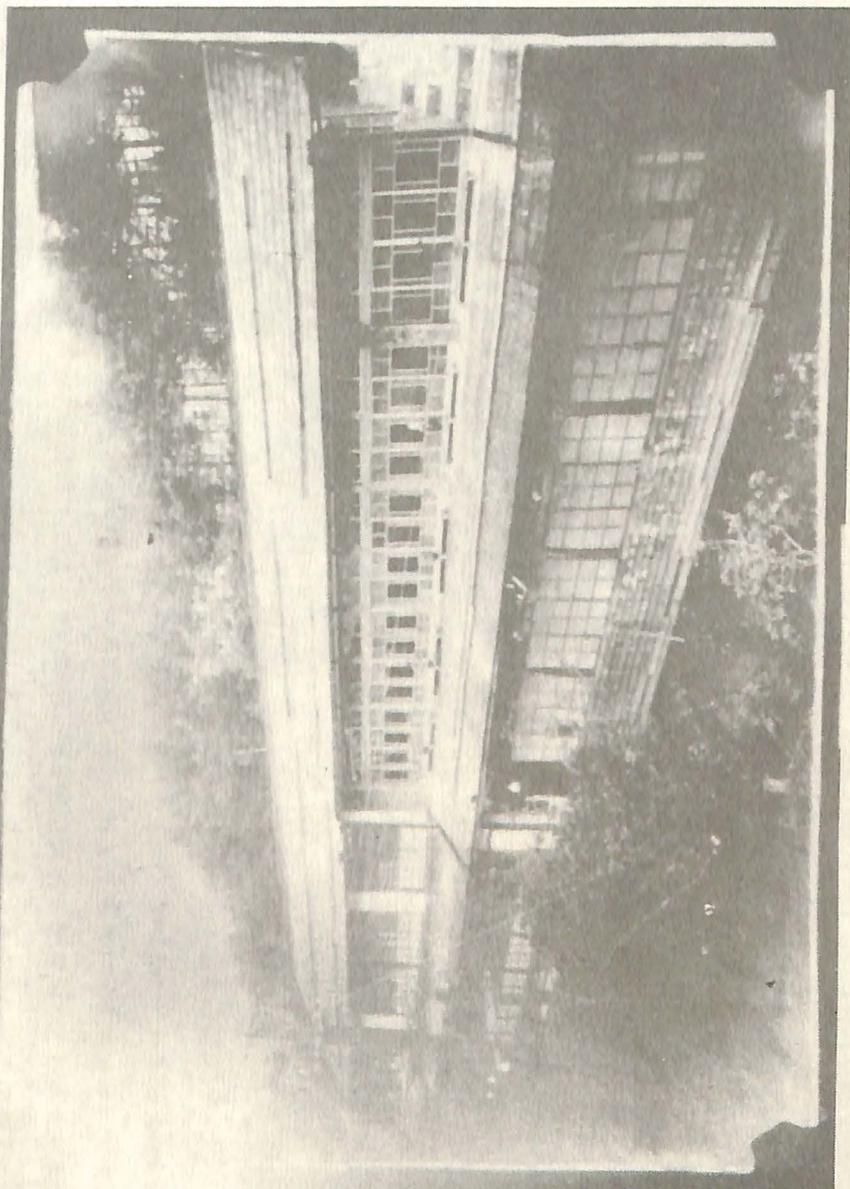
× 醫師住宅。昭和四年十月一日、古川・佐々木兩棟梁請負ニテ醫師住宅トナルベキ木造一棟十五坪（六疊三室）ノ修理及一部増築ヲ行フ。全年十一月一日落成。其經費一千二百三十一圓五十九錢ヲ要セリ。

× 内湯。昭和四年九月起工、坪數十五坪、浴槽四箇、全年十一月上旬落成ス。

× 分室ノ設置。新醫院ノ開院ト共ニ院長初メ職員一同愛ト同情ト親切ヲ以テ業ニ從ヒ、醫療ノ效日ニ月ニ顯ハレタレバ部落民ハ言フニ及バズ益々近郷ノ評判トナリ速ク輕井澤方面、六合村方面ヨリ本病者ニ非ザル一般病者ニシテ來院スル者激増シ、殊ニ上町ヨリノ患者増加シタルヲ以テ、一般健康地帶患者ノ爲、就中上町患者ノ爲ニ昭和五年十一月十二日教會慰安ノ家階下ニ分室ヲ設ケ、毎日午後一時ヨリ三時迄院長以下出張診療ヲ開始セリ。

× 男子働人ホーム。新醫院ノ開院後病者ナル男子働人ハ暫ク二階病室ノ一室ヲ使用シ來リシモ、働人ノ増加ニ伴

聖バルナバ醫院（新醫院全景）



ヒ狹隘ヲ感ジ西隣ノ獨立小家屋ヲ修理シテ此處ニ移リシガ、更ニ働人増加ノ爲再ビ狹隘ヲ告グルニ至リタレバ、昭和六年七月本館治療室上ニ二階ヲ築造スル事トナリ、佐々木・古川兩氏責任ノ下ニ工ヲ起シ、全八月上旬竣工所要經費一千五百圓、八月七日此處ニ移轉シ從來使用シタル獨立家屋ハ在ヨリノ入院患者病室トナセリ。

昭和五年末ニ於ケル職員ハ、鶴田院長以下十五名、毎日ノ取扱患者ハ投藥者ヲ除キ診察、外科、注射ノ患者ノミニテモ二百名ヲ下ラス。

昭和五年度收入總額八千五百二十三圓七十二錢、支出一萬七千五百三十九圓六十三錢、收支償ハザルハ患者ノ殆ンド大部分ガ施療患者ナルニヨル。

### 第一百七十七 鶴田一郎醫師

鶴田醫師ハ、鹿兒島縣熊毛郡種子ケ島ノ出身、明治四十二年現在ノ名古屋醫科大學ノ前身愛知醫專高等科ヲ卒業セル新進ノ醫學士ナリ。身未ダ一醫學生トシテ附屬病院ニテ實習中、偶々背部ニ田虫様ノ發診アル一青年ヲ診テ類ノ確徵ヲ發見シタレバ之ヲ主任ニ告ゲタルニ、再檢ノ結果其誤リ無キヲ證セラレ且ツ命セラレテ之ニ病名ノ宣告ヲナス。然ルニ此ノ宣告ヲ聞クヤ否ヤ件ノ青年ハ遽カニ號泣シ、悲歎慰ムルニ術ナシ。昔ヨリ不治ノ病トシテ嫌疑セラレ醫學的ニモ豫後不良ト斷セラレタル惡疾ナレバナリ。更ニ體テ此ノ家庭ニ起ルベキ悲劇ト患者ノ慘マシキ運命等ニ思ヒヲ致シタル時、決然トシテ立チ、醫ハ仁ナリ、我ガ使命此處ニアリ。如何ニモシテ本病治療ノ法ヲ見出サント、茲ニ本病研究ヲ畢生ノ願望ト定メラレシ由承ル。

扱テ、當教會ニテ師ヲ知ルニ至リシハ大正十五年春ニシテ、熊本回春病院ヨリ來草セル者及ビ南九州方面ニ在リシ本病者ノ口ヨリ種子ケ島ニ開業シ隠レタル本病ノ研究家ニシテ常ニ本病者ニ對シ最モ深キ同情ヲ表ハシ、本

病者アレバ無料ニテ診療シ藥品ヲ施與セララル仁者アリ、且ツ最モ熱心ナル我聖公會ノ信者ナリト聞クヤ、如何ニモシテ草津ニ迎ヘンモノト全年六月上旬福○紫○兄ミツシヨシヲ代表シ交渉ヲ開始セリ。然ル處夫人ノ親戚ニテ來草ニ反對ヲ唱フル者アリテ意ノ如クナラズ。止ムヲ得ザルニ付キ就任致シ難シトノ返信ニ接シケレバ、臨時ニ上町ノ中村時太郎醫師ヲ煩ハス事トナリ、一時其交渉ヲ打切りタリ。然ルニ此處ニ一言スベキハ師ガ返信ニ加フルニ多年本病ニツキ研究セラレタル貴重ナル結果ヲ參考資料トシテ提供セラレタル事ナリ。之自己ノ名聲ヨリモ病者ノ幸福ヲ思フ眞ノ仁者ニシテ初メテ爲シ能フ處、醫院ニ於テハ之ニ依リテ大イナル助けヲ得タリ。昭和四年十一月松本留吉氏寄贈ニナル新醫院ノ落成ニ伴ヒ、其診療上ノ責任者タルベキ優秀ナル專任醫師ノ必要ニ迫ラレ役員擬議セルモ他ニ心當ナク依テ前回ノ不首尾ニモ拘ラズ、再ビ山中執事リー教母ノ命ニヨリ三回ニ亘ル交渉ノ結果、既ニ十餘年モ本病研究ニ専心シタキ希望ヲ有セラレタル師ハ、親戚一部ノ反對ヲ押シ切りテ就任受諾來草ヲ決シ、前記ノ如ク昭和四年九月三日着任セラレタルモノナリ。

鶴田師ノ來任ハアラユル意味ニ於テ當部落ニ於ケル本病治療上一大光明ト革新ヲ齎セルモノニシテ、癩ハ不治ナリトノ盲信ハ破ラレ大楓子油偏重ノ學說ハ訂正セラレントス。即チ、各種症狀ニ對スル新藥ノ應用ハ未ダ嘗ツテ文獻ニ顯ハレザル結果ヲ示シ、漸次結節ハ吸收セラレ潰瘍ハ治癒シ神經痛ハ和ラゲラレ、全治セリト見ラルベキ者及ビ無菌狀態ニアル者モ續出セリ。自ラ手ヲ下サザル可カラザル患者毎日百有餘名、金鐵ナラザル身ニ寸暇ナク、専心研究ノ時間惠マレザルハ遺憾ナリ。サレド飽ク迄熱心ナル師ハ分陰ヲ惜シテコツコツト研究ノ歩ヲ進メラレ、新シキ着想ト理論ノ上ニ立ツ特種療法ニ就キテハ參觀ノ専門家ヲシテ屢々驚カシメタリ。「癩病系統未發病兒童體質ノ臨床所見ト共通疾患ニ就テ」ノ如キハ世界的癩研究専門雜誌「レブラ」第三卷第一號（昭和七年五月發行）ニ、慶大草間博士ノ校閱及推薦ニテ掲載セラレ、本病者扁桃腺學說及ビ傳染學說ニ一大痛棒ヲ加ヘ

タリ。

### 第三十三章 教役者及ビ働人（其二）

#### 第七十八 マギル女史

大正十四年、米國ミセス・ホウニ依テ與ヘラレタル聖マーガレット館ニ於テ、收容兒童ノ増加ニ伴ヒ合監先崎ケサ姉ノ外ニ兒童ノ教育ト養護ニ經驗アル働人ノ必要ヲ生ジ居タル時、昭和二年夏偶々草津ヲ來訪セラレシ大阪箕面學園教師ミス・マリア・ビ・マギル（Miss Mary B Magill）ハリー教母ノ當地本病者救護ノ働キニ感動シ、殊ニ聖ビリボ館ニ在リシ熊○勇○兄ノ信仰ノ證詞ヲ彼ノ病床ニ聞キ、一見戰慄ヲ覺ヘシ形貌床ニウゴメク醜塊ナル肉ノ中ニ脈々トシテ流ル、暖キ基督ノ血潮ヲ見タリ。「我此ノ病ニヨリテ主ニ感謝ス。我不自由日ニ募リ我病月ニ革ルモ喜ビ我ニ在リ。驚クベキ主ノ愛我胸ニ迫リ主愈々我ニ近ケレバナリ」ト語り出ル彼ノ美シキ魂ニ魅了セラレ、更ニ現代科學ノ如何トモナシ難キ病者ノ群ノ主ニ在ル喜悅ノ様ヲ眺メ、茲ニ病者間傳道ノ重大性ヲ痛感シ、總テ大イナル決心トナツテ、遂ニ監督ニ乞ヒ昭和三年五月二十四日理解ト同情ト事業ニ對スル鋭キ興味ヲ以テ着任シタルナリ。

女史ハ米國メリーランドノ生レ、其父ハ米國聖公會著名ノ長老ナリキ。全州ノThe Hannah More Academy卒業ト同時ニ Massachusetts 州ノ Mount Ida School (マウントアイダ女學校)ニ教鞭ヲ執ル事ニケ年間、父上ノ志ヲ繼ギ外國傳道ノ使命ヲ感ジテ明治四十年日本ニ渡來シ、大阪英語學校、京都平安女學校大阪箕面學園等ニ於テ二十四年間教鞭ヲ執ラル。就中箕面學園ハ關西地方ノ中流以上ノ子弟ヲ收容シ、現代ニ於

ケル教育ノ達シ得ル最高ノ效果ヲ擧グル目的ノ爲ニ建テラレタル模範的學校ナリ。

扱テ女史ハ着任ト共ニ聖マーガレット館ノ舎監トシテ先崎姉ト心ヲ合セテ幼児保育ノ任ニ當リ、一方祈禱團體タル聖バルナバ・ギルドノ地方部書記トナリ、又婦人會ノ働キヲ助ケ、又原田、上瀧、門脇、赤羽ノ姉妹ヲ指導シ上町日曜學校ニ新シキ靈的教育法ヲ試ム。之ヨリ先、箕面學園長ヨリ草津尋常高等小學校長ニ宛テ、ミス・マギルガ同校ニ在勤中ノ善キ働キニ就キ紹介狀アリシカバ、一日招カレテ校長初メ同校教師達ト語り、此時ヨリ親シク交際スルヲ得タルヲ以テ日曜學校幼稚園等多大ノ便宜ヲ與ヘラレ、通學兒童著シク増加セリ。日曜學校ノ如キモ教場タル幼稚園ノミニ全生徒ヲ收容シ切レズシテ、幾組カハミス・マギルノ自宅ニテ教授セラル、ノ盛況ナリキ。女史ハ又一方世界的ナル女子愛友會ノ草津支部ヲ創立シ、自ラ其ノ支部長トナリ會員ノ指導ニ當リ、毎週一時間乃至一時間聖望小學校ニ於ケル聖書講義並ニ下町ノ日曜學校教師ニ對スル指導ヲ兼ネ、又聖バルナバ英語會ノ爲ニ一週二時間教授セラレ寸暇ナキ迄リ一教母ヲ助ケテ働カレタリ。昭和五年八月病ヲ得テ輕井澤マンロー病院ニ入院、開腹手術ヲ受ケ、爾來信者ノ祈リノ中ニアリシガ結果極メテ良好ニシテ、主治醫ノ勸告ニヨリ冬期間京都ニテ靜養、昭和六年四月二十五日舊倍ノ健康ト熱心ヲ以テ歸草。聖望小學校ヲ中心ニ、愛友會、小兵士會、婦人會等ノ指導ニ當ラル。全年七月米國聖公會總會ニ日本側代表トシテ出席ノ爲當地出發、米國各地ニテ講演ニヨリ草津ヲ紹介シ、英國經由昭和七年四月二十三日長途ノ旅行ヲ終ヘ無事歸草セラレタリ。

第七十九 Netzton 女史

ミス・マリア・ネットトン (Miss Mary Nettleton) 英國ノ出身、昭和四年四月リ一教母第二回英國訪問ノ旅行ノ時迄ロンドンノ南部聖ジヤイルス・シスター・フーズ (St. Giles's Sister food) 附屬頼患

者救護院ニ献身奉仕シ居タリシガ、全所ヲ訪レタルリ教母ニ依リ草津ノ美ハシキミッション事業ノ近況ヲ聞キ、且ツ嘗ツテ在住シタリシ日本ノ風物ヲ慕ヒ、茲ニ再ビ渡日草津ノ爲ニ働カントノ良キ志ヲ與ヘラレタルモノナリ。女史ハ途中ジャワ島ニ立寄り、製糖會社ニ勤務中ノ兄君ノ許ニ數日ヲ過シ、再ビ乗船、神戸ヨリ鐵路ニヨリテ昭和四年十二月二十二日當地ニ着任、ミス・マギルト協力シ聖マーガレット館ニ働カル。

昭和五年春、全館虛弱兒童ヲ満足館ニ移シ、ミス・マギル責任ノ下ニ特別ナル給養ト愛護ヲ加ヘ居タルモ、全年夏ミス・マギルノ入院後ハ全兒童ノ責任ヲ負ヒ館ノ經營ト兒童ノ養護ニ當レリ。

第百八十 第五代長老秋山基一師

昭和六年六月三十日、管理長老貴民之介師ハ家庭ノ都合上當教會管理長老タル事ヲ辭セラレタレバ、七月一日ヨリ高崎市聖アウグスチン教會牧師秋山基一長老ガ當教會ノ管理ヲ兼ネラル、事トナレリ。師ハ立教大學出身ノ神學士ニシテ既ニ幾度カ當地ヲ訪問セラレ管理長老ニ代リ聖餐式ヲ執行セラレシ事モアリ、外遊ヨリ歸ラレシ際モ米國ニ於ケルカトリシズムノ全盛事情ニツキ講話セラレタル事モアリ、病者ニ深キ同情ト理解ヲ有セラル、ヲ以テ一同愁眉ヲ開キ着任ヲ待テリ。昭和六年七月十一日會館ニ於テ歡迎會ヲ行フ。信徒約二百名參集、上瀧兄ノ祈禱、山中執事ノ紹介トリ教母、高○利○兄ノ歡迎ノ辭ニ答ヘテ長老ハ「余ノ先輩ナル貫神父ノ後ヲ襲フト雖モ神父ト異リ何事モ未熟ニテ御期待ニ添フヤ否ヤヲ危惧スルモ、神ノ助ケニヨリテ最善ヲ盡サン事ヲ願フ」ト、謙遜ナル挨拶アリ。マギル師、徳滿兄ノ祈禱、新管理長老ノ祝禱アリテ會ヲ閉ヂタリ。

大正十一年度以降ノ教會委員ニツキ述ブレバ左ノ如シ。

第百八十一 大正十一年度教會委員

大正十年十二月法規ニ從ヒ次年度教會委員選舉ノ結果、當選セル者左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選七回）、管○丈○兄（當選六回）、福○紫○兄（當選四回）、高○利○兄（當選二回）、島○義○兄。

本年度中教役者左ノ如シ。

管理長老 山本三次郎師（三月迄）

貫民之介師（四月以降）

傳道師 山中政三師

婦人宣教師 コンウオール・リー

本年度中主要ナル出來事ハ、

三月 聖ルセ館ノ創立

三月 山本長老辭任シ、貫長老管理長老トナル

六月 傳道隊組織

八月 リー教母ノ歸英

本年度ノ受洗者七十五名ナリ。

大正十一年度附屬事業ノ決算

統計ニヨリ大正十一年度ニ於ケル附屬事業ノ收支狀況ヲ示セバ左ノ如シ。

總支出 一六、四四八圓九一錢

（醫師、看護婦、書記ノ給料、貧困者施金、藥品購入金、ホーム收容者食費、其他雜費ヲ含ム）

總收入 八、五三七圓一錢

（醫院收入、臨時寄附金等）

不足 七、九一一圓九十錢

第百八十二 大正十二年度教會委員

大正十一年十二月、次年度教會委員ノ選舉ヲ行フ。本年度ヨリ信徒ノ増加ニ伴ヒ五名ノ教會委員ヲ七名トシ、二名ノ増員ヲナス。當選者左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選八回）、管○丈○兄（當選七回）、福○紫○兄（當選五回）、高○利○兄（當選三回）、杉

○淨兄、井○元○兄、吉○浩○兄。

本年度中教役者ハ、

管理長老 貫民之介師

傳道師 山中政三師

宣教師 コンウォール・リー

主要ナル出來事ハ、

第三十四章 教會委員（其二）

二月 リー教母歸草

三月 聖バルナバ祈禱團創立

八月 信徒修養會

本年度中ノ受洗者五十八名ナリ。

大正十二年度收支決算

大正十二年度附屬事業ノ收支狀況ハ左ノ如シ。

總支出 一四、〇四六圓二三錢

（治療費、事務費、ホーム員食費等）

總收入 一五、〇八八圓四三錢

（臨時寄附金、醱金、事業收入等）

次年度へ繰越金 一、〇四二圓二〇錢

第百八十三 大正十三年度教會委員

大正十二年十二月、教會委員改選ノ結果、當選者ハ左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選九回）、管○丈○兄（當選八回）、福○紫○兄（當選六回）、高○利○兄（當選四回）、杉○淨兄（當選二回）、井○元○兄（當選二回）、吉○浩○兄（當選二回但シ中途辭任）。

教役者ハ左ノ如シ、

第三十四章 教會委員（其二）

管理長老 貫民之介師

傳道師 山中政三師

宣教師 コンウォール・リー教母

主要ナル出來事ハ、

三月 三原方面へ傳道。信徒修養會。

十月 三上千代女史辭任。佐藤醫師來任。

十月 聖マーガレット館開設

本年度受洗者二十九名ナリ。

第百八十四 大正十四年度教會委員

大正十三年十二月、信徒總會ヲ開キ次年度教會委員ノ改選ヲ行フ。當選者左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選十回）、福○紫○兄（當選七回）、高○利○兄（當選五回）、杉○淨○兄（當選三回）、宿○薰<sup>カミル</sup>兄（當選一回）、管○丈○兄（當選九回）、入○清○兄（當選一回）

本年度中ノ教役者ハ、

管理長老 貫民之介師

執事 山中政三師

宣教師 コンウォール・リー教母

本年度中ノ主要ナル出來事ハ、

一月 望學校開設

二月ヨリ十月 聖堂新築

四月 信徒修養會

八月 山中傳道師ノ執事按手受領

七月 聖ジャイルス館開設

本年度ノ受洗者三十八名ナリ。

大正十四年度收支決算

大正十四年度附屬事業ノ收支狀況ハ左ノ如シ。

總收入 三二、一九五圓五七錢

(宮内省下賜金、縣獎勵金、十三年度夏輕井澤ニ於ケル外國宣教師會本事業後援會、ミッション・ツレバーズ、米國聖公會ヨリノ寄附金、醫院ノ收入等)

總支出 三二、七七九圓二四錢

(醫師、看護婦、書記ノ給料、ホーム員食費、聖マーガレット館建設費、ホーム修繕費等)

第百八十五 大正十五年度教會委員

大正十四年十二月信徒總會ニテ改選セラレタル教會委員左ノ如シ。

相○鎔○兄(當選十一回)、管○丈○兄(當選十回)、高○利○兄(當選六回)、福○紫○兄(當選八回)、

第三十四章 教會委員（其二）

杉○淨兄（當選四回）、入○清○兄（當選二回）、上○寛○兄（當選一回）。

本年度中ノ教役者ハ、

管理長老 貫民之介師

執 事 山中政三師

宣教師 コンウオール・リー教母

本年度中ノ主要ナル出來事ハ、

三月 信徒修養會

五月 上町幼稚園再開、ヒューベルト館成ル。

六月 聖堂聖別式。教會委員福○紫○兄永眠。

十一月 聖バルナバ納骨堂成ル。

本年度受洗者ハ四十三名ナリ。

全事業人員調査（大正十五年・昭和元年度末）

昭和元年十二月末現在ノミッション、ホーム被救護者數左ノ如シ。

（延人員）

男子ホーム 五三名 一五、六六一人

婦人ホーム 二九名 九、一八三人

夫婦ホーム 一五名 五、三五〇人

第三十四章 教會委員（其二）

準ホーム 一三名 三、二九五入

聖マーガレット 一三名 四、四〇〇入

合 計 一二三名 三七、八八九入

本年度間ニ入館セシ者 四五名

“ 退館セシ者 九名

“ 永眠セシ者 八名

第百八十六 昭和二年度教會委員

昭和元年十二月、教會委員改選ノ結果、當選者左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選十二回）、管○丈○兄（當選十一回）、高○利○兄（當選七回）、入○清○兄（當選三回）、

上○寛○兄（當選二回）、野○熊○兄（當選一回）、横○武○兄（當選二回）。

本年度教役者左ノ如シ。

管理長老 貫民之介師

執 事 山中政三師

宣教師 コンウオール・リー教母

本年度中ノ主要ナル出來事ハ、

三月 小兵士會開設。

四月 信徒修養會。

第三十四章 教會委員（其二）

八月 初メテバザール開ク。

十月 聖ルカ館開設。聖ヘレナ館落成。

十一月 佐藤醫師辭シ、中村醫師來任。

十二月 草津聖ステパノ館開設。

本年度中ノ受洗者ハ八十五名ナリ。

全事業人員調査（昭和二年十二月末現在）

（延人員）

男子ホーム	六六名	二〇、四〇一人
婦人ホーム	三七名	一一、一四九人
夫婦ホーム	一七名	六、一六〇人
準ホーム	一八名	五、八一五人
聖マーガレット	二一名	六、三五三人
準々ホーム	一名	二、五〇四人
合計	一七〇名	五二、三八二人

第百八十七 昭和三年度教會委員

昭和二年十二月改選ノ結果、當選者ハ左ノ如シ。

第三十四章 教會委員（其二）

相○鎰○兄（當選十三回）、管○丈○兄（當選十二回）、高○利○兄（當選八回）、入○清○兄（當選四回）、上○寬○兄（當選三回）、野○熊○兄（當選二回）、鈴○繩<sup>ヅナ</sup>兄（當選一回）  
本年度中教役者左ノ如シ。

管理長老 貫民之介師

執事 山中政三師

宣教師 コンウォール・リー教母

本年度中主要ナル出來事ハ、

四月 信徒修養會。井上照子女史永眠。

五月 ミス・マギル女史來任。

六月 女子愛友會成ル。

十月 聖エドモンド館落成。

十一月 御大典。リー教母藍綬褒章下賜。

十二月 聖ジュリア館落成。

本年度中ノ受洗者九十五名ナリキ。

全事業人員調査（昭和參年十二月末現在）

男子ホーム 七九名 二六、八二八人

婦人ホーム 三八名 一四、一四五人

第三十四章 教會委員（其二）

夫婦ホーム	二二名	六、九二七人
準ホーム	三三名	一〇、八〇一人
聖マーガレット	二一名	六、一七四人
合計	一九三名	六四、八七五人

第百八十八 昭和四年度教會委員

昭和三年十二月ノ改選ニ於ケル四年度教會委員ノ當選者ハ左ノ如シ。

相○鎰○兄（當選十四回）、高○利○兄（當選九回）、入○清○兄（當選五回）、上○寛○兄（當選四回）、野○熊○兄（當選三回）、鈴○繩○兄（當選二回）、福○唯○兄（當選一回）。

本年度中教役者左ノ如シ。

管理長老 貫民之介師

執 事 山中政三師

宣教師 コンウォール・リー教母

本年度中ノ主要ナル出來事ハ、

一月 新醫院建築移轉協議、十一月落成

” 訪問隊設置。

三月 信徒修養會。

四月 リー教母歸英、翌年一月歸草。

四月 貫長老定住トナリ又事業ヲ管理ス。  
六月 聖フランシス館成ル。

九月 鶴田醫師來任。

十二月 ミス・ネツルトン女史來任。

本年度ノ受洗者一〇九名。

全事業人員調査（昭和四年十二月末現在）

男子ホーム	八五名	三〇、〇九二人
婦人ホーム	四六名	一五、三九九人
夫婦ホーム	二四名	七、三五八人
準ホーム	三九名	一三、七五四人
聖マーガレット	二一名	七、六〇四人
合計	二一五名	七四、二〇七人

第百八十九 昭和五年度教會委員

昭和四年十二月教會委員改選ノ結果、當選者左ノ如シ。

相○銚○兄（當選十五回）、管○丈○兄（當選十三回）、入○清○兄（當選六回）、上○寛○兄（當選五回）、野○熊○兄（當選四回）、鈴○繩○兄（當選三回）。

第三十四章 教會委員（其二）

本年度中教役者ハ左ノ如シ、

管理長老 貫民之介師

執事 山中政三師

宣教師 コンウォール・リイ教母

本年度ノ主要ナル出來事ハ、

二月 會館新築協議、十月落成。

” 佛教講演會。

三月 白根男爵來訪。

四月 信徒修養會。

五月 堀田知事來訪

七月 聖テモテ館開設

八月 安達内相來訪、關屋次官來訪。

” 聖望小學校落成

十一月 皇太后陛下ノ御下賜品及ビ特別御下賜金。

全事業人員調査（昭和五年十二月末日現在）

男子ホーム 九八名 延三四、七二九人

婦人ホーム 五五名 延一八、〇五三人

夫婦ホーム 二六名 八、六八八人

準ホーム 三三名 一四、四八五人

計 二二二名 七五、九五五人

(但シ、聖マーガレット館ヲ除ク)

第九百 昭和六年度教會委員

昭和五年十二月改選ニ基ク新委員左ノ如シ(本年度ヨリ信徒ノ増員ニ伴ヒ十名トナル)。

相○鎔○兄(當選十六回)、管○丈○兄(當選十四回、高○利○兄(當選十一回)、入○清○兄(當選七回)、

上○寛○兄(當選六回)、鈴○繩○兄(當選四回)、野○熊○兄(當選五回、二月永眠、多○忠○郎兄補缺)、伊

藤梅吉兄(當選一回)、徳○唯○兄(當選一回)、佐○亮○兄(當選一回)。

本年度中教役者左ノ如シ。

管理長老 貫民之介師(但シ六月迄)。

〃 秋山基一師(但シ七月以後)。

執 事 山中政三師

宣教師 コンウオール・リー教母

本年度中ノ主要ナル出來事ハ、

二月 教會史編纂ノ件

三月 信徒修養會

七月 醫院働キ人ノホーム成ル

五月ヨリ新療養所問題起ル

九月 聖ジマイルス館引上

十月 リー教母ノ住宅成ル

## 第六期 近代

### 第三十五章 新會館

#### 第百九十一 教會増築ト新會館ノ建築

昭和四年ノ暮頃ヨリ信徒ノ急激ナル増加ニ伴ヒ聖堂ノ狹隘ヲ感ジ、殊ニ日曜ノ早晚禱其他特別ノ集會ニ於テ全會衆ヲ收容スル事能ハズ、接續セル會館ノ一室ヲモ其ノ一部ニ加ヘテ禮拜ヲナス有様ニテ、玆ニ聖堂ノ擴張ヲ第一トシ、更ニ出來得ベクシテ徹底の修繕カ改築ヲ必要トシタル會館ヲモ工事ヲ施サン事ヲ欲シ、昭和五年二月六日ノ教會委員會ハ之ニ關スル具體的方法ヲ協議シ建築資金トシテノ獻金ヲ募ルコト、ナレリ。

### 第三十五章 新會館

偶々米國ウット氏ヨリノ寄附金及ビ米國M・T・Lノ後援アルベキ報ニ接シテ大イナル力ヲ得、石垣修理ニ關スル設計及見積書ハリー教母ノ手ヲ經テウット氏ニ、會館新築豫算及ビ設計圖ハ各米國M・T・L日本代理部ニ夫々送ラレタリ。數種ノ原案アリシガ、結局會館ヲ取除ケ石垣ヲ堅牢ニシ敷地ノ面積ヲ最大限ニ擴張シ其ノ跡ニ一大會館ヲ新築スル事、東端ニ於テ聖堂ト連リテ、聖堂ノ疊數二十疊ヲ増加シ、他端ハ聖慰安館ニ接シ三尺ノ渡

リ廊下ヲ以テ之ニ至ル。新會館ハ座席疊數約七十疊、收容定員三百五十名位トシテ設計シタルモノナリ。

然ル間ニ全年五月五日米國M・T・Lヨリ草津ノ爲ニ會館改築ニ要スル全費用ヲ調達セントノ回答アリシヲ以テ、一同大イニ喜ビ直チニ工事ニ着手スル事トナレリ。基礎工事ハ多胡、桐山兩兄責任ヲ持チ、建築ハ古川、佐々木兩棟梁ノ指揮ニヨル。教會ニテハ高須・鈴木兩教會委員會計係トナリ、各委員監督宜シキヲ得テ工事ハ進捗シ、七月二十六日降りシキル雨ノ中ニ貫長老司式ノ下ニ上棟式ヲ行ヘリ。

而シテ建具其他モ日ヲ逐フテ整ヒ、全十月中旬全ク落成シ、十月三十一日ライフスナイダー監督ニ依リテ聖別セラレ、翌十一月一日ニ諸聖徒日午後二時盛大ナル感謝會ヲ舉行セリ。

其ノ工事ヲ見ルニ、大工へ一、四七八圓八〇錢、材木代二、〇四五圓八二錢、土工へ五三八圓五〇錢、石材石工へ四一六圓五〇錢、其ノ他ヲ併セテ計七、五一一圓七四錢ヲ要シタリ。米國M・T・Lヨリノ寄附金ハ五千弗ニシテ、右建築費用ノ他主トシテ舊會館移轉費トシテ用ヒ、少額ノ殘金ハM・T・Lノ好意ニヨリ事業一般會計中ニ編入セリ。

### 第三十六章 皇太后陛下ノ御仁慈

#### 第百九十二 白根男爵御差遣

昭和五年三月二十七日宮内省大臣官房庶務課長白根松介男爵ハ、皇太后陛下ノ御思召ヲ體シ、病者慰問ヲ兼ネ當事業視察ノ爲來草セラルベシトノ縣廳ヨリノ内報アリ。斯カル光榮ハ本事業創始以來ノ事ナレバリー教母初メ一同感激ト喜悅ニ緊張シテ其ノ日ヲ待テリ。當日春雨霏々トシテ降り注グ中ヲ男爵ハ川西書記、佐野屬官ヲ從ヘ

更ニ本縣ヨリハ玉木衛生課長、松山社會課長案内申上ゲ、午前十時着草。出迎ヘノリー教母ニ、陛下ノ思召ヲ傳ヘ、直チニ上町聖マーガレット館ヨリ教會、聖ルセ館、醫院、聖ニコラス館、望小學校、聖ステバノ館、聖マリア館ヲ詳細ニ視察シ、道々山中師、リー教母ノ説明ヲ聽取シ、患者ニ深キ同情ヲ表ハシ、働キ人ヲ勵マシツ、視察ヲ了ヘテ即日歸京セラレタリ。

第百九十三 堀田知事ノ來訪

(イ) 堀田群馬縣知事夫人一行ノ來草

白根男爵來訪後幾日モ經ザル昭和五年四月二日群馬縣知事堀田鼎氏夫人、令息、令嬢、母堂ノ御一行ハ草津ナル病者ノ間ニアリテ神ノ榮光ノ爲獻身セル英國貴婦人ノ貴キ事業ヲ見ントテ來草、各ホーム病院學校等ヲ訪問シ親シク病者ノ生活ヲ見テ大イニ同情シ、又リー教母ニ幾度トナク感謝シ金壹百圓ヲ寄附シテ歸ラレタリ。我聖公會ノ信者ナル由仄聞ス。

(ロ) 堀田知事來訪

更ニ全年五月十四日、皇太后陛下ノ御仁慈ニ勵マサレテ本縣知事堀田鼎氏モ亦公私多忙ノ時間ヲ割キ本事業視察ヲ志シ、地方事務官齊藤定二氏、地方農林技手折原佐平氏又、本縣會議員菅谷勘三郎氏、長野原警察署長同伴來草全事業ヲ視察ス。病院ハ特ニ念入りニ視察シ、リー教母以下働キ人ニ獎勵ノ辭ヲ與ヘ、又醫院玄關前ニテ一同ト共ニ喜ンデ記念撮影ヲナス。

堀田知事ノ來訪ニヨリテ本縣人ノ事業ニ對スル理解ト同情ヲ一層深ムル事ヲ得タリ。

第九十四 安達内相ノ來訪

濱口内閣内務大臣安達謙藏氏ハ其就任以來各種社會事業就中<sup>オウシツク</sup>根根絶政策ヲ強調シ、各府縣衛生課長ニ命ジテ患者ノ調査、公私療養所ノ事業報告ヲナサシメ、特ニ草津近傍ニ賴自由療養地建設ノ案ヲ建テタリシガ、昭和五年八月九日本事業ノ視察旁々移轉地視察ノ爲、内務省赤木衛生局長、堀田本縣知事、玉井衛生課長其他縣會議員等多數ヲ從ヘテ來草セリ。先ヅ自動車ニテ鈴蘭、栗生、霜間一帯ヲ視察、歸路自動車ヲ捨テ、男子ホームニ立寄レリ。更ニリ教母ト面接シ種々懇談ノ豫定ナリシモリ教母不在ノ爲意ヲ得ズ上町停車場ニ向ヒタリシガ、時ニリ教母病者訪問ヨリ歸リテ此ノ事ヲ聞キ大急ギニテ其ノ後ヲ追ヒ、停車場ニテ面會シ内相、知事ト三人<sup>イイザ</sup>鼎座シテ新自由療養所問題、湯之澤移轉問題等ニツキ隔意ナキ意見ノ交換ヲ行ヒ記念撮影ヲナシテ別レタリ。

第九十五 關屋宮内次官ノ來訪

宮内次官關屋貞三郎氏ハ既ニ數年前ヨリ當地ニ於ケルリ教母ノ病者救濟事業ニ同情ヲ有シ隠レタル援助ヲ惜マザリシガ、昭和五年八月十一日皇太后陛下ノ思召ヲ受ケテ本事業ノ視察旁々病者慰問ノ爲令息同伴來草セリ。リ教母、貫師、山中師ノ案内ヲウケ、未感染兒童ホーム、教會、病院、各ホームヲ委細ニ視察シ、働人ヲ勵マシ病者ノ働人ニスラ一々親シク「御苦勞々々……」ト挨拶シ、殊ニ病院ニテハ入院患者ヲモ慰問シ鶴田院長ニ對シテハ詳細ナル治療方法迄質問セラル。折柄新築中ナリシ聖望小學校新校庭ニ於テハ、出迎ヘノ上町町長、町會議員一行ニ對シ病者ニ對スル皇太后陛下ノ思召ヲ傳ヘ、人道上斯カル美ハシキ慈善事業ト獻身的ナル經營者ヲ有スル草津町ハ町ノ大イナル名譽ナリ。サレバ町當局モ同胞愛ニ基ク人類幸福ノ爲此ノ事業ニ對シテ出來得ル限り便宜ト援助ヲ與フベキ旨ノ訓示ヲ與ヘタリ。身親任官待遇ノ大官ナルニ拘ラズ、何事モ質素ニシテ所謂大名行

列ヲ好マズ、全ク一個人ノ資格ヲ以テ來草シタリ。サレド長野原署長、草津派出所部長等後トナリ先トナリテ警戒申上タリ。歸京後大日本雄辯會講談社發行雜誌「現代」十月號誌上ニ「人類愛ニ輝クリー女史ノ偉業」ト題スル十頁ニ亘ル訪問記事ヲ掲ゲ、草津ノ事業ヲ天下ニ紹介セリ。

### 第百九十六 皇太后陛下ノ特別御下賜金

連々トシテ進マザル日本ノ癩運動ニ一大活力ヲ與ヘ救癩事業ガ大イナル社會的關心ヲ持タル、ニ至レルハ、實ニ、皇太后陛下ノ鴻大ナル御仁德ニ基ク。即チ、陛下ハ既ニ、明治天皇御在世當時ヨリ窮民ノ爲ニ御心ヲ惱マサレ、屢々優渥ナル御沙汰ヲ拜シ來リシガ、各種社會事業就中救癩事業ノ困難ニシテ未ダ全カラズヲ聞召サレ、昭和五年六月多年御雜費節約サレ、且ツ全國公私各療養所ニ宮内官ヲ派遣シテ職員並病者ヲ慰安セシメラル。當ミツション事業ノ爲ニ白根男爵御差遣ノ事ハ前述ノ如シ。而シテ昭和五年十一月十日午前十時リー教母ハ、皇太后陛下ヨリ大宮御所ニ召サレ、事務長一名同伴セヨトノ御沙汰ニ依リ山中政三師同伴、先ツ控室ニテ少憩後白根男爵ト種々話アリ、定刻ニ至リ他ノ癩救療事業功勞者三十有餘名中ノ第一位トシテ「聖バルナバ醫院・コンウオール・リー」ニ對シ、病者慰問ノ爲金二千圓、事業經費トシテ金五千圓御下賜ヲ蒙レリ。又別室ニテ結構ナル御菓子折ヲモ頂戴シ、大イナル感謝ト光榮ヲ以テ御殿ヲ退出、同日午後五時安達内相官邸ノ晚餐會ニ招待セラレ、内相ノ歡迎ノ辭ニ對シ選バレテリー教母事業家一同ヲ代表シテ謝辭ヲ述ブ。隣席ニアリシ白根男爵ハ右答辭ヲ、皇太后陛下ニ言上セリト。

更ニ直接救賴事業ニ關係シ其勞績最モ顯著ナル者ニハ銀製花瓶ヲ、又勞績之ニ亞グ者ニハ卷繪硯箱ヲ御下賜ノ沙汰アリ。右ハ内務省ヨリ關係府縣知事ヲ經テ夫々傳達セラレタリ。本縣ニ於テハ昭和五年十一月十日午前十時縣正廳ニ於テ嚴カニ傳達式ヲ舉行ス。此ノ日都木縣會議長其他來賓約百名、堀田知事、三部長其他課長列席、天谷内務部長ノ挨拶、小山學務部長表彰文ヲ朗讀シ、堀田知事ヨリ御下賜品ヲ傳達、告示、天谷部長ノ閉會ノ辭アリテ式ヲ終ル。リー教母、貫民之介師、山中政三師（以上當ミツシヨシ）、三上千代女史（鈴蘭園）、安倍千太郎氏夫人（ホーリネス教會）皆下町ノ働人ナリ。其ノ中リー教母ノミハ銀製花瓶ニシテ他ハ卷繪硯箱ナリキ。山中師ノ拜受セル目錄文面ハ左ノ如シ。（他ノ者モ略々同一ナレバ記載ヲ省略ス）

山中政三

一、卷繪硯箱一箇

一、金一封

右多年類救療事業ニ従事勞績不少旨思召サレ皇太后陛下ヨリ以思召下賜候事

昭和五年十一月十日

皇太后太夫

子爵入江爲守

（別葉）

入江皇太后太夫謹話

皇太后陛下ニ於カセラレテハ昭憲皇太后ノ御仁慈深キ聖旨ヲ俣バセラレ、先帝御在世中ヨリ御叡慮ニ副ヒテ、兩

陛下供御御服其他ノ諸費ヲ年々御節約アラセラレシガ、<sup>ヲツ</sup>熱ラ思召サル、事ニハ世ニ不幸ナル病者多シト雖モ癩病  
患者ノ如ク治療ノ法難ク家庭ノ樂ミモナキ悲惨ナルモノアラジト最モ御同情遊バサレ、又其ノ患者ヲ救護シ事務  
ニ盡瘁スル人々ノ獻身のノ至誠ニ深く御感動遊バサレ、今般此ノ種ノ社會事業ニ對シテ御下賜アルベキ旨御沙汰  
アラセラル。

昭和五年八月九日

(別葉)

皇太后陛下ニハ昭憲皇太后陛下ノ御名ノ下ニ癩治療事業ヲ援助シ給ハントノ思召アラセラル、事ハ<sup>ハ</sup>癩ニ發表セラレタ  
ルガ如シ。依テ此ノ度御下賜ノ品ニモ昭憲皇太后ノ御調度類ニ御使用ノ御徴シノ楓葉印ニ因ミテ若葉ノ楓ヲ描寫  
致シ給ヘリ。

昭和五年十一月十日

皇太后宮太夫

子爵入江爲守

X

X

X

第三十六章 皇太后陛下ノ御仁慈

患者慰安金傳達式。皇太后陛下ヨリノ御下賜金到着シタルヲ以テ、十一月三十日午後二時ヨリ會館ニ於テ傳達  
式ヲ執行ス。右ハ其筋ノ御内示ニ基キ一部ヲ直接個人ニ配給シ、一部ヲ共同慰安ノ準備金トスル事トナリキ。一  
名金五圓宛各館代表者ニ渡シ、他ノ金五圓宛ヲ共同慰安トシテ人數ニ割當テ、配給セリ。終リテリ一教母ヨリ  
優渥ナル、皇太后陛下ノ思召ニ就イテ訓示アリ。高須、野村兩兄ヨリ一同ヲ代表シテ答辭ヲ述べ、一同感激シテ  
式ヲ閉ジ。

御鴻恩記念ノ爲或者ハ皮表紙聖書ヲ或者ハ有益ナル書籍ヲ或者ハ冬ヲ凌グベキ着物ヲ買ヒ、各館亦慎重協議ノ上或ハラヂオノ設置、蓄音器ノ備付、運動器具ノ購入、宗教書類ノ注文等ニ用ヒ之等ノモノヲ通シテ陛下ノ思召ヲ記念シ日々感謝ノ心ヲ新ニセリ。

皇太后陛下今回ノ御沙汰以來、社會ノ輿論喚起セラレ安達内相濫澤子爵ヲ初メ著明ナル實業家各府縣知事等力ヲ合セテ一團トナリ頼豫防協會ヲ組織シ、同情ト理解ヲ以テ總ベテノ方面ヨリ頼絶滅ノ運動ヲ開始シ、前田利定子爵其他民間ノ各社會事業團體皆之ニ協力シ其働キヲ助ケ調査ト具體的事業ヲ始メタリ。又從來稍々モスレバ本病關係ノ事業ニ携ハル篤志家迄モ血族の關係ヲ疑ヒ、働キノ上ニ大イナル支障ヲ來ス場合等モアリシガ、各種講演會、新聞雜誌等ヲ通シテ働人ノ苦心ヲ知り同情ノ念湧キ、病者自身モ亦肩身ノ廣クナツタ様ナ氣持ニテ殘サレタル自分達ノ世界ヲ更ニ明ルクヨリ住心地良ク建直シテ意義アル生活ヲナサント努力スルニ至レリ。

#### 第百九十八 吾妻郡教育會ノ謝恩會

昭和六年五月十九日、吾妻郡教育會長タル中之條小學校長小池富二郎氏ハ郡教育會ヲ代表シ草津校教師茂木氏ノ案内ニテ來訪、事業各部ニツキ視察スル處アリシガ、全教育會ニ於テハリー教母ガ多年ノ刻苦ノ結果其治療事業天聽ニ達シ、曩ニ藍綬褒章ヲ授與セラレ又近クハ、皇太后陛下ヨリ御下賜品ヲ拝受スル等、只ニ本人ノ名譽タルノミナラス斯クノ如キ社會事業家並社會教育家ヲ有スル事ハ實ニ本郡ノ名譽ナリトシ、且ツ又其事業中ニハ二箇ノ幼稚園ト一箇ノ小學校アリ。地方文化ノ開發ニ貢獻スル處頗ル大ナレバ、一日リー教母ヲ招キ謝恩會ヲ開キテハ如何トノ提案、滿場一致可決。依テ五月二十五日ノ吾妻郡教育會總會ニリー教母ヲ正賓トシテ貫民之介師山中政三師マギル師ノ四名ヲ招待セリ。全日十二時山中師旅行中ノ爲、リー教母、マギル師、貫師草津出發。總會

ニテハ諸般ノ議事報告終了後、小池會長ノ紹介ヲ以テ謝恩會ニ移リ、リ―教母ニ記念品ヲ贈呈ス。リ―女史ハ深甚ナル謝辭ヲ述ベ、貫師ハ「人格ト事業」ナル題下ニテ會員ノ爲有益ナル講演ヲ試ミタリ。當日ノ東京日々及ビ東京朝日其他ノ新聞ハ何レモ「草津ノ女神リ―女史ノ謝恩會」ト題シ、寫眞入ニテ大々的ニ謝恩會ノ模様ヲ報道セリ。

### 第三十七章 國立療養所問題

#### 第百九十九 自由療養地敷地決定

諸種ノ事情ニ依リ公私立療養所ニ入所スル能ハザル病者ヲ導キ自由療養ヲナシムル場所ヲ設クル事ハ、衛生行政當局ノ多年ノ縣案ナリシガ、皇太后陛下御下賜金ノ御沙汰以來安達内相ハ從來比較的閑却セラレタル此方面ニ力ヲ致ス決意ヲナシ、遂ニ八十萬圓ノ巨額ヲ投ジテ三箇年繼續事業トシテ草津ニ近キ栗生、水ノ窪一帯ヲ自由療養地區ト定メ自ラ視察ヲナシタリ。

昭和六年一月一日、自由療養所敷地ニ最後の決定ヲナス爲内務省ヨリ杉崎土木技師及小川主任屬來草シ將來ノ衛生行政上特ニ關口長野原警察署長立會ノ上、草津町栗生及ビ水ノ窪ニ亘ル原野六十町歩ヲ收用スベク其境界線ヲ確定セリ。内民有地十七町歩ハ山口久三郎氏外十五名ノ所有地ナリシガ既ニ賣渡シノ内諾書調印ヲ了シ約一萬三千圓ニテ買收シ、殘ル四十七町歩ハ官有地ナルヲ以テ農林省ヨリ内務省ニ移管ノ手續ヲ執レリ。湯之澤ノ東南約一里、北面小山ニテ圍マル降雪比較的少キ盆地ナリ。

第二百 療養所第一期計畫

便宜上左ノ新聞記事ヲ引用ス。昭和六年七月十日・一九七二一號東京日々新聞ヨリ 「昭和六年七月十五萬坪ノ敷地買収モ終了シタルヲ以テ、内務省ハ愈々第一期計畫トシテ草津町ヨリ同地區マテ一里十町ノ間ニ溫泉ヲ通シ、療養地區間ニ百坪ノ大浴場ト事務所ヲ設ケ、十月迄ニ工事ヲ終リ、七年四月ヨリ草津下町ニ居ル五百名ノ患者ヲ此ノ附近ニ集メ、自由ニ入浴サセ、娛樂機關モ完備スル案ヲ立テ、直チニ工事ニ着手セリ。昭和七年度ヨリハ之等ノ患者ヲ收容スル爲浴場ヲ中心ニ住宅ト病院ヲ建設スル豫定ニシテ、有資力者ニハ適當ナル方法ニヨリ患者ノ個人住宅モ建テサセル筈ナリ。内務省ニテハ其ノ計畫ヲ急ギツ、アリ。サレバ數年後ニハ癩患者ノ自由療養地區ノ完成ヲ期待セラル」。

昭和六年度豫算十二萬圓ハ主トシテ敷地買収ト溫泉引込工事費ニ充テラレタリ。總ベテ工事ニハ患者ナル勞働者ヲ使用シ、病者救済ノ一助トナスベク、地元共救會ニテモ縣當局及ビ内務省ヘ運動シタリ。然レドモ溫泉引込工事ハ直接國稅納稅額ニヨル請負資格アルモノ下町ニアラザリシ爲元請負ヲナス能ハザリキ。サレド各工區ノ請負ヲナシ、實際ノ工事ハ殆ンド病者ノ手ニテ行ハレタリ。工費約一萬七千四百圓ナリ。尙浴場工事四十二坪七千五百圓、事務所工事三千圓ハ下町大工共同ニテ請負ヒ、地均工事及療養所ヲ中心トスル道路ノ開鑿等ハ共救會ニテ請負ヒ熱心ニ工事ニ從事セリ。

第二百一 聖ジャイルス館引上

自由療養地區域ノ決定ト共ニ、工事ノ都合上當該區域内ニ居住スル者ニハ移轉料ヲ與ヘテ降雪期迄ニ立退キヲ命ジタリ。同區域内中央ノ最モ良キ地點ニアル我が聖ジャイルス館ハ經營者ニ公私ノ別コソアレ本病者救護ナル

同一目的ヲ有スル者ナレバ移轉ヲ要セザルベシ。且ツ其位置ハ今後ノ傳道ニ極メテ好都合ナルヲ以テ、新療養所開設ト共ニ各派ニ先立ち優先權ヲ得テ主ノ前ニ貴キ業ヲ始メント教會員一同大イニ意氣込居タリ。然ル處五月三日本縣衛生課長來草、リ一教母ト懇談ノ結果區劃整理ノ都合上本館モ又年内ニ引越ヲ要望セラレタリ。即チ聖ジャイルス館ヲ中心トシ聖フランシス館、聖ヒューベルト館ノ並ビ建ツ四千百三十一坪ノ廣キ土地ハ政府ニ收用セラレ、館員ハ何レヘカ引越セザルベカラザル運命ニ逢着セリ。依テ役員幾度トナク協議ノ上、移轉料ヲ以テ草津ニ獨立家屋ヲ新築スルノ案、中古旅館ヲ購入スルノ案等モアリシガ結局聖ステパノ館ニ合併スル事トナリ、リ一教母ハ自ラ長年住ミ馴レタル聖エドモンド館ヲ館員ノ爲ニ明渡シテ、ミス・マギルガ賜暇歸國ト共ニ聖慰メ館ニ移リ、又聖ジュリア館ニアリシ聖マリア館舎監相○鎔○兄以下三名モ聖エリザベツ館ニ引越シテ男子ホームニ之ヲ引越シタレバ、昭和六年九月三日聖ジャイルス館、聖フランシス館、聖ヒューベルト館ニアリシ全員引越ヲナシ、全四日荷馬車數臺ニテ家具一切ヲ移送セリ。之ト共ニ館員ノ大更迭ヲ行ヒ、聖エドモンド館並ニ聖ジュリア館ヲ男子ホーム病室トシ鈴○繩兄看護長トシテノ責任ヲ持チ清○八○兄之ヲ援ケ、又聖ニコラス館ハ收容シ居タリシ比較的重症者及ビ不自由病者ヲ右病室ニ移シテ、同館ハ専ラ館内外ノ規則的勤勞ニ堪エザル者ノホームトシ佐○亮兄責任者トナレリ。

男子ホーム總員實ニ百餘名、今ハホーム發祥ノ地タル霜間ヨリ草津ニ歸リ、肥沃ナル農園ト公園ノ如キ美シキ花園、ベンテコステノ森、近郊稀ナル眺望ヲ有スル聖ジャイルス館一帶ノ土地家屋ヲ失ヒシト雖モ、多年ノ要望タリシ男子ホームノ集中案實現シ、統制ト訓練ノ便宜ヲ得タリ。而シテ此大男子ホームノ舎監トシテ館員指導ノ大任ヲ負ヘルハ上○寛○兄ナリトス。

## 第二百二 聖光館（クララ館）

リー教母ハ聖エドモンド館ヲ男子ホームニ供用シタルヲ以テ、何處ニカ専用住宅ヲ必要トシタリ。サレバ聖ステバノ館別館後方ノ高臺元薪小屋ノアリシ狭小ナル一帯ヲ地均シ、霜間ヨリ聖ヒューベルト館ヲ此處ニ移轉スル筈ナリシモ、地積狭キニ過ギタレバ小二階建一棟ヲ此處ニ新築スル事トナレリ。

昭和六年八月十五日桐○兄、多○忠○郎兄ノ兩名主トナリテ地均工事ニ着手、後方土堤ヲ削リ地業ヲ固ム。又一方佐○木○四○兄、松○米○兄等建築工事ニ取り掛リ、九月十九日上棟式、十一月十日全ク落成セルヲ以テ引越ヲナセリ。工事ハ總テ日拂制トシ地業大工壁建具等皆下町ノ信者ノ手ニテ成レルモノナリ。建坪二十二坪、上七半ト六、下六ト四半、總ガラス張り、工費約一千二百圓ヲ要セリ。日當リ極メテ良ク眺望絶佳、町ノ全景ヲ一眸ニ收ム。聖光館（光ノ家）ト名付ケラレタリ。

## 第三十八章 追 補

### 第二百三 栗生樂泉園開園

昭和六年以來工事ヲ進メテイタ栗生樂泉園ハ昭和七年秋ニハ一切ノ工事ト設備ヲ終リ同年十二月ヨリ收容ヲ開始シタ。初メノ入園者ハ五〇勸〇郎トイフ人デ、コノ人ハ湯之澤部落ノM旅館ニ居タ患者デアッタ。開園式ハ昭和七年十二月二十七日ニ行ハレタ（但シ、十二月ハ嚴寒ノ候ナノデ、以後毎年十一月十六日ヲ開園記念日トシテ守ラレテイル）。

初代ノ園長ハ内務省囑托醫學博士古見嘉一氏、警官矢嶋良一氏、渡辺藥劑師、患者係加島正利氏外事務員三名

デアッタ。

## 第二百四 「高原」發行

聖ステバノ館入館者中ニハ早クヨリ短歌・俳句・創作等ノ文藝愛好者ガ多カッタガ、ソノ作品ヲ機關紙ニ纏メテ發行スル迄ニハ至ラナカッタ。シカシ、昭和七年十二月先ヅ廻覧誌トシテ文藝愛好者間ニ廻覧トシ御互ヒノ文學向上ニ資スル事ニナッタ。トコロガ鶴田一郎院長夫妻ヲ初メ各ホーム先輩等ノ支持ヲ得又全生園山櫻出版部ノ御厚意ニヨツテ、昭和八年十二月（第貳卷拾貳號）ヨリ活版印刷ニ附スルコトニナリ、ホーム、部落ハ勿論社會各方面ヘモ頒布スル事ニナッタ。

當時ノ高原社同人ハ、徳○唯○、南○三、古○比○志、高○邦○、小○俊○、藤○秋○、釜○治○、田○豚○、武○明○ノ各兄デアッタ。

## 第二百五 リー教母喜壽祝賀會

昭和八年五月二十日（一千九百三十三年）ハ我ガリー教母ノ喜壽<sup>キジュ</sup>ノ年ニ當リ、祝賀會ヲ盛大ニ催シタ。ソシテホーム員、教會信徒一同ヨリ赤頭巾、赤布チャンチャンコ、座布團ヲ贈ツタ。此ノ喜壽記念ニ高原社同人諸兄ノ盡力デ、昭和九年七月「かあさま」ヲ三百册活版印刷シテ各方面ヘ頒布シタ。

## 第二百六 リー教母ノ一時歸英

リー教母ハ昭和八年（一千九百三十三年）十二月二十六日横濱出帆ノ汽船ブレヂデント・ピアソン號ニテ、ミ

ス・ネテルトン同伴歸英ノ途ニ上ツタ。リー教母ハ同年ノ初メヨリ健康勝レズ、東京白金三光町ノエピフアニーホームノ森影モ又湖南逗子ノ風色モ靜養ノ助ケトハナラズ、故國ニ歸ツテ暫ラク休養スル事ガ健康ノタメニヨイトノ醫師ノススメニヨリ歸英スル事ニナツタ。併セテ一年有餘ヲ故國ニ過シテ、昭和十年二月一日英國ヲ出發シ昭和十年四月十二日無事歸草サレタ。此ノ時、マギル先生ハシンガポール迄出迎ヘニ行カレタ。

第二百七 管理司祭賞民之介師辭任

大正十一年四月ヨリ拾有三年間ノ久シイ間僻陬へきそうヲ厭ハズ衰やへ貶へんヲ顧ミズ、當教會ノタメニ司祭ノ職ヲ奉ゼラレタ師ハ、北東京地方部ミツシヨシヨシ經濟ノ都合上、昭和九年三月辭任セラレタ。聖バルナバ教會委員會ハ四月三十日付ケニテ感謝狀ヲ贈ツタ。

第二百八 勅使御差遣ウケケン

昭和九年十一月六日、天皇陛下ニハ群馬縣下ニ於イテ行ハレタ陸軍特別大演習中、前橋ニ大本營ヲ置カレ、特別ノ思召ヲ以ツテ聖バルナバ醫院ニ勅使(海江田待從)ヲ御差遣遊ウケケンバサレタ。

當日、勅使ヲ聖バルナバ會館ニ御迎ヘシ、館主リー教母歸英不在中ノタメ鶴田院長代ツテ事業ノ御報告ヲ言上シタ。

第二百九 昭和九年度末教勢報告

昭和九年末教勢ニ就イテ山中政三師ガ、「高原」誌第四卷貳號(昭和十年貳月發行)ニ發表サレテイルモノヲ

第三十八章 追補

次ニ抜萃スル。

大正四年ヨリ昭和九年末マデノ受洗者數

大正	四年度	四五人	大正十二年度	五八人	昭和	六年度	六八人
"	五年度	二七人	" 十三年度	二九人	"	七年度	三八人
"	六年度	二四人	" 十四年度	三八人	"	八年度	二〇人
"	七年度	一八人	" 十五年度	四三人	"	九年度	三二人
"	八年度	九人	昭和 二年度	八四人	以上合計九百三十九人		
"	九年度	四八人	" 三年度	九五人	内 訳 男子 五二三人		
"	十年度	三八人	" 四年度	一〇八人	" 女子 四一六人		
"	十一年度	七五人	" 五年度	四二人			

大正四年ヨリ昭和九年末マデノ永眠者數

大正	五年度	三人	大正十一年度	二二人	昭和	三年度	二六人
"	六年度	四人	" 十二年度	二〇人	"	四年度	十九人
"	七年度	七人	" 十三年度	十六人	"	五年度	十八人
"	八年度	九人	" 十四年度	十九人	"	六年度	二六人
"	九年度	四人	" 十五年度	二四人	"	七年度	二三人
"	十年度	九人	昭和 二年度	二五人	"	八年度	三三人

昭和 九年度 二七人  
 年月不明者 三人  
 永眠者合計三三七人  
 内訳男二一八名

内訳女一一九名

信徒居住所別及び其ノ員數

聖ステバノ館	八三名	聖マーガレット館	二〇名	多磨全生園	五六名
聖マリア館	四四名	準ホーム	二〇名	栗生樂泉園	五二名
聖ロイス館	七名	計	二〇四名	計	一一九名
聖ルセ館	一六名	目黒慰癢園	三名	一般信徒計	二七九名
聖テモテ館	一四名	長島愛生園	八名	累計	六〇三名

以上ハ昭和十年一月八日ノ信徒親睦會席上デ山中師ヨリ報告サレタモノ。

第二百十 エドリン先生ノ來任

リー教母ガ歸英中知リ合ヒトナッタミス・エドリンヲ草津ノ働キ人トシテ迎ヘル事トナリ、英國ヨリノ歸路同  
 伴シ昭和十年四月ヨリ當ミッシヨンノ働キニ加ワッタ。

第二百十一 皇太后陛下、聖バルナバ醫院病者慰問ノ御使ヲ賜フ

皇太后陛下ガ御仁徳高ク在マシ給フコトハ人々ノ等シク仰ギ奉ルトコロ、特ニ救癩事業ニ御<sup>シ</sup><sub>念</sub>ア<sup>ラ</sup>セ<sup>ラ</sup>レ給  
 フコトハ感謝ノ至リデアリマスガ、昭和十年十一月二十八日當聖バルナバ醫院ニ御使ヒトシテ、宮内省清閑寺事

務官ヲ御差遣<sup>ウツケン</sup>ニナリ、親シク病者ヲ慰問、施設ヲ觀察セシメラレ、院主、職員、病者ニ御下賜金各一封ヲ傳達セラレタ。

第二百十二 聖マーガレット館ノ全焼ト再建

昭和十一年一月八日午后三時頃、原因不明ノ火ヲ發シ一時在草シテ居ラレタバス先生ヤ女中サンガ氣付イタ時ハ、最早手遅レデ如何トモ施シ様ナク、殆ンド何物モ取り出サズ女兒童ヲ安全地帯ニ連レ出シ、幸ヒ人命ニハ些カノ傷害モナカッタ。館主ネテルトン先生ハ當日上京中ニテ留守デアッタ。

併シテ、ネテルトン先生ハ直チニ内外各方面ニ同情ヲ訴へ再建ノ資金ヲ得テ、雪ガ消エルヲ待ツテ工事ニカカリ、焼跡ニ總建坪八拾坪二階建ノ上棟式ヲ昭和十一年六月十八日ニ行ヒ同年秋ニ竣工シタ。

第二百十三 リー教母明石へ避寒

リー教母ハ老齡ノタメ寒イ草津デ生活スル事ハ健康上



聖マーガレット館（再建後）

ヨクナイトノ理由デ、昭和十一年一月八日シメオン先生ノ御厚意ニヨリ、兵庫縣明石ニ避寒サレ靜養スル事ニナツタ。

#### 第二百十四 山中政三執事ノ司祭叙任

山中政三師ハ昭和十一年一月二十五日ニ聖パウロ改心日ノ佳キ日、師ニトツテ由緒深イ東京池袋立教大學チャベルニ於イテ、主教ライフスナイダー博士ヨリ、司祭按手ノサクラメントヲ領セラレタ。此レハ偏ニ山中師ニトツテ無上ノ喜ビト光榮デアルノミナラズ、多年師ノ教導ト愛撫ヲ受ケタホーム員及ビ教會信徒ノ大イナル喜ビト感謝デアッタ。

#### 第二百十五 加藤滋師來任

栗生樂園保育所主任元救世軍大尉加藤滋師ハ同所ヲ辭サレ、昭和十一年八月聖バルナバミッシオン書記兼會計ニ就任サレタ。其ノ後加藤氏ハ聖公會ノ教理・禮拜等ニ就キ、秋山・山中兩師ヨリ教導ヲ受ケ、昭和十二年受洗、更ニライフスナイダー主教ヨリ信徒按手ヲ領シタ。

#### 第二百十六 秋山基一司祭事業管理

昭和六年以來草津聖バルナバ教會司祭トシテ高崎聖公會ヨリ通勤ノ秋山司祭ハ、昭和十一年八月ヨリ聖バルナバ・ミッシオン事業一切ノ責任ヲ引繼ガレタリ。

## 第二百十七 マキム主教逝去

明治十三年三月ヨリ昭和十年十一月ニ至ル五十六年ノ久シイ間、我ガ日本ニ在ッテ我等日本人ノタメ傳道ニ教育、醫療及ビ慈善ノ事業ニ實ニ驚嘆ニ値スル偉大ナ業績ヲ殘サレタ高徳ノ師父、元日本聖公會總裁主教ジョン・マキム博士ハハワイノ自邸デ靜養中ノトコロ昭和十一年四月五日ノ夜八十五歳ノ高齡ヲ以テ逝去セラレタ。四月六日ノ埋葬式ノ時間ト同シ時間ニ師ヲ總長ト仰イダ立教大學ニ於テ、又十七日ニハ東京青山聖三一教會ニ於テ記念追悼式ガ營マレ、徳川家達公ヲ初メ朝野名士堂ヲ埋メ、我ガ草津カラハ山中司祭ガ教會ヲ代表シテ參列セラレタ。草津ニ於テモ我等病者ノ大恩人タル師父ノタメ、聖三一教會ノ追悼式ト同時刻ニ伊藤梅吉師司式ノ下ニ盛大ナ追悼式ヲ舉ゲタ。

## 第二百十八 楓苗ノ御下賜

昭和十二年五月、皇太后陛下ニハ大官御所ノ楓ノ實生百本ヲ御下賜セラレ、「コレガ成木ノ曉ハ其ノ木蔭ニ遊ビ、秋ハ其ノ紅葉ヲ愛デヨ」トノ有難キ御旨ヲ承リ病者一同感激ニ滿サレタ。此ノ楓ハ教會ノ裏山ニ植樹サレタ。

## 第二百十九 受洗者千人突破記念感謝會

昭和十二年五月二十日ハリ―教母ノ第八十回誕生日祝賀ノ日デアルト共ニ、草津聖バルナバ教會創立以來ノ受洗者一千人ヲ突破シタ記念感謝會ノ日デモアッタ。

當日、聖バルナバ會館ニテ祝賀會ヲ開キ、リ―教母及ビ山中司祭ニ信徒一同ヨリ、感謝記念品ヲ贈ッタ。次ニ當日現在ニヨル受洗者年表ヲ記ス。

第三十八章 追補

大正	四年度	四五人	大正十二年度	五八人	昭和	六年度	六八人	
"	五年度	二七人	"	十三年度	二九人	"	七年度	三八人
"	六年度	二四人	"	十四年度	三八人	"	八年度	二〇人
"	七年度	一八人	"	十五年度	四三人	"	九年度	三二人
"	八年度	九人	昭和	二和度	八四人	"	十年度	二二人
"	九年度	四八人	"	三年度	九五人	"	十一年度	二四人
"	十年度	三八人	"	四年度一〇八人	"	"	十二年度	一六人
"	十一年度	七五人	"	五年度	四二人			

以上合計一、〇〇一人(内譯・男子五六三人、女子四三八人)、永眠者三八七人(内譯・男二五三人、女一三四人)、轉會者十五人。現在信徒數ハ六二九人。

第二百二十 ミス・マギル先生ノ退草

ミス・マギル先生ハ昭和十二年四月十二日草津ヲ出發、途中明石ニ靜養中ノリ一教母ヲ見舞ヒ、四月二十二日神戸出帆ノ汽船デ聖地巡禮ノ旅ニ上ツタ。ソレヨリ英國ニ渡リ、ライフスナイダト主教ヨリ草津ノ働キヲ退キ英國エビフアニー修女院入りヲ許可サレタ。

ミス・マギル先生退草後ハミス・ネテルトン先生ガ事業ノ責任ヲ持ツ事ニナツタ。

第二百二十一 シエパード先生ノ來任

昭和十三年二月五日、神奈川縣平塚教會ヨリシエバード先生（英國人）來任サル。先生ハ日本來朝以來約三十年ヲ經、日本語ガ非常ニ堪能デ健康のニモ惠マレ、各ホームヲ初メ湯之澤部落ノ信徒ノ家庭ヲ訪問サレテ、信徒ノ指導、求道者ノ教導ニ大キナ役割ヲ果サレタ。

第二百二十二 聖バルナバ・ミツシヨンノ解散問題

リー教母ガ明石ヘ靜養ノ後、當ミツシヨン管理ノ責任ヲ持ツ秋山基一司祭ハ昭和十三年三月二十九日教會々館ニ於テ、聖バルナバ・ミツシヨンノ現状ニ就イテ語ラレタ。其ノ概要ハ「支那事變ノ擴大ニヨリ、日本ト英米トノ國際關係ハ頓ニ緊張シ、外國カラノ援助ガ少ナクナリ、又國內ノ諸物資統制ニヨリ必需品ノ入手ガ困難ニナリツ、アリ、當ミツシヨンノ將來ハ悲觀的デアル」トノ事デアッタ。

次イデ昭和十三年四月、ライフスナイダー主教ヨリシエバード先生ニ來信アリ、又五月三日當ミツシヨン書記兼會計加藤滋師上京シテ、ライフスナイダー主教ト面會シホーム經營ニ就イテ協議ノ結果次ノ事ガ發表サレタリ。一、去ル三月二十九日秋山司祭ヨリ發表サレタヨウニ、當ミツシヨン經營ガ困難ニナッタノデ、在館者ノ少ナクナル事ヲ希望スル。此ノ事情ヲ諒トシテ退館シ國立療養所ニ入所スル者ニハ、一金五拾圓（當時白米一俵貳拾圓位）ヲ支給スル。

此ノ發表ニ對シ男子ホーム員ハ激昂シ責任者タル秋山司祭ニ經營ノ誠意ナキ事ヲ責メ、又他ノ先生達ト屢々相談會ヲ持チ、リー教母ノ偉業ヲ繼續サレン事ヲ申し入レタ。併シ前記ノ條件ニテ男女拾數名ノ退館者アリ、先生方ハ出來得ル限り努力シテ今後モ經營ヲ續ケテ行ク事ヲ約束サレタ。

其ノ後同年秋ヨリ昭和十四年昭和十五年度ニ於テ退館スル者ニモ前記ノ餞別金ガ渡サレル事ニナリ、此ノ間數

名ガ退館シ昭和十五年末ニ於テハ、男子ホーム四拾八名婦人ホーム二拾五名準ホーム拾三名ノ計八拾六名デアッタ。

此ノ解散問題ノ紛争ガ原因デ、秋山司祭ハ昭和十三年六月辭任サレ、山中政三師ガ當ミツション管理ノ責任ヲライフスナイダー主教ヨリ委任サレタ。

### 第二百二十三 高原歌集發行

高原同人ノ編輯、聖ヨハネ修士會ノ御厚意ニ依ッテ、昭和十二年六月二十八日「高原歌集」ガ上梓サレタ。此レハリ―教母ノ愛子中敷島ノ道ヲ學ブ三十名ノ詠草ヲ集メタモノデアル。

### 第二百二十四 リー女史授勲ノ光榮

昭和十四年十二月十日、リー女史ハ勲六等瑞寶章贈與ノ御沙汰ヲ賜ハッタ。同年十二月十日付東京朝日新聞ノ記事ヲ次ニ拔萃スル。

「救癩事業ノ功績ヲ思召サレ勲六等瑞寶章贈與ノ御沙汰ヲ賜ハッタ光榮ノ英國人草津聖バルナバ醫院主M・H・コンウオール・リー女史（八三歳）ハ、大正五年六月十一日草津聖バルナバ教會ヲ創立シテ、救癩事業ニ盡力、昭和三年十一月其ノ功績ニ依ッテ藍綬褒章ヲ賜ワリ、又巨額ノ私財ヲ投ジテ病院、小學校、幼稚園、保育所等ヲ次々ニ建設シ氣ノ毒ナ人々ノ救濟ニ偉大ナ功績ヲ殘シテイル。現在明石市<sup>フトダツ</sup>太寺二丁目ニ老後ヲ養ッテイル」

## 第三十八章 追補

### 第二百二十五 栗生樂泉園内ニ聖慰主教會會堂建設

栗生樂泉園内へノ傳道ハ昭和七年末開園以來倦ム事ナク續ケラレ、昭和八年ニ至ツテ湯之澤部落ヨリ入園シタ信徒數名ヲ中心ニ集會ヲ持チ、又聖バルナバ教會管理司祭ガ月一回定期的ニ聖餐式ヲ執行。教會委員二・三名宛司祭ニ同行シテ集會ニ加ハリ、古參信徒ニヨリ求道者ノ指導モ行ハレテ漸次信徒ガ増加シタ。當時、聖マーガレツト館舎監ネテルトン師ハ屢々栗生樂泉園ノ信徒ヲ訪問シテオラレタガ、園内ニ教會堂ノ無イ事ヲ殘念ニ思ハレ、昭和十三年五月金壹千圓ヲ山中師ニ托シ建設資金トシテ獻ゲラレタ。ライフスナイダー主教ハ山中政三師ヨリ此ノ話ヲ聞イテ感動シ、米國ミッシンニ對シテ教會堂建築費ノ寄附ヲ要請サレタ處、米國ミッシン及ビ其ノ他ノ有志ヨリ壹萬五千圓ヲ贈ラレタノデ、此ノ資金ヲ以テ建設ニ取掛リ、昭和十四年十月末落成シ、同年十一月十二日ライフスナイダー主教ニ依ツテ聖別式ガ行ハレタ。當時、栗生樂泉園内ニ於ケル聖公會信徒數ハ約九十名デアッタ。管理司祭トシテ山中政三師ハ毎月一回主日ミサニ通ヒ、昭和十六年四月聖バルナバ・ミッシン解散後ハ毎月二回主日ミサノタメ通勤シタ。

第二百二十六 聖バルナバ・ミッシンノ解散

支那事變ノタメ國際關係ノ惡化ニ因リ、内外カラノ援助ハ困難トナリ、事業ヲ繼續スル事ハ全ク不可能トナツタノデ、昭和十六年四月末限り、聖バルナバ・ホーム及ビ附屬事業一切ヲ解散スル事ニ決定シタ。

即チ昭和十六年四月十三日ノ復活祭ニハ、ライフスナイダー主教司式ニテ、ミサ聖祭ヲ行ヒマタホーム解散式ヲ教會々館ニテ行ツタ。主教カラ解散ニ就イテノ挨拶ガアリ、ホーム員一同ニ手當金授與。男子ホーム舎監徳○唯○兄一同ヲ代表シテ感謝ノ辭ヲ述ベタ。在館者ノ内全生園へ兄弟九名、愛生園へ兄弟八名、其ノ他ノ兄弟ノ大部分ハ栗生樂泉園へ入園シタ。婦人ホームハ四月二十一日、男子ホームハ四月二十四日ニ轉園ヲ完了シタ。聖バ

ルナバ醫院診療所ノミハ部落解散マデ湯之澤診療所ト改名シテ暫ク存續スル事ニナッタ。昭和十七年末湯之澤部落解散ト共ニ、鶴田一郎醫師ハ栗生樂泉園醫官トシテ勤務サレタ。

解散ニ就イテ厚生省瀨豫防協會ト聖バルナバ醫院トノ間ニ取り交ワサレタ覺書ハ次ノ如クデアッタ。

覺書

- 一、聖バルナバ・ホームハ昭和十六年四月末ヲ以テ解散スルコト。患者ハ樂泉園へ原則トシテ收容セラレル事。
- 二、下町幼稚園ハ下町一般患者ノ收容ニ至ルマデ、又醫院ハ鶴田醫師ニ經營ヲ委ネ部落解散マデ繼續スル。
- 三、瀨豫防協會ハ聖バルナバ・ホーム整理費トシテ、ミッションニ對シ別記内容ニヨリ金貳萬九千圓ヲ交付スル事。
- 四、ミッションハ前記整理費ニ對シ別記土地建物ヲ無償ヲ以テ瀨豫防協會へ譲リ渡ス事。
- 五、御歌碑、リー女史記念碑、松本留吉氏記念碑ハ、リー女史ノ山ヲ頌徳公園トシテ之ニ建立スル事。
- 六、リー女史ノ住家「光ノ家」ハ樂泉園ニ移轉シ記念トシテ保存スル事。
- 七、土地ハ昭和十六年一月二十日マデニ登記ノ手續ヲ完了スル事。
- 八、家屋ハ昭和十六年五月二十日マデニ栗生樂泉園へ引渡ス事。

昭和十五年十二月二十四日

山中政三

シエバード

×

×

×

聖バルナバミッション整理費内譯

一、金壹萬貳千圓也 ホーム費用不足額補助

七金五百圓也

リー教母ノ爲ノ準備金

第三十八章 追補

二、金參千六百五拾圓也   ホー員手當一人五拾圓宛  
三、金五百圓也   手傳人手當  
四、金參百圓也   舎監及ビ保姆手當  
五、金九百圓也   解散ノ時ノ雜費  
六、金壹千圓也   教會修理費  
以上合計金貳萬九千圓也。

八、金貳千圓也   記念公園分擔金  
九、金壹千圓也   右ノ維持費  
一〇、金壹千圓也   公園内記念事業ノ爲  
一一、金五千三百圓也   ミッシヨン職員退職手當  
一二、金八百圓也   豫備費

覺書ニ基キ瀨豫防協會（栗生樂泉園）へ寄附シタ建物ハ次ノ通り

聖バルナバ醫院（診療所）

聖ルセ館

聖ステバノ館（本館及ビ別館ヲ含ム）

聖ルカ館

聖マリア館（婦人ホーム）

光ノ家（リー教母ノ起居サレテイタ家）

聖ヘレナ館

聖望小學校及ビ雨天體操場

聖エリザベツ館

右ハ戸數ニシテ拾四戸、敷地計壹千貳百坪ナリ。

以上ハ厚生省優生課長床次徳二氏ト昭和十五年十一月・十二月ノ兩月ニ亘リ、大平芳男氏ヲ主教代理トシテ山中師同伴數次交渉ノ結果昭和十五年十二月十九日妥結シ調印サレタモノデアル。

第二百二十七 聖バルナバ教會建物撤去

昭和十六年十二月四日、教會及び元醫院診療所（聖なぐさめ館）、下町幼稚園ノ土地建物一切ニテ、金壹萬五千圓也ヲ以テ群馬縣衛生課へ賣リ渡シ、昭和十七年末建物撤去ヲ完了シタ。

改メテ草津町ノ教會ト傳道ノ爲ニ、聖マーガレット館隣ノ舊聖テモテ館ヲ聖バルナバ教會々堂トシタ。

昭和十六年度ノ教會委員ハ次ノ如シ。徳○唯○、瀧○早○、稻○温○、山○柏○、武○明○、三○幹○、宮○安○衛ノ以上七名。

## 第二百二十八 「高原」誌廢刊

文藝ヲ通ジテ教會信徒ノ間ニ、又各療園トノ交友ヲ深メ、病者生活ノ向上ニ寄與シ、一面當ミツシヨノ消息ト刻々ノ事業ノ模様ヲ内外ニ傳ヘル等大キナ役割ヲ果シテキタ「高原」誌ハ、昭和十六年二月第百號記念兼終刊號ヲ以テ廢刊スル事ニナッタ。

## 第二百二十九 リー教母ノ御永眠

リー教母ハ昭和十一年一月明石ニ着キ用意サレタ借家ニ入ラレタガ、既ニ購入シテアッタ明石聖公會ノ將來ノ敷地内ニ禮拜所ヲ兼ネタ牧師館ト宣教師館ト將來教會ノ會館トナスベキ自己ノ住宅トヲ、リー教母ハ建築シテ教會ニ寄附シ、其處ニ餘世ヲ送ル事トセラレタ。先崎・齊藤ノ兩姉ハ草津ヨリ從ヒ行キ最後マデ良ク看護シタ。

明石ニテハ終日概ネ長椅子ニ身ヲ横タヘ絶エズ聖書ヲ讀ミ又手帳ヲ出シテ記サレタル多クノ氏名ヲ眺メツ、代禱ニ餘念ナカッタ。主日ニハ必ズ隣家ナル教會ノ禮拜ニ赴イタ。又一ツノ手紙ヲ幾度ニモ書イテ屢々草津ノ病者一同ヲ激勵シタ。毎日期夕二人ノ侍女ト共ニ家族ノ祈リハ缺カサナカッタ。

併シ、昭和十五年頃ヨリ時々意識朦朧モウロウトナル事ガアツテ、其ノ時ニハ「歸リマシヨウ、歸リマシヨウ……」ト告ゲラレタ。勿論「草津へ……」ノ意味デアッタ。去草ハ熱慮ノ上ノ決心デハアッタガ、心ノ奥ヨリ草津ハ常ニ去ラナカッタコトガ知ラレル。斯クテ明石ニ在ル事六年、昭和十六年モ十二月ニ至ツテ老衰甚シク日夜床中ニ在リ、リー教母ノ希望ニテ二人ノ侍女ハ日ニ幾回トナク枕頭マクツモトニ聖歌ヲ誦シ、リー教母ノ祈禱ヲ助ケタガ、其ノ拾八日「主ヨミ許ニ近ヅカン」ノ聖歌ヲ誦スル中ニ臨終トナリ逝去セラレタ。

大東亞戰爭ガ始マツテ拾日、リー教母ハ此戰爭開始ヲ知ラズニバラダイスニ召サレタ、行年八十四歳六ヶ月恰モ新築サレタル明石聖マリヤ・マグダレン教會ニテ、司祭八代欽之允キレ師ノ司式、主教八代斌キレ助師ノ説教アリテ埋葬式ヲ執行。我國ハ既ニ英國ト國交斷絶ナリシモ厚生大臣代理トシテ兵庫縣事務官ガ參列サレタ。會葬者ハ明石教會教役者及ビ信徒ノ外草津ヨリ一同ヲ代表シテ山中政三師、名古屋ヨリ伊藤梅吉師、東京ヨリ貫民之介師及ビ先ニ聖マーガレット館ニ在リ今ハ阪神地方ニテ自己ノ職業ニ従事シテ居タ四・五名ノ姉妹ガアツタ。明石郊外ノ火葬場ニ送り遺骨ハリー教母兼テノ希望ニ從ヒ草津ノ病者墓地ノ納骨堂ニ其ノ子等ナル者ト共ニ葬ラレタ。

(註・當項ハ貫師ノ手記ヨリ)

第二百三十 頌徳公園

聖バルナバ・ミッシヨン醫院ハ解散シ、湯之澤部落モ解散シテカラモ、リー教母ノ偉大ナ業績ヲ偲ブタメ教會ノ裏山(通稱一母さまの山)一帯ヲ記念公園トスル事トナリ、昭和十七年三月十七日草津町々長神林二平氏ニヨリ頌徳公園ト命名サレタ。又此ノ公園内ニ貞明皇后御歌碑、リー女史記念碑、松本留吉氏ノ碑ト三基ヲ建記シ、昭和十八年五月二十七日頌徳公園開園式並ニ三基除幕式ヲ草津町主催ニテ舉行シタ。當日出席者ノ主ナル者ハ神

林町長以下町ノ有志及ビ北關東教區主教蒔田誠師、大久保直彦師、大野敏之師、木村兵三師、秋山基一師、佐藤忠輝師ノ各司祭デアッタ。

碑表建設許可證（寫）

願出人 群馬縣草津町八五

山中政三

昭和十六年九月十二日付願出ノ碑表建設ノ件之ヲ許可ス。

昭和十六年十二月十三日

吾妻郡長野原警察署長

警部 須藤慶太郎

第二百三十一 湯之澤部落ノ解散

草津町デハ湯之澤病者部落ガ町ノ發展上大キナ障害ニナルトノ見地カラ、町當局ヤ町民ノ聲トシテ屢々問題ニナツテイタ。ソシテ、曩ニハ熊本市外本妙寺部落ノ解散強行ノ事アリ、國立療養所ノ整備擴充ト當時ノ世情ノ反映モアツテ、瀨部落ノ解散問題ハ急角度ニ進展シ、昭和十六年三月彼岸中日佛教場ニ於ケル部落民大會ニテ正式ニ縣ヨリ湯之澤解散ノ事ガ發表サレタ。部落中ニハ相當ノ土地建物ヲ所有シテイル者アリ、マタ極メテ貧困ノ者モアリ、更ニハ健康ノ強弱、故郷トノ關係等複雑ナ境遇ノ差異カラ、相當困難ナ問題ト迂餘曲折モアツタガ、相互ノ努力ト聖バルナバ醫院長鶴田一郎師ノ仲介ノ勞等ニ依リ妥協點ガ見出サレ、昭和十六年五月十八日聖バルナ

バ會館ニ於イテ解散式ガ舉行サレタ。當日ノ主ナル出席者ハ群馬縣警察部長館林三喜男氏、衛生課長杉野爲次氏、衛生主事小林氏、定方警部補、草津町ヨリ小林道太郎町長外町議數名、栗生樂泉園古見嘉一園長、霜崎事務官等デアッタ。尙當時ノ群馬縣知事ハ薄田美朝氏、湯之澤區長ハ吉○浩○氏、副區長田○久○氏デアッタ。

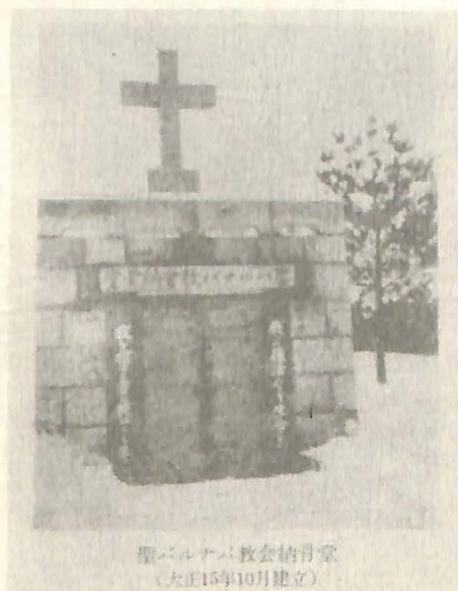
湯之澤ノ土地・建物代金參拾萬五千圓ハ縣カラ交付サレ、草津町ヨリ餞別トシテ參萬圓贈ラレ、昭和十七年十二月二十日ヲ以テ解散ヲ完了スル契約デ、大體昭和十七年末建物ノ撤去ヲ終ッタ。當時戸數約七十戸、人口約六百人デアッタ。

明治貳拾年六月、下町（湯之澤）分離以來五拾年餘宿命ニヨリ病ヲ得テ故郷ヲ離レ此ノ地ヲ第二ノ故郷トシテ同病相憐ミ互ヒニ相助ケ相慰メ、年々此處ニ集フ者ノ數ガ増シ、旅館商舖次第ニ開ケ私設消防團ノ設置等部落自治モ確立シテイタガ、國家ノ艱政策ニ基キ昭和十七年ヲ最后ノ年トシテ、湯之澤部落ハ解消サレタノデアアル。

第二百三十二 故リー教母ノ納骨式

明石ニテ逝去シ火葬後暫ク明石ノ教會ニ安置シアリシ

聖バルナバ教會納骨堂



リ！教母ノ御遺骨ヲ昭和十七年五月二十五日草津ニ迎へ同夜午後七時ヨリ聖バルナバ教會ニテ御通夜式ヲ行ヒ信徒及ビ區民多數出席、翌二十六日午前七時ヨリ死者ノタメノミサ聖祭ヲ執行、午後出棺二時ヨリ納骨堂前ニテ蒔田主教司式、大久保・山中兩司祭補式ニテ納骨式ヲ行ツタ。當日ハ幸ヒ晴天ニ恵マレ、町長代理掛川助役、長野原警察署長、草津駐在赤石巡查等出席盛會デアッタ。

―「湯之澤・聖バルナバ教會史」終リ―

編纂者・徳満唯吉氏に就いて

ステパノ滝田

草津湯之沢聖バルナバ教会史を起草された故徳満唯吉氏トクミツタケヨシは明治三十二年生れ鹿児島出身の人で、日本大學法文學部三年のときハンセン氏病の徵候が表われ、湯之沢の病者旅館に二、三度短時日滞在したこともありましたが結局中途退學され、この難病を治療のため故郷の醫院或は有名の大學病院などにて何年かを過しておられましたが、かねてより群馬県草津に英国人コンウォール・リー女史による救贖事業のを知っていたので、昭和三年一月聖バルナバ男子ホームに入館された。

当時は大楓子が本病の唯一の治療薬とされ、大風子油の注射をはじめこれを主薬とした十一味みと稱する丸薬や七清散ヒトシズイサンと名づけられた散薬などもあつたが、これ等を熱心に使用しても本病の亢進を止めることは当時の醫學では不可能であつた。徳満氏がリー女史のホームに入館のときは既に病状は相当に進んでいたと記憶している。

氏は資性温厚にて薩摩の人らしく気骨があり、頭腦明晰にして非常に謙遜の人であつた。書は達筆にて風格があり絵画も得意であつた。特に英語に堪能にてリー教母の英文書簡を殆んど譯されていた。

入館の年の昭和三年クリスマスに受洗され、まもなく堅信式を受領の後に聖望學校教師・青年会（男子会）の幹事長を、さらに衆望を担つて教会委員に当選され、後に男子ホーム舎監と重要な立場で持てる秀れた賜物を以てバルナバホームと教会のために盡力された。

当時の湯之沢聖バルナバ教会の信徒教は六百二十余名あつて、日本聖公会にては西日本の方では大阪の川口教会、東日本では草津湯之沢聖バルナバ教会が信徒数の多いことで話題になつていた。

徳満氏は教会史の原稿をまとめるに当つては、湯之沢の二、三の古老宅を足しげく幾たびとなく訪ね、或は古参信徒や関係者を何十回も集つてもろうなどして克明に資料を集められ、前記のように幾多の役職のかたわら寝食を忘れて教会史の原稿作製に献身された、ために治療も怠り勝ちになり病勢は一層進行したように思われた。

リー教母の救らい事業は支那事変の勃発と大東亜戦争前の米英との国際関係悪化により、外国からの援助が徐々に減少し、又国内の物資統制により必需品の入手が極めて困難等のため昭和十六年四月を以て事業を解散することになり、湯之沢地区も昭和十七年十二月末にて解散となつた。

バルナバホームの者は岡山県長島愛生園に或は東京都下東村山市の多摩全生園に転居されたが、大部分の者は草津町から近くの国立栗生楽泉園に入園し、徳満氏は楽泉園にて療養に専念されていたが昭和十八年八月二十一日堅い信仰を以て勝利の召天をされた。

或る人曰く「氏が発病することなく社会で活動しておられたら必ず大物となり、政界に或は実業界に於て頭角を表す人であつただろう」と云われたことが印象的である。

私は徳満氏より半年程遅くホームに御世話になり、氏の召天までの長い年月にわたり親しく交り続け、この間私がバルナバ醫院の務めに転ずるまでの約二ケ年間、同室にて起居を共にし、教会史の原稿を整理するのに御手伝いをした関係から、この秀れた人格者を紹介する光栄にあずかり恵心より感謝する次第でありまして、氏が起草された湯之沢聖バルナバ教会史が印刷刊行され、多くの人々に見て頂くことが出来、主の御許にて平安と安息のうちにある徳満氏も必ず喜んで下さることを信じ、拙文にて失礼乍ら編者の人となりや少しく紹介させて頂きました。

以上

「湯之澤・聖バルナバ教會史」は、徳満唯吉兄が心血を注いで起草され、當時立教大学教授であり當教會の管理司祭でもあつた貫民之介神父の校閲を経た貴重な稿に依るものです。また、徳満兄逝去のあとは貫神父、次いで徳満兄と親交の深かつた廣坂美津夫兄が、その原稿を保持してました。しかし、廣坂兄は社会復帰してからMという企業に就職し、轉勤のこともあつて、それを保持していることが負担になることから、昭和二十五年以降今日まで瀧田の手元で大切に保存して来ました。以来、當時の事柄殊に聖バルナバ・ミッシヨンや湯之澤部落に関する事柄に就いて人から質ねられたときには、この教會史原稿が唯一の典拠となつて、その必要を満されて来ました。そして、有益な資料として尊ばれ、重宝がられて来ました。例えば、貫民之介著「ミス・コンウォール・リー女史の生涯とその偉業」(昭和二十九年十二月五日発行、再版昭和五十一年十二月二十五日発行)、山本有志朗・加藤三郎共著「御座の湯口碑」(昭和四十七年十月十五日発行)或は「草津温泉史」等々の編集の参考に供するところ大でありました。此れ程に貴重な存在である當教會史稿をただ一冊に綴じた原稿の儘にして置くことは詢に不本意につき、栗生聖慰主教會の教會委員会にて協議の結果、五百部印刷することを全会一致で決議しました。そこで、印刷に付するに當つて、太田執事が徳満兄執筆の原稿を改めて原稿用紙に書き寫すことからはじめ、原稿文字の漢字体の統一及び校正、寫眞挿入箇所を選定や割付け等々の労をとられました。またゲラ刷りの再三に亘る校正等すべて太田執事が中心になつて當り、これには北村礼二司祭と瀧田も協力しました。更に中條執事には印刷に用いる寫眞を古いアルバムから複製する労をとつて頂きました。

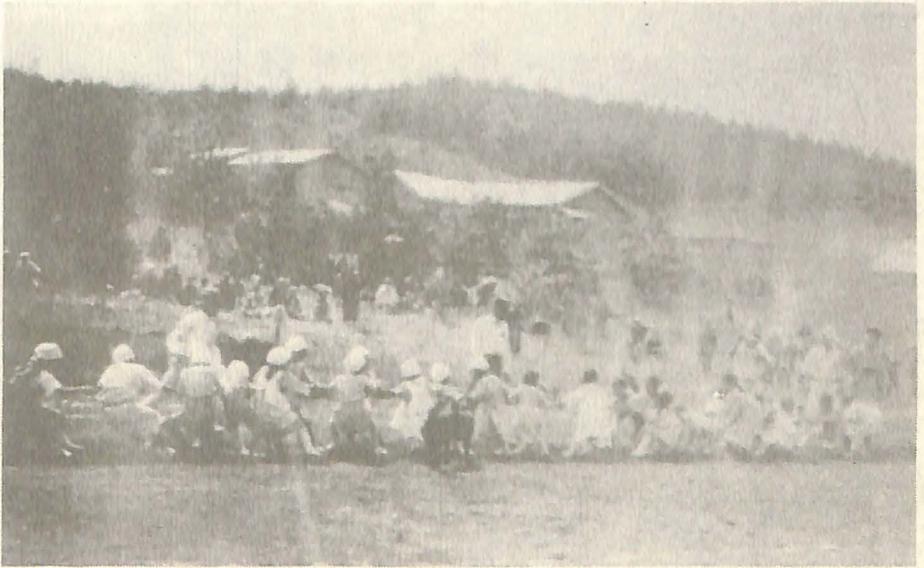
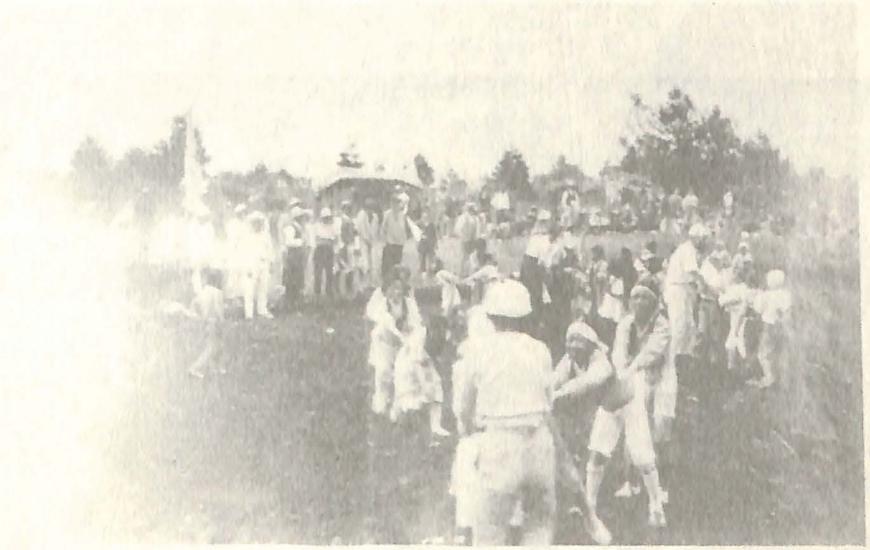
そして、この度の出版に際して、聖務にお忙しい中から、前北関東教区主教大久保直彦師父、現北関東教区主教齊藤茂樹師父、並に草津町々會議員にて郷土史研究家の中澤晃三先生から序文を頂き厚く御礼申し上げます。



写真上=望小学校の職員と生徒（聖ニコラス館前）  
写真下=バンドの練習風景



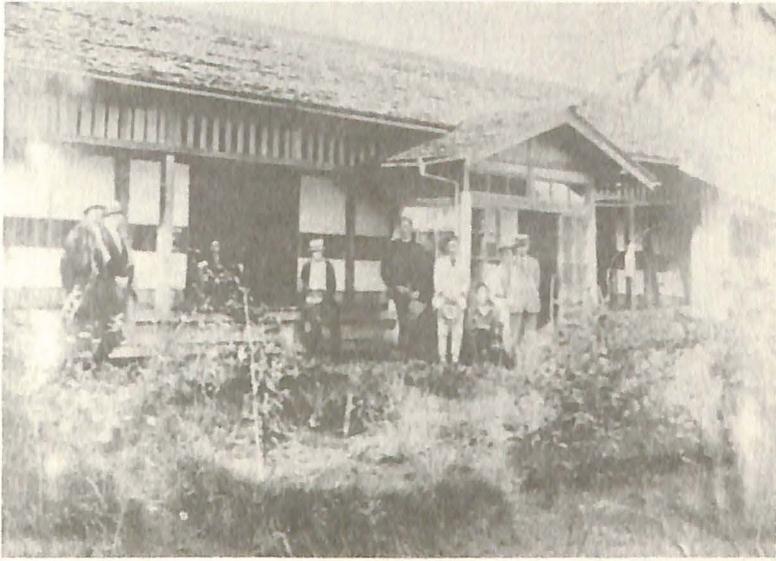
写真上=第二菊花大会  
写真下=餅つき風景



写真上・下=運動会風景



写真上・下=運動会風景



ライスナイダ監督来訪  
(聖ジャイルス館前にて)



熊本回春病院からの来訪者を迎えて



写真上・下=教會の葬送式風景



写真＝聖テモテ館（壮健男児童ホームで、後に草津聖バルナバ教会堂となる）

藍綬褒章受勲のリー教母



聖バルナバ幼稚園（上町壮健者のための）





山中政三司祭

鶴田一郎医師

巡査

マギル女史

リー教母

清閑寺事務官

エドリン女史

鶴田夫人

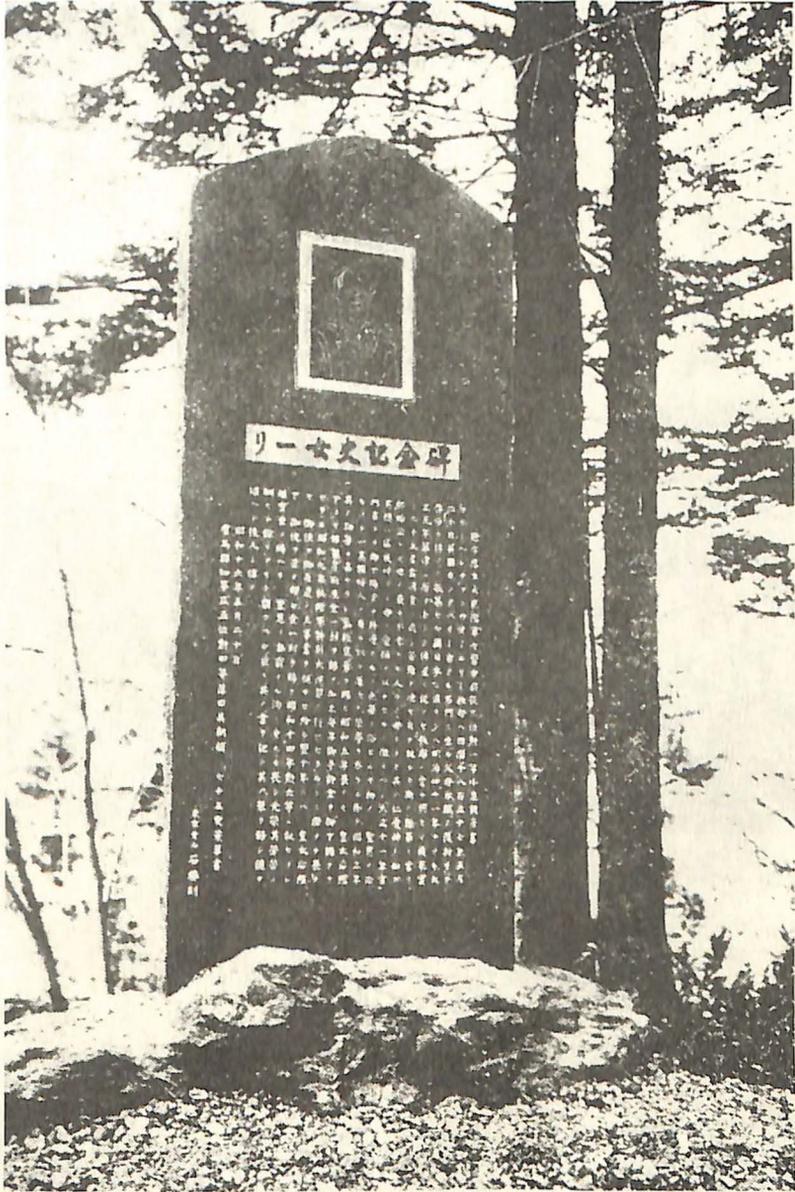
ネテルトン女史

バス女史

伊藤梅吉師



リー教母の生家



リ - 教母の記念碑

昭和五十七年五月二十日印刷  
昭和五十七年六月十一日発行

湯之澤聖バルナバ教會史

実費頒価 二、〇〇〇円

校閱 貫民之介

編纂 湯之澤聖バルナバ教會

執筆 徳満唯吉

印刷所 群馬県吾妻郡草津町六四一ノ一二二

沢田印刷所

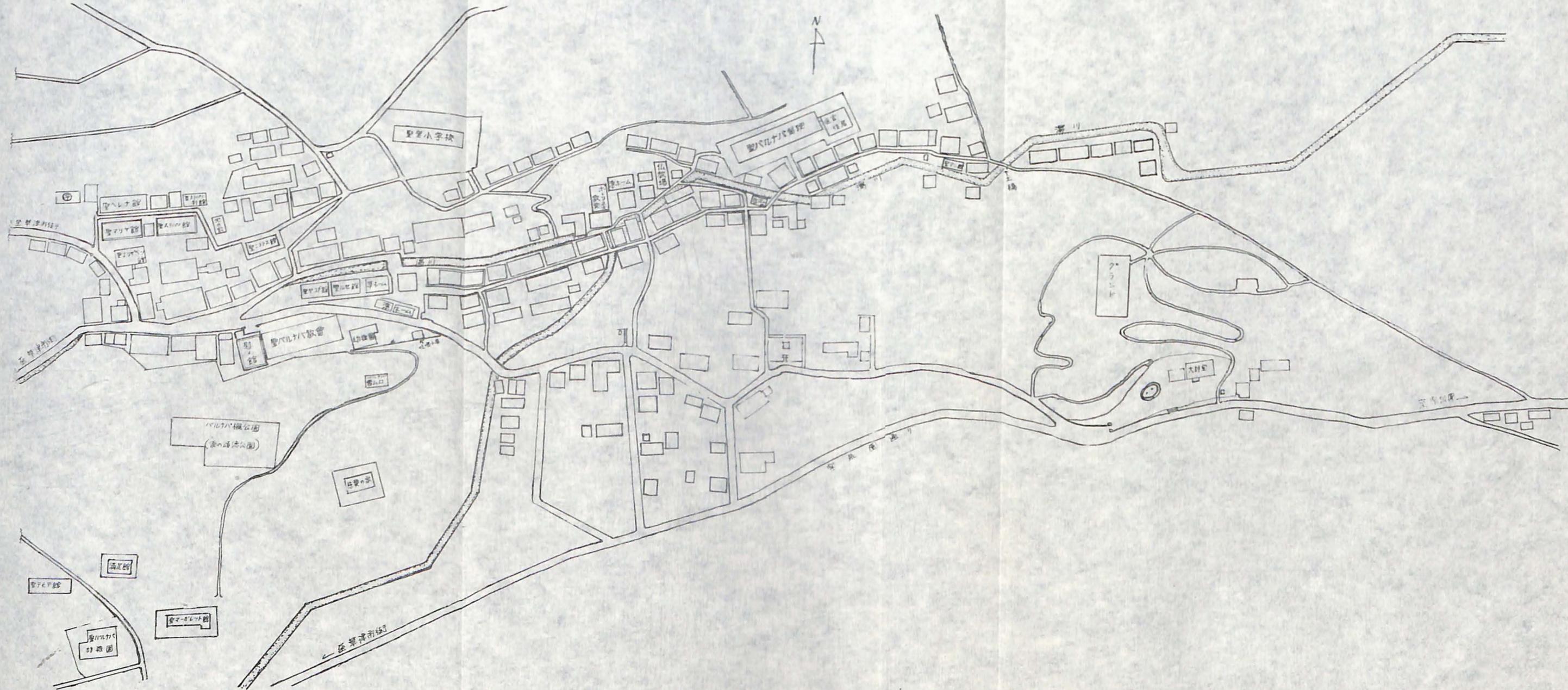
発行所 群馬県吾妻郡草津町乙六五〇

日本聖公會・聖慰主教會



# 湯之沢部落の略図

(昭和16年当時)



湯之澤聖バルナバ教会史正誤表

ページ

項目

行数

誤

正

二一六	一一八	三	アルモノ念ヒ
一九一	九六	九	地蔵尊
一八一	八七	四	教役者へ
一七三	八四	五	渡邊海旭
一六八	八一	〇	正スル等
一六五	八〇	二	阿喻
一五一	七三	七	賣入ニ決
一四七	七〇	六	(但シ、
一〇八	四〇	二	喜ビヲ給フ
一〇五	三八	二	〇イ姉
一〇三	三七	七	其子弟
九八	三四	四	井上照子女子
九四	三二	六	新教會側ニ委ネ
八五	二六	二	軍司令トシテ
六七	一六	〇	此項
六六	一六	八	家賃
六六	一六	二	宿賃
五四	一三	一	訪問セシ頃ハ

アルモノ念ヒ	地蔵尊	教役者へ	渡邊海旭	正スル等	阿喻	買入ニ決	(但シ、	喜ビ給フ	繩〇イ姉	其子弟	井上照子女史	新教會側ニ委ネ	軍司令官トシテ	此項	家賃	宿賃	訪問セシ頃ハ
--------	-----	------	------	------	----	------	------	------	------	-----	--------	---------	---------	----	----	----	--------



ページ	項目	行数
二二〇	一一二	一四
二二一	一一七	六
二二三	一一八	三
二四四	一二九	一
二六三	一四五	一
二七〇	一五〇	〇
二八六	一六〇	三
二九五	一七一	八
三二四	一九一	七
三二七	一九六	三
三四〇	二一四	一
三四七	二二六	一
三四九	二三〇	三

誤  
 三輪宗  
 寰面園  
 ニ其キ  
 主ナル  
 交渉  
 祈リニ  
 諸當選  
 驛員  
 十一月一日ニ諸魂  
 全カラズ  
 一月二十五日ニ聖六  
 ホーム員  
 建設シ

正  
 三輪宗  
 寰面學園  
 ニ基キ  
 主ナル  
 交渉  
 祈リヲ  
 諸兄當選  
 驛頭  
 十一月一日諸魂  
 全カラヌ  
 一月二十五日聖六  
 ホーム員  
 建設シ



